

奇譚クラブ

2 月号



新しい風俗文献誌

1973・2

昭和四十八年一月二十日印刷 昭和四十八年二月一日発行 二月号(第二十七卷第二号)毎月一回一日発行 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十一日国録大局特別換承認誌第二〇号

☆総天然色カラー新作女体緊縛資料☆

極彩色のカラーで描く
五人のM女の美しき生色

可憐な近代の姿態の深田菊子。
純情で素人っぽい笠井奈保子。
妖艶な芸者福竜の松本たえ子。
飼育の奇みM上ダム江口淑子。
五人の個性あるM女たち、の生色をた
大にネガカラーにM女たちの生色をた
鮮明に生々しい肌色も鮮やかに
りまの生々しい肌色も鮮やかに
の厳しき下と再現した。自然の
ど、肉迫る緊張感と画面に盛
し、肉迫る緊張感と画面に盛
貫いて、貴重的な資料の作成に努
お、黒写真のメロは誌上の「
白黒写真のメロは誌上の「
だ、白黒写真のメロは誌上の「
作、白黒写真のメロは誌上の「
の、白黒写真のメロは誌上の「
美、白黒写真のメロは誌上の「
満、白黒写真のメロは誌上の「
ラ、白黒写真のメロは誌上の「
て、白黒写真のメロは誌上の「
と、白黒写真のメロは誌上の「
さ、白黒写真のメロは誌上の「
大、白黒写真のメロは誌上の「
リ、白黒写真のメロは誌上の「
も、白黒写真のメロは誌上の「
を、白黒写真のメロは誌上の「

全裸開股開陳縛り

カラー三枚一組 略号八〇〇〇円
深田 菊子
思いきり両股をひらいて開陳す
る可憐で美しい女体も、縛られて
こんなあどけない表情なのです。

白肌と赤白斑ら紐

カラー三枚一組 略号八〇〇〇円
深田 菊子
真白い肌をぐっとくびる斑ら紐
の美しいムードを盛りあげる。

浣腸と緊縛と弄戯

カラー三枚一組 略号八〇〇〇円
福井 桃子
各種の浣腸器を前にして大の字
小手に縛られた。

縛りの羞恥に喘ぐ

カラー三枚一組 略号八〇〇〇円
笠井奈保子
すぐ赤面する恥かしがり屋の奈
保子が大好きな縄で縛られるとい
うナマナマしい色彩の中の羞恥。

羞らしいの埒場の中

大井三枚一組 略号八〇〇〇円
笠井奈保子
原色のな配色の中心に全裸の肌
に腋毛もあらわに繰り展げられる
緊縛と羞恥のかもしだす饗宴。

晒らされた緊縛体

カラー三枚一組 略号八〇〇〇円
笠井奈保子
縄にくびられた乳房の先のグミ
のような乳首もピンク色に染まり
全裸を晒して縛られた美麗な女体

猿轡に悶える女体

カラー三枚一組 略号八〇〇〇円
笠井奈保子
噛まされた豆絞りの猿轡にうめ
き思わず開股する女体の息づまる
ような迫真的な色美しきシーン。

全裸で見せる狂態

カラー三枚一組 略号八〇〇〇円
松本 たえ
芸者福竜が全裸にひん剝かれて
三種三様の縄に変った縛りをさ
れ、そのM性を露呈してゆく。

強烈後手縛り展開

カラー三枚一組 略号八〇〇〇円
松本 たえ
如何なる強烈な責めにも耐える
縛りというM女の繊細な裸身を厳重に
縛りあげて執拗にいたぶり抜く。

臨月腹緊縛の発端

カラー三枚一組 略号八〇〇〇円
福井 桃子
覚悟はしていても出産予定日
が、前に迫ってくるのだから
目、それを払いのけて緊縛する。

便々たる太鼓腹を

カラー三枚一組 略号八〇〇〇円
福井 桃子

もうこれ以上大きくはならない
という程思いきり突き出た太鼓腹
にも情容赦なく縄が襲いかかる。

拘束された臨月腹

カラー三枚一組 略号八〇〇〇円
福井 桃子
丸々と極めて美しい線を見せた
妊孕腹をツンと突き出させて非情
な縄は妊婦の裸身にからみつく。

蛙腹にも強烈縄目

カラー三枚一組 略号八〇〇〇円
福井 桃子
出産間際の便々たる蛙腹でも苦
しいのに、更に縄目も凄手高
手小手縛りが肌を痛めつける。

海老責め後手吊り

カラー二枚一組 略号八〇〇〇円
江口 淑子
強烈な海老責めと伸した後手を
逆に吊り上げた姿態のなにか、あ
られもないM女の秘密があつた。

苦痛と喜悦の交錯

カラー二枚一組 略号八〇〇〇円
江口 淑子
厳しい縄目で裸身をさいなまれ
る苦痛も彼女にとっては、身のお
きどころない甘い喜悦であつた。

◎お申込みは前金にて、大阪市阿
倍野郵便局私書箱第14号天星社へ
略号記入の上、御注文下さい。送
料当方負担にて急送いたします。

本誌愛読の女性の方々へ

阪市住吉郵便局私書箱第41号
暁出版株式会社 編集部

▽賞金△

▽
内
容
△

に属するものを取り上げて下さい。

ショ、形式は、小説、創作、読物などのフィク
 ンフインクでも、小告白、創作、読物などのフィク
 実見談やレポート、写真、ルポ、タジ見聞記、ノ
 歡迎致します。写真、真、画、参考資料などがい
 れば添布下されば幸い。参考資料に限りが返
 戻の求めに、感想、手紙、随筆、論説、意見、戯
 ツセイ、如何なる形式のものでも、最も得意とさ
 なども、模倣の選んで御執筆下さい。最も得意とさ
 一、模倣の選んで御執筆下さい。最も得意とさ
 く、模倣の選んで御執筆下さい。最も得意とさ
 作家の輩出させ、新作に限りません。野心的のあ
 者の方は登竜門として誌の試みて下さい。

一、応募作品は、すべて未発表の自作品に限
ります。原稿は必ず二百字詰又は四百字詰原
稿用紙を御利用願います。枚数は三十枚以上
三百枚迄に制限致します。一、入選作品は出来
一、入選作品は出来だけ早く誌上に掲載し
入選と同時に規定の賞金を贈呈致します。尚
掲載の際、発表に支障ありと思われる個所を

削除することもありますので、予め御諒承願います。故、原稿御入用の方は前もってコッピ―をとって、懸賞応募作品は一般応募原稿、読者原稿と区別するため、第一頁に「懸賞」とお書き下さい。ペンネーム、匿名は自由ですが、住所（又は連絡先）は必ずお書き願います。応募者の氏名を公開したり他へ洩したりなどは絶対に致しません故、御安心下さい。永続性のある奇クに作品を発表して、貴方の力量と手腕を、どうか發揮して下さい。一、原稿の送付先は、大阪市住吉郵便局私書箱第四十一号、暁出版株式会社編集部宛、必ず郵送（第一種便）して下さい。直接の訪問並に持込みは固くお断わり致します。

奇譚クラブ

昭和四十八年一月二十日印刷 昭和四十八年二月一日発行 二月号(第二十七卷第二号)毎月一回一日発行
昭和三十一年四月二十日 第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十一日 国鉄大局特別扱承認雑誌第二〇号

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatukishuppan

Osaka Japan



責めと縛りの夢幻境

塚本 鉄三・撮影

被虐に疲れたひととき

＜中 河 恵 子＞



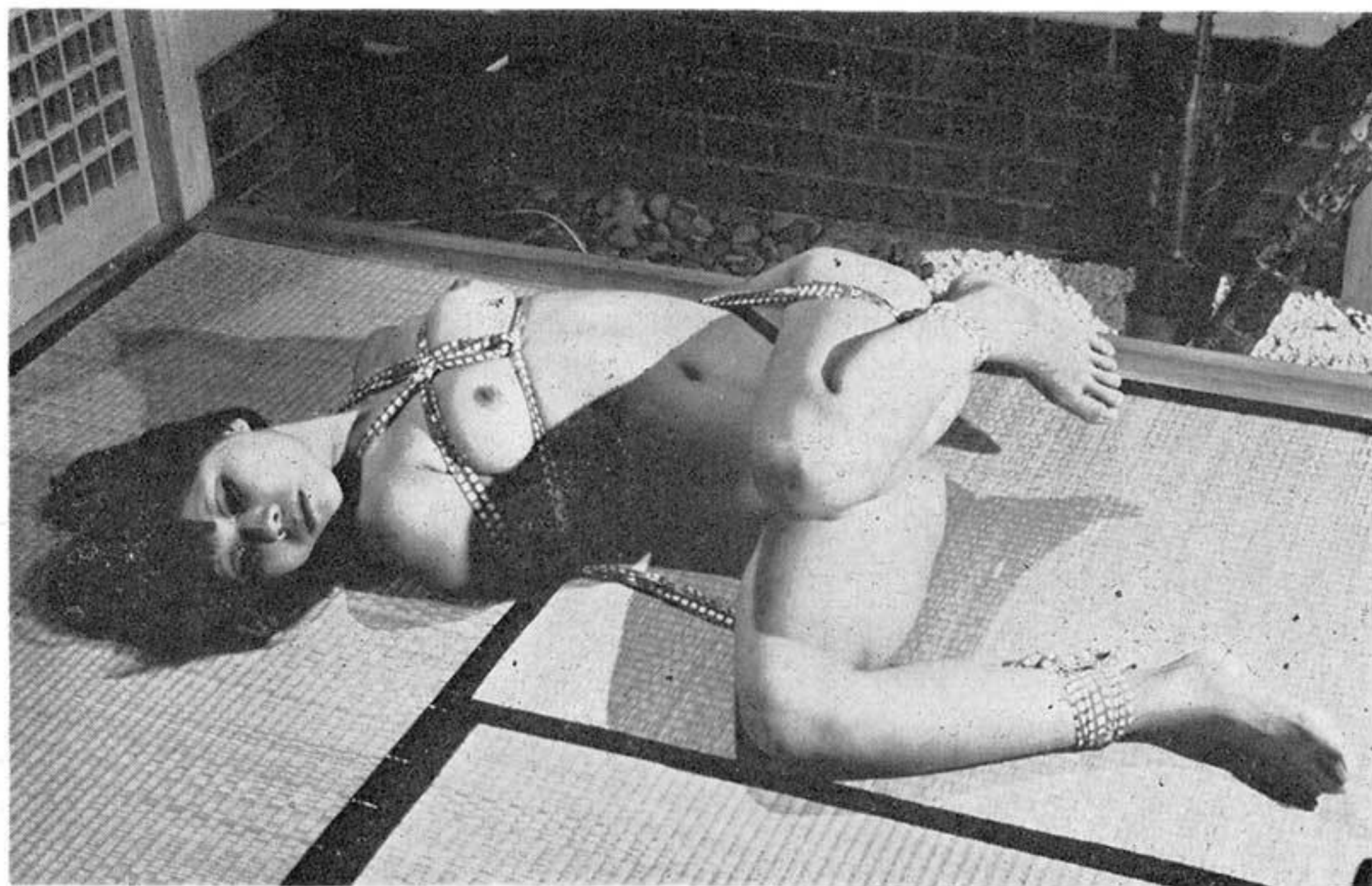
奇

譚

ク

ラ

ブ



二月号目次

△昭和四十八年▽

△第二十七卷Ⅱ第二号Ⅱ通刊第三〇〇号▽

本

文

- フォト「M女通信のヒロイン」△高村浩子▽……大山 良介……(21)
- 懸賞告白『とき子の自縛教室』……山口とき子……(22)
- 夫婦プレイ「私の場合——とSMプレイ」……井上 雅人……(36)
- 連載・時代S小説『紫蘭の門』⁽¹⁸⁾……風流極道軒……(40)
- ふるーい奇ク「残酷の中の甘美な世界」……花田 一郎……(51)
- M人士的「マゾの人達の手紙から」……山下 利男……(54)
- 書簡資料
- 鉄三SM談義△続・江口淑子の巻▽
- 『昇天した女奴隷の話』……塚本 鉄三……(64)
- 創作『花は傷つかない』△第二部・花の泪▽……久留木 栄……(74)
- 茶の間に現われた
- 「猿ぐつわのシチュエーション」……鳴山 能平……(90)
- 連載・S大河小説パロディ『花と蛇』⁽¹⁴⁾……山光 純……(102)
- 告白「流転の教育者」△若い女子学生の△お尻を愛し続けて▽……鳥井 宣孝……(114)
- 連載小説『大噴火』^(第五十三回)……千葉 青鬼……(120)
- 「カメラ」と「ペン」のルポルタージュ△玉本章子の巻▽
- 『美しい「責め」の記録』……塚本 鉄三……(128)
- 告白「馬のられ体験記」……並原 新一……(156)
- 連載・奴隷妻小説「命預けます」⁽⁵⁾……柴 利好……(162)
- 告白「SMプレイメイト」……水川那美子……(176)
- ある楽しみ「屋台裏の妖精」……予世場良三……(181)

投稿「吊り責め雑感」……香川絃一郎
告白「恋人のない男の話」……浜左 重喜
イメージ画「縄へビの襲来」……よみじどり
苦心の写真「失敗作発表」……最上 卓也
『懸賞M女性募集』の
文字に魅せられて……小杉 千恵
順致のひと駒「待ちぼうけ」……広島 一騎
告白SM夫婦プレイの片鱗……村山 勇
マゾ女の艶夢「人身御供」……北川まりこ
切願「小生の求婚広告」……S・H生
ふんどし美とポスター(3)……岩手 信夫
とりとめのないこと……中野 靖二
告白 生ゴムと柔肌の幻想……阿部 寿一

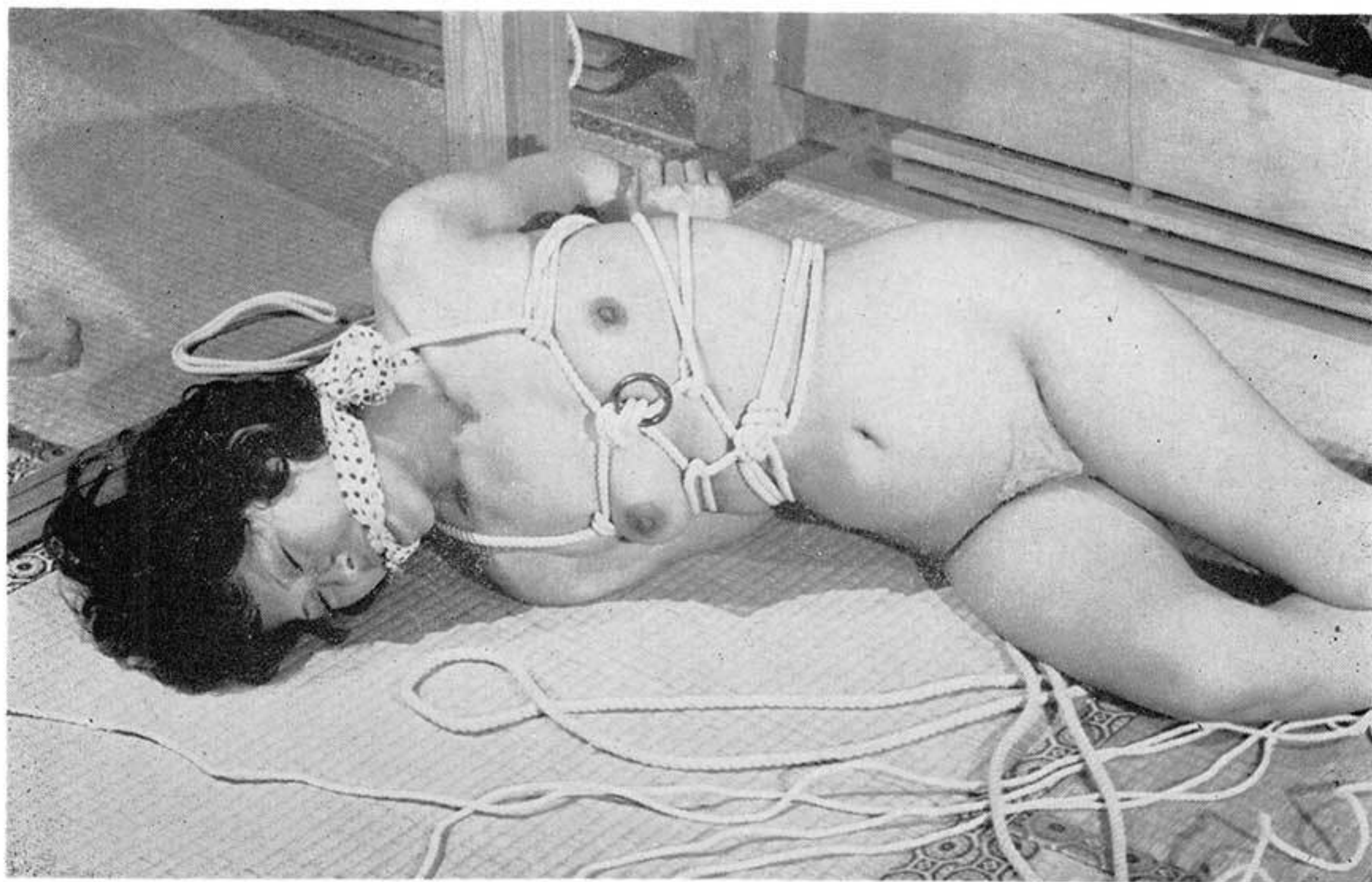
ゴム下着について……小川 隆
サロン楽我記「第104回」……辻村 隆
自分で剃毛してきた洋裁生……T・T生
近況報告「マゾの味と涙」……木村 洋子
高村浩子の「M女通信」雑感……西東 一輝
「僕は責めるゾ」……貴田はるえ
わが家のプレイ「鏡」……城 章夫
オダリスクの夢……編集部
編集部だより……編集部
女相撲資料に就てのお願い……雄松比良彦
S・M・P「牝犬奴隷妻」……紀川 正信
告白「しつけられた浣腸」……関根 好夫
南加津子嬢を想いて……坂上 住人

被虐に疲れたひととき……中河 恵子
美しい「責め」の記録より(4葉)……玉木 章子
抜群のプロポーション(3葉)……鈴木千鶴子
縄にもだえる踊り子(3葉)……笠井奈保子
海老縛りの苦悶(4葉)……江口 淑子
責め甲斐のある女体(2葉)……深田 菊子
屈伸強制の苦痛(2葉)……高村 浩子
浣腸責めの序曲(2葉)……玉木 章子
柱利用の羞恥責め(2葉)……前田真知子
縛られた女郎花(5葉)……引き回される美少女

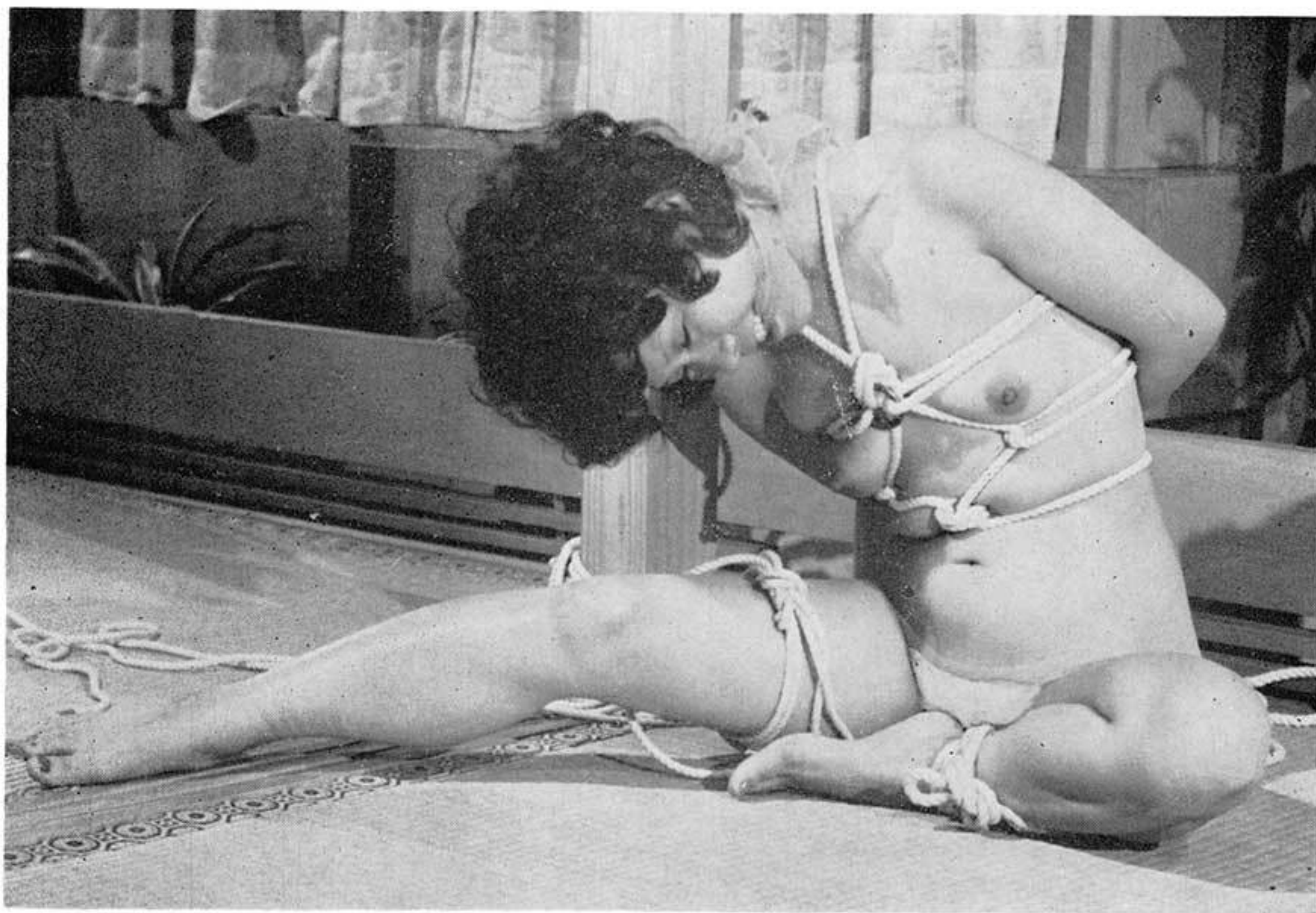
短篇創作「白い霧の戦慄」……藤見 郁(182)
連載・アブ紳士行状記『M派交友録』(35)……鬼山 絢策(188)
僕の好み「真知子責めへの注文と構想」……鈴木 三三(203)
SMカメラ・ハント「秋山夫妻の巻」……辻村 隆(206)
『放浪の旅が教えた快樂の味』……編集部選(266)

読者通信……
イメージギャラリー「風前の灯」宮城昌子(45)・「くの一詮議」岡たかし(49)・「重さこそ快樂」春川ナミオ(59)・「オナナのたたかい」飯田ひろくに(80)・「忘れ物」室井亜砂路(85)・「座椅子をどうぞ」志羽利也(106)・「揺れる美体」宮城昌子(108)・「羞悦境伝授」須坂旭(111)・「人質あそび」志羽利也(116)・「早くやって！」飯田ひろくに(119)・「陶醉への道程」宮城昌子(166)・「縛女の魅惑」岡たかし(171)・「生殺与奪の権」仲乃ハルミ(185)・「生理め訓練」春川ナミオ(194)・「最高のもてなし」岡たかし(198)……深田菊子・川路むら子



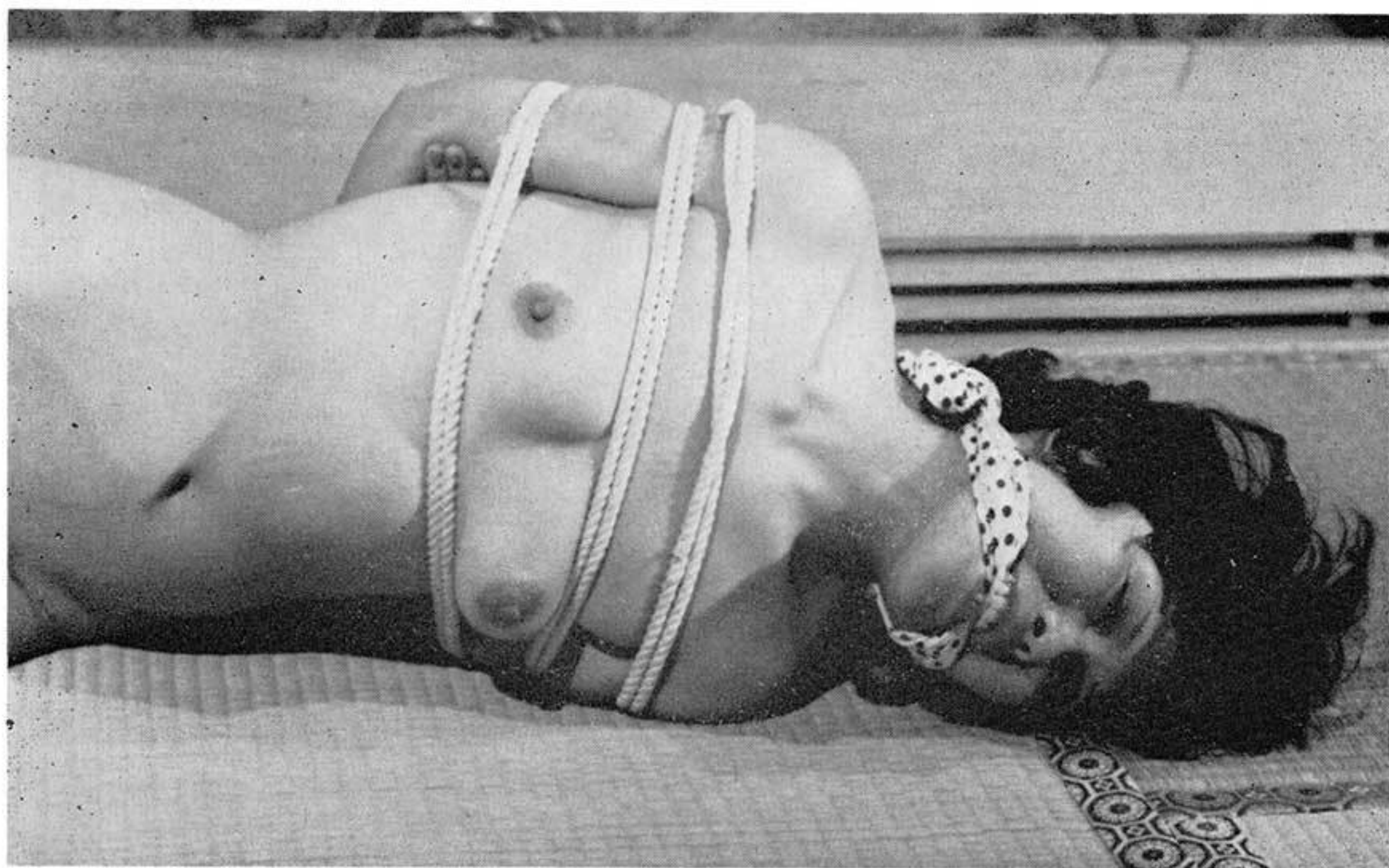


＜玉 木 章 子＞



美しい△責め▽の記録より

△玉 木 章 子▽

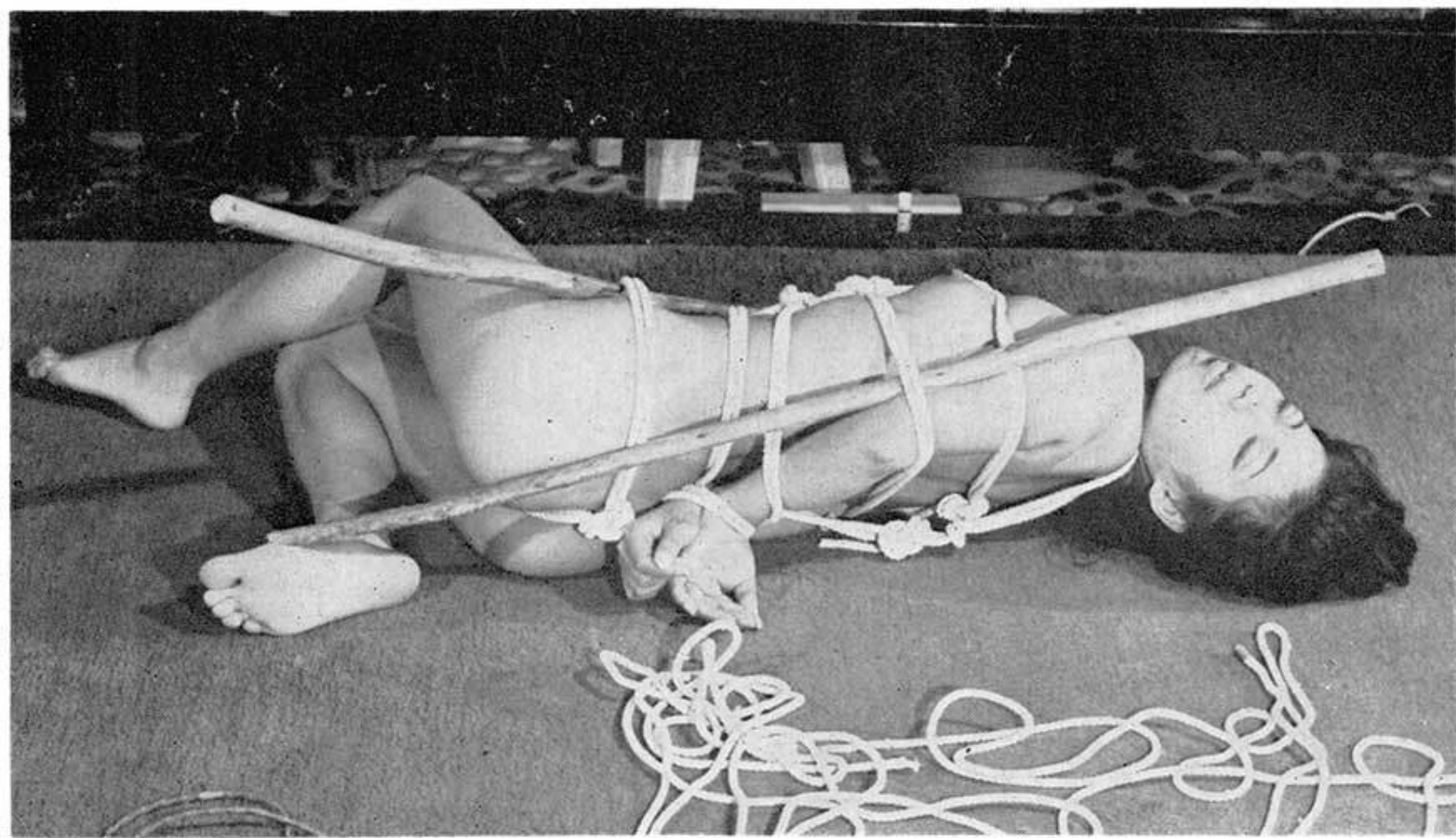




抜群のプロポーション



<鈴木千鶴子>

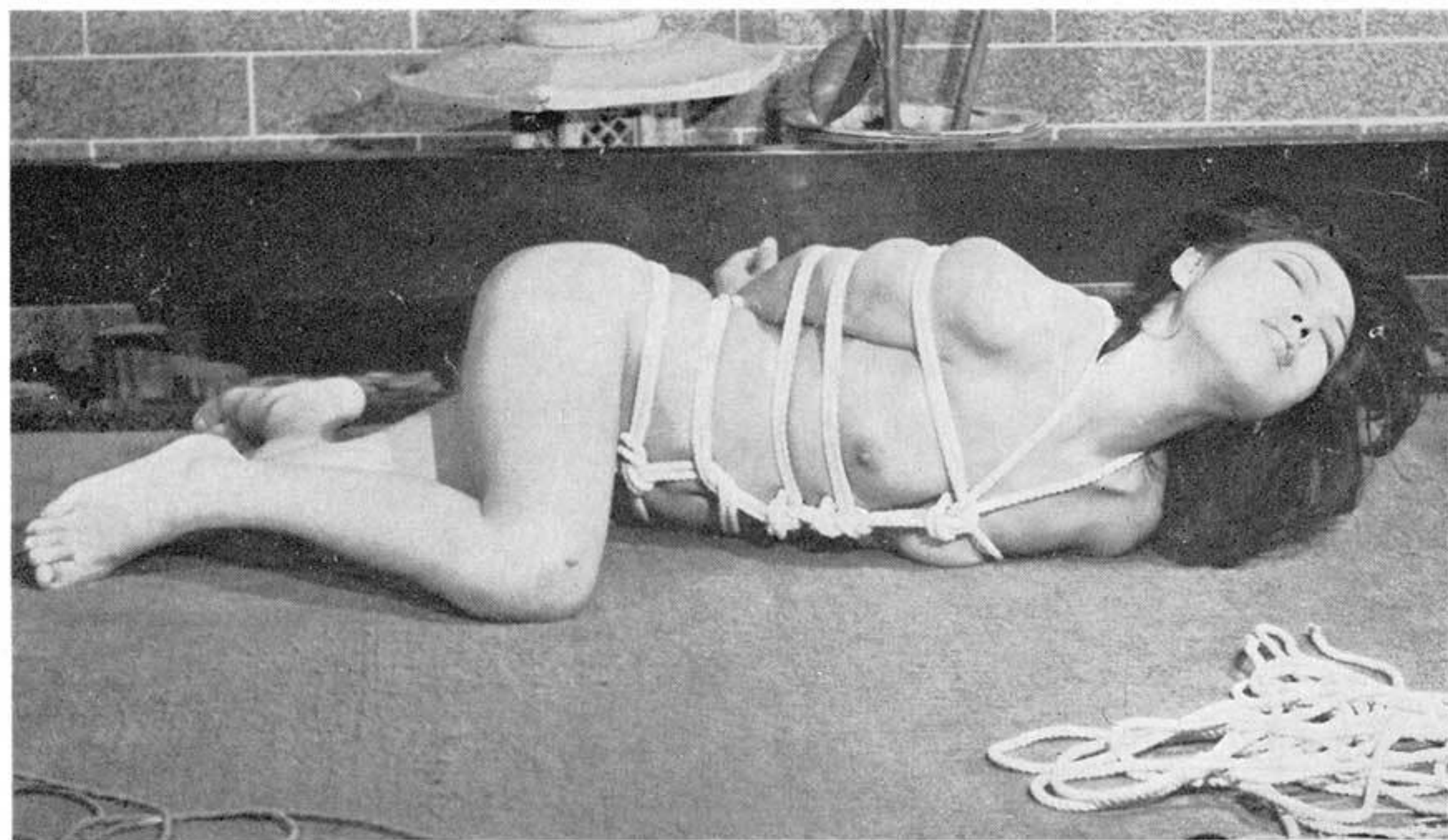


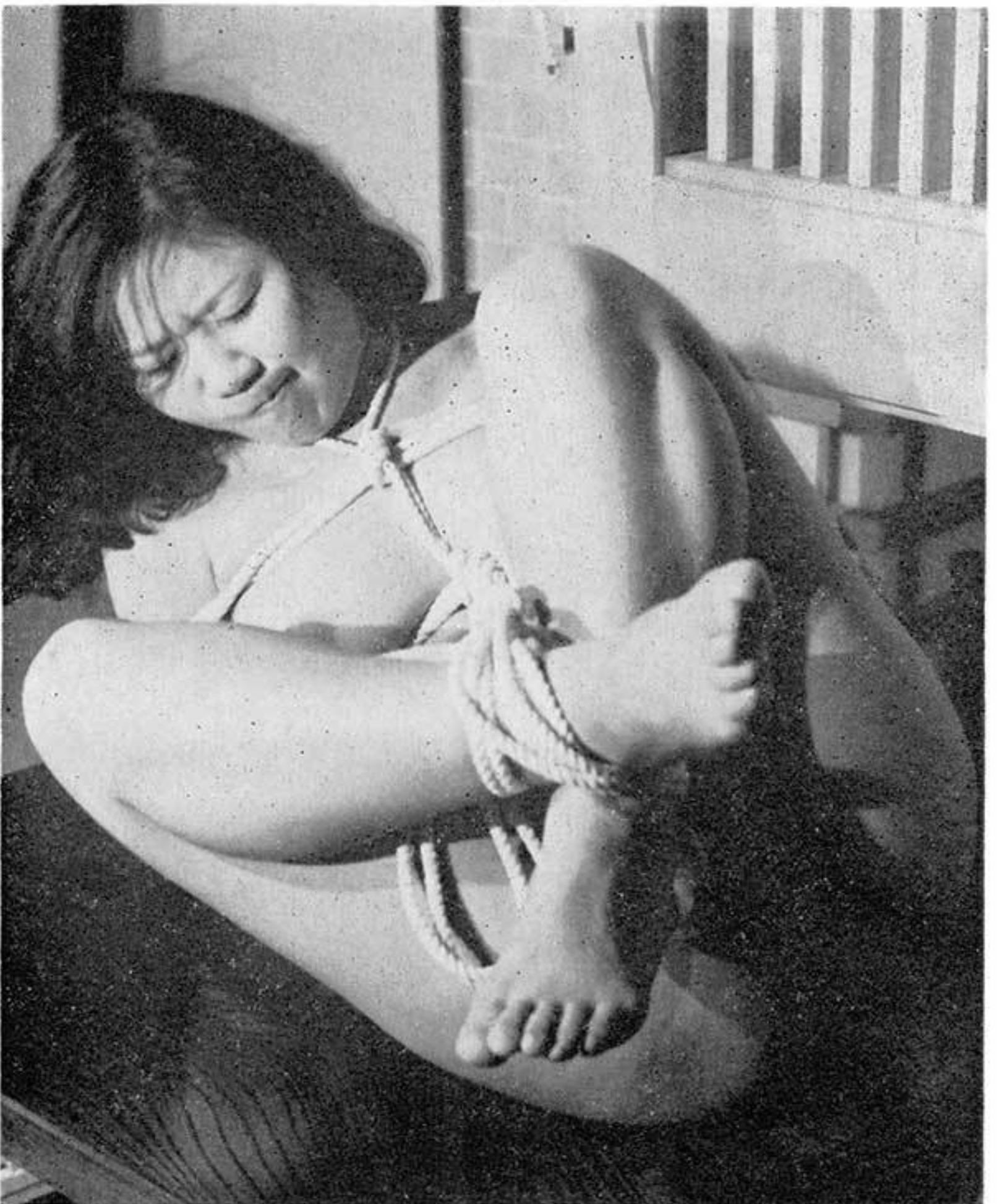


縄にもだえる踊り子



＜鈴木千鶴子＞





△笠井奈保子▽

海老縛りの苦悶

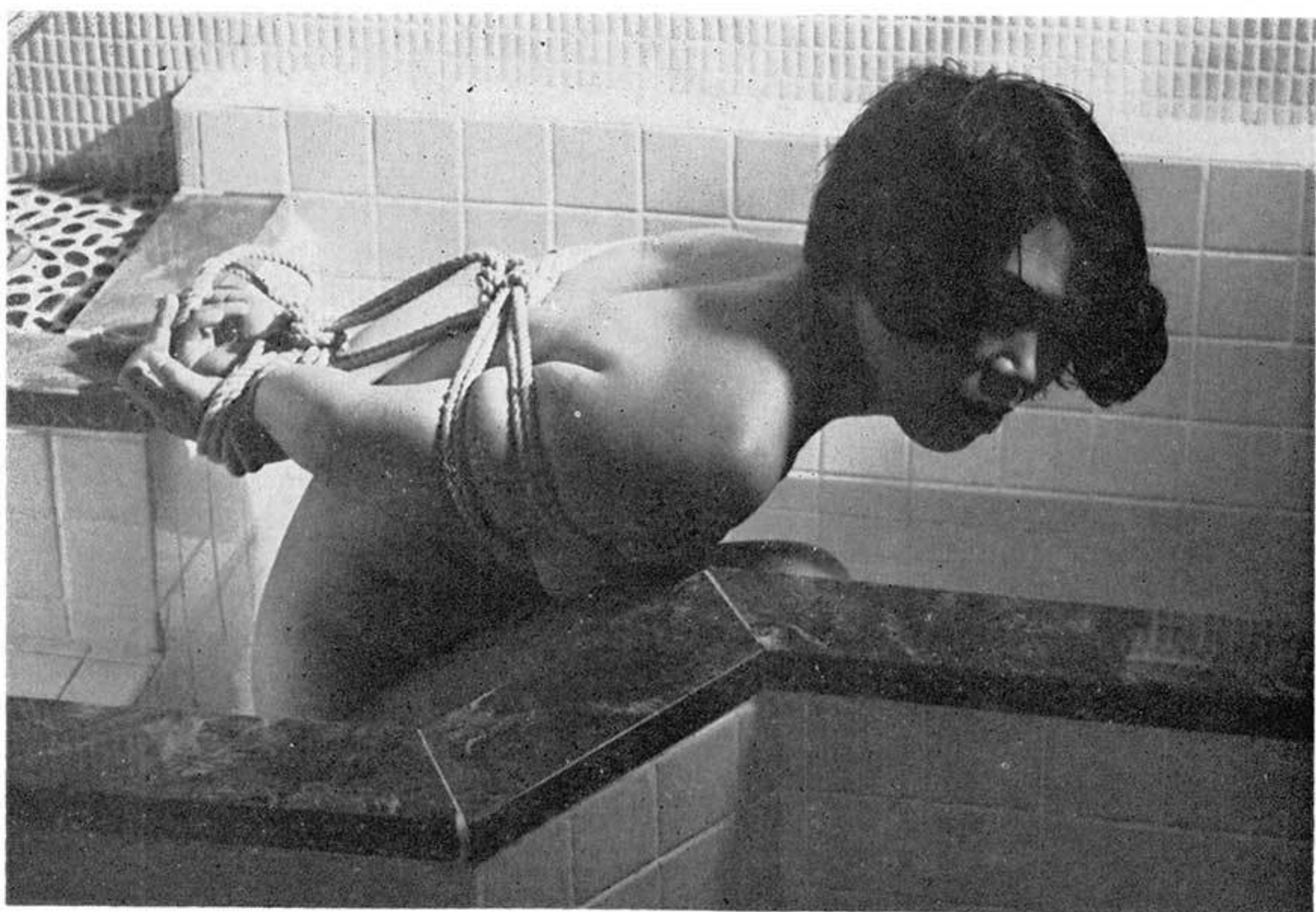


△笠井奈保子▽



責め甲斐のある女体

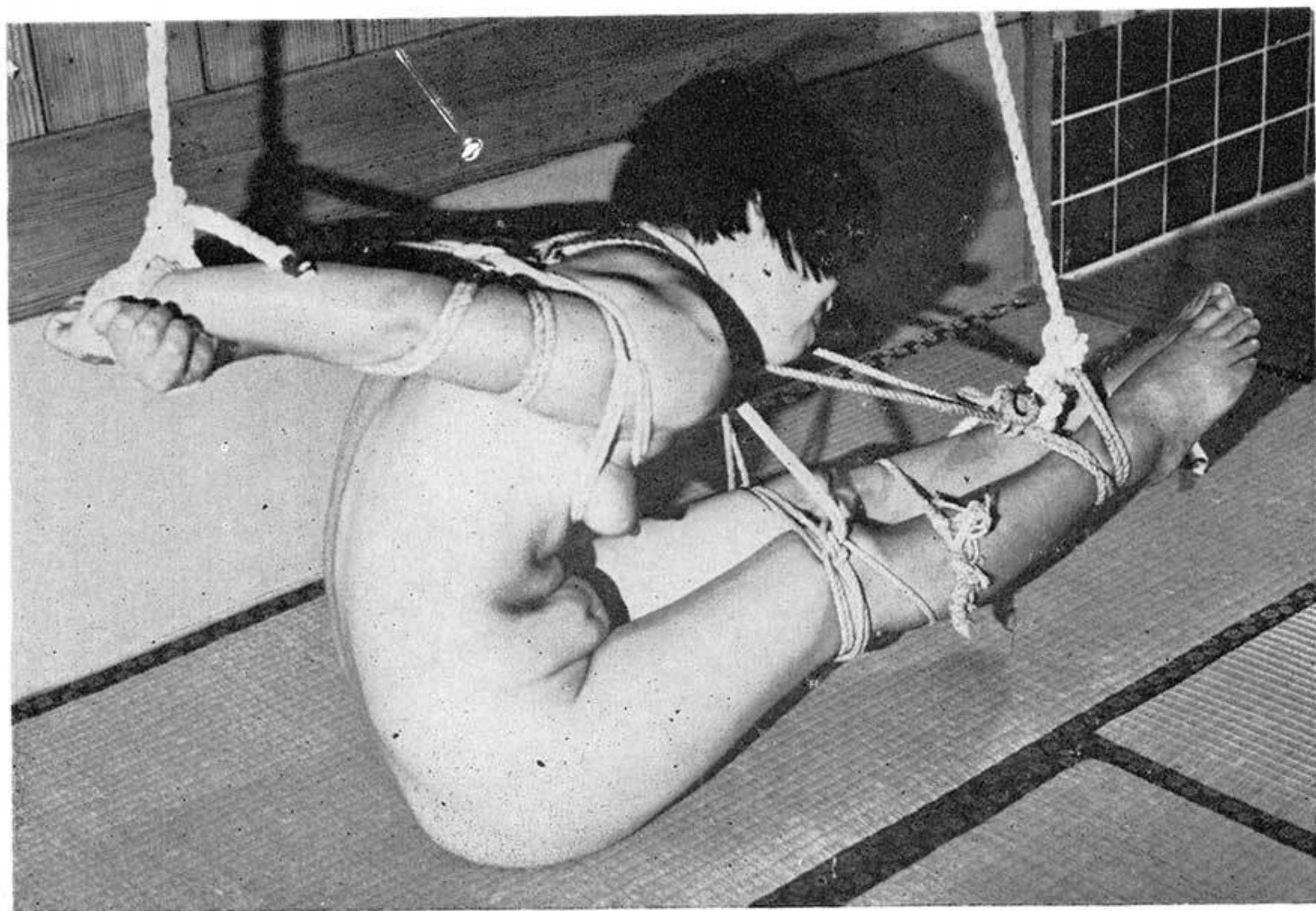
△江口淑子▽



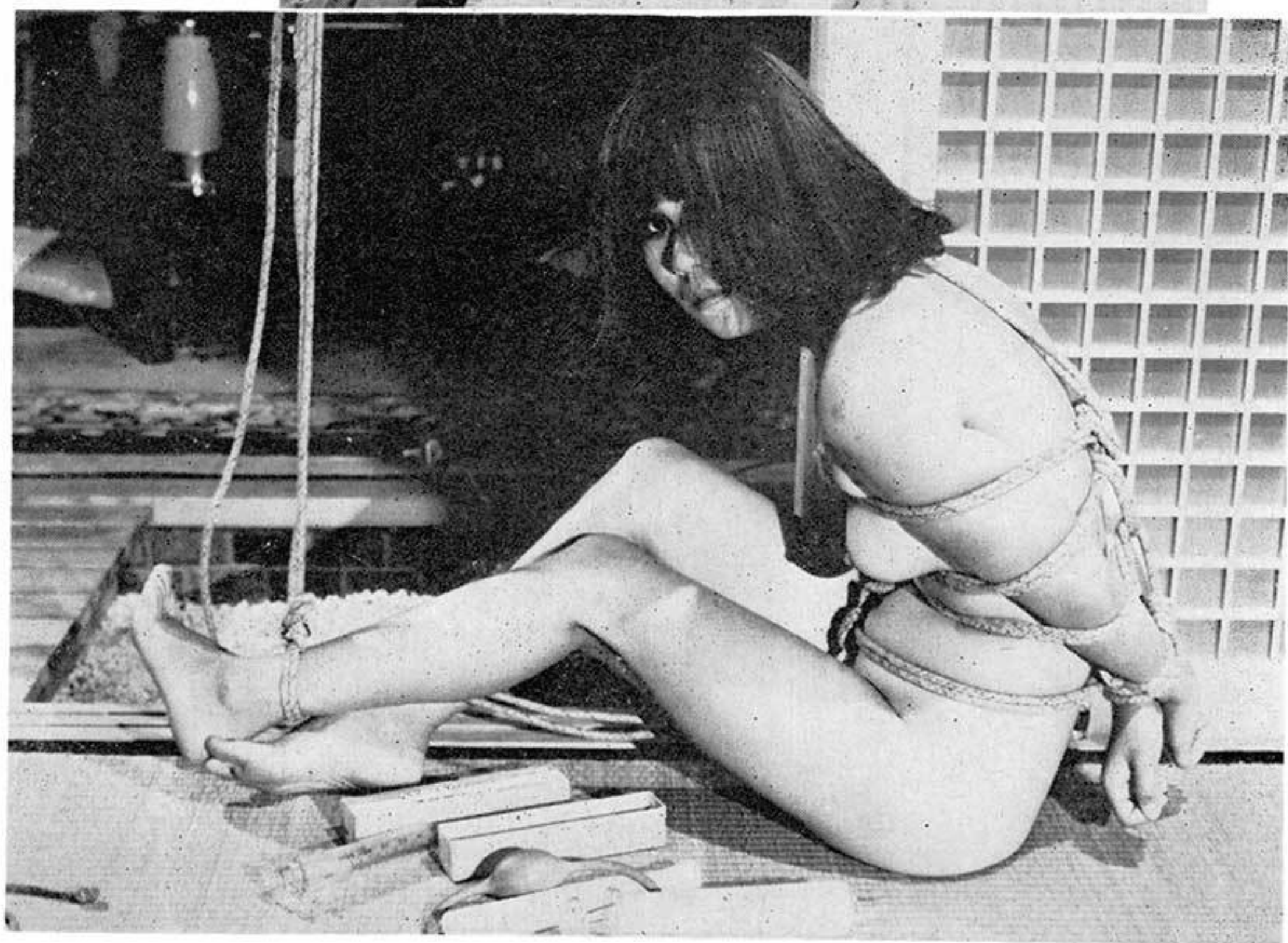


屈伸強制の苦痛

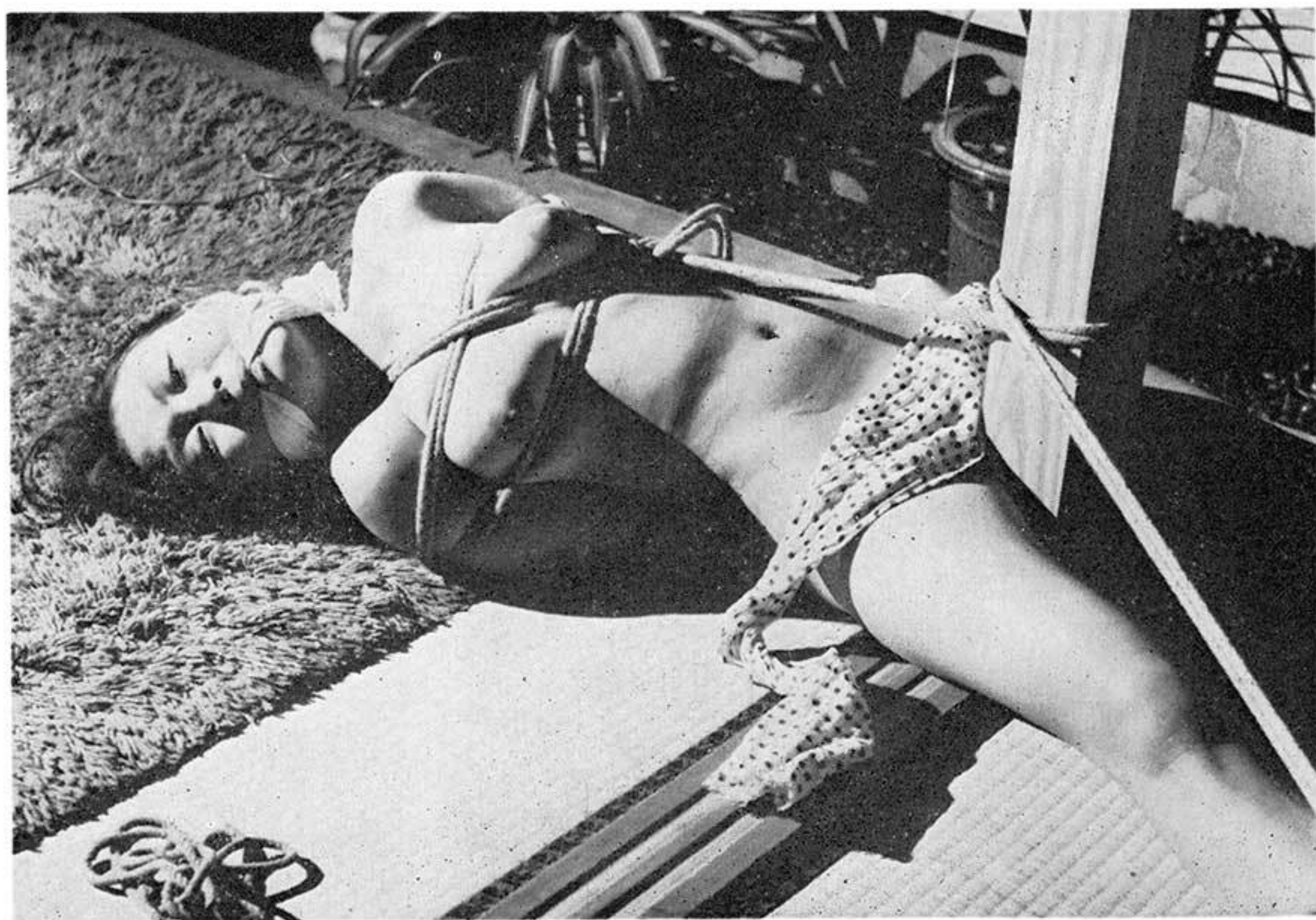
〈江口淑子〉



浣腸責めの序曲

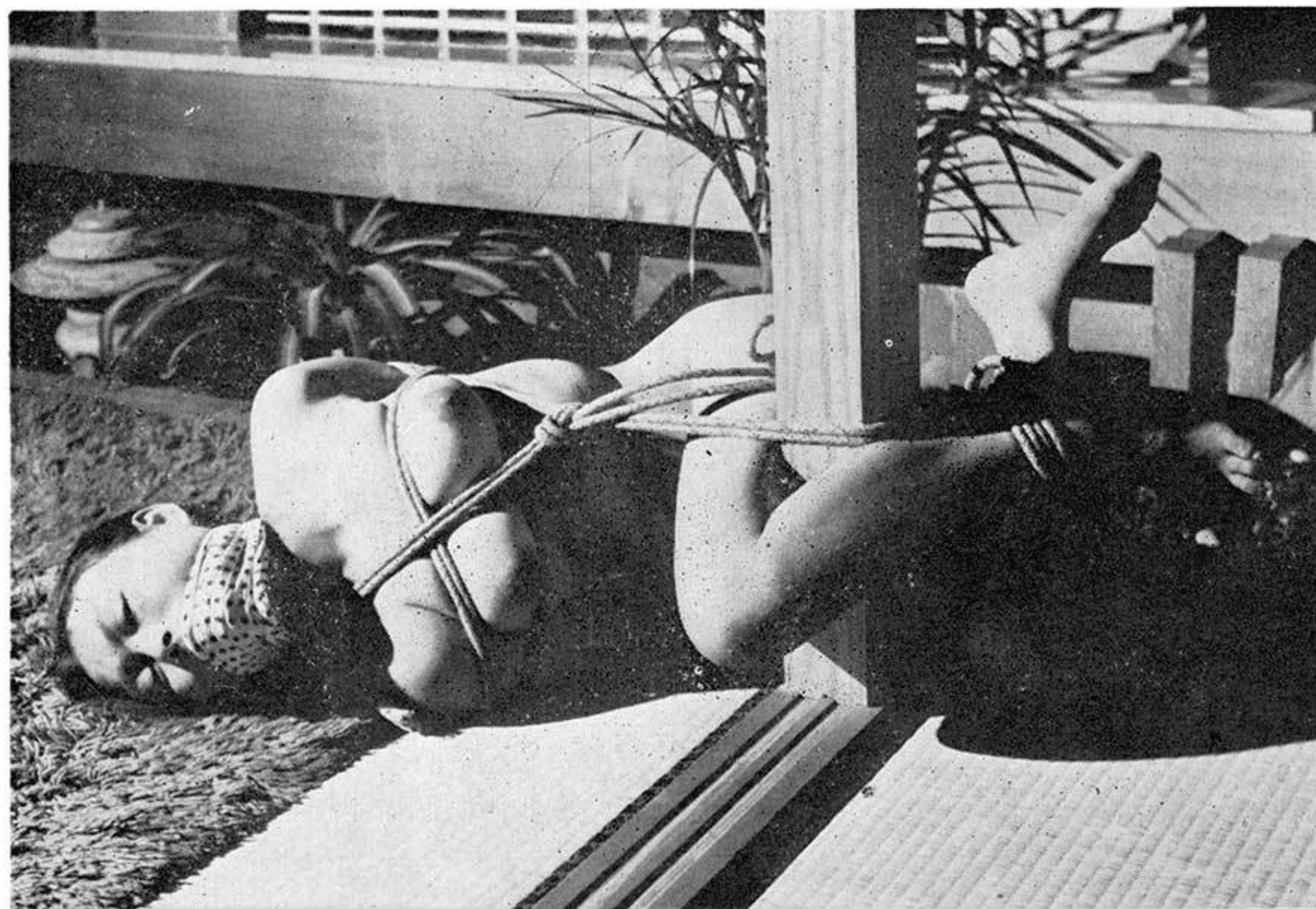


△深田菊子▽



柱利用の羞恥責め

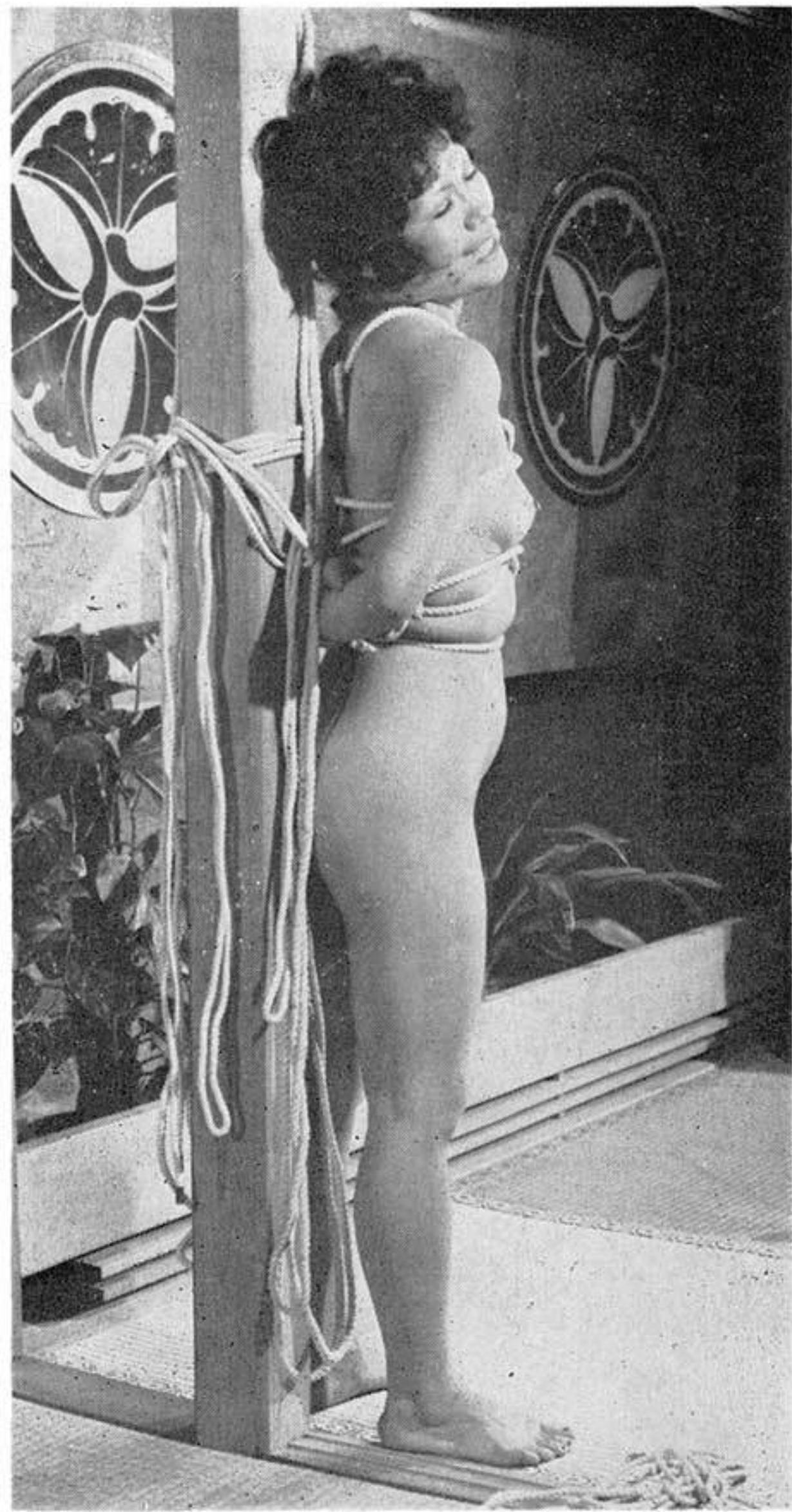
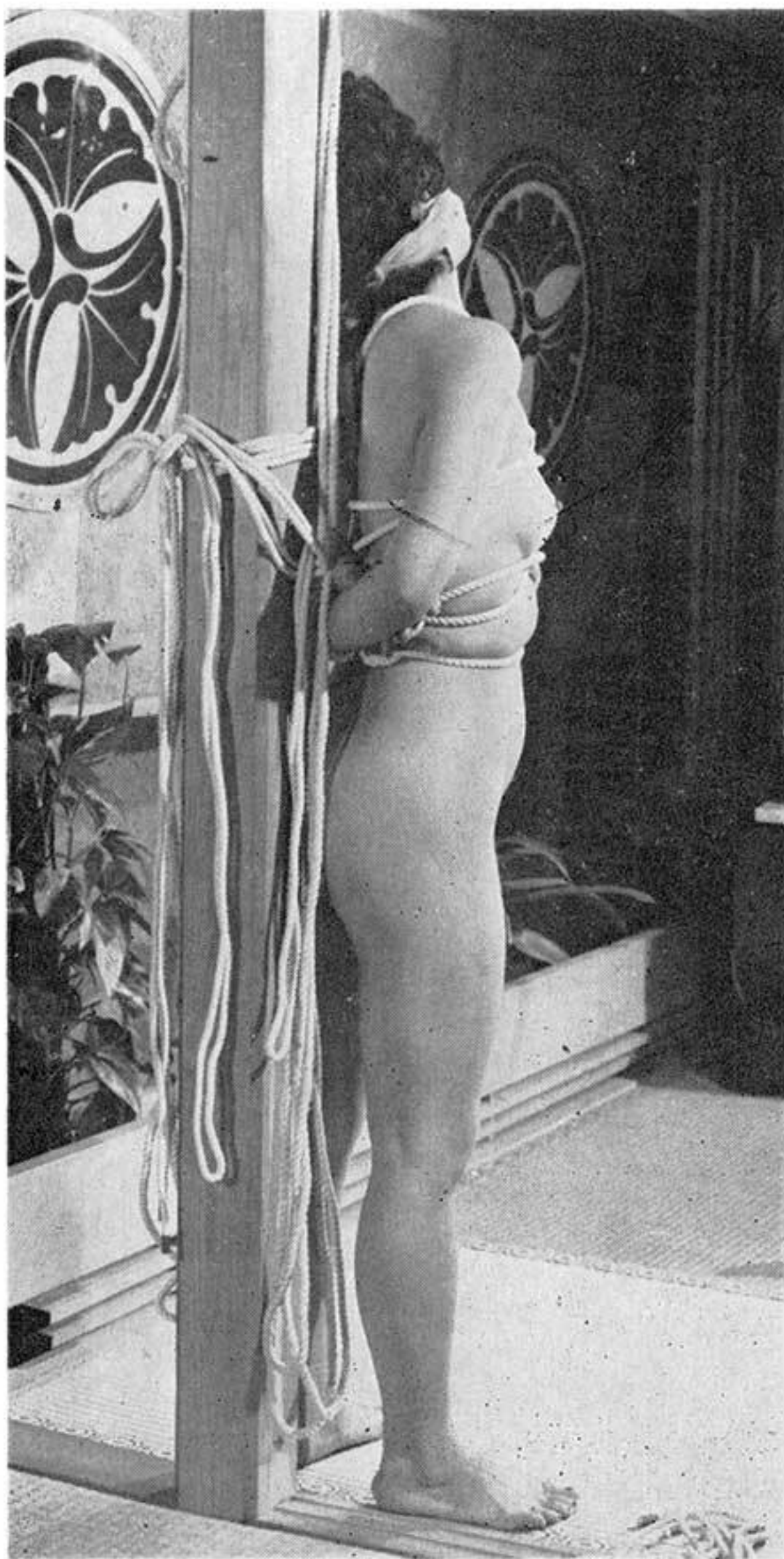
＜高村浩子＞



縛られた女郎花

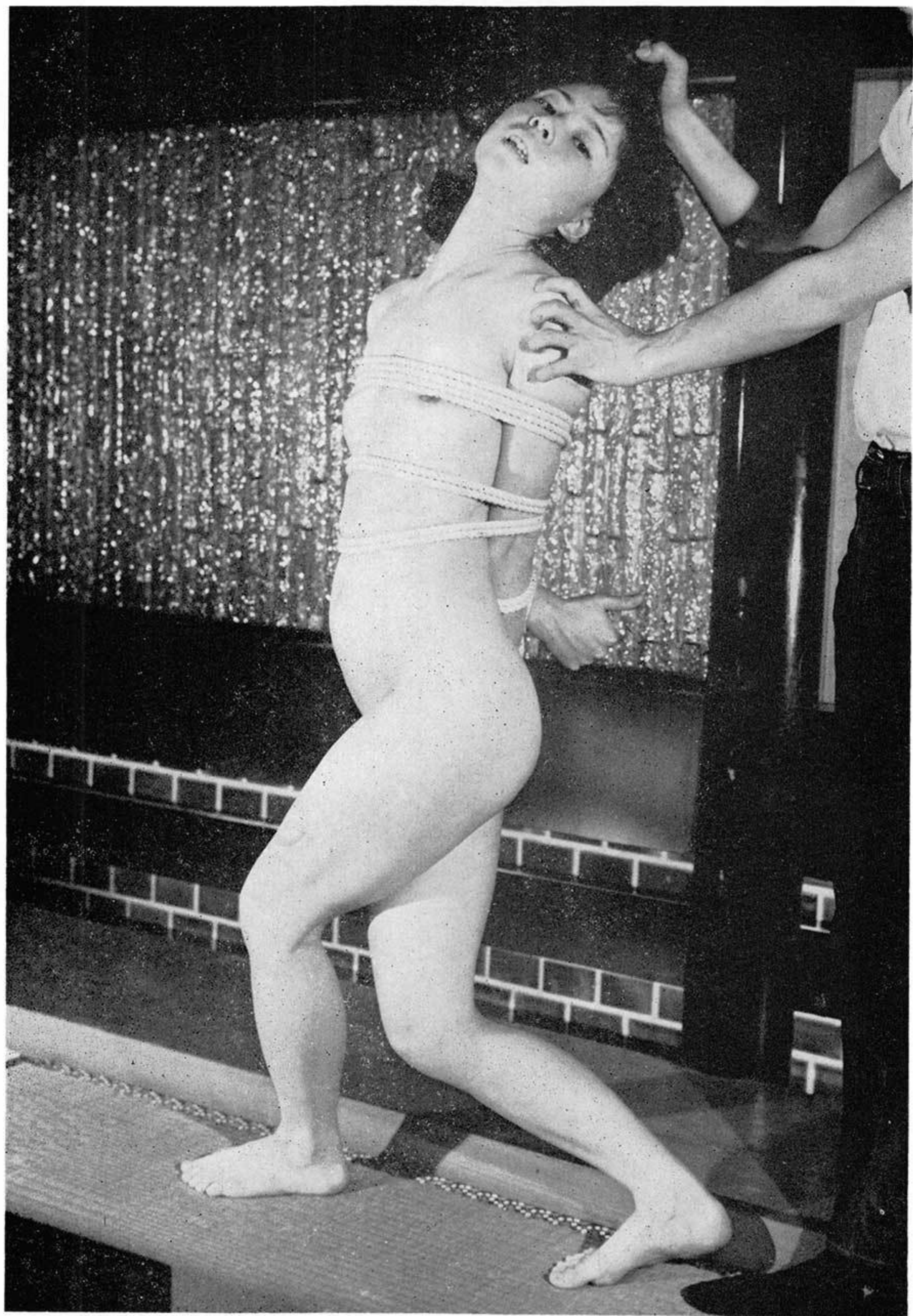
△玉木章子▽





引き回される美少女

＜前田真知子＞



奇

譚

ク

ラ

ブ

昭和四十八年 二月号

(第二十七卷 第二号)
通刊 第三〇〇号



『M女通信』のヒロイン

モデル……高村 浩子

縛っても、叩いても、抓っても、キミの肌は益々美しく輝いてゆく不思議な肌である。

キミの書く文章は、私達S紳士の好き心を微妙にくすぐる妙薬を秘めている。キミの顔は特に美人という部類に属するものでないのにも拘らず、まことに魅力的である。

裸身の美しさに至っては、まさに被虐美の極致といっても過言ではなからう。私は、この美しい浩子の肉体の中にマゾに目覚めた女性の吐息のようなものを感じる。

この肉体こそ、私達S紳士の憧れの的であり、渴仰してやまない理想的なマゾのヒロインである。
(大山良介・記)



懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

とき子の自縛教室

山口 とき子

(写真及びカットも)

第一章 開講のことば

一 はじめに

押入れを開けると押入れ特有の湿った冷たい空気が頬に触れます。衣裳箱が三個とダンボール箱が一個。私は押入れの中に半身を入れて、ダンボール箱を引っ張り出します。

時計は午前二時を廻ったでしょうか。この深夜に起きて押入れを、ごそごそやっている人間がいようとは、アパートの人達も気がつかないでしょう。江戸川乱歩の「屋根裏の散歩者」のように、私は私の意思にかかわらず

深夜に目をさまし押入れに首を突込みます。しかし、小説のような夢遊病者とは違って、私は私の意思で動いているのです。私には別のもう一人の私が同居し、その私が深夜に起き出してくるのです。

昼間の私は、ある地方官庁に勤める平凡なOL。結婚適令期を過ぎた二十八才のオールドミス。叔父の経営しているアパートに一人暮しです。顔立ちが、そう派手な方ではないので、自分でいうのもおかしいですが「まじめな娘さん」で通っています。そんな私が、もう何年、世間の人を欺してきたことでしょうか。

私はいつ頃から、このような縄に憑かれた女になったのかは、別に動機とてありません。小さいときから女の人が映画やテレビで縛られていたり、そのような挿絵を見ると、なか下半身がうずき、変な快感が走ったことを覚えていきますので、この私のマゾ性は先天的なものなのでしょう。

ただ私は、縄で縛られること以外は、あまり興味はなく、変な話ですが、男の方にも、あまり関心がございません。ですから、よく女の方が男の人に暴力で犯されることに興奮したりすることが記事にあります。私は別にそのようなことよりも、縄や紐で自分が縛

られること自体が嬉しく、それで十分、満足する変な女なのです。

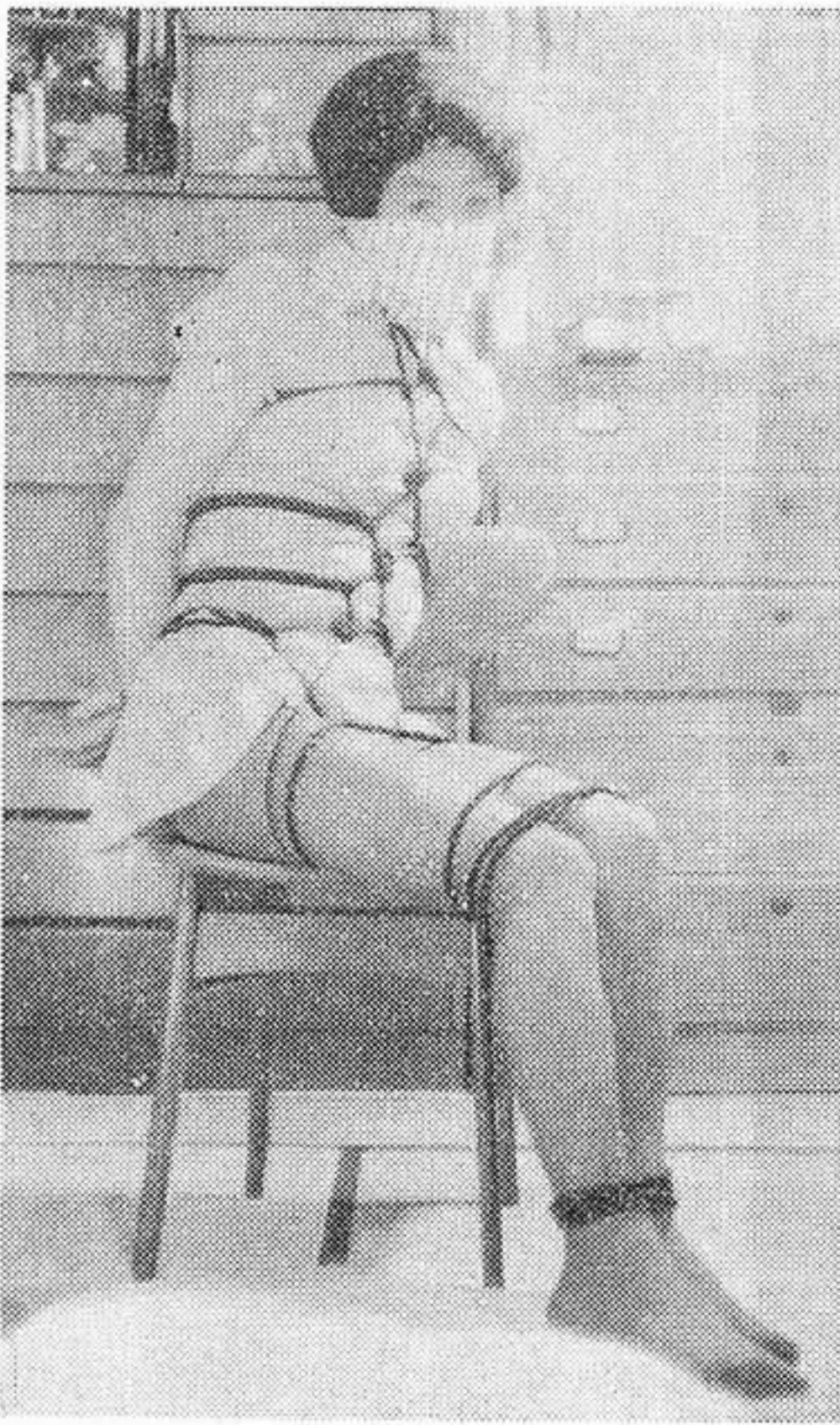
ですから、これから皆さまにお話する自縛も「そんなことをするより、人に縛って貰った方がよいのに」と、お願いの方があっても知れませんが、私はむしろ、自縛の方が好きですし、別に他の人に縛られてみたいなどとは思わないのです。

私が、こんな、はしたない原稿を書こうと思いついたのも、広い世の中には私と同じような性癖の女の方が、いるかも知れないというのと、よく「SM同志がプレイを……」

などと言っても、そう簡単には同じ性癖の人が知り合うわけがなく、また、いくら同じ性癖の人がいても、口には出さないのが普通ですし、特に女の方の中には、刺激を求めながら悶々としている人が、いるのではないかと思っただけです。

自縛の楽しみは相手がいないだけに、とっても空想性があり、また自分で自分の身体の弱い箇所、強い箇所を柔軟に縛ることができそうですので変化に富んでいることです。

私は、まだ他の人に縛っていただ



いたこともございませんが、マゾの女としては、ここを縛ってもらいたい。そこは痛いだけで、別のところを縛ってもらいたい。このような縛り方をしてもらいたい——と心の中で思っても、相手があるので、そんな我ままは許されないでしょう。いろいろと後でお話しますが自縛にも一つの限界がございます。しかし、それは完璧に縛れば縛るほど自分では、ほどけなくなるという限界で、決して他人に縛られるよりも不十分な縛りということはありません。

そして、変な話ですが、経験をつめばつむほど、その限界に近づく完全な縛りができる

のです。私は自縛をはじめから、もう三年になります。はじめは、ただ胸に縄を巻きつけて、ただ手を後ろに組んでみたりしていただけだったのですが、こうすれば、ああすれば——と研究した結果、今では十分、満足のできる自縛が可能になったのです。

私が、これから書きます自縛の方法を、どうかお試しください。決して嘘を言ったり、他人の受け売りで書いているのではないことが、おわかりと思います。最後に自縛のための注意事項みたいなものを書いておきましょう。

1、自縛のための手順を、よく考えておいてください。

2、布、縄、紐等は十分、用意するほかに、できるだけ小道具（あとで書きます）を作っておいてください。

3、縛ったら最後に必ず一箇所でもよいから、ほどけるところを作っておいてください。

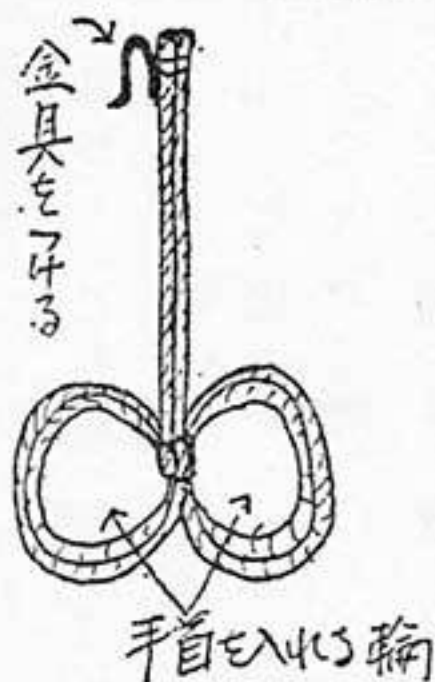
一 私の準備

ダンボール箱の中に手を入れ

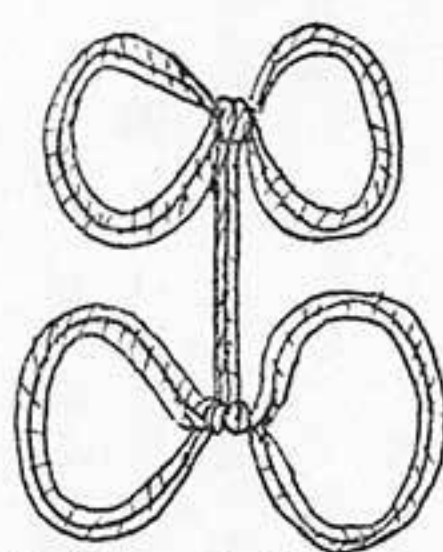
ます。指先に触れた、ざらざらしたものの感触とか、臭い、おいとが私の下半身のうずきを誘います。

縄と紐と針金。ダンボール箱の中の私の宝物。昼間の私のアクセサリが真珠のネックレスならば、深夜のもう一人の私のアクセサリは縄と紐と針金といえましょう。

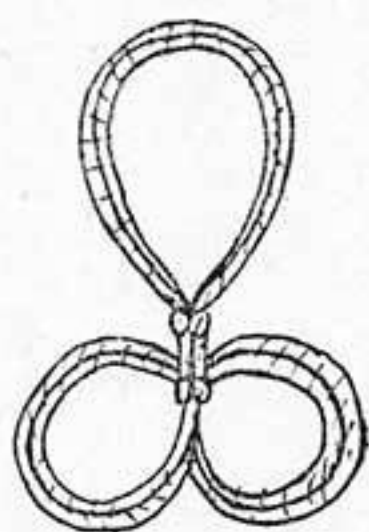
縄は直径二センチぐらいの太目のロープから〇・五センチぐらいの細引まで五、六種類はあります。製品も、いろいろです。綿もあれば麻もあり、ナイロン製の縄もあります。色も普通の縄の色のほかに、赤と黒があります。黒色はともかくとして、赤色の縄など、お店に売っているはずはないでしょう。私が染めたのです。緋紅色の染料を買ってきて水に溶かし、その中に真白の細引きを入れ、おかずを煮るように、ぐつぐつと煮つめると、出来上がります。



(図1 縄手錠)



(図2)



(図3)

赤い縄とか黒い縄とかは、なにかファンタジックな、ふんいきを作るので、私は好き。縄の長さも、いろいろとあります。長いのは十五メートル以上もあり、短いのは五十センチぐらいに切っております。それは、それぞれの目的のために私が切ったのです。

紐は、私が女であるからには不自由しません。これでも、お正月には人並みに着物を着ますので腰紐は、いくらでもあります。最後に針金をダンボールの底から取り出します。この針金は何番線というのか私には分からないけれど、あまり太いものは自分では、よく曲がらないので、なるべく柔らかいものにしていきます。これも多少、長目のものと短目のものを、用意しています。

私は、これらの縄や針金をつかって、いろいろな小道具を作ってみました。例えば、縄の加工品としては、一本の縄で両手首が入る

ぐらいの大きさの二つの輪を作り、それを固定し、縄の先にカギ型の金具をつけたもの。この金具にはカーテンを吊るす金具を利用しました。私は、これを「縄手錠」と呼んでいます。(図1)

また、四つの輪を、それぞれ縄で連結したもの(図2)や、大きな輪に二つの小さな輪を取り付けたもの(図3)など作ってみました。

奇巧の読者の方には、もうその用途は、お分かりのことと思いますが、図1の縄手錠は後手縛りや前手縛りに使い、図2は四肢を連縛し、逆さ海老のようになるために使い、図3のものは大輪に首を、小輪に両手首を入れるためのものです。

これらの製品をつくる際の最大の苦心は、両手首とか両足首を入れる輪の大きさです。あまり大き過ぎると緊縛感が薄れるし、小さ過ぎると手首が入らないし、無理に入れると抜けなくなります。

このほか、いろいろなものを作ってみました。私の作品は縄を主体にしてゴム紐や金具を組み合わせたものが多いのですが、ゴム紐は下着などについているもので、これは弾力があって非常に扱い易いし、緊縛感も強い

です。金具は自分で結び目をつくるかわりに他の縄に引掛ける場合に便利なのです。

○

私の部屋は六畳とダイニングの一DKですが、六畳には三面鏡とベッドしかおいてないので案外、広く感じます。そこが私の自縛の場所です。“自縄自縛”には、やはり手順があつて、それが逆だったりすると、全体にうまくゆきませんので、私は私なりに手順をきめて準備しています。

まず、今夜はどのような姿で縛られようかを考えます。普段着のままか、ネグリジェか和服か、水着か、下着か、全裸か？ お化粧は、どのように？ 髪型は？

私は普段は、あまり目立たない服装、化粧で勤めていますので、夜はできるだけ奔放な化粧、服装をすることにしていますが、あまり同じ姿でも変化がないので、いろいろと工夫しています。鏡の前で、いろいろとドギツイお化粧をして、自分の顔が変わってゆくのを見るのも、また楽しいものです。

ファンデーションを、ドーランのように塗りたくり、目のまわりに太目のアイラインを画き、真紅のルージュをぬって、つけまつげをつけ……。夜の顔は心とともに、できるだ

け変貌することが望ましいと思います。（やはり素顔では、もう一人の私になり切れないのでしょうか）

コスチュームを着け、お化粧をしてから次はカメラのセット。私は私の縛られ苦しんでいる姿を撮っておきたい。もうこの数年間に何枚の写真が、たまったことでしょう。誰にも見せられないPhoto。ときどき一人で寝ながら眺めるとき、新しい興奮が襲ってきます。

カメラはベッドとか椅子とか、自分の位置が写るようにセットし、セルフタイマーにしておきます。これも、なかなか、むずかしいもので、最初は頭が切れたり、腰から下がなかったり、安全にと思って遠くにセットすると、真中に小さく写っていたり、最近では、そう失敗は、しなくなりましたが、やはり動いて、ばやけたりすることもあって、この技術が、なかなかむずかしいのです。

これで一応の準備ができました。それではこれから自分自身の手で、自分自身の身体を縛り上げるまでの、あわれな女の苦心談を、お話することに、いたしましょう。

第二章 自縛教室

一 はじめに

自縛するためには手順がございます。これは非常に大切なことで、今あなたの目の前に一人の女の人が両手を背後に縛り上げられ、両足も括られた上、さるぐつわを噛まされた姿で倒れているとしましょう。

あなたは、この女性が、こんな姿にされるまでの過程を頭の中に画くとすれば、女性は先ず後手に手首を縛られ自由を奪われてから胸と腕を巻かれ、あばれる足を縛られて最後に、さるぐつわを嵌められたと考えるのが普通です。

被縛者と加縛者がいる場合は、当然でしょう。ところが自縛の場合は、これが全く逆でこの点が盲点なのです。

先ず、さるぐつわを嵌め、胸と腕を縛り、次に必要とあれば足を縛り、最後に手首を縛る。これが自縛の正規なコースなのです。

二 さるぐつわ

数年前までは“さるぐつわ”などと新聞に書いてあっても、一体どんなものなのか分か

らなかった私が、最近ではその言葉だけで、もう身体が熱くなるほど私は「さるぐつわ」が好きです。

あの、鼻と口を覆った息苦しさ、束縛感など、たまらない魅力です。他人に縛られるときならば多分、一番最後に噛まされる、さるぐつわも、自縛の場合には最初に、はめておかないなりません。

二の腕まで縛っていると、もう手は上がりませんので、頭の後ろで結ぶことができません。私は、いろいろの布で鼻と口を覆いますが、やはり豆絞りの手ぬぐいが一番、ぴったりするようです。でもネツカチーフだとか薄手のマフラーも、その柄や色合から変化はあります。

最近では歯と歯の間に噛ませるものが多い

いようですが、私は鼻と口を覆ったものが一番、好きですが、これも息苦しさや悦虐に通ずるからでしょう。しかし、あまり強くすると苦しさは極度になって甘美な喜びも薄らぐことにもなりかねません。

縄で顔面を、ぐるぐる巻



身体と腕に縄を巻いてゆく



巻いた両手で引張りながら締めよう

きにしたり、針金で口を縦横に縛ったりもしてみましたが、どうも部分的な痛みが大きくて感じが出ませんでした。だから普通は、先ず小型のネツカチーフを丸めて口の中に押し込み、その上を腰紐で歯を割るようにして縛ります。これもあまり締め上げると、頬がくびれて自分ながら見られた顔でなくなるのと、頬に紐の跡が強つくことから、適当に加減しています（翌朝、勤めに行くとき困りますので）。

これだけでも舌が押えられていますし、口は半開きなので声は出ません——もっとも助けを呼ぶこともないので——。

ただ経験された方もあると思いますが、このような、さるぐつわを嵌めた場合は、なにしろ唾液が、わずかし飲み込めませんので

そのうちに口から、あふれてきますし、あまり、みっともよいものではありません。私は先程の理由で、この上から鼻口を豆絞りの手ぬぐいで覆いうなじのところを縛ります。鼻口と一緒に覆った場合や、口だけを覆った場合など、いろいろと表情に変化があって楽しいものです。

なにしろさるぐつわだけは、まだ両手が自由なうちにやる仕事ですから、どんな風にもできます。私は、あまり好きではありませんが、外国にあるようにピンポン球みたいなものを口の中に入れたり、木の棒を横に、くわえたりすることもできましょう。私は持っていないませんが、皮の嵌口具みたいなものも、やってみたいような気がします。

三 身体と腕

次に身体と腕を緊縛するわけですが、この場合の腕とは二の腕のこと。すなわち、ひじから上の部分を指します。と申しますのは、下腕を縛ってしまえばと不自由になり、後の作業に

差しつかえるからです。

二の腕を身体に固定しても、それ以上には上がりませんが、まだ下半身や手首を縛るときは自由がきくのです。身体と腕の縛り方には、いろいろありますが、身体だけを縛る場合には、さるぐつわと同じように両手が自由なので、どんな縛り方もできます。和服を着るとききの帯のように、胸にぐるぐると巻きつけるだけなら簡単ですし、どんなに締めつけることもできますが、やはり二の腕も身体に固定することが必要なので、私の苦心も、そこにあつたのです。

身体と二の腕を縛り合わせるには、一緒にぐるぐる巻きにする方法と、身体と腕の間に結び目をつくって別々に締める方法とがあります（うまく図解できないのが残念です）

一緒に、ぐるぐる巻きするのは比較的、簡単で、赤ちゃんを背負う場合のおぶい紐を見ても分かるように、片手で縄の先の方を持ち、他の手で縄を身体と二の腕にかけて、巻きつけてゆくのです。

乳房の上と下に二、三巻きして最後に結ぶ余裕を残し、両手に縄を、じよじよに締めるので



す。ちょうど帯を締めるとき、両手で帯を持

って、わずかに身体を動かしながら、締めるでしょう。あの要領なのです。十分、締まったならば結ぶわけですが、これは縄の余り具合で、どこに結ぶかをきめますが、最後の部分だけ腕からはずして乳房の下ところで結ぶのが、あとでゆるまないと思います。結んでも、まだ縄が余るようでしたら、後ろに回し、後ろで結びます。（図4・図5）

映画などにでてくる縛り方ならば、このぐるぐる巻き方式で十分ですし、締める要領さえ分かれば緊縛感も十分です。また、この方法の一番の良い点は、全く変な話ですが万一自縛した縄が、ほどけなくなった場合にも、なんとか抜けだせることです。

私も、あまりきびしく縛りすぎて、ほどけなくなったことが何回もあります。たまたま、身体と腕の縛り方が、この方法であつた

ために、なんとか抜け出せた経験があります

と申しますのは、縄が身体と腕とを固定していますが、一緒に縛ってあるだけで別々に固定していないので、いざというときには思い切り息を吐いてから、机か何かの角に脇の下^{かど}のところの縄を掛け、首の方向へ、ずらす努力をすると、乳房で邪魔されている下の縄はともかく、上の方に巻かれた縄は首の方に、ずれ、それと同時に全体がゆるんで、なんとか縄抜けすることができなのです。

身体と腕を緊縛するのは、身体と腕とを、別々に縛ってゆく方法（別々といっても一本の縄）で、最近の私は、もっぱらこの方法です。これは縛り終わった場合の姿が、ぴたりしていることと、いろいろな掛け方ができて変化に豊んでいること。腕の緊縛感がすばらしいことが、私の好んで行なう理由です。ただ慣れないと、むずかしいこと。結び目に

余裕をもたせないと、縛り終えたときに緊縛の喜びより、痛さ（とくに腋の下あたり）が増してくること。最後に、ほどくときに時間がかかることなどを考えておかねばな

りません。

まず、どこから掛けるかを考えます。例えば、首縄からはじめるとすれば、縄の適当なところを持って首を一巻きし、そこでまず結びます。首は、あまり強く縛ると、万が一のこともありますので、幾分の加減をします。

次に、この縄を左右に振り分けて、肩から少し下の二の腕を二―三巻きして首からきている縄に引っ掛けて結びます。両方の二の腕を結び終わったら縄を背中の方へ回し、今縛った腕のその下を縛り、またそこで結び、それを胸に回して反対側の腕を縛り、そこでまた結び……というように一本の縄で首から片方の腕、身体、反対の腕、身体また腕と交互に縛ってゆき、身体と腕との間に必ず結び目をつくって、これを何回も繰り返すのです。

最後に縄の余りが適当の長さになったら最初の、首で振り分けた、もう一本の縄と結びます。要領としては個々の結び目を作るときは、片方の手だけでやるのですから、そこは慣れる必要があります。でき上がりは、ぐるぐる巻きと違って身体と腕とが密着しているのではなく、その間に結び目があるということになります。(図6)

また、あまり腕の下の方まで(ひじの近く

く亀甲縛りに注意する縄

(結び目を作った後)



(図7)

まで)縛っておきますと可成り痛いし、手の自由がなくなり、あとで後手に縛る場合に手が後ろに回りにくくなりますので、なるべく肩とひじの中間ぐらい(胸の縄は乳房の下)のところまでにして、余った縄は首縄に、もう一度、通したりしておきます。

ここで注意しておきたいことは、前にも申し上げたように個々の結び目に余裕をもたせずに緊縛すると両腕は必ず前の方に引っ張られますので手を後ろに回しにくくなります。したがって、ある程度の余裕をみて、ときどき手を後ろに組んで高手小手の状態にまでしてみながら、胸と腕との緊縛の程度をみる必要があります。

身体と腕との緊縛は、このほか、工夫すれば、いくらでも良い方法が考えられます。よく亀甲縛りというのがありますが、私もこれが好きで、よくやっていますが、これなども簡単にできます。

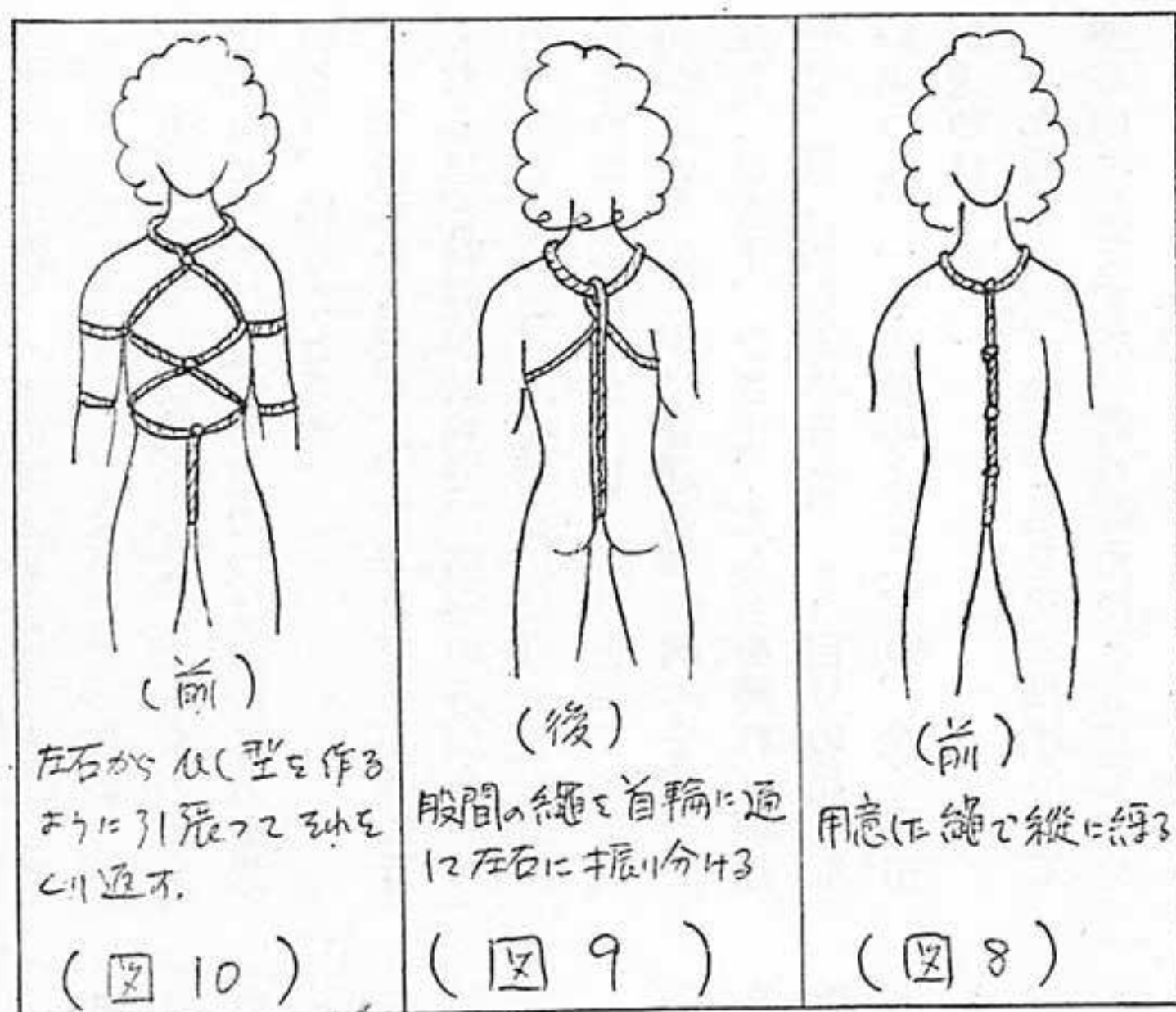
「亀甲縛り」の場合は

最初に縄を二つに折っておいて、適当な間隔に結び目をつくっておくことが必要です。首を入れる部分、ひし型

が胸とおへそあたりにくるように結び目を三つ、ないし、四つ、作っておくのです(この場合に首を入れる輪は大きく)。(図7)

そして最初の輪に首を入れてから、その二重になった縄を身体の中を縦に割るように真直ぐ股の間に入れ背中に回し、最初の首輪を少し後ろにずらして、股からきた縄を、その輪の中に通すのです。要するに身体を縦に縛るわけです。首の後ろで通した縄は左右に振り分け、背中から二の腕の上を巻きながら初めに作っておいた第2の輪に通して、左右からこの輪を抜けるように、もとの方向に引っ張るのです。

次に、また背中で交叉させ、前に回し第3の輪に通し、また、もとの方向に引っ張る。このように輪のある回数だけやると、身体の中央でひし型が、いくつかでき、非常に美しいものになります。最後は両方の先端を前か後ろで固く結んでおけばよいのです。



この亀甲縛りの最大の要領は、首の輪を大きく作って首の後ろに十分、引っ張れるようにすること、身体のためには掛けた縄は、ある程度たるませて、前でひし型が形よくできるだけの余裕をもたせることです。いくら縦縄をゆるくしておいても、亀甲に縛ってゆくうちに、ぴーんと張ってくるものです。(図8、図9、図10)

この亀甲縛りの最大の良いところは、首からの縄が股間を通っていることで、女としてもっとも敏感な個所に縄が触れ、縛り終えたときは一寸でも身体を動かすと、その刺激でエレクトするほどになります。

上半身の縛り方は、このほかにもいろいろあります。それこそ体幹だけなら、文字どおり雁字搦目に縛ることが出来ます。また縛る縄も一本とは限らず、何本かの縄を組み合わせて縛っています。とくに一本の長い縄は扱いにくい難点があり、三メートルぐらいの縄を数本、作っておいたほうが、作業がやり易いようです。

特に亀甲縛りなどのときは、縦の縄と横の縄とを色の違う縄を使うと、あやしい美しさができます。ただ一本の縄は、どこか一箇処ゆるんだり、ほどけたりすると、全体がゆるんで、ほどき易くなりますが、何本もの縄を使うと、一本一本が固定していますので、ほどくのに大変な苦勞がいることを覚悟せねばなりません。

四肢(あし)

次に足に移ります。私は、足を縛ると

きと縛らないときがあります。なにしろ足を縛ってしまうと、もうその場所から動かせんし、たとえ身体をずらせて動いても、行動範囲は限られています。

歩けないということは不便なことで、鏡の前で自分の姿を見ることが、万が一、解けなくなつたときには大変、困ります。最も困るのは、あとでお話しますが、写真をとることが非常にむずかしいことです。でも、私は最大のマゾ女。足首から太ももにかけての縄の感触も縄力です。だから自縛する半分ぐらいは、足も縛っています。

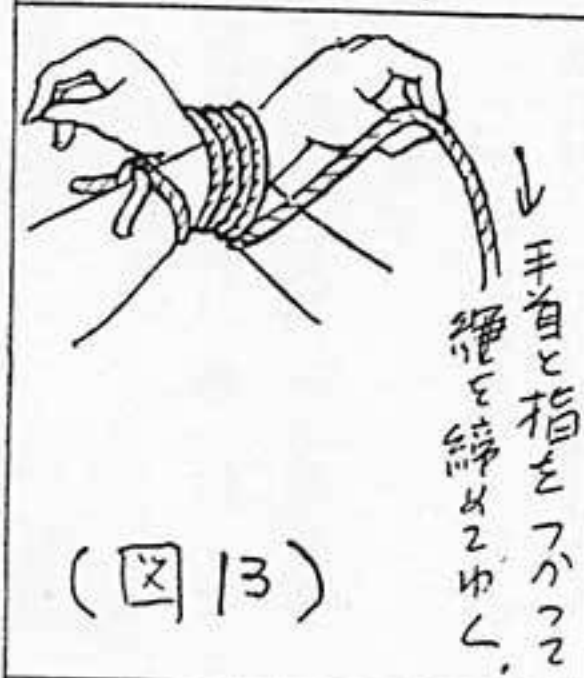
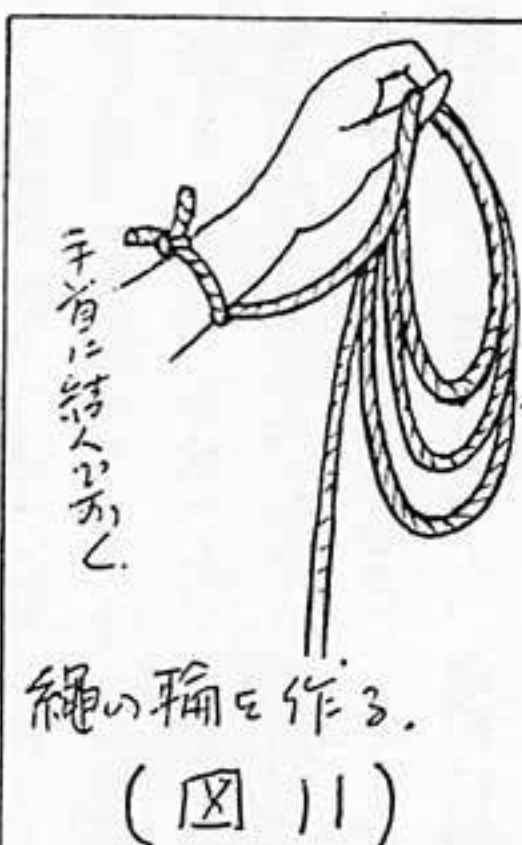
自縛の順序としては、足はさる、ぐつわと同じく、まだ上半身を縛らない前の方が、やり易いのは当然ですが、逆に足を縛ってから上半身を縛るのも、なかなかむずかしいので、身体と腕を縛った段階で、まだひじから手までが自由なうちに足を縛る事になっています。いく分は不自由ですが、下の方の作業なので比較的、楽ですし、どのようにも縛れます。

オーソドックスなのは、まず足首を揃えて二―三重に縛り、次にその縄をひざ下、ひざ上、太ももと、二―三巻きして、縛ってゆくことです。この場合にも一本の縄で足首から太ももまで縛るのと、別々の縄で縛る方法と

がありますが、一本の縄の場合は、どうしても、あとでゆるんでくるようです。肢のうちで、もっとも気持が良いのは、太ももの部分それもヒップに近い、足のつけねの部分を思い切り、縛ることです。

上半身もそうですが、下半身でも足首に近くなるほど神経が敏感で、痛みの方が多くなります。それと、足を縛るには縄よりも腰紐のようなものの方が、しっかりと締まって気持がよいものです。普通の腰紐四本を使って足首、ひざ下、ひざ上、太ももを縛れば理想的で、思い切り締めると、もう自分の足でないような、一本の棒のようになり、全く自由が失われます。

また縛る場合、坐って足を前に投げ出して縛るのは楽ですが、縛り終えたとき立てなくなるので、足を揃えて立ったまま腰をかかめて、足首から縛ってゆくことにしています。



もし写真をとるのをやめるような場合は、ほう木のような棒に両足を開けて縛りつけたり、椅子に腰掛けて椅子の足に自分の足を縛りつけたりすることもあります。あまりみっともよくないのですが、男の人のようにあぐらを組んで交叉した足首を縛っても、よいでしょう。

五 手首（後手又は前手）

さて、いよいよ本番になりました。猿轡、身体、腕、足までは少なくとも両手が、まだ拘束されていない状態の作業なので、ものによつては若干の苦勞を要しても、慣れれば、まず十分に、他人に縛られると同じぐらいにいやむしろ、それ以上に緊縛することができず。しかし最後に残った両手首を縛り合わせることは、自分で行なうことからして一寸考えると不可能のような気がするでしょう。

でも私はこの一、二年のうちに、ほぼ完全に縛ることができるようになりました。

マゾ女の一念でしょうか。でも、あくまで自縛ですので、そこには限界があります。まず、ベッドに大の字に張り付けるようなことは不可能です。足はともかく、片方の手首を縛りつけたら、もう一本の手首を自分で縛りつけることは、ちょっとむずかしい。要するに手首を離して別々に縛ることは、むずかしいのですが、手首を合わせて一緒に縛ることがあるならば、前手であろうが後手であろうが容易です。

それと、もう一つの限界は、例えば高手小手のように後手に縛った手首を首に近い方まで吊り上げるような場合は、ある程度（水平以上に）のところまで、できても、それ以上は危険です。危険ということ、まずは十中八九、解けなくなるからです。

自縛は完璧に近ければ近いほど最後に、ほどこけなくなることを考えておいてください。そこに自縛の限界があり、自縛したあとに他人に、ほどこいてもらうのなら、どんな厳しい緊縛も可能です。では手首の縛りについて、いろいろな方法をお話ししましょう。

(一) 両手首を自分で縛る基本は、両手首と指

を最大限に働かすことです。いま両手首を縛られていてと仮定して、左右の手首を前に重さねてみてください。接触している部分を動かさないで、それから先を動かしてみてください。十分、動くでしょう。

手首を縛られて手首を動かせるなんて変な話ですが、左右の手の指まで縛られていなければ、両手首は離れなくとも、手首だけは動かすことが、お分かりと思います。手首を自縛するのは、このことを最大限に利用することなのです。特に指が自由であることから、この指を使って縛ったり、ほどこいたりするので

まず基本をマスターすることが必要です。

これは前手でも後手でも同じですが、二―三回の練習で容易に熟練します。初めのうちは前手で練習なさるのがよいでしょう。まず片方の手首に縄の一端を結びます。次に縄をたぐりながら、輪を作ってゆきます。よく西部劇に出てくる投げ縄のように、縄の輪を作るのです。

できたら、それを片手に持ち、両手首を交叉して、その輪の中に突込みます。この際、手首に結びつけていない一方の縄の端は他方の手で、にぎっておきます。両手首を輪の中

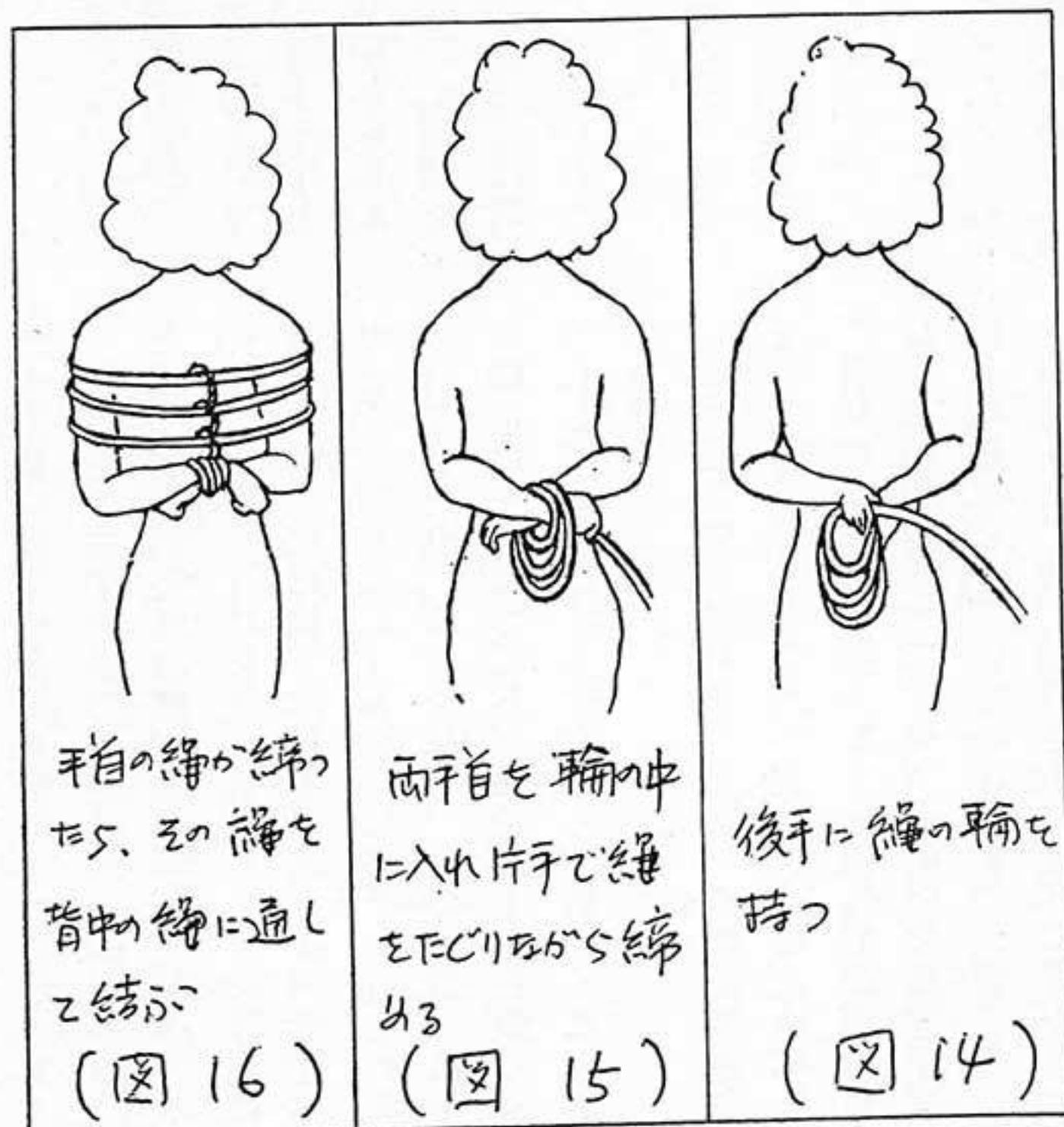
に入れてから縄をにぎった手で、その縄を引っ張りながら締めてゆくのです。縄は一方の端が固定されていますから、一方をたぐってゆきますと、初めは、だらしなく垂れていた縄の輪は、だんだんに小さくなり、両手首を締めつけるようになります。

この場合、手首を少し動かしながらやると輪は平均に小さく締まってきます。腰紐で、この基本を十分に練習してみてください。案外、簡単に両手首が縛り合わせるので、驚かれることでしょう。

十分、締めておきますと、二―三巻きならともかく、四、五重に（輪の数が四、五）巻きついている場合は、少々手首を動かせたり突張ったりしても、ほどこけません。（図11、図12、図13）

ただ、まだ縄の片方が、どこにも結んでいないので、何回も繰り返し手首を動かしているとやがては、ゆるんできて抜けるようになります。ここまで何回も練習してください。

次に理屈からいうと、縄の一方の端をどこかに固定すれば完全に縛ったことになるのですから、その方法を考えます。この場合は前手縛りと後手縛りとは違いますが、余った縄を指先を使って別の縄にからげて結び目を作っておくことには変わりありません。前手縛りの場合で、まだ猿轡もしていない状態なら、歯をつかってやれば容易に手首のところで結びます。



両手首を前に交叉して、きっちり縛ることができるようになれば、もうどんな応用もできます。後手に縛るときは、全く同じ要領で片方の手で縄の輪を持ち（ここまでは前で行った）、両手を後ろに回して作った輪の中に両手首を交叉して入れ、指をつかって縄をたぐりながら、輪を締めていきます。

きっちり縛り、両手首が密着したら、縄の一方を胸から背にかけて縛ってある縄（身体と腕のところで、お話した部分）に通し、そこで結ぶか、まだ余っているようなら、また手首のところからためて、再び背中の縄に通し、指先をつかって結びます。この場合、縛り合わさった両手首は、できるだけ首の方に持ち上げながら結ぶようにすると、縛り終えたあとの緊縛感がすばしくなります。（図14、図15、図16）

なお、この縛り方では、最初に縄の片方の端を片手首に縛っておくように書いておきましたが、別の個処に縛っておいてもよいのです。例えば首に結んでおき、結び目を首の後ろに回して、そこから垂れた縄をたぐって輪を作って両手首を入れる——あとは同じ。そうすると首と手首が直結して、両手首を下におろそうとすれば首が締まったりして、別の

緊縛感が得られます。

(二) (一)の方法が十分マスターできれば、他人に縛られる以上に完全な縛りができますが、もっともっと、自分を苦しめる方法もあります。先にちょっと述べましたが、高手小手というのは、できる限り両手首が背中から首に近くまで上がっていることが理想で、自縛もなんとか、そこまでできないものを私は考えました。（世の中に私ほど縛りに憑かれた女がいるでしょうか）

そこで考えた結果、やはり自分の手や指先だけで、そこまで引き上げるのは無理で、別の力を借りる必要があるということになったのです。

そこで私は一本の縄の先端にカギ型の金具を取りつけました。この金具は前に書きました

たカーテンの吊り金具を利用したものです。

それを、まず家具の一定の部分に引っかけてのです。例えば冷蔵庫の取手だとかベッドの柵だとか——次に別の先端を片方の手首に縛りつけ、縄の輪を作り——あとは(一)で述べたと同じ方法で——輪の中に後手に回した両手首を突込み、これを締め、この場合、自分で縄をたぐらなくても、縄をぴーんと張るようにして身体をずらせながら、締めることができます。

こうして完全に締まったら、次には両手首を、できる限り首の方へ引き上げるようにして身体で縄を引っ張ります。縄は私の後手首から首の脇を通して、ベッドの柵まで伸びている状態になっているわけです。（図17）

身体をこごめ、手首を上にあげて縄を引っ張ると、いくらでも手首は上がり、ひじが折れるように痛んできます。そこまでしてから身体を、くるくる廻転させながら、自分の身体に縄を巻きつけてゆくのです。

なにしろ一方の端を固定していますから、力一ぱい





縄を張りながら首や腕に縄を巻いてゆくので、すから、ものすごい緊縛感があります。カギ金具をかける家具は軽いものや引き出しなどですと動いたりしますので、重いものや固定してあるものに引っかける必要があります。

だんだん縄が短くなって、最後に金具をかけたところにきます。そこまできたら指先をつかって、金具をはずします。(結ばないで金具を使うのは、指先でもはずせるから)はずしたら、その金具を、どこでもよいから身体に巻きつけている縄に差し込んでおくのです。

この方法は、なにしろ身体全体で引っ張り

ながら締めるので、乳房もなにもめっちゃめちゃに縄が喰い込み、両手首は極度に首の方に引き上げられており、その合わさった手首の上に、また縄がかかったりして、最大の縛り模様となること、うけ合いです。この方法の一番むずかしい点は最後に金具を、はずすことと、それを身体に縄に差し込むことです。手は全く動かせませんので最後に金具の位置が、うまく指先に触れるところに来るようにすることがコツです。また、この方法は、もちろん足を縛っていると、できません。

③ まだ、いろいろとありますが、手首の縛りに小道具を使うことを書いておきます。決して緊縛感が劣ることはないのです、

私も好きな一つです。もう前に書きました「縄手錠」を使って、両手を後ろに回して、すでに作ってある縄の輪の中に入れ、金具を胸から指にかかった縄に吊るすのです。ただ、これだけですが、この輪の大きさいかなでは、もがいているうちに抜けなくなることも、しばしばで、この輪の大きさを、どの程度にするかが一番、問題です。

人間の手は不思議なもので、輪の中に入るときは指を揃えて、まっすぐに、すーっと入れると簡単に入れられますが、入

れてからに、ぎりこぶしを作ったり、手首を動かしているうちに膨脹するのでしょうか、もう抜けられなくなってしまいます。また、四つの輪を作ったものに両手両足を入れて、うつぶせに転がったり、三つの輪に首と両手首を入れたりすることも楽しいことです。

二つの輪の縄手錠を後手に、はめ、うつぶせになって別に足首を縛ってから足を背の方に折りまげ、縄手錠の金具をその足首の縄に引っかけることもよくやりますが、身体は、そり返り、気持のよいものです。

六 吊り

マゾ女の研究の最後になりました。私はこの「吊り」を四、五回やったことがありますし、それはそれで刺激があり、自縛の極致でもあります。危険でもありますので自重してきます。この「危険」ということは何度もできまが、生命の危険というのではなく、「ほどけなくなる危険」ということです。

吊りといっても自分の身体を、ぐるぐる巻いて、それに、ぶら下がるということなど簡単ですが、やはり後手に縛られた上で吊るさ

れなければならぬので、きわめて「危険」なのです。まあ、私の体験を申し上げます。

まず自分の身体を吊り下げるのに適当な場所を、さがします。私の部屋は六畳とダイニングとの間に鴨居がありますので、そこに狙いをつけ、まず踏台をその真下に置きます。

その踏台の上に縄を持ってあがり、まず足首と太ももを縛ります（猿轡は事前に嵌めておきます）。次に太いロープを鴨居に通し、

片方の端で自分の腰を、しっかり縛ります。

一方の縄は一応そのままにしておき、別の太いロープで上半身を、ぐるぐる巻きに、します。これは、もう前にお話しましたように、身体と腕とを一緒に縛りつけます。

この場合に必要なのは、できるだけ太いロープで力一ぱい締めることと、なるべく乳房の下を縛ることです。乳房の上を縛ると、なにかのひょうしに、縄が首にずれて、本当に生命が危険になることが予想されます。

四重五重と上半身を嚴重に縛ったら、鴨居から垂れている縄を、この上半身を巻いた縄に差し込んで縛ってください。胸を非常に、きびしく締めているので、そこには、なかなか通しにくいのですが、みぞおちのあたりに

通し、しっかり結んだら、結び目を背中の方に、ずらすようにしてみてください。

それから鴨居に掛ける縄は、たるまないようにすることと、なるべく太いもので二重にして使うことが必要です。これで足と上半身を縛ったことになりますので、あとは手を後ろに回して縛ります。この場合、縄手錠を利用するのもよいでしょう。ともかく後手になって全身を縛ったところで、踏台から足をはずします。

ぐぐつと鴨居から引っ張られた縄のきしみが胸を縛った縄に伝わり、すごい刺激となります。吊られた経験のある方には、お分かりと存じますが、人間が縄で吊るされると一か処に安定しないで、ぐるぐると、ゆっくり廻りはじめます。一本の棒のようになって、ゆらゆら、ゆれている姿を、ご想像ください。

それから帯のようなもので身体を巻いていればともかく、縄だけだと素裸では痛くて、たまりません。皮膚に縄がこすれて気持よいどころか、二の腕などは大げさにいえば骨がくだけるような痛みですので、吊りの場合はなるべくセーターのようなものを着てから縛った方が無難です。

次に最も重要なことは、乗っていた踏台か

ら足はずして空間にぶら下がる時に、その踏台なり椅子なりをけ、飛ばさないことです。もし踏台が倒れたりして、もはや足を掛けるところがなくなると、自分で縄を解くことができなくなります。人間は足が大地についているために安定しているもので、空間にぶら下がっている場合は、後手の縄を解こうにも力が入らないものです。

七 撮 影

自縛方法は、まだいろいろあって、両手首を縛って上に吊ってみたり、足を別々にベッドの足に縛り、両手は揃えて頭の上でベッドの柵に縛りつけたりすることがありますが、いずれも今まで書きましたことの応用ですので、このくらいにしておきましょう。

次に写真の撮り方です。自縛者は自分を縛って、その緊縛感を味わい、苦しんだ自分の顔を鏡にうつしてみたりするほかに、なんとか写真に、とっておきたいと思うのが普通です。一種のナルシズムでしょうか。

写真をとること自体は簡単ですが、これにも自縛の限界があります。ある場所に自分を固定した場合や、手足を連絡して動けないようにした場合は撮影は無理です。ただ、この

場合にもセルフタイマーが自動的にシャッターを切るまでの時間内に縛り終えれば撮影は可能です。

まず自分が写る場処にカメラをセットします。大体二―三メートルの位置が、もっともよいようです。自分が写る場所には、あらかじめ椅子とか座ぶとんを置き、そこに坐った場合、画面にうまくおさまるかを、よく考えセットすることが必要です。

坐る場合や腰掛ける場合はカメラを縦に、横に寝たり転がったりする場合は横にして、セットしておきます。シャッターは、もちろん自動にしてから、いろいろな型に自分を縛り上げシャッターを押します。前手縛りの場合は、もっとも簡単ですが、後手に縛った場合は、後手でシャッターを押すことになります。

シャッターが、ジーと鳴りはじめたら自分

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	五万円
良作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	貳万円
佳作	一篇につき	壹万円
可作	一篇につき	五千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別すること「告白懸賞」とお書き下さい。

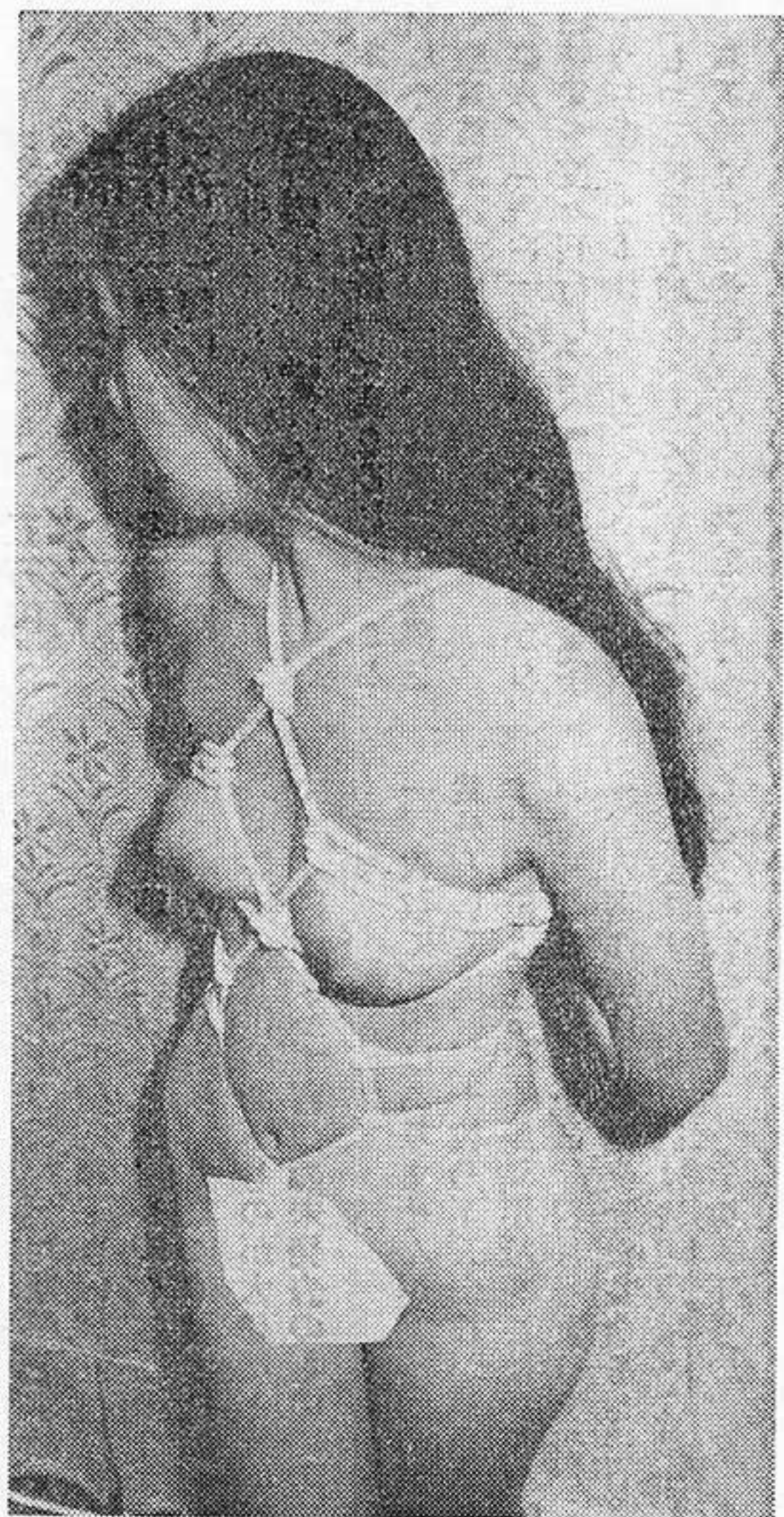
の位置に坐るのは普通の撮影と同じですが、フィルムを巻くのが一寸、面倒で、後手のま、この仕事をしなくてはなりません。すべて背中のところやるので慣れる必要があります。

次に足から太ももにかけて縛ってある場合は歩けませんので、両足でピョンピョン跳ぶほかありません。ぴょんぴょん飛んでシャッターを押し、又ぴょんぴょん飛んで自分の位置にゆきます。しかしセルフタイマーがシャッターを押すまでの時間は比較的ありますので、そう急がなくても大丈夫です。シャッターを押してから、ふとんの上に、うつぶせになり、後手と足首とを連絡することぐらいの時間はあります。

私は同じ縛られ姿で十枚ぐらい撮り、一旦縄を全部、解き、新しいコスチュームで、また十枚ぐらい撮ります。

撮り終えたフィルムは、街の写真屋さん頼むのは恥かしいので、もっぱら駅の構内にあるフォトサービスのところに持って行くことにしています。

自分の縛られ姿を写真で見るとも刺激的ですし、急に見なくなったりしますので、ハンドバッグの底に入れて持ち歩いています。



夫婦SMプレイの報告書

私の場合—とSMプレイ

井上 雅人

「ねえ、お願い。お乳を、お乳をしゃぶって下さい」

真っ昼間から、妻の鼻声を背にして、私はカメラから手を離れた。

もう二カ月も前だろうか。私は絶対に奇クには載せないようにと頼んで、赤裸々な妻の緊縛スナップを編集長殿に十数枚御受納（無論ムリヤリであるが）頂いたことがある。

それは妻を口説いて撮影した縛りの写真であわよくば、奇クの特派員にしてもらいたいという魂胆から送ったものであった。

残念ながら、奇クの特派員にはしてもらえなかったが、カメラの腕はともかくとして、妻を美人だとほめられ、プロポーションの良さと若々しさを讃えられてみると、一応お世辞だとわかっていても悪い気はしない。

顔から下までバッチリと写っているため、そのままでは、とても誌上に掲載できるシロモノではないが、奇クの特派員たった一人に鑑賞してもらえただけでも、折角撮影した甲斐があるというものである。

そのときのSMプレイと撮影を予備知識として編集長殿からの注意事項を参考にして、もっと大胆なレンズ・アイを試みたかったのが、今日の撮影である。

今、妻は秋の午後の陽ざしを気にしながら身をかくすすべもなく、素裸に縄を喰い込ませ、肩であえぎながら、その白い肌を壁にまかせている。久しぶりのSMプレイの始まりであつたが、妻には、ただ写真を撮ると言うただけで詳しいことは何も言っていないかった。まさか、この写真を奇クに送るとは、夢にも思っていない。

濡れた乳房が、ライトの光に輝き、美しく見える——と、いつか喋ったことがある。

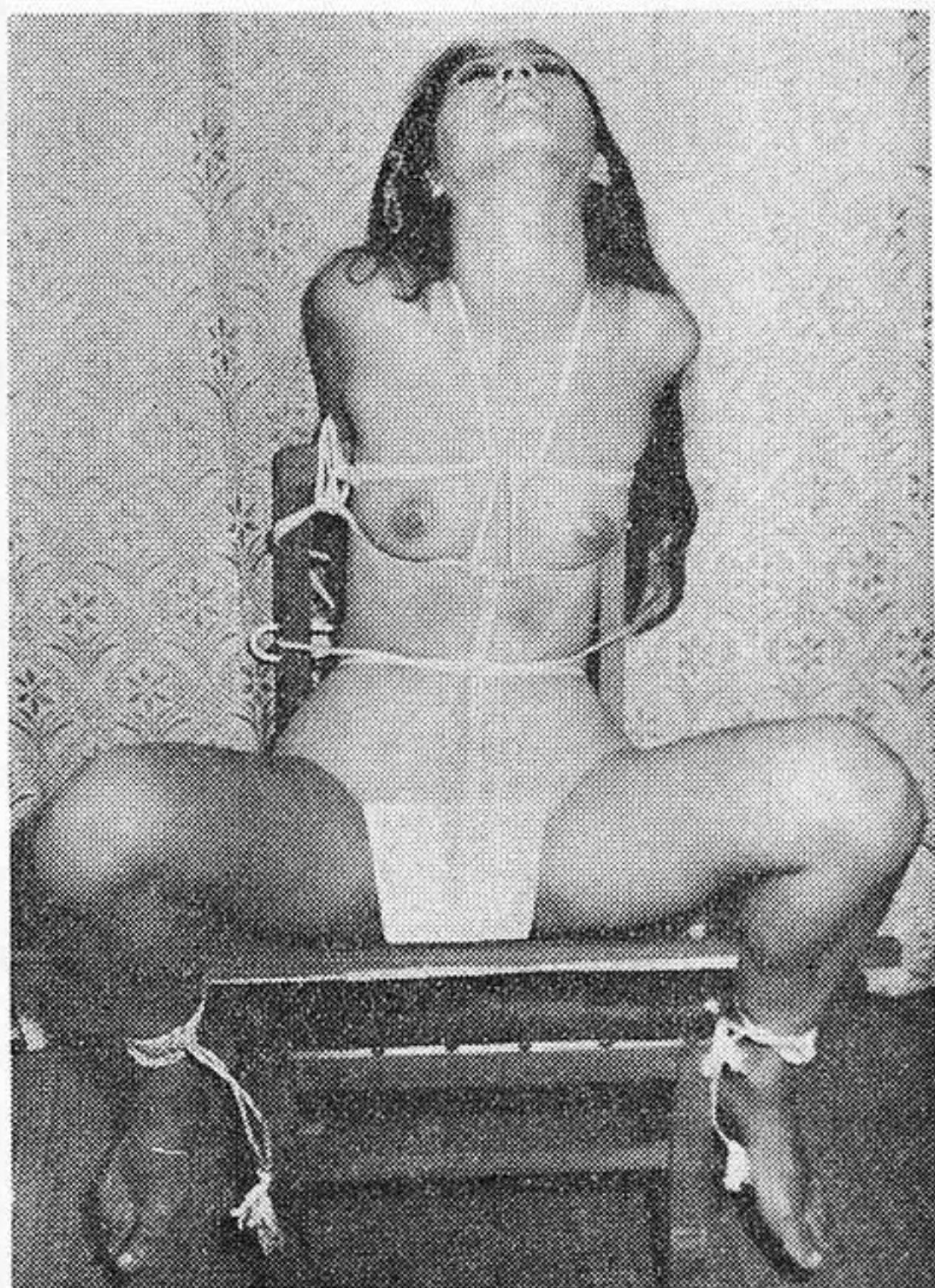
私とすれば、ただ縛ったままでは面白くないから、何だかんだと屁理屈を並べては、あれやこれやと、裸にした妻の女体をいたぶるのだが、やはり、いつでも自由になる妻の肉体には、私自身には新鮮味は少ない。知り尽してしまったせいかもしれない。編集長殿か

らは、若々しくて美しい、こんな素晴らしい女性を思いのままになるのに贅沢を言っていない——と言われたのだが……。

「うん……」

気のない返事をした私は、仕方なくといった態度で妻の乳房に口をつける。

妻の身体が、かっかっかと燃え、みるみるその先が舌の中で固くなってゆくのが



よくわかる。身をふるわせ、せつなそうにうめく様は、いつものことながら、私にとっては身のうずくような快い眺めである。

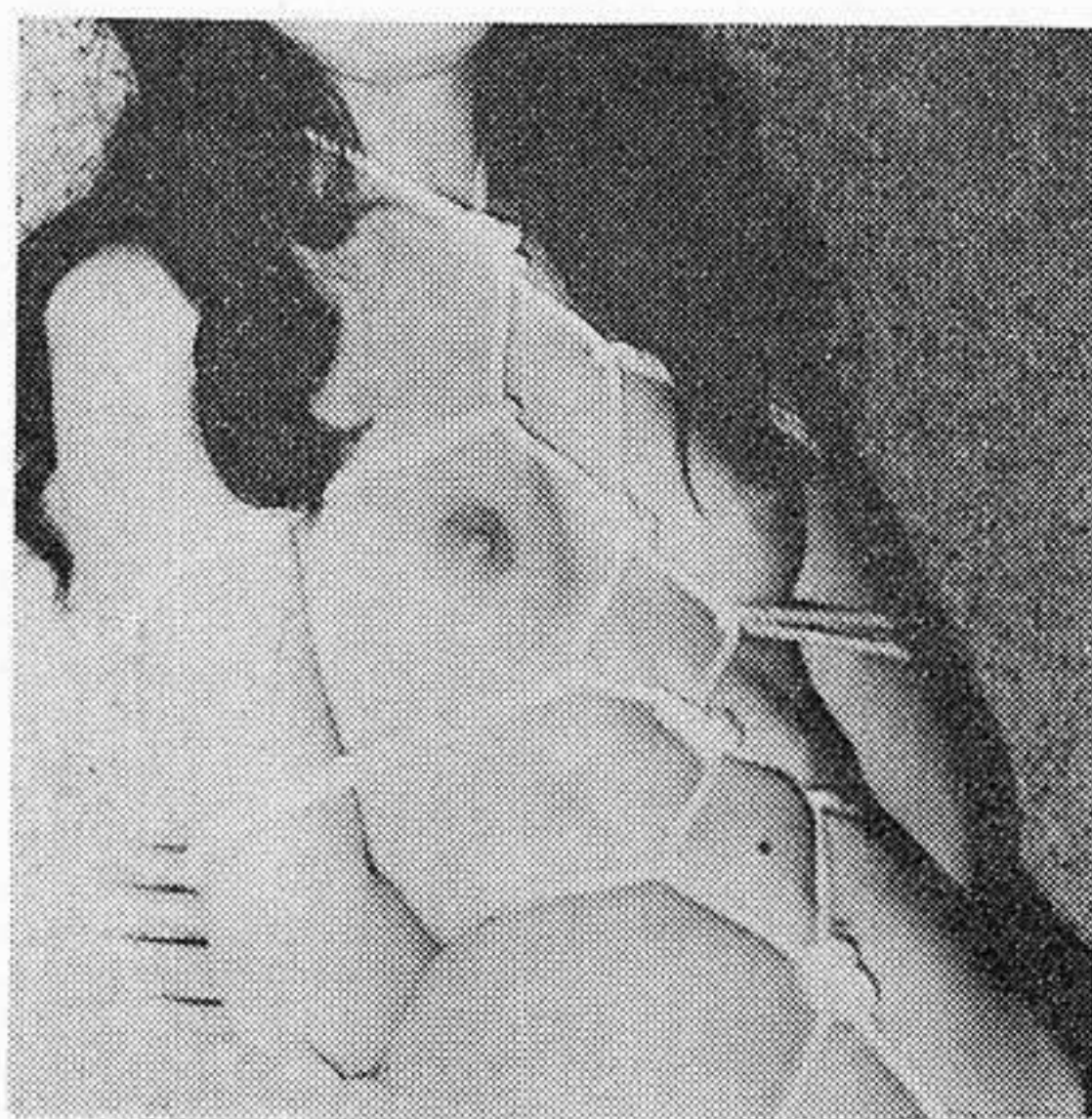
ある時期、苦痛を与えて、その苦痛にゆがむ表情だけを連写で撮りまくったことがあるが、妻が勤めに出だしてからは、これも難しくなった。縄の跡が残って、皮下出血を起したりすると困るからだ。

これらの事も、SMプレイを通じ、これにセックスが伴うと、妻の方から、そのさなか

に、「抓って」とか、「噛んで」とか、「ぶって」とか、言いだすようになった。

私にとっては、妻をM女にすべく教育中の夫婦であるが、新婚間もない夫婦であってみれば、必然的にSMプレイの中にセックスが濃厚に含まれてくる。高まった妻の裸身の耳もとで、あたかも催眠術でもかけるように私がささやくと、面白い程に妻は狂う。

「さあ、お前は今、裸にされて足を大きく開かれるんだ。あばれても駄目だぞ。ほら、お前は、机の上で両手を大の字に縛られているんだ。もう動けないぞ」



妻は言われるままに

両手を横に拡げ、フトンの端をつかんだりする。縄のひとすじすら掛かっていないのに、裸の女体が

私の胸の下で、もがいているのだ。

「助けて、動けない。助けて——」

「うるさいッ。今度は両足も縛ってやる。ホラ、お前の体は、みんな、まる見えだ」

「イヤ、見ないで。かんにんして……」

妻の素足は、太股の付け根から大きくフトンの両脇に開かれる。足に力が入って指先がピンと伸び細かく内股をケイレンさせる。

しきりに、動かぬ身体を動かそうと、もがく。顔をそむけ、肩をふるわせる。全てが、まるで本当に縛られている様になるのだ。

「大の字のまま、お前は犯されるんだ」

「ああ、背中がつめたい。痛いわ」

少し荒々しくあしらうと、私は一層、芝居



がかった口調で話し続ける。

「助けて、誰なの？ 助けて……」

私は、むき出しになった二つのふくらみをわしづかみにして、その指に力を加えながら芝居を進めてゆく。

やがて、めくるめくバラ色の花園に追いつた後、目が覚めるまで、私の芝居どおりに妻は第三の女として変貌した上、悶絶してしまふのだ。

「はずかしい……」

正気を取り戻した時、今まで狂っていた第三の女の体は、初めて妻の身に返って、私の腕に身をかくすのだ。

今日の様に、妻を縛って写真を撮りまくる



時も、私は常に口で妻を、いたぶり続ける事
にしている。

「ホラ、誰か来たよ。どうするんだ？」

「さあ、みんなに、お前の裸で縛られた姿を
見せてやるんだよ」

「そのちっちゃなお乳を、ビシッビシッと、

ひっぱたいてやる——」

ファインダーのくもりも気にせず、私は妻

を口で、いじめるために、喋りまくる。やが
て、妻の裸身は、縄でくくられたまま私のひ
と言、ひと言に、心をおどらせ、身をふるわ
せて第三の女へと変身してゆくのだ。

撮り終わってフィルムを現像してみると、
やはり、つい顔を正面に入れ全身をすっきり
写してしまうものが多い。ここに同封した写
真は、そんなわけで選び出すのに苦労したが
苦しんだわりに出来は良くない様だ。

編集長殿からは、こんな若くて美し



い奥さんを持つているのだから、他へ目を移
すことなく、新婚間もない新妻のM飼育に専
念すべきであるとアドバイスを受けたのです
が。

私は、やはり妻以外の女性を縛りたいと思
う。

市川市の石田令子さん。

東京に住む私とは、隣同志のようなもの。

緊縛と写真撮影を私にも、試みさせてくれま
せんか。

連載・時代S小説

紫

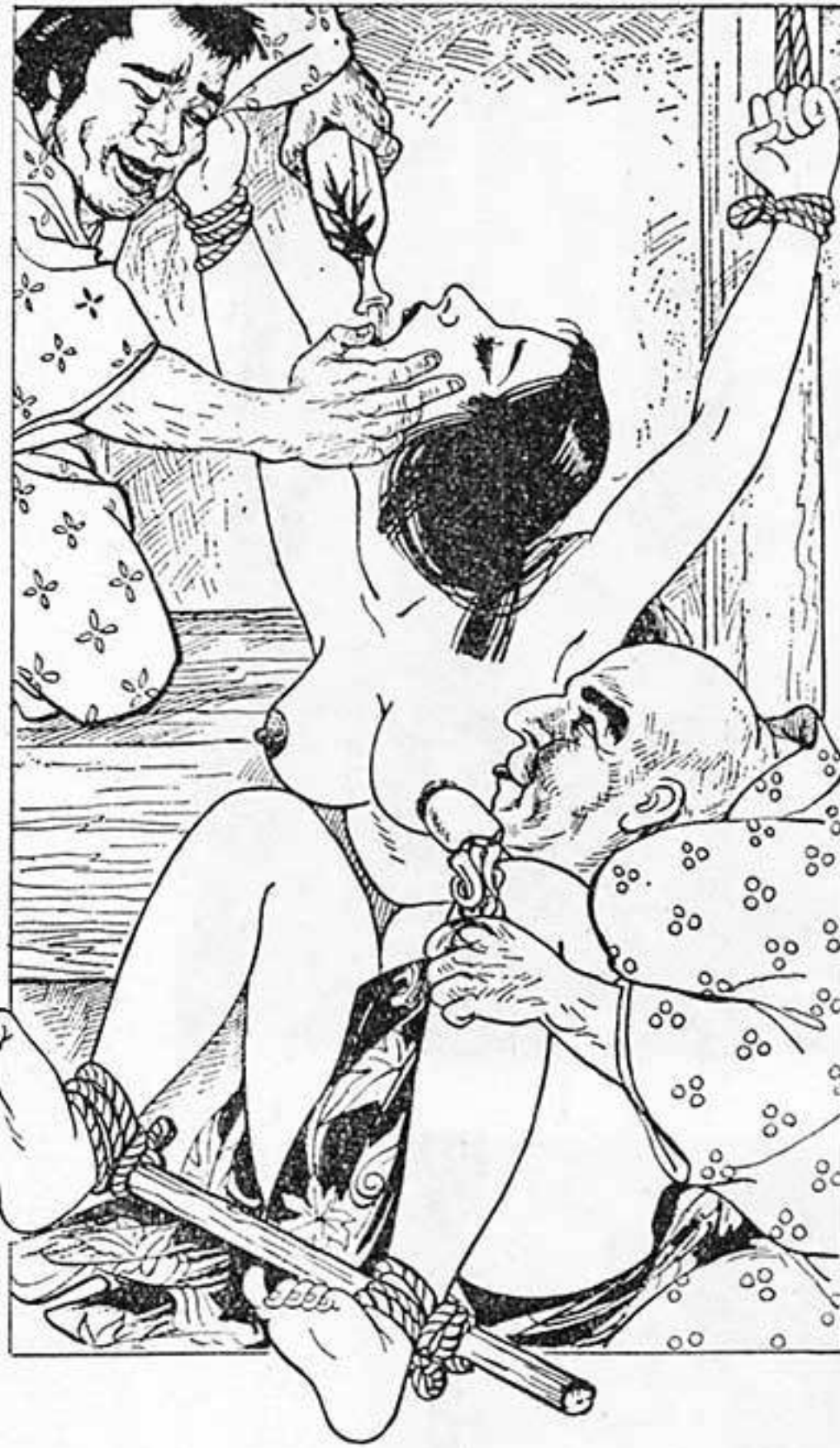
蘭

の

門

(18)

カット・岡たかし



風 流 極 道 軒

美なるが故に望まれ、
麗なるが故に求められる。
柔肌の深き縄目にこそ、
魅惑の美宿るを知れ。
粧いよりも、媚よりも。

のなかにおさめるほかはなかった。

許しを請うて、はい、そうですか——とひ
きさがってくれる相手では到底なかった。

斑猿の手にした大蠟燭が、千登世の「八」
の字にひらかれた太腿のすれすれに青白い焰
をのぼし、

「ム、ムッ、ムウ……」

失心したように身動きひとつしなかった千
登世が、その熱さに五体を急に、けいれんさ
せはじめる。

「や、やめて。千登世さんを責めるのだけは
止めてちょうだい！」

「フッフッフ。早くお前さんが、スッ裸に
ならねえからさ」

斑猿がニタツと笑い、なおも焰を一糸まと

真紅の湯文字

お景は、絶対絶命の立場に追いつめられて
いた。

手の指が、そおーっと湯文字の紐にかかる。
(ゆ、ゆるして。もうこれ以上は、堪忍して
ちょうだい！)

なんだか咽喉もとにこみあげてくる哀訴を
お景は、鉛の塊りでも呑みおろすように肺腑

元禄屋、鞭兵衛
青蛇、斑猿、白豚
と男は五人——そ
のまんなかで、湯
文字をすすんで取
り去らねばならな
い。
「ア、アッ……」
悲しく喘いだお
景のしなやかな右

わぬ千登世の肌に、おしあてていくのであった。

「な、なるってば！ は、はだかになると言っているのよう！」

悲鳴に似た声をあげたお景は、湯文字の紐を慄える指で解いていく。

ゴクリッと白豚が、生唾をのみこむ。

青蛇の病的に青白い顔が興奮にひきつる。

鞭兵衛がよりちかづこうと一膝のり出す。

と――

淫らな静寂とよぶほかは形容のしようのない気配が濃い霧のようによどんでいるこの八畳ほどの拷問部屋に、フワァーッとかすなきぬずれの音がして、お景の下半身をつつんでいた真紅の湯文字がすべりおちたかとおもうと白磁をおもわせる裸身が、秋の名月のように、うかび上がった。

なんとも云えないどよめきが男たちの口か

前号まで――貴子が日本橋の本宅で責められている頃、麻生の元禄屋の別邸に捕えられた怪盗・徳夜叉の情婦である小紫のお景は、豊太閤の遺宝をめぐる戌夜のロザリオの秘密を吐けと羅卒の鞭兵衛たちに拷問をうける。

ら洩れるなかで、皎々と輝く女体が、湯文字のあとを慕うかのように床に崩折れる。

「起て！ 起ったままで、じいーっとしておれ！」

激しい叱声は正面の脇息による元禄屋の口から、とんだものであった。

「ハ、ハイ……」

お景の唇から素直な言葉がとび出したのも裸身をさらけ出した女の悲しいさがであろうか。着物を身につけておれば、八つ裂きにしてもあきたりぬ仇敵、元禄屋の命令などをうけつけるはずもないものを――。

一糸まとわぬ赤裸に剥がれてしまったという身をきるような悲しさ恥かしさが、小紫のお景ほどのおきやんな女の心をも打ちひしいでしまう。

無防備感――なにひとつ支えるものがなくなってしまうという空虚さにさいなまれながらお景は、云われるままに身をおこす。

左手で胸もとをおおってはいたが、ふっくらした双つの隆起は扇のようにひらかれた五本の指のすきまから、いやおうなく零れ、下腹にしっかりとあてがわれた右の掌は、嵐の襲来を脅えるように慄えていた。

「このまえよりも肉がついたようだな」

「いや、同じだよ。あの肩の肉から、おっぱいのふくらみ……ヘッヘッヘッ、まったく変わったっちゃあいねえぜ」

「いや、やっぱりすこし太った感じだ、あの臀のふくらみといい脇腹といい、そうだな、一貫ほどは肥えたんじゃないかねのかな」

「栄養のよかったせいかな。それとも亭主の徳夜叉に可愛がられて、脂がのったのかもしれないねえな」

興奮しきった顔で淫らな会話をかわす白豚たち――以前に捕えて、裸吟味にかけ、責め折檻を加えたときに較べて、いくらかお景が肥えたというのである。

「そうだな。青蛇のいうとおり少しは太ったようだが、それでちょうどよくなったのじゃあないのかい。ぜい肉ひとつないひきしまった駄だったからな、あの時は」

眼を細めて鞭兵衛が結論を下すように云ったとおり、お景はここ数カ月のおいだで一貫目とは云わないが、七、八百匁は肉がのってきたことを自分でも気づいていた。

「やせた女よりも肥えた女のほうが色気があるというが、肥えたといっても豊香のようなブヨブヨには、ほどとおい。こいつは、縄掛けが、たのしみになってきたぜ」

青蛇が、青い縄の端でお景の肩をバシバシと打ちながら云う。

豊香というのは、いま、お景を責める毘として丸柱に縛りつけている千登世の養母で公儀御用櫛師春田和泉の女房。別棟の土蔵に監禁して月夜、魘りものになっているが、青蛇のいうほどブヨブヨに肥えているわけではなく妖艶な魅力を発散させる大年増である。

「豊香と較べちゃあ、お景姐御が哭きだしまずぜ、青蛇の兄貴。色といい艶といい大江戸八百八丁にこれほど佳い女は、いませんよ。第一に、この肌の匂い、このほくろ。懐かしいじゃあござんせんか」

鼻をふくらませた斑猿が、右の太腿のつけねの小さな、ほくろに触る。

「さ、さわっちゃあ、いけないよう！」

「なにをいってやがる。触らなけりゃあ縄をかけることもできねえぜ。ほれほれ、両手をうしろに回しな」

斑猿が、下腹をおさえているお景の右手の肘のあたりをつかまえようとしたとき、

「待ちな」と鞭兵衛が声をかけ、「まず挨拶させようじゃあねえか。スッ裸のまままで責め折檻をよろこんでおうけしますと、そのかわいい唇で云ってもらおうとしようぜ」

「そいつはいい。さすがは親分だ」

白豚、奇妙なことに感心したようすで、

「お景姐御。さあ親分も、ああいつていらっしやる。小笠原流の三つ指ついて、ひとつ仁義をきっていただきやしようかね」

裸にして躰をもてあそぶだけでは、ものたらず、心まで責めさいなもうという男たちの提案に、お景は怒りで胸がいっぱいになり、（妾は、ほれ、こんなに裸になったんだよ。煮るなど、やくなど勝手におしよ）と啖呵が口もとまで出かったが、すぐそばで無残な姿をさらしている千登世をみると、云いたいこともグツと抑えなければならなかった。

千登世さえいなければ、縄をとかれた瞬間に、部屋の間隙にある刀を奪いとり、八重垣流小太刀、免許の腕を振って白豚たちを、たたき伏せ、この場を脱出することも不可能ではないお景であった。

それだけに、なおさら男たちのいたぶりが身にしみる。なぜ、妾が、挨拶しなければならぬのか……。

（畜生ッ！）

長い睫毛をピクピクツと、またたかせて唇をかみしめるお景に、

「いやとは云えないよなあ、姐御。俺たちの

命令にさからうと、あの娘が穴焙りにあうのだものなあ」

青蛇が、いじのわるい追い打ちをかけ、「こう言やあいいのさ、こう言やあ……」

青白い顔をお景の頬にすりよせると、なにごとか、ひそひそと囁きはじめる。

豊満な躰を縮めるようにして、立ちすくんでいるお景の耳がポォーッとあかくそまり、それが美しい顔全体に及んでいく。

「いやだよ。そんな！ そんなことを誰が云うものか！ 女、女の身で、そんなことを、どうして口から出せるというのさ！」

「フッフッフッ、しゃべるさ。きつと、しゃべらせてみせるさ。なあ、斑猿」

「青蛇の兄貴、もちろんでさあ」

どうやらお景の拒否の意志が堅いとみた斑猿は、さっそく五百匁蠟燭に火をともし、

「ヘッヘッヘッ、どうしても千登世をかたわにしてえらしいな、姐御。よろしい、かたわものにしてやりましょうぜ」

今度は、どうやら真剣にそう思っているらしく、手足の長さに較べて異常に小さな頭をふりたて金壺眼をギラギラさせると斑猿は千登世の太腿を抱えこむようにして、二寸も燃えあがっている蠟燭の焰をあてがっていく。

「ム、ム、ムムム……」

またもや迫ってきた灼熱の焰をうけた千登世は、顔を恐怖にひきつらせて、けだもののような呻きをあげる。

鹿の子絞りのしごきで猿ぐつわをはめられているその姿は、これが江戸は日本橋で一、二とうたわれた小町娘かと思われるほど無残きわまるものであった。

チラッとその姿を視野におさめたお景は、
「ま、まってちょうだいよう！ まってちょうだいってば！」

肺腑のそこかしぼり出した悲痛な叫びであった。

「ま、まって、まって！ 妾が、妾が……」

「妾がどうする。フッフッフ、云われたとおりにするんですかい、姐御」

蠟燭のうごきをとめて、ふり向いた斑猿に
「言うからさ。お前さんたちの云うとおりにするからさあ！」

全身の毛穴という毛穴から血がほとばしり出るような口惜しさをこめて絶叫するお景の糸まとわぬ裸身を、格子窓からさしこむ秋の陽が哀れにも美しく照らし出す。

あられもない挨拶

この天保の頃の女は、ミニスカートやトップレスで街々を闊歩したりヌードになることに抵抗をべつに感じない、いまどきの女とは違い、人前に肌を曝すことを極端に恥じた。腕は肘が見えただけで、脚はふくらはぎが見えるだけで、もう羞恥に顔を真っ赤に染めたものである。ましてや人一倍、羞恥心の強いお景にしてみれば、いま五人もの男たちのまんなかで裸身をさらしているだけで死にまさる屈辱であり、身をきられるようにつらい。

その狂おしいほどの懊乱と必死でたたかいながらお景は、青蛇に命じられるまま、床の上に正座して三指をつくのであった。

「さあさあ、挨拶してもらおうじゃあないかい、姐御。フッフッフ、いったい、これから俺たちに、どうしてももらいてえんだい」

斑猿が黄色い、はぐきをのぞかせると、
「そりゃあ、俺たちに骨の髄まで、かわいがってもらいてえ。せんのように、たらい回しにされてヒイヒイ哭かせてもらいたいとおっしゃるに違いないさ。ねえ、お景姐さん」

白豚が、からかう。

(畜……生！ ひとでなし……)

奥歯をグイッと噛みあわせて怒りと屈辱に耐えながらお景は、ふかぶかと垂れていた顔をあげて元禄屋を、ふり仰いだ。

そして何度か、わななかせてのち、朱い唇を、いましも開こうとしたとき、

「姐御。もう少し、股をひらきな。女が挨拶をする時は肌倉をひらくものと決まってるぜ」

お景をかこむ男たちは二尺と離れては、いなかった。だから青蛇が意地悪そうに、こう呼びかけると、その息が崩れかけたばい・鬚に触れてお景は、もうそれだけでゾツとする。

「兄貴のいうとおりだ。そんなに膝小僧を合わせていたのじゃあ固苦しくっていけねえ。そうだな三寸、五寸……一尺、いや、二尺は開くこったな」

斑猿の言葉には、イヤもオウもなく開かせて見せるぜ——という、すごみがあった。

「ひ、ひどい……ひどいことを！」

怨みのこもった瞳を斑猿に向ける、お景で

あったが、一瞬、

「ア、アアア……」

と天井を振りあおぐと、

「こ、こう、こうすれば、満、満足するともいうのかえ」

なかば捨て鉢のような声を吐き出すと、三つ指をついたまま膝を左右にひらいていく。

五寸、六寸……一尺と、黝い床の上を大きな桃の実のような両膝が、よこに滑っていくさまは、妖しい光景であった。

「よかろう。まず挨拶をうけてやろうぜ」

指示されたとおり、二尺、股をひらいたお景の頭ごしに、鞭兵衛の声がひびく。

とたん、せきをきったように、お景が口ばしりはじめた。

それは少しでも早く青蛇に囁かれたハレンチな台詞を云ってしまい、屈辱から逃がれようという女心のせいであつたろう。が、そんな手にのるような男たちではなかった。

「ふざけるねえ！ それが仁義か、挨拶か！ おう、小紫の。女とおもって甘くしてるものだから、つけあがったのじゃあねえのか！

俺は、ゆっくりと、心から、ご挨拶、申しあげろといったはずだぜ！」

額に青白い血管を走らせた青蛇が、威丈高にドスのきいた声を、はりあげた。

「この調子じゃあ、これからあとが思いやられる。斑猿、かまうことはねえ。千登世の股倉を、焼いて焼いて焼きつくしちまいな！」

ニタツと笑った斑猿は、一瞬、顔から血の

気をなくしたお景の耳元に口をちかづけ、

「青蛇の兄貴を怒らしちゃあいけねえよ。俺とちがって、やると思ったら、とことんまでやる、おひとだからな。さあ早く、詫びを入れて始めからやり直すのだ。そら、早く！」

云われるまでもなくお景の心にも後悔の念が、すでにおこっていた。ここで男たちを怒らせてしまったのでは、まったく何のためにここまで恥を忍んできたのかわからなくなるではないか――。

蒼白な顔をそのままに、あらためて坐り直したお景は、「申しわけ、あ、ありませんでした……」と深々とあたまを下げると、あらためて、

「妾、妾は小紫のお景といい、この頃、江戸の町々を騒がしております不逞の盗賊、徳夜叉の女房でございます……」

と、哀しくも屈辱の挨拶を、やり直していくのであった。

「このたび元禄屋の旦那さまのお手に捕われましたことは、いわば身から出た錆でございますれば、つゆおうらみ申し上げるようなことはございません。それどころか妾は、こうして皆さまがたとお逢いできましたことを、このうえもなく嬉しく存じあげておりまする

ふつつかな妾ではございまするが、どうか存分にかわいがって頂きますよう、心からお願ひ申し上げます……」

と、ここまではどうにかすらすらというところが、ともかくも出来た。だが、

「元禄屋さま、それに鞭兵衛さま。妾は今までの罪の償いとして、こうして、こうして」

あとの「スッ裸」という言葉あたりからお景の顔に朱がさしはじめてくる。それでも、

「妾は、ス、ス、スッ裸になって、こうしてご挨拶を申しあげております。妾のス、スッ裸にされている姿は、お、お気に、はたして召しますでしょうか。お景は、お景は皆さまがたの、おいつけとあらば……」

やっとのことで云いすすんだが、
「お景は、みなさまがたの御命令とあらば、ち、ちぶさも、もも、腿も、お、おへそも、そ、そして……」

あとが、どうしても、つづかなかった。

青蛇の囁いたその三言は、女の身では到底口にすることはできない。

「ア、アウ……青、青蛇さん。ど、どうしても、どうしても云わなければならぬの」

気がとおくなるような気分でお景が、哀訴の眼差しをおくったが、かえってきたのは、

許容の言葉でもなければ、いたわりをこめた眼でもなく、いっそう冷酷無残な行動を命令する声であった。

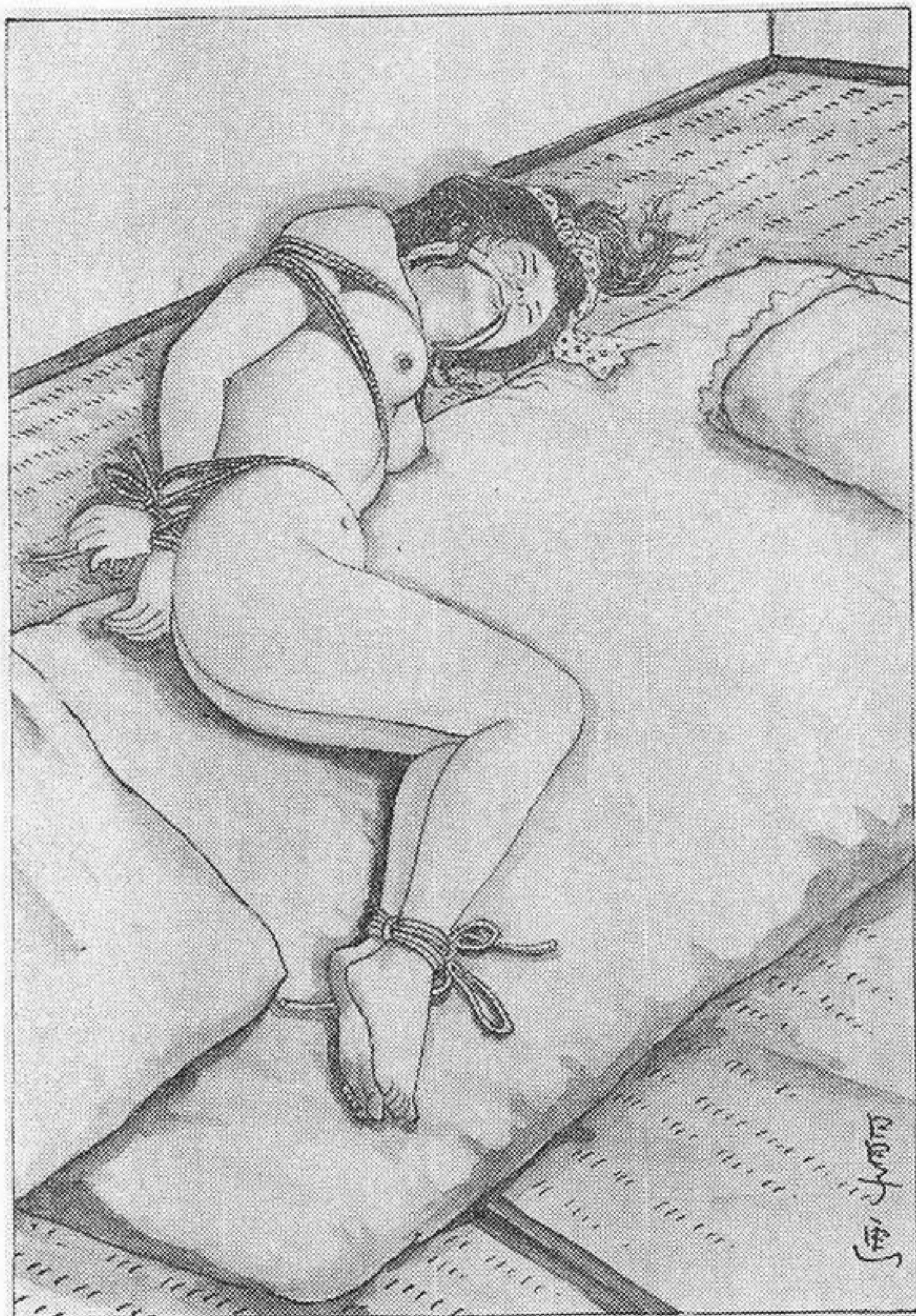
「お景、頭をあげて手を後に回しな。そう三つ指をいつまでもつかれていたのでは、かく

れて見えねえところもあらあ」

怒りをまだ残しているその口調に、さからうことは、できそうになかった。

「ハ、ハイッ……」

あわてて答えたお景は床から両手を離す。



イメージギャラリー 『風前の灯』 宮城昌子

「背後に回すんだよ、お縄を神妙にうけるときのようにさ」

再び怒鳴りつけられてお景の両手が、二度ばかり、ためらったのち、背後に回る。

両膝を二尺も離して坐り、両手を背後に回した女体は、妖しかった。

春田和泉の妻豊香のそのように大きくはなかったが、形のよい豊かな乳房が胸もとにもりあがり、その曲線が腰のくびれへと鋭角におちこんだかとみると、ぜい肉の少ないひきしまった双臀へと悩ましく滑りこむ。豊香を大輪のバラにたとえれば、お景は菊の花。それも嵯峨菊の可憐さと清雅さを、たたえた裸身と云えよう。

しかも白菊の懸崖をおもわせる太腿は、あられもなく「八」の字にひらかれており、稔り豊かなしげみが幽艶なたたずまいを見せて息づいていた。

しげみと云えば、二の腕のつけねからのぞいている腋毛もまた黒曜石でつくられたかのように、つやつやと輝いている。

「お景姐御。ヘッヘッヘッ、そんなかつこうでいてさ、恥かしくはないのかい」

白豚が、とっぴょうしもない愚問を発してお景の顔を、いっそう赤くさせる。

「ア、アアウ……は、はやく、こんな姿から解放されたい……」

齒をカチカチと合わせながら、お景は挨拶をつづけようとした。

「妾の妾の……妾の……」

三度、くり返したが、またここで絶句するほかはない言葉……

「ア、アアウ……ア……」

顔を赤くしたり蒼くしたりしながら、なおもためらうお景に、ついに斑猿が、

「お景姐御。×××って言いたいんだろ！」

と業をにやしたように叫んだ。

「そうだったのかい、こいつは面白えや。さあ姐さん、言ってみなせえ。そのかわいい唇で、×××と発音して見なせえ」

白豚までがかさにかかって、からかい始めはては、ひとひざのり出すと、内股に手をのばそうと身構える。

それをチラッと見たとたん、お景は、燃えたぎる石炭のかたまりを吐き出すような気持ちで、「妾の×××……を、どうか、かわいがってやって下さいまし……」と口にしてしまった。

「云えたじゃあねえか。フッフッフ、それでこそ小紫のお景姐御だ！ さあ、次は、次

はどうする！」

「妾の……」と、ここでまた、ためらって、ゴクンと生唾をのみこんでから、「そ、そのまえに、妾が……」

もう何を云っているのか自分でもわからないうというように、お景は青蛇に羞恥にもえる視線をおくる。

次に青蛇が命じていることは、さらにいっそう彼女を羞恥地獄に追いこむであろう台詞であり、動作なのだ。

が、青蛇の青白い顔には何の変化もなく、かたわらの千登世は、息も絶え絶えのありさま――。

「青蛇さん、恨みますよ。一生、恨みつけるから……」

すすりあげるように云ったお景は、全身を悪寒にでもかかったようにけいれんさせると「妾は、みなさまがたに拷問されるのを楽しみにいたしております。神妙にいたしますゆえに、どうか思いのままに妾の躰を賜りものに……なぐさみものにして下さいまし、お願いいたします。そ、それから、そのお礼までに、妾は、……」

ここからが血の逆流するような言葉であったが、お景は、結局、口にしてしまう。

「妾を賜りものにして頂くお礼として、こ、これから妾は、みなさまがたの×××改めをよ、よろこんでお受けします。ど、どうか妾を、かわいい女になされてくださいまし……」

「ヒェッ！」と奇声をあげたのは白豚であった。女が、すすんでお改めをうけたいというのである。

「こ、こいつは面白え。さあ、姐さん。とっくりと改めてさしあげますぜ。早く、早く見せてくだせえ！」

スットン狂な声をあげた白豚が、床に額をすりつけるようにして、覗きこもうとすると斑猿も負けじと、これにつづく。

「な、なにをするのさ！ そ、そんなにあわてなくたって、すぐ、すぐに……」

あとは言葉にならなかった。お景がおもわず背後に回していた腕をまえに回して、二人の頭を押しつける。

「フッフッフ、菊の花の匂い……たしかに姐御。嗅がせてもらいやしたぜ」

「ヘッヘッヘッ……」

淫らこのうえない笑いをうかべた斑猿と白豚は、青蛇の持ち出してきた文机に純白のしみひとつない白絹がかけられているのを指さして意味ありげに、うなずきかわす。

正面、南蛮渡来の真赤な酒をギヤマンの盃について飲んでいた元禄屋が、満足そうに咳払いをすると鞭兵衛もまた、七尺ゆたかな巨軀をゆすって、お景の次の身動きを眼を皿のようにして見つめるのであった。

最後の抵抗

ひとりで、いたずらしたことはなかった。

触れるのは日に二度か三度、小用を足したあと静かに紙をあてるくらい。湯浴みのときも柔らく拭うだけで、自分では、どうなっているのか、さだかに知るよしもなく、ただ女にとっては生命よりも大事と、尋常一様の女と同じように扱って今日まですごしてきたお景であった。

それが、いま――。

夫の徳夜叉にさえ、あからさまに見せたこともないのに、想像もできないやりかたで、自分からすすんで女改めをしてもらわなければならぬ！

お景の心のなかには、筆舌につくし難いものがあった。

「早くやらねえか、お景！」

青蛇が、じれったそうに叫んだが、その声

は、あきらかに、うわずっていた。

白絹でおおわれた文机の上に腰をおろし、両足首を斑猿と白豚に握られているお景は、やっとなおもいで上半身を起こしながら双の手で乳房を覆っていた。しげみを隠す動作はもう、いまとなつては、かえって、はしたなくさえ思われる。

（女だったら、だれにでも、あるものでもの……）

並み外れて濃いと、いささか浅草や品川の銭湯で気恥かしく感じたこともあるが、逃がれ得ぬ今となつては、それどころではない。ひんやりと忍びよった冷気のなかで、お景のまわりだけが、なまあたかく艶めいた気合いを漂わせる。

「開いて見せると云ったぜ、姐御！」

右足首をしっかりと握った白豚が、ななめ下から見上げて催促すると、斑猿が左下から「姐さん。遠慮することあねえぜ。一度は俺もお邪魔して楽しませてもらった仲だ。さあたっぷりを見せてもらいましょうか」

手をのばすまでもなく、眼と鼻のさきだといふのに手出しひとつしないのは、あくまでもお景に、自分でひらかせてみせるつもりらしい。

「ア、アッ、アッ……」

両脚を抱えるようにした二人のやくざと、顔をつっこまんばかりにしている三人の男たち。

お景が狂おしいばかりの懊乱に達したのも無理はなかった。

が――万事休す！

ほっそりしたあごをあげ美しい眉をひそめたお景は、乾ききった唇をあえがせた。

――いまはそれ以外にどんな方法があるろう。鞭兵衛たちは「絶対の権力を行使する男」たちであり、お景は、みじめなひとりの女囚であるにすぎない。

「もっとよく見えるようにしなよ！」

むんむんする匂いを嗅ぎながら、青蛇がお景をみあげる。

「姐さん、左手だけじゃあダメですぜ」

「姐御、その小指を右にまげて、そう！ いや、中指を立てて！」

斑猿や白豚がなんか云うたびに、つばきが淡い桃色にそまったお景の太股のうらがわにとび散る。

「ア、アッ！ もう、もう許して頂戴！ お願ひ。妾……とても、とても」

なきじゃくるような声をあげたお景は、突

然、眼の前にうかび上がっている男の横っ面を力いっぱい、ひっぱたいた。

「い、い、いてえ！ イテ、テテテ……」

おおげさな悲鳴をあげたのは、白豚であった。平手打ちを喰ったとたん、掴んでいたお景の右足首が、はなれる。

「な、なにをさせるのさ！ 大の男がよってたかって、かよわい女一人を！」

自由になった右足で、さらに一人の男を蹴上げようとした刹那、

「おっとどっこい、小紫の。ここで暴れたりしちゃあ、身もふたもなくなるってもんじゃあねえのかい」

青蛇の冷たい声とともに再びガツチリと右足首がマンリキのように締めあげられ、惨めに真横へと引き裂かれていく。

「ア、アッ、な、なにをするのよう！」

金切声をたてて両手をふり廻すお景を、背後に回った鞭兵衛が、松の根のような双腕で上半身もろとも羽交いじめにすると、

「騒ぐんじゃあねえ、お景。何度いってきかせりゃあ、わかるんだ。千登世が、ほれ、見てみなよ。あのように、責められてるぜ！」

お景が、いくら八重垣流の小太刀をつかうからといっても、七尺近い巨漢の鞭兵衛に締

めつけられてはひぐまに抱きかかえられた白兎ほどの抵抗もできない。

それでも、せいっぱい、もがきながら、チラッと千登世をみやったが、

「ア、アッ。ち、ちく……しょう！」

悲痛な叫びとともに唇の端を、かたく喰いしぼる。

そこには無惨な光景があった。

直径一寸五分ほどの巨大な蠟燭は、すでに殆ど、その姿が見えなくなっていて、青蛇が病的に蒼白い顔をひきつらせて、今度は、竹槍をもち出しているではないか！

お景があまりの屈辱にカアッとなっているあいだに、青蛇が焰の点っている蠟燭を、こともあろうに……。

そのうえ、さらに竹槍までも持ち出して、日本橋小町と謳われる乙女の肉体を責めさいなもうというのか！

「鬼！……人非人！……ち、ちく生！」

地の底から洩れるような呻きを発したお景は、髪の毛の一筋一筋が逆立つような恐怖のなかで、鞭兵衛たちの命令に従うほかはないと口惜しくも心に誓うのであった。

「千、千登世さんには、もうこれ以上、ほんとはなにもしないです……お、お願い……」

あわれな声とともに、ぐったりと全身の力を解いたお景の耳元で、鞭兵衛が、

「何度も世話をやかせるものじゃあねえぜ、お景姐御。フッフッフ、暴れた罰だ。それに白豚の顔をなぐった罪もある。さあ、さっきのつづきだ。やってみなせえ！」

有無を云わさぬ口調であった。

哀しくも頷くほかはない、お景を眺めた鞭兵衛は、斑猿や白豚にも合図して、お景から離れさせると、満足この上ない顔つきで、

「女のお前さんでも、一度や二度は、やったりに聞いたりしたことがあるだろうぜ。さあ、やって見せな、この真白い布の上でよ。俺たち、たっぷりと眺めさせてもらうから」

白豚、斑猿につづいて、鞭兵衛も離れて、一尺高い文机の上で、ひとりになったお景。

両手も両足も自由になったとは云え、どこかくすことも許されず、しかも、これから、女としてこの上なく恥かしい痴態を演じなければならぬ。

「ち、ちく……しょう……」

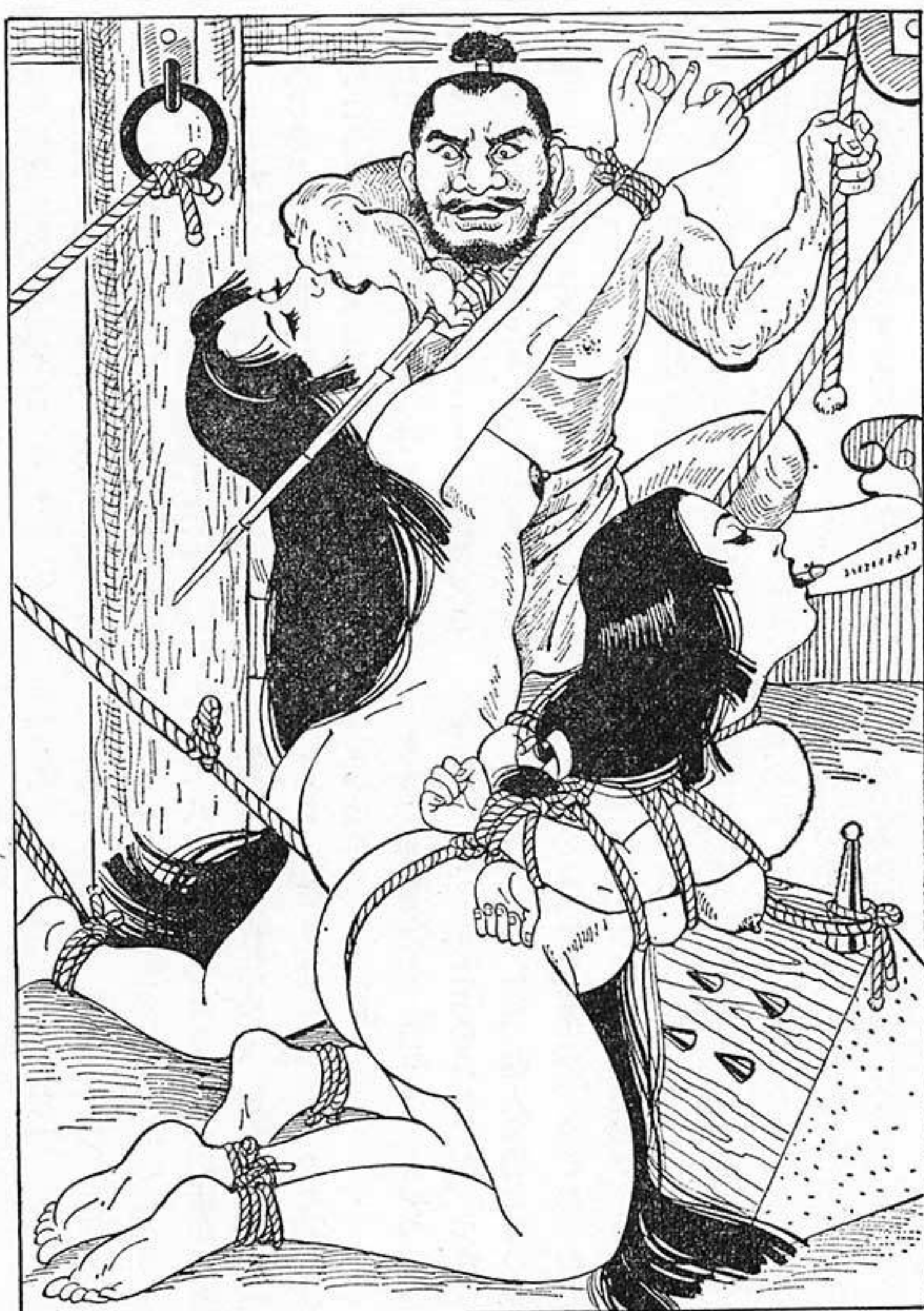
まなじりを切らんばかりに見開いて五人の男たちを次々に見回したお景は、じいっと二呼吸、三呼吸、心をおちつけていたが、やがて覚悟したように、ながい睫毛を、しっかり

と閉ざした。

ばい・齧をふりみだし、あごをあげ、鼻孔をいくらか上向かせたお景は息をつめ、淫らに血走った眼を皿のように見ひらいて、毛一筋のうごきも見のがすまいと見つめる青蛇、白

豚、斑猿……。

むんむんする女体の匂いが、肌のほのかな温かさとともに拷問部屋にたちこめてきて、女にかけては百戦錬磨の鞭兵衛までが、われを忘れたように見惚れた。



……イメージギャラリー……『くの一詮議』……岡 たくし……

限りなき凌辱

だが——ひとり、どんなときにも自分を見失わない男が、いた。

正面、悠々と脇息によって血のように赤い南蛮渡来の酒をギヤマンの盃から傾けている元禄屋である。

いましも、お景の屈辱が頂点に達しようとするとき、突如、鷲のような眼を光らせて大きな声を、はりあげた。

「お景、白状せい！ 戊夜のロザリオは、どこにある！」

すべて勝負は、相手の虚をつくか否かによってきまる。尋常一様の拷問では屈服しない女であることを知っている元禄屋が、お景の虚を狙った賭けであった。

たとえどのような女にせよ、このような恥かしめをうけている最中であれば、必ずスキを見せるものであり、無意識にちかい状態で加虐者の質問に反射的に答えるものである。

お景も、さるものであった。恥辱このうえない状態にありながら、元禄屋が突如、投げかけた罠には、かからなかった。

呼びかけられた瞬間、しっかりと閉じてい

た臉を、ピクピクツとふるえさせて、胸の双つの隆起を波打たせたが、やがて、うるんだ瞳をひらいて元禄屋を見やり

「この小紫のお景、たとえどんなことがあっても、それだけは決して白状いたしません。お景にも、女の意地がございますもの」

さきに捕えられ責め折檻されたときの光景が、ありありと、お景の臉にうかぶ。

（あのときは、徳夜叉さまの隠れ家を白状させられてしまったけど……今度こそは、この身が、こまぎれにされようと……。徳夜叉さま、お景は、この身をどんなにされましようとも決して……。ご安心、なさって……）

だが、現実はい！

鞭兵衛一家の男たちの吐く息が、太腿に、肩に、脇腹に、かかってくる。かたちのよい乳房が揺れ、そのさきのぐみの実のような乳首に斑猿の黄色い、はぐきが迫る――。

白豚のあごが、もうすこしで柔らかな肉を秘めた肩に触れそうになり、青蛇の視線が、ねっちりと、大きく開かれた内股に、からみつく。

「あ、あッ！ ほ、ほんとに、恥知らずな、まねをさ、させるのね。アッ！」

齒ぐきを哀しげに鳴らしながらお景は、野

卑な言葉を投げかける白豚たちの要求に、こたえていくのであった。

「そらッ！ しっかりやんな」

ためらうお景の、ほっそりした手首を握って、力を加えさせたのは誰であつたろうか。

七、八本のむくつけき男どもの手が、お景の前面で入り乱れ始めて、彼女はまるで「あやつられ人形」のようになり、ただ悲しげな呻きが洩れる。

もうお景自身にも、自分を、あやつるべくむらがっている男たちのみわけが、つかなくなってしまう。ただ、四人の男たちの頭が黒い西瓜のように胸もとで、うごめくの間を見ているうちに、フウーツと意識が、うすれていくのではないかとさえ、感じられる。

そのなかで、右手だけでなく左手首も、別の男の逞しい腕で、がっしりと捉えられたがその自分の手でさえ、自分のものかどうか疑わしくなる時間が過ぎていく。

冷え冷える秋の宵闇が、もうそこまで迫っていたが、ここ拷問部屋にだけはムンムンする熱気がたちこめ、けなげな抵抗をつづけるお景の妖しいまでに美しい姿を牢格子からさしこむ落陽が、あかあかと、てらし出す。

（愛いやつよ。敵ながら、あっぱれな女。徳

夜叉も立派な女房をもったものじゃ）

どこまでも意地をはりとおしているお景の姿に、元禄屋は感じ入る。

（この女、飼いならして儂の女にすることはできぬものか……）

自分のしかけた相手の虚をつくという心理的な罠をみごとにかわされたにも拘わらず、真赤な酒の入った盃を目八分にあげて、お景の殊勝な女心に敬意を表すかのように乾盃する元禄屋。

やがて――、

「お景。穴沢流綱渡りの艶技、みごと受けてみせるか！」

鞭兵衛のドスのきいた声が、汗ばんだお景の肌、ねっとりとして、からみつく。

穴沢流綱渡り――それは、どのように、おぞましい責めであろうか。

お景の横顔に、一条の光を投げかけていた夕映えが、フツとかき消すようになくなるとあとは、裸蠟燭のあかりが、陰惨な牢格子を照らし出す。

裸蠟燭のあかり。それは――

お景の、白菊の花にも似た柔肌を、鬱金色にひときわ、きわだたせるのであった。

――（つづく）――

続々・ふるーい奇ク

残酷の中の甘美な世界

花田一郎

フォト・中河恵子



「ふるーい奇ク」三部作で、女性美の極致の三つの断面を追求する。一回目では、拷問を

色作。

解放されたばかりの一群の黒人奴隷を追跡

受ける女性美として大塚啓子の鞭打ちを取り上げた。二回目は処刑される女性美として、同じく彼女のほりつけを描写した。今回は三回目である。

「ブラック・ライダー」という西部劇が話題となっている。主演の黒人・ガンマンと監督が同一人物という異

する悪徳白人の一隊と、黒人ガンマンとが死闘を展開する。わき役の、イカサマ牧師（白人）の存在が面白い。彼は、はじめ黒人ガンマンの居場所を白人に通報して、五百ドルにありつこうとする。

ところが悪徳白人の一隊が黒人の群れを襲い、多くの死人と目をおおう財産の被害がある。悪夢の夜が明けて、ひとりの男が馬上に女をかかえて戻ってくる。女は黒人であるが色も、さして黒くなく、器量も白人でも惚れるくらいである。右のあごに、ひどいアザをこしらえ、べつにやつれてもいないのに、瀕死の病人さながらの呼吸をしている。二、三人の男が、彼女を草の上に、そっと下ろす。

イカサマ牧師の気が変わる。彼は黒人ガンマンと協力し、白人の一隊と闘い、黒人奴隷を守り抜く。この映画の感想として、たいいていの人は、イカサマ牧師の「義憤」というだろう。本当にそうだろうか？ イカサマ牧師が「義憤」くらいで生命を張るものだろうか？ この一文は、この問題を追求する。

イカサマ牧師が生命を張ったのは、その美人の黒人女が二十人もの白人に輪姦される空想を描き、その空想図における彼女の美しさに惚れたからである。

輪姦のあとの美しさとしては、ショロホフの「静かなドン」の中の描写は、さらに美しい。

輪姦そのものについていうと、それは女にとって最大の災難であると同時に、見果てぬ夢である。本誌で中河恵子は、部屋のいちだん高いところで、股を開かされて撮影されるときの晴れがましさを告白したし、前田真知子も、同じ喜びを語っている。その写真を、数万の視線が、情け容赦なく刺し貫ぬくことを思うと、彼女等の喜びは、この見果てぬ夢の達成の歓喜を謳っている。

二十年前の奇クは、まだ赤裸々には、この喜び、この美しさを語らなかったが、その原形は見事に展開されていた。

誕生したところの奇クの誌面を飾ったヒロインは古川裕子であった。彼女は写真のヒロインではなく告白文のヒロインであった。一回目の告白は、サディストの夫によって、後ろ手に縛られ、犬の首輪と鎖で、コンクリートの地下室につながれ、アルミ食器で犬と同じ食事を与えられる。そして夫は出勤する。夕方、帰宅した夫は、折檻のために地下室へ下りてくる。折檻の理由はいくらでもあった。たとえば排泄物の始末。時には夫は抱きしめ

てくれることもあった。そんな刑が一週間くらの期間づく。古川裕子は、この告白文によって、長期刑という概念を奇クに導入した。また、罪の重さによって違う色の囚衣を着せられて処刑されるという、多彩なプレーも紹介した。

その夫が交通事故で他界し、裕子は未亡人となる。二回目の告白文は、亡夫の友人のすすめでショウに出演した物語である。当時、奇クに論陣を張った人々は、一回目の長期刑の告白の甘美さにくらべ、この物語は、あまりにも残酷で、サド・マゾ趣味の甘美さを逸脱したものと指摘した。私は逆に、この二回目の告白文を高く買った。三回目以降の告白文は見劣りするのでは、はぶく。

「ふるーい奇ク」最終編のこの短文では、中河恵子や前田真知子の太たんな告白を踏まえ、二十年の星霜が要求する書き加えをして、この古川裕子の二回目の告白文の残酷シーンをもっと刻明に復原してみよう。私は古い奇クを手もとに持っていないが、古川裕子の二回目の告白文の中のセリフは、ほとんどソラで記憶している――。

――開演の時間が迫る。楽屋で、後ろ手に縛り上げられた古川裕子が、ソファアの上で、

おののいている。着衣はパンツ一枚。

主催者兼出演者の亡夫の友人が、金属製の器具を持って、楽屋の戸口に現われる。

「さ、奥さん。そのかわいいあんよに、これを、はめましょ」

足かせである。やがて開演のベル。亡夫の友人に縄尻を取られて、古川裕子は足かせに自由を奪われ、ヨチヨチと舞台に登場する。舞台正面の裁判官の前に進むまでに、彼女の背中に、歩度をせかせる亡夫の友人の鞭が、二回、さく裂する。

客席の男性客は、二十人だったか三十人だったか、はっきり覚えていない。客席の最前列に七、八人の女性客が陣取っている。（こういう女性客は、二十年後の昭和四十七年に住むほうが、はるかにふさわしい）

裁判官の前に、ひざまずかされた裕子の首筋を、Yの形をした杖が、舞台の床にまで、おさえつける。

「裏切り者を捕えて参りました。本籍は山梨県……郡……村字……本名、古川裕子」

裕子は、もだえる。約束が違う。本名は出さないと云っていたのに――。

鞭打ち台が持ち出される。四角な板の上に受刑者の首を固定するための低い板製の、つ

い立てがある、おなじみのもの。裕子は裁判官の方を向き、客席に尻を向けて、足首まで鎖で固定される。最前列の女性客に鞭が一本ずつ手渡され、亡夫の友人が、裁断用のはさみで、裕子のパンツを切り取っていく――。

鞭打ちのシーンを、裕子は告白の中で、

「鞭が鳴る、鞭が鳴る」

とだけ、述べている。

鞭打ち台から解かれた彼女は、舞台のすみにしつらえられた小部屋へ連れていかれる。現在風には、ふたりの看護婦が運ぶのが、ふさわしい。ふたりに両肩を支えられ、両足をひきずって、裕子はこの部屋に入れられる。現在風には、この小部屋は、コルクを用いて防音であるとよい。

この小部屋のテーブルに、仰向けに縛りつけられ、裕子は、残る男性客から、かわるがわる祝福を受ける。その状態を、裕子は告白文で、

「ああ、あたしは娼婦なんだわ。あたしは娼婦なんだわ」

と伝えている。この情景にペンを入れる。ひとりの客が彼女を祝福する時間を八分、部屋の掃除などに休憩を二分ずつ入れると、客数が二十人であれば、祝福に要した時間は

三時間二十分であり、客数が三十人なら、五時間！ だったわけである。もちろん順番を待つ間、客のひとりひとりには「奇ク」の最新号が手渡され、しびれがきれないように配慮してある。

二分の休憩時間には、ふたりの看護婦が小部屋に、はいつてきて、ひとりが裕子の脈搏をみる間に、ひとり先刻の客が犠牲者を祝福した、部屋に残る不潔感を一掃し、次の客の祝福の膳立てをする。

一回の祝福が加えられるたびに、裕子を受けるダメージの深さは、ふたりの看護婦の目には明らかである。十数人の祝福を受けた裕子は、馬上から下ろされる黒人女と同じように、瀕死の呼吸をつづけている。てきぱきと次の祝福に備える看護婦のほうを苦しげに見やうと裕子は、きれぎれに、ささやく。

「助けて……あたしは……殺されるわ」

ひとりの看護婦が裕子の顔面に、激しい往復ビンタをくわせる。その往復ビンタの動機が、嫉妬であることを、本誌の読者は理解するであろう。また、十八人目の客が、裕子の首を締めながら、

「いいか。信じないかもしれないが、ぼくは君と結婚する。ひとつ条件がある。このシヨ

ウに、あと四回、出演して欲しい。その間にぼくは地下室を座敷牢に改築しておく。五回目シヨウが終わったら、その場から君を座敷牢に、かつぎこむ。いいな」

と囁いたのも、読者は理解するだろう。裕子は、うすく目をあけ、苦しげに、かすかにうなずく。現在、進行しているこのシヨウは全く予期しない残酷趣味のものだった。あとの四回は、それを予期しての出演である。

長い長い祝福のあと、半死半生の裕子がテーブルから、看護婦に助け起こされる。強心剤を注射されながら、彼女は嘔吐する。亡夫の友人の、

「今から彼女は、昇天いたします」

という声とともに、劇場の天井で滑車がキリキリと鳴り、彼女の身体は、後ろ手のまま宙に浮かんでいく――。

少なくとも映画「ブラック・ライダー」にかい間、見える人の心の奥底は、ここまで追跡しなければ、正体は見とどけられない――この一文が誕生当時の奇クの、目次裏の美しい絵で飾られることを希望して、ペンをおく。

――（おわり）――

~~~~~ M 人 士 の 書 翰 資 料 ~~~~~

マゾの人達の手紙から

山下 利 男



カット・岡たかし

私が過去に文通したマゾの人達から貰った
夥しい数の手紙類は、風俗文献誌を標榜する
奇クにとっても、また多くの奇クの愛読者の
人達にとっても、興味のある貴重な資料だと
思いますので、ここに提供します。

○ 謹啓、お元気の事と存じます。大へん貴重
なもの、お送り下さいまして厚くお礼申し上
げます。全くすばらしい香りで満足致しまし
た。しかも未婚で幼稚園の先生とか、全くす

ばらしい香りで、恐らくその香りから処女で
はないかと推察致します。

おっしゃる通り、裏側のザラザラしたところ
が全く全く、すばらしい香りで一杯です。
どうかもう一度、御入手の時の状態をお話し
頂けませんか。その香りを嗅ぎつつ思わずエ
キサイトしオナニーをしてしまいました。

私の場合は、フト女便所に入り、ツボの中
から発見したもので、使用女性の年令等
不明ですし、恐らくその香りから処女でない
ことは確かです。処女の方のは香水のように
いやらしい香りがしません。

私の入手のものは、紙を小さく丸めてあり
未だ使用して余り時間が経ってないので、湿
り気がありました。恐らくまるく丸めて××
を拭いたものと想像されます。願わくば若い
女性の香り高いブロースが入手出来ないもの
かと思案しています。その内、きつと入手出

来ると思っていますので入手次第、お知らせ申し上げます。

どうか、お送り下さった紙の入手の状況をもう一度、ごめんどろですが、くれぐれもお知らせ下さい。そのお話を聞くことは何よりも、うれしいものです。私もその内、きっと、すばらしいお話を申し上げることが出来ると思います。

又、他に面白いお話をお聞かせ下さい。先ずは、とりあえず、お礼と、おねがいを申し上げます。敬具

(岡本 勉)

御手紙、有難う御座居ました。

独身とのことですが、性欲の処理は、どのようになさっているのでしょうか。女性と性交するより女性の性器の香気味覚をお求めになるほうがよろしいのですか。ただ、女性の股間に顔を埋めるだけで満足なさるのですか。女性々器の香味に酔いしれるあまり、男性として不能になることはありませんか。性交ばかりが性欲ではありませんから、不能状態になることもあるのではありませんか。

ショーツの汚れに就いての細かい観察は非常に勉強になりました。興味あることなので

熟読させていただきました。直接経験なさらないと書けない内容なので、汚れた下穿き類をどのようにして入手なさっているのか知りたくなりました。よろしかったらお聞かせ下さい。私の友達に、わけを云って汚れたパンティを買っている面白い奴がいますけれど。私のマニヤとしての生活は、迷文に書いた通りで、たいしたことはありません。私のほうが、ひとまわりも年下ですのでM傾向、特にCOに関しては山下様のほうが先輩のようです。自分の性傾向を、どのように処理しているのか、お教え下されば幸いです。

奇クの迷文をお読み下さって感謝して居ります。手紙はニガテなので、あまり書いたことはありません。編集長にも用件のみという始末で、礼をかいで弱っています。お手紙は大切に保存させていただきます。本当に有難う御座居ました。

五月卅一日夜

(芳野 眉美)

○ お元気のことと、拝察申し上げます。その後何か変わったお話は、ありませんか。

私、最近男性向きの性具を入手しました。ゴム製品で空気を入れ使用します。××を入

れるときワセリン、クリームを使用していますが、更に又ゴム管があり、先端にニギリがついていて、それをにぎりしめると、穴口がしまったり開いたりして、全く良い感じでした。××感一〇〇%です。

近ければお目にかけ又使用されたらと思いますが、遠いので残念です。価格も余り高くないのです。唯、私、使って見て、どうも、片手に持たなければならぬので、その点もどかしく、薄いふとんか毛布を丸めて、その中に性具を入れて、××を使って見るのですが中々うまく行かず、3度に1度は成功しますが、この点、物足りません。

貴男も、もう御経験はおありだとは思いますが、そこで私考えたのですが、町の洋装店で見かけるモデル人形が安く入手できれば、腰の部分を少し手をかけて、その部分へ性具をびったりさし込めば理想的だと思います。

あるゴム会社に頼めばダッチワイフを作つて呉れるそうですが、特別受注なので少々高くつくようです。でも一万円位出せば、かなり満足出来るし、携帯も便利なようです。唯、私の宅では置く場所が問題なのです。

ある雑誌に精巧なダッチワイフ(東京都内)を抱くの、一晩二千元のギャラを出すそう

ですが、希望者が多いそうです。何かよい工夫はないかと思ひます。

私、その性具を使う時は、汚れた巾をかぶり、最も臭い部分を鼻にあてがい楽しむのです。そして、出来るだけ可愛いく、美しい女学生の写真を眺め乍ら、うっとりとした気分になるのです。全くおはさしいようすが、何か変わった、これはと思う楽しみ方法があれば、お教え下さいませんか。

先日、ある女子高校で、卒業目前の女高生二千人数の集いがあり、是非トイレをと思つておりましたが、風邪のためチャンス逃がしまして残念です。又、私、最近、女装して見たくなりましたが、どうでしょうか。貴男は、そんな気持は起きませんか。何かスリルがあり、興奮するようです。

最近、クリーニング店の女店員と知り合いになりましたが、時々Pのクリーニングが出るそうで、何かのチャンスにたのみたいと思つていますが、うまく行くかどうか、案じています。又、最近、自転車に乗った女高生を見るたびに、その女の子のPは足ふみ毎に、こすれて良く汚れ、全くたまらない芳香だろうと、その女の子も又、快感にPを汚しているだろうと思ひ、たまらなく、そのPがほし

くなります。何とか入手できないものでしょうか。

では、今日は、これで失礼します。お元気で。お便りお待ちしております。

(岡本 勉)

○

お便り大変嬉しく拝読しました。同じM傾向の同志を内地で得たのは、はじめてで非常に心強さを感じました。通信にものせました様に真のサディスティンに巡り合うのが私の夢ですが、なかなか、その機会もなく、その様な時に同じ味方を得た様な気が致し、前途が明るくなった思ひです。

私自身、ラグビー、ボクシング等、国体選手をした程で、あらゆるスポーツで鍛錬し、(お互いに率直にぶつけ合ねば文通の意味がないので、つまらない謙遜抜きで申しますと)筋肉の発達した、ひきしまった体ですから、相手が見劣りする様では屈従し難く、矢張り貴方の申される様に大柄なグラマーでないと、その気になれません。

頂いたお手紙に従つて書いてみますと、私も身体に傷をつけられるのは反対です。ただ少々の苦痛なら歓迎で、鞭打ちも背中と臀部だけなら慣れると平気です。

女性排泄物については、貴方は小水のみとの由ですが、私の場合、固体にも興味があります。尤も量的に排便後舌で掃除する程度が限度です。何れも外地在住時代、フランス人の娼婦相手に経験あり、ムチ打ち、ハイヒールでの責め、便器代用、お臀の穴からボールの空気入れで空気を入れられる等、試みた事があります。

内地へ帰つてからはトルコ嬢を相手に、ほんの真似事のみで、こういうプロフェッションナルな相手は、どうしても失望を感じざるを得ない事を認識しました。やはり形としてはこちらが嫌がるのを、相手の好みで無理にやらされるといふのが理想で、相手が真のサディスティンであれば、逆にプロでもアマでも構わない訳です。

大体がコプロ傾向であり、貴方に一致した面が多い様に思ひます。お互いにプライバシーにはノータッチで御交際願ひたいのですが多少の予備知識がないと、年令も不詳、生活環境も不明では話が合ひ難いと思ひますので先ず私自身のアウトラインを申しますと、年令は今年で三十才、戸籍上は独身ですが、出身が東京では第一流といわれる官立大学の出で、電気関係の大会社に勤務、若い間に海外

へ出された位ですから、一応、出世コースに乗って居ります。

中学時代からスポーツ万能選手で、合宿生活ばかり体験して来た事から、性格はラフで気前が良過ぎるといわれ、Mと一見矛盾しますが極めて男性的とみられていますので、独身とはいいましたが、絶えず援助を申し出る女性に追いかけれ、現在もその一人と同棲中。但し相手は普通の女性で普通の性行為の対象でしかありません。相手が普通の女性では逆に私は極めて暴君的、といっても暴力をふるったり、ひどい事をするという意味でなく、Mとしての御奉仕どころか、食事の世話から洗濯、床の上げ下ろし等、面倒臭い事は一切、彼女まかせという事ですが、経済的にも助かるし、持ちつ持たれつといった合理主義の實行と、お考え下さい。

経済的には割と恵まれて居り、目途さえついたら、ゲイバーに対抗してM専用のバーでも開設したい計画もしています。尤も私自身が顔を出す訳にはゆかないので、まかせられるサディスティンのマダム、ホステスが何とか集まればの話で、自分自身の相手さえみつからぬ現在、一寸、程遠い話ではあります。ただM傾向の同志を集めてクラブを作りたい

希望はあり、読者通信でも呼びかけてみたい意向はあるのですが、文章が下手で賛同して貰える様な呼びかけが出来ずヘジテートして居ます。クラブを作れば情報交換も出来お互いに助け合う事が出来ますので是非やりたいのですが、サディスティンの相互紹介にしても、結婚の相手でもない限り互いに一時の悩みを、解消するのに役立てるだけですから、独占するより互いに交換しあって一人でも多くのサディスティンを知る事がM同志としての人生の楽しみであると思うのです。

そういう意味で、東京都内のサディスティンで、私の知っている人達でしたら、いずれもプロではありますが、上京の機会がありましたら、何時でも喜んで御紹介させて頂きます。ただ、私のそういった相手は、私がMとしてのみ交際しているので、普通の性行為は絶対に承知してくれませんし、私もM行為の後で性行為をする事によって、大きな失望感を味わう事は経験済みですから、サディスティンに対しては性行為はタブーという事を持論にして居ます。

御紹介出来るサディスティンを一寸、申してみますと、トルコ嬢で顔面に騎乗してガスを発したり小水をかけたり、又、床に仰向け

にして素足で踏みにじってくれたりする女性があり、これは面白がってやってくれます。

アルサロ形式の所で、トイレに行く時、グラスをかくし持って、満たして来てくれる女性あり、これは懇願しないとだめ。バー勤めの女性で、この相手は高くつくのですが、本当はサディスティンでなく、普通の結婚を望んではいります。取引として、精神的な屈辱も与えてくれますし、或程度、Mに対する知識があるので、大体、望む事をやってくれます。私が外地在住時代、サディスティンとしてのレター（本心からでなく、そのレターも商品として）を随分、書いてくれましたので、よかったら、お貸しします。ただ本当のサディスティンでないの、一寸、的外れの事や大上段にふりかぶりすぎたりする所があるのが難です。

以上、大体、私自身について申し上げた所ですが、引きつづいて御年令、凡その生活環境、Mとしての御体験談、紹介願えるサディスティンについて等、文通頂けたら幸いです。

（三原 寛）

○

三原寛からの紹介で、あなたの手紙、拝見しました。又、貴方の文章も十月号で読んで

おります。

東京と京都では、少し遠いのでピンと来ませんし、純然たるフェチストの貴方では、私は少し戸惑います。

私の事は機会があったら三原にお尋ね下さい。私は三原の現在は支配者です。

でも、お氣が向いたらお便りを、どうぞ。

さようなら

(東 雪枝)

○

謹啓、

お便り拝見しました。有難う存じました。

長らく御無沙汰した失礼をおわび申し上げます。今後共、益々文通の程おねがい申し上げます。

貴男の11月号の力作読んで居りません。早速、奇ク買い求め読まして頂くつもりで居ります。さぞや真実感、迫る立派な作品であろう事は日頃の貴方の研究で分かります。是非共、一刻も早く読みたいものです。

それから、どうか、最近の貴男の入手された品物、是非、よろしければお送り下さいませんか。私も入手しましたものを、お送りしたいと思います。

では、今日はこれで失礼します。

(岡本 勉)

○

何時も走り書きとなり申し訳ありません。相不変の御活躍ぶり、誌上にて拝見致して居ります。

さて、今日は、私にとって大きな変事がありましたので、お知らせしようと思ひ筆を執りました。と申しますのは、昨年末、帰国後初めて理想の(プロでない)相手に遭遇したのです。プロならば、お金次第で、どんな事でもする相手を見付けるのは困難ではありませんが、自分の性癖を満足させてくれる相手が、相手もその事に対し興味を覚える、つまり生まれ乍らのS女性に遭遇する事は、私にとっては非常にラッキーな事で、知り合つて後の事は、いずれ彼女の許可を得て誌上ででも発表させて頂きたいと考えていますが、御参考までに、知り合つた経緯をここで、お伝えして置きたいと思います。

いろいろと方法に頭を絞り、試みてみたのですが、結局、次の方法で成功した訳です。これは模倣者が増えると同じ方法が使えなくなり困りますので公表しない様に御願ひ致します。考えた末、女子医大の事務局に、

「娘の貴校入学準備の為、貴校学生を家庭教

師として斡旋願ひたい。委細本人と面接の上決定」という手紙を出し、志願者には、その娘の兄だという事で会つたのです。

私の場合、四人が連絡して来て一応、夫々と別々の日に面談。その時は、実際に先方の希望条件等聞き乍ら、それとなく観察して、いずれ、あらためて連絡するからという事で引き取つて貰つたのですが、四人の中で、これはと思つた相手が、非常に幸な事に私の勘が当たつたのです。

元々、斯様な職業を志す女性だから……という見込みから試みた事ではありません。兎に角、二度目に会つた時から、総てを正直に打ち明け、但し相手をそういうプレイの対象として選んだとは申せませんから、誰にも打ち明けられない自分のこの様な性癖が、何とか治らぬものか、どうにも思ひ余り、こういう手段を敢えて選んで御相談するのだ、というもちかけ方をしたのです。

飽く迄、相手を患者に対する医師として扱ふのです。でないと相手に羞恥心を起こさせるおそれがあります。尤も、年若い相手に事細かに自分の性向を白状させられる(私の態度で、そうしむけたのですが、しまいには面白がって相手の方から次々と質問を浴びせて

来ました)のは、その事だけでも、異常な屈辱感に身を灼く思いでした。

毎週末、相手の下宿を訪れましたが、間もなく相手は夏休みで、きっと時間ができません。京都には医大は、いくつかある事だと思いますが是非試みる事おすすめします。時間に追われて今日はこれで失礼します。

京都の方、暑さも殊に酷しいとか、御自愛の

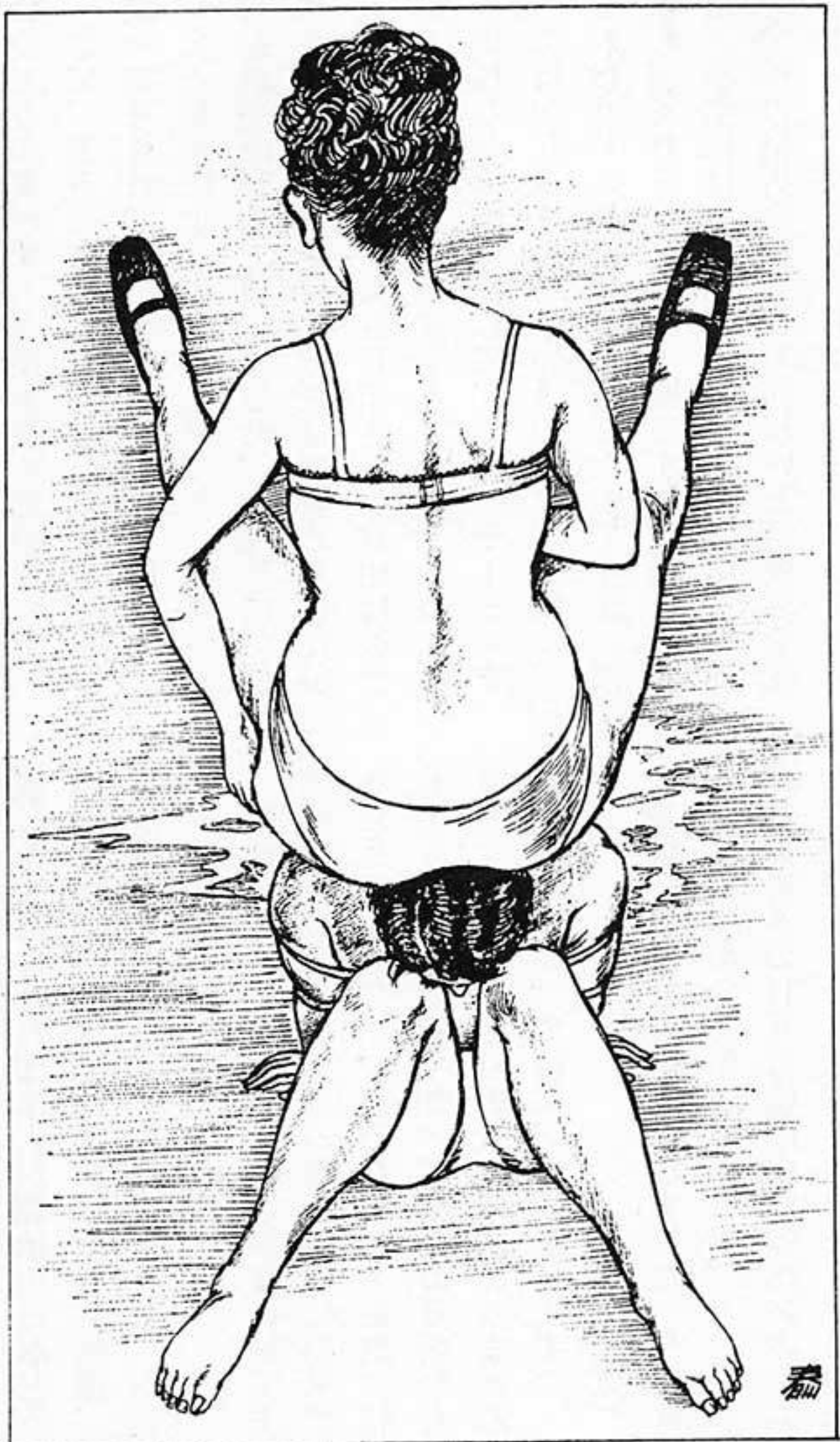
程、祈り上げます。

(三原 寛)

謹啓、お手紙、有難う存じました。

私からの第二便、着いたことと存じますが中々の御高説で感銘して居ります。どうか今後とも貴い御体験をお話し下さい。

私は今のところ、全くパンティの入手方法



ナミオM画廊

『重さこそ快楽』

春川 ナミオ

の思案に明けくれ、想像だけでは満足出来ないのですが、何か良い方法はないかと、あれこれ思案中です。それと私、今してみたいことは、女子高生、女子大生、ハイティーンの娘の股の中に思い切り顔をうずめ毛についている小水のかわいた臭いや××の青臭い、そして甘い香りに酔ってみたい、又思い切り舌を伸ばして、未だ男性の臭いのついていない××をなめまわし、そして、それに初めての敏感な乙女のもだえを見たいと願うのです。それから女性フェチの方で、男性のパンツに顔をうずめた形も見たいものです。過去一度そんな女性と、交際したことがあります。それと、女性のオナニーの姿を見たく思います。以上、取りとめなくお話し申し上げましたが、次便でゆっくりお話し申し上げたいと思います。

今日は之で失礼します。折返しのお便りお待ちしております。

(岡本 勉)

○ 御返事、遅れ、申し訳ありません。

京都の方、暑さも殊の外と伺いますが、お変わりありませんか。

当地も日照り続きで耐えられぬ程の暑さに

水飢饉で水道の給水時間も制限され、南方帰りの初めての内地での夏でしたが、湿気のない向こうの夏がずっと凌ぎ良く思いました。

さて、最近になり、S女性からの申込みが続々寄せられ、嬉しい悲鳴を上げて居ます。

夫々相手によって好みも異なり、いろいろな経験を味わせて貰いました。お便りにて使用済紙の御依頼を受け、説得に努めましたが謝絶されました。お許し下さい。理由は彼女の言をそのまま伝えますと「全然知らぬ人にその様なものを提供して、相手にサービスするのは気が進まぬ」というのです。それに、これは次号の通信欄に投稿したのですが（掲載してくれるかどうか不明ですが）彼女からは、小生にはもう十分したい事をし尽したので、他のM男を紹介して欲しいとの要求を受けて居り、交際も打ち切りの段階にきて居ります。

その代り、頼めば聞いてくれそうな相手が二、三、居りますので、当たってみたいと思います。その場合、相手にもインタレスト惹起することが必要です。小生の口からのみ、これこれの人が居て、頼まれたからと伝えても、又同じ様な結果になるおそれもあり、直接、依頼状を書いて、次便に同封頂ければ、

必ず然るべき相手に渡す様に致しますが。

ただ相手の人の名は、未だ頂いたお便りを渡した上でなければ本人が諒承するかどうか不明ですから勘弁願います。何れも毎週、日を決めて会うのみで、何れにしても、本名、アドレスは不明です。

関西方面には理想的な相手が多い様ですが何分、ここから出掛ける事も簡単に出来ず、専ら文通のみです。猛烈な手紙を寄越す相手もあり、文通のみで却って楽しめる場合もあります。いつも走り書きで申し訳ありませんが御寛容下さい。では又、お便りします。

（三原 寛）

謹啓、お便り有難う存じました。今後共よろしくおねがいをお願いします。

私、奇クの11月号に岡山勉のペンネームで女性使用後のチリ紙入手について「用便紙にひかれて」を書きました。本をござんになったことと思いますが、全く貴男と同感です。私は16才のとき、女子高校生のものすごく汚れたパンティを嗅いでから、そのとりこになったのです。女性自転車のサドルなどは思わず女学生が下りたその車にかけよって、夢中で嗅いだ思いもあります。ただ座ぶとんは初耳です。是非やって見ましょう。

私は今、汚れたパンティを2枚もって、たのしんでいます。何とかパンティ入手についての方法を、お知らせいただけませんか。どうか今後共、何かと相談申し上げたいと思いますので、よろしくおねがいします。

後便で色々とくわしく申し上げたいと思いますが、女学生使用後のチリ紙のスパラシサなど、この世の天国ですね。

（岡本 勉）

謹啓、長らく御無沙汰しました。

北海道へ出張中でしたので出張中に、婦人の使用済用便紙を手に入れました。あるホテルの婦人トイレの中の、つぼの中に小さく丸められた用便紙を手に入れて、未だしつとりとぬれていましたが、かわいた後の香りはすばらしく、又黄色く変色していました。

貴男のおっしゃる通り、少しあたたため息をかけて、その香りを嗅ぎますと、全くすばらしく、永久に保存するつもりで居ります。

その紙の使われた時の状況を想い出しつつ嗅ぎますと本当にエキサイトします。大分つよく××をこすって、ふき去られたらしく、すばらしく強い小水の香りと愛液（つまり分泌液）らしい香りが交じりあい、余程つよく

気分を出し乍らふかれたのではないかと思う如くに、くさいくさい、いい香りなのです。

貴男もチャンスがあったら水洗トイレの婦人用にお入りになったら、つばをあけて見てごらん下さい。必ず3度に1度は良い用便紙に会うと思います。私はメンスの処理したものはきらいですが、根よく探しますと有るものです。先日もある美人がトイレから出たのを見たので、人のいなくなったのを見届けてすぐ入りましたが、残念乍ら流し去ってしまいました。大てい流すものですが、中には奇徳な婦人がいて、残しておいてくれるものです。唯、使用者の顔や名前が分かりませんが、残念です。女子高生や若いBGのなと思うと狂おしくなります。又、Pがないかと探しますが残念乍ら未だぶつかりませんが、その内きつと有ると思います。駅その他、有料便所の番人にお金をにぎらせて、何とか用便紙やズロースを捨ててあるのを、ゆずってもらってはどうかと考えます。案外うまく行くのじゃないかと思いますが。

また、ある方面から異性下着の入手方法とか変態的性交法やオナニーの工夫等、資料が入る可能性があります。入ったらお知らせしましょう。私はナルチズム傾向があるので

女性フェチの方に男性下着を分ける、あっせんの方法があり、申し出ています。もし成功すれば、女性下着を分けてもらえることと思っています。

では、又お便りします。お返事おまちします。

○ (岡本 勉)

拝復、重ねて御便り戴き乍ら、御返事失礼し、申し訳御座居ませんでした。

実は此の所、急な仕事が重なり出張もあちこちと続き、文字通り東奔西走して居て全く暇がなかった次第です。

「まか」に関する御意見、誌上にて拝見致しました。共感よぶ内容だけに拝読するのみで非常にエキサイトさせられました。ただ、これ迄の御意見から拝察して貴方のオブジェクトがヒップに集中して居ると御見受けするに對し、私の場合は、どちらかというと、レッグ及びフットに對し、貴方がヒップに對してお感じになると同様の事を感じるのです。

勿論、既に申し上げた私の体験にもありますようにヒップに對しても強い扇情性を感じこの関連プレイでも大いに満足を得るので、比較論として申したのみです。

私の寄稿については、前回の続とは別に再び続けて投稿して居りますが、この通りの乱文で果たして採用してくれるかどうか案じて居ります。走り書きにて、失礼乍ら、先は御返事迄。尚、先便封書に住所失念し失礼しました。いつも多忙で、うっかりしたもので他意ありません。

○ (三原 寛)

謹啓、お便り有難う存じました。

私が差し上げた便りを、お読みになりましたか。相当エキサイトしていたので、つい何だかトコトン迄、狂ってしまったて失礼な、お気持ちを悪くしたようなことを書いたのではないかと思います。失礼しました。

先日、お送りいただいた紙の入手の状況をくり返しくり返し読みました。全くすばらしい情景だったと思います。全くすばらしい眼前に浮かんで参ります。どうも有難う存じました。こんな貴重な資料をお送り下さったことに最大の感謝を申し上げますと共に、お礼に、私が先日、北海道で入手した紙を差し上げたいと思いますので、ここに同封してお送り申し上げます。少し香りが強烈ですが、御満足頂けますか、どうですか。どうか存分

に御観賞下さい。今後も入手したら、お互いに交換して見たいと希望して居ります。

扱、私の紙の観賞方法ですが、一応入手したものは、未だぬれていて、はっきり、それでは香りがピンと来ませんので、封筒か他の紙に包んでポケットに入れて体温で温めるか又は、しまつて自然に乾くのを待ちます。

何時ぞや、女高生風の三、四種類の貴重な資料を早く嗅ぎたくてストーブの火で温めましたら乾く迄に、こげました。せっかくの資料を台無しにし、香りもすっかり抜けてしまつてフイにしたことがあります。自然に乾いたら貴男と同じく、良く折られた丸められたしわの寄つた場所を改めて見ますと、黄色く色付いてコスられた状況、又×水や×液の附着状況が分かりエキサイトして来ます。

それからオモムロに鼻を近付けて、香り高い香りを鼻一杯に吸い込みます。しっかり吸引力をつけて力一杯、吸います。又、申しおくれましたが、すっかり乾いた紙は、よりよく香りをただよわすために、湯気の中にしばらく置きますと、少ししめり気をもどし、それにより香りを嗅ぐと、全くすごい香りを放ちます。そして又、それ以上望む場合、上唇と鼻ではさみ、強く香りを吸い込むのです。

以上が私の観賞方法です。これでオナニーなり性具を使いますと、××を嗅ぎ乍ら××しているようで全く夢心地です。此頃、伊東温泉のトルコ嬢で69型になり、自分の××を嗅がせ乍ら、スペシャルサービスをして呉れる女性が居るそうで、我々の救いの神だと思ひます。此の人に頼めば、Pも分けて呉れると確信します。

では今日は之位で失礼します。

(岡本 勉)

○

早速御返信を頂戴し感激しました。同好の志のみに通じ合う得難い友(年下の私が、そういう事を、お許し頂けるなら)を得た思ひです。私も今は割と暇があり、手紙を書く余裕もあるので、多忙日は連日、三時、四時の帰宅が続き、とても手紙を書く時間ありませんので、丁度良い時期に合い、精々お便り致しますから、よろしく願ひします。と申しても先便で申し上げたかと存じますが現在も同棲中で、便り等、書いて居りますと直ぐに覗き度がありますし、まして絵等ゆっくり書けません。

彼女は、夜の勤めですので、大急ぎで本信及び、先刻、絵を書き上げた所で、本当の描

きなぐりですが、御笑覧頂けたら幸甚です。

お便りにありました分譲品の(まか)は私も帰国後、早速、申し込み、入手して居ります。大変、刺戟的な絵で、興奮させられました。私も金の為に何でもする相手との経験は割に多いのですが、奇クにある様な、本当のサディスティンとの経験なく、その様な機会の訪れる事を切に願ひして居ます。

御希望でしたので、在外時、文通のレター一部、同封してみます。普通の女性ですからどうも心にならない事を想像でコチョコーして書いた形跡がうかがわれ、それにどうしても性行為そのものに傾き勝ちで満足しません。ただ男性に尿を飲ませる事、これは大抵の女性の心の奥底にひそんで居る欲望の様で、相手がすっかりこちらに気を許し、こちらの出方次第で、何をしても大丈夫な相手だと十分、認識させる事さえ出来たら、寧ろ自発的に、やらせたい事の様で、この点、同封のレターの文面からも察しられる事と存じます。

それは自分の排尿を相手が有難がって飲むのですから女性にとって、いい気持のものである事は確かでしょう。バンコックで娼家に赴いた際も、相手はポルトガルの混血で、目鼻だちがはっきりして、ヴォリュームのある

好みのタイプで数度、通った後になじんだ頃自作の絵を数枚、持参。何しろ言葉が全然、通じないので、元々その女はおきちゃんというのか、非常にアクティブで、こちらもはじめから殊更に気弱な態度をとってリードを相手にまかせたのですが、その絵を示して彼女の足に接吻した所、一旦、驚いて足を引っ込めたものの、絵をみて大声を挙げて笑い、絵の男の方を指さして、これはお前か、という身振りをするので、うなずくと、ひれふしている私の上に、いきなり馬乗りになって来て、それでも半信半疑の態で、お尻をベルトで叩くしぐさをし、勢い余ってパチンと当たると慌ててこちらの顔色をうかがうという風でし

「伝言板」○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

たが、全然こちらが示唆した訳でもないのにベッドにうつぶせになって、大声で笑い乍らおしりをなめてくれ、という事を手真似でやらせたり、そのうちに床におし倒されて、仰向きになって、×××をなめさせられて居るうちに、いきなりおしりを浮かしたかと思うと、しゃーっと顔一面、浴びせられ、彼女はもう面白くてたまらぬといった具合に、けたたましく笑ったのですが、この様に、何をしても怒らぬ相手だと判ると、相手に尿を飲ませたがる様です。

サイゴンには一週間程、滞在したのですがナイトクラブで唱っていた物凄くヴォリュームのあるヴェトナム人の歌手と、ねんどろにあり、この女性は身長は一七〇センチ位、体重も七十キロ以上ある程の大女で、その割に腰が細く、脚線美だったのと、私好み髪を長く背中になびかせ、顔もきびしいサディスティックな容貌でしたので可成り強引に近付きになったもので、それだけに、最初から、こちらはお情でつき合って貰って居る、望みの形になりました。彼女とはフランス語で自在に話を通じ、その点、便利でした。彼女が西洋かぶれで東洋人を全く小馬鹿に見下ろしている態度でしたので、こちらも殊

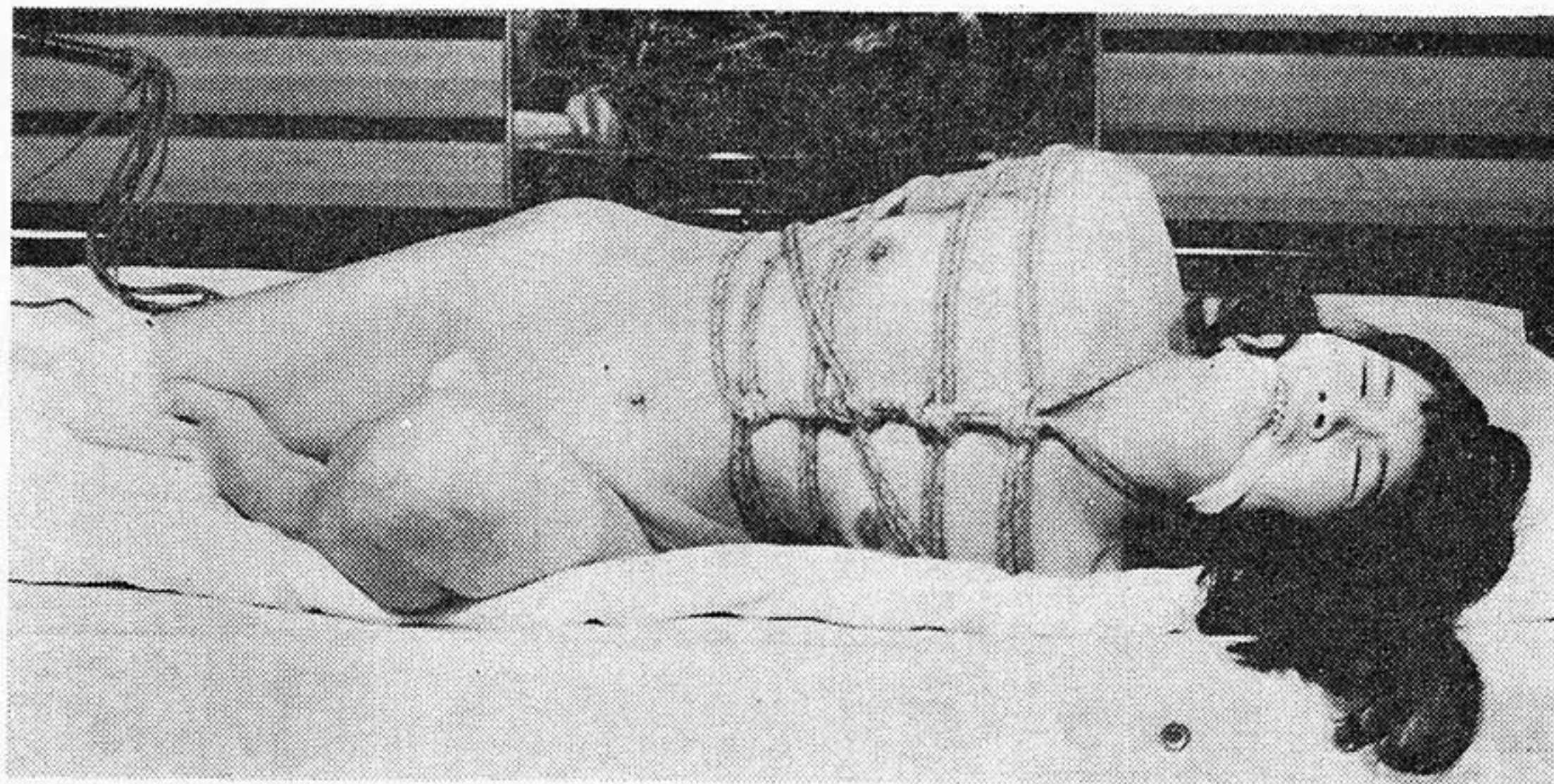
更に卑屈な態度で接し、自分と彼女とは対等の交際等、出来る訳がないので自分はドレイとして扱って貰っても満足だと申しますと、彼女もうなずき、だから、せめて足の先にも接吻させて貰えれば満足で、若し尿や排泄物を頂けるなら、これに勝る光栄はないと申しますと、本気なのかと何度も念を押した上で、飲ませてくれました。

余り、こちらがそれに対し感激し有難がりましたので、二度目からは一回、飲まされる毎に法外な金をとられました。結局、彼女とは尿を飲まされる丈の交際で終わりましたが彼女が日本人と交際する事を仲間に知られるのは自尊心が許さないのか、彼女の女友達連中に私が尿を飲ませる丈で多額の金を払うばかな男だという様な事を打ち明けてしまいましたので、彼女を楽屋で待って居る時も彼女の仲間から、ひどい屈辱を味わされ、可成りマゾ好みの場面も出現しました。

どうも、同じ傾向の方と知り、つい嬉しくて、いろいろ書いてしまいましたが、御判読下さい。

お互いに離れているのが残念です。お氣が向いたら、お便り下さい。

(三原 寛)



鉄三 S M 談義

昇天した女奴隷の話

——(続・江口淑子の巻)——

塚 本 鉄 三

奴隷淑子への責め

先月では奴隷宣言をした江口淑子をうまく奴隷として飼育して、さて、いよいよ、これからベッドルームへ追い立てようとしたところで、心ならずもペンを中断しなくてはならなくなって残念であった。

だが、私の書いているのは、ルポであって小説ではないので、起承転結の筋の運びがなくなっちゃって許してもらえと思う。例えば文の途中で「読者の皆さん、今日は——」と筆者が顔を出したって、一向に構わないと思っ

ている。いわば、読者の皆さんと話し合っている気持で、このルポの文章を書いているのだから、皆さんも固苦しく考えないで、その場に一緒に居合わせているといった軽い気持で読みとばして頂きたい。

さて——、

江口淑子の方だが、ますます全身の力が抜けて、柔らかくなり、見ていると、くたくたになっているようだ。もう、こちらの少しの力にも順応して、どうにでもなるような態勢——。言ってみれば、奴隷として仕上がっているような状態である。

犬を馴らすのには唾液を舐めさせたり飲ませたりさせたらよいと言われているが、女の奴隷を飼育するのにも、御主人様の排泄した体液を飲ませるのは、最もよい方法である。

私は江口淑子に対して、汗ばんだ足の裏を存分に舐めさせて塩っからい汗の味を、たっぷり味あわせてあるので、奴隷宣言書の通りも早や、心身共に御主人様に捧げつくすという気持ちになりきってしまったようだ。

犬には首輪と、くさりによる繋留という方法で、その生殺与奪の権を握ってしまうが、女体は素裸にひんむいておいて縄という拘束具によって、その自由を奪っている。更にその上、ムチという威嚇の手段によって、奴隷の意志に反したことでさえ、容易に強要することが出来るのである。

これこそ、まさにAS Mの世界Vでなくてなんだろうか。御主人は目の前の女体に対しては、自分の考えついた、どんなむごいことでも強行できるという気持の良さを留保しているのであるし、奴隷の方は自分の意志によらずに、女体に対して、どのような暴力を揮われるか、わからない危機感にさ

らされ、被虐の心に身を、痺れさせているのである。

隣の部屋の中央にはダブルベッドが、でんと据えられ、向かって正面の壁は鏡になっていて黒いレースのカーテンが引かれてある。ベッドの周りには黒塗りの欄間がめぐらされて川原石を敷いた空間とを隔てている。浴室との間の壁は自然石をはりつめて山小屋風に

しつらえてあるが、いかにも取ってつけたように部屋の他の調度とは不釣合だった。

「淑子、こっちへ来なさい」

私は、ベッドに腰を下ろして、右手にしたムチの素振りをくねながら淑子を呼んだ。

既に縄を解かれて畳の上に全裸の肢体を、くたくたと、くずれるように寄せかけていた淑子は、物懶く顔を上げたが、素裸のままで

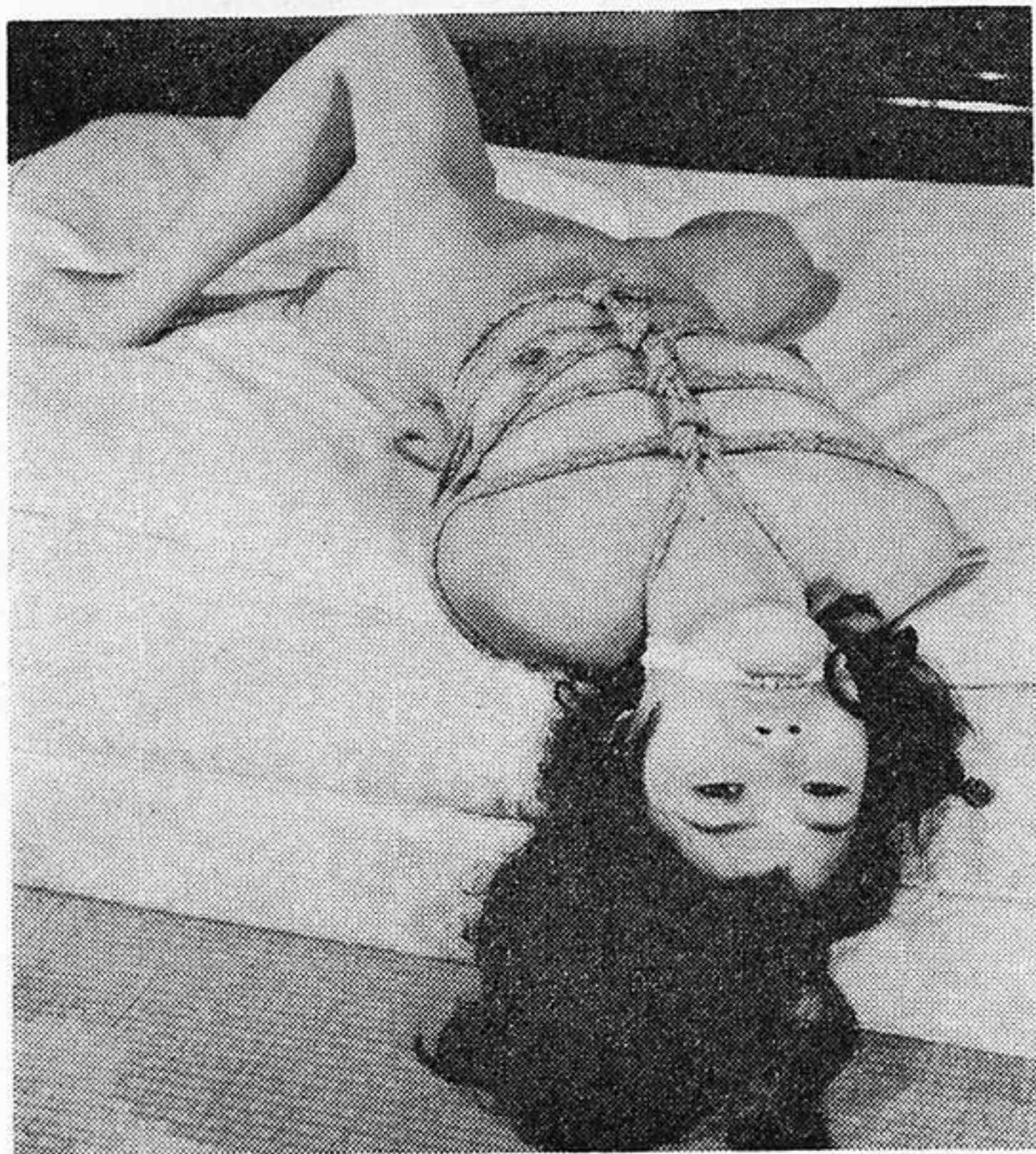
どうしようもない——といった風でとまどっていた。縛られて縄尻をとられていたときは、こづかれこづかれて、縄尻を持つ人の意のままになっていた淑子も、いざ縄を解かれて身体が自由になると、途惑うものらしい。

「さあ、早く来ないかッ」

私の怒声に淑子は、弾じかれたように立ち上がり、前を手で押さえて前屈みのような格好のままで歩いてきた。まだ身に何も纏うことは許されないのである。

「手をうしろへ回して——」

「女って、娘でなくなってくると、お尻がだんだん下へさがってくるのネ」





淑子は私の命令を婉曲に拒否するつもりか
或は既に娘時代の過ぎた自分の裸身を恥じて
か、手を前に当てたまま、そんなことを言っ
た。しかし、逆光のなかに、しろじろと浮か
びあがった淑子の細身の裸像は、爛熟した女
の匂いが満ち溢れているように思えた。

濃厚で重量感のあるSMプレイを展開する

ことが出来た関谷富佐子、川路むら子、渡部
好美などと匹敵する好ましいM女であるに違
いないと思った。私は無言のまま立ち上
り、淑子をくるりと一回転させておいて、腕
を背中の方へねじ曲げて縄を掛けていった。
手首は易々と背中曲がり、縄は二の腕や
胸に深々と喰い込み面白いように締まった。

ベッドの周りにある欄間に殊更恥かしい格
好で縛りあげて晒しものにする考えである。

「ねえ、そんな縛り方だけはやめて——」

足を水平に伸ばして縛りかけると、す早く
私の意図を察して淑子は恥かしがった。奴隷
にそんなことを願う自由がある筈もないが、
さっきからの彼女の態度を見ると、そんな
ポーズにされたくてたまらない——といっ
た風が、ありありと見えるのである。今も、
口では、そんな上品なことを言いながら、私
の運ぶ手に協力するように、両脚を大きく開
いていったのである。

私の強制によって仕方なく、そんな格好に
縛られてしまったという如何にも恥かしくて
たまらない風をしてはいるが、身体のすみず
みに至るまで、いや、全身にわたって責めら
れる喜びに満ちているのを私は目ざとく見つ
けていた。恥じらいに身も世もあらぬ女体も
美しいが、恥じらいのなかにもマゾの喜悦に
身を打ちふるわせている女体もまた、極めて
美しいものである。

煮て喰おうと焼いて喰おうと自由な奴隷淑
子が、今、目の前で晒しものになっている。

「私の身体を自由にするんだったら、縛った
ままですて。せめて自分の意志でそうなった

のじゃないっていう証拠に——。ねえ、きつと、そうして下さるわね」

「何を言ってるやがる。そう簡単に、お前の希望する通りに、事が運ぶとも思ってるやがるのか。そううまく問屋は卸さねえぞ」

私は心のなかで、そう叫んでいた。私が、こんな縛り方をしたからといって、そして、それがベッドルームだからといって、そう簡単に女奴隷の思っているように楽しませてやっては、たまらない。ベッドの上からカメラを構えてシャッターを切り終わると、縄を解いてから位置を変えて、縛り直した。

奴隷淑子は、足をもつれさせるように、よたよたと縄尻を取られて歩かされ、場所を変えるたびに、仕方がない——といった諦めの表情で縛られていった。私はベッドの上に立って目高位置から狙ったり、或はカメラを床すれすれに置いてシャッターを切った。

「ねえ、まだまだ、写真とるの？」

「そうさ。田中さんは写真はとらなかつたろうが、僕は縛られた淑子の狂態を、どこまでもカメラで追ってゆくつもりだ」

「だって、これだったら、SMプレイっていうより、写真ばかりじゃないの」

「そうさ。これまではSMプレイの、いわば

序盤戦といったものなんだ。

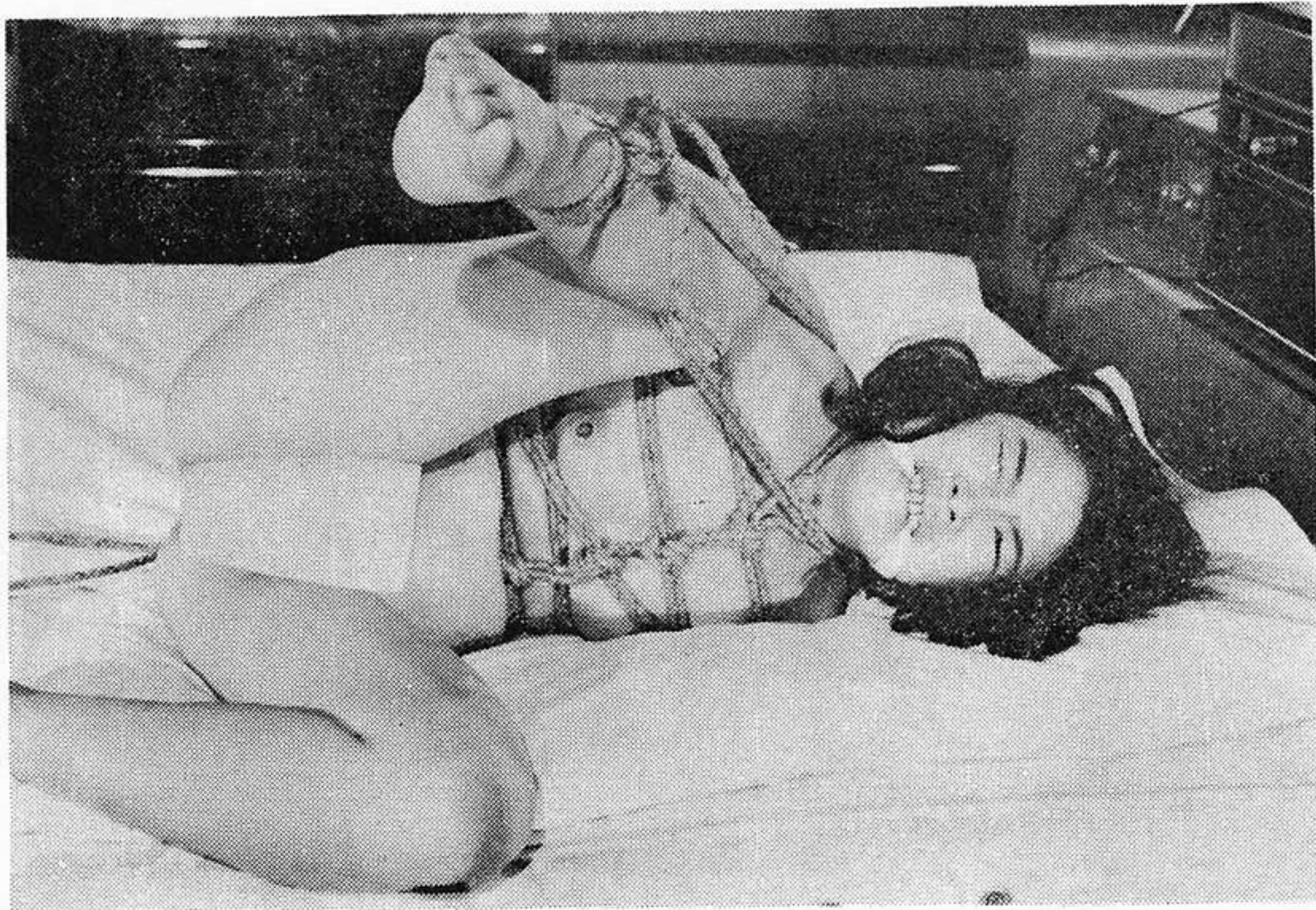
馬鹿に床いそぎをしているようだが、奴隷というものは御主人様の言う通りにしておればいいんだ」

「知らない——」

「ほらほら、その眉を逆だてたところなんか、なかなか魅力があるよ」

そんな冗談を言いながら、私は縛ったままの淑子をベッドの上に放り投げた。スプリングのよくきいたベッドの上で弾んでいる女体をそのままに私は三脚にすえたカメラに戻ってピントを合わせた。ベッドの上を全部カバー出来る位置からエアーレリーズで遠隔操作しながら、片方で私はムチを揮って、淑子の女体を痛めつけてポーズを変えさせた。

「さっきは、御主人様に不遜な要求をした罰だ。悲鳴を挙げなければ挙げるがよい。こ



れから、いよいよ本当のSMプレイだ」

私は淑子の尻、太股、背中、二の腕、目がけてムチを揮った。淑子は派手な悲鳴を挙げて蒲団の上を、ころげまわった。私は時々足でゴム球を踏んでシャッターを切った。

血の気を失ったように白かった淑子の女体が忽ちにして、赤く染まってきた。

肌が白いので、それは燃えるような血の色だった。

ピシッ、ピシッ——と、手ごたえのあるムチの音と共にムンムンする女体の熱気が部屋中に充満してきた。白い肌に、じっとりと汗が、にじみ出てきて、それが玉となって脇腹をつたってポトリと敷布の上に落ち、まるいシミを作ってゆく。ムチの先が臀部の割目をしたたかに襲ったとき、淑子は「キャッ」と派手な悲鳴を挙げて大きく弾ねあがり、横倒しに倒れた。

紅 閨 秘 筐

もう何年も前のことになるが、三人の悪友と共に北陸の山代温泉に遊んだことがある。

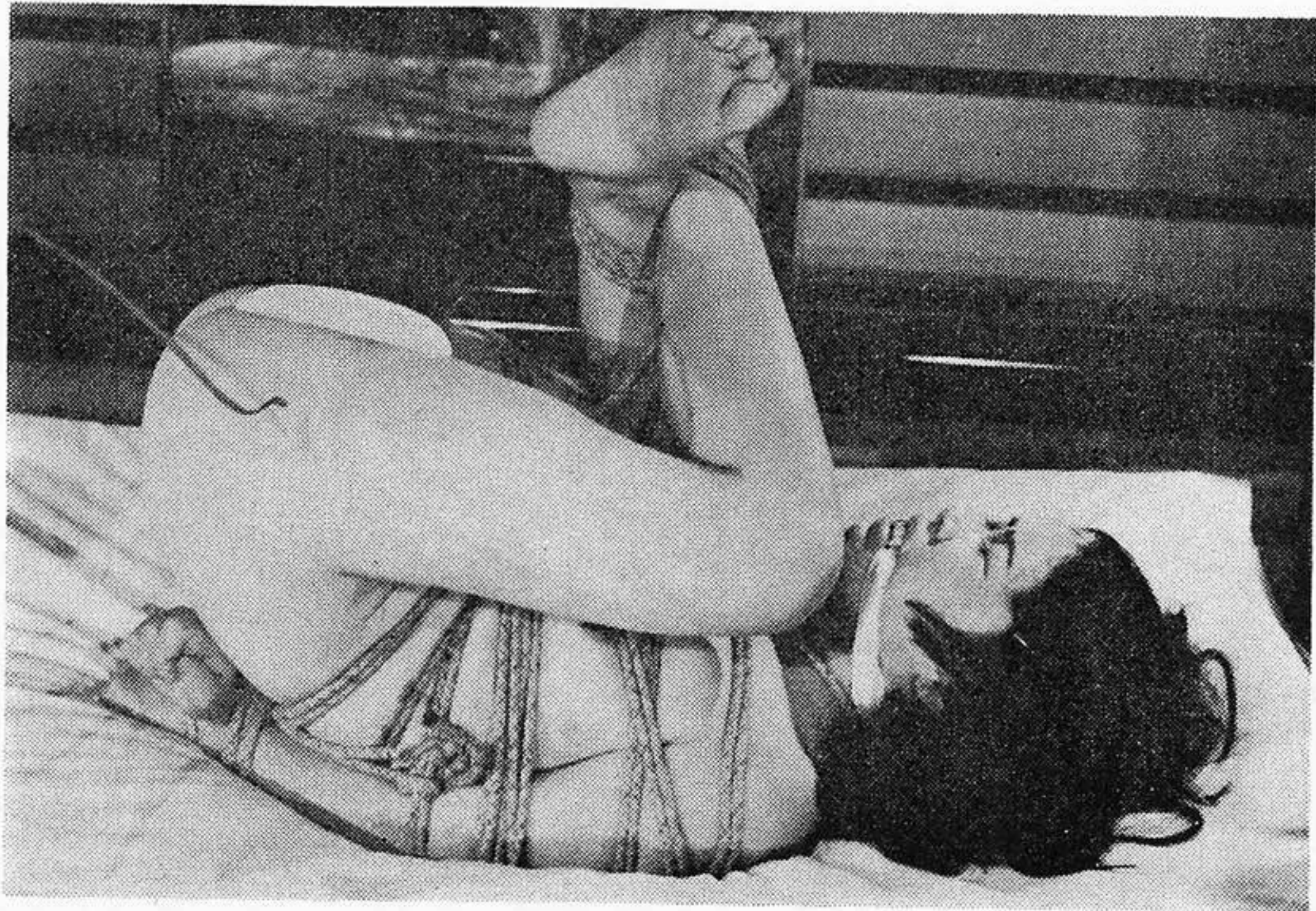
今は新築ブームで鉄筋コンクリート建ての新館が次々と建っているそうであるが、私達が行った頃は、山を拓いて七階建ての近代建

築のホテルが工事中であったが、まだまだ落ち着いた数寄屋作りの日本建築の旅館も多かったし、どこことなく色っぽい温泉町といった色彩が濃厚であった。

前もって電話連絡をしておいたので、その余り大きな旅館の部屋に落ち着くや否や「今日は——」と、二人の若い芸妓が顔を出した。「まだ、風呂にも入っていないのに」と言う。「これでも、大分、待ったのよ」と、頬をふくります。

「どうせ待った時間も花代に入っているんだから、そう慌てなくてもいいじゃないか」
言っているところへ、更に二人の芸妓が入ってきて一人一人の洋服を脱がしにかかるので、宿の浴衣に着替えて浴室へ向かった。

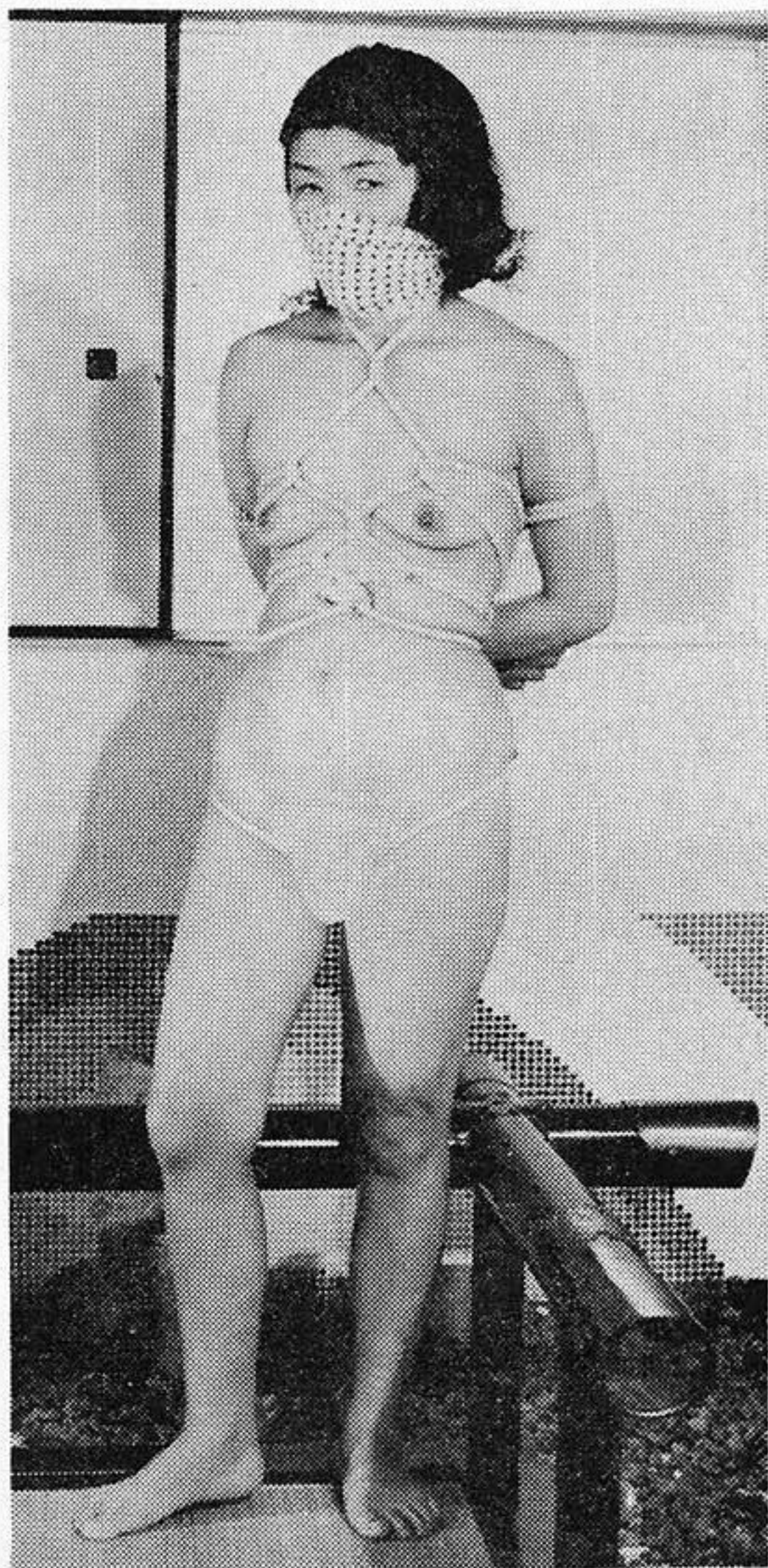
最初から、もう先手先手と取られているようで、着くな



り花やいだ遊蕩ムードが満ち満ちていた。誰かが山代温泉はいいぞ——と言っていた通りの女性のサービスぶりである。

風呂を上がってから早速、芸妓四人を混じえての宴会になったが、これは、そうそうに切り上げて、各人それぞれの恋愛の相手を選んで自室へ引き揚げることになった。宵の口から喃喃というのは、さすがに大阪の奥座敷北陸の温泉境だけのことはあると思った。

不思議なもので誰でも若い女、若い女と選びたがるので自然と私の相手になった女性は四人の中でも一番年嵩だった。まあ姐さん



株っていうところだろうが、といって私よりも相当、若いのだし、感じも決して悪くはない芸妓であった。

着物を脱いで長襦袢一枚になって、すうっと私の傍へ、すべり込んでくる仕草など、なかなか、堂に入ったものだった。

着物を、きっちり着込んで濃化粧した、あの芸妓の女体は一体どんなだろうか、と期待に胸を、わくわくさせていた私の虚をついたように、あっと思ふ間もなく、ねっとりとした足を、からませてきた。

最初、受けて立った私ではあったが、忽ち

のうちに主導権を握るやいなや、まるで鶏の羽をむしって締めあげるように、きゅっと急所を握ってしまった。

と、向かいの部屋の襖の開く音がして廊下に足音がした。続いて、隣の部屋の襖も開いてトイレへでも行く足音。そして話し声。中の一人が私の部屋の襖を開けて覗き込んだが私達二人が蒲団に入ってしまったので、あわてて出てゆく。三人の部屋の襖が開いたり閉まったりして出たり入ったりしているらしい。

私の相手の女性は、まさに感度抜群。生殺与奪の権を一切、私に握られて恍惚地獄の中を彷徨しているようであった。私は例によって、随意筋の秘法によって自己を制禦しつつ燃え上がる女体を冷ややかに眺めていた。

そこへ悪友の一人が入ってきた。額に汗を浮かべて真赤に紅潮させた女の顔を見て、その男は他の友人を呼びに行った。

女は齒を喰いしばり目を固くつむって喘ぎ続けているので、三人の男が入ってきたことなんか知らない。死にそうな女の凄惨な形相と私の冷静な表情とを見比べて、余りの不思議さに、悪友の一人がたまりかねて、掛蒲団をぱっと、めくった。それで始めて私がインチキをしていないということが皆にわかった。

私は調子にのって、皆の見ている前で更に次々と女を責めたてた。女の方は夢中になっているので、他の男が見ているなんて少しも知らないから、まさに凄絶の一語につきる乱れようであった。

さすがに三人の悪友たちも開いた口がふさがらず、びっくりした表情で自室へ帰っていったが、すでに三人の芸妓は帰っていったとかで、再び私の部屋へ戻ってきた。

私は、まだ女を解放してやらなかった。普通だったら知覚を喪失して虚脱状態になった女は一応、休息させてスタミナの回復を待ってやるのだが、今日は見物人があるので私は更に連続攻撃を試みていた。一つには、悪友達の度肝を抜くため、殊更、長時間を誇っていた面があった。

そんなことが、一層相手の女性にとっては驚異的なショックとなったのだろうか。あとになってから、この旅館にコネがあって、今日の段取り一切をしてくれた一人の悪友のところへ、その芸妓から私への誘いを伝言してくれと言ってきたそうである。費用は一切自分が持つから遊びに来てくれと三回ばかり言ってきたそうだが、暇がなくて私は、それっきり行く機会がない。

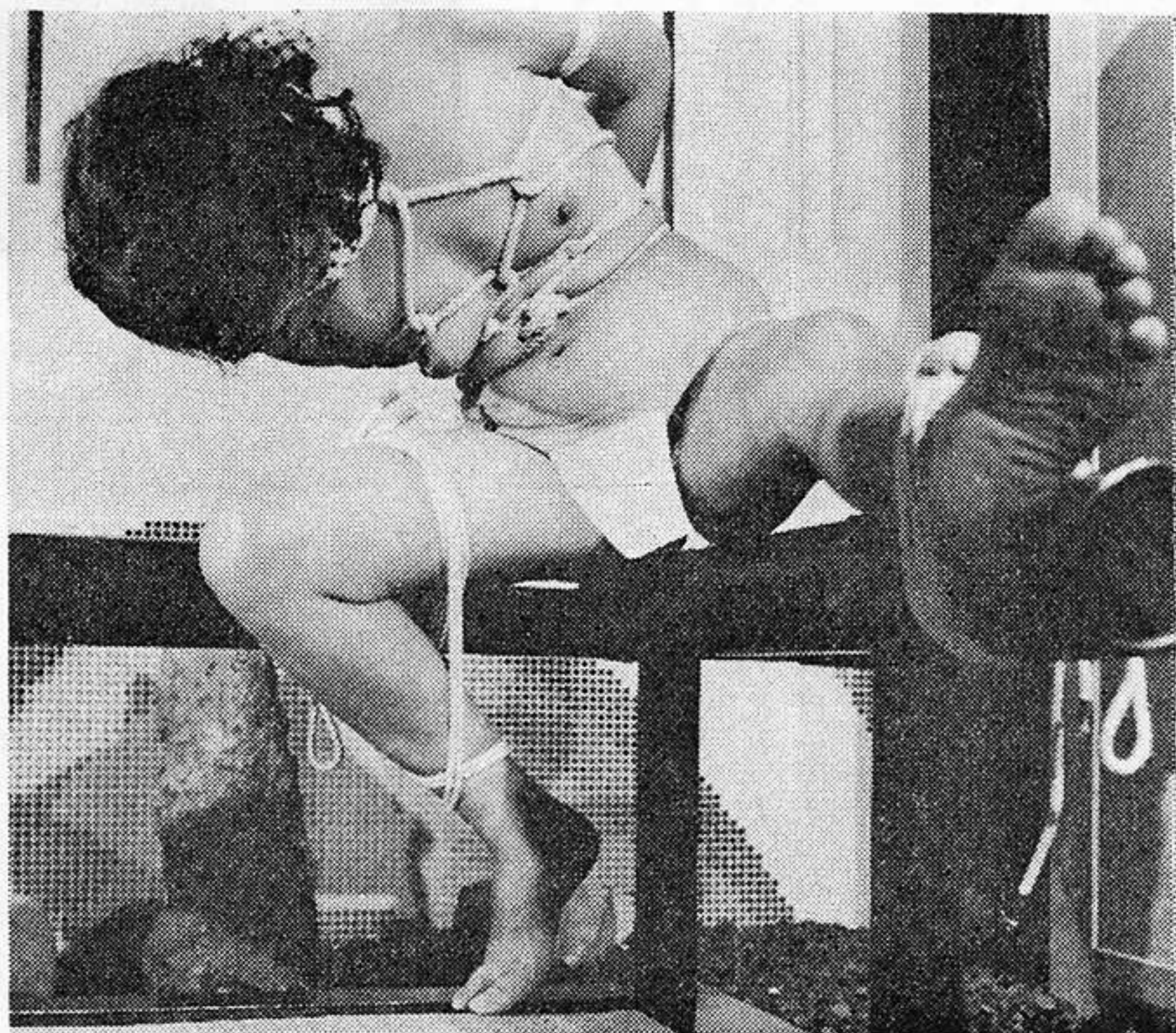
帰途の車中、私は三人の悪友に言った。

「君達は、あんなに早くって、あれで本当に快感ってあるのだろうか。あれでは単に男性の排泄欲を満足させるだけじゃないだろうか」

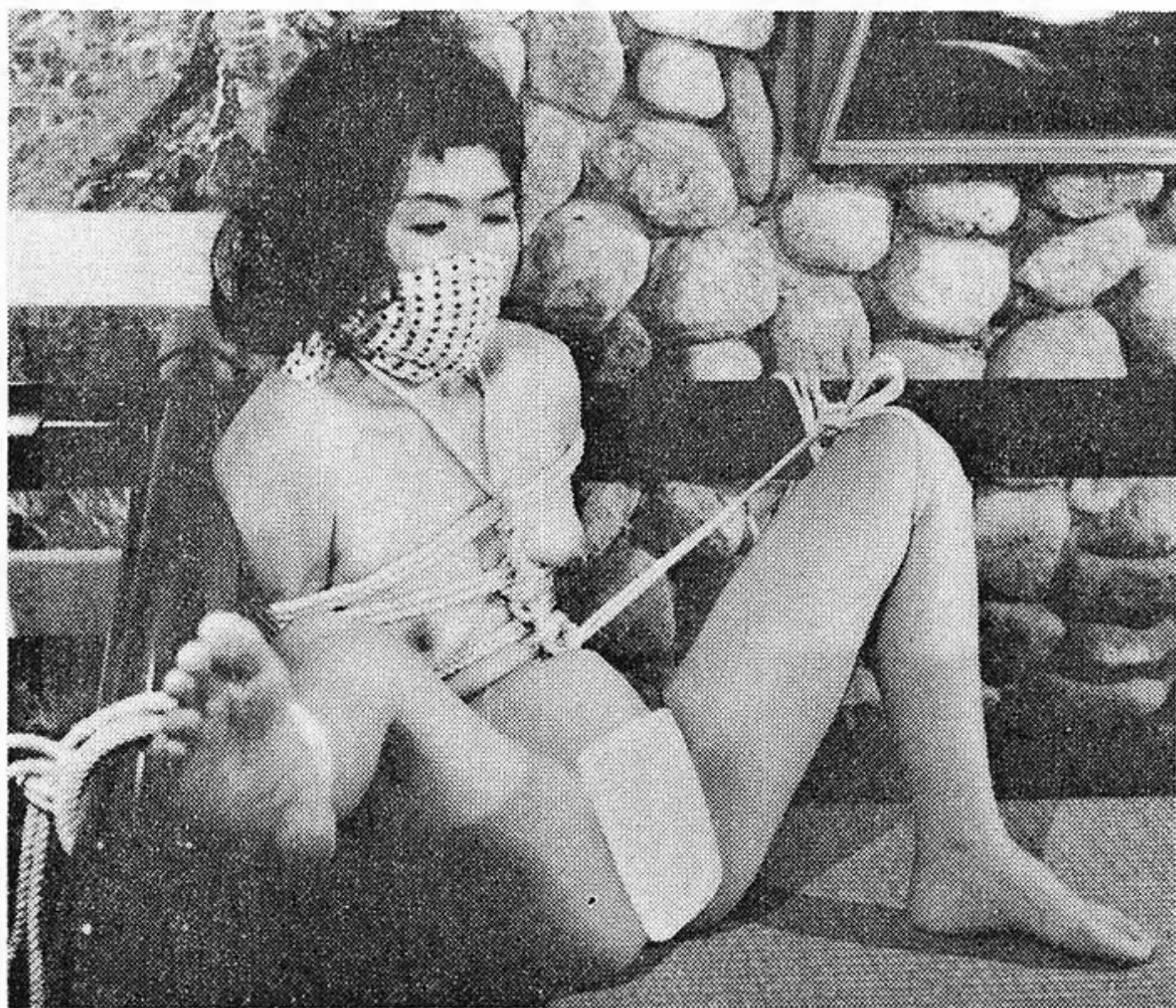
男性と女性とを比較して、女性の方が、その快感量が数倍、或は十数倍だと、よく言われるが、やはり或程度、時間の長さがないと質量も少ないのではないだろうか。

私の経験によると、時間の長ささえ保つことが出来るとすれば、男性もまた女性と同等の快感量を確認出来るのではないかと思う。

すなわち男性は、とかく局地戦で終了し勝ちなのだが、これが全面戦争に導くことが出来るというのが私の説である。例えば、棒の先だけで終わるか、棒の中心から根元、更に



腰部、太股、脛、足先から爪先。背中から腕指先に至るまで瀾漫してゆくかどうか、一にかかって、時間的経過を待たねばならないような気がする。やはり全面戦争の深さと厚さ



も求めるとすれば、短時間では駄目である。
加速度的に層を厚く、深くするためには、
完全なる自己制御下に置いて随意筋化した上

でコントロールするのが最上策であると私は
思う。大体、男性の側が、そんなに早くって
は女性の側は勿論のこと、男性自身について

も真の意味での快美感が
あるのかどうか、大いに
疑問に、思うところであ
る。

決して時間が長ければ
それで良いというもので
はないが、あの小さな爆
発が時間を追う毎に連鎖
反応を起こして次第に大
きな爆発に移行し、大噴
火に至るまでの過程は、
短時間に於いては到底、
なし得ないものである。

さて、江口淑子の方で
あるが、ベッドの周囲で
さんざん写真を撮りまく
り、そして、ベッドの上
に放りあげておいてから
も、三脚に据えたカメラ
でシャッターを切ったの
であるが、ベッドのクッ
ションがよくきいている

ものだから身体が蒲団にめり込んでしまっ
てうまくファインダーの中に、入ってこ
ない。

コマ廻しのように、ムチで女体を追いま
わして、ベッドの外へ半身をのけぞらすよ
うにさせる。ここで二〇〇CCの硝子製ポン
プ式浣腸器でも準備してきておいたら、浣
腸されるのが好きだと言っていた淑子に
対して、思いきり浣腸してやれば面白い
のだが、好きだ好きだと言っておきなが
ら、もしグリセリン溶液を一度に二〇〇
CCもぶち込まれたら、一体どんな顔
をして尿意や便意を耐えることだろう
か。

浣腸用器具はイルリガートルにしても、
硝子製浣腸器にしても破れ物で嵩ばるの
で、特に浣腸を目的としない限り持つて
来ないことにしているのが、淑子には幸
いしたといえよう。もし、一本でも忍ば
せてきておいたら、高村浩子のように縛
ったままで浴室へ引っぱって行って、き
っと浣腸をしていただろう。

二〇〇CC浣腸器といえば先日、前田真
知子に浣腸したとき、彼女はあとで、こ
んな立派な浣腸器、眺めているだけでも
見事だわ。私も、ほしいみたい——と
言っていたので、私は通りすがりの薬
局で在庫を尋ねてみた。「五〇CCぐら
いだったら、店にありますけ

ど、そんなに大きな浣腸器、一体、何に使いますの？ 買う人なんてありませんわ」

調剤室から出てきた四十がらみの婦人薬剤師は、びっくりしたように答える。

「今はSMブームで浣腸プレイすることが流行しているので、二〇〇CCのような大きな浣腸器も必要なので、いずれ貴女のところも売れるのではないですか。こんな小さな浣腸器だったら、魅力が少ないですからね」

私は彼女の持ち出してきた五〇〇CCの浣腸器を箱から取り出してみせた。

「それだったら、これなんかは？」

そういつて女薬剤師が取り出してきたのは携帯用のビデであった。腔を洗滌する器具なので太い嘴管がついていて、まあ浣腸にも使えるそうである。容量も二〇〇CC以上はありそうである。一個千円だというので貰うことにしたが、商売熱心な彼女は「一寸、お待ち下さい」と言っ、電話をとり、早速、問屋へ照会してくれた。

「一〇〇CCも二〇〇CCもあるそうです。

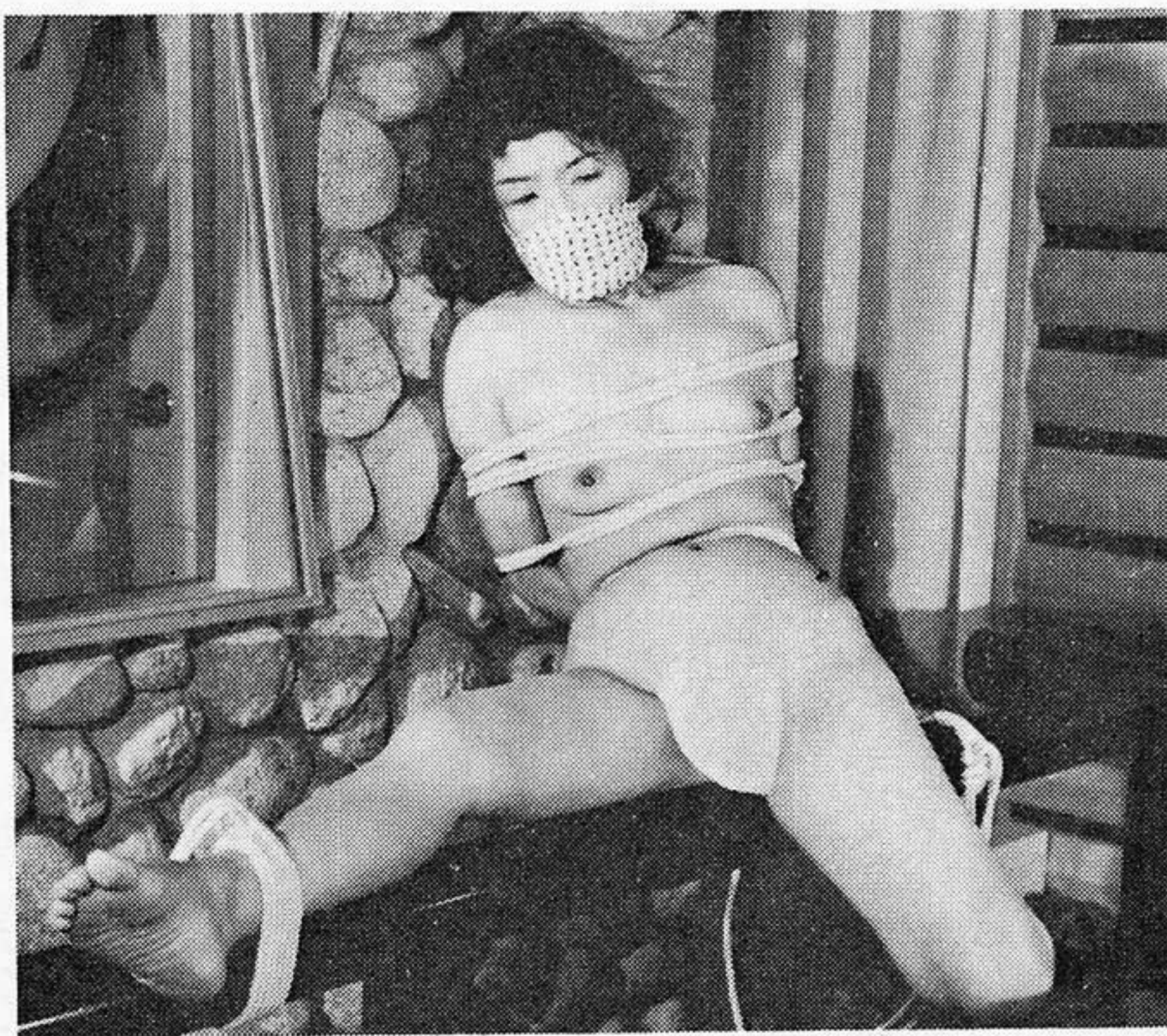
でも高いので、びっくりしましたわ。千五百円ぐらいだと思ったのが、三千五百円もするんですって。どうなさいます？ 店に置いても売れませんから、予約して頂かないと困る

んですが——」

私は店の名刺を貰って入用のときは電話をするからと言って別れたが、その婦人薬剤師は、私の話したSMプレイのことに大変興味を持ったらしく、店を若い女店員にまかしておいて、イルリガートルやエネマシリンジそれにクスコなんかを奥から持ち出してきて私に見せた。いずれも私の持っているものなので目下求める必要はないのだが、ついでにカテーテルなんかを見せてもらった。

オシメカバーにメンスバンド、ゴムのシートなんかもSMプレイの小道具としては欠かされない

ものかも知れない。聴診器に使うゴム管なんか、長いのを求めると緊縛用具として利用出来ないかと考えてみたりする。一寸、見渡しただけでも、便器に尿瓶なども、応用価値が



ありそうである。猿轡用の貼り薬、目隠し用の包帯——と数えあげれば、きりが無い。

またまた、話が横道へそれてしまったが、浣腸されないで済んだ淑子は、ムチに追われ

てベッド上を転々とし「う、う、う」と呻き声を洩らしながら頭を、のけぞらした。

もう、どのくらい縛り続けていたことだろう。縄は皮肉に喰い込み、背中で高く交叉して組み合わされて括られている両の手首なんかは充血して紫色に色が変わっていて如何にも痛々しそうである。縛られることが好きでなかったら、とても、こんなに長く縛られたままで辛抱出来ないであろう。

江口淑子は、まだ一言も解いてくれという言葉が口から出たことがない。縛られた身をベッドに沈めたまま、じっと奴隷宣言をした身の味を噛みしめているのであろうか。

私は彼女に近



寄ると磔のように固く締まった結び目を解きにかかった。クラゲのように柔らかくなっていた肢体が、縄が解けてしまった途端、もどけたゼンマイのように弾んで、両手をひろげて私に抱きついてきた。

黒いレースのカーテンを透して壁一面に張ってある鏡に、もつれあう私達二人の姿が、

まるでベールの彼方のシルエットのように揺れ動いている。

自然石を積んだ浴室とのしきりの壁の傍にさっきから赤々と射し込んでいた夕陽が、すっかり、かげってしまっている。釣籠落としの秋の日とは、よく言ったものである。時間としては、そう晩くもないのに、部屋の中はすっかり暗くなってしまうと、隣室に一つ残してきた五〇〇Wの写真電球がベッドの方へ向けて照らしているのが、いやに明るく感じた。

数時間のSMプレイによって、縄とムチによって熱しに熱し、燃えに燃えさかった女体は、私の腕の中で、きつく抱きすくめられていかにも欲求不満が満たされたという安堵の蠢きを見せていた。

今や田中洋の総務課長らしい几帳面に書かれた奴隷宣誓書の通り、江口淑子は、女奴隷としての終末が近づきつつあった。

ベッドに向けて砲口を開いている三脚の上のカメラも、私がシャッターを押さないのでもシンクロで連結された五灯のストロボも徒らに私達二人の痴態を眺めているばかりであった。

創作

花は傷つかない

カット・須坂 旭



(五)

第一日目の成功に気をよくしたのか、責め手は朝から興奮気味だった。おまけに気づかわれた天気も夜明けから青空の見える好天で絶好の野外撮影日和といつてよかった。

「いいなあ、スカッとしているよ」

と熊野。

「天もまた、われに味方するか」

と佐野。佐野は、まだステテコ姿だった。

「さあ皆、早く集まれよ。」

池本教授がお待ちかねだ。

リラックスして頭がよくなったところで、奥村医師を

まじえ、スケジュールの縛り直しだ」

と浦本。みんな、それぞれ満ち足りた表情

だった。花枝は、まだ寝室に閉じ込められているらしい。女たちも、朝食の準備などで出て来なかった。浦本にうながされ、二人は座敷に向かった。黒いテーブルの周りに、座ぶ

とんが敷いてあり、池本が着ながしのユカタスタイルでタバコを、ふかしていた。

「おはようございます」

久留木 栄

第二部

— 花の泪 —

佐野と熊野は異口同音に、あいさつする。

「やあ、おはよう。みんな精気あふれる顔をしているな。ゆうべ、熊野は、ずい分、悲鳴をあげていたようだが。ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、まあ、それはともかくとして、さっそくプランの練り直しだ。皆、ハッスルしすぎて、かなりモデルをいじめたので、このまま七日間ぶっ通しで責め抜くのは、とてもムリ。前半の山を二日目に、中一日休んで、後半の山を五日目にするようにと奥村医師から注意があった。皆、この案は、どうだろう」

「賛成ですね。四日間も同じモデルを責めれば、いささか、あいてきますよ。それに、お嬢さんだから、セックスはタブー。それじゃこちらのコンディションが持ちません」

そういったのは、ただ一人、独身の佐野助教だった。佐野は、もう三十を越していたが、小説家志望で独身主義者だった。この率直な賛意に、どっと微笑がおこった。

「それはともかくとして、もっと精密に奥村ドクターの意見を聞こうではないか」

と熊野。奥村は、うながされて、ゆっくりとした素振りで行診カバンをとりあげ、カルテを、とり出した。

「とくに体の損傷したところはありませんがきのう診察した段階ではショックが、かなりひどいようです。食事も思ったほど進まなかったようですし、不馴れな経験で、ひじょうに緊張していたらしく、疲労が、かなり蓄積されているようです。このモデルの仕事がすんだあと、短時日で正常な社会に働きに出る

あらずじい美貌で独身の女性、水野花枝（二七）は弟香一の大学進学に便宜を図ってもらおうという約束で、大学教授池本八郎グループの出版する、『江戸法制史』のカット写真のモデルになることを承知する。カット写真だけでなく拷問、処刑のモデルでもあった。そして第一日目、花枝は滅茶苦茶に責められ、素裸のエビ責めでその日の仕上げをされた。

ことを考えれば、やはり終了後、二日間の完全休養は必要でしょう」

「なるほど、それで安心しました。ぼくはカゼでも、ひかれたら大変と思っていた。奥村ドクターの意見に賛成です」と熊野。

「わたしも、そうします」と熊野にひきつづき、浦本も賛成した。これで全員、賛成したことになる。池本は白衣姿の奥村ドクターの方をみながら、

「それで方針が決まった。きょうは野外撮影をしよう。本人も、かなり、まいつているよのだが、その半面、責められることにも、なれてくる。それだけに今日は思い切って実行できる。かなり残酷なリンチになることも考えられるので、奥村ドクターには、とくに御配慮をお願いします。何しろ一日目、全裸、えび責めと、行くところまで行ったので、きょうは裸に遠慮することもないでしょう。学問のための撮影は、あくまでも公式論で、脱線自由としておきましょう」

と言いきった。花枝が聞いたなら、卒倒しそうな内容だった。サジストたちは二日目に入って、いよいよ、その本性を、むき出しにしてきたのだ。そのことが撮影班の方にも伝えられると、カスカなざわめきが起こった。

しかし全裸の美人が責められるのを、好まない男性はいない。ざわめきは、ある程度の期待をこめた私語となったのである。サジストたちは、みんな、いっせいに張り切った。

一方、花枝は、そんなこととはツユ知らない。ぐっすり寝ている間に怖い夢を見た。恋人とランデブーしている夢だった。恋人に、いい女ができ、それを追いかけて行こうとするのだが、どうしても追いかけて行かない。体が大地に固定され、足に根が生えたように動かないのだ。ムリに動こうとして花枝は目がさめた。夢は正夢だった。恋人はいず、花枝は昨夜と同じ状態で寝台にくくられていた。「どうしたの、うなされて。どこか具合でも悪いんじゃない」

目を開くと、君代夫人の顔が目の前にあった。もうちゃんと着付けして、帯をしめ、紫の小紋が、まばゆいくらいイキだった。

「あら、まあ……、はずかしいワ。何でもないんです。夢を見ていたようですワ」
「そう、それならいいんだけど、何しろ不自然な状態なので……」

「いいんですの。それより、もうかなり日が高いようですが」

「かれこれ、九時近いんじゃない。起きる」

「ええ、もう」

「それじゃ、手足を解こうね。道子さん、道子さん。お目覚めよ」

と君代は、熊野夫人をよんだ。

道子が前かけで手をふきながら、入って来た。茶色のとっくりセーターに、黒の横縞が巾広く入っていて、いかにも一癖ありそうな衣服を着ていた。

「囚人が、お目覚めよ。用をすませ、フロに入れてきてちょうだい。手足の縄は、といて腰縄だけで行かせるのよ。すべて、本当の囚人並みで行くのだから」

「わかりました。さっそく」

と道子は、うれしそうだった。テキパキした動作で、寝台の四方から出ている手足の紐を解くと、花枝に、束の間の自由が帰ってきた。

「さあ！ 裸におなり。いうことを聞かないと叩くワよ」

と道子は、ぐるぐる捕縄を廻して、おどした。一日目、花枝は泉水のある庭で道子に手痛い、いじめられ方をしていた。それだけにおびえた。まるで夢遊病者のように裸になると、道子はナイロン・ロープを腰に巻いて、

ひったてた。洗面、歯みがき、用便も、すべてこのスタイルでさせられ、朝風呂も、そのまま入れられた。シャボンをつけ、きれいに洗うと、体のところどころに黒いしみがあるように思われ、気になった。それがすむと、パンとミルク、それにブドウという軽食で、卵と生ジュースがつけられた。花枝は、その食事を両手を使わずに食べさせられた。

「もし手を使うなら、さっそく後ろ手に縛りあげてから食べさせるから」

と道子は、おどかす。まるで犬のような、あわれなポーズで食事を終わると、別室に案内され、女たち四人に囲まれて化粧され、きれいな御殿女中風に着付けされた。素裸の上に襦袢、腰巻、長襦袢を一枚ずつ、つけさせられ、腰ヒモを巻き、帯をしめると花枝は、もう美しい生き人形に変身していた。島田をつけさせられ、厚化粧をさせられた。口に紅をさすと、自分でも驚くような腰元ができあがった。

「きょうは設定を少し変えましょうネ。きょうは母殺しの若主人だったが、きょうは謀反をくわだてた腰元としておきましょう。だから、きょうの殺人犯と違って、きょうの拷問の方が激しいというわけなのよ。花枝さん、

十分、覚悟しておいて下さいネ」

「ハイ」

「それじゃ、しっかり、お頼みします。何事も、すべて演技ですよ。そう思わなくっちゃあ。縛りも責めも撮影も、すべて事務的な仕事と割り切りましょう。こうなったら、くよくよしても、はじまらないの。さあ、帯をして、ちょっと立って。少し、きついかしら」

君代の指図は、てきぱきしていた。口も達者である。着付けも巧みで、さすがに名取りだけのことはあった。

着付けが終わると、千波がイスを持ってきた。大柄な花模様の和服を着た千波の左手首には昨夜の名残りだろうか、赤い縄の痕が残っていた。SよりM的と自称する千波は、何かと細かい心使いをする。

「出番まで、あと五分かしら。それとも十分十五分？ 少しでも、楽にしておきましょうよ」

と言う。花枝を、こしかけさせ、自分は、その前に坐り、花枝の足をヒザの上にのせて白足袋を、はかせる。

花枝は、これまで着物の着付けも白足袋をはくのも、みんな自分ひとりでしていたが、こんな多勢の人に手どり足どりでされるのは

初めてだった。それだけに何となく勝手が違い、面映かった。足をピクピクさせると道子が大口をあけて笑う。

「きょうは、どうされるのかしら」

花枝が不安そうに道子にたずねると、道子は、さも知っているかのように大仰に身振り身振りで、しゃべる。

「火あぶりよ。ミノを着せて石油をかけて火をつけるんですって。ベトナムで僧侶がしたのと、よく似た焼身他殺ネ。フ、フ、フ、ていのよい、蒸し焼きよ」

こんな、おしゃべりは、道子の十八番である。浅黒い顔に、いじわるそうな目を、いっぱいに見開いて、おどすのだ。

「うそよ。きょうは楽しい腰元道中ですよ。たいしたことはないの。恰好だけよ」

と千波が耳うちする。どっちにしても同じことだった。初日より楽なはずはない——と花枝が思ったとき、男たちが、どやどやと入ってきた。浦本が、捕縄の束を持っていた。「まず逮捕、つぎが護送だ」

と池本が指示した。それよりも早く浦本が花枝を縛り始めた。浦本の縄は正確で、力強く痛い。花枝はウムウムといって、がまんしなければならぬ。

「本縄」

と教えられていたのだろう。浦本は高手小手から陽菱縄をかける。それが終わるころ、

「唐丸籠」

と池本が言い、映画で、おなじみの唐丸籠が現われた。

花枝は何の映画だったか、よく覚えていないが、勤王の志士が、この唐丸籠に入れられて、江戸に送られる途中、同志が奪回に来るというシーンを見たことがある。そのとき、よくもあんな変な籠に人を入れて運べるものと感心したものだ。こんどは、それに実際に入れられることになったのである。

唐丸といわれる竹で編んだ部分をあげ、中に入れられると、菱型の竹の編目ごしに、すべての人が見え、自分だけが、とんでもない異国へ旅立たされるような気がした。カゴの中に固定され、一切が終わると、

「ヨーン、出発」

と池本が掛け声をかけた。熊野や佐野ら男手でかかえあげられた籠は、ゆさゆさと、ゆれながら裏庭へ。

庭には、しっとりと朝露が降りていた。日は、かなり高くなっていたが、露はまだ残っていた。あたり一面に、まだ涼味が、ただよ

い、空気は澄んで甘かった。

そんな空気の甘さが分かる自分を不思議だと思ふほど花枝は、今朝は、落ち着きがあった。それも、これも二日目だからであろう。

花枝は、ふと「束の間の幸福」というものがあれば、それがこんなことではなからうか——と、ふと、そう思った。花枝は、もう何も考えまいと思った。もともと、こんどの行為に花枝は花枝なりの人生をかけていた。よしんば、どんなにつらいものであっても、そういうときは、がんばり通さねばならない。花枝は、そう覚悟を決めた。人生をかけるといふのは、こういうことをいうのだろう。自由を失った体で花枝は自分自身に言いかけた。

男たちは、カゴをかかえ、裏庭の続きの松林で下が芝生の、恰好な中庭にまで運んで行った。途中、近代出版社のカメラマンは随時待ち構えていて、しきりに花枝の写真を撮った。降ろされてからも、まるで置物みたいにカメラでねらわれたが、そのあと「悪人に襲われた」と、いきなり唐丸籠を前後左右に転がされたのには閉口した。坐って、じっとしていることもできず、花枝は丸い唐丸籠の中を転げ回って、もがいた。

「いや、いやーん」

と小声で思わず悲鳴が出る。これが二日目最初の悲鳴だった。

「この女、カクレキリシタンの腰元であります。いざ、拷問」

と佐野は、あいかわらず芝居気たっぷりである。それをうけて、

「いやさ、そうじゃございません。腰元の罪は謀反でござる」

と熊野も、まぜかえす。

こうした上機嫌の人たちに囲まれ、花枝の二日目の悲劇は始まったのだ。

「引きずり出せ」

「吊るせ」

と指示が、とぶ。

そのたびに、もみくちゃにされたあげく、最初に、まず松の木から吊られた。

その痛いこと！

ギョッと胸が締めまり、腕は抜けるようだ。

それでも爪先立っているから、まだよかったが、もし、それが立てないくらい吊りあげられたら、と、花枝は、ぞっとした。

やがて、それが本格化する。

別の太いロープが腕や胸、下腹部にかけられ、滑車を利用し本式に吊られた。足が宙に

浮いて、ぐるぐる回ったが、じわじわ上げられたので思ったほど痛みは少なかった。体中がしびれ、地球が回るといふ表現が、ふさわしいようだった。呼吸するのがつらく、気が遠くなるようだった。酸素の薄くなった水の中、金魚のようにあえぎ、歯を食いしばって呻き声をこらえるのが、せいっぱい。

降ろされたときは、ぐったりしていた。

それから、立木縛り。

前手吊り。

イノシシ吊り。

両手を上に組んでの吊り。

両手を左右に拡げての吊り。

と、スケジュールは容赦なく進んだ。

こうなると、もう全く事務的であった。羽根を持った人が、くすぐり責めだと足の裏をくすぐるのをアップにして撮ったり、二、三のアクションはあったが、それは花枝を苦しめるというほどのことではなく、撮影のアップのためで、大筋は坦々と進んだ。

約二時間、腰元スタイルで、さまざまなポーズをとられた花枝は、最後は結局、えび責めで、この腰元姿を卒業した。

逆さえび責めで、吊りあげるのに「駿河問い」というのがある。吊りあげたあと、吊る

した縄に、よりをかけ、コマのように廻す、しくみである。こうすると縄は反動で、逆回転し、苦しさは堪えがたいという。この拷問は駿河の代官彦坂九兵衛が創案したといわれ彦坂は慶長十二年、家康が秀忠に將軍職をゆづった時に駿府町奉行に任ぜられたという。この駿河問いにされたのは曾根甚六の妻で、いたって美貌だが淫婦の名のきこえた婦人一度でまいり、この自白で、事件に連座して処刑された者が二十余人に及んだという。

この吊り責めをするかどうか議論が集まったが、結局は形だけでもと、実施された。

これは腰元姿では、とてもできまいというので、長襦袢姿にされたのである。両手足を背中で縛られるだけでつらいのに、吊られるのだ。腹に補強のロープをかけられたとはいえ苦しみは、とても表現できないくらいだった。まげをゆわれ、重くなった頭は、ぐったり垂れ、体も手を離されると、ゆっくり廻った。

「すげえなあ！」

と佐野が、思わず嘆声をあげた。

「こうなると色気より残酷そのものですネ。

早くすませましょう」

と浦本。池本八郎教授も、いささか残酷す

ぎると思ったようだ。撮影班を、いそがせ、そうそうに切りあげさせたが、花枝はこの四日間、身に受けた責めの中で一番きびしいものと思った。

この責めで一息いれた一同は約三十分ほど休憩して、次の行動に移った。

長襦袢姿にされ、後ろ手のまま放置された若い女性は、やはり腰元姿より、ぐっと、なまめかしかった。花枝は女五方に縛り直され松に括りつけられた。正面を向けられ、この日、はじめてサルグツワを、はめられた。

次のテーマは、さまざまなサルグツワという題だったのだ。

口を割った単純なもの。

小豆絞りの和手拭いを鼻の上から、かけたもの。

鼻と口を、たてしばりにしたもの。

亀甲しぼりのサルグツワ。

木の枝を、かませたもの。

割りばしを利用し、舌をはさんだもの。

これらを併用したもの。

日本風のサルグツワにしても、まさに多種多様だった。これらの中で一番、花枝を苦しめたのは舌をはさんだものだった。また一番花枝に被虐感を与えたのは、布やロープを使

った複雑な型のものだった。

まず口に、柔らかい和タオルをつめる。そのタオルが押し出されないよう、巾広い布を口に割り込ませたあと、後頭部から柔らかい綿ロープを首に回し、あごの下で交差。さらにアゴの上、鼻の上で交差しながら、たてしぱり、再び後頭部で初めのロープにゆわえたあと、左右にわけ、口の上の左右二本のロープに通じ、それぞれ左右にひっぱり、再び後頭部に回して、しめあげて結ぶ。こうすると口を中心に、きれいな菱形ができ、口とあごの自由は完全に失われた。その上から赤いシゴキを目の下から、アゴの下まで拡げて、ぐるぐる二、三回、回してしめると、外見の優雅さと異なり、文字どおり被縛者に苦しいサルグツワができ上がった。まずは完全に近いサルグツワだった。

撮影班は一コマずつ、撮影した。そのサルグツワをされると花枝は、ぐっと身がしまった。それだけで責められる女の哀れさを代表するかのよう、もだえた。試みに声を、はりあげたが、声はム、ムと押し殺されただけだった。声を奪われる苦しみ。花枝は昨日、そのことは経験ずみのはずだったが、こう改めてサルグツワを議題にされて、はじめてそ

れを意識したといつてよい。このサルグツワは、ついにこの日一日、夕方まで、はずされることはなかった。長時間のサルグツワが、どんなにつらいものか花枝は、しみじみと体験させられたのだ。

花枝の声が奪われたので、男たちの責めは次第に露骨になってきた。

一枚の薄衣にかこまれた、からだを縦横無尽に縛るのだ。高手小手から始まり、両手両足首まで、まるでカタツムリのようにして、ころがしたり、イモムシのようにして棒に括る。かと思うと逆えびのまま、まるでアクロバットダンサーのような恰好で台にとめる。そのたびに男たちは目を細め、むき出しの肌を、なぜて楽しむ。

ム、ム。

と花枝の口から、うめきがもれる。

立木を利用した木馬責め。

琉球責めもされた。

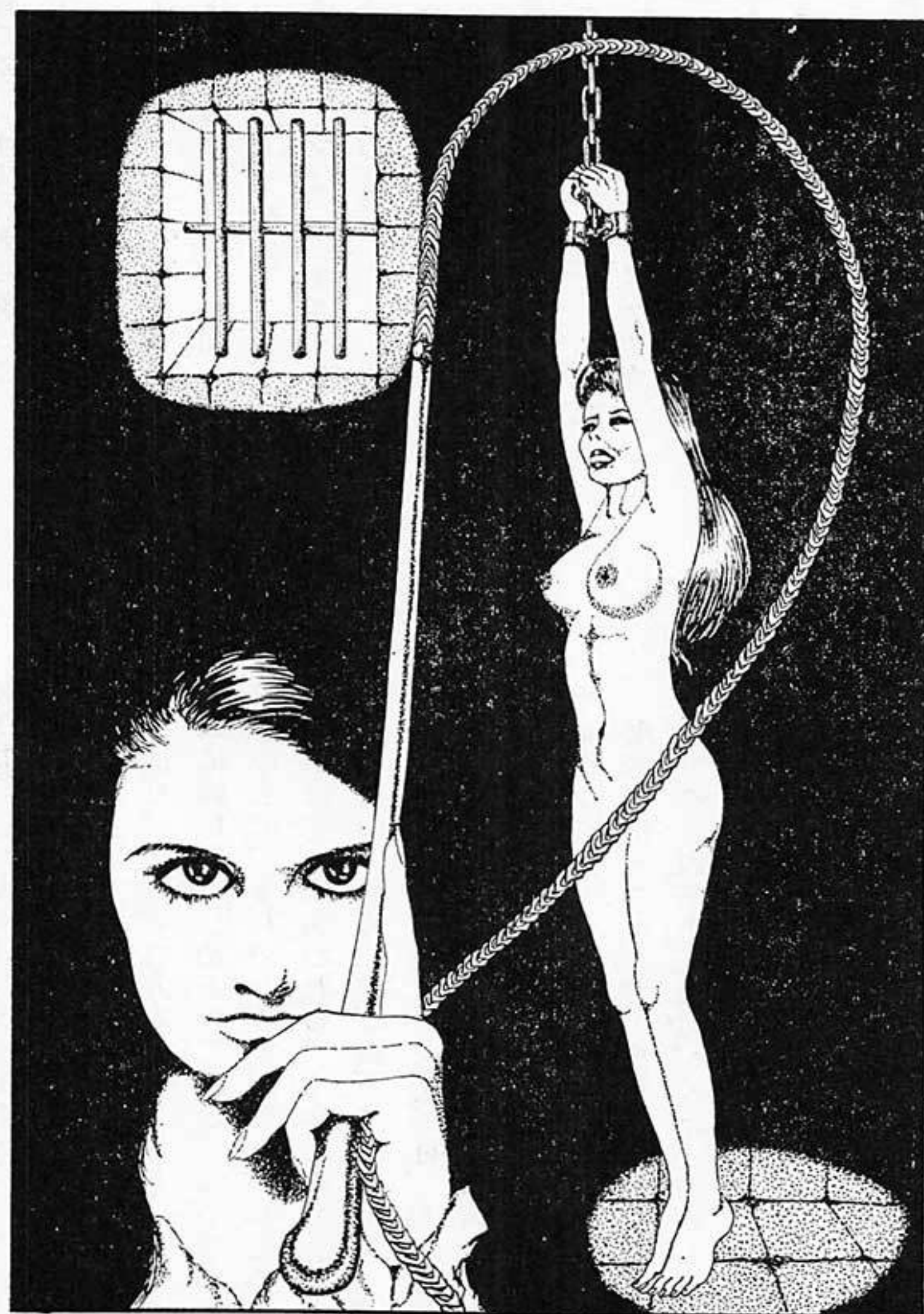
これは片足吊りで、関節がぬけるのではないかという、ひどい責めだった。

腰巻だけ純日本式で、西洋式の下着をつけさせられなかった花枝は、最初そんな姿に抵抗を覚えていたのだが、やがてそんな感情はすっかり払拭され、耐えることだけに全精力

イメージギャラリー

『オンナのたたかい』

飯田ひろくに



を打ち込むようになった。

こうして二時間。人々が、やっと一息いれ
たくなったとき、池本教授は休憩を命じた。

花枝は、ほっとした。

やっと束の間の自由を楽しむことができる

と思った。だが花枝は解放されなかった。そ
の時、花枝は腰巻一枚に、されていた。横に
はった太い松の幹を木馬がわりに、引き回し
姿にされていたのだ。

引き回しは八百屋お七で有名だった。

お七は天和三年（一六六三年）五代將軍綱
吉のころ、三月二十九日に江戸引き回しの上
鈴ヶ森で火刑にされたという。

普通、引き回しの時は、囚人に三寸（約十
糎）回りほどのワラの太縄で腰縄を打ち、さ
らに細引をかけて馬にのせ町中を引き回すの
だ。この引き回しの行列の先払いは非人五人
はた持ちの非人五人、捨札持ち非人三人、槍
二本は谷の者四人、捕道具二本は谷の者四人
囚人付き添いの非人四人、宰領は谷の者二人
小屋頭の非人二人で検使の役は町方与力二人
が馬上で付き添い、下役同心が囚人の人数に
よって何人か従った。はた持ちの持つ紙幟は
乳上の高さまでで横三枚、縦四枚と決まっ
ていた。これは引き回しの囚人の罪状を書いた
もので、火罪の捨札は横三尺（約一米）たて
一尺（約三十三糎）だった。獄門の捨札の方
が横二尺、たて一尺三寸だから大きい。

花枝は、この獄門の捨札は立てられなかつ
たが、火罪の捨札を立てられた。

裸の上半身を菱縄にとめられ、ワラ縄のか
わりに太目のロープで松の小枝にとめられ、
足は足で太い松の幹をまたがらされた上、動
かないよう、それぞれ足首にロープをかけら
れ地上に打ったクイへ引っ張られて固定され

た。長い髪を束ねて、その先に細いロープをつけれ、これまた頭上の小枝につられていたので、自由のきくところは、一つもなかった。

男たちは、そんな姿で花枝を放りだしたまま「疲れた」と浦本が、まず芝の上に腰を下ろした。「腹がへった」と熊野。佐野が「昼食にしよう」と言い、女たちが昼食を運んできた。

「いい気味だワ」

女たちは花枝を見て笑った。そんな花枝をためつすがめつ眺めながら八人の男女は、さもうまそうに、にぎりめしをたべた。花枝はその方を、うまく振り向くこともできない。うらめしように横目で眺めながら、はるか彼方に拡がっている空の青さを、しみじみと鑑賞していた。

「かわいいそうよ」

千波が小声で道子に言った。

「平気、平気。かわいいそうなものですか。あのこ、あれで結構、縛られるのを楽しんでるのよ」

と道子。

「それはそれとして、栄養は補給したらいいでしょう」

と浦本。浦本は終始無言で、手も出さず悠然としていた医師の奥村に、うながした。奥村は注射器を用意し、ブドウ糖とビタミン剤を両腕と両尻にわけて打った。そして、そのあとを女たちに、もました。皮下に打ったのは、静脈に打つには縄をとかねばならなかったからである。それと皮下への注射は痛いことを知っていた。花枝は体をふるわせて、こらえる。女たちが、もむたびに、ム、ムーツと、もだえる。その姿が、たまらないほど嗜虐的だった。

「何しろエクスですから、口を使わずに喰べることは、せつないことですね」

奥村の説明は、はなはだ文学的だった。

約一時間の休憩。

そして午後の日課は、浣腸と導尿から始まった。

花枝は、道子夫人らも交えた八人の男女から、かかえられるようにして、松の木から降ろされた。しびれきった体で立とうとしたが思わず、よろめいた。だが気だけは、しっかりしていた。

奥村医師が、ちょっと診察し、道子に目くばせした。道子は黒い布を持って近よった。

「まだ大丈夫のようネ。これから何が始まるか、わかる」

花枝が顔をふると、
「そうでしょう。想像もできないことよ。それだけに恐怖と興味の連続ね。まず、これで見かくしをするの」

そういいながら手に持った黒い布で目かくしをした。そうしなくても抵抗するはずもないのに、と思っても花枝は、されるままに相手に身をまかせるより仕方がなかった。足だけ縄をとかれただけで、上半身の菱縄とサルグツワはそのまま、こづかれるようにして芝の上を歩かせられた。そして連れてこられたところは、どうやら柔らかな砂場らしかった。

何をされるのだろう。そう思うと、やはり不安でならなかった。目かくしをされ、分からないということは、よけい不安を増大させた。そこで花枝は、両手と胸の間に丈夫な、かなり幅のあるカシの板を、さしこまれた。そして、かなり高い台の上に腰を下ろさせられた。両足首に縄をつけられ、左右に開かれた大地に、しっかりと打ちつけられた棒くいに固定された。上体も仰向けに抱え上げられ、胸と手の間を通した板を、これまた、大地に

打ち込まれた棒くいに固定された。頭は、上の木の枝からヒモを垂らし、髪をひっぱって下腹部が見える程度に固定された。こうすると、まるで宇宙飛行士が空中を泳ぐような恰好になった。

こんなポーズに固定され、尻の下にしかれた台をとり終わったとき、道子が、さもうれしそうにいった。

「さ、準備完了よ。いったい何がおこるか、わかる？ フ、フ、フ。わかってるも答えられないでしょ。オシッコよ。朝から一度もしていないのは体に毒よ。だから、させることにしたの。ボークイは臨時力ワヤなの。下は砂場だから、いくら濡らしたって平気よ。さあ、とっくり自分のポーズを見てちょうだい」

そういって、道子は目かくしをとった。それから、ただ一枚、花枝に残されていた着物腰巻も……だから花枝は、こんどこそ真正銘の裸にされたのだ。しかも何という屈辱のポーズ。多勢の男のみにている前で……覚悟を決めていた筈の花枝も、さすがに泣いた。

そんなことは委細かまわず、奥村医師が花枝のヘソの上あたりに白い布を並べ、そこに金属性の器具を並べて説明をはじめた。

「これがアルコール綿器。この中にある綿で

まず消毒をする。そして、よくもんだうえでこのカテーテルを挿入する。すると君の意志とは、かわりなく尿が、ほとばしり出る。アッシは、カカワリのないことでござんす。と尿が言ったとか、これが導尿だよ」

こんな行為をするとき奥村は、さも楽しそうであった。その説明を聞いて、花枝は初めて何をされるのか知った。しかも逃げるに逃げられず、避けるに避けられないのだ。花枝はいくらもがいても、もう、一寸の自由もなかった。

ム、ムーツ、ムー。悲しい悲鳴がノドから流れ、涙が幾筋も頬を伝った。それを喜ぶように奥村は、ゆっくり、アルコール綿器をとりあげ、綿で指を消毒した。それから、ゆっくりと導尿カテーテルを使い始めた。

花枝は、思わず力を入れた。

ジンと痛みが走り、それと同時にシャラシヤラと悲しい音がしたが、午前中、限界近くまで、ためられた尿は、それから、花枝の意志とは別に激しい奔流となり、大地に、したり落ちた。その無情な瞬間を逃がさず、フラッシュが光る。ライトがつく。カメラと8ミリの放列の中で女の悲しい生理が人間の悲劇を育む。

それがすむと花枝は、しばらくそのまま、放置された。それから、また目かくしされて別のところに運ばれた。おろされてもガックリとして力のない花枝を、男たちは、また別の台座に連れて行った。そこにも四本のクイが打ちこんであり、花枝は、こんどもそのクイと胸の横木を利用して固定された。こんどは仰向けでなく、俯向けである。だから、尻を高々と持ちあげられて縛りつけられたことになる。縛り終わると、再び目かくしがとられた。髪は、こんどは手首に結びつけられ、顔は強引に正面を向かされていた。

「いい恰好ね、どうでしょう。まるでメス豚ネ。こんども何されるかわからないでしょ。いい気味ネ。こうされたらどうするの」

と道子は鼻をつまんだ。嚴重にサルグツワをされているので、それだけで花枝は息がつまり、目を白黒させた。

「あら、うらめしい目で眺めているワ。そんな目をするのは、まだ早いだよ」

道子は、さもうれしそうに手をゆるめ、鼻を放したり、鼻をつまんだりした。

「さ、つぎだ、つぎだ。いたずらは、あとでやれよ」

と夫の謙蔵が注意した。

その間に着々と準備が進み、花枝の顔の前に小さな台が、しつらえられ、白いホローびきのパットの中に大きな浣腸器が並べられた。イチジク浣腸もある。イルリガートルもある。そして例によって奥村が、それを見せびらかせて説明を始めた。

こんどは浣腸されるのだ！

花枝は奥村らの魂胆がわかったとき、奇声をあげて、ほえた。それはムヒョーッという声になった。肩をふるわし奇妙な泣き声が皆に伝わった。だが、その泣き声もサジストたちを喜ばせるにすぎなかった。

まず奥村医師がイチジク浣腸をした。そして脂汗を流して苦しむ花枝を押さえ、道子も楽しそうに笑う。

二分、三分。花枝にとって死の苦しみの時間は、道子たちにとっては愉悅の時間だったのだ。腹がゴロゴロ鳴り、腸が激しく活動をはじめるのが、わかった。そこへ奥村医師は強引にガラス製の浣腸器を挿入しグリセリン液を50cc注ぎ込んだ。

これで花枝の苦しみは倍加し、腸をよじりボークイを、ゆり動かして全身で苦しんだ。だが鬼たちは、まだ許そうとしなかった。強引に押さえつけ便意をこらえさせる一方、イ

ルリガートルをセットし、さらに大量の液をそそぎこんだのである。

花枝は、もう限界に来ていた。全身に力を入れて、きばるが、尻を上突き出されているだけに、力いっぱい押さえられれば、それを、はねかえす力は、そうざらに出てはこなかった。花枝は蒼白になり、全身をもみ、しぼって、もだえ苦しんだ。そのありさまに、だれしも声をのまずにはいられなかった。

ころを見はかり、道子が手をはなした途端爽快な音を出して体内のものが一気に爆発、宙に打ち上げた。すっかり気持よくなって行く肉体にたいし、花枝は別の意味で、自分の肉体があわれでならず、こんどは声を殺して泣いた。

この浣腸で午後の責めはヤマを迎えた。ボークイから解きはなされた花枝は、上半身を縛られ、サルグツワをされたままのポーズでぐったりなって芝の上に伸びた。

青空が美しかった。だが花枝は、その空を見る気はしなかった。青い芝の間から匂ってくる土の香りが恋しかった。人は大地から生まれるという。自分も、そうなのかもしれないと思った。

腸は、まだ大きく、うなっていたが、気分は爽快だった。全力を集中して、土の香りをむさぼりとうとしていた。その土の香りで心が、なごんだとき、花枝はサルグツワをさっていて、ありがたかったと思った。もしされていなかったら、どんなに取り乱していたろうとゾツとする気持だった。

男たちは果然として、この姿を見ていた。はっきりしてだれもしゃべる者がなかった。「よし、しばらく休憩。あとは夜になって」という、池本の声がした。

男たちは去った。女たちは跡片付けをしていたが、道子だけが、あとに残った。

「こういうときは、なまじ動けると悪いものよ。覚悟しなさい」

と、あいかわらず憎まれ口をたたきながら芝の上に残された花枝の両足をそろえて縛り背中の手からめて、去って行った。軽い逆さえび縛りである。これで再び花枝の自由は完全になくなったが、花枝は不思議とその道子を憎む気にもなれず、また、そのような恰好にされることが、はるかに救いであることがわかった。しかし全く自由を失い、放置されることは、予想以上に怖い責めだった。犬の遠吠えが聞こえ、蚊が襲う、ア리가くう。

そんな中で、微動だもできず、首をふるだけの自由だった。

口の中のつめ物は、すっかり唾液でべとべトになり、口の端から外に流れていた。その口も顎も、だるく、鼻だけでする呼吸も決して楽ではなかった。唾液にぬれた顔の菱縄が締めり頬が痛かった。このまま縄の跡が青血となつてついたら、どうしよう。その不安はそのまま、社会復帰する日のおそれに連なつて行つた。

そんな苦しみにもまして、諦めの精神は、やってくる。

この苦しみも、すべては香一のため、香一の幸せだけが生き甲斐なのだと思いながら、花枝は必死になつて自分の苦しみを、幸せに変えようと努力する。

いつしか花枝は、うとうとと、する。

はつと思つたとき、もう夕暮れが迫つて、男たちが自分を取りまいてゐるのを知つた。

(六)

部屋の中は明かるい光線で、まぶしいくらいだった。やつと口からつめものをとられ、後手だけにされた花枝は、シャワーをあびせられ風呂に入れられたあとで、肉とスープと

パンの夕食をたべさせられた。それから約三十分、休憩させられたあとで、スタジオの間に案内された。

そこは、約十六畳ていどの部屋で中央に赤いジュウタンが、しいてあつた。四周に安楽イスがあり、人々は、そこに腰かけていた。

花枝は、ジュウタンのまん中にすわらされた。すっかりリラックスした花枝は極めて柔順だった。それに素裸にも、すっかりなれてゐた。きのう、きょうと考えてみれば、余りに大きな変化だった。

「そうやってゐると、連れてこられたときのことか想像できないよ」

と浦本。

「たしかに変わったね。でも、それは場なれしたというだけで、女らしさや、その本性は変わっていないよ」

と奥村。熊野夫妻は珍しく大口でしゃべらず、ヒソヒソと何か語つてゐた。

「足を前に出して」
と池本が命じる。

花枝は、いわれた通り足を前に出して坐つた。池本君代と浦本千波が部屋の片隅から、ぶあつい四分板のカセを持ってきた。四分板を三枚あわせて作つたもので、その板の両端

近くに穴がくつてあつた。穴は約七十センチくらい離れたところにあり、内側にラシャがはつてある。穴の中央で板は上下にわかれるように作られており、池本の指示で佐野が花枝の両足首をそこにはめ、上の板をしめて錠をすると厚くて重くてきびしい足カセとなつた。

上の板には中央部に穴があり、そこも、とりはずせるようになっていた。その上の板をとり、

「身体を曲げて！」

と佐野は花枝の背中の手首を持ち、ぐつと前に引っぱると、花枝は拝むように前にたおれた。その身体を強引に押し曲げ、板の中央の穴に首をはめると、すばやく上の板をはめピンと錠をかけた。花枝は、こうして一枚の板に固定されたのだ。無理に、はめさせられたのでヒザが曲がり尻は浮いて全く無格好な首かせとなつた。口につめものをされてゐないので、いかに我慢をしていても、悲鳴が洩れた。しかし、なれるにつれ体重がアゴにかかつてきて、しだいにアゴを動かすこともできなくなり、涙がポロポロとこぼれた。施されたときは、そうひどくないと思つてゐたが、時がたつにつれ、かなりひどい責めであることが、わかつてきた。

「よし、そのポーズだ、決まったぞ」

と熊野は写真班を督励して撮影に大わらわだった。ムキ出しの尻に、スポットライトが当たって、美しかった。その尻に、だれかが

赤エノグの落書をした。赤いジュウタンの上にビニールカバーをしいてボディペインティングをはじめたのだ。背中にも筆がのびる。ひやつとした感覚に花枝が身をすくめた途端



……僕
のイメ
ー
ジ
画
集

『忘れ物』

エルンスト作・より
魅惑の国

室井 亜砂路

誰かが足のうらを、くすぐった。と背中の縄を尻の下に通し、カセの前に持ってきた男もいた。その縄をひっぱられ花枝は、さすがにうめいた。しかし、こんな責めは序の口で、脇腹を存分に、くすぐられると、花枝はたまらず派手に悲鳴をあげて、もがいた。

だが、かれこれ二、三十分も、たったであろうか。無理なポーズに花枝の目がひきつりはじけると池本は、すぐ中止を命じ、首カセをはずした。花枝は手を下にしたまま、長々とのびた。その手の縄をとき、手と首を別の一本の板にはめ込む作業は、たやすかった。

口に金属のボールを食わせ、その両端の鎖を頭の後ろでとめる。さらに、もう一本、首にのびた鎖をカセに固定すると、もう花枝の顔は、どうにもならない、羽根を渡された責め手が、脇腹や乳房、足の裏をくすぐるたびに花枝は、こんどは、のぞけて、もだえた。

背中へ、えのぐでよごされていたが、胸はまっ白だった。乳房は形よく、天井をむいていた。その形のよさ、美しさが、男たちの目に鮮かに灼きついた。

しかし、こうして責め手も飽きがくる。

そうなった場合、一番飽かない責めは、やはり、縄による縛り方と、布のサルグツワで

ある。ツメ物をされ、赤いシゴキで縛られるサルグツワは花枝に、よく似合った。

忽ち、後ろ手、サルグツワ姿に変えられる花枝は思わず肩で息をつく。白い肌が紅潮し乳房もピンク色に変わっていた。その膚をうめる白い縄は鮮かに花枝を荷造りし、いかにも束縛を受けた女囚らしい雰囲気と周囲に与えていた。一見優雅だが、残酷さはカセ以上という方円流の縄は、足をあぐら縛りにすることによって完成する。骨の柔らかい花枝は両足首を、それぞれ別の足の、ふともものにのせ、いわゆる座禅縛りにされる。その縄が足首から、ふともものに喰い込む。

高手小手で鋭く背中に括られ、高く吊られた腕からのびた縄は本菱縄で胸をしめつけ、肩から二の腕、乳房へと回り、一寸のスキもないよう女体を締めつける。上半身を、ぎゅっとまとめた乳房の下結び目から下腹部のヘソの上の結び目に移った縄は、新たに生きもののよう股間に伸び、そこに結び玉をつくり、尻から背中に回る。大もものつけ根を縛り、尻を縛った縄と背中では合流し、手首に連なる。

こうした徹底した縛りは縄につかれた者の悦楽であり、池本八郎のもっとも好きな責め

だった。池本は、こうして荷造りした若い女を長い間、床の間に飾って鑑賞する。時たま乳房にさわり乳首をなで、ノドに手をやってふせりがちの顔を上向かせ、じっと花枝を眺めるだけである。いつの間にか花枝は責め手から抱きかかえられ、スタジオの間から日本間に移されていた。日本流の縛りには、やはり日本間の方が、よく似合った。池本八郎は君代と差し向かいながら、いい風情ね、と床の間の柱につながれた花枝をみながら、お茶をたて、賞味した。

花は平常心で活けねばならないという。女を責めるのも平常心を失っては、いけない。ともすれば極端から極端に走りたがる池本教室のサジストたちを抑制し、ともかく饗宴を楽しく続けさせるには、やはり平常心が必要だと、池本は思っていた。そういう心掛けがやはり縛りにも責め方にも出るものである。

「あとは、おまかせします」

と、まず熊野夫妻が去った。意地の悪い道子夫人にしては案外あっさりした引き揚げ方だった。聞くところによると、きょうは交替で道子夫人の方が責められるのだそう。そういうえば、千波夫人も早々と姿を消し、奥村は看護婦の迎えに渋々ながら立っていった。

写真班は、花枝がスタジオから移されたときから自宅に帰るべく、それぞれ友達の自家用車に便乗して町に出て行った。従って最後まで残されたのは佐野良造助教授だけだった。「いよいよ二日目も終わったね。まだ名残りおいしいようだが」

「ハイ」

「独身は、つらいな」

「どうも」

「これからどうする」

「まだ、あす一日、暇がありますので、家に帰ります」

「家といっても下宿じゃないか。どうする」

「せんべいぶとんをしいてねます。花枝さんの美しい裸を思い浮かべて楽しみます」

「バカ、そうか、君は惚れたのかな」

「ちがいます、そんな！」

「何、遠慮なくてよいよ。君の独身主義は知っているが、年齢的には似合いのカップルと思うが」

「でも、とても……」

「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ。もっとも君がほれても花枝さんにいい人がいたらダメだよな。それに花枝さんはマゾヒストではなさそうだし、君みたいなアブノーマルな男には惚れな

いよ。だが、もし万一、好きになったら、大切にしてやるんだな。こんな弟思いの性質のいい女は、いま時いないよ。惚れたら仲人ぐらいは、つとめるぞ。しかしネ、何度も念を押しておくが、君の小説ぐるいと独身主義がなおらないかぎり、不幸を見るのは女だからな。女は肉体的満足だけでは、事足りないのだよ。精神と肉体と双方、十分満足させて、やっとはじめて一人前になる、ガメツイ人種さ。ま、単細胞な男とはわけがちがうのさ」

「それはわかっています。でも、こんなきれいな肉体の人を始めて見たもので……」

「それもそうだな。君は良家の子女の裸は初めてだったのだね。それじゃ興奮するのも無理なからう。それにつけても独身主義は早く捨て、身を固めるんだね。君の能力からすれば、身分さえ落ちつければ教授の地位も間近いだらう。外遊も、あっさり許可されるかもしれないネ。それもこれも、君が選ぶ道だからこんな機会に、ゆっくり考えてみたらよからう」

「ハイ」

佐野は、そう返事すると、いかにも未練たつぷりに出ていった。どこかしらオッチョコチョイで、憎めないタイプの男だった。その

男が稀にみるほど頭脳明晰というのだからオドロキである。花枝は縛られたまま、この師弟のやりとりを興味深く聞いた。

いつしか、あたりにだれもいなくなり池本夫妻だけとなった。

「もう少し、我慢するんだネ。君には悪いがわしらも楽しませてもらうよ。こうしないと中々興奮しないし、滅多に家内を満足させられないんでネ」

と教授は何だか、すまなそうに言い訳けし花枝の横に床をとり君代夫人といっしょに横になった。夫は、質素な一重物の寝巻をきていたが、君代夫人は目もさめるような美しい緋の長襦袢を着て、ぬけるように白い細い手うなじをのばして、教授にまつわりついていた。

教授は君代夫人のキリリとした伊達巻をはずすと上半身を裸体にし、その細い手首をわしづかみにして背中に回し赤いシゴキで緊縛した。それから、ゆっくりと上半身をおこし、長い長いくちづけをした。教授は、ためらわず、まるで花枝の存在を無視したようにたんたんと夜の営みをはじめたのだった。

花枝は、まだ独身だったが、初恋の人に躰を与えていたので情事の経験はあった。だが

夫婦の営みは見たことも、聞いたこともなかった。明らかにみせつけられたのはこれが初めてだった。昼間の責め、夜間の責めを通じこれは、ショックなクライマックスだった。花枝は目を皿のようにして夫婦の営みを眺めた。もうかなり年老いた夫婦だったが、池本夫妻には子がなかった。それだけに君代夫人の体はまだ若々しく、顔に似合わず、膚は、つややかであった。赤いしごきや緋の長襦袢のせい、それとも心地よい興奮のせいか、まっかにそまった躰を、さらしだすのを別にかくそうともせず、夫婦は、しだいにあえぎを昂めはじめていた。

花枝は、まんじりともしなかった。きびしい縄目、サルグツワが、このとき程うれしかったことはない。昼間流腸の後で放置された時もそう思ったが、こんどは別の意味でそう思った。教授は学生のころ法律、刑法を学んだが余技に江戸文学を研究した。それが逆に国文学を専攻させる破目となり、こんど江戸法制史を書かせることになったと熊野から聞いていた。漢文にも造詣が深く、論語、孟子も講義したことがあるそう。考え方はエビキュリアンだが儒教的なところもあり典型的な日本人だそう。花枝は、ふと、そういう

熊野の解説の言葉を思い出した。儒教といえ
ば父も漢籍を、よく読んでいた。

「五十而立」と口ぐせのように言って母を笑
わせたが、三十而立を五十而立といった言葉
が、いまわかるようであった。父はまた、己
の欲するところに従いて則をこえずといった
が池本もこの言葉が好きだそうだ。きょうの
池本のセックスは或はまた、そんな行動かも
知れないと思った。自殺した三島由紀夫の不
道德教育講座に「サルトルは一番わいせつな
ことは、サジストに縛られた女という」と書
いてあったのを読んだことがあったが、花枝
はそんなことはないと思った。縛られた妻と
行なう性行為であったが、池本たちのは真剣
で少しも、みだらに思えなかった。

だが、それでも花枝は、からだだが、ほてっ
た。花枝のほてりは、やはり若さだったのだ
ろう。こうして二日目の日課は、ともかく終
了したのだった。

花枝は、まんじりともせず、禅僧のような
気持で、強制座禅を裸で、とり続けていた。

(七)

その夜、花枝は夢を見た。

阿蘇の草千里を走っている夢だった。時に

は白雲のように、ふんわり浮かんで、広大な
山腹を遊泳していた。湖のように水のたまっ
た草原を白馬にまたがって、かけぬけるかと
思うと、放牧された牛馬を追って情熱をたぎ
らせる。健康で明るい陽光が、てりはえ、そ
の中を裸体を惜しげなくさらして、花枝は自
然の子になろうとしていた。

突然、何の脈絡もなしに父や母の顔が浮か
んだ。父は生前の若い時の顔と少しもかわら
ず、いかめしく脂ぎって男くさかった。それ
に比べると母は、そそとして優しく、細面
の白い顔が、うれいを帯びていた。父も母も
全盛期をすぎ、何となくセンチメンタールに
見えたのは、やはり池本夫妻の情事を見た、
せいだろうか。

とある朝^{あした}一つの花の花心から
昨夜^{ゆうべ}の雨がこぼれるほど

小さきもの

小さきものよ

お前の眼^{まなこ}から お前の睫毛^{まつげ}の間から
この朝^{あした} お前の小さな悲しみから

父の手に
こぼれ落ちる

今この父の手の上に しばしの間温かい
ああこれは これは何か

それは父の手を濡らし
それは父の心を濡らす

それは遠い国からの
それは遠い海からの

それはこのあわれな父の ^{ふるさと}その父の
そのまた父の まぼろしの故郷からの

鳥の歌と花の匂いと 青空と
はるかにつづいた山川との

——風のたより

なつかしい季節のたより

この朝^{あした} この父の手に
新しくとどいた消息

(三好達治詩集から)

突然、花枝の胸に三好達治の詩、「涙」という題の文句がよみがえった。古本屋で買った新潮文庫三好達治詩集の四十八ページ、草千里の中にある、詩である。父母を失ったば

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	四〇〇円(送32円)
三月分	3冊	一二〇〇円(送共)
半年分	6冊	二四〇〇円(送共)
一年分	12冊	四八〇〇円(送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたたいという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○六月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分三十二円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

かりのところで、この感傷的な文句がすっかり花枝をとらえたので、くり返しくり返し暗誦するまで覚えていた。

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず「現金書留」にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料四三二円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたします。御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に八本号にて前金切の判を捺印致します。継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

小さきもの
小さきものよ

お前の眼から お前の睫毛の間から
この朝 お前の小さな悲しみから

父の手に
こぼれ落ちる。

花枝はこの日、数多くの涙を落とした。この泪と、この詩の涙と、どちらがうのだろうか。三好達治のこの詩は、純日本風の美しさがあると評されたものだが、池本の生活態度にも、花枝の父の生活態度にも、そんなところがあつた。

そして霊山といわれ、火の山といわれた阿蘇山にも、そういうところがあるのだろう。阿蘇はゴツゴツとした溶岩におおわれた男性的な山だが、草千里は阿蘇の泣きどころであり、その池の水は、阿蘇の泪ではなかったのか。目がさめてから、夢を思い出しながら花枝はふと、この苦行が終わったら、ひとり阿蘇山に登ってみようかな、と思った。

カット・岡 かし



空前の時代劇ブームというか、時代劇の話
題には事欠かない昨今です。

そこで、現在放映中のものや、再放送の
のをふくめて、テレビ時代劇に現われた猿ぐ
つわのシーンの数々を、簡単なシチュエーシ
ョンをまぜながら紹介してみましよう。

倒産した旧大映が、全国の時代劇ファンを
対象にして、時代劇のヒーローを調査したと
ころ、ベストテンの中に五人まで捕物帖の主
人公が入っていたという通り、テレビの視聴
率も、また捕物帖ものが水準を超している
ということだ。

そして又、猿ぐつわのシーンも、捕物帖が

△テレビ時代劇より▽

茶の間に現われた

猿ぐつわのシチュエーション

鳴山 能平 (スチールも)

圧倒的に群を抜いているようです。

○

半七捕物帖「青山の仇討」

御存じだとは思いますが、岡本綺堂原作の
「半七捕物帖」は、明治まで生き残った、三
河町の半七老の昔がたりという形式で、幕末
に起こった、いろいろの事件の謎をとく、言
わば捕物帖の元祖で、リアルな筆づかいで当
時の江戸風俗が豊かに描写されている、格調
高い文学でもあります。

さて、テレビの「青山の仇討」では、青山
一帯を正体不明の盗賊が荒しまわりますが、
問もなく大店の金右衛門が襲われて、重傷を

受けます。そして、次々と金右衛門一家に嫌
がらせや、呪いのような出来事が続き、つい
に娘のおさん(水の江じゅん)までが誘拐さ
れます。

この時、おさんは青山の古寺の押入れの中
に監禁されており、後手に縛られて手拭いで
猿ぐつわをされて、すすり泣いているのです
が、紅梅と白梅を散らした、萌黄色の着物に
黒と赤の昼夜帯で、横じまの男の兵児帯で胸
を一巻き二巻き。猿ぐつわの手拭いは唇と唇
の間を割って噛ませてある、というスタイル
でした。そして画面は

「押入れの襖が開いて、二人の男の腕が荒々

しく、おさんの体をかかえ出す。

(お前の髪が、いるんだ)

と一人が、おさんの髪に匕首をあてる。

(あっ、いや、いや)

と呻くのも構わず、切り落とすと、又、おさんを押入れの中に投げこむ

後は、おさんの泣き声が続いて顔のアップになるのですが、原作には、この髪切りの場面はありません。

しかし原作では、おさんと、いとこの娘が矢張り拐かされて、二人が、お互いに、助け合って、縄抜けする描写があるのです。この半七は平幹二郎ですが、長谷川一夫がTBSで以前、半七捕物帖をやっています。こちらはお堅くて、同じ「青山の仇討」でも、おさん(入江若葉)は、縛られてもいず、ラスト近くに従妹と一緒に、物置からノコノコ出てくるのです。

撮りようにより、脚本のつくり方によって画面が、かくも魅力がなくなるとは、期待を裏切られて舌打ちしたくなるものです。

さて、話を前に戻して、題名の「青山の仇討」とは女敵討ちのことなのです。

金右衛門の従妹を、女房にしている茂兵衛(梅野泰靖)は、女房を愛する余り、金右衛

門との仲を、かんだり、揚句の果ては女房を

手につけて、遂に金右衛門(神田隆)一家に残忍な復しゅうをするのです。思ひがいはいえ、皮肉にも茂兵衛が盗賊の首領であることが半七に判って仕舞うのです。

「子分と一緒に半七が古寺へくる。押入れを開けてみるが、おさんはいない。

(親分、誰か人を入れていたようですね)

(ほかは?)

と、尚も探すと

(半七! これをしろ!)

と、盗賊の一味が、縛られて、猿ぐつわのおさんの胸もとに刀を突きつけている

と、いう一編でした。

縛った女に刀を突きつけて、相手の战斗力を奪うというシチュエーションは数多くの時代劇に使われていて、もっと変わった趣向が欲しいところですが、まあ、この半七捕物帖では原作にない縛りの場面が結構、出てくるのです。

○

「十五夜御用心」

これは第一話ですが、ファースト・シーンから、常盤津の師匠(南田洋子)が、地廻り(小林昭二)に夜道で乱暴される時、猿ぐつ

わが出てきました。

小さく折りたたんだ手拭いを師匠の口に押し込むという演出でしたが、男に押し倒された年増が、猿ぐつわの奥で呻き、身もだえる姿態は、妖しい、なまめかしさを持って、茶の間に伝わって来たものです。

次は、娘を長持ちに入れて、という一編。

○

「鷹のゆくえ」

演出はベテランの石川義寛で、脚本は新鋭の津上忠です。

開巻冒頭に(滝沢修)のナレーションが入るのも毎度のこと、江戸情緒のムードを盛り上げます。

「この捕物は一風、変わった捕り物として、生き物の捕り物と、もうしましょうか。

將軍様が鷹狩りに使う鷹を扱う役をお鷹匠と云って、大そう威ばったものだそうです。

そのお鷹匠が、近くの野外に鷹の訓練にいて、帰りは近くの宿場の遊女屋へ泊まるのが例だったそうで」

と、テレビの画面に合わせてナレーションがダブって、事件が起こります。

三井欣之助という役付き寸前の鷹匠が飼育している「雪の矢」という鷹が逃げて仕舞い

事が表沙汰になると困るので、半七の登場になる訳ですが、その欣之助の恋人に菊という娘（田中せつ子）がいて、身分違いの思惑から、晴れて祝言出来ない状態にあるのですがこの菊に横恋慕しているのが、欣之助と同じ同僚の蔵島という鷹匠です。そして更に、放蕩三味の吉井という鷹匠も、からんで、前者は邪恋のため、後者は金のために「雪の矢」の緒を切って逃がすという策略を用いた訳です。

さて画面は、そのからくりが次第に解けて来て

「菊が台所で一人、炊事の仕度をしている。

背後から突然、蔵島が襲いかかって、菊の口を掌で寒ぐ。

（うー、うーん）

と帛を裂く、呻きがもれる。

舟宿の前に、蔵島が大きな長持ちを、大八車に載せて、人足と共に来る。

舟宿の娘お仙（中村玉緒）とか、船頭善太

（花沢徳衛）が、目覚め見つけて、

（こんどの事件にかかわりあいのある鷹匠の

蔵島が、今ごろあんな荷物を？）

（うろん臭いね）

（よし、任しといて下さえ）

と、大八車に駆けよって、長持ちをおろすのを手伝うふりして、わざと地面に落とす。

（うー、うー、うーん）

という、押しつぶされた菊の悲鳴。猿ぐつわから、もれる声だ。

ぎょっ！ とした蔵島が

（こわれものだ、大事にせい）

と叱るが、事を荒だてる訳にもいかず、せかせかと、川舟に長持ちを運び入れる。

（姐さん、中味は人ですぜ）

（じゃ、半七親分を）

（合点だ）

となつて、半七が駆けつけてくる。

そして、菊を助け出すことは、もちろんで

すが、長持ちの蓋を開けた時、黒布で口を縛られた菊が、上半身を起こします。

この時、猿ぐつわのかけ方は、まあまあなのですが、手の縛り方が、いけない。

胸に二巻きほどのロープも、たるんでいて

菊が立ち上がったとき、なんと手が、スポツと縄から抜けているんです。

これには、苦笑しました。

縛りにだって、リアリティは必要です。

このことについては後述しますが、あと、

半七捕物帖の「蜘蛛のゆくえ」という一編に

も、袋蜘蛛という奇妙なバクチに負けた男の娘が、借金のかたに売り飛ばされる羽目になり、神社の奉納堂に、閉じこめられている時後手の猿ぐつわがでてきます。

○

ところで縛る方と縛られる方との人間関係は、いろいろと複雑で、それが親子であるという設定は、なかなか難しいものです。

よほど、物語の骨組や構成が、しっかりしていないと、不自然さが目立つものですが、それが無理なく納得し得た話に、同じく半七捕物帳「白蝶怪」というのがあります。

例によって、滝沢修のナレーションが、

「江戸の秋もふかく、その頃、町のあちこちで、闇夜に白い蝶が飛び、それを見たものには、たたりがある、という噂が流れていました。そこで町方でも、ひそかに探策の手を伸ばしていました」

と名調子を聞かせて目黒坂下の浄雲寺の門前に、白い蝶を怪しげに舞わせて、御家人の娘おきたと、おかつを登場させます。

（こんな肌寒い晩に、どうして白い蝶が？）

（死んだ人の魂が蝶になって、お墓からでてきたのよ）

（いやよ、そんな話）



と、二人をすがりつかせ、三河町の半七と子分の亀（河原崎長一郎）が通りかかって、事件の幕あきです。そして次々と登場する男女の愛憎絵巻が、白い蝶にからんで展開されやがて事件は、一つの原点に絞られていきま

す。

もと羽織芸者のおかめは、ある大店の隠居に囲われていたが、二世をちぎった御家人の二男吉田幸之進と共謀し隠居を毒殺します。ところが、男がおじけづいたので、一旦、江戸を逃がれて、はるばる長崎まで落ちて行き、そこで唐人から、風の強い月夜の晩に、紙で使った白い蝶を砂糸で飛ばして、千人の人を驚かしたなら、どんな望みも叶えられるという呪術を教わりま

す。

もう一度、幸之進と、よりを戻したい一心で、江戸へ舞い戻った、おかめ（岸久美子）は、色仕掛けで千石取りの旗本屋敷に住みついて、実の親の火廻り藤吉に助力を求めます。

藤吉は、ある思惑から、自分の職を利用して、白い蝶を何回か飛ばしたもののそれが次から次へと人の死を招く事件となつて渦巻いていくのに、こらえきれなくなつて、遂に覚悟を決めるのでした。屋敷の離れの一間で、おかめが紙で白い蝶をつくっている。

庭から、そつと藤吉がくる。思いつめた、青い形相――。

（おかめ。こんな、なりゆきになると思ったら、はなから引き受けるんじゃないかった）

（実の娘を芸者に売って放蕩三昧したくせに今さら、この妾に、そんなことがいえるのかえ）

（だから俺も、ともども、お裁きを受ける。

二人そろって自首して出るんだ）

（いやなこった。お父っあんは、せいぜいで寄せ場行きですむけれど、妾あ三尺高い獄門首だよ）

（それじゃ、俺が、こうして頼んでも……）

（ああ、嫌なこった。妾あ晴れて、甲之進と夫婦になりたいんだよ）

（このあま！）

と、おかめに、おどろかかす藤吉。

（あっ！ 何をするんだよ――）

と、さからうのも構わず、赤い扱帯を取つて、おかめを後手に縛り上げて――

と、いうシチュエーションですが、お話の内容は、皮肉なもので、それ程までして、惚れた男の心をつなぎとめようとした、白い蝶の願いは、何の願いも叶えてくれなかったという一編でありました。

尚、脚本は、「三匹の侍」など、時代物を手懸けている大野靖子です。

続けて、今一つ、縛られ役が孫娘であり、縛り役が祖父であるという関係のものを、紹介してみましよう。

○

逃亡「松本清張無宿人別帖より」

脚本は成口沢昌茂。縛り役の祖父が永田靖で、縛られ役の孫娘には、三田佳子が扮しています。

無宿人なるが故に、世間から白い目でみられ、目明しからは、つけ廻される男が、ひょんなことから知り合って、思ひしたわれる仲間になった娘の家に、厄介になるのですが、世間は飾り物職人を通っている祖父の仕事場で、二人は、にせ金づくりの正体を知ってしまいます。

一味のため男女は、その場で荒縄で縛られ娘のほうは、豆しぼりの手拭いで、顔の半ば以上を覆う、猿ぐつわまでされてしまうのです。

その時、老人役の永田靖が、

(かわいそうだが、仕方がない)

と豆しぼりで、猿ぐつわをはめようとするのを

(あっ、いや、いや)

と叫んで、娘役の三田佳子が、顔を振って

逃げようとするシーンには、胸がうずいたものです。

その後、男の前に転がされている娘のアップが続いて、テレビの画面一ぱいに、豆しぼりの猿ぐつわが映り、次週へ続くとなった訳です。

次週も、娘の猿ぐつわのアップからはじまり、男と、にせ金づくりの一味の争いを、自由の利かぬ身を転がして、又、口の利けぬ顔を横に振って争いを止めるという芝居も入っています、

(可愛い孫娘の声も聞けぬようではの)

という自嘲の交じった老人の、せりふがあつて、娘はやっと猿ぐつわをはずされ、縄もとかれて、男と一緒に逃がしてもらえるのです。

以下のストーリーは省略しますが、この、「逃亡」の脚本は大変、良く出来ていたとか三田自身も大変、この孫娘役に乗気であったとか。また成沢と三田の間にロマンスが生まれたという、芸界のゴシップが週刊誌を一時賑わした事を付加しておきましょう。

再放送を期待しているのですが……。

○

——その妖盗は夫婦の猿ぐつわを、あらため

つつ、

「これ、女房どの」

やさしくいい、女房のお千代の肩へ手をかける。お千代は二十一歳の豊満に熟れた肉体を寝床の上へ横たえている。手くびも足くびも縛られ、はだけた襟元から——中略

妖盗は、猿ぐつわをさせた、おきぬを犯しはじめる。

「おお、これは、たまらぬ。この肌ざわりのころよさ……」——。

これは、池波正太郎の「鬼平犯科帖、妖盗葵小僧」の一節です。

この小説はオール読物に連載されていたが、いわゆる謎ときの捕物帖と、ちがったパターンの捕物であり、連載一つ一つが独立した短編であり、それがまた、大きな一つの長編になるという力作です。

ヒーロー長谷川平蔵には松本幸四郎を迎えて、その他、竜崎勝、淡島千景などのレギュラーのほか、毎回多彩なるゲストスターでテレビ化され放映されたのは昨年の春でした。

しかし、「妖盗葵小僧」と「斬込み」(後述)の二編は、その内容からいって、テレビ化され、お茶の間でお目にかかれるとは期待していなかったが……SMは今や時代の要求

か？ 意外とたやすく、製作陣にも、そう抵抗感がなかったらしいようです。

ところで「妖盗葵小僧」の内容は、

「日本橋の両替商、京屋の台所では、番頭はじめ奉公人が縛られて、黒頭巾の一味に抜き味でおどかされている。——やがてその表を火付盗賊改め方の役人が通りかかると、京屋の潜り戸を開けて、りゅうとした黒紋付に、白柄の配刀で、黒縮緬の頭巾の武士が、供の四、五人を連れて、何喰わぬ顔ででてくる。一旦は、やり過ぎた役人が、不審に思っ

て京屋の戸を叩くと、先刻縛られていた番頭が顔を出して、

（御苦労様でございます。何事も手前共には

ございませんと挨拶する。

と挨拶する。

さればと先程の黒頭巾の武士を追って、訊問すると、

（無礼者。葵の御紋が目に入らぬか！）

と大喝されて、火付盗賊改め方の役人は平伏する。

という発端である。

役人の報告を受けた火付盗賊改め方の御頭

（長官）長谷川平蔵は、事件の匂いを嗅ぎ、

京屋方を見張らせ、京屋をたくみに誘導して

当日の事件の真相を聞き出した。

「その夜、奥の間では京屋夫婦が、寝衣すがたで後手に縛られ、黒布で猿ぐつわをされて坐らされている。

黒紋服の首領、葵小僧は、

（女房どのの美しさ。さすが、世のうわさにきこえただけのことはあるのう）

と芝屋がかりに気どって、女房のお千代の肩へ手をかけると、そのまま押し倒して、のしかかっていく——」

原作では、前に掲げた描写のほかに、曲者が、お千代を凌辱する、執拗な巧緻をきわめた愛撫の描写があり、またお千代のしかめた肩が、ひくひくとうごいて、次第に歓喜の様子を露呈する状影が描かれているのだが……さすがにテレビでは、そこまで映していない。

しかし、テレビはこの色好みの妖盗の行状を追って、女や娘を縛って、凌辱するショットを入れ、小間物屋、日野屋文吉の女房おきぬを犯す場面となる。

「妖盗が声色を使って、日野屋の潜り戸を開け、奥に侵入する。

奥の間で、並べた布団から半身を起こした日野屋夫婦に、盗賊達が黒布で猿ぐつわをするやいなや、葵小僧は、女房おきぬの顔を、

猿ぐつわの上から觀賞しつつ、

（さすが評判の日野屋女房。おお、この美しさ。ふ、ふふ、このような逸物を一人じめにするとは……）

と、押し倒して、なぶりはじめる」

妖盗、葵小僧は（早川保）ですが、全然ミス、キャストでした。

そして、この將軍家の葵の紋章をつけた、役者くずれの強姦魔も、最後に平蔵に斬られて、気の毒な女たちの秘密は、一切、平蔵の胸にしまわれて終わったという一編でした。

○

「斬込み」

これは、富士真奈美が縛られて、手拭いで鼻口を覆う猿ぐつわでした。

原作では、女掏摸お富めんびきが平蔵の密偵となり素性が露見して、盗賊仲間捕えられ隠れ家で輪姦を受ける——。

その間、平蔵は隠れ家に単身斬り込む自信がなく、火付盗賊改め方の同心、役人の応援を、いらいらしながら待つという平蔵の心理が、主題でした。

テレビでは、お富（富士真奈美）が、仲間（山本耕一）に当身を喰わされて、墓場から隠れ家まで駕籠で運ばれるところが見ごたえ



お富を乗せた駕籠が、人気のない裏道を、小走りにいく。揺れ動く駕籠の中で、お富は松葉針を一本、一本、落としていく。

松葉針を目当てに、跡を追う平蔵——

そんなカットバックが続いて、駕籠は隠れ家である荒れ果てた古寺につきますが、それから猿ぐつわはでて来ません。

ただ、お富のいる部屋

から出て来た浪人が

(お富の奴、何人、持つかのう)

などという、あぶないせりふがあったり、遂に決死の斬り込みをかけた平蔵が、湯文字一枚で布団の上に、後手に縛られているお富を助けて、床下へ隠すというシーンが僅に目を楽しませてくれました。

このほか、鬼平犯科帖では「はさみ撃ち」という一編に、面白い趣向がありました。

「情交の終わった女が布団に腹ばいになって困われ者の身を嘆いているうち、起き上がった男は、家の外にいる盗人一味を手引きするために、女を縛る黒布をしごいている。その気配に、(何をするの)と、叫ぶ女に黒布で猿ぐつわを——」

○

地獄の辰捕物控「刺青者は闇に消えた」

「花のお江戸で、猿の伝八(夏八木勲)」という錠前破りの盗賊が評判になっていた。

伝八は寄せ場帰りで、役人に顔を知られているのに捕まらない。その話を聞いた辰造は(伝八が寄せ場帰りなら、自分も寄せ場帰りの十手持ち)と敵対心を燃やした。ところが伝八は、茶屋女おしの(五十嵐じゅん)と世帯を持つため、堅気になる決心をして、大火事の夜、腕の刺青と顔を焼いて役人の目くらまそうとしたが、どっこいそうは問屋がよろさない。同じ盗賊仲間の左文字が、大仕事をするために伝八の腕が必要になり、しつこく、つきまとったあげく、おしのを人質にしようとする——。

おしのの家の戸を叩く者がいる。おしのはてっきり恋人の伝八と思い、いそいそと土間に降り、くぐり戸を開けると、ニューと入ってきたのは左文字(立川雄三)と、その子分

がありました。

「倒れているお富。手拭いで鼻孔まで覆った猿轡をはめられた、お富は、後手に縛られた不自由な手で、平蔵との信号に使っている松葉針袋をつかもうと、している。」

そして、駕籠に押し込まれて連れ去られた後に、落ちている一本の松葉針。

平蔵が、お富をさがしながらやって来て、うまい具合に松葉針を発見する。

(お富は、拐かされたのだ)

と悲痛に叫ぶ平蔵。

達である。

恐ろしさのあまり、思わず後ずさりして、へなへたと坐り込む、おしのの前に、左文字は用意の豆しぼりの手拭いを出すと、有無を言わせず、猿ぐつわを、はめる。

後手に縛ろうとせず、子分が両わきから、おしのの利腕をつかんで連れ出そうとする時辰造が入ってくる。

辰造と左文字の二言三言のやりとりがあつて、左文字はドスを出して、おしのの顔を猿ぐつわの上から叩いて、

(女が死んでも良いのか)

(う、うう)

おしのが、必死に目を見聞いて、辰造に訴える――

という一芝居が入って、次の場面は盗みの現場です。ふつう、こういうシチュエーションの場合、人質にとられた女は仕事が終わるまで一室に監禁されているのですが、この一編は少し変わっていて、足手まといになる筈のおしのを、現場まで連れていくのです。

もちろん、猿ぐつわを、はめたままです。

辰造が盗みの装束でやってきて、

(仕事の前に、女と話をさせろ)

と、注文をつけます。

そこで左文次が、しゅしゅ、おしのの口を覆った豆しぼりを、はずしてやります。

ここで辰造は、おしのに、わざと冷たく、愛想づかしをつくのですが、おしのは(たとえ、あなたの正体が判った今でも、私の気持は変わりません)と、江戸の女の心意気。

そして、おしのは、また猿ぐつわをはめられて、子分達に引き立てられる所へ、地獄の辰造の登場となり、乱斗がはじまります。

伝八が転倒したり、危機に陥ると、おしのは、もがいて見せ、猿ぐつわのアップが何回か続いて、やっと伝八の胸の中に抱かれて、猿ぐつわをはずして貰うという一編で、監督荒井仙志。脚本は飛鳥ひろしでした。

これは十月十九日夜十時。NET放送ですが、再放送は多分、ニクール(二十六話分)放送後になるでしょう。

○

おんな組アクション控「女の敵! 許しません」

江戸で若い美女が次々に、行方不明になるという事件が起こっていました。そんな時、美人で評判の茶屋娘お光(松木ひじり)が、時の権勢をはこる祈禱師日道(南原宏治)の屋敷に妾奉公に上がります。

「襖をあけると、三つ指を突いている、お光の姿がある。忽ち、やにさがった日道が猫なで声で(これ娘、面を上げい。面を)と、お光の顔をみて(いや、美しい。美しいの!)と、にじりよる」

次の場面は、顔を引っかかれた日道が、口入れ屋、伝造に

(いや、気の強い娘だ)

と、こぼしている。

お光は?

「土蔵の前に、侍達が張り番をしている。

(うー、うー、うー)

と、女の呻き声。

(しづかにしろ!)

と、侍が土蔵の中に怒鳴る。

中では、お光が後手に縛られていて、唇と唇を割って巾広い白布で猿ぐつわを噛まされて、もがいている。

そこへ、今一人の侍が、お膳を持って入って来て、

(飯の時間だ)

と、お光の猿ぐつわを解く――

その猿ぐつわの白布が、また随分と長い布で、うなじりから解かれたあとも、一部がお光の口の中に入っていて、仲々おもしろいシ

ーンでした。

やがて、おんな三人組の中野良子、島かおり、津山登志子などが、人身御供よろしく参上して日道をこらしめるといふ趣好ですが、安手で、ふざけたストーリーの割に、誘拐した女達を、後手に縛ったまま、むしろに据えて斬殺するという、サジスチックなカットもあり、これからも結構、楽しめる番組の一つでしょう。

○

眠狂四郎「女怨に剣が哭いた」

眠狂四郎——テレビでも江見俊太郎、平幹二郎と、主役を変えて三回目の登場ですが、こんどは田村正和で、柴練の折紙つきと云われ、成程、田村のムードが、エロチズムとサジズムを売りものの、この番組にピッタリのようです。

大奥の御典医、室矢醇堂の飼犬から狂四郎は一人の若い娘を救いますが、娘は二年程前大奥に上り、正気を失ったかどで、宿下がりになっていた、お弓というもので、阿片に犯されている様子です。狂四郎は、大奥に秘められている異常なものを感じとります。

案の定、十三代將軍に定められた政之助君と、その生母お峰の方にも、お弓と同じ魔の

手が伸び、奥女中綾乃は、救いを、かつての同僚である美保代に求めます。

美保代は狂四郎を慕っている女、という設定で、美保代は狂四郎に助力を乞うて冷たく断わられてしましますが、狂四郎の介入を恐れた醇堂は、美保代を餌に狂四郎に罠をかけます。

“山荘の一隅の立木に美保代（山本陽子）が立ったまま縛りつけられている。

狂四郎が静かに姿を現わす。美保代が呻きながら、猿ぐつわの下から狂四郎に、何か危険を知らせようとする”

この時の猿ぐつわが、白い扱帯か何かで、唇と唇の間に噛ませたものだが、頬に回された部分は、巾広く、後の鬚に結ばれた残りの布端の長かったことが、印象的でした。

尚、この一編では、大奥に潜入した狂四郎が、無類の剣を見せるのですが、生母お峰の方（金井由美）が縛られて、白布で鼻口を覆う猿ぐつわで、一室に閉じ込められているというカットもあり、同じストーリーでも、映画にはなく、前回のテレビの狂四郎にもなかった縛りの脚色を、今後とも注目したいものです。

脚本はベテラン高岩肇と、田中徳三監督。

十月十日・フジ・夜十時、放送分。

同じ縛りのシチュエーションでも演出が違ふと、ぐっと官能的になる例を挙げてみましょう。

○

十月二十八日・フジ・夜八時、放送。

二人の素浪人「双つぼくろの女を斬れ！」

“罠を覚悟で浪人塔十郎（丹波哲郎）が、寺の階段を昇ってくると、鐘樓の柱に小扇（進千賀子）が縛られて坐っている。松葉しぼりの手拭いの猿ぐつわを噛んで、必死に鉄砲で狙われていることを知らそうとする”

（ラノ、ラノ）と呻き、身もだえるのですが女の縛りは矢張り立姿より、坐っていた方が腰の丸みが、よく出るようです。

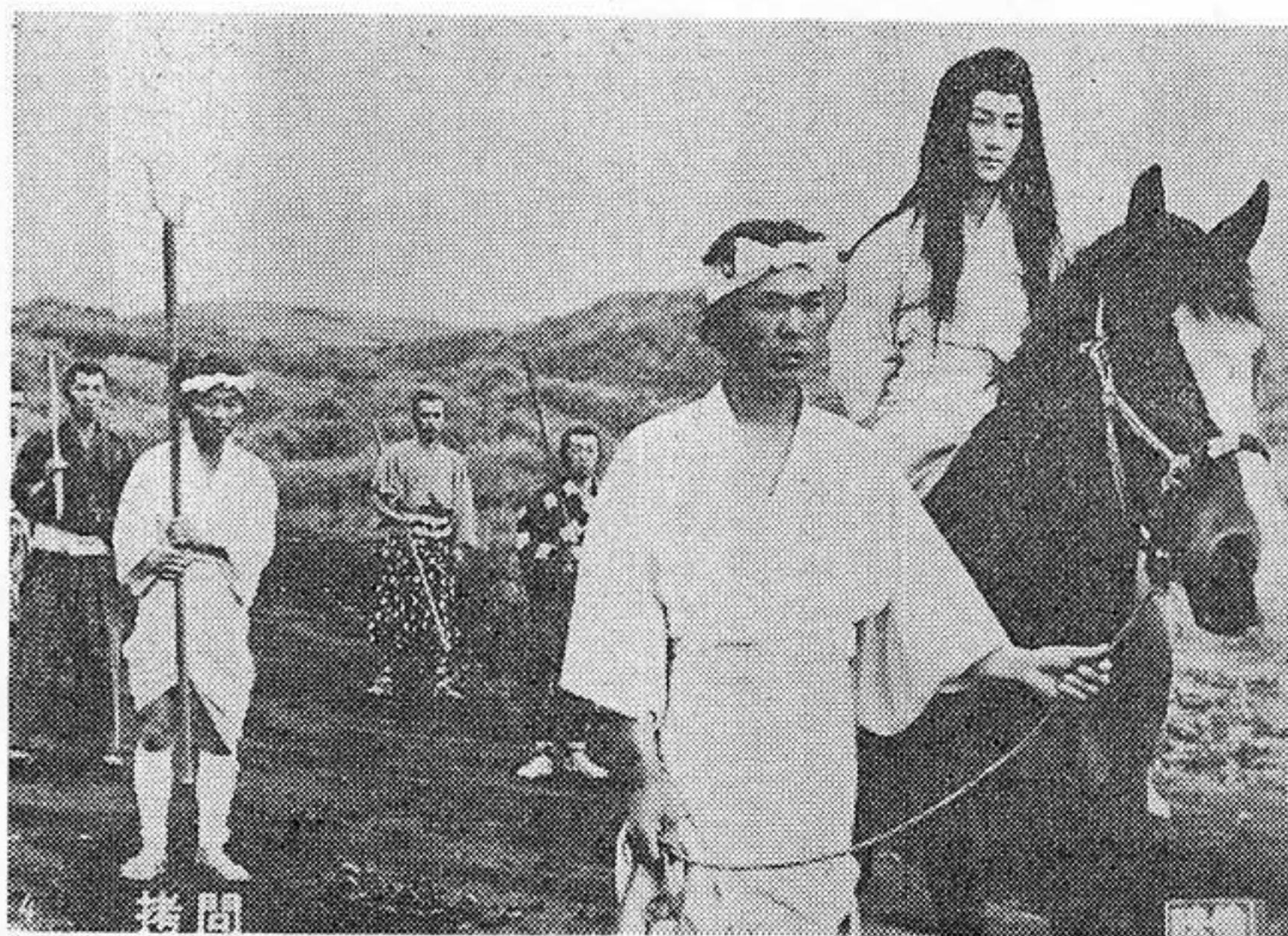
結局、悪人ばらは浪人に斬られて、小扇が助けられるのは決まっていますが、縄から解かれる時が又、官能をそそるのですね。“塔十郎が、深く噛み入っている猿ぐつわをゆっくりと解く。

（ほっほっ）

と深い息をつく小扇。

自由になった両手で、縛られた腕のしびれを撫でる——”

という仕草が入るのです。この演出は、つ



ぼを心得ています。

脚本、津田幸夫、演出、原田隆司。

女の縛りは、寝姿が一番、妖しい美しさを
持っていますし、体をくねらせながら猿ぐつ
わをはずそうとして、頬を肩にこすりつける

……なんてシーンを、一度で良いからお目に
かかりたいと思って、時代劇が各局でダブる
時は、テレビを二台つけているのですが……

○

扱、猿ぐつわの美女が大勢、登場したシー
ンに、かつて東映映画「火の玉奉行」と
いうのがあり、芸者役の木暮実千代以下
十数人が白布で顔一ぱいを覆う猿ぐつわ
で、小舟の中にぎっしり詰められて坐っ
ていたり、又、新東宝映画「生首奉行と
喧嘩大名」では、小畑絹子以下、十数人
が人々の中より引き出されて、呻きなが
ら、いずれも縄尻をとられて歩かされる
てなシーンが代表的ですが、テレビでは
……。

人形左七捕物帳「女虚無僧」

と、いうのがありました。

この「女虚無僧」という題名は虚無僧
に扮した誘拐団に、拐かされた女が、虚
無僧の衣類をつけられて、連行される状
態を指しているの、珍しい題名です。
画面では、夜道を歩く虚無僧の一人の天
蓋が、何かの拍子で首から落ちると、猿
ぐつわをされた女の顔が出るというシー
ンのほか、誘拐団の隠れ家の一室に女虚

無僧達が縄をかけられて、十数人、坐ってい
ます。

一味の首領（山岡徹也）が、次々と坐って
いる虚無僧の天蓋をはねのけると、猿ぐつわ
の女の顔が、……という趣好でした。

ところで、この人形左七捕物帳でも、六編
ばかり猿ぐつわシーンがあるのですが、大体
他の捕物帳とシチュエーションが同じなので
省略して、小生が『あれ?』と苦笑した一編
を紹介してみよう。

「やつめ鰻」というのですが、話の内容は、
寺子屋を営んでいる青山という浪人が清貧に
甘んじていた為、鳥目になり、ある商人殺し
と、その娘お文（林由昭）拐しの嫌疑を受け
る。実際は、御家人くずれの時次郎（大塚周
夫）が犯人で、お文は時次郎の邪恋の為に、
一室に閉じこめられているのです。

人形左七（林与一）は、青山が殺された商
人から貰ったという、やつめ鰻をみて、青山
が鳥目であると思抜いて、時次郎に目星をつ
け、罠をかけます。そして、時次郎のあとを
つけて、お文の居所を突きとめるのです。

襖を、がらりと開けると、お文が縛られて
坐っていて、ハッと見上げる顔に手拭いの猿
ぐつわがかかっています。手拭いの四つ折り

で鼻から下、口だけを覆ったスタイルです。

おびえるお文の眼と共に、このスタイルがアップされて、次に左七がお文の縄をほどく時、手拭いの猿ぐつわは、お文の鼻の上から巾広くかかっているのです。

なるほど、テレビはドラマであり、フィクションであり、虚構の世界であるのですから立ち廻りで人を斬ったって、本当に斬る訳でないし、斬ったように見せれば良いのでしょうが、そこには、ある程度のリアリティが要求されるものだと思います。

女を縛ったって、ただ縄を胸に一巻き二巻き巻いたって、カメラが女の体の側面、又は背面を写すときは、手首まで縄がかかっているければ不自然ですね。

まして、同じ時間に、猿ぐつわのかけかたが、違っていたというのは、助監督の怠慢であるといえましょう。

○

帰って来た用心棒「幼なじみ」

脚本原作は結束信二。この人は東映時代劇の専用ライターだそうです。今まで縛りの場面の、案外少ない本屋です。

新婚の妻が、盗賊に人質にとられますが、その盗賊の首領は幼なじみなのです。

人質の新妻（楠郁子）は、空屋の一室に、後手の猿ぐつわで押し込められるのですが、その乱れた姿を、なまめかしく撮っていないが、最後に殺してしまうのです。

盗賊の、殺意を感じて、猿ぐつわの下から呻きながら、不自由な体で逃げ廻る女を、押えつけて、首に手を回して——なんてのは、とてものこと、いただけません。

「殺し」は、我々縛りのマニアにとって「邪道」というほかはない。縛りの愛好者はサジストではなく、フェミニストである！ ということを力説したいものです。

然し、いくらフェミニストといっても、女上位や、女剣戟は好みません。

例えば、「風」という栗塚旭、土田早苗主演の忍者ものがありますが、この中で土田早苗は女忍者で、ふだんは滅法強くて、大の男をバツバツと斬り倒すくせに、短銃などに狙われるとテもなく縛られてしまします。

黒装束に鎖かたびらの上から後手に縛られて、面白いことに、大がいの時、鼻口を覆う猿ぐつわなのです。ところが、一旦、風と呼ばれる、栗塚旭が助けにくると、突然、飛び上がってキックで相手を倒したり、猿ぐつわのまま活躍も、しだすのです。

私には、この恰好はいただけなのです。矢張り、縛りの絵づらは、着かざった美女で崩れた花のように、痛々しく、なまめいたムードが欲しいものです。人様により、好みが違うかも知れませんが、手も口も男の為に縛られる、女の弱々しさこそ、縛りの魅力ではなからうか……と思います。

ところで、今までいろいろと捕物帖を紹介して来ましたが、捕物帖と云えば何と云っても「銭形平次」が一番有名で、現にフジテレビで大川橋蔵の平次が、ダラダラと長寿番組を誇っているのは、御承知の通りです。

初期の野村胡堂の原作には、よく縛りの場面が出て来ました。「おさん文身調べ」「二人浜路」「盗賊の娘」等々です。殊に「盗賊の娘」などは

「ひしひしと縛り上げ、猿ぐつわを噛ました娘を引き据えて、

（素直に白状するか、うなずけば猿ぐつわはとってやる）——」

と、平次自身が群衆の前で、盗賊の娘を青竹で引っぱたくという場面があった位で、初期のテレビ時代劇「銭形平次」は割合、原作に忠実だったし、縛りの場面が相当にありました。

若山富三郎、安井昌二、大川橋蔵と平次役が交わり、女房お静の役も、田代百合子・八千草薫・児島明子・香山美子と変わりましたが、現在の「銭形平次」には、ほとんど縛りがないのです。

旧作、大映映画では、女房お静が、さらわれたり、縛られたりするシーンも多く、それが目を楽しませ、ドラマを面白くしていたのですが……。

今の「橋蔵平次」などは、みるもんじやない。期待はずれも、はなはだしい。人間男女の葛藤も、けたはずれのロマンも、胸のうづくカットもない。あるのは、安っぽい平次のヒロイズムだけです。

話が横道にそれたようですので、元へ戻すとして、あとは、ドラマの題名と、縛られた女優名と、その役柄などを紹介して、本稿を終わります。

◎ 風「最後に笑う奴」

田島 和子（純情な人妻役。黒っぽい布で唇と唇の間に噛ませられている）

◎ 右門捕物帖「十六夜河岸の女」

旗 和子（女すり。ふつうの手拭いで下唇だけを覆って縛られている）

◎ 遠山金さん捕物帖「さらわれた女」

佃 和美（松葉しぼりの手拭いで唇と唇の間に割って噛ませられる、生体実験の小町娘）

◎ さすらいの狼「竜が怒る剣の舞」

松木 路子（松葉しぼりの手拭いで口だけを覆う。浪人の妹）

◎ 新三匹の侍「地獄の鐘が聞こえる」

菊 ひろ子（二役で、一人は豆しぼりの手拭いで口だけ覆われ、今一人は煮しめたような茶色い布で、やはり口だけの猿ぐつわ。抜け忍者と姐御）

◎ 里見八犬伝「怪猫乱舞の巻」

佐治田恵子（黒っぽい布で、鼻口を覆う。人身御供の娘）

人身御供の娘

◎ 浮世絵・ねずみ小僧「怨念ノ。火の玉を喰う」

生田 悦子（浪人の妹。豆しぼりの手拭いで唇と唇の間）

◎ 題名忘却

栗原 小巻（武家娘。白い布で唇だけを縛られて、座敷牢の中へ入れられる）

◎ 忍法かげろう斬り「オレは幕府の犬じゃない」

鳥居 恵子（姫君。ねずみ色の布で鼻口を

覆われて床の下）

◎ 伝七捕物帖「七話」

高田 美和（目明しの娘。茶色の布で、鼻口を巾広く覆う猿ぐつわだが、縄は、かけられない）

◎ 真田幸村「三話」

浅丘るり子（村娘。黒い布で、唇と唇の間に堅く、噛まされて、頬がゆがむ）

◎ 一心太助「恋慕姉妹」

女優名不詳（商人の娘。白布で巾広い猿ぐつわ。自分の家で強盗の為に）

◎ 宮本武蔵

梓 英子（お通役で、唇と唇の間を痛々しい程に割った手拭いが印象に残る）

◎ 鳴門秘帖

市川 和子（商人の娘。直接、はめられていなかったが、白い扱帯の猿ぐつわが、今、解かれたところという一カットがある）

註 映画会社でつくられた旧作時代劇が、

テレビで放映されて、勿論その中に猿ぐつわのシーンが出て来ますが、これは別の機会にゆずり、今回はテレビドラマだけに、しぼりました。

——（おわり）——

カット・洲崎三郎



叩き売り

さて、法界という男だが、その仇名は例の有名な坊主から取ったものようだが、本人が長い間、まるでその由来を知らないで自ら名乗っているのだから世話はない。

彼は、その奇異な容貌からくるコンプレックスのためか、どの組織にも属さず、劣等感の裏返しから無鉄砲な荒わざをやっているのけることでは、ちよっぴり知られていた。

時には、妙なお座敷がかかる事がある。トウシロウや香具師を脅すとき彼を一員に加えると、やり取りが激した瞬間に、目まで深く

パロディ

花

と

蛇

(十四)

山光

純

連載・S大河小説

かぶっていたソフト帽を、ぱっと脱ぐと芝居がかった絵になるのだ。

もちろん、法界が出なくてはならないカツアゲが始終ある筈もなく、小遣金を稼ぐために始めたのが、三万、五万の金を高利で借す生計である。

貫禄も資金も充分でないから、借り手は三郎などのチンピラや大道商人が専門ということになる、小者相手では、その無鉄砲さも誇大に伝わっているせいで、すこしの容赦もなく、あっぱれな街のダニぶりを発揮する。

察しはつくだろうが、どんな女も、よほどのことでもないかぎり寄りつかない。

その海坊主のような男が、しかつめらしく

京子の値ぶみをしているのだ。

目かくしの黒い布をかけられる前に見た、丸顔の美貌は、彼の劣情を痛いほど、かきむしったにちがいない。だが、それにも増して法界をかきたてたのは、三郎が開陳させた京子の羞恥の個所である。そこには一片の柔毛の翳りもなく、得も云えぬ曲線を描く丘陵の柔らかさが、法界の頭と同じように、あまりにも露わではないか。

法界は、そこへ残忍な視線を噛みつかせ、同類が同類を嗜虐する時に味わう陰惨な満足感をもったようだ。京子が寄ってたかつて剃り上げられたことは知るよしもないが、いずれ女の軀に聞いてみれば分かることである。

かてて加えて、小麦いろの肉体の盛りあがりには全く申し分なかった。こんな上玉が手に入るとは、夢想もしなかったのだが、そんな歓喜を表情に出すような男ではなかった。

法界の、ペロリとした顔付きに、じれた三郎は、いよいよ小声で、

「なあ、ここまで苦勞してやってきたんじゃないか。だまされたと思って、抱いてみてくれよ。京子ってんだ」

と言葉づかいまで変わるのだ。

京子は、にわか盲になった女が必然的にする所作をする。小首をかしげ前縛りにされた両手をモゾモゾと動かして、不安げに身をすくめている。そこには、ただ懸命に耐えぬくしかない哀れな女の切なさが全身に、にじんでいた。

すてばちの勢いで、天性の勝気な柳眉をキリリと立てて鉄火女の意気を見せ、逆に男どもを這いつくばらせてやるのだとまで潔い決心をつけた彼女であった。

いつか救い出される日が来るに違いない。

その時こそ、今のこの目も眩む恥辱を百倍にして返してあげるから覚えておいで――

おおよそ、若い男というものに漠然とした軽蔑感を持っていた京子にとって、それは悲愴

な決意である。

別に考えてみれば、いかに彼女が男勝りの性格を持っていたといっても、何人もの無慈悲で自堕落な連中と、たった一つの肉体という武器で渡りあえると考えたのは早計というほかはない。

何といっても彼女はお嬢さん育ちだといえなかったし、地面を這いつくばって食を乞うた経験など持ち合わさないのである。生まれながらの下郎を相手にして、淑女に勝目があるはずはない。

「さあ、京子。続きをおっぱじめるぜ。さっきは、いいところまで言いあてたが、最後の一人を間違ったじゃねえか。性根が入ってねえ証拠だぞ。ふふふ……今度は心持を入れかえて打ちこむんだな。さもないと、姉妹ならべて転がされることになるきまりだぜ」

三郎はVとMを用いて三回も京子を楽しんだので、晴れ晴れとした顔付きである。清次と五郎もそれぞれ二度ずつ、張りのある肉体を満喫した。

その彼らは、捨て身で応戦する京子の動きの激しさと、目かくしされても相手を覚えこむ感覚の鋭さに、舌をまく思いに、しびれている。ただ次々と新手を繰りだし、嵩にかか

って責めさいなんだ結果、グロッキーになった京子が錯乱したため、チンピラ兄弟は面目を保ったというわけだ。

ここで法界などを加えるのは、ルール違反なのだが、そんなことは、こちらの勝手である。この上、京子にいくらでも稼がせればまるもうけというべきではないか。

「わかってるわ。でも三郎さん、お願い。もう少しだけでいいから休ませてちょうだいよ。フラフラして、とてもお相手なんかできそうもないの」

と、かきくどくように、見えない顔を、あらぬほうに振り向けて哀願する。

「お前の都合なんて知ったことか。手前の取柄が他にでもあるんなら別だが、はは……あるならいつて見ろってんだ。だが、まあいいってことよ。お前の詫びの入れかたを、とっくり見てやらあ」

嘲笑まじりに声を荒だてる三郎は、もう復讐だけが目的ではない。何をいっても通じないことを知っていながら、せめて一言、相手にむくいざるを得ない京子であった。

「せめて、もう暫く休ませてちょうだいといっているのに……それさえも無視しようというのね」

ピンクの唇を、きつく結んで、彼女は血の逆流する口惜しさのため、キリキリと奥歯を噛むばかりである。

女の肉体は、爾来ごく悲しいものである。お俠な心が、悲しい肉体に宿っているのは、何という酷薄な定めなのだろうか。もとより京子のせいではない。か弱い者と責めまくるものを分けた、いわば性の条理の仕業というべきであろう。

肩を細かく震わせ、みどりの黒髪を床に流して面をうずめてしまった裸女の、つき出した臀部が見事である。

それは、改めて目を見張らせるほどの豊満さで盛り上がっている。巨大なパンをこね、それをイーストでふくらませるだけ、ふくらませた感じである。スポーツによって発達しひきしめられた二つの尻たぶは、ただパンと張って、ふてぶてしく居直っているかのようにすら見える。

女の噁り泣きを心地よげに聞き入っている法界のギラギラした視線をかわして、ひそひそ声の三郎はポン引きよろしく、最後の念を押す。

「京子は、おれたち三人だけに身をまかせていると思いきんでいるんだから、呉々も気ど

られないようにやってくれよ。もしバレたら舌ぐらい噛んじまうかも分からない。そうなたら面倒だからな」

昨夜からの奮斗で、さすがにガックリときた三郎は、もはや振り返りもせず、部屋のずっと向こうに敷かれている夜具のほうに、よろけて行き、どしんと倒れこんで、蒲団を引っかぶってしまった。

法界は、女を見守りつづけるうちに、こみあげてくる劣情に息が弾んできたようだ。

せかせかと着ているものを、むしりとり始める。久し振りの獲物を、みつけた狩人のようだ。骨ばった奇怪な裸体である。女のようにスベスベした皮膚のどこにも、やはり生毛さえ見つからないのだ。

京子は惑乱の極に達していた。手ざわりで相手をたしかめる術を奪われているため、触れてくる感覚と、ただよってくる匂いでしか見分けることはできないのだが、どう考えてみても分からないのである。

冷静になることなど、とても出来ない相談だった。

彼女に強要されているのは、単に相手の特徴をとらえて覚えこむだけではなく、テクニ

ックのありったけを使って楽しませ、同時に自らも恍惚感を充分に表現してみせなくてはならないのである。

京子には、もう可哀そうな美津子の身の上のことさえ慮る余裕はなかった。ただこの場を必死で切り抜け、明日に、かぼそい希望をかけることしかなかった。

相手の攻撃が激しくなった。

それは明らかに、消えない汚辱を降りそそぐ瞬間の前ぶれであり、その屈辱を受けるたびに、京子は確実に、より深い泥沼に、はまりこんでゆくことになるのだ。

彼女は息をのみ、湧き出る涙が流れるのにまかせた。その涙は、すでに悲しみだけのものではなく、宿命が流させるものであった。涙は暖かく、しっかりと縛られた目かくしの布に滲みる。

「く、くやしい……」

と、歯がみするその後から、すぐに、

「だめ、だめだわ」

という呟きが抑えようとしても、せり上がってくるのである。

鬼源や千代たちが、鼻歌まじりで、くり返し教えこんだ調教の効果は、みごとにほどだった。触れられれば、激しい反応で答えるよ

うに調教された肉体の習性は、京子の心がどうであれ、それに馴致した動きをみせるようになってしまっているのだ。瞬間、ほとんど天井をさすばかりだった巨大な双臀が、おどろくほど、はげしく打ち振られると、彼女はまるで今までの応戦が、うそのように、長々と打ち伏してしまったのである。

——それから三十分もしないうちに、今度は嘔吐を催す苦役に従う京子であった。

困惑は、いよいよ深くなるばかりだった。

チンピラ共が面白半分に強制した取りきめは否応なく、のしかかっており、全くそれに抗すべくもない彼女だが、焦れば焦る程、相手の正体が、わからないのだ。

今、奉仕している男が先の人物と同一であることは、その秘やかな息づかいで分かるのだが、乱れきった状態にあるにせよ、その感覚は三人のヤクザ兄弟の誰の残像とも結びついてこないのである。

そのいいようのない混迷は、京子をますます爛れた模索に熱中させることになった。

鏡台用のスツールに尻をデンと落ちつけた法界の無気味な形相も平静ではない。

京子の唇から溢れた唾液が、糸を引いてキラリと光る。いたたまれない不安のために、

男の歓心を買ひ、気まぐれを期待せずにはおれない彼女であった。

「あ、あなたは三郎さんでしょう。そうだね。京子、すっかり取り乱しちゃって、何が何だか分からなくなっちゃったワ。ねえ、ほんの少しだけでもいいから話して。いいえこんな浅ましい京子を嗤ってくださるだけでもいいわ」

その哀願は、慄えに慄えていたが、石のよう押し黙った男はセキ払いすら酬いてやらないのだ。

どうしようもなく見えない目が怨めしい。どうして、こう混乱してしまったのかかわからないが、そういえば、一息ついて仮眠を許される前に立て続けに襲われた時は、それぞれが、いずれも含み笑いや小声を洩らしたりして、その時も同じように錯乱していた彼女にも、充分なヒントは与えられていたといえるのである。

ところが今度は、まるで違う。今の相手はまるで彼女の模索を穢らわしいとも思っているみたいだ。鼻をツンとさす体臭がある。生臭い、例えようのないこの臭いも、覚えのない感じである。

やがて、京子が汚濁に叩きこまれる瞬間が

来た。

香ぐわしい椿の花びらにも似た唇は、かつて京子の崇拝者たちに、どれほど魅惑的に写ったことだろう。彼女に思いのたけを綴ってよこした医学生も、大学院の秀才先輩も、たぶん、一度のキスのためには、彼のなし得るすべてのことをしてみせるのに躊躇しなかつたにちがいない。

京子が紅い唇をほころばして笑うと、真珠のきらめきのような真皓い歯並びが、清潔である。青年達は、彼女の前では全力を上げて快活な、機智に富んだ若者たり得ようとしたものだ……。

今、奇怪な容貌の法界が、根限りの汚濁を無上の快感としたのは当然かも知れない。

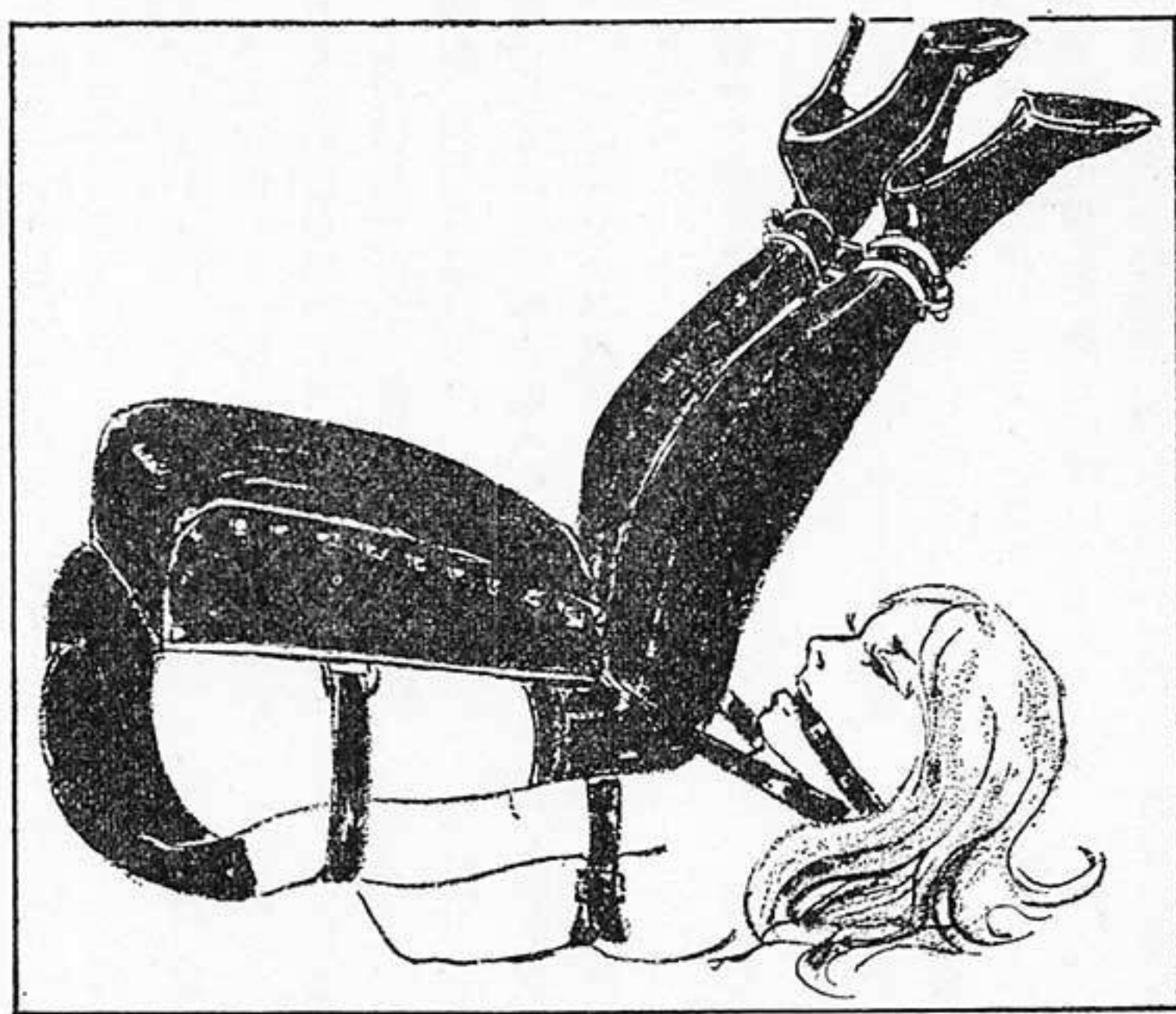
あまりの恥辱に鼻を詰まらせ、全身に鳥肌をたてた京子は、火焰樹のように喉元を紅潮させて、ブルブル慄える。

さすがの法界も、女の出方が分からず、不安げな表情となる。

信じられないことに、丸裸の美しい女は喉元をコクリとさせたようだ。

法界は、完全に痺れた。

彼は、まるで殊勲をたてた競走馬をほめてやるように「チヨッチョッ……」と舌をなら

イメージ『座椅子をどうぞ』志羽利也
ギャラリ

上下している。一きれの布もリボンも、櫛も許されない後手に縛られた女体が、ふてくされた態度もみせず、ただ耐え忍んでいる様は、飼主の気配を窺っている家畜のようにみえるのも、やむをえないところかもしれない。それにしても、胸が痛くなるほど魅惑的な雌畜である。

海坊主のような男は、素っ裸のまま横坐りで、満足感から、すっかり大胆になり、又しても手を出してしまう。それが失敗だった。

まるで誘いかけるようにピクピクしている上向きの乳首をつまみコリコリとほぐす。飽きずにふくれ上がってく

る嗜虐心から、思わず、

「ふふふ……お前、いかす女じゃねえか」

と喋ってしまったのだ。

その途端、京子はギクツと身を固くした。彼が、しまった、と思った時は遅かった。

つぶやきを聞き逃がさなかった京子が、すば

やく男の方に向き直り、肩先からドンと法界の胸を一つきし、必死で逃がれようとしたのだ。

慌てた法界は、懸命になって立ちあがろうとする固肉の女体を、必死でねじ伏せようとするが、簡単にはゆかない。

「あつ、あなたは、いったい、どなたなの。

ねえ、お願いだから、いってちょうだい」

泡をくった法界は、京子を突きとばしはしたが、彼女は叫びつづける。

「教えて！ 間違っていたら、いくらでも償いはするワ。京子、すっかり取り乱しちゃってるけれど、あなたは清次さんでも、五郎さんでもない！ まったく、違った人よ。お願い。肌を、かわしあったあたしに、ちょっとだけ、やさしい言葉をかけてくださるだけでいいの！」

京子の心の中で、くすぶりつづけてきた疑問は、ついに、はっきりとした形をとったのだ。彼女は鈍感な女などではあり得ない。それは最初の一巡が終わった時に見事に証明されている。

だが、三疋の低下等な兄弟が彼女に課したゲームが、何という低劣な淫靡なものだったかを思い出す必要がある。そこには消灯前の優

しながら、京子の髪を張りつかせた頬をピタピタと叩く。

まだ、最大のさげすみを受けたショックから、たちなおれないでいる京子は、煙のように、もつれた黒髪を、かしげたままだ。

九〇センチを超える胸の隆起が、荒い息で

しい囁きも、香り高いコニャックも、フカフカのベッドも、香水の匂う真白いシーツもなかった。如何に男勝りとはいっても、二十才を僅かにすぎたばかりの京子に、つぎつぎとバトンタッチしながら襲いかかる淫虐さが、異常なものではないとは、どうあっても言えようはずはない。この異常な行為を強いられるまま、美しい京子は一昼夜にわたって組み敷かれてきたのである。

その中であって沈着であり、その行為の中で充分に冷静でありえる女人在るとは、とうてい思えない。アベノノーマルな行為のなかでは、アブノノーマルな反応だけが結局ノーマルなのだということを知るべきである。さらに、ノーマルな人間が幸に最後までノーマルであった時の鼻白む面白さには、何の共感も感興ももてないことを、いい添えておいていいと思う。

後手に強く縛られているから、すぐに立ち上がることはできないが、膝で這うことはできる。目かくしをされていても、物音や気配で方向を知ることができる。

鉛のように重い軀だが、京子は歯ざしりをしながら彼女を突き飛ばして離れていった男の正体を知ろうと反撃に転じた。

だが、脱ぎ捨てられた衣類が膝にからまつたところを、またもガンと一突きされ、たあいたなく引っくり返ってしまう。

「やい京子。手前、まだ懲りねえんだな。しぶといアマだ。俺はもう頭へきちまったぜ。どうあっても詫を入れられねえというんだから、最初のきまりの通りだ。俺たちのやりたいうようにやるぜ」

その時、怒りを含んだ、三郎の声が降ってきた。

アアッとうろたえて、空しく両肢をもがく京子を見下ろしながら、

「評判の美人姉妹をならべて、おもちゃにできるのも、けっこうなことだぜ。さあ、覚悟はできてるんだろうな」

三郎の、助け船のタイミングは実によかった。素っ裸のまま部屋の隅に逃がれた法界に替わって、絶妙の登場である。

といっても、京子を買った三郎としても面倒事を起こしたくないので、二人の様子に聞き耳をたてていたのが本当なのであろう。

ねじくれた羽根ぶとんに面をすりつけて身もだえている京子の耳に入っているかどうかはわからない。

ピンチを逃がれた三郎は、安堵の顔つきに

なり、法界に目くばせをする。二目と見たくないナメクジのような肉づきだ。陽に当てないせいかヌメヌメした感じで、のっぺらぼうのため一層、生白い。伝染する無毛症などないだろうが、気味のいいものではない。

その隙をついて、この時、京子が捨て身の反抗を見せたのだ。

脱ぎすてた法界の下着類は、うつぶせになった京子の身体の下敷きになっている。片手で前を押えた彼が、それらを集めようと近づいた時、乱れきった、みどりなす黒髪を、さっと振って上半身を起こした京子の直ぐ前に立ちはだかる事になってしまったのである。ワツという声が、三人の口から同時に洩れた。

京子の両眼を固くおおっていたはずの黒い布切れが抜け落ち、キラキラ光る明眸が、二人を、まともに見たからである。

うかつの極みであった。

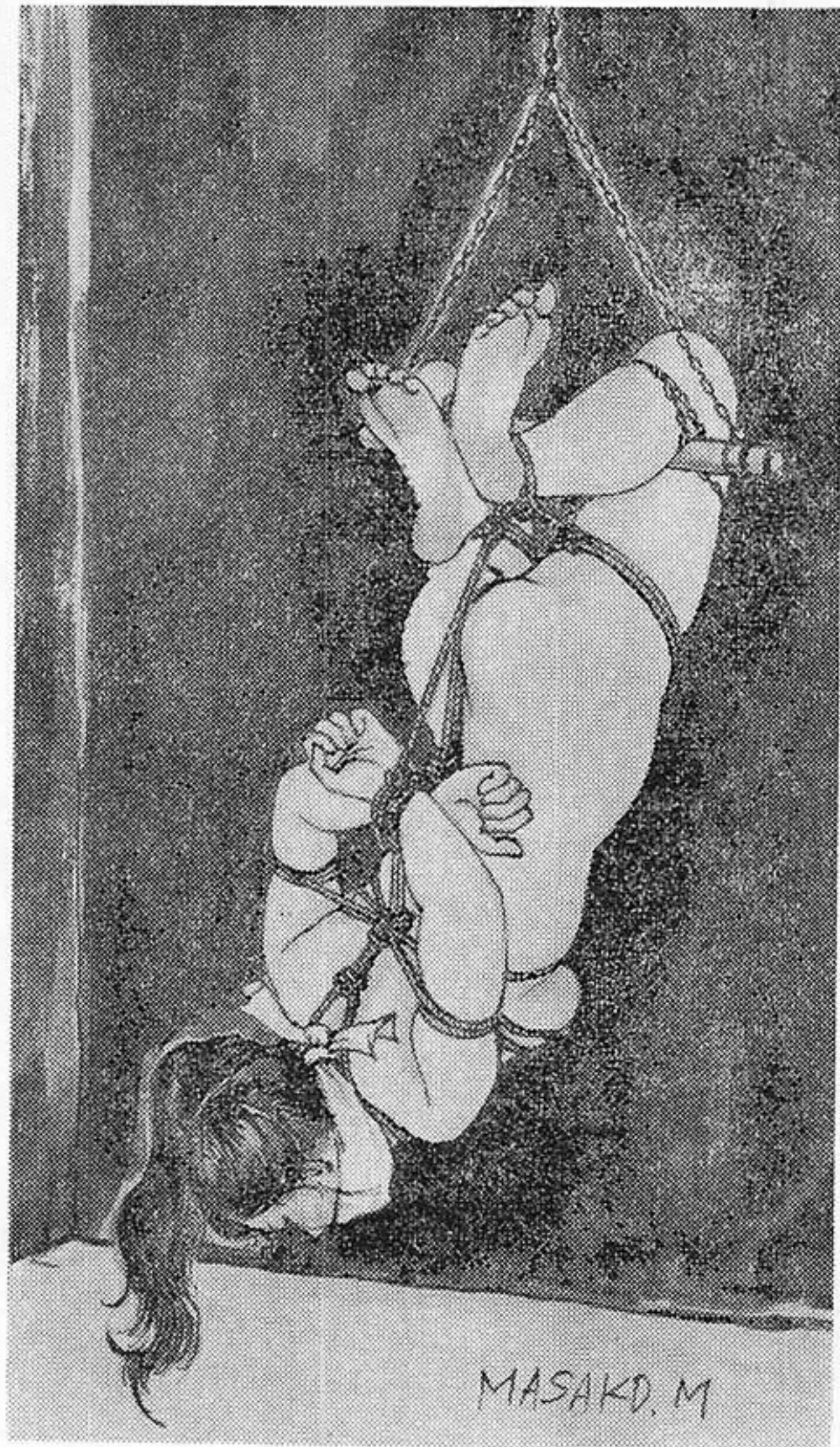
とくに、こうした事には目先のきく三郎であったが、つい法界のやり方のほうに注意がいつてしまい、目隠しを、しめ直しておくことを、すっかり忘れていたのだ。

「あっ！ あなたは、誰、だれなの！」と叫ぶ京子の悲痛な声。

イメージギャラリー

『揺れる美体』

宮城昌子



重にくるみながら、ばたつく京子の両脚を小道具の青竹の両端に縛りつける。

「ムム……」

と息もできない苦しさに、抵抗する力が弱まってくるのを待って、鼻をつまみ、一気に丸めたタオルを口に押しこむのに、大汗をかいた。

黒い目隠しの布は、固く猿轡をかませるのに、ぴったりである。

後手縛りを一たん、ほども、両手首を思いきり上に引き絞ってダブルベッドの柱に結びつける。

人の字形に長々とのび、ピチピチはねる猟奇的な女体だ。上向きにしても、まったく流れない乳房の膨らみと、下方から眺める蠢惑の部分が痛々しいポイントをつくって、くねった。

四人して、女一人の自由を奪うのに息が切れた。

ことに三郎は、よそ者を引き入れて、京子に稼がせようとした張本人だけに、ゼイゼイ肩を上下させている。

頬をくびれるほどに強くしめつけられた猿轡の京子は、眼尻に幾筋もの無念の涙を、したたらせながらも鳥のように強い目で男達を

視界を取り戻した双眸から炎のような鉄火女の瞋恚が凄まじいまでに二人を射た。

売春婦になり下がって三人のチンピラ共の気嫌をとり結ぼうとした気持を、言うに言えない卑劣なやり方で、踏みにじられたのだ。

「あんなに約束したのに、あんなたちは人間の皮をかむったブタよ！」

それから先は、滅茶苦茶になった。羽根布

団を大きく掀げた法界が網を打つように、狂いたつ京子の頭からスッポリとかぶせる。騒ぎに目が覚めた清次と五郎が、ねぼけ眼のままだが、手負いのジャジャ馬が暴れだしたのを知ると、おっ取り刀で加勢する。

何よりも大声でわめかれたり、棄鉢で空手を使われたりするのが面倒である。

男四人がかりで押えこみ、蒲団で頭部を厳

睨みつけているのだ。

何という気の強いアマだ——と、舌を巻く一同に先んじて、十八才の五郎が、とうとう怒りを爆発させた。

「口先では、しおらしいことばかりを言いやがって、ちっとも後悔してやがらねえ。何だこの態度は！ 大体、優しく扱いすぎたからこの始末だぜ。清次兄貴。こうなりや美津子を、しょっ引いてきて、一責めやるのに何の遠慮もいらねえぜ。さあ」

姐上の美女は、千切れるほど激しく首をふり、渾身の力をこめてロープを引っ張るが、がっちりとした結び目は、目隠しにこりて念入りだ。

「ムムム……」

「ようし五郎、お前のいう通りだ。こうなりや、仕方ねえ。ふくれ返ってばかりいる手前が悪いんだ。姉に替わって妹に詫びを入れさせるしか、ねえようだな」

やたらにカッカしてしまった五郎の癪癪がたちまち伝染し、メンツを潰された思いの清次も立ち上がる。

「では、二人で美津子のアマを引きずって行くからな。後を頼むぜ、三郎」

猿轡ごしに激しく啼泣し、必死にイイイヤ

をする京子に、せせら笑いをくれた二人は、騎虎の勢いで廊下へ飛び出していった。

一方、京子の反抗で、すっかりメンツをつぶされた法界も、今は完全に身仕度を終わりと黒い背広のボタンをかけ、ソフトをきちんと目深くかむっている。

「じゃ、俺は帰るぜ。すっかり興醒めしちゃった。看板にイツワリありってヤツだぜ。フン、どっか別の女を拾って口直しをしなきゃなるめえ」

と毒づき、出口へ案内しろと顎をしゃくりながら、

「カネの返済の期限は、明日まで待ってやらあ。ここまで出かけて来て、くたびれもうけてて訳だ」

「お、おい。ま、待ってくれよ！ 女を抱かせる代りに、借りは棒引きの筈じゃないか」
「何いってやがる。誰がそんな約束をした？ だまされたと思って、なんて言うから、だまされてやったんじゃねえか。オイ。貸しは大概五万だぜ——それを、このシャモみてえな女で帳消しにされてたまるかよ……」

小者相手の貸金取り立ては、うんざりするほどの経験を積んでいる法界のことである。

泣き落としは、もとより通じないし、いざという時の無鉄砲さも大道商人から聞いたこともあるので、下手に怒らせてはならない。

三郎は慌て、海坊主は威丈高に言い募るのだ。

「一寸見には、まあまあ玉だが、お前たち三人して散々ばら廻しにかけた後だから、いわばカスみてえなものじゃねえか……」

転んでも只では起きこない駆引きを充分に心得ており、まして、京子を彼にあてがったのも森田組の許しをえたものではないことが分かっていれば、ますますこの取引は有利になることを百も承知していた。

「法界兄い、あんたの言う通りだよ。しかし俺は借金の棒引きを承知してくれたとばかり思ってたんだ……」

三郎は懇願口調になり、立っている法界の袖を引いて、力まかせに三方に引き伸ばされている女体をピシャピシャやりながら、

「どうだい、この乳の盛り上がりぐあい。肌のきれいさ……感度も抜群だし、受け答もたっぷり仕込んであったろう？ トップ・クラスのストリッパーだって、ここまで別嬪で純真なのは、絶対お目にかかれねえぜ」

「ふふふ……バナナの叩き売りじゃあるめえ

し、そんなこと位わかってらあな。まあ、俺の氣にいったところといや、ここ位だな」

と法界は、ムクムクと蠢いている裸女の、まったくむきだしにさらされ、羞恥に息もたえだえな滑らかな丘のあたりを指さす。同類の本音だろうか。

「まあ、お前がそこまでいうならカネの方は少し位なら考えてやってもいいが、魚心あれば水心ありってとこかな」

法界のペースに、すっかり、はまっている三郎は、ここで彼を帰してしまえば今までの努力も水の泡になるとばかり、

「おい、京子。聞こえてるだろう。大体、手前が鈍感な上、聞き分けがよくないから、客人を怒らせてしまったんだぞ。そんなに顔をそむけるんじゃない。もう他人でなくなっちゃった法界さんに、ニッコリ笑顔をみせるのが礼儀じゃないか」

「すぐ顔のそばで話しあっている男たちの声は、いや応なしに耳に入ってくる。固く閉じた臉から、ふきだすように涙を流している京子の呼吸は、千々に乱れる心から、ひどく荒い。法界は、

「チェッ。気の強い売女すべたときてやがる。まあいいや、だまされた俺も馬鹿よ。利子の半分

だけ呉れてやらあ。このザマじゃ、普通ならゼニになるめえ。まあ、俺だからいいようなもののさあ」

月一割の利息だから、京子の値段は二千五百円ということになってしまふ。

「わかったよ。あんたも殺生な人だな。こっちに金がないことを、よく知ってる。そこで一つ、お願いだが……」

三郎は、法界と京子を等分に見くらべながら、いう。

「たしかに、あんたの言う通りこの女は、まるでメスのシャモみたいだ。だが、あんたを嫌がった詫びをさせた上、もう二度でも三度でも充分にサービスさせようじゃないか。いや、すぐこの場で詫びさせて見せるぜ。それで、どうだい？」

「ひひひ……大丈夫かな？ まあ、そこまで言われりゃ、ホトケの法界だ、もう少しイロをつけてやってもいい」

と、眉毛もヒゲもない顔をニタつかせて、炙った肉のような裸女の内腿を撫でさする。

「それじゃ、カネの方は、勘弁してもらえんだな？ 充分にたんのうする迄、とことん使っていいんだぜ。あんたも、今の女の相場を知らない訳じゃないだろう」

「とんでもねえ。俺は堅物で通ってるんだ。お前の押し売りを受けてやってるだけさ。だが、お前に花を持たすか。京子を介して兄弟になった仲だ。その義理を汲んで、利子を棒引き、カネの返済期限を向こう十日間、待ってやろうじゃねえか。しかし、女には一寸ばかり泣いて貰うぜ」

広い世間では、こうした男たちに翻弄されて生きている女のいること位、京子も知っていた。しかも、それが自身の身の上の現実になると悲しみは又、一しおだった。

三郎の低姿勢には、金の用意がない上に、そのカネが手慰みによる借金だというところにもある。普通なら、約束の日時には、どんな手段にうったえても耳を揃えて借りを返すのが、この世界の常識というものである。三郎は所詮、一疋のチンピラだが、チンピラだといっても、その掟から、まぬがれることはできない。まだ三下以下の手合いにとって、指をつめることなど、身震いがでる位に恐ろしいことであろう。この場合は、何としても京子に一時凌ぎをさせなくてはならないのである。

「あんたも、ご立派だなあ。俺の負けだよ。じゃ、利子の五千円は棒引きで、期限を一カ

月、待って貰えるんだねえ」

「十日間だ。いやなら、こっちにも考えがあるぜ」

「それじゃ、仕方がない。話はきまったとして。——京子、聞いての通りだ。観念して、法界さんのお慈悲を受けな。お前だって根限り楽しみゃいいんだ。すぐにも天国にのぼった気持ちになれるんだぜ」

「あんまり気乗りしねえんだが、一口乗らねえわけにもゆくめえ——おい京子。大枚をは

たいたんだぜ。これから、じっくりと取り立てるから有難いと思いな。ひひひ……」

と、息がかかるばかり近々と顔をよせる。

口では余裕を見せているものの、さっきまでのひそやかな行為とちがって、大っぴらにこの美女を我が物にできる嬉しさに、ひきつった唇の端に泡をためているのだ。

「じゃあ法界の兄い。一つこれから京子に詫びを入れさせて、床上手ぶりを発揮させるから、そこで見物していてくれ。いいや、お好



イメージギャラリー

『羞悦境伝授』

須坂

旭

みのところを、タッチして貰おう。すぐにこいつが、あんたと一緒にになりたいとカラダで言うようになるさ。うひひ……」

三郎はカネがからんでいるだけに、京子に教えさとするように諄々と、喋りはじめた。

「お前が、前後もわきまえないことをやっちゃったんで、清次と五郎がすっかり頭に來てここを出ていったことは知ってるだろう。そうよ、お前の可愛い妹さんを、しょっ引きにいったんだ——」

あんな可憐な女子高校生を、面白半分の乱交パーティーに引っぱり出すことはないではないか、と三郎は言うのだ。その責任は、心底から後悔しているなどと口先だけで言う、姉の京子にある。俺たちはメンツを非常に重んじる。約束を破られりゃ、相手の体に匕首を、めりこまずのも、あたり前だ。京子は女だから、匕首のかわりに——。

また、法界の場合、京子にこそ言わなかったが、この男は俺にとって義兄弟みたいなものだ。つまり、俺や清次・五郎と同じ仲間である。少しくらい外見がちがってたって、目をつぶって慰めるのが当たり前であり、その位いのことが分らずに騒ぎたてたのも、京子がドジだからである。

別に、美津子は京子とはちがって、まだまだ8ミリやフィルムへの出演回数は少なく、まだ顔も覚えられていまい。なあに、少々の男と寝た位なら当世、嫁の貰い手だって、いくらでもあるだろう。今までのような調子でお前が自分のことだけを考えて反抗しつづければ、庇ってやる姉のいなくなった美津子も静子夫人や京子以上の途をたどることは目に見えている。俺たちは義理と人情を充分に、わきまえている積りである。必死になって妹を庇護する姉の優しい心根に真底、打たれることだってありうるのだ。そこところもわきまえない姉なんて、やっぱり姉の資格なんてないというべきだ。

「——つまり、何もかもお前の考えが浅墓すぎるんだ。身から出たサビだな。だが、それでも尚、俺は人情に弱いからお前が苦しむのを少しでも助けてやろうと思ってるんだぜ」熱っぽく語りつづける三郎の口調に乗せられたのか、この時、京子は固くとじていた双眸をひらいた。

黒目勝ちのパッチリした瞳には、もう先程の怒りのこもった光はない。

「わかってきたようだな。よしよし」

と口から出まかせの三郎はニンマリする。

「お前の過ちばかりを責めたって、今となれば、どうにもなりやしねえ。とりあえず、さしせまった美津子の危機を何とか救わなくちやなるまい——そうだろう？」

チャンスをとらえて、三郎は一気に攻めこんだ。

「俺が何とか、兄弟たちに思いとどまるように言ってもいい。たぶん、大汗をかくことになるだろうぜ。袋叩きに合うかもしれねえ。何しろ粗野な連中だからな。……そこで取引きだが、俺は兄弟が不仲になるのも承知で連中を喰いとめる、一方お前は客人の法界さんを、ありったけのテクニクでお慰めする。法界さんにお前の誠意が分ければ、俺にも加担してくださろうというものだ。——どうだい？ この取引き」

さっぱり、辻褃のあっていない言い草である。三郎は五千円で売りつけた京子の肉体に花を飾ろうとしているだけなのだ。法界からこれ以上、返金催促をされたら、たまったものではない。

京子は印象的な両眼を気弱にしばたたき、いかにも物言いたげに三郎を見上げる。

「じゃ、わかったんだな？ 法界さんの一夜妻になって、しこたまお色気サービスをやる

な。さあ、兄いと代るぜ」

ニタニタと奇怪な面相をゆるめっぱなしで横からのぞきこんでいた法界が、忽ち彼を押しのける。

「やっつと、その気になったらしいな。お礼までに、ぐっとくるウイंकをして貰いてえもんだな」

口元を締めつけられているとはいえ、その丸顔の近代的な美貌は、ドキリとさせるほどセクシーである。しかも驚いたことに、あのお俠な京子が法界に視線をからませてゆき、長い睫毛の片目をパチリと閉じて、情熱的なウイंकを、してみせたのである。

「ひゃあー、気に入ったぜ。まったく」

と大げさに天を仰いだため、のっかっていただけのソフトが後へ脱げ落ちる。

「その調子でもう一度。次に仲直りのキスをやろうじゃねえか」

とまで言った時、三郎が背後から、ぐいと肩をつかみ、耳元へ囁きかける。

「猿轡は当分はずして貰っちゃだめだぜ。なあに、理由は今にわかるさ」

見事に禿げたダチョウの卵のような頭だ。

それをチラリと見た京子は、抑えようのない嫌悪感に、かすかに眉間にしわをよせ、顔を

そらせる。

「さあ今のゾクツとくるウイंकをもう一回願うぜ。お前は何しろ、高くついているんだ」

京子は星のような、きらめきで光っている澄んだ黒い瞳で、再び、マジマジと新入りの加虐者の顔に見入る。

まるで蛇の前ですくんでしまった小鳥のように臆病に臉をそよがせて、二度、三度と音をたてるばかりに万感をこめたウイंकをおくるのである。一杯に盛り上がっている新しい涙が、そのたびに眼尻から、したたった。「ようし、きまった。じゃ兄い。あっちのバスルームを使うといい。何かこの女、妙な匂いがするようで、いけねえ。それに俺たちがそばにいれば、気も散るだろう」

たちまち承知をする法界に、三郎も手を借して改めて京子を縛り直す。さっきのような

四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る

団鬼六作『花と蛇』特集第四弾

本誌S42/1よりS44/4までの連載分を収録し、四馬画伯の華麗なる口絵を附した集大成ですが、重版刊行は致しません。只今、若干在庫がありますので、未入手の向はお早めにお申し込み是非蔵書の一部にお加え下さい。申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号 暁出版株式会社へ。

略号『花』

定価五〇〇円(送共)

反撃があつてはいけなから、乳房の上下をそれぞれ一卷きし、あまった縄を後ろへ垂らした。荷造りではないから、作業は慎重である。

精根つきはてたような京子は、されるがままに小麦色に充ち張った裸体を法界にあずけていたが、

「おっと、両脚は太股開きのままでいいぜ。趣向をかえないと面白くねえ」

と法界がふざけると、京子は弱々しく首を左右に振る。委細かまわず、二人して、ずしりと重い肉体を、かかえ上げ、昨夜チンピラたちのために化粧をした鏡の前を通してバスルームの方に、かつがれてゆく。

途中、法界がよろけて奇声をあげる。その間にも、くしゃくしゃに乱れた髪をゆすって京子は空しく首を左右に振りつづけるのだ。

しかし実のところ、三郎は京子と法界を早くバスルームに押し込んでしまおうと、あせっていたのである。

清次と五郎が飛びだしていつてから、かなりになる。誰かにとがめられたりしては面倒なので、旨いタイミングをねらっているのだろうが、京子に関わりあっている間は、しき

りに気になった。

京子が、すっかり観念しきらないうちに、女心などは、まるで知っちゃいない粗野な五郎が、苦心して作りあげた芝居を元のモクアミにしてしまうのを恐れたのであった。

髪をバサバサにし、不潔な蒼黒い感じの上半身むきだしの三郎は、陰気な感じの若者である。大きなコップに酒をつぎ、ゴクゴクとやる。さすがに疲れた感じだ。

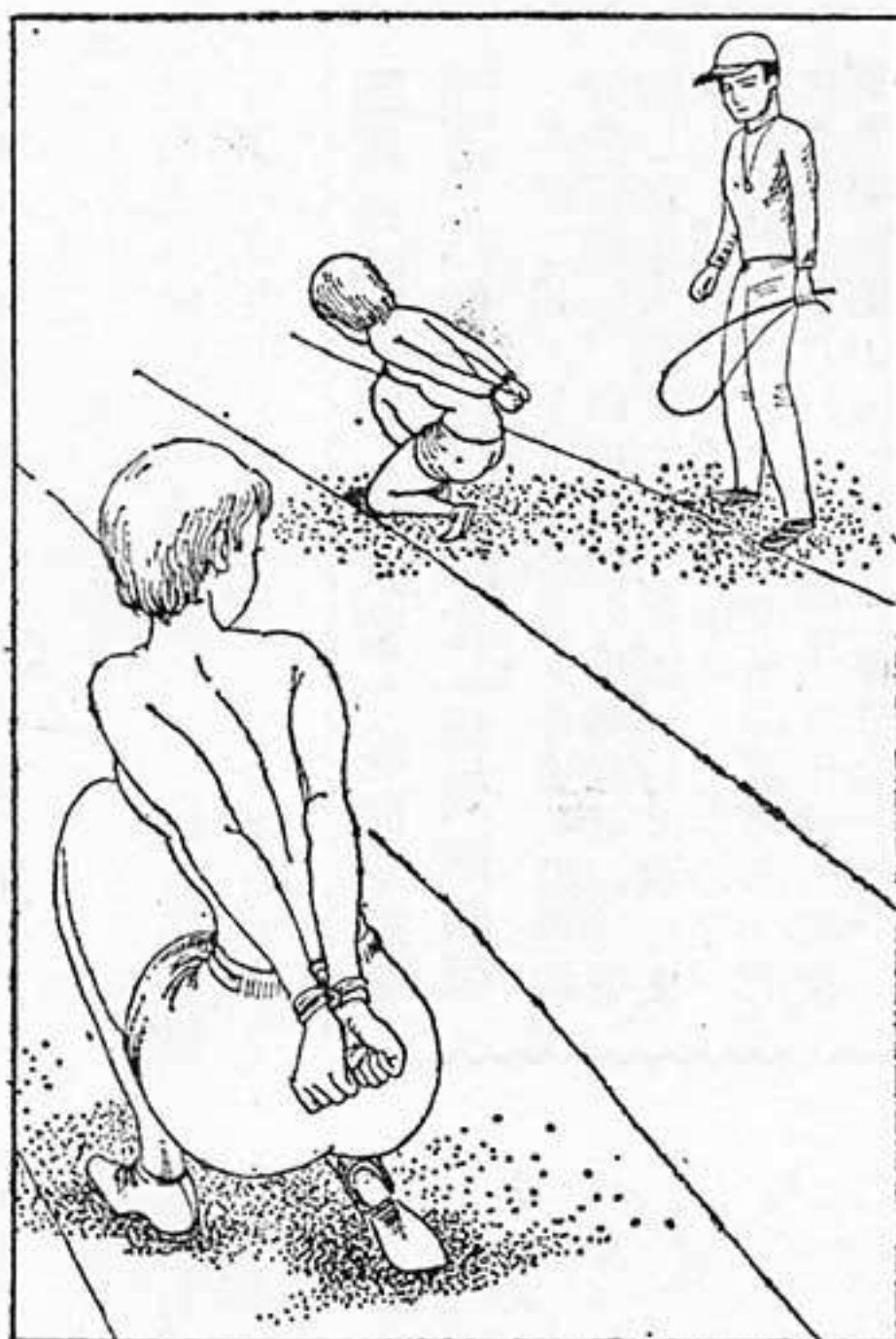
三郎の危惧は待つほどもなく的中した。いきなりドアが手荒く開かれたかと思うと得意満面の五郎が凱旋將軍よろしく、

「さあ、美津子の、ご入来だぜ」と叫んで入ってきたのだ。

——(つづく)——

(作者註・作中に於いて作者は、無毛症そのものを揶揄するつもりは全くなく、非道な小悪党が、たまたま、それであったに過ぎないことをお断わりしておきます。作者は眼鏡をかけていますが、眼鏡をかけた悪党は、ずい分いるはずですし、ちぢれ髪に金壺眼の姦婦も現実に、いるかもしれません。特定のモデルは一切ありませんので、ご承知下さい。)

カット・室井亜砂路



流 転 の 教 育 者

△若い女子学生のお尻を愛し続けて▽

鳥 井 宣 孝

時間の経過は早い。私が、教育者として女子学生のお尻を叩き始めてから、すでに二十年有余の歳月が流れた。今、振り返ってみると、おびただしい教え子のうちで、可愛くてお尻の美しかった多くの女子学生のこと、懐かしくも鮮かに思い出される。

私は、若い女性の肉体のうちで、第一に美しいのはお尻で、その次が乳房だと思う。日本の社会で、若い女性の肉体を「美」という尺度から公然と見るようになったのは、一般的には第二次世界大戦後、すなわち、日本が民主主義国となり、男女同権となつて、男性と女性が、それぞれの特性を尊重し合つて、

社会的に協力するようになってからで、それまでは隠すべきものとされていた若い女性の肉体の美しさが、公開されるようになった。

戦後間もない頃、私は、珍しいものを見るような気持ちで、女学校の運動会を見に行つたのだが、短距離競争のスタートラインにズラリと並んだ、ブルーマをつけた学生の丸くて大きなお尻に、圧倒されるような、まぶしさを覚え、その見事さに感心した。体操演技で躍動する素晴らしいお尻を眺めているうちに、楽しさと同時に生き甲斐を見つけたような気持ちになった。

この時、私は高等師範学校文科国語漢文科

の学生であつたが、その翌年、文理科大学教育学科に入学した。そして私は、その以前から思想的関心をもつて研究していた西ドイツのマルチン・ハイデッガーの、実存主義哲学の立場で教育哲学を研究すると共に西洋教育史の研究もしていた。

西洋教育史の多くの書物のうちには、西洋の家庭で、今日でも益々盛んな、娘のお尻を父親が掌やムチで叩いて、しつけをする伝統が学校教育の場でも行なわれていたことを示す挿絵が載っている。

下衣をまくりあげられ、両ひざを立てた俯伏せで、お尻をもち上げている若い女子学生

のお尻を先生が、先が九本に分かれている、いわゆる「九つの尾のムチ」で叩いてる絵を見て、私は西洋風俗に深い関心を持っていたのだが、戦後、民主主義を日本社会に深く植えつけようとするアメリカ進駐軍の教育、文化、医学担当局が次々に刊行した啓蒙書や米国に行つて家庭見学をして来たという日本の美容研究家などの報告書を見て、私は尚更に関心を深め、感嘆したものであった。

それは、アメリカの、若い娘の居る家庭では、その娘の健康と美容のために、親が浣腸をしてやるのが普通のこととなっており、バスルームには、いつもグリセリン浣腸器をゴム袋に入れて用意されている。さらに、親はその浣腸の効果を一層豊かに、多彩にするために、石けん水とかスモモの汁とか、いろいろな浣腸液をも、準備している、というのである。

私は、若い娘のお尻を叩いたり、たびたび浣腸してやるという西洋の伝統的家庭習慣を憧れの気持で理解した。そして、娘の健康と美容のために、日本の家庭でも西洋のこの習慣を見習うべきだと思った。

私は医学書を漁つて、浣腸の仕方を研究した。その結果、両手、両ひざを肩巾ぐらゐに

開いてベッドにつき、ひざを立てて、お尻を高くもち上げさせ、浣腸器を、やや上向き加減で浣腸してやるのが良いことが分かった。このポーズを医学では「膝肘位」と呼ぶそうである。

さらに西洋では、親は少女の肛門で検温するという。日本のように風通しのよい腋の下で計るより、ずっと合理的で精密であつて、事実、腋の下で計った体温にくらべて、肛門で計った場合は五分ほど高い、と、ある教育雑誌に書かれていた。

私は、文理科大学三年になった夏に、附属の高校一年生と小学五年の生徒を対象に、教育実習をさせられたのだが、ある日の放課後一人で残っていた小学五年生の少女によって前記検温の差を確認する機会を得ることが出来たのである。この少女のお尻は可愛く美しかった。

この実験？を高校女子学生でもやってみたくてたまらなくなつた私は、次の日の放課後に体温計を持って、ガラランとした教室を見て廻つた。音楽室に二人の女高生が居残つていた。知的な美しい顔と、スラリと上品なスタイルをした娘であつた。ショパンを弾くピアノの音を聞きながら、チャンスを持ったが

一曲弾き終わった彼女が窓ぎわに両手をついて深呼吸した時に、さりげなく、そのお尻をたたくようにしただけで、検温までは出来なかつた。二人居るので諦めた訳である。

私は貧しかったが、教授からは目を掛けられる何かがあつたらしく、卒業後も研究所に残れるようにと、ある富豪の娘を紹介してくれ、その富豪の大邸宅の一室を借りることになつた。勿論、結婚前提である。

せま苦しく騒がしい下宿とは隔世の大邸宅住まいにも少し慣れたある日、何気なく便所にとびこんだ私は、びっくりした。大便所の戸を開け放したままで、私の婚約相手ともいふべきその娘が、むき出しのお尻をつき出して用を足していたのである。しかも娘は、立ちすくむ私の視線を羞かしがりもせず、悠々としたものであつた。大金持の愛娘として、のんびり育つと、排泄の場を見られても、少しも、わるびれた様子も、みせなくなるものらしい。

そのあと、私は、出て来たこの娘のスカートの上からだか、お尻を撫でてやりながら、偶然とはいへ、たいへんところを見てしまったことを詫びたが、この結婚適令期の娘はただ黙つて私にお尻を預けていたのだ。

イメージギャラリー

『人質あそび』

志 羽 利 也



結局、この娘と私との縁談は、余りにも財力の違いがあり過ぎるということで、成立はせず、文理科大学を卒業した私は、この邸宅を出て、昭和二十五年に鳥取県立某高校教諭として教壇に立つこととなった。

私の西ドイツやフランスの実存主義の哲学

研究に対して尊敬してくれる多くの男子学生もいたけれども、私としては、私を独身の新任青年教師として、なついてくれる多くの女子学生が可愛く、うれしかった。

放課後、ブルーマーとかトレーニングパンツ、テニス着などが躍動する各運動クラブ員

のピチピチした女高生の姿を眺めるため、私は出来る限りの時間を、小使室の窓辺で過ごすようになった。小使室には、次から次へとそれら女高生が水を飲み、洗面をしに入ってくるからだ。張りきった丸いお尻を私に向けて洗面所にかがみこむ様子は、私に非常な幸福感を、もたらしてくれた。私は、いろいろな口実を設けて、そのお尻を、ぴしゃぴしゃ叩いたり、抱くようにして撫でてやった。私は教師である。教え子を激励する愛のムチという訳である。

勤務二年目で、私はクラス担任になった。

教室の掃除には毎日、つき合った。私自身が掃除をするわけではない。女子学生のお尻を高く持ち上げて拭き掃除するのを眺めるためである。もっとしっかり拭けといってお尻を叩き、四つんばいでお尻を高く上げることが美容体操になるといって、そのお尻を撫ぜまわしてやった。このお尻に浣腸してやりた

いものだと思いがら……。女高生の肛門を、ありありと指先に感じとったのは、私が鳥取県の別の高校に転任した年の夏のことだった。

ある日、水着の女性のお尻を拝見しようと思つて海水浴に行った私は、浜で偶然に出合

った同僚とその奥さん、そして奥さんの妹で高校三年というカワイコちゃんと一緒に遊べる幸運に、めぐり合った。特に彼女の、高校生とは思えぬほどの娘らしい仕草と豊かな肢体は、まぶしいくらい的美少女だった。

やがて同僚がボートを借りてきた。美少女が乗りこもうとした時、波でボートがグラリと揺れた。膝の上辺りの深さまで海に入っていた関係か美少女は水に足をすくわれる形で尻もちをついた。後ろに居た私が、助け起し、片手でボートをおさえ、片手で美少女のお尻を押し上げるようにして、乗せようとした。掌にズッシリと感じられる水着一枚のお尻の豊かで柔らかい量感に、私の血は逆流する思いだった。力任せに押し上げた瞬間だった。私の指先が、ハッキリとした感覚を捉えたのは……。だが一瞬後には、美少女はボートの上で、ほほえんでいたのだった。

勿論、まえまえから抱いていた願望ではあったが、このハプニングから、私の肛門憧憬は一際、強くなった。

この、火を点けられたような願望を、私は赤線（遊廓）の女に、ぶつけた。赤線地帯の中に私のこの憧れを満たしてくれる若い女が居たことを、私は今でも感謝しているのだが

指だけではなく、アナル・セックスを……と幾度も思いながら、いくら赤線の女といっても、余りにも可哀想な気がして要求することが、ためらわれ、遂にそれが赤線癢止まで続いて、夢想のみに終わってしまったことだけは悔まれてならないのだ。

こうして赤線内で、いく今は、うっせきした願望を吐かしていたとはいえ、私の本当の憧れは依然として変わらなかった。私の指とか流腸器の欲求は、その対象を清純なハダカの女高生のお尻に求めていたのだった。だが私が鳥取県に勤務して六年間を過ごす頃に戦後民主主義の自由な空気は、社会における保守反動勢力のめざましい抬頭で、学園からも少しづつ、失われてきたのだった。

フランス一の美少女といわれたエロイズのお尻を、ムチで叩いて教育しつつづけていた偉大なる神学者アベラールが、ついに修道士たるの分を越えて許されぬ行為をしてしまったからの悲劇は、世界に有名である。

独身の私が、学校で女高生のお尻を叩き、赤線通いをしていることは、いつしか周囲の評判になっていて、私は絶えず冷たい目を意識しなければならなかったのだ。

そこで私は、より自由な大学教師になりた

いと思って高校教諭の職を辞し、昭和三十一年に九州大学旧制大学院教育学専攻に入学して、大学時代の専門であった教育哲学と西洋教育史を研究したのだ。

福岡市での、足かけ四年に亘る大学院学生生活と教育学部研究室助手生活は、私にとって忘れることの出来ない素晴らしく楽しい一期であった。この土地には、否、この間に私の行った所には、上品でA感覚の発達した少女や若い娘が多かったからである。ここでも私の赤線通いはそれがなくなるまで続いた。

この土地で私は転々と下宿を替えたが、ある下宿のオバさんの姪にあたる美少女で、高校三年在学中のカワイコちゃんが二階に住んでいて、その隣部屋が空いていると知ってから、私はその下宿に落着くことにした。この家には二階にも便所と洗面所があったこともよかった。

私は、その高校三年の美少女の家庭教師を買って出て、勉強の合間を粧っては、アメリカの家庭風習の話を熱心にしてやった。

先述の、健康と美容のために、親が娘に流しをするということや、娘のお尻を父親がムチや掌で叩くという話を、この美少女は身を乗り出すようにして聞き入り、何かなやまし

げな素振りを見せたのである。

私は内心、期するところがあって、ガラス製の浣腸器とグリセリンの大ビンを用意して機会を待っていたところ、数日経って、案の定、美少女は私に、便秘が続いていると訴えてきたのであった。チャンス到来である。

強いて平静を粧った私のいう通り、この女高生は素直にパンティを脱いだ。セーラー服にリボンをつけた上着はそのまま、私の指示に従ってうつぶせになり、高く持ち上げた丸い艶やかなお尻は、この上なく可愛く美しいものとして私の血を騒がせた。

私の長い間の願望、夢見つづけてきた理想の構図が、そこに出現したのだ。きびしいグリセリン浣腸をしてやる私の手は、その昂奮と感激で、ぶるぶる慄えたのだった。この時の、ひたむきで可憐な十八才の美少女の表情と美しいお尻から受けた印象を、私は今、奇ク誌上に見る深田菊子という美少女の写真にダブラせることが出来るのである。

又、その後、私は、夏にニキビがたくさん出て悩まされるという女子大学生に、十日間続けて浣腸してやれる機会に恵まれたが、この二十二才の女子大生のお尻の美しさは、女高生の可愛い美しさとは少し異なり、何とも

いえないお色気が感じられたのだったが、この女子大生の印象も、奇ク誌十月号の鈴木千鶴子という女性の写真が、ありありと、よみがえらせてくれたのである。

この女子大生は、スポーティな感じのする美女であつたが、至極あっさりしていて、大学の定期身体検査でも、痔の検査などは膝肘位の姿勢で男の医者に診て貰わねばならず、大抵の女子大生は嫌って肛門病はないからと受診を省くのだが、自分は平気で診てもらうのだといっていた。

私は、九州大学で研究を続けて、女子教育についての私の信念を一層、強くした。西洋の学校と家庭における女子教育の伝統の強さが、ますます分かってきたからである。

あるアメリカの教育問題辞典の体罰の項目に「女子学生の尻を先生が叩く伝統は、ややもすればその昔の、エロイズとアベラールの間に生じた関係のようなことを再現する可能性を持っている」と書いてあったり「尻を叩かれたり浣腸されたりする時に、若い娘は性交をされるときのような気分になる」と著作の中で言っていた新フロイド派の教育心理学者も居た。けれど、それらは却って、伝統の權威を示すだけであろう。

私は研究室助手として勤め続けて九州大学講師になりたかったのだが、教授の紹介で長崎市のキリスト教系某女子短期大学講師となり、そこで私の女子教育の信念を傾けた。しかし、それで経営者の方針と対立してしまい退職せざるを得なくなり、熊本市の某私立女子高校教諭になったのだが、長崎の女子短大にも可愛い女子学生が居て、けっこう楽しいことをしたけれども、A感覚の優れて発達した女高生の居た熊本での教諭生活の方が余計に楽しかった。

しかし、ここでも長くは居られなかったのだ。それから、下関市の私立某高校女子部の教諭となって、ここで、五年間居住したのだが、その間には、いろいろなことがあった。

近くに公立女子高校があつて、どこでも見られる風景ではあったが、バレー部の練習で女高生が男の先生にお尻をきびしく手で叩かれながら練習してた。私は、やってるなと思いつつ、よく見ていたものだが、ある日電車の待合所で、見覚えのある女高生と会ったので私は自己紹介をして、バレーの練習中の尻叩きをどう受けとっているかと質問してみた。するとその女高生は、初めはキツイと思ったが、慣れてくると叩かれた方が張合い

が出て、お尻を叩かれない日には空白を感じ
 るという意味のことを答えたのだ。私は、九
 州大学教授グループがヨーロッパ教育調査に
 出かけて西ドイツの女子高校生に出した質問
 用紙の、貴女のお尻を父親が罰として叩く時

に、貴女は反撥的な気持が起るか、という
 回答欄に、お尻を父親に叩かれる時には、い
 つも素直に叩かれている、と、美しい字で書
 かれていたのを思い出した。
 私は、私の勤めている高校女子部で、学課



イメージギャラリー

『早くやって!』

飯田ひろくに

の教授法の一つとして、女高生のお尻を叩く
 ことを実行した。だが、ここでもこれによっ
 て経営者との対立が起り、私は辞めなけれ
 ばならなくなったのだ。私は、五年間を過ご
 した下関の町に一抹の愛着を感じながら、神
 戸市にある私立某女子高校に移ったのであっ
 たが、この学校では、私の教育上の信念を尊
 重してくれたのであった。私は大いに意を強
 くして女子教育の信念のもとに打ちこもうと
 した。だが運悪く私は病気を患ってしまった郷里
 に帰って養生しなければならなくなったので
 ある。今、私は療養の甲斐あって健康をとり
 戻しつつある。私の信念通りの女子教育に意
 欲を燃やし得る日の再来も近いことだろう。

これまでの私の孤独ではあるが、いつも可
 愛い女子学生によって慰められてきた過去を
 思い浮かべつつ、テーブルの上に並べた奇ク
 誌の深田菊子、鈴木千鶴子、前田真知子、笠
 井奈保子等、若く美しいモデル嬢の写真を眺
 めながら、若い女子学生のお尻を愛しつつけ
 て流転してきた私の教育者としての生活の中
 で、特に印象に残る数々の女子学生の面影を
 モデル諸嬢のお尻に見出して深い感動を覚え
 ているのである。

— (おわり) —



第五十三回

三角台

待然草（つれづれぐさ）の有名な書き出しに「いでやこの世に生れて願わしかるべきところそ多かれ」と、人間の欲望の限りなき姿を認めている。

有明の位は、それこそ「いともさらなり」だった。貴妃、親授の位も望むべくして獲得できるものではない。

人権があたえられ、管理社会を構成する人位、つまり銀のクラスといっても、文武それぞれ百名余りにすぎぬ。隷従を、もっぱらと

する銅のクラス、すなわち婢奴の女たちから見れば、早く銀のクラスに陞ることこそ、ただ一つの希望だった。そして、その狭き門は「力をつくして入る」べきメリットを約束していた。

だが、銅のクラスといえども、底辺に呻吟する鉄のクラス、それは家畜であり、家具でしかない階層の立場からすれば、人間として見做されるというだけでも、目のくらむような羨望を感じさせずにはおかないだろう。しかも、人数は底辺にいたる程広く、且、厚くなっているのだから、怨嗟の声は国中にみなぎっているといつてよい。ただ管理社会、金

前号までⅡ独裁主、有明は世界中から誘拐蒐集した数千の美女に畜隷隷従を強制している。彼女等は、その材質に応じ、五段七階級に分類され、巧妙な統制管理を受けている。魔女であることを自認するのを拒んだ清水由香は拷問檻に渡され、システム化した責め苦に呻吟する美女の一人だった。麻薬団の女ボスで有明の部下である林少姐や野沢洋子を殺した美少女、林美玉も今は羽根を、むしろれた小鳥のように、桎梏の下にあって、只管、有明による裁きの時を、待っている。

クラス、銀クラスと銅クラスの中の婢位を除いては、全く自由を奪われ、桎梏の下で抑圧されているから、その様な声は所詮「曳かれ者の小唄」でしかないのである。

しかし、以上は日常生活の体制下に組み込まれた階級をあらわしているだけだから、この他に未決檻、懲治檻に収容された者の苦難までも包含してはいないのである。まことにそれは檻というにふさわしく、惨烈な痛みと残酷な辱しめが、手を変え品を変えて、女囚たちを翻弄していた。

正直一途の清水由香、F―七五一号は、その嘘をつけない性格が災いして、懲治檻に収容されたまま、すでに数カ月もの間を苦悩と叫喚の裡に過ごしてきた。彼女にとって、地獄へ陥ちたような日々だった。そして、巧みにレイアウトされた拷問カリキュラムは、由香を被虐になじませることもなく、彼女をスポイルして、マゾ化させる過ちも犯さなかった。適当にあたえられる「休暇」は、その後の責め苦を一属、耐え難く、辛いものに変えて行った。言いかえれば、責めの効果は常に斬新で鮮烈だった。

そして、不思議なことに、彼女は以前にも

増して美しくなった。不思議なことに――とはいっても、それは地上的な常識に比べて、という意味での表現であって、この国では、しばしば見られる現象でもあった。一旦は鉄のクラスに入れられた佐瀬直美が再発見されて、遂には上臈位を授かるに至ったことなどその最も顕著な実例であろう。一般的にいて先進社会、および富裕階級は、慢性的にオーバーフィートイング（過食）状態にあるのが、地上世界の通弊なのである。換言すればこの国へ来た女性たちの大部分が、いわゆる先進国の、それも上流家庭の子女だったからこうしたオーバーフィートイングの害毒から免れ難い立場にあったということになる。

清水由香は、それ程、恵まれた家庭に育ったとは、いえない。さもないければ、たとえば、どんな羽目に陥ったといっても、金子のようなパチンコ成金に好色の餌食とされる筈はなかったであろう。とはいっても、本来が小太りの体質に加えて、安逸な夜の職業が、彼女の肉体を漸く崩し始めていたことは、否めない事実だった。水冷火熱、そしてハンマーと鍛え抜かなければ鋼鉄にならないように、人の身心も鍛練されなければならぬ。そして、

それが強制的に加えられる拷問であっても、鍛練する効果には変わりがないのだ。必要な栄養価ギリギリの粗食と、最少限度の睡眠時間、その上、かくすところもない裸体に加えられる激しい責めは、肌を傷つけたり内臓を損壊しない限度で、呵責なく炸裂する。美囚は、あらん限りの声を振り絞って哭き、その筋肉は信じられないほど、ねじり廻されるのであった。

由香が、こんな目にあわされた理由は、ただ一つ、彼女の嘘を言えないという性格からである。その材質をもってすれば、容易に銀のクラスにランクされ、僅かな懲治檻暮らしのあと、断根式（第36回参照）を経て、自由人となったに違いない。あの、おどろおどろしい魔女審問の芝居は、女囚たちに、自らを襲った極端な境遇の変転を認容し、受用せしめる効果を狙っていた。そして、大多数の女たちは泣く泣く、心にもない罪状を認めて、自分は魔女であったと、自白してしまうのである。（第30回）

しかし、さすがの清水由香も、自分の馬鹿正直さを覚り始めていた。拷問が彼女を卑屈にさせてしまったのであろうか。いや、そう

ではない。彼女は依然として、身心共に健康であった。厳しい拷問日程は、彼女の精神を向上させ、彼女の肉体を健かに美しく変えて行く役割しか果たせなかったからである。健康な心は自らの立場を客観的に観る余裕をさえ生じさせた。美しい肉体は疑いもなく、この国での立身出世を約束するものであった。

とはいえ、一たび拷問檻に下獄した者が泛かび上がる確率は非常に渺なかった。佐瀬直美の場合が、そうであったように、有明や貴妃たちの目にとまり、その権力によって引き上げられない限り、獄

吏の方から上申されることは極めて稀有のことであった。前にも述べた通り、その上申が正当に評価されたとしても、獄吏には何の役得もなかったし、逆に上申した者が救済に値しないと判断された場合、罰せられるのは却って獄吏の方だったから、誰も進んで危険を犯す筈はなかったので

ある。又、予備役の獄吏、および、その任務に当たるアマゾン女兵にしても、美しい女囚に対して、嫉妬の念を感じこそすれ、それを引き立てようとする考えは、全くといってよい程、あり得なかった。下層のアマゾン女兵は、自分より上の材質に、めぐまれたと思う女囚を、殊更、いじめ抜くことに秘かな快楽を感じているかも知れなかった。

「あッ、あ、アーツ」

半ば開いた美しい唇から、小さな舌が苦し

げに出たり入ったりしている。

今日の清水由香は奇妙な懸架に、アグラをかけたような姿で固定されている。とはいっても、両手を高々とパイプ横木に吊るされて手首だけで体重を支えているのだから、その裸身は丁度、釣り鐘のようなものであった。一つに、くくり合わされた足首は、50センチばかりのパイプで首輪に連結されて、これは伸ばすことも縮めることもできない。

無防備に揺れる豊かな臀部は、少しでも手首の疼痛をゆるめようとして、切なげに何か

支えるものを求める。それを意地悪く見越しているかのうちに、この裸女釣鐘の直下に変な形をした台が据えてあった。洋の東西を問わず、昔から試みられていた、三角馬に似ていたけれども、これは刃物のように削られた上の稜線が前の方が高く、後に低く傾斜しているところが違っていた。そして、その前方の先端はピラミッドのように尖



って三角形に開いた由香の股を突き抜けていた。

おそろべき三角台の効果は、稜線に上向きに植え込まれた刷毛の列で一層、強められている。手首を襲う激しい苦痛に耐えかねて、ちよつでも腕の力をゆるめてしまつと、おぞましい刷毛の束が責めてくる。それだけでも飛び上がる程の刺戟なのに、力尽きて、それも出来ないとする、体の重みでズルズルと稜線を這つてしまふ。固い刷毛が柔らかい肌を残酷にコスることになる。たまるものではない。必死に力をこめて再び腰を浮かす。こうしたことゝの繰り返しが、遂に力尽きてしまふまで続くのである。

今日、責められているのは、清水由香ばかりではなかった。彼女のすぐ横に、一人の美女が棒のように吊られて、けたたましい悲鳴を奏でていた。切れ切れに何かを、うったえようとするが、言葉になっていない。それもその筈。ぐつと、のけぞり、苦痛に歪む顔。パツクリと開いた唇から、可愛いらしい舌が真上に、つき出ている。この女は、その舌を吊らっていたのである。舌を吊った紐は、清水由香をブラさげているパイプ横木に連結さ

れて、清水由香が全体重をかけると、舌を五センチばかり、引き上げる仕掛けになっていた。そうになると、この女は爪先だけで立つのが、やつとという、状態にされてしまふ。逆に清水由香が腰を落として、刷毛責めに苦しみ始めると、この女の方は、漸く踵を床につけることが出来るところまで舌が、ゆるんてくる。

美事なシルエットの全身が、真黒に塗りたくられている。そのくせ、隠したい筈の乳房と臍、そして下半身の一部は、まん円に、くり抜かれているのだった。さらに、ガツチリしたヴィーナス帯がウエストに喰い込んで、剥き出しの体を護っていた。

いうまでもなく、黒いプラスチック膜に被われた女体は、例の一等女囚、王美齡のものだったのである。

せんだって、裸身を嫌って衣服を要求した彼女の言葉を逆手にとって、プラスチックを吹きつけてしまった有明は、腰をロックした上で拷問檻に渡してしまつたのである。

ヒステリックに、さからつた美齡に、あたえた有明の処罰だったといえよう。

一等の未決女囚だから、肌を曝すこともな

く、顔すら見せられないといふので、顔にもあのアイスホッケーでゴールキーパーが、かぶるような面をつけ、脱げないように後頭部でロックされていた。

舌が少しでも、ゆるむと、必死に叫ぶ美齡の声が、

「アイヨー、アイヨー……」

と、やつと聞きわけられるのだが、それがすぐ由香の体重でガクンと伸び切つて、そうなるのは、もう如何ともならない。ヨダレをだらだらと滴らせながら、獣のように喉声で吼えるばかりであった。

由香とちがつて、美齡には自分が、どうしてこんな目に遭わされるのかサッパリわからなかった。何の説明もなされず、全く突然にふりかかってきた災厄だった。何よりも苦痛だったのは、脱ぐことの出来ないプラスチックの着物だった。それは暑くるしく、ザラザラした垢汚れの感覚と相俟つて、清潔好きの美齡を四六時中、悪感のとりこにしていたのである。

肉 風 船

ジャンヌを連れした有明が入ってきたのは、

清水由香にしても王美齡にしても、互いに心ならずも相手を責め合ってきて、その我慢がソロソロ限界に達しようとしてきた時であった。特に王美齡は、ひどかった。彼女は、たとえ舌が千切れてしまっても、その全体重をひき延ばしている、あのいまましい細紐のくびきから脱して床に倒れ伏したいという気持ちになり始めていた。ガッチリと舌を、とらえたゴムは、どんなことをしても抜きとることが出来なかったのである。

由香には目もくれず、有明はツカツカと美齡のそばにより、真っ黒な全身塗装のなかでここだけは真っ白にクッキリと飛び出した双の乳房を快さそうに眺め、その小さな右の乳首を、ちょっと爪先でハジいた。

苦しみもがいていて、有明の来たのを気づかなかった美齡の全身が、電気に打たれたように硬直した。彼女の感覚は、それ程、敏感だったのである。そして、上を向いたまま、自由にならない顔で、わずかに目だけを横に向いて、今はもう反抗する意思を全く喪失した眼差しで、有明を見つめるのであった。哀願しようにも、舌を拘束されているのでは言葉にならない。どうしても、目にモノを言わさなければならぬのだ。

有明は、例によって、女囚の気持など、頭から問題にしないという態度で、

「どうだ、もうハダカになるのを嫌だとは言わないだろうな」

完璧な福建語だった。青帮の首領、蔡樹理が再現する。

「是懂（シー・トン）」

といったつもりが、ただ

「ワウ、ウ、ウ……」

としか聞こえない。しかし、その素振りは何よりも明瞭に彼女の屈服を表現していた。

それなのに、わざと有明が聞く。

「え、何ていったんだ。ハッキリ言わなければ、私には分からないよ」

マスクの下で、美齡はポロポロ大粒の涙を流した。疲れ切った踵を無理にあげて、やっとのことで舌を動かせるようにする。それでも、ゴムを巻かれた舌は自由には動かない。

「なに、もう一度、いってごらん」

ネチネチと、意地悪く有明が、からかう。

十回以上も言い直させられて、もう全裸になるのを拒否しないと誓った王美齡は、漸く舌吊りを解かれた。心身共に、困憊の極に達した彼女は、あられもなく床に伸びてしまっ

た。はげしく息づく乳房の上に、有明が片足をのせても、拒む力さえないようであった。

足のうらに伝わる柔らかい感触を楽しみながら、有明が担当の獄卒に命令した。

「もうこれで懲り懲りしたろう。高橋に連絡して、エステルへ戻してやれ。もう、身体を綺麗にしてやっていい」

「承知いたしました」

二人のアマゾン女兵が担架に美齡をのせて出て行ったあと、有明はジャンヌを振りかえって、

「もうすぐ、林美玉が曳かれてくるだろう。断わっておくが、決して君の方から手出しをしちゃ、いけないよ」

「ハイッ」

胸を張ったジャンヌが軍人調で答えた。激しい訓練でキビキビした動作や口調が自然に身についたものになって行ったのであろう。

可哀そうに清水由香は、王美齡がいなくなっても、例の繰り返しを止めるわけにゆかない。膏汗を流し、切なげに叫びながら同じことを続けていた。

ジャンヌから向き直った有明が、はじめて気づいたように、あらためて由香の裸身に目をあてた。例によって、何もかも見透かすよ

うな目の光だった。由香には、その視線が、彼女の素肌を、ジャリジャリと切り割いて行くように覚えて慄然となった。

「これは、どうだ。存外、よくなっ
たじゃあないか」

話しかけられた相手は、ジャンヌ一人しか、いない。そんなことを言われたって何がよかったのか——と、どぎまぎしたジャンヌは、

「はい。ええ……」

と不得要領な答え方をするしかなかった。

台湾にいる恋人を慕って本土を密出国した十六才の美少女とはマッカの偽りだった。林美玉、実は中国系秘密結社のメンバーであり日本における麻薬シンジケートの女ボスだったのである。(第12回以降、参照)

本当の年齢は、よくわからないが(彼女は生れた時から両親を知らず、生年月日も分かっていない)十六才といっても領けるほどの童顔で、何よりも成人には見出すことの困難な柔らかい肢体の持主である。これが怖ろしい麻薬団のボスだとは、およそ想像すること



すら出来なかった。それが又、組織が彼女に大任を委ねて日本へ派遣したねらいだったのであろう。現実、日本における麻薬の取締まりは近年特に厳しく、細密をきわめてきた。組織としては、それに対抗する必要に迫られていたからである。

秘密結社といっても、ライトウイング(右翼)に近い青幫(ちんぱん)は領袖、蔡樹理(実は有明友之助)の統率の下、麻薬との斗争にファイトを燃やしている。全くのところこの活動がなければ、林美玉を頂点とする日

本麻薬組織は破壊されなかったであろう。今や、その秘密は悉く日本官憲によって曝き出され、そして、その女ボスは、ひそかに有明の手中に帰し、裁きの時を待っている。有明とて、この強大な勢力に対して無傷で勝ったわけではない。多くの同志を喪ってしまった。

就中、可憐な周少姐、野沢洋子の死は、最も有明を悲しませた。それだけに、有明の林美玉に対する憎しみは、大きい。たとえ、彼女が五段七階級の上位にランクされる「材質」の持主だとしても、尚且、罰せらるべき彼女の大罪だった。

けたたましい悲鳴が、遠くから聞こえてきた。そして、それが次第に近づく、拷問室の扉がボタンと開いて、一人の裸女が突き飛ばされるように転がり込んできた。

ジャンヌには、それが林美玉だとは、どうしても信じられなかった。

それ程、彼女の変わり方が激しかったのである。一口で言ってしまうえば、林美玉が一举に十才も齡をとってしまったかのように感じられた。頬がゲッソリと落ちて、鼻の線も鋭さを増し、彼女を特徴づけていた童顔は、も

はや、想像すべくもない。その上、目だけは一まわりも大きくなったようで、恐怖に戦くそのまなざしからは、かつて女ボスだった強さは微塵すら残されていなかった。

身のこなしが不自由なのも道理だった。後にまわされた両手首は、高手小手に首輪に連結され、その重みで首輪は喉に痛々しく喰い込んでいた。

蹴とばされて、一旦はザラザラしたコンクリートの床に二転、三転したものの、見ていても、いじらしい位の努力で必死に起き上がろうとする。さもないと、どんな懲罰が課せられるか分からないからである。

大粒の涙をポタポタと流しながら、漸く膝立ちになった林美玉の、やつれ果てた顔の下に、これは又、うちひしがれた彼女の心とはひどく裏腹に、一層、大きさを増した豊かなバストが慄えていた。

彼女の落とす涙の玉は、その突きだした胸に落ちて、えも言われぬ曲線を、しとどに濡らして行く。

そして、これもまた「女」を感じさせる程爛熟してきた腰線は、昔のボーイッシュな美しさとは反対ではあるが、違った意味での艶めかしさをプンプンと匂わせている。

不自由なのは上体ばかりではなかった。膝下をガッチリ締めつける鉄輪に、50センチ程のパイプが固定されていて、膝頭を閉じることを許さない。

美囚は不自由な身体ながら、やっとのこととで有明の足下に、いざり寄り、額をゴツンと床につけて叩頭した。反対に豊かな臀部が屹立する。

あえぎあえぎ哀願する声は聞きとれない様に小さい。しかし、たとえ聞きとれたとしても中国語ではジャンヌには分からなかったであろう。ただ、ひたすらに許しを乞うているのだということだけは、誰にでも分かる。そして、そのような哀願も、有明には全く通用しないことは、有明の次の言葉からでも明瞭であった。

「敏子（ジャンヌのこと）、面白いものを見せてやろう」
「ヒューッ」

有明の足もとで林美玉が絶叫した。有明の足が首鎖を踏みつけたからである。それが何を意味するか、林美玉は度重なる経験から身にしみて思い知らされているのだ。膝に棒をはさまれ、首を押えられた林美玉は貪婪な臀

部をピラミッドの頂点として、身じろぎも出来なくなってしまう。

「敏子、あのポンプを持っておいで」
有明の声は、その行為に比べて、ひどく優しかった。

何が何だか分からないまま、ジャンヌは、アマゾン女兵の一人が機敏に差し出した自転車車の空気入れを手にした。

「サア、おまえの姉さんを殺した相手だ。思い切りフクラませてやるがいい」
呆然と立っているジャンヌに、見かねたのか、さっきのアマゾン女兵がゴム管の先を持ちあげて、林美玉の突き出した臀部に近づける。

ジャンヌにも何をするのかハッキリわかった。股の間から自転車のバルブのような金具が、のぞいているのが見えたからである。

アマゾン女兵が、その金具にゴム管を連結した。

——姉のカタキ！

ムラムラした瞋りが、彼女の躊躇を吹き飛ばしてしまった。

彼女は、力をこめてポンプを押した。

二度、三度。

そして次第に昂まって行くまま、そのピッチを早めて行く。

「ゲエッ」

林美玉が、のけぞるように首をそむけて、何か吐いた。

体腔内で、ふくらんで行くゴム球が胃を圧したのであろう。

しばらくすると、誰の目にも林美玉の腹が異様にふくれて行くのが、分かるようになった。

淋漓と汗を流しながらジャンヌは、狂ったようにポンプを押した。

林美玉の全身にも、冷たい膏汗が滝のように流れていた。

ジャンヌの復讐心は、有明によって巧みに利用され、林美玉を責める絶好の道具となったのである。

——ご投稿下さる方へお願い——

各種原稿募集に対しての応募は歓迎致しますが、作品に住所、氏名を書かずに送付されると、稿料送呈その他で整理がつかかねる場合が生じますので、投稿作品には必ず一作（イメージ画も）毎に、住所、氏名、ペンネーム附記を、原稿用紙使用、縦書きと共にお願い致します。

林美玉のユテルスには、予め丈夫なゴム風船が装填されてあったのである。

そして、毎日毎日、空気を送り込んで、少しずつソノ中を拡大して行くという拷問を受けていた。

麻薬組織の一員として、大抵の責め苦にはへこたれないだけの訓練を積んできた林美玉だったけれども、この想像を絶する内臓責めには、全くこらえる力がなかった。

一日と掂げられて行く苦痛は、一日と大きくなって行く。その度毎に、それが破裂しはしないかという恐怖に戦慄しなければならぬ。

それだけでも、彼女の神経はズタズタに引きさかれて行くのであった。

深く秘められた女のオルガンは、秘められてあるが故に、それに加えられた凌辱は激しかったといえよう。

有明が、踏みつけていた首鎖を放した。バネ仕掛けのように林美玉は、上体を起こす。ふくれ上がった腹部が、もう屈んでいる姿勢を不可能にしていたからであった。

あらゆる内臓が圧迫されて、背骨がギシギシと鳴った。

それでも、送り込まれる空気は、依然とし

て規則正しく、この肉風船を、ふくらませている。

浅黒かった皮膚が、お腹のところだけ、白く透きとおるように、艶々と、張りつめて来た。

「もう、そのぐらいで、いいだろう。今日のところは……」

といいながら、有明が平手で、林美玉の腹を、試みるように叩いた。

ポンポン。

林美玉が死ぬほどに苦しんでいるというのに、そこからは、ひどく滑稽な音が、とび出すのだった。

プツと、ふき出しながら、有明が面白そうに、いった。

「とんだ狸の腹鼓だ」

林美玉は、もはや叫ぶ気力も喪って、将に失神寸前だった。

妊婦のようだというより、あの草双紙にある餓鬼の姿にも似て、髪をおどろおどろしく振り乱しながら、大きな腹に押しつぶされた胸で、切なげに短い呼吸を、くり返しているばかりである。

——（未完）——

△カメラ▽と△ペン▽のルポルタージュ

美しい「責め」の記録

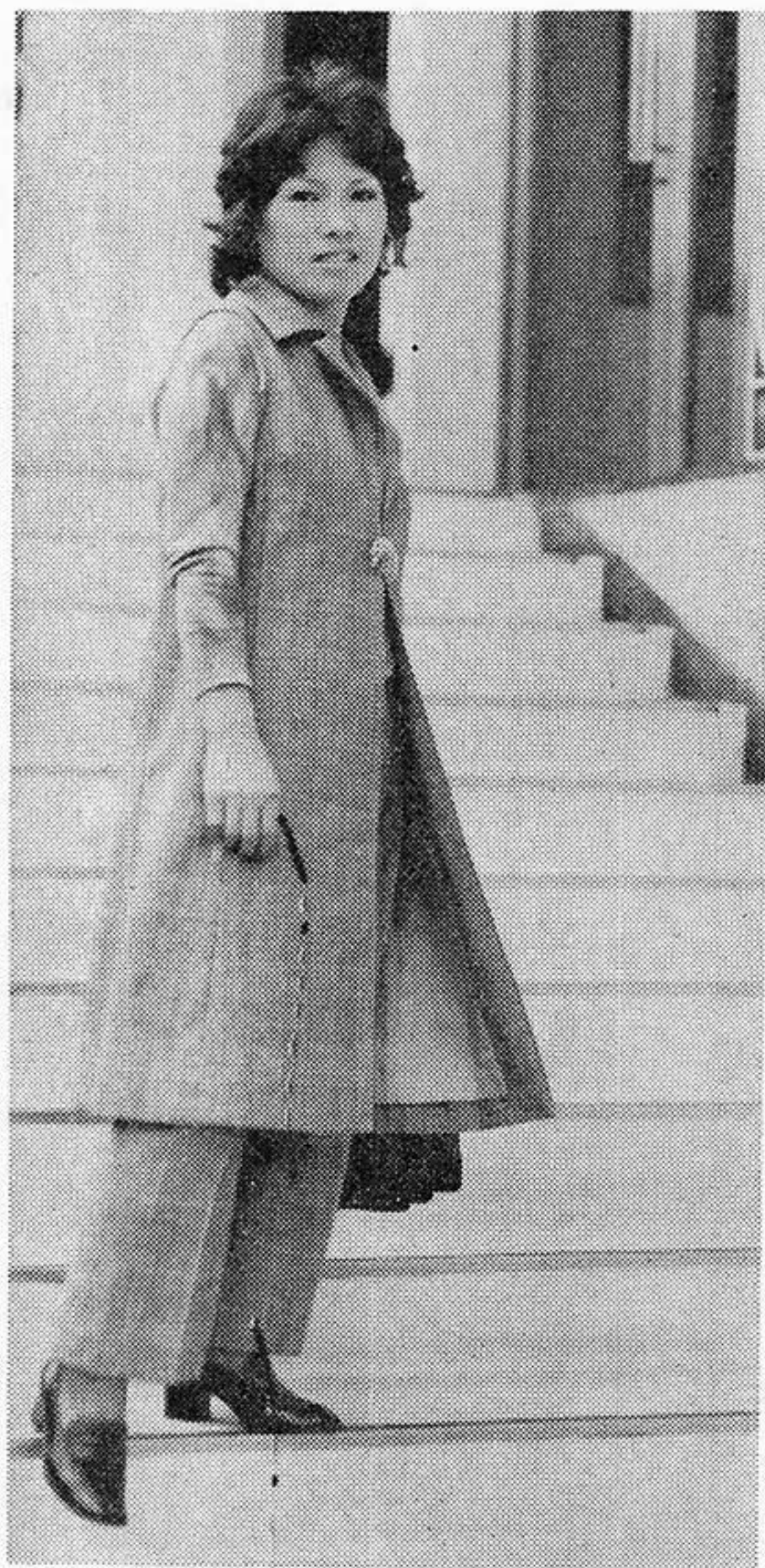
——(玉^{たま}木^き章^{しょう}子^この巻)

塚^{つか}

本^{もと}

鉄^{てつ}

三^{ぞう}



「十二月号の読者通信に載った箕面市の玉木章子^{しょうし}さんのことだがね、僕が手紙で口説^{くど}いてみたら、二つ返事でOKしてくれたんだが、彼女は十九才の時から七年間もSM飼育をされたベテランでね。相当経験があるらしいんだ。一つ、君に行きって貰^{もら}いたいんだが、よろしく頼むよ。ぶっつけ本番で、すぐ写真が撮れると思うんだ。箕面^{みの}といえ、そちらからだったら、一っ走りじゃないか」

受話器をとると、のっけから要件に入ってくる奇ク編集長の声が耳に響いてきたのは、十月三十一日の午すぎであった。

「いや、実は来月の初めには深田菊子と逢う

約束をしてあるし、それに中頃には松本たえが大阪にやってくるようになっていいるんだ。これから見ず知らずの新しい人をてなずけて撮影をやるなんて気が重いナ。それに大体、ハードスケジュールすぎるよ」

「まあ、そんなことを言わずに頼むよ。実は明日の一日に、章子さんが逢ってもいいって言ってくれているんだよ。初対面ですぐプレイというのは無理だとは思うが、なんとか、来月号に間に合うようにやってくれないか。逢ってみて駄目だったら仕方がないがね。彼女は、ずっと本誌の直接読者だし、写真の方も、新版が出るとみんな買ってくれてるんだよ。それに、モデルになることに、大分、乗気になっているらしいんだ」

「うまくゆくか、どうかわからないが、とにかく一度、逢ってみるとするか。でも、その玉木章子さんという人の読者通信は読んでないので、どんな人なのか、さっぱり予備知識はないんだがね」

「それだったら、今すぐ読んで準備をしておいてくれよ。ああ、それから、彼女の通信は十二月号だけじゃなしに、九月号にも載ってるんだ。九月号に載った読者通信の手紙を転送してやってネ、親しくなったんだよ。なん

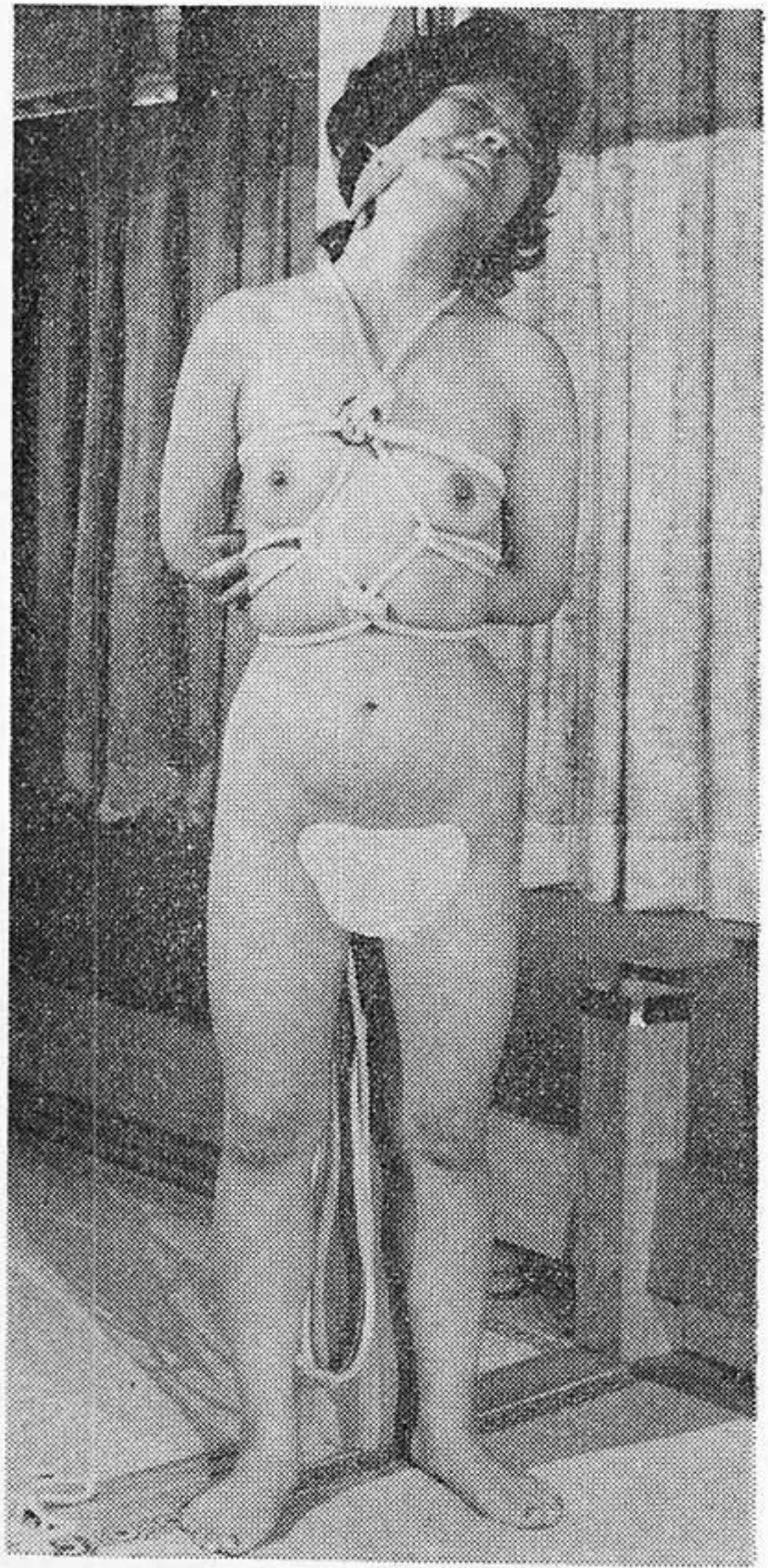
だったら、彼女から来た最近の手紙、今、電話でこれから送ろうか」

例によって、いつもの通りの強引さで無理矢理、承諾させられてしまった。私だったら急場の間に合うように、なんとか、写真と文章をうまくひねり出してくるのだから、大舟に乗ったような気でいるのだろう。

時間と場所——それも、すでに一方的にきめてしまっているのだから、否も応もない。まあ、八月と九月は、さぼっていたのだからここで埋め合わせをしなければいけないだろうと考えて、とにかく、明日、その玉木章子という人に逢ってみることにした。

早速、奇クの九月号をとり出して読者通信





の欄をパラパラと、めくってみた。

○

いつも美しい写真お送り下さって有難うございます。主人から毎月の新しい写真を速達でお願いするようお願いしておりますので、お気づきの事とは存じますが私たちは大の奇クファンなのでございます。と申しまして私も私は正式の妻ではなくて十九の時からSの主人にひかれて世話になり七年目になります。そんなわけで私の家のタンスには三段にもわたって責めの小道具や衣裳がつまっております。主人は縛りの写真を見ると大ハッ

スルしますので、このように、いつも新しいのをお願いするわけです。電話で写真が届いたかと尋ねてまいります、来ておりましたら、その日は早く帰宅して宵の口からSMPプレイに時のたつのも忘れるのでございます。

この頃、「一度奇クのモデルになってみないか。お前だったら、きっと人気が出るぞ」なんて冗談を言ったりして、そんなときは一層主人も燃えるようです。私も二十六才になっていて、もう若くはなく、とてもそんな気にもなれませんが、十九のときから数年間、主人に仕込まれていますので、大ていこのこと

したら、辛抱出来るつもりです。奥さんはSMについては一向に理解はないらしく、週に二回ぐらいは私の家に泊ってゆきますが、私はあくまで日蔭の女で、あとの日はお花やお茶、それに刺しゅうを習いに行ったりしております。ですから、もしモデルにというお話があれば時間はいつでもとれるつもりです。私としては、そんな自信はございませんので、読者の中のファンの方々と、かりそめのプレイを楽しめたらと、大それたことを考えております。主人は、お前の若い時の写真をとっておいたらよかったのになあ、と言っているくらいですから、写真をとるという口実だったら許してくれると思います。もし、そんな方がおられましたら、よろしくお願いいたします。末筆ながら貴誌のご発展を心からお祈りしてペンをおきます。

○

(箕面市・玉木 章子)

割に長い読者通信である。私は読んでみて玉木章子という人は、十九才の時から二十六才の今日まで七年間の間、Sの主人によって飼育されていた——ということがわかった。

文中に、モデルになってもいいが、その自信がないというようなことを書いてあるとこ

ろを見ると、編集長が口説いたのも、そうした文面からすれば領くことが出来る。更に十二月号の読者通信を見てみる。

○

九月号に私の読者通信をのせていただいた。有難うございました。おかげで奇巧の読者の真面目な方とお知り合いになれて、ほんとうに嬉しゅうございました。はじめて主人以外の男性の方とプレイする機会を持ちました。写真も少しばかり写していただいたので、差しつかえないものを選んで誌上に発表させていただきます。その節は、よろしくお願い致します。主人もそれ以来、非常にハッスルしますし、私も変わった責め方を変わった方から受け入れて、ほんとうに幸福な生活をつづけております。

（箕面市・玉木章子）

○

文通した読者の方とプレイをしたようなことが書いてある。九月号と十二月号とでは、三カ月以上も離れているのだから、編集長が転送してやったのなら、当然そういうことも有り得るわけである。それに写真も写したということだから、せめて十二月号にでも、その写真を発表して貰えたら、楽しかったろう

になあと思う。それにしても、誌上に写真を発表してもいいという勇氣を持っているのだから、撮影するとしたら、私にしても、口絵に掲載できるようなものを撮りたいものだ。

十一月一日（木）

私は西国街道を西へ向かって走っていた。

目指すM観光ホテルは、二百台から駐車出来る広大な駐車場のスペースを持っているので、お互いに車で来る者にとっては便利がよ

いわけである。

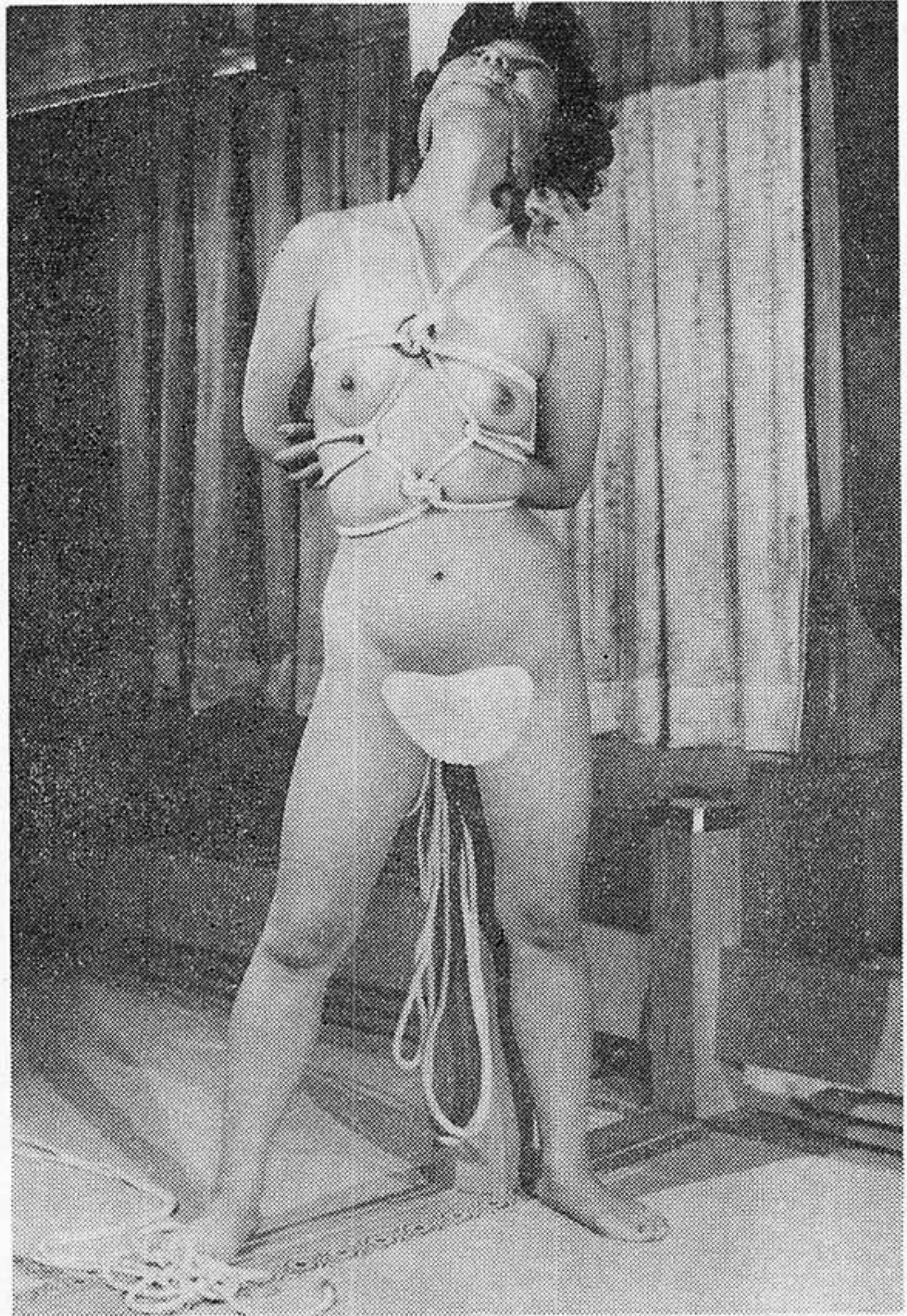
約束の午前二時に五分前、私は車を降りて佇んでいた。紅葉した樹々が周囲を取りまいていて如何にも静かな、たたずまいである。

待つほどもなく駐車場の入口の石畳を昇ってくる車に、それらしい女性を見つけた。

「玉木さんですね」

近づいて、そう言葉をかけた。ウィークデの午後二時という時間なので、入ってくる





車もなく、私にはすぐにわかった。

「ハイ、お待たせしました」

ドアが開いて暖い空気と共に、脂粉の香が
ぷんと耳をついた。

真赤な毛皮を座席に敷いて、助手席には黒
のハイヒールが揃えて置いてある、如何にも
若い女性の乗っている車に、見受けられる。

ドレスシーな感じの服装で降りた女性
は、少し顎の角ばったといった風で意志の強
そうな、しっかりした顔つきである。

「初めまして。わざわざ、こんな遠くまで来
て頂きました、恐縮ですわ」

「いや、私もこの近くなんですよ。市内より
も、こちらの方が、有難かったです。じゃあ

参りましょうか」

自動扉の玄関を通ると広いロビーである。
喫茶室へ向かって窓際の席をとる。二組ばか
りの二人連れの客があるだけで、がらがらに
あいている。市中の、ごみごみした喫茶店な
んかより、いくら落着けるかしれない。食事
を摂りたければグリルもあるし、ボーリング
を楽しむことも出来るのだ。

「車の運転は、もう大分、以前から、やって
おられるんですか？」

「ええ、免許をとったのは、二十二才のとき
なんです。でも、自分で車を持って乗りま
わすようになったのは、二年程前からですの
よ。始めは、なかなか怖くて——」

「二年にもなられたら、相当、慣れたで
しょう。遠くへお出かけですか？」

「運転の方は慣れましたけど、方向音痴って
言いますのかしら、地理に弱くて。先日も
京都へ遊びに行った帰りに道がわからなくな
ってしまって、大阪へ行くのはどちらですか
って尋ねましたら、ここは大阪ですって言わ
れて、困ってしまいましたわ。大阪と言っ
ても、広いんですものね」

話しぶりからして、縛られることが好きな
M女だなんて、その片鱗さえ窺うことが出来

ない。はて、こんな女性を、どうして誘導したものでしょうか。とにかく、真面目な話ばかりをしていては駄目だ。

口絵に載せられるような素晴らしい緊縛写真が果たして、そんな写真が撮れるだろうか。もし撮れるとすれば、このホテルには、洋室も和洋折衷の部屋も和室も整っているし、車のトランクには、カメラや緊縛小道具を入れた鞆が納めてあるのだが――。

「読者通信によりますと、読者の同好の方とSMプレイをされたそうですね。それに、写真もとられたとか――」

「ええ、でも、たった一回なんですのよ。神戸の方なんですけどもね。主人が縛られた写真撮ってもらえて、言うもんですから。でも、出来上がった写真は余りうまくなくて、ぼんやりしてるんですのよ。ライトを使わなくて、窓の近くで写したりして……」

「ほほう、それで、ご主人が満足されなかったってわけなんですか？」

「うちの主人って、自分では室内で、うまく撮れないんですけど、フォトマニアって言うんですか、女の人の縛られた写真を集めるのが大好きなんですのよ。だから、私にも写して貰って来いって言うんですの。神戸の読者

の方に撮って頂いたのは、不鮮明なので、つまらないって言うていましたけど」

「そんなに写真が、お好きなんですか？」

「お恥かしい話なんですけど、縛られた女の人の写真を枕元へ置いておかないと駄目なんですの。おかしいですわ」

「ははあ、そうですか。それじゃ、ねっから

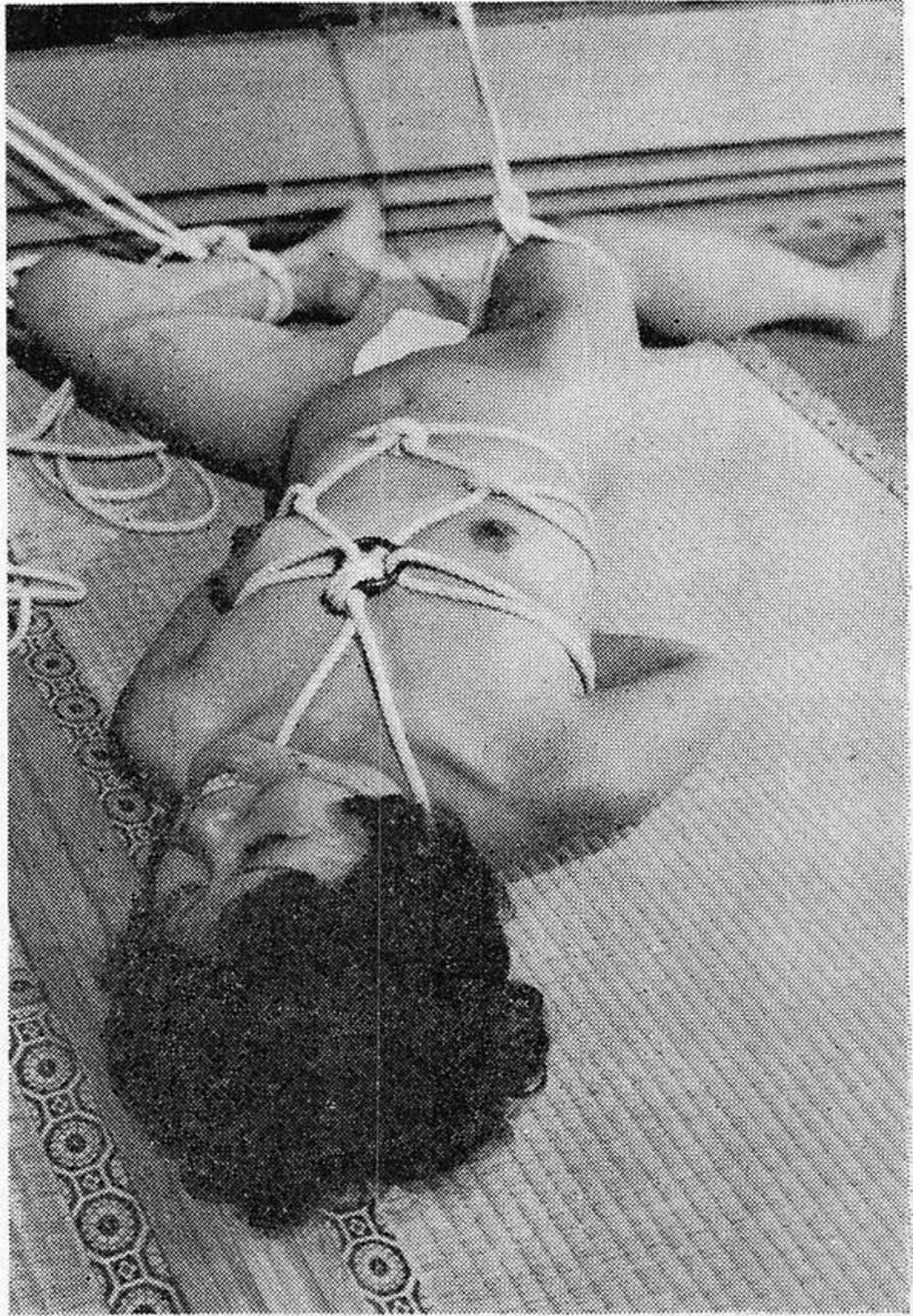
の緊縛写真マニアなんですわ」

コーヒーとケーキでは、余りねばっているわけにもいかない。

「それじゃ、外へ出てスナップでも撮ってみましょうか」

ということ、各々各自の車に分乗して、ホテルの駐車場を出た。車は別々なので、話





し合うことも出来ない。再びホテルへ誘うという話のきっかけも掴めないまま、時々、車を停めては彼女のスナップを撮った。

十一月の声を聞くと、釣籠落としての秋の日の暮れるのも早い。十一月七日の火曜日に再び逢う約束をして心残りだったが別れた。

「じゃ、今日のお写真、それまでに出来まし

たら、お願いしますわね」

そうして右と左に別れたのだが、私は二時間ばかり話している間に、玉木章子という女性のアウトラインが掴めたし身体的な特徴もよくわかったので、次には問答無用でS Mプレイに入ってゆけるような気がした。

今日、逢った玉木章子は、顔と手首以外は

すべて、衣裳で掩っていたので、あの着衣をすっかり脱がしてしまったら、一体どんなんだろうか？ そして縄で、その裸身を、ひしひしと厳しく縛りあげたら、どんな喘ぎようを見せるだろうかと、ひどく興味を持った。

コーヒークップを持った時の、すらりと細く伸びた指の真赤に染めた爪がルビーのように輝いていたのを思い出す。私にとって玉木章子は私の手で開拓を待っている未開の原野であった。いや、華麗な花の咲く作物の植付けを待つ豊穰な耕地であったかもしれない。

やはり、なんと言っても、初めての女性を素裸にひんむいて、縛り、責めるということ、未知の魅力が心をはやらせるものだ。次に逢ったときには、どのようにして縛り、どのようにして責め、そしてS Mプレイへと導入してゆこうか。書斎でひとり静かな夜を迎えたとき、私の頭は彼女を責める幻想で占められていった。

先日、街頭でスナップした玉木章子の写真は現像してみると二十八枚あった。それを早速、彼女へ送っておいてから、その中で彼女の特徴のよく出ている三枚をキャビネに引き伸ばしてみた。その写真が今、私の机の上に置いてある。私はその写真を眺めながら、自

分の責めの幻想をコンテに書いてみた。

○

玉本章子の責め試案

一、日時。十一月七日、午前十一時半。

一、場所。郊外のモーター、和室。

一、被写体。玉本章子。

一、準備すべき緊縛の小道具。白ロープ太

目のもの二本、中太のもの五

本、細目のもの六本、麻縄三

本、百匁ローソク一本、電動

式大型バイブ一個、電池式小

型バイブ一個、百CC硝子製

浣腸器一本、鉄環三個、豆絞

りの手拭い二本、外に日本手

拭い三本、大筆一本、携帯用

ビデオ一個、鼻孔開口器一個。

一、携帯すべき撮影用具。

マミヤレフC330一台、同

C3一台、交換レンズ65ミリ

80ミリ、105ミリ、135ミリ準備

ゼンザブロニカ一台、75ミリ

標準付きアサヒペンタックス

一台、交換レンズ28ミリ、45

ミリ準備、標準レンズ55ミリ

装着のこと。ストロボ五個、



五〇〇Wフラッドランプ二個、三五〇W三個

三脚四台、エヤレリーズ三米一本。フィルム

はネオパンSS2B十五本、コダカラー35ミ

リ判三本、同ブローニー判二本。

一、経過。十一時半から約四十分は昼食を

共にして、彼女の観察を充分にしながら、お

互い心の通い合う会話を交すこと。午後一時

頃より部屋に落ち着き、五時頃までの約四時

間をSMプレイ並に撮影の時間と予定するも

経過の如何では、更に延長することも十分、

有り得るので、そのときは夕食を摂る間、休

憩するものとする。

一、導入方法。先日、逢った範囲では、具

体的な打ち合わせは出来ていないが、彼女の

言よりすれば、彼女の主人

なる人は、いたく写真の撮

影を望んでいるようなので

最初はヌード写真を五、六

枚、撮ること始める。そ

のために入浴後は全裸にさ

せておく。

一、緊縛方法。太目の綿

ロープによる後手高手小手

を主体として、可能な限り

両手首を背後で高く掲げさ

せること。機に応じて変形

縛りを併用するが、主体は

あくまで後手縛りとするこ

と。

一、責め方。やはり羞恥

責めに一番、重点を置くの

が面白いと思う。玉本章子

に対して今日は最初の責め方になるわけだが
思い切って大胆な開股縛りを展開するのも興
あり。もし彼女にマゾの素質ありとすれば、
この羞恥責めで第一の反応がある筈。その反
応の如何によって、次の責め方を考える。

一、責めの予想順序。

全裸にさせること。拒んでも、これだけは
言うことをきかせたい。

後手高手小手縛り。後手首の縛り方は前述
の注意の通り。あとは開股、開脚縛りを中心
にした羞恥責めへ進む。

猿轡をかましたときの表情を狙う。

膝立、臀部突きだしのポーズ（側面背面）

から開股。その際、背面から臀部を強調した
カメラアングルは面白い。（レンズ広角）

脚挙げのポーズによる羞恥責め。足首、又
は膝頭へ縄を掛けて引き挙げたいが、これは
片足だけの場合、両足を共に挙げさせる場合
を含めて是非とも、やりたい。

鉄環利用の変形縛り。ある程度、縛りの洗
礼を受けている玉木章子だから、少しぐら
きつい縛りにも耐えられると思うので、遠慮
せずに厳しく縛り、写真的効果も狙う。

一、ライティング、省略。

○

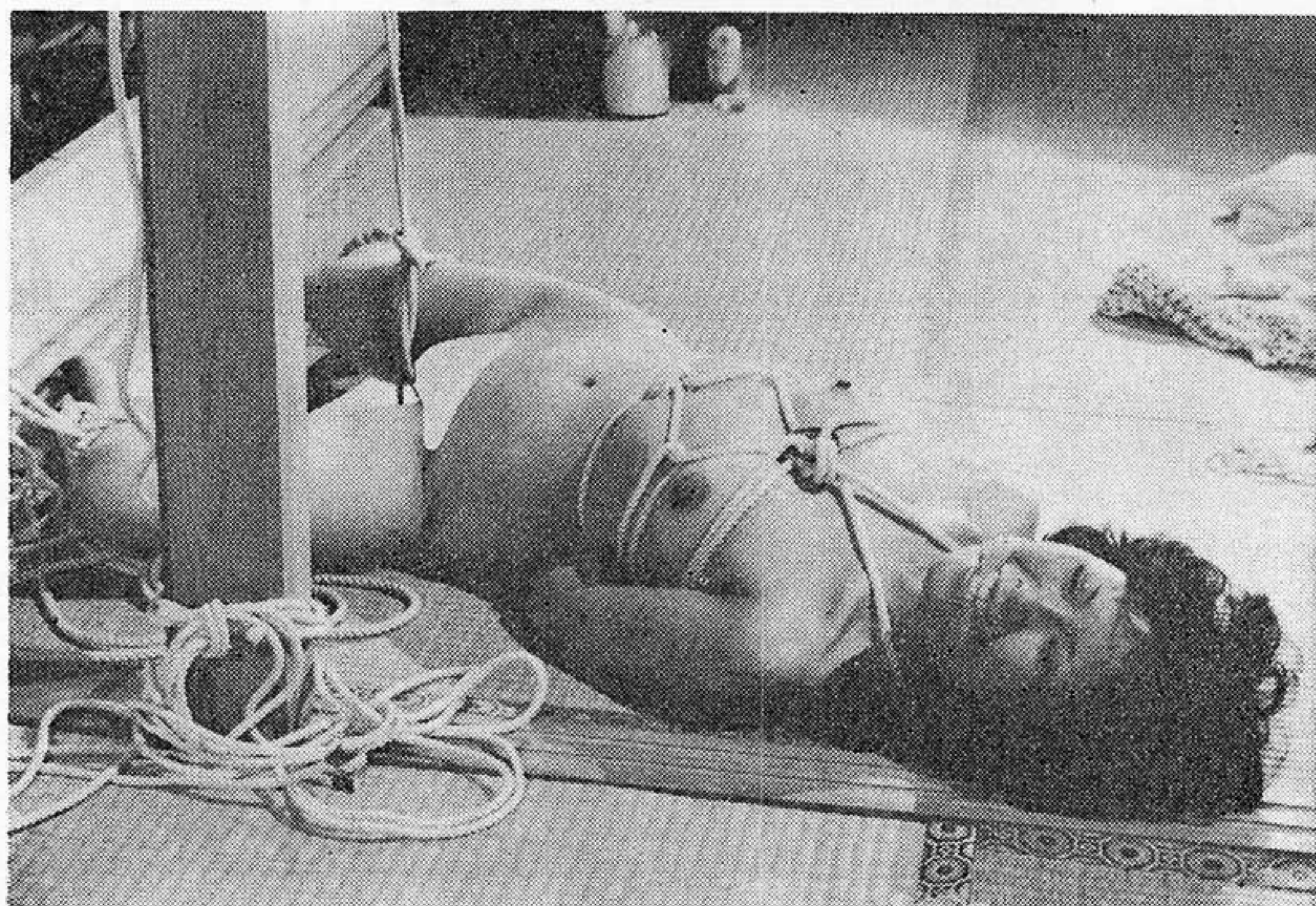
十一月七日（火）

すでに顔も知り合っている
ことでもあるし一七一号線沿
いの待ち合わせ場所も、お互
いに確認し合っていた。そこ
だったら、彼女の家からも近
いし、私の家からも車で十分
とかならない処であった。

私は約束の十一時半に五分
ほど早く車を停めて新聞を読
んでいた。すると十一時きつ
かりに、白塗りの車が、すう
っと私の車を追い越して前に
停まった。左側のドアが開い
て玉木章子が出てくると私の
方へ歩いてきた。

「彼が送ってきてくれました
の。帰りは貴方の車で私のマ
ンションまで送って下さいま
すわね。それから、彼、この
間、送って下さった写真のお
礼を申し上げておいてくれ
て、呉々も申しておりました
わ」

「そうですか。それだったら



ちよつと御主人に挨拶をしてこなくっちゃ」

私は慌てて扉を開けて出ようとした。

「いいえ、それには及びませんわ。彼はね、私の縛られた写真が欲しいだけなんで、挨拶だなんていったら、気まり悪がりますわ。写真のことだけ、よくお願いしておいてくれて頼んでいましたわ」

私がドアを半開きに

して、半身をのりだして、^{ふたことみこと}二言、三言、玉本章子と言葉を交しているうち、前に停まっていた、白塗りの乗用車は、するすると発進したかと思うと次第にスピードを増し、やがて私の視界から完全に消えていってしまった。

「御主人はお勤めじゃなかったんですか？」

「ええ、經理士なんですの。だから時間の自由はつきますので、今日は是非、私を送って行くって、きかないん

ですの」

「一寸、話だけでも、してみたかったのに」

そう言いながら、私は車を大きくターンさせて西へ向けた。阪神タイガースの名内野手と言われ、村山投手と監督の座を争ったこともある吉田義雄の経営するレストランへ車を走らす。神戸肉の飛び切り美味いステーキを

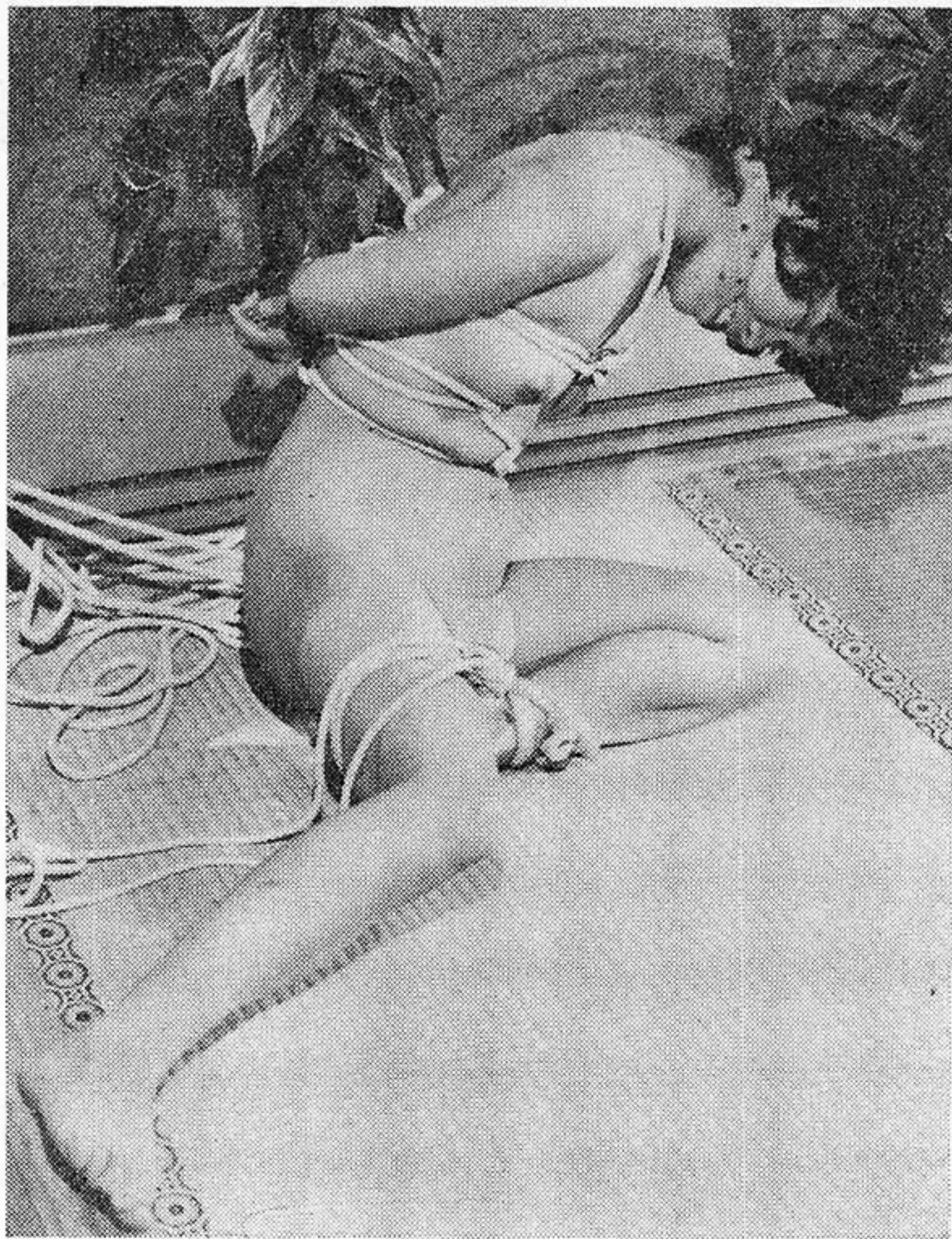
食べさせるといふ専らの評判である。

この道は中国街道と呼ばれて、昔は参勤交替の西国の大名の行列が通ったそうだが、この附近は、東へ向かえば京都、西へは神戸、南下すれば大阪、北は池田という風に交通の要所になっているばかりでなく、鼻の先に大阪国際空港があつて、日本各地の主要都市と僅か数十分の時間的空間で繋がっている。

初対面と違って二人の間にはすでに、ぎこちなさは解けていたし、それに、これから行なうSMプレイという秘密めいた行動の共犯関係を持っているといった心のつながりが、一層、私と章子の心とを強く結びつけていた。

言葉を交せば交すほど、自分の心が相手の心のなかに、めり込んでゆき、も早や、彼女の裸身の上に激しいSMプレイを展開させなければ納まらないほど逸ってきた。

食事が終わってしまうと、もう一分一秒も惜しむように武庫



川畔の、とある瀟洒なホテルの庭へと車を入れていた。部屋へ落ち着くなり私は玉木章子に言った。

「貴女は七年間も、ご主人に飼育されていたのですから、まあ、言わばベテランの部に入るでしょう。だから今日は、私の好きなよう

に思いのまま責めたてよ
うと思いますが、辛抱で
きるでしょうね」

「貴女の、その可愛い泣き顔を、一度、見てみたいものですナ。まあ、手加減せずに、びしびし貴めてみますよ。痛かつ

「あらまあ、この私が、とり乱して派手に泣いても、それで、ようございますの？」

「そうですね、今日はなんだか、うまく貴女を泣かせそうですよ。第一回目の責めから、自分を失って泣き叫ぶような女に仕込むなんて、ぞくぞくしてきますね。まあ、私の腕に期待しておいて下さい。とにかく、カメラを向けただけで、貴女が身ぶるいするような縛り方をしてみせます」

「そんなことを聞きますと、私、なんだか、始めて責められるんじゃないって気持ちになってきましたわ。私って、やはり雑誌に書いてあるようなマゾの女でしょうか？」

「それはわかりませんね。貴女は十九の年か
ら、S 傾向のご主人に仕込まれて、男女の性
生活なんて、こんなものだと思います込んでしま
っているのかもしれませんがね。只単に、
ご主人の傾向に迎合しているだけのものか、
或は本格的なものか、これから、私が腕によ
りをかけて責めてみればわかりますよ」

私は鞆からカメラを取り出してフィルムを
詰め、ストロボやライトの位置をきめて次々
と配置をきめていった。玉木章子が、いつの

間にやら隣室へ消えたかと思うと、しばらくして、浴室で湯を使う音がした。

女盛りの玉木章子の裸身のすみずみまで、縄によって隈なく展開させた上で、ゆっくりと眺めてみたいという男性特有の興味を私が持ったとしても、これは当然のことと思う。読者の方々も、一様に同じ関心を、きっと持たれることだろうと思う。

そのために、私は読者の皆様の代弁者としてカメラワークを駆使して、出来るだけ多くの緊縛写真をごらんに入れなければならぬ義務を持っている。それに、今日の場合は、玉木章子をわざわざ持ち合わせ場所まで車で送ってきてくれた彼女のご主人に対しても、出来る限り真に迫った、しかも美しい写真を撮影しなければならぬ。

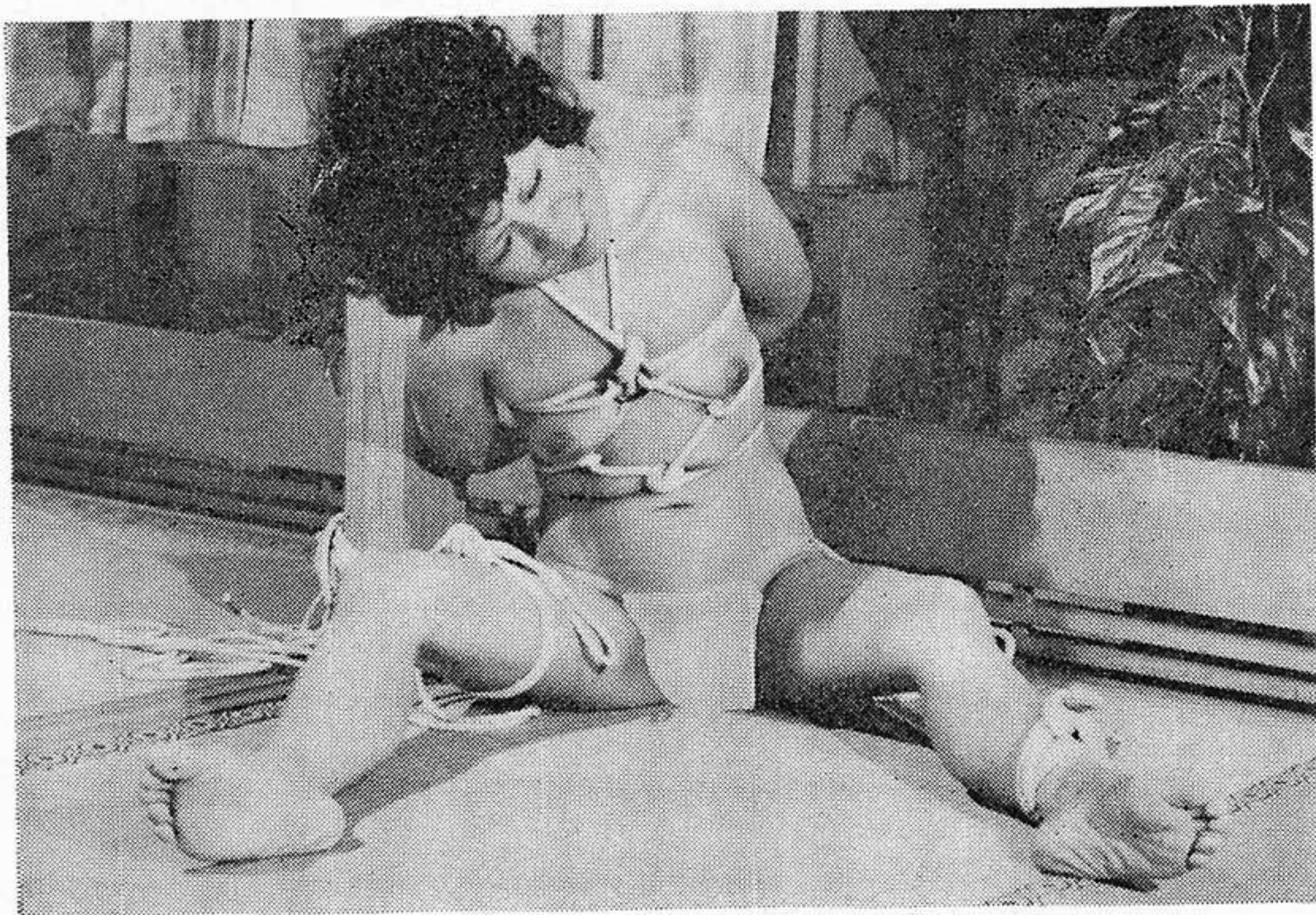
今まで、数多くの他の女性の緊縛写真を見てきた彼にしても、やはり最愛の女性、玉木章子の写真は一番、見たえがあるに違いないのだ。その意味でも、私はこれから撮影する写真全部を一枚残らず彼に提供して、その厚意に報いなければならない。

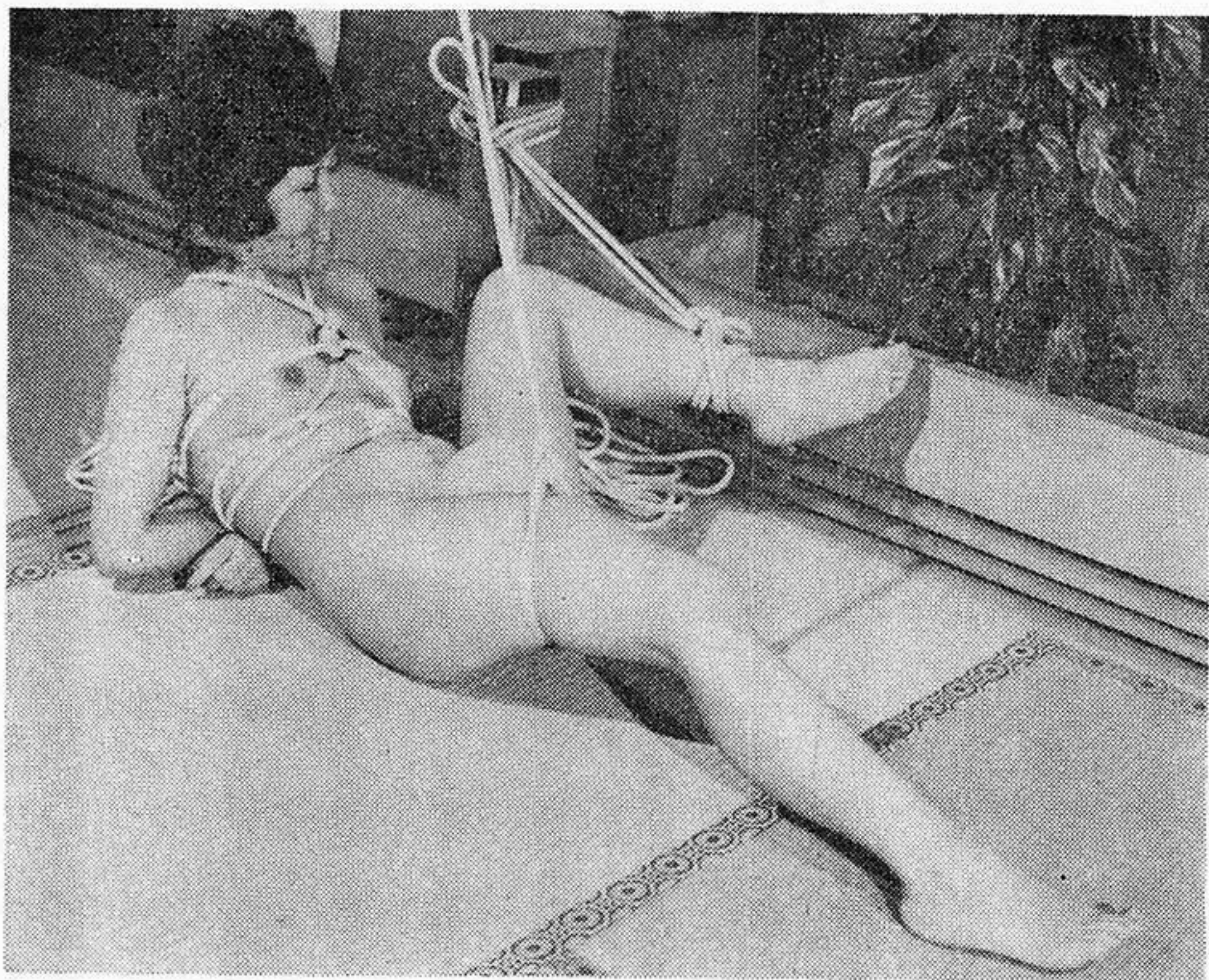
自分の愛する女性の鮮明な緊縛写真を眺めて、彼が一体、どのような衝撃を受けるだろうか。その彼の受けるショックが大きければ

大きい程、私の章子に対する責めと撮影が或功したことになるのだ。会心の作品が出来たなら、六ツ切りぐらいに引き伸ばして、彼に贈ってやろう。わざわざ章子を送ってきってくれた彼に対しては、それ位してもよいだろう。

ライトの配置をしながら、私はピントの確かな美しい写真が出来上がるよう、凄いだキリとするような羞恥責めの写真が出来上がるよう祈りたいたい気持であった。X接点とM接点の切り換えが、僅か数ミリのレバーの移動で、全くストロボが効かない場合だってある。そんな初歩的ミスは犯す筈はないのだが、無意識に指がレバーに触れて知らぬ間に動いているようなケースだってあるのだ。

縛り方や責め方にばかり気をとられていると、思わぬそうした陥穽が待ち受けている





のだ。シャッターとストロボが同調していなかったで写っていなかった、などというこ

とは、いくら忙しかったからといったって、それは口実にならない。

撮影の準備が整ったと

ころへ、玉木章子が顔を出した。浴衣ゆかたの襟を、きちんと合わせ腰紐を胸の下で巾広くひろげて締めている。顎が左右に張っているところは、いかにも意志の強さをあらわしているような感じで、こうして浴衣をきちんと着ているところを見ると、M女性などとは、いささかも思えない。

私は腰紐に手をかけると、蝶結びの端を引いてさっとほどき、あっという間に浴衣を剥いでしまっていた。真っ白い肌が目の中に飛び込んできてあたりが急に明るくなったように思えた。私が急に、そんなに乱暴に浴衣を剥いでしまうとは夢に

も考えていなかったらしく、玉木章子は、呆気にとられて浴衣をうしろへ脱がせる勢いで自分から両腕をうしろへ回すような格好になった。

「あれっ？」

当然のように、そこへ目をやった私は、予想に反して漆黒の房々したものの密度に驚いた。全く濃いのである。顔も身体も色白で、腕や脛、それに太股、背中、腹部など、ウブ毛もないほど、すべすべしているのに、あそこだけは特別に毛深いのである。

「そんなに見つめないで。私って、毛深いでしょ。見られると恥かしいわ」

私の視線を感じて彼女は羞じらい、あわてて両手で前をかくした。今そんなに急に見にくたって、あとで責める時には、いやでもゆっくりと拝ませて貰える筈である。

「剃毛責めにすると面白そうですね」

そんな冗談ともつかぬ、いたぶりの言葉を投げかけておいて私は、す早く彼女の片手をうしろへ捻じ上げると白いロープを巻きつけていった。相手に考える余地を与えない迅速さで一旦ロープを手首に巻くと、更に残りの腕も引き寄せて一緒に繋いでしまった。

後手首を括っしておいて、下がらないように

余った縄を肩へ担がせて胸へ、胸から背へと柔肌を締めつけてゆく。幾人もの女の肌の脂を吸って少し湿っぽくなって柔らか味を増した白ロープは、妖蛇のように玉木章子の裸身の上を這いまわった。

縄を捌いて締めつけてゆくにつれて、私の耳元で「ふむうーうう」と章子の口から、かすかな喘ぎと嘆息が洩れてきた。

胸の中央の縄に鉄鑲を通してにおいて、それを使って左右に振り分け、菱縄縛りにしていった。背中へまわってきた縄に力を入れて、ぐ、ぐ、ぐーと、締めつけると、細身の肌がきゅうと小気味よく、くびれて、思わず章子の口から「はーはあ、はあ、はあ」と荒い息とも呻きともつかぬものが、はっきりと私の耳に聞かれた。

力をこめて、縄をぎゅっと締めつけるたびに、口がうっすらと半ば開きかけて、その可愛い、おちょぼ口から、熱い吐息が洩れているのは、そのうっとりとした表情と共に、章子という女が、緊縛に対する反応のきわめて強いタチであるということを示している。

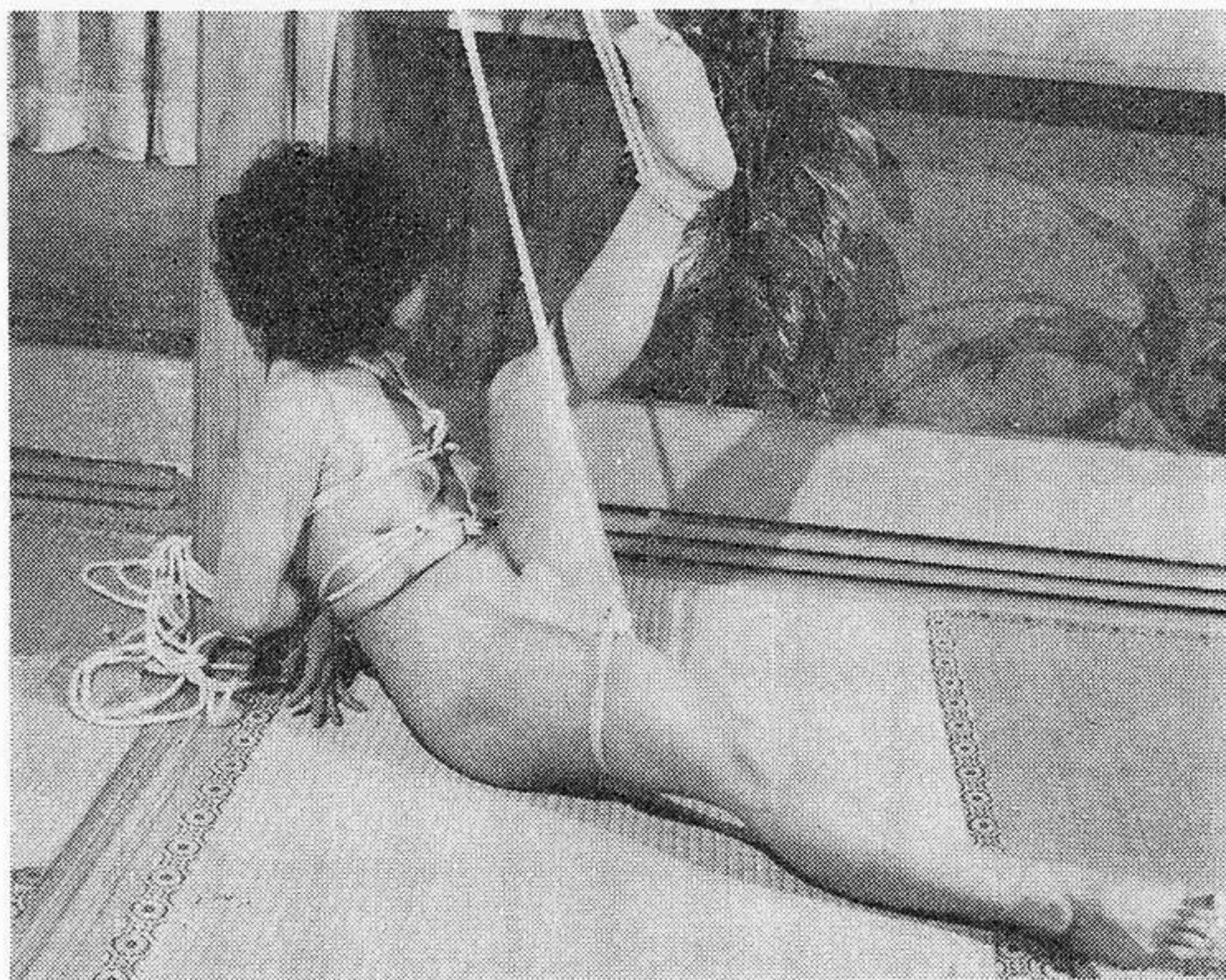
縄止めしておいてから、二部屋の境の敷居にある柱の前に連れて行って立たせる。縛られてしまった章子は、素直に私の言うがまま

に柱の前に正面向いて立った。ライトを点灯すると何一つ隠すことの出来ない全裸の肢体が、真白く輝いて浮かび上がった。

盃を伏せたような小じんまりとした形のよい乳房が、縄で周りを締めつけられて、緊張した、ふくらみを見せている。ウエストのところで急にくびれて可愛いお臍が、えくぼを見せているお腹^{なか}が、思わず、かぶりつきたいような新鮮な魅力に溢れている。私一人で眺めるのは惜しい縛られた章子の裸身であった。

「あーあ、こんな素裸のまままで、写真うつさはるの。私、どうしよう。恥かしいわ。なんとか、もう少し、かくしてくれはれへん。お願い、なんとかして——」

私がカメラを向けるか



向けないうちに、章子の口から、そんな甘ったるい羞らしいの言葉がとびだし、立っていた



身体が、くたくたとくずれて、うずくまってしまった。

「よしよし、それじゃ、このネッカチーフでかくしてやるからナ」

私はネッカチーフを取りだすと章子の腕の下に手をやって立たせておいて、腰へそれをまわすと、むちむちとしたお尻のところで結

ぶふりをして、盛り上がった肌を抓った。

「いやッ、いや、いや、そんなこと」

章子は身もだえして再び、うずくまる。

「ああ、ネッカチーフで隠すのが、そんなにいやなのか。それだったら、こうしてやる」

私は間髪を入れず、章子の開いた口の歯と歯の間にネッカチーフを細めて噛まし、背後

で、くくってしまった。

「さあ、立つんだ、立つんだ」

章子を立たしておいて、縄尻をしっかりと柱に括りつけて、逃げだしたり、しゃがみ込んだり出来ないようにした。

そこで私は、初めてゆっくりと章子という女の裸身を、ゆっくりと観察した。

二十六才という年令よりも、ずっと若く見え、子供を産んでいないので、身体の線も、くずれていない。女盛りの、むんむんする女の香りが、見ている私の鼻先にも匂ってくるようである。

「う、う、う、ううう」

カメラを構えたまま正面から縛られた裸身を、じっと眺めている私に対して「早く、うつして下さい」とでも言いたいのだろう。私にしても、やはり初めて見る女の裸身には凄く興味があった。章子が羞かしさに、身をくねらせればくねらすほど、私の章子の肉体に對する淫らな興味も、また倍加した。

私は執拗に意地悪いほどの粘着さでもって章子の肌を視線で舐めまわしておいて、正面側面からロングで狙って、シャッターを切った。無垢な娘を見るのとは、また違った爛熟した女の肌に対する異常な執着が、私をして

しつこくカメラを近づけさせた。

「もっと、大きく足を広げるんだッ」

荒々しく声を掛けると、章子は右足を一步右へ開いたかと思うと、私の求める意図を察してか、顔をさっと赤らめた。私がカメラを向けると、顔をそらすように上を向いた。

漆黒の房々とした正面中央の見事なアクセ

ントが、小柄な身体に似合わない濃密度で、ファインダーを透して、私の目に痛いように飛び込んでくる。私の強要によって、無理矢理、脚を開かせられたその姿は、惚々とする美しい眺めであった。

全裸で縛られた若い女性の姿態というものは、何故、このように美しいものなのだろうか。後手に縛られて柱につながれながら、かくすすべもない裸身を、消えいりそうない差らいのなかで、身もだえしている有様は、まことに胸のわくわくするものである。

「さあ、もっと足を開いて、開いて——」



面白半分に、私は更に足を開くことを章子に要求した。私の命ずることなら、どんなことでも従順にきくこの女に、もっと恥かしいことを強要したい気持だった。

だが——。

この素裸で立ったまま、柱につながれているポーズは、そう長くは続かなかった。

章子が羞らいから腰を落とすと、柱に括つてあった縄が、ずるずると柱を滑って畳に両膝をついてしまったのである。そうした動作の間に醸し出す女体各部の微妙な動きに目をやりながら、私はストロボのチャージの時間を待ちきれない思いで、次から次へとカメラのシャッターを切っていった。

ひとわたり写し終わってから、柱に結んでおいた縄尻を、ほどくと、玉木章子の身体はくたくたと畳の上にくずれて尻餅をついてしまった。肩でふーふー大きく息をしているのは彼女の心のなかの昂奮度を示しているのだろうか。先ず、責めの序の段階は、これで終わってしまったのだ。

次は、本来の狙いである開股縛りによる羞恥責めに、ずばり移って、章子の肉体の上にそれを試みるより仕方

がない。初めて責める玉木章子に対する狙いも、実のところ、そこにあったのである。彼女もまた、それを期待しておったか、どうかそれは私にはわからないが、とにかく、最近の羞恥責めの傾向としては、専らそんなことになってしまっているのではなからうか。

私は、むっちりとした足首を握り、踝の

ころを避けてロープを括りつけ、その縄尻を引っ張りながら、大きく脚を開かせて固定しようとした。章子の身体は、私の施す力につれて、その足を中心として回転して、ぴたりと合わせた股は開けようとはしない。もう一方の脚の太股に縄を掛けて押し拡げようと

ので成功しない。鴨居に縄を通して、引っ張りあげても、うまく前を合わせているので開股責めの格好には中々ならない。

そのうち、脚ばかり引き上げているうち、柱に寄りかからせていた上半身が、柱からずれて、ころりと畳の上に転がってしまった。

完全に開股縛り羞恥責めの失敗である。初

めて縛られ、責められる玉木章子にしては、それが当然のことであろう。正面と左右からカメラが狙いをつけているのであるから、素人女性の彼女にとっては、股を開かせられるという羞かしさから、途惑いを感じるのも無理のないことである。

歯と歯の間に噛ましたネッカチーフの猿轡

によって発声を封じているので、文句を言う自由はないのだが、最初からの私の開股縛りに対して無言の抵抗を示しているのだろう。

「脚を開けと、言っているんだッ」

私は畳の上に横になっている章子を抱き起こして柱の前に坐らせておいてから、そう命令した。「ううう」と、言葉にならない呻き声を猿轡の間から洩らしながら、おずおずと股を開きはじめた。

「もっとだ。もっと、開くんだった」

私の言葉に、章子は仕方なさそうに、じりじりと、それでも



控え目に股を開く。カメラを持つ男性の前に女性として一番、隠しておかなければならぬ部分を、あからさまに見せるのであるから並の女性であつたら、到底きいてくれる筈のものではなかった。

やはり、玉木章子はマゾ女性なのか。

女としての自分の魅力を、発揮したく思っているのだろう。私もまた、男

性の一人として読者の皆さんと同じように、彼女の秘奥を眺めてみたいという欲望にかられている。まさしく章子がマゾの女性であつたなら、私の希望を、私の強要という形できいてくれる筈であつた。私は更に声を掛けた。

「さあ、遠慮しないで、もっと大胆に開いてみるんだ。さあ早く、開け、開け——」

まるで暗示にかかった夢遊病者のように、玉木章子は足を左右に大きく開いてゆくではないか。私は彼女の全身をファインダーに入れておいてから、カメラを、ぐっと近づけて、アップ



で残りのフィルム全部を撮った。

猿轡に噛ましていたネッカチーフを解く。

章子は、ふううと大きく息をして私の方をうるんだ目で顧る。その目は怨んずるような羞じらいに満ちている。

「どうだい、少しは痛かった？」

「ええ、括られてから、最後に締めつけられ

たの、ようききましたわ。それに、猿ぐつわされていたので、口がきけなくなつて、それが苦しくって、苦しくって……」

「そうそう、貴女は声を出すのが、お得意のようですね。それはそうと、このままで、まだ辛抱、出来ますか？」

「ええ、お望みでしたら、私の方は構いませ

んわ。どうかお続けになつて——」

その言葉をきいて私は縄を解いてやる気になった。縄をゆっくり解いて章子に浴衣を渡しておいて、畳の上に仰向けに、ひっくり返った。私も煙草を一服したかったのだ。

煙草を手にするのと、浴衣をひっかけた章子が火をつけてくれる。差し出した手首には鮮かな縄目のあとが



くつきりと、ついている。

煙草のけむりをくゆらしながら、ぼんやりと天井を眺めていると、章子がお茶をいれてきて、私の脇腹へお尻をぴったりくっつけるように近づけて坐り、私の手に茶碗を持たせてくれる。私は起き上がりざま、お茶を口にふくんでおいて、章子の肩へ手を回して強く

抱きしめた。

「いけませんわ。まだまだ、これから、お写真をお撮りになるんでしょ」

彼女は私の腕のなかで軽く拒んで、身もたえたが、私が坐り直して両腕に力をこめて、深々と抱きすくめると、章子もまた、腰を浮かし気味にして、両手をしっかり私の背中へ

まわしてきた。胸と胸とが、ぴったり合わさって相手の鼓動がドキンドキンと私に伝わってくるような感じがした。

髪の毛が目と耳のあたりに、かすかに触れて、こそばゆく化粧品の匂いが、ほのかに私の鼻の先をかすめた。私は章子を力いっぱい抱きしめながら畳の上へ押し倒していった。

○

休憩の時間が過ぎると、私は食卓を柱の前に運んできた。卓を持ってきたのは、柱に女体を括りつけておいてから卓を取り去ると、宙に浮いた格好になるのを試みてみたいと頭にしていたのである。これは松本たえなんかで、うまく成功して、女体が蟬が樹にとまったように宙縛りになって、緊縛感溢れた面白い写真が出来たことがあったのだ。

卓の上に座布団を二つ折りにしたものを二つ重ね、その上に枕を置いてから章子の腰を下ろさせた。両手を揃えて上へ挙げさせて柱に縛りつけておいて、足首に縄を掛けて吊りあげる——という、いわゆる足挙げの羞恥責めは、痛さと羞かしさの双方がミックスした淫虐きわまりない責めであったが、また、それだけに、責める者にとってはサディスティックな感興を満足させる企てでもあった。

責められる女体にとっては、どんな気持でこの足挙げ責めを受けとるだろうか。私は強い抵抗を掌に感じながら、ぐいぐいと縄を引いて足を挙げていった。章子は苦痛に顔をゆがめながらも微かに呻き声を洩らしたただけだった。もっとも白布の猿轡を歯と歯の間に噛ましていたので、満足な言葉を喋ることは出来なかったろうけれど……。

片足の足首を括った縄を引きあげれば、面白いように足は挙り、あらわになる前をかくそうとして、彼女は必死にもがいた。そのたびに、お尻が前に滑って柱に括りつけておいた両手が下がってくるのだ。

余りにも、手首の縄が痛そうなので、急いで数枚、シャッターだけを切っておいて、そうそうに縄を解く。場所はそのままだしておいて、左手を挙げて柱に括り、右手は背中へまわして背後で柱に縛りつける。

右足を、ぐぐぐ——と頭より上へ引き上げる。そうして左足を大きく一直線に伸ばさせようと足首に縄を掛けて、ひろげる。しかしこの方は、ひろげさせまいと章子が足に力を入れるので、私が思っていたような格好には容易にならない。

そうこうするうち左手首を縛った縄が締ま

ってきて、握りしめた拳が紫色に充血してきて如何にも痛そうである。考えたように開股ポーズにならないので縛り直すことにした。縄と猿轡をはずして、今度は高手小手縛りにしておいて卓の上に坐らせた。

右足首を括った縄を卓の脚に固定しておいて、左足首を吊った縄を、じりじりと引き上

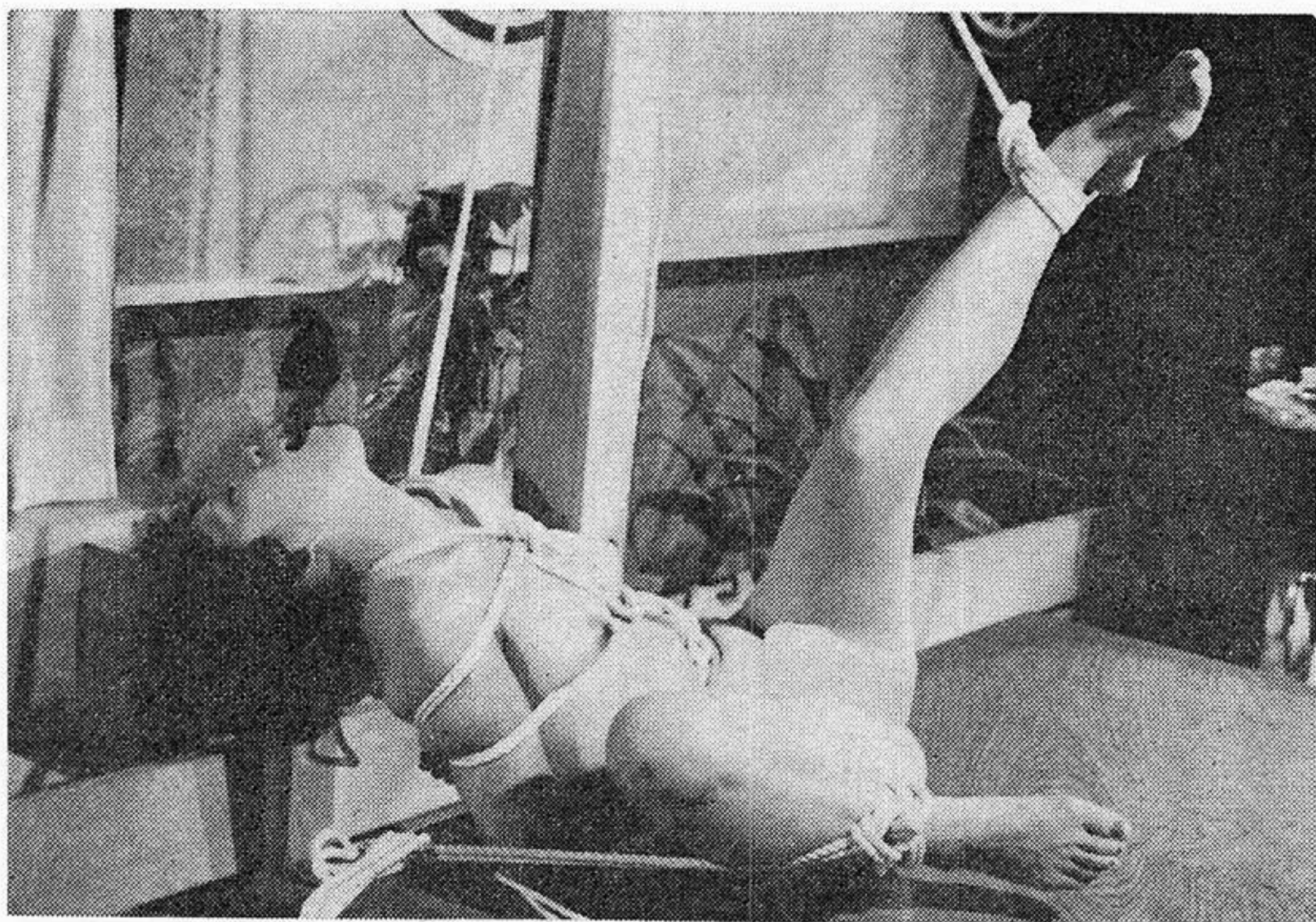
げていった。今度は、いやでも開脚開股しなければならなくなった。

「あーあ、いや、いや。そんなことしたら、羞かしいわ。許して、許して……」

猿轡よまよいごとをしていなかったたので章子の口から、派手な世迷言よまよいごとが洩れてきた。

足首はなおも、じりじりと上へ引きあげら





れてゆく。章子は上半身をのけぞらして仕方なしに両足を大きく開いてゆく。

カメラの正面に、かくすすべもない羞恥の根源が、ぱっくりと姿を見せている。そこには章子のマゾの痕跡が、ありありと見る事が出来た。私は生ツバをぐっと飲み込みながら、ライトに輝く、その部分を凝視し続けた。

玉本章子は、やはりマゾ傾向の女であったのか。私は嬉しい気持ちになってきた。今日初めて縄を掛けた女性に対して、このような素晴らしい開股責めが出来るとは、やはり彼女がマゾであるからに違いない。マゾであるからには、今日の責め具合によっては、更に引き続いて、今後も、変わった責めを敢行することも出来て、マニアの方々の目を楽しませることも可能である。今日の責めに懲りて、もう二

度と縛られるのは嫌だという女性であったらこれで終わりになってしまう。

章子が責めを喜んでいる。いや、楽しんでいるという証拠は、私の目の前にありありとその部分が示している。私は従前の経験からして、これは間違いないと思った。わざわざ時間をかけて、ライトを移動させ、ゆっくりとピントを合わせてからシャッターを切る。

「あーあ、早く、ほどいて——」

章子も、いち早く、自分の身体の変化に気づいたのであろう。シャッターを切って閃光がきらめいてからも、私がじっと彼女の身体を見つめているので恥かしがって身もだえした。だが、肉体の方は、その言葉とはうらはらに、もっともっと変わった責め方をしてほしいと願っているのだろう。

私は鞆の中から、やおら小型バイブレーターと百刃ローソク、そして一〇〇CCの浣腸器を取り出していた。

もう、どうもがいても、どんなに泣き叫んでも、このような格好に、片足を高々と吊り上げられておっては、どうせ逃げだすことも出来ないのである。そうした絶対絶命の境地を望んでいるのが、マゾ女性の本質かもしれない。

幸いに、猿轡をしていなかったの、私は玉木章子の魅力きわまりない泣き声を、たっぷり耳にすることが出来た。甘ったるくて粘着性を帯びた、その声は、いたく私の心を楽ませた。次には必ずテープレコーダーに記録しておきたいものだ。写真にするときは猿轡をしておく方がよいものだが、責めの泣き声を聞くのには、猿轡はない方が楽しい。今回はテレコの準備をしてこなかった故、テープにとれなかったの、その声をここに再現することは出来ないが、また機会があれば福井桃子のときのように取っておきたい。

吊り下がった肉塊のように、ぐったりと伸びた章子の縄を解いて卓から下ろし、その上から浴衣をかけておいて私は浴室へ向かう。

室内の温度が高まってくるにつれて、ズボンを脱ぎワイシャツを脱いでも、汗でアンダーシャツが、びっしょりになったの、そのシャツも脱いでパンツ一つの上から浴衣を羽織っていたのだが、それも、いつしか肌ぬぎになっていたのに、それでも汗は額から首筋胸へかけて流れていたのだ。

風呂で汗を流し、冷水を十杯ばかりかぶると、疲れた身体も、しゃんとしてきた。私は毎朝、起きぬけに木刀の素振りを百回ぐらい

やったあとで井戸水をかぶることにしているが、夏よりも冬の方が気持がよい。入浴の後の冷水かぶりも、三杯より五杯、五杯より十杯と気持がよいので数が増えてくるのだが、今は章子が待っているの、そんなに、ゆっくりかぶっているわけにもいかない。

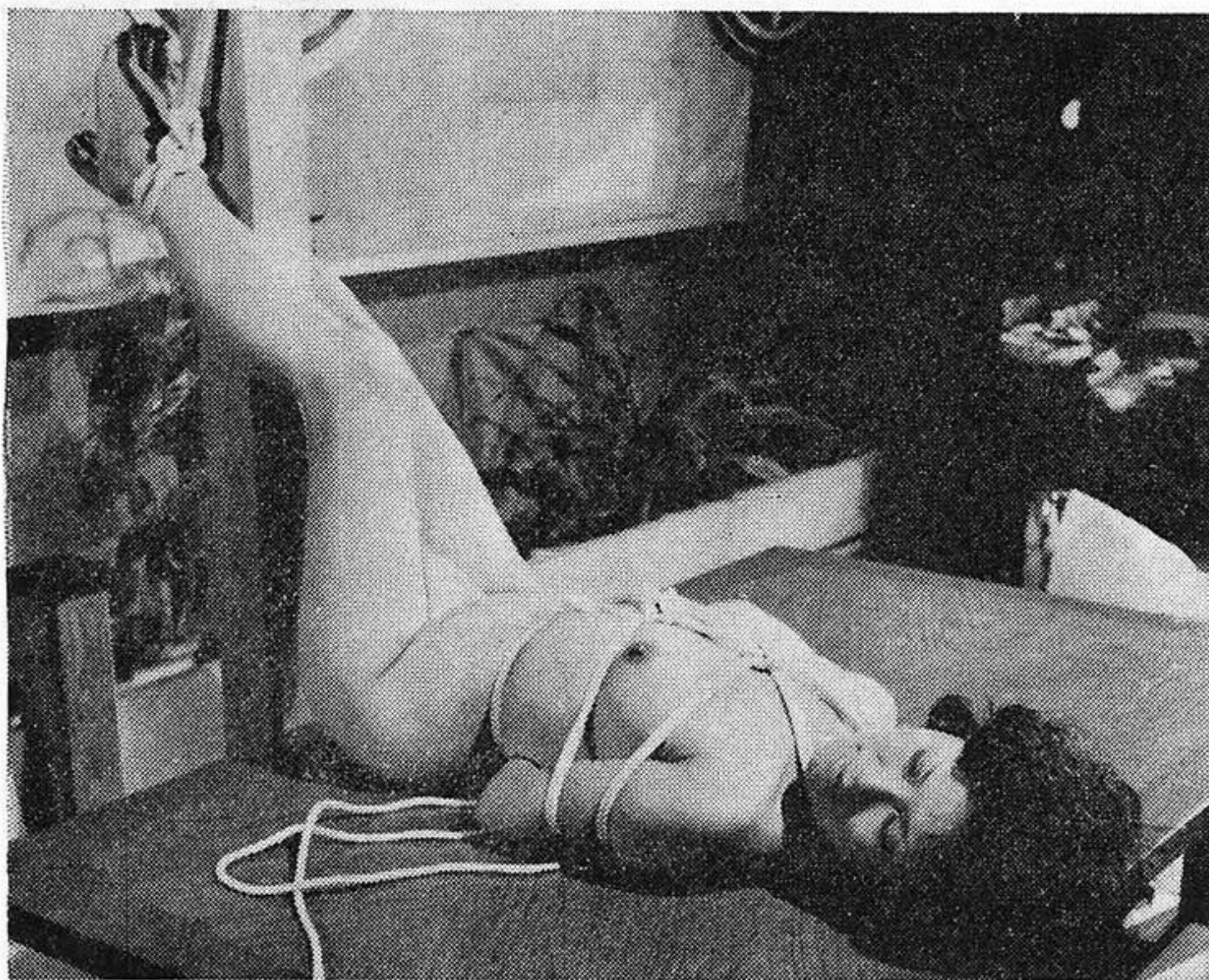
バスタオルを腰に巻いたまま部屋に戻ってくると、章子は、さっきのままの状態、私がかぶせてやった浴衣を身に纏って、畳の上にいるが、うたた寝をしていた。

「起きるんだ——始めるぞ」

「ハ、ハイ、ごめんなさい。つい、うとうと、してしまっ——」

むくむくと起きあがった章子は、バツの悪そうな顔で、はにかんで、浴衣を着ようとしたので、

その手を把って背後へまわし両の手首をくくり、胸へ一巻き、二巻き、三巻きと忽ちのう





ちに高手小手に縛^{いま}しめた。

「いろいろと変わった緊縛写真を撮らなきゃならんからナ、何度も縛り直す必要があるんだよ。今日のところは最初だから、まあ、オソドックスな方法でやるんだが、慣れてきたら、いろんな変わった責め方もやるよ」
そう言っておいて、豆絞りの手拭いで猿轡を噛ました。右足首に縄を掛けておいて、じ

りじりと引き上げる。上半身の安定を失って章子は、ごろりと横になる。自由になっている左足は空を蹴って身を支えようとするが、それは何の足しにもならない。右足が次第に上がってゆくにつれて、彼女の羞恥は益々増してゆくのであろう。顔が徐々に紅潮してゆくの、よくわかる。

縛られた足首の疼痛をやわらげようとして

お尻を自然と柱の方へ、柱の方へと寄せてゆく。縛られていない方の左足が、水をかくように曲げ伸ばししながら、やっと柱にまきついて、少しでも前がかくれるようにと、はかない努力を続けている。

噛まされた猿轡の中の呻き声が、うううう——と、くぐもって、何を言っているのか私には、よくはわからない。

「なんだ、何をしてほしいって、言ってるんだ。ええ？ バイブで責めてほしいっていうのか。ああ、さっきのバイブ責めが大変、気に入ったので、もう一度責めてほしいって。そうか、そうか。それだったら、ひとつ、こちらで、ひと責めしてやろうかナ」

「う、ううう、うー」

章子の呻き声は一層、激しくなってくる。私は、それに構わず、さっき使ったばかりのバイブを取り上げる。

上に引きあげられた足首が狂ったように動きまわるのを、私は小気味よい思いで眺めていた。実にそれは愉しい眺めであった。冷ややかな視線で、責められる女の生理の変化をことんまで見抜いてやろうと、じつくりと章子の全身を喰い入るように見つめていた。

思いきり開ききった太股の真白い肌が、ピ

クピク痙攣している。伸ばした足の指が、くの字に曲がって力の込められているさまが、私の目の前、十数センチのところまで拡大されたように目の中に飛び込んでくる。

私は時折、思い出したようにカメラの方へ走っていったシャッターを切りながら、またす早く章子のそばへ戻っては、その執拗な責めを繰り返していった。

「う、う、う、ううう——」

猿轡の下で呻き声を洩らしつつ、章子は全身から汗をにじませている。極度に上昇した室温は、時間を経るに従って、更にむんむんむせ返る熱気で充満していった。

日が暮れたのか、あたりは至って静かである。三台のカメラで、すでに十三本のフィルムを費消していた。枚数にして百数十枚に達している。ここらあたりで、今日の玉木章子に対する第一回の緊縛撮影行も終わりに近づいてきたといえよう。

私は吊った足首の縄だけを解いておいて、後手高手小手に縛られた全裸の章子を抱きしめた。柔らかくて生温かい女体は、すべてをまかしきって私の両腕のなかで、かすかに身ぶるいを続けていた。

豆絞りの猿轡を解くなり、ぬめぬめとした

章子の唇に唇を重ねていった。ねばっこい舌がからんできて、私の口中をかきまわすと、強く吸いついてきた。両手が後手に縛られているので、唇でだけの愛情の表現だった。

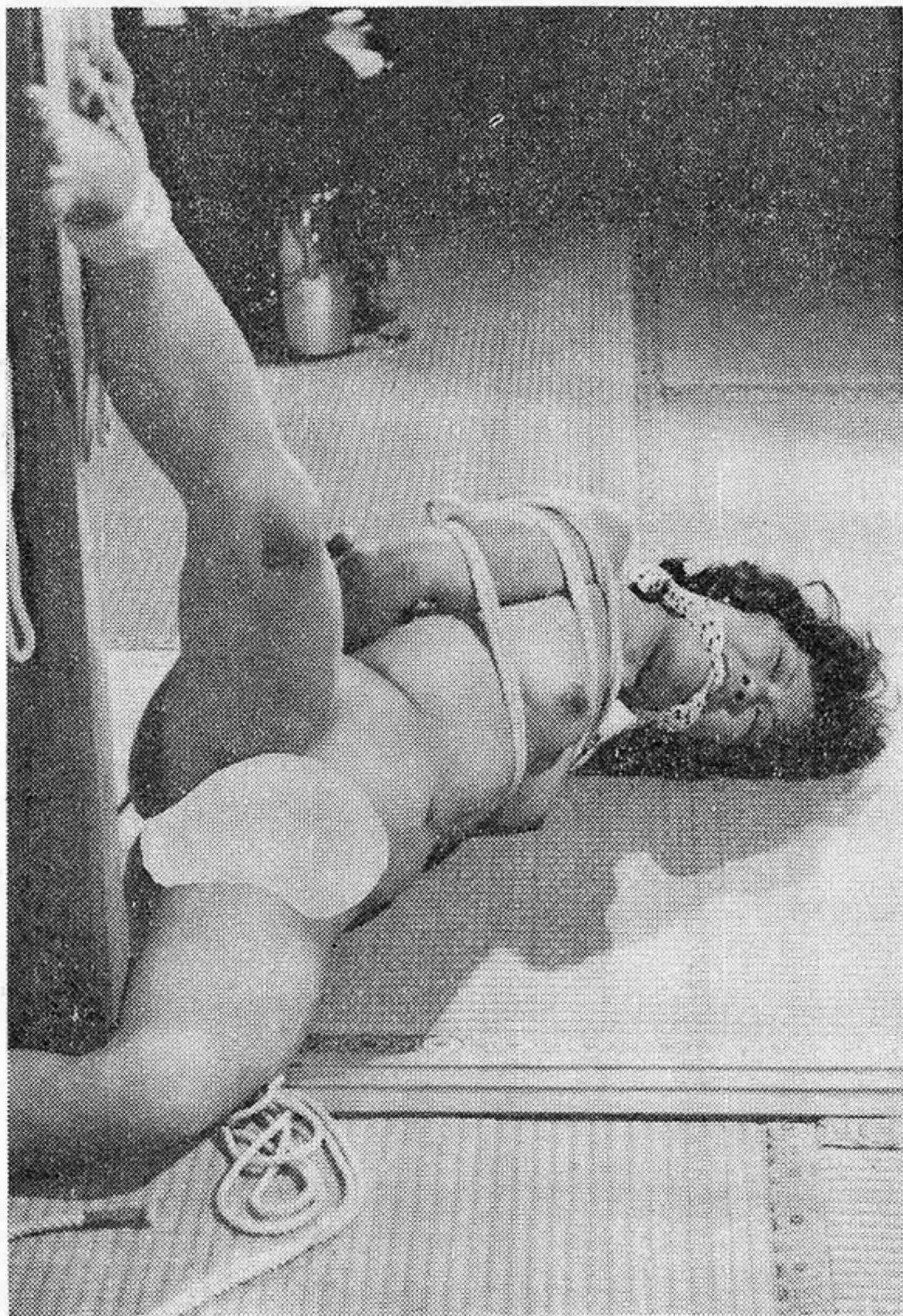
一方的な私の能動的な行動に対して、彼女は完全に受身の態勢であった。

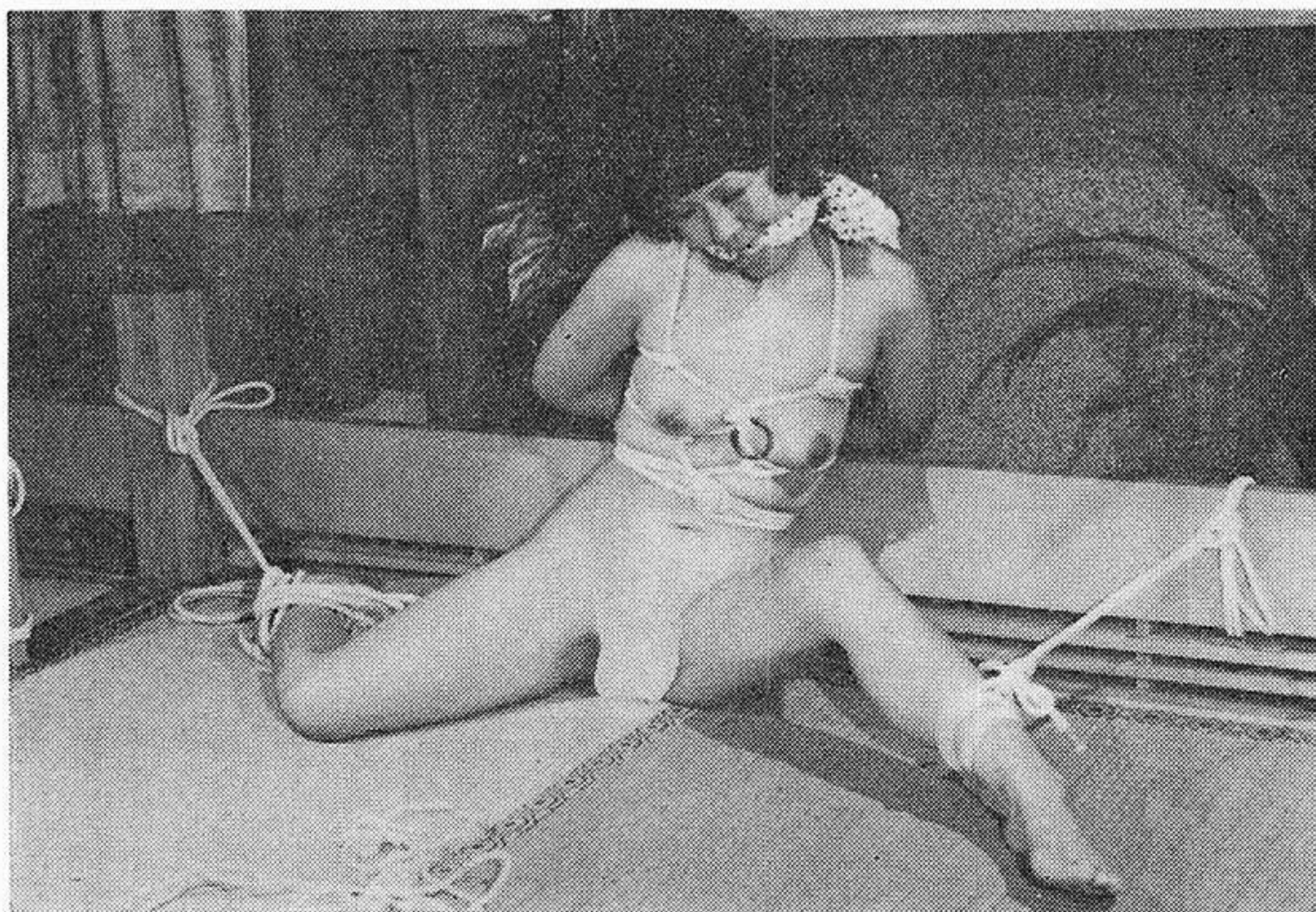
いつしか、私は章子の縄を解いていた。こ

の縛り方は、最後の結び目さえほどけば、あとはもう、するすると、もどけていった。「こんなことをして、貴女の旦那さんに、おこられないかな」

私は章子の耳もとで囁いた。

「いいえ、怒るくらいなら、車で送ってなんかくれませんわ。別れしなに、塚本さんに、





思いつき責められて来いって言っていましたわ。だから、私、今日は、思いつき責められてみたいんですの。それから……」

「それから？」

「いやッ、そんなこと、私に言わすの」

言いも終わらず、章子は私に、ひしと抱きついてきた。

○

ふと、私はカメラの中にフィルムが残っているのに気づいた。三台のカメラのカウンターを覗いてみると合計八枚残っている。

「よし、最後にこれだけ撮ってしまおう。こっちへおいで——」

「はい」

章子は、いそいそと立ち上がり、両手をうしろへ回わした。私は、最初に用いた鉄環付きの白ロープを持ってきて輪になったところを彼女の首

に通した。もう、どんなことをしても拒否するどころか、歓喜にむせび泣く、飼育されつくした女、章子は、従順に私の言うがままに縛りよいようにポーズを作った。

この人の喜ぶことだったら、どんな恥かしいポーズでもとうろく——という温かい奉仕の心が、じいーんと私の心に伝ってくるような気がした。もう時間が晚いので、早く終わって帰りたいのかもしれない。だが、章子の態度からは、微塵もそんな素振りは見えない。

場合によっては、一晩中、責められても構わない——といった、いそいそとした態度であるが、私は、あとの八枚のフィルムを使ってしまったら終わりたい気持であった。

願ってみると、今日の玉木章子に対する責めは、あくまで、開股や足挙げの羞恥責めに徹してしまっただうだ。勿論、初めて見る全裸の女体に対する珍しさも手伝っていて、こうした結果になったのだが、これが玉木章子のような素晴らしい理解のある女性でなかったならば、最初の責めから、このような羞恥責めは出来なかったであろう。

さて、いよいよラストの縛りであるが、これもまた、両脚を左右に開かせた羞恥責めであったのだから、何をか言わんやであろう。

後手縛りの手首を下げないために、肩に担ぐように掛けた縛り方だが、さっき用いた方法とは、少しやり方を変えてみた。

乳房のまわりを締めあげて双丘を強調する縛り方は菱型の変形のような縄捌きになってしまった。豆絞りの猿轡を配して、写真的な美しさの効果も狙ってみた。このワンピースに八枚のフィルムを当てて、両足を思いきり左右に開かせ、それを、それぞれ足首に括りつけたロープで固定しようというのである。

ともすれば、両足を合わせてしまう章子の足を、右と左に極端に広げさせて、縄尻を背後の棒に固定してしまうと、章子は、顔を真赤に紅潮させながらも、あきらめきった表情で視線を伏せてしまう。

閉じようとする脚を掴んで無理に開こうとする私に対して、章子の怨んずるような目差しが、投げかけられる。なんとかして、足首の縄目を解こうとして、もがけばもがく程、あからさまな女体の秘奥が、私の目に入ってくる結果となるのだ。

そうした女体の変化を私は刻明に追って、カメラで記録していった。

それは、玉木章子という女性の悩ましくも美しい「責められた記録」であった。

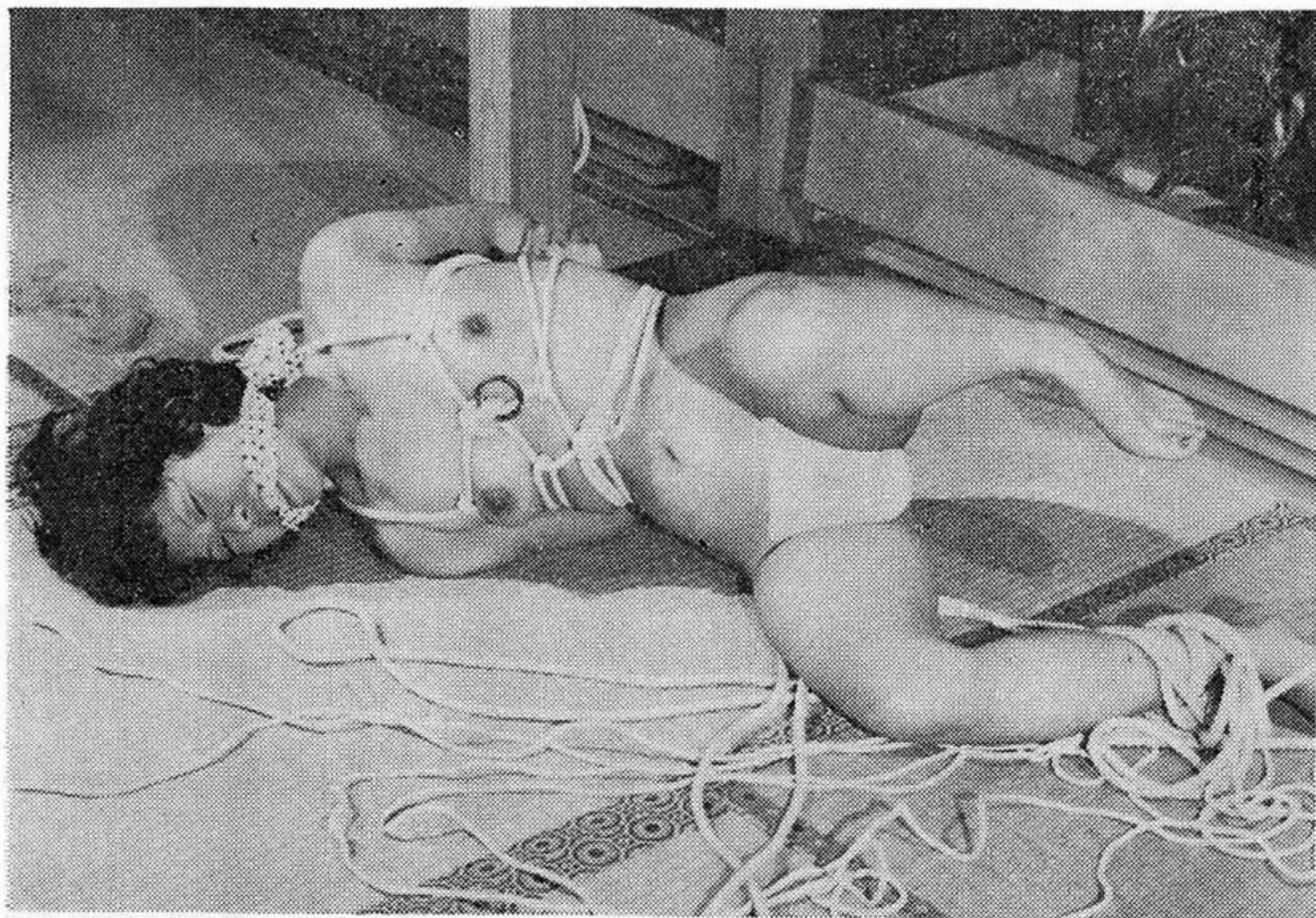
読者の皆様が、自分の手で玉木章子を責めているような気持ちになられるようにと出来るだけ多くの緊縛写真を、こまめに撮ったつもりである。もっとも、今回は私独自のアイデアで責めていったわけであるが、もし、読者の方の中で、こうした趣向で章子を責めてほしい——という御希望があれば、遠慮なくお申し出て頂きたい。次回、玉木章子を責める機会があった際は、そのアイデアを活用し、出来た写真は、お送りしたいと思う。

外へ出ると既にネオンが、そこそこに点滅していて、夜の気配であった。

数時間もの間、密室にとじ籠ってSMプレイに耽っていたのにも拘らず、疲労感が、いささかもないのが、むしろ不思議だった。

玉木章子は、私の傍で手首





に残っている縄目のあとを掌で、さすっている。

「どうです？ 少しは、お疲れになりましたですか？」

「ええ、縄が、よう締まって痛とうございましたわ。これから見たら、主人とのSMプレイなんて、真似ごとみたいですよ」

「ははあ、そんなにきつかったですか。私はまた、貴女がよく辛抱されるんで、まだ物足りないのかと思っていた位です」

「まあ、そんなこと。私は痛いとか、やめてとか言ったら貴方に悪いと思って、無理に辛抱していたんですのよ」

「それは、それは、申し訳けないことをしました。次には手加減させてもらいます。それはそうと、次回はいつ頃、御都合がよろしいんですか？ 来て頂けるんでしょうね」

「そりゃ、もう、私の方から

お願いしたい位ですわ。ほんとうに今日は楽しゅうございましたわ。是非、次もよろしくお願いしたいと思います」

そう言うってから章子は、つと目を伏せて、視線を落とした。

車は一七一号線を東進して牧落の交叉点を左へ折れた。

「お家の前までお送りしますから、道順を言っ下さいね」

「もうすぐですわ。次の辻を右へ曲がって頂いたら、左側に見える五階建てのマンションがそうですの」

だらだら坂を上った山側に見えた、最近建ったばかりらしい白壁の瀟洒な建物が、そうであった。

「では、写真が出来ましたら、すぐお送りしますから。さようなら」

マンションの階段を登りかけた玉木章子が再び私のところへ戻ってきて囁いた。

「私、月初め以外でしたら、身体の方は都合よろしいんですの」

意味ありげに微笑む彼女をあとにして、私は車を発進させた。

花蛇

●◎ 瞠目のサディズム小説総集篇遂に成る!!

昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚「奇譚クラブ」誌上に連載中でありますが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発刊となった訳であります。八十年の集積を味読して下さい。

|| 番号 || 花決定版 || 定価 || 一、〇〇〇円 (送200円) ||

△内容主要見出し一覧▽

[illegible]

第二十二章	身代金奪取の失敗
第二十三章	涙の宣誓文
第二十四章	連命の逆転劇
第二十五章	奇妙な三々九度
第二十六章	飼育される白い動物
第二十七章	悪魔と悪女の悪業
第二十八章	屈辱の地獄図絵
第二十九章	逃走の恐怖と失敗の結末
第三十章	悪鬼達の残忍な所業
第三十一章	落花無残の修羅場
第三十二章	淫らな美女の調教
第三十三章	すさまじいショーの展開
第三十四章	汚水にまみれた宝石
第三十五章	華々しき美女の屈伏
第三十六章	対峙する美女と美女
第三十七章	あくどい陥穽
第三十八章	羞恥図絵の展開
第三十九章	清純な令嬢の屈辱
第四十章	人身御供の令夫人
第四十一章	深窓の美少女とズベ公
第四十二章	小夜子への執拗な調教
第四十三章	変性色事師の登場

第四十四章 生れかわるスター京子
第四十五章 激しいスターへの訓練
第四十六章 低脳男と令夫人の結婚
第四十七章 愛弟子を調教する静子夫人
第四十八章 羞恥と屈辱の日本舞踊
第四十九章 悪魔たちの哄笑
第五十章 地下室の羞恥と汚辱地獄
第五十一章 珍芸を開陳する令夫人
第五十二章 淫靡な時代劇ショー
第五十三章 華々しきショーの展開
第五十四章 野卑な妾二人のいたぶり
第五十五章 ズベ公達の邪惡な責め
第五十六章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち
第五十七章 悪党の執拗ないたぶり
第五十八章 文夫と小夜子の屈辱的対面
第五十九章 勝ち誇る悪党一味
第六十章 中国伝来の秘法
第六十一章 緊縛された美女の涕泣
第六十二章 新しい餌食への触手
第六十三章 苦痛と屈辱の生地獄
第六十四章 恐怖の責め続く
第六十五章 結末なき責めの結末
第六十六章 甘美な拷問に悶える夫人
第六十七章 新しい犠牲の到来と静子の狂態
第六十八章 あくなき汚辱に泣く美女
第六十九章 ニューフェイスに飼育開始
第七十章 肉体の悪魔に魅せられた女
第七十一章 熱気を帯びたマゾの競演
第七十二章 女盛りの妖美な肉体
第七十三章 優雅な木馬夫人の崩壊
第七十四章 美女と野獣の奇妙な闘争

〒5.58 大阪住吉郵便局私書函第41号
 出版株式会社宛



カット・岡たかし

~~~~~△告

白▽~~~~~

## 馬のられ体験記

並原新一

私は前から若いグラマー女性によって組みしかれ、馬のりに跨がられて、その巨大なお尻の下に敷き潰されたいと願いつづけて来たM男の一人である。

多年『奇ク』を愛読し、S女性や女王様による馬のり記事に胸おどらせ、実感あふれるMフォトに興奮を覚えつつも、実際には身をもって体験する機会に恵まれず、これらの記事の中で馬のりにされる男や、Mフォトにおいて、女性の巨大なお尻の下敷にされているM男の立場に自分をおいて自己なぐさめとし、或は女性のお尻の下にしかれている坐ぶ

とんや、股の下に跨がられている自転車のサドルに思いを走らせ、もし彼らに生命があると仮定すれば、彼らは自分のおかれていた運命を、どのように受けとっているであろうなどと空想をえがいて、自分をなぐさめて来た次第である。

こうして長い間、その機会を求め続けて来たわけだが、最近、遂にその機会に恵まれ、実際にその体験を得ることができた。まことに浅い、お恥ずかしい体験ではあるが、この体験をもとにして手記を綴ってみたい。

さて、実際のプレイの相手となるべき女性

は、なるべく若く、美しく大柄で、特に豊満なヒップの持主であってほしいことは、独り私のみならず、同好諸兄の等しく願われる所であろう。そしてプレイに際しては、いわゆる話し合いによるのではなく、女性の方から一方的に圧倒される、すなわち、女性の力の前に完全に征服された形であることが最も望ましいことであるが、現実には中々理想通りには、ゆかないものである。

私のプレイの相手となった女性は、真のS女性ではなく、こちらからの切望を受けてのいわば話し合いによる相手であったので、プ



レイの時のM感は、そんなに強くなかった。

しかし反面、両者の話し合いによることなので、こちらの希望する、いろいろな方法（態位、服装など）も実現でき、馬のられのいろいろな場合を実験研究することができたのは却ってよかったと思う。

プレイの相手の女性は身長一五九センチ、体重五十二キロで、私たちの求めるグラマーという程ではないが、まずまずの体格の持主であった。

前置きが十分長くなったが、実際の体験記録に入りたい。

一口に馬のりとか、尻敷とか言っても、いろいろな方法や態位があるが、これを大別すると次のようになる。

(1)―四つ這いになった背中に跨がられる、文字通り馬のられ型。

(2)―仰向けにねかされ、胸の上に跨がられ両手をひざの下にしかれる、組みしかれ型。

この型の応用型として、お尻を前にずらせ、のどのあたりをお尻の下にしかれ、顔を両ふとももの間に挟まれるのがある。

(3)―仰向けの顔の上に跨がられ、顔全体が

お尻の下に完全に組み敷かれる顔面騎乗型。この型に、正騎乗型と、逆騎乗型の二つがある。

以下、この三つの態型について、少しくわしく述べてみよう。

まず、(1)の馬のられ型は、最も代表的な馬のられスタイルで、『奇ク』誌上にも一番多く登場する型である。この態型では、跨がる女性の足が床につかないので、背中に、その女性の全体重を受けることになる。

五十キロをこえる女性を乗せることだけでも中々の重労働であり、まして四つ這いのまま這いまわることには大変な苦痛である。女性が六十キロを超える場合は、簡単に乗りつぶされて了うであろう。女性としては、人間を（而も男性を）馬にして乗り廻すという優者の誇りに酔うことであろうし、乗られる男の方も、精神的にも大きな被征服感にみたされるものである。

私の場合、部屋の中を四回、まわらされただけで、完全につぶされて了った。

次に、(2)の組みしかれ型。一般に組みしかれというとき、この型をとるようで(1)の型より一段とM感が強い。胸の上に重いお尻をのせられることは、たちまち非常な息苦しさを覚

える。そしてこの場合、両手がひざの下にふみしかれるので、体の自由は両足以外すべて奪われる。

この型で組みしかれると、五十キロ程度の女性でも容易に、はね返せない。まして六十キロ以上の重さで乗られたら、まずは完全に降参という所であろう。胸の上に、どっしりと乗せられた、お尻のやわらかさ。息づまる重みの下にあって見上げる女性の顔は、まさに勝ち誇った女王様の雄姿である。

この型の応用スタイルとして、お尻をそのまま前にずらせ、首の所に、はまりこむように跨がり、太ももで顔をはさみこまれる態型では、首がしまるようになり息苦しく被征服感も一層強い。この態型では限度をすぎると、首がしまる恐れがあるので、充分注意したい。ここで、(2)の態型における女性の服装について、のべておきたい。

この態型では女性の服装が見えるので、その服装によって受ける感じも変化に富んだものとなる。一番、普通の場合はスカートであるが（上半身は、この場合、関係がない）あまりにタイトなものは脚を開いて跨がれないので、やはりセミタイトかフレヤーということになる。



この頃はスカートが短くなっている、両手を、ふみしく膝頭や、顔をはさみこむ太ももは露わになり、直接、肌に触れることになる、胸に跨がられた場合、開かれた両脚の間、スカートの中から、ほのかな体臭が匂い、更に前にお尻を進められて首に乗られた場合はスカートは自然にまくり上がり、臭気はより強くなる。実際、女性のスカートの中にも生温かい空気、そこに漂う匂いは、私にとって値千金である。

ショートパンツやスラックス姿の場合では、お尻の線が、はっきりあらわれ、ショートパンツの時は、スカートをまくりあげた場合と同じく、ひざや太ももが直接、手や顔に接するので実感が深い。

さて、次に、(3)の態型、顔面騎乗型に移ろう。

この態型こそM派にとっては、まさに最高のものといえよう。長い間、何とかその機会を得たいものと、待ち望み、先に述べたよう



に、ある時はM記事やMフォトのモデル男に自分をおきかえ、又ある時は、女性のお尻の下敷にされている椅子や座ぶとんや股の下に跨がられている自転車のサドルに羨望の念を抑え切れず、お尻の下から解放された座ぶとんの残り香に、せめてのなぐさめとして来た私であったが、今ここに実際の体験記を記すことができる喜びを禁じ得ない次第である。

顔面騎乗にも正騎乗と逆騎乗の二つがあるが、私の受けた体験では、やはり正騎乗の方がよいように思う。今まで『奇ク』の分譲フォトのものでは、逆騎乗が多かったように思うが、この態型では、ただお尻の臭気を嗅がされるだけなら充分かも知れないが、跨がる方の体の安定が失われるのと、顔面にかける重みも大分軽減され、更に顔全体がお尻の下にしかれるということにはならない。こんな理由で、私は専ら正騎乗を望むと共に、同好の各位にも、おすすめしたい。

仰向いた顔が、女性のはち切れそうな巨大なお尻の下に敷かれ、その重みを、ともに受ける苦しさ。そして口も鼻も完全にふさがれて息もできない苦痛。そして更に少し浮かされたお尻のすき間から嗅がされる強烈な臭気。これらは私たちにとっては最高の贈りものである。

一番印象に残るのは何と言っても始めて乗られた時である。仰向けにねた私の顔を、跨



いで立った女性の顔は、すでに女王様のようにであった。スカートの中の、うす暗がりの中に消える二本の円い、ふくよかな柱。そのつけ根の所に、うっすらみえる白いパンティ。やがて二つの丸い丘が次第に下りて来て、遂に私の顔の上に、かぶさった。

この時はスカートのままだったので、黒いスカートにぴっちりとお尻の下に私の顔は、完全にしかれたのである。五十二キロという彼女の体重は思ったより重く、頭の下が畳のせいもあってか、後頭部がいやに痛かった。

丁度、お尻のわれ目が鼻から口あたりにとおおい、左右の二つの丘が限りなき重みをもって私の両頬に迫って来た。

ああ、遂に待望の顔面騎乗！始めて顔に受ける女性のお尻の重み。勿論、口も鼻も完全にふさがれて息もできない。手で合図して、少しお尻を浮かしてもらう。つめられていた息を一息吸いこむ。その時、鼻に、しみ通る強烈なお尻の臭気。それは



じーんと、しびれるような匂いであった。

始めて嗅がされる女の、お尻の匂い。而も直接に、今まで座ぶとんや椅子に残された臭気に、せめてもの、なぐさめを得ていたが、やはり直接、嗅がされる匂いの比ではない。私は何度も何度も、その匂いを嗅いだ。

座ぶとんや椅子に含んだ臭気から、女性のお尻は非常に、くさいことを知っていたが、

現実に直接、その臭気を嗅がされて、本当にくさいことを知った。このようなお尻の下に長い間、しかれた座ぶとんや椅子が非常に、くさくなるのは当然だと思う。

次に、ストラックス姿で騎乗された場合、お尻のわれ目が、はっきりあらわれ、そのわれ目に鼻がはさみこまれるようになる以外、嗅がされる臭気も、スカートの場合と、あまり変わらない。

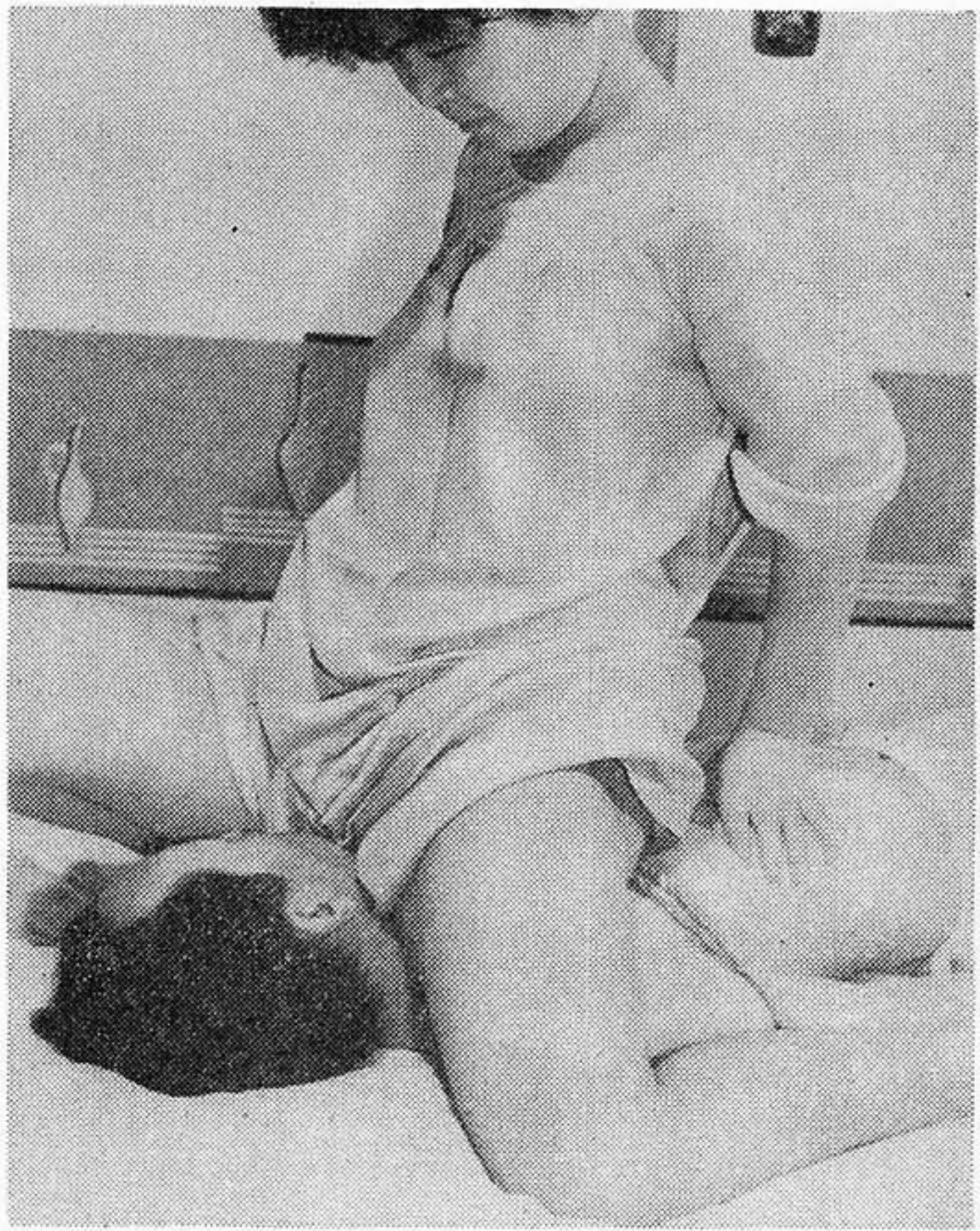
スカートを、たくし上げての騎乗となると一段と実感が深まる。スカートが、たくし上げられてパンティ、スリップに包まれたお尻に敷かれる場合は、顔はスカートの中に包まれ、中にも臭気は、ほのかに温く匂ってくる。そして、スリップもたくし上げられて、いよいよパンティ一枚のお尻の下にしかれるとなると、衣類着用では最高である。パンティの穿かれた日数、汚された度合によっても違ってくるが、嗅がされる臭気も又、最強である。

所で、この顔面騎乗のことも



大分、述べてきたが、この型のウルトラCともいうべきは、パンティも脱いで文字通りの騎乗である。このプレイでは、跨がる方も中々の勇気がいるし、又跨がられる方としても覚悟がいる。もう大分、前になるが『奇ク』誌上で、女性同志のプレイであったが、一方の女性の手記として、「……実際には、パンティやズロースを穿いてではなく、素裸で相手の仰向いた顔を思いきりお尻の下に敷いてやるのが理想なのです」という文句があった。相手が女性であったので、一寸興味が薄れたが、跨がる方としては、じかのお尻や股の下に相手の顔を敷くことが、又騎乗される方としても、この方が最高であるといえよう。

私も二、三度、この騎乗を受けたが、そのうちの一度は、相手の女性が放尿したあと、紙で拭かずに、そのまま跨がられ、舌で拭かせられたことがあったが、『奇ク』の旧号で芳野眉美氏の「男中」に於ける五郎が、女主



人のあと始末を舌でさせられたとあるが、その時の五郎の気持は、よくよく理解できる。

☆

長々と馬のられ体験記を記して来たが、終わりに馬のり型の変形ともいうべき腰掛責め型とサドル責め型について述べたい。(注、いずれも、(3)の顔面騎乗型による)

まず腰掛責め(椅子責め)であるが、今ま

でに述べて来た馬のりは、すべて床又は畳の上に仰向けにねて上から跨がられるという型であった。この型では、跨がる女性のひざが床やたたみに着き、顔面にかけられるお尻の重みは大分軽減される。所が、椅子の上に仰向けにねた顔の上に腰かけられ、而も足が床からはなれる程の高さに椅子を保つと、お尻の下に敷かれる顔は、女性の全体重をかけられることになる。

もう大分前になるが分譲Mフオト『まか』の中の一枚、椅子の上に仰向けになった男の顔の上に、スリッパ姿のグラマー女性、その豊満なお尻を、どっしりのせて顔全体を完全に下敷にしているのがあったが、このタイプこそ顔面騎乗型の最高であろう。

次にサドル責め型は丁度仰向いた顔が自転車のサドルの立場におかれる型で、前の腰掛責め型の場合は股が開かれず、いわゆる座ぶとんのようにお尻の下にしかれるというのに対して、この型では股が開かれて跨がられる



ので、顔の受けるお尻の重みは腰掛型と変わらないが嗅がされる臭気は、お尻の匂いに加えて、開かれた股の下匂いが匂ってくるので一層被征服感が強い。サドル責めとはいっても、実際に自転車サドルの上に顔を仰向けにおいて、上から跨がられるということは非常に困難なので、私は次のような装置で、このプレイを受けた。

まず、高さ一メートル位、幅が丁度、身体の幅と同じ位の台の上に仰向けにねて、顔の上に馬のりにされる方法である。この型だと、女性の足は床からはなれ、顔は女性のお尻、両ふとももの、いわゆる三面責めを受け、丁度、自転車のサドルに跨がられたのと同じ型になる。

この時の女性の服装は、スカート、スラックス又はショーツ、パンツ、或はスカートをたくしあげての騎乗など、それぞれ味があつて、よいものである。

以上、最初にもものべたようにまことに拙い手記になったが、文の稚拙をもちえりみず、ただ

思いのままに綴らせて頂いた。同好諸兄の御判読を頂ければ非常に幸である。

### あとがき

女性の豊満なお尻、而も若い女性のタイトなスカート又はスラックスに、ぴっちり包まれた、はちきれそうな巨大なお尻は私の心に強くやきつける。このような女性がクッシ

ョンの、よくきいた椅子や座ぶとんの上に腰かけている。お尻の下に敷かれている座ぶとんは、その重みのため、ぐっと、おしへしやがれている。

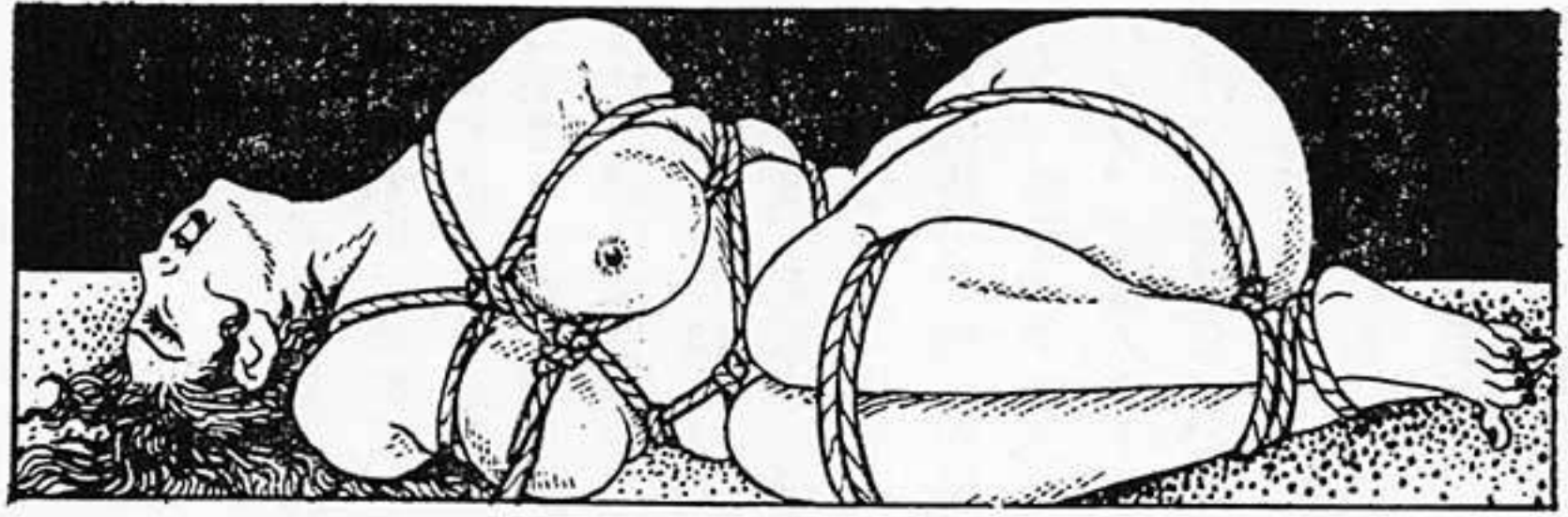
ああ、今、あの座ぶとんは、どんな気持ちでいるだろう。きっと、あの女性のお尻の重圧の下に大変な苦痛を覚え、気も遠くなるような、くさい思いをさせられているであろうと想像する。

街で自転車に乗った女性に出合う時、私の目は自然と、その股の下にしかれているサドルに注がれる。自転車が上下に振動する場合、サドルは、お尻の重みを必死に支えて、ギンギンと悲鳴をあげているではないか。

世の多くの若き女性方よ。私は座ぶとんやサドルになり代りあなた方の偉大なるお尻と股の下にしかれ、そのたくましい重みにおしつぶされ、頭の芯までしみ通る強烈な臭気を、いやというほど嗅がされ、意識を失うような、くさい目に合わされんことを切に切に願います。







# 17 奴隷妻宣誓

いつ、新吉から呼び出しが来るかと、待ちあぐむようになってしまった浩介であったから、待望の案内状が届いた時の彼の喜びは又

## 連載・奴隷妻小説

# 命預けます

## 五の章

### 複数プレイへの発展

柴 利 好

あろうS・Mプレイへの期待に、彼等三人の気持は弾みに弾んでいたのであった。

殊に日頃、冷静な新吉さえも、何となく落着かない様子で浩介を、いつもの六畳間に迎え入れると、早速、切り出して来た。

「実は、今朝も春子とプレイの種類や方法について色々話し合っただんですが、今日はひとつ、貴方にもプレイの仲間に積極的に加わって戴いて、男二人掛かりで、いじめ上げてはどうだろうかということになった訳です。如何でしょう。ご賛成、願えませんか」

思い掛けない話に浩介は、

「願ってもない光栄です。がしかし、二人掛かりで虐め上げるといわれましたが、奥さんの身体の方は大丈夫なんでしょうか」

と、矢張り心配が先に立つ。

「なあに、大丈夫ですとも。その事でしたら全然、ご心配には及びませんや。しばらくのブランクこそありますけど、そこはそれ、縛られ続けて二十年近い実績が、なんたって物をいいますよ。それに今日は、特に生理日を外して、奴隷の体調を十分、整えてのお縄待ちといった処なんですから。それに、私だって鬼でも蛇でもありません。我が最愛の女性奴隷妻の春子、可愛さでする事ですもの、決

格別であった。取るものも取りあえず、という古い形容が最も良く当て嵌まる急ぎ方で、彼が物に憑かれたように馳けつけた、その新吉の家では、これ又、招待客の来訪を、夫婦共々、今や遅しと、待ち兼ねている風に見えた。この日、これからこの家で行なわれるで



してバテレンの拷問みたいな無茶は、やりつこありませんや。奴隷時間中には積極的に発言する事を禁止してはおりますけれど、奴隷が実際に、その責め苦に堪えられなくなった場合とか、気持の上で、身に受ける責め苦そのものに不安があったりした場合には、奴隷の方から許しを乞う余地だって与えてやってありますもの」

溜々と弁ずる新吉に圧倒されて、浩介は何をかいわんや、といった心境になり、

「よろしく、お願いします」

と、表面上は如何にも、やっとな得させられた形にはなった。しかし実の処、浩介の内心は、今日のプレイへの期待に打ち震えていたのであった。

さて新吉は、隣の台所にいるらしい春子に「おい！ 早く出ておいで。お吟味役のおつきだというのに、何を愚図ついてるんだい」声を掛けると、唐紙の向こう側から春子が「でも貴方。今、お茶の用意してますのに」と鼻声で訴える。新吉が

「お茶はいいから、これから直ぐさま奴隷時間に入ります。奴隷妻の春子は、直ちに奴隷衣一装に着替えろ。此処でだぞ。お吟味役の、お目の前で、するんだぞ。分かったか。急げ

よ！」

と、早くも命令口調に変わった彼のこの嚴命に対して春子は直接、返事をしなかった。が、直ぐに台所から四畳半へ行ったらしく、何かコソコソ音が、し始めた。

やがて境の唐紙が開かれると、大きな紙袋を抱えた春子が、浩介達の待つ六畳の間に姿を現わした。

つい先日、別れたばかりだというのに、浩介には彼女が妙に懐かしく思われて仕方なかった。彼女は相変わらず、長目の髪をポニー・テイル状に後ろで束ねていた。着ているワンピースは落着いた藤色であった。お白粉気はなかったようだが、その面は、おもてなんとなく上気して、ふくよかな両頬の辺りが紅を差したように色づいていた。両足は素足の俣だった。やがて春子は、二人の男、それは彼女をこれから責め苛もうとして待ち構えている、この男達の見守る前で、黙々と奴隷妻への変装を始めたのである。

彼女は先ず、ワンピースの背のチャックを外し、両肩を抜きながら、その場に、しゃがんで腰から下へ脱ぎ降ろした。それから穿いていた純白のパンティーと一緒にクルリと腰から降ろすと、両足を屈め、足首にまつわり

ついたパンティーの締めゴムを丁寧を外してこれらの脱ぎ終えた着衣を、部屋の隅に纏めた。ブラジャーは、初めからつけていなかった。なので、常に嵌め切りの胴鎖を除いては、これで彼女は、完全に全裸の姿を晒した訳である。

次いで彼女が紙袋から取り出した中身は、十個の硬い革製の環と、鉄鎖が一本。長短と交ぜた細引の束が、数個であった。彼女はそれらの中から、先ず首輪を採って鉄鎖をつないでから、自分の細頸に回して後ろの尾錠で止めた。これを皮切りに、左右の手首と足首。両腕の付根の辺り。それから高腿へと順次、革製の環を一つ一つ、嚴重に固く嵌めて行った。

これらの環は、巾四センチ程で、小さな尾錠で止める仕掛けになっており、全てが、それを嵌める部分の肌深く喰い込むようにサイズを合わせて特別に製作された物であった。尾錠の止め金の部分には、小さな金属製の小環が一つ宛、埋め込んであった。最後に残った環は巾が五、六センチもあろうかと思われ、る広巾のウエスト・バンドで、それを、胴鎖で締められた上から覆いかぶせるようにして巻き、前から後ろに回し、力の限り締め上げ



て尾錠で、きっちりと止めた。

こうして全身の要所に、革の締め環を一通り嵌め終わった春子は、改めて二人の前に正座すると両手を、いつものように後ろ手に組み、やや首を垂れ、視線を畳に落として奴隷妻の宣誓を暗誦し始めた。この宣誓は、浩介には勿論、初めて聞くものだった。

一、私は、ご主人様に命をお預けした奴隷妻でございます。奴隷時間中は奴隷衣を着装し、一匹の牝奴として、ご存分に飼育して戴きます。

一、ご主人様のお気に召すまま、いつでも、どこでも、お縄による、お縛りをはじめとする、どのようなお仕置をも、有り難くお受け致します。

一、奴隷時間中は、奴隷語のみを使い、ご主人様の特別のお許しがない限り、自由語は一切、話しません。

一、この奴隷妻の宣誓は、私の生命が終わる日まで、その効力を失うことなく、奴隷妻としての心身に及ぼした全ての苦痛は、皆ご主人様の深いお慈悲の賜物と心待て、異存なく、ご服従申します。

ご主人様

奴隷妻 春子

今までに何回、繰り返して来たのであろう

か。春子は、この宣誓を、なんの淀みもなく誦し終わったが、彼女は、この時点から完全な一匹の奴隷妻に化身したのであった。

## 18 磔 刑 無 残

春子の奴隷妻宣誓を聞き終わると、新吉は浩介に向かって声を励ますように、

「さて、愈々今日の課題に這入りますが、講義と実技とは私も仲々骨が折れますから、先ず実技から参りましょう。宜敷くお手助け下さいよ！」

と、緊張した面持ちになる。

「その前に野口さん。何か特別なリクエストがありましたら、何なりと、お申しつけ下さい。例えば逆さ吊るしをして見せるとか……」

浩介が慌てて、

「とんでもない。そんな大それた事、ぼくにいえる訳はありません。ああ、なんとなく気持ばかり昂奮してしまつて、少し恐ろしくなつて来ました」

と弱気を告げると、新吉は

「分かりました。それでは今日も、基礎的な仕置から取りかかる事にしましょう」と鄭重に同意して、しばらく考えていたが

やがて春子に向かって、

「奴隷妻春子！ お慈悲を以てハリツケの刑に処する。覚悟は、よいな？」

と厳命する口調に、しおらしく俯向いて、男二人のやり取りを聞いていた彼女は、待つてましたとばかりに顔を上げ、一膝乗り出すように、にじり出て、黙って居住いを正す。

新吉は春子の首輪から鎖を外してから、

「野口さん。その細引で、奴隷を後ろ手に縛つてやって下さい」

と、浩介に指図した。浩介は多少、うろたえながら、それでも縄を一本しごいて、春子の背後に回る。

先ず彼女の上半身を二の腕と一緒にしてグルグル巻きに三巻き締め上げ、背中一旦、縄止めた縄尻を、背筋から下に降ろす。それから既に十字に組んで、お縄待ちを続けている彼女の両手首を、革環の上から固く縛り合わせて縄止めた。

「大変、結構です。初めてのお縄としては上出来ですよ。如何です？ ご気分は。万更でもありますまい？」

そういつて新吉は、縄尻を受け取ると、

「さあ、仕置場に急ぎましょう」

と浩介を促してから、そのまま春子を引き



立て引き立て台所をぬけて、特設の風呂場にやって来た。

渡り板と、洗い場との境に立てられた十字柱は、浩介にも先刻お馴染みの物だった。今日はこの柱に、本当の磔刑を試みようというのである。

「準備の間、奴隷をこの柱に繋いで置きましょう。野口さん、お願いします。繋ぐだけだから、身体を直に、柱に縛りつけなくたって構やしません」

浩介は、いわれる通り、手渡された縄尻を柱の中程に結びつける。繋ぎ縄が柱から三十センチ程しかないので、春子は柱に繋がれたまま、その場に、じっと立って、お仕置の準備が出来るのを待たなければならない。

二人をその場に残して新吉が出て行くと、やがて両手に幾つかの道具を抱えて戻って来た。それは大小の木片と、十数本の細引であった。

新吉は早速、一心に磔刑の準備を始めた。

十字柱の立木の表裏には、上から下まで十位親指程の穴が等間隔に明けてあった。その穴の中でも、柱の中間部にある穴は、特に大きくあけられて柱を貫通している。先ず、その穴に腕木状の木片を、洗い場の側から差し込

んだのを手始めに、その他の小穴には、それに適合した木片を、今度は柱の裏の渡り板の側から一本一本、差し込んで、先端が柱の面から四、五センチ程、突き出すように木槌で打ち込まれた。初めに差し込まれた腕木状の長い木片は、特に柱の表側から十五センチ余り出張っていた。この木片が股間の支えに使われる事が浩介にも飲み込めた。

続いて新吉は、片隅から高めの踏台を持参すると、洗い場に面した柱の根元に、それを置いて

「これで良し！」

と独り合点してから、引き続いて春子を柱に縛り付けに掛かった。

先ず、繋がれた縄尻を柱から外し、高手小手に浩介が掛けた春子の縄目を解き放つ。次いで春子を踏台に上らせて、柱を背にして直立させた。慣れたプレイだから新吉のこの辺の命令は眼顔で伝達され、それに対して春子も察しよく、なんの抵抗もなしに、自分自身の勤めを諾々として行なうのみである。

踏台上の春子が爪先立って、背中から臀部をピッタリと柱に密着させると、柱に打ち込んだ最初の支え木が彼女の引き締まった臀部を受けとめる格好になった。その時、彼女の

肩先は十字柱の腕木よりも幾らか上に位置していた。

新吉は風呂場の片隅から小型のキャタツを運んで来ると、それに登って、愈々春子を得意の縄捌きで柱に縛り始めた。胸元から腋の下を通って首根に掛ける襷縄。乳房の上下。細腰。下腹部。高腿。膝の上下。足首等々、順を追って、その個所の緊縛に適合した長さの別縄で、嚴重に柱に縛り付けて行く。しかもこれらの縄は只、身体と柱とを縛り合わせるのではなく、身体を先ず二巻きか三巻きも縛ってその縄を柱に回し、その裏側に打ち込んだ木片の突起の上に縄を掛けて、固く縄止めする縛り方であった。

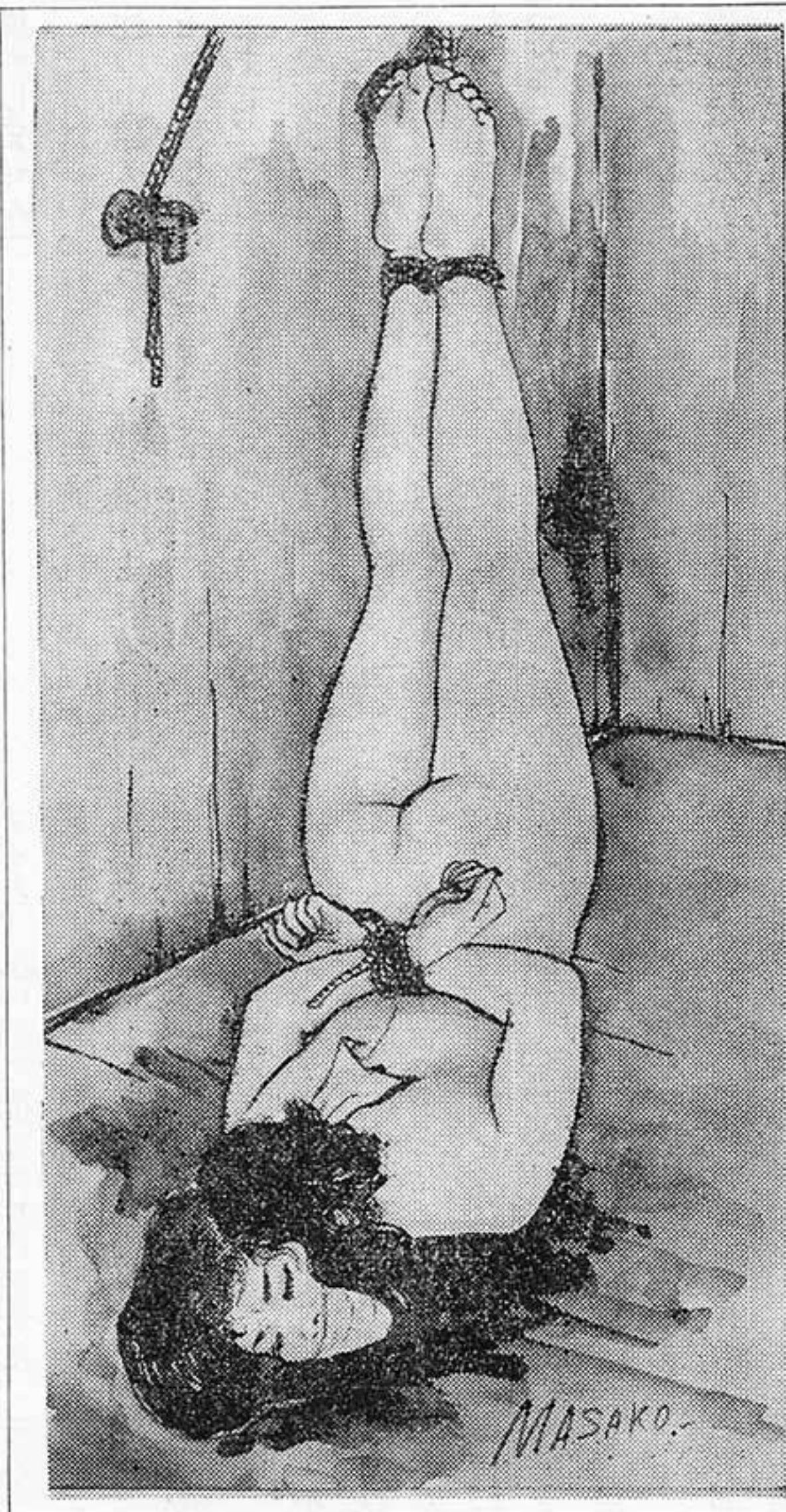
立柱への緊縛が完成すると、ついで腕木への縄掛けが始まる。春子は心得て、両腕を思いきり左右に広げ、十字の横木に割わして身構える。手首。肘の上下。腕の付根の四力所左右合わせて八カ所が、何れも別縄で二巻宛嚴重に縛り付けられた。

「爪先を上げろ！」

さっき春子が踏台上で、支柱を跨ぐ形で立った時、既に予め爪先立っていたので、新吉の、この命令は易々と実行され、直ちに踏台が取り除かれた。この瞬間、春子の完全な全



……イメージギャラリー……『陶醉への道程』……宮城昌子……



裸の磔刑が完成したのであった。

縄毎に支えを使って、あんなに嚴重に柱に縛り付け、跨間に支柱まであるにも拘らず、踏台を外された彼女の身体は、縄それ自体の伸びと締め縄の筋肉への喰い込みとによってググッと下降し、縛り縄の全てが極度に緊張して、彼女の肌深く埋もれ込む有様は、正に無残そのものであった。

二歩ばかり後ずさりして、風呂桶に寄り掛

かる様にし乍ら新吉は、

「上等！」

と叫んでから、柱の横手で傍観していた浩介に

「如何です。少し離れて、この辺からご覧なさい。女体のハリツケ姿がどんなに美しいものか、これでお分かりになったでしょう。こんな素晴らしい磔刑は、舞台はおろか昔の刑場でだって見られなかったことでしょう。それ

を私達は好きな時に出来るんですから堪まりませんや。こうして置いて、鞭を加えてやる事もありますし、水やお湯を浴せ掛ける事もあるんですよ。今日はこの俣縛り放しにして暫く奴隷にも楽しませてやるとしましょう」

新吉は何喰わぬ顔でそういうと、奴隷妻へは一顧も与えず、スタスタ部屋に引き返して行ってしまった。

後に残された浩介は動悸をドキドキ打たせ乍ら、流石に直ぐさま立ち去り兼ねて、彼女の哀れにも美しい姿を、しげしげ見入った。縄目を全身の要所に受けて、十字柱に吊られた全裸の美女の磔刑姿の、なんと妖しい、美しさであろうか。それは凄まじい残酷美ともいわれるべきものであった。生まれて初めての経験に、息も詰まる思いで浩介は、余りに激しい感動の為か胸震いさえたのだった。

それでも、何時迄もその俣でいる訳にも行かないと思い、一旦、部屋に戻り掛けてから浩介は、今一度、春子を振り返って見ると、俄に彼女に対する憫情が湧いて来た。彼は柱の正面に又、戻って春子を見上げ

「奥さん、勘忍して下さい。こんな苦しい思いをさせたりして、申し訳ありません」

と真顔で謝まるのを、高い磔柱の上から静



かに眺め乍ら、春子は敢えて口を利く事をせず、「分かっていますわ!」といわんばかりに、軽く頷くのであった。

しかもその眼元には、微かな笑みさえ浮かんでいるのを見て取って、一安堵の思いの浩介は、やっと彼女の脚下を離れて、新吉の待つ座敷に戻って行った。

## 19

## 奴隷衣と奴隷語

浩介が座敷に入ると、新吉は一枚の大きな紙を手にして、静かに彼を待っていた。浩介に差し出されたその紙には、春子が今しがた新吉を前にして誓った奴隷妻の宣誓文が、墨痕鮮かに記されてあった。浩介が、それを読み進む内、さっきこの場で彼女が暗誦した文言と、一言一句も相違のない事が分かって、良くもこれまでに飼育が徹底したものだ、と改めて感じ入るのであった。

この宣誓に就いて新吉は、付則が二つある事も話してくれた。二つの付則は何れも奴隷妻宣誓の項目中に記された特殊語、即ち『奴隷衣』と『奴隷語』に関するものであった。奴隷妻は奴隷時間中、所定の奴隷衣を着なければならぬのだが、その奴隷衣には、

一装から四装迄、段階が設けられている。

一装Ⅱ革環による要部厳締(同略装)

二装Ⅱ細引縄による要部厳縛(同略装)

三装Ⅱ鉄鎖による要部厳締(同略装)

四装Ⅱ全裸

右の内、四装の全裸は、全く着衣が奪われるのだから、厳密には衣裳ではないけれども、主人は奉仕する一つの段階的姿勢として挙げである。この他に特例として、主人が必要と認めた着衣は、随時任意に使用出来るという特装項目も抜かりなく拵えてある。しかも胴鎖による腰部厳縛は、これらの全ての条項に属さない、いわば不可侵的性格さえ持つものとして諒解されてはいたが、これさえも、主人は欲する時、欲する場所で、胴鎖着脱の自由権を行使する事が出来るのであった。

一装の革環の着装は、春子が磔刑に処せられているその日の衣装であって、頸、手首、二の腕、細腰、高腿、足首の夫々に、硬質の革製の環が合計十個、厳しく嵌め込まれる。その略装とは、浩介が初めてこの家を訪れた時の春子の衣装の事で、革環が二の腕、細腰高腿の部分が省略される。つまり、頸、手首足首、合計五個の革環が、使用される場合である。

二装と三装の細引縄と鉄鎖による締縛方法には特別な定めは無い。縄数や鎖数の多少によつて、正装と略装とに分けられている。これはプレイの程度やその折々の気分によつて『お仕置一度』から『五度』迄、縄数の多少とか、緊縛度の強弱を適当に工夫実行していた。この一度から五度のお仕置度さえも、これ又その時々の方便に過ぎず、いわばプレイに際してのアクセサリーなのである。

四装の全裸は、一見自由で楽しそうに思われるが、実は全く縄、鎖、環などのない肉体そのものに直接、加えられる虐待の方が、より一層、骨身に徹するという意味で、最も重い規定としての性格も備えていた。

扱て奴隷語というのは、奴隷時間中、奴隷側から主人に向かって積極的に話し掛ける事の出来る、極く限られた数語に過ぎない。

ご主人様。お縄。お縛り。お仕置。お慈悲お許し。

以上六語を主体とした熟成語なのである。これらの奴隷語の外は、奴隷妻は主人に対して自分から話し掛ける事を禁じられている。但し主人からの語らいに対する応答には、別段、制限は無いのであった。

要するに、これら二つの付則は、その実質



的な意義よりも、寧ろ奴隷妻宣誓によって醸成されたムードを、より以上に高める修飾的効果を持つものであった。これ等に就いて概要を話し終わってから新吉は、更に言葉を次いで事細かに説明を加える。

「奴隷妻宣誓は、我々が二人して考えた原案を、劇場の脚本家の先生に頼んで尤もらしく成文化して貰いました。これでも結構、苦心を払っておりますよ。例えば最終条項に全て、苦痛云々とありますが、これは折檻によって、決して傷を負わせないという含みがあるのです。つまり苦痛は与えるけれ共、骨や皮肉を直接、傷けるような事は一切、避け度いのが狙いなんです。ですから苦痛の中には体の毀損は含んでいません。それに、最初の条項で命を預けたといわせているのも、奴隷愛護の精神の現われといえます。一概に奴隷といえ、生かすも殺すも勝手次第などという風に理解されていますし、それが実際でもあったでしょう。が、私の奴隷妻は違います。飽く迄も主人である私が、奴隷としての妻から、その尊い一命を預った、大切な預り物だ、という観念を貫き度かったのです。一匹の牝奴、という言葉が出て来ますが、これは表現上の一つの技術で、犬畜生同様の人権無視とは

趣旨が、違います。生命が終わる日とは所謂一生涯と同じ意味で、殺してしまっても構わないという事では絶対ありません」

新吉の解説を、逐一、頷き乍ら、感心して聞いていた浩介は、更に念の為に尋ねた。

「奴隷語を指定したのは、何か特別な理由でもあるんですか？」

新吉は一寸、考えてから

「そうですね。特別といえるかどうか分かりませんが、只、二人共にここに挙げた六つの言葉が好きなんです。奴隷語として選んだ言葉の内、ご主人様を除く他の五つは、どういう訳か、その文字とか音とかを見聞きするだけで、私達を昂奮させる要素を持っているんです。これ等の文字に含まれた特殊な響きが心の奥底迄ジーンと突き刺って来る様に感じるんです。それで私達は、これらを奴隷語と名付けて、プレイ演出上の手助けにしている訳です。特に春子は、これらの言葉が好きで奴隷時間、以外の普段の暮しの中でさえも、度々使う程です」

浩介の頷くのを微笑しながら眺めた新吉は語り続けて、

「プレイ演出とか、雰囲気高揚の為に、他にも色々私達だけの言葉を作りました。例え

ば、お縄待ち。縄肌吟味。お縄改め。などという、いかにも古めかしい牢内用語めいた言葉で実感を盛り上げているんです。こうした宣誓をさせたり、服装や言葉を規定する事で奴隷自身がそれらしい精神的昂まりを感じて来る訳です。この嗜虐意識の高揚があつてこそ、プレイを、より一層、楽しいものにしていくのです。身体中に色々の種類の環を自分で嵌めさせて、お仕置の準備をさせるのも、皆そうした精神的な効果を与える為の手助けなのです。この様なムードに予め酔わせて置いてから責めに入った方が、牝奴の喜びが大きい様ですよ」

と説明した後で、急に改まった口調で

「春子は私に取って掛け替えの無い妻です。一匹の奴隷と言葉ではいっても、それは赤の他人を奴隷化して専有しているのとは訳が違います。お仕置だの折檻だのと、如何にも激しい惨たらしい表現こそしていても、所詮、遊びは遊びです。ですから本当の拷問や責め折檻には全く見られない愛情が、そこになければならない筈です。こうして宣誓やら何やら作って見たところで、それはプレイの一形式であるに過ぎません。結論は、二人の愛情の結合の在り方、方法の取り方という事でし



ようねえ。奴隷妻は、奴隷ではあるが単なる奴隷ではない。妻として人としての人權が認められ、それが絶対的に保証されてこそ、真の奴隷妻であるというのが、私の持論なんです。一寸生意気ですけど……ああ、そろそろ春子の苦痛度を、見てやらなければなりません。大分、時間が経った様ですから」

と新吉が漸く腰を上げたので、浩介も、いそいそと彼に続いて仕置場へ向かった。

## 20 縄 肌 の 疼 き

春子の磔刑による滞空時間は、四十分余りだった。しかも、跨いだ支柱に全身の重心が掛かっているとはいえ、身体を柱に縛り付けた全ての縄が、柱の裏の滑り止めに掛けられているから、それらは沢山の吊り縄による吊るし縄と同じ効果を肉体の上にもたらした。それ故、幾段にも掛けられた細引のどれもこれもが、全く締め緩みのない厳しさで彼女の肉体の要所々々を締め上げていた。特に革環を嵌めていない、直接素肌に縄掛けした部分では、細引が殆ど見えない位に、肌深く喰い込んでいく個所もあった。

こうした縄目の圧迫の為、彼女の全身は著

しく血行が妨げられて、既に柔肌全体に顕著な鬱血状態が起こっていたのだった。細引と細引との中間に張り出した肌の表面が、一面に赤く腫れ上がって見えるのに反して、顔面は血の氣を失って蠟の様に青白かった。その顔面を真直ぐに起こして、齒を喰い縛った春子のその表情は、最早、堪え切れない極限的苦痛に歪んで、先刻、浩介に見せた柔和な面影は全く無かった。

彼女は二人の男達が漸くその場に立ち戻ったのを、高い磔刑柱の上から認めるや否や、多分それを今や遅しと待ち兼ねて苦しさで闘って頑張っていたのであろう。

「ああ！ ご主人様、お、お許しを！」

と、如何にも切ない氣に呼び掛けて来たのだが、それでも内規で定められた奴隷語の他は一句も口にしようとはしなかったのは流石であった。

「お慈悲の折檻に相当堪納したとみえるな。これから引き続いて、もっともっと厳しいお仕置を科す予定だから、磔刑はこの辺で止めて置くが、こんな程度でヘコタれる様じゃ縄の奴隷妻の資格がないぞ。今日は、いつもより氣が這入って、張り切っていた筈なのに、案外だらしがないんだなあ」

新吉は、こういう乍ら、それでも奴隷降下の手際も鮮かに、踏台や、きやたつの運搬、縛り縄の解放など、独りで小まめに、し終わせた。そして春子の身体を軽々と背負って、座敷に連れ戻った。

グッタリと畳の上に伸び切った春子の柔肌の鬱血症状は、いつ元に戻るものか、浩介には見当もつかない程、生々しかった。

新吉は彼女を俯伏せたり仰向かせたりしてその症状を仔細に確かめてから、手や脚や胴に嵌めてある革環を全て取り除いた。革環を外された跡は、深い肉溝を作っていて、その窪んだ肌の締め跡は、一面に桃色を呈している。それでも一応、革環で縛り縄から保護されていただけあって、素肌に直接、縄掛けされた処が、鮮血色の縄痕で無残に彩られているのとは、較べ物にならなかった。

新吉は、これらの肌の変化具合を半ば楽しむかの様に眺めてはさすり、さすっては眺め暫く縄肌を鑑賞している風であった。が、やがて慣れた手付きで静かに揉みほぐす作業に移り、二十分ばかりはマッサージに専念していた。その効果が顕れたせいか稍あって春子の顔色も幾分、恢復して来た模様に見えたのだった。それでも未だ未だ本調子ではないら



しく、切なそうに肩息を続けている。が、しかし新吉は容赦しない。

「それではお仕置の第二部に取り掛かるとしましょうか。さあ起きた起きた！ 急がないと奴隷の大好きな鞭だぞ！」

この威し文句が効いた訳でもあるまいが、春子は直ぐさま、ゆっくりではあるが身体を起こした。そして静かに息の調子を整え終わると、後ろ手正座の奴隷坐りに居住いを正したのは、矢張り日頃、身に付いた奴隷妻意識の賜物だろう。

「覚悟は、いいか？ 始めるぞ！」

という新吉の言葉に

「はい。お慈悲のお縄を、戴き度うございます」

と低くはあるが、いつもの美声で答えた春子なのだが、彼女の柔肌に印された縄目の跡は未だそれ程、先刻とは変わってはいない。それでも赤く腫れ上がっていた肌は全体から見れば随分、治まって来ていた様だったし、事実、彼女自身、大分、元気を取り戻しているらしく、浩介には思われた。

磔刑に使った捕縄は、皆その俚、現場に置き放して来たので、次のお仕置用としては直ちに別縄が準備された。その別縄とても毎々

春子の肌を嚴重に縛しめ、何回も、汗や脂で汚れたのを、春子自身が丹精して洗濯して置いた手慣れた代物に相違なかった。

「今度は、どうするんですか？ もう少し、休憩させて上げては如何でしょう」

心配気な浩介の問いに、新吉は構わず

「大丈夫ですよ。奴隷の身体は、奴隷自身が一番良く知っていますもの。二人してプレイし始めて、もう五年位に、なりましょうか。私としても、此奴の身体の事は十分、心得てやっている心算です。こうして奴隷がお縄待ちの姿勢をとった上は、絶対に、ご心配には及びません。この位の縄の跡なら、別に問題はありませんよ」

と確信に満ちた様子でいい切ると、細引を取り上げ、奴隷妻の背後に回って、又しても彼女を後ろ手に縛り上げて行く。

「ご覧なさい。同じ縛るにしても、こうやって前の縄目を少し嫌って、別の場所を縛る様にすると随分、長く緊縛が続けられます。時には態と同じ所ばかりを狙って縄目を重ねる場合もありますが、それは特別な、例えば縄目鑑賞の必要な時などです。さもないと、どんなに奴隷が仕込まれているとはいっても、痛みばかりが激しく先行して、緊縛そのもの

が楽しみの境地に迄、還って来ませんから、お互いに詰まりませんものねえ」

と、いいながら、いかにも慣れた縄の掛け方を、し終えた新吉であった。

「幸い今日は上天気です。庭から筑波も良く見えますよ。二人して相談していたのは、実は屋外縛りなんです。先刻の磔刑は、その肩慣らしならぬ、肌慣らしとでもいいいましょうか。いよいよこれからが本番なんです。野口さん、貴方も一つ、元気を出して下さい。奴隷だって、ホラ！ やっと、こんなに気が這入って来ましたもの」

新吉の言葉を待つ迄もなく、春子の氣の入れ方が一通りではない事は、彼女の眼の輝きでも直ぐ分かった。濡れた様な大きな瞳が、俄に光を増し、口唇は少し開き加減にしていた。豊かな乳房が揺れ動く様に、胸を弾ませている彼女の、大きな呼吸の度毎に、上体を真横に走る高手縄が、両の乳房の上下の肌深くグイグイと埋もれては出、又も埋もれて、まるで生き物が動いている風に見えた。

## 21 木馬晒しの苦悦

「立ちませい！」



と縄尻を引かれた春子が、案外シヤンとして立ち上がる事が出来た様子を見て、浩介は漸く安心した。

「この儘、跣で庭に降りろ！」

と新吉は春子に命令すると、次いでその縄

尻を浩介に手渡して、ガラリ口調を和らげる演出も堂に入っていた。

「下にサンダルがありますから、庭中、奴隷を引き回してやって下さいませんか。というのは、さっきの磔刑時間が、いつもより少し



イメージギャラリー

『縛女の魅惑』

岡

たかし

長かったので、奴隷の身体の調子を、もう一つシヤンと整えてやる為です。そうして置いてから次ぎの責めに這入った方が、尚の事、効果がありますから」

噛んで含める様な新吉の解説を聞き終えろと、浩介は今し方まで春子の身を案じていた事など忘れたかの様に、喜び勇んで、前に飲み込んだ要領で春子を引き立て、廊下から庭に降り立った。

もうすっかり夏の装いを増した自然の風光が、痛い程、眼に染みる様に思われる好日である。折柄、微風が軽やかに奴隷妻、春子のポニーテールを颯って、後れ毛がヒラヒラと光って舞った。

全裸で縛られた身ではあっても、この自然の恩恵の中に浸った春子は、如何にも快げに見えた。これから一層、激しい責め苦を、又しても受けなければならぬ奴隷妻の悲しさや嬉しさなど、全く忘れ果ててでもいるかの様に、彼女はソッと両眼を閉じて、形良い鼻孔を拡張、深い緑の空気を満喫しているかの様であった。

縁先から用水池の堤との間は、何処がこの家の底境なのか、はっきりしない儘、自然に開放されている。従って、この家に南面する



空地は三百坪近い広がりを持っていた。その平地を浩介は、一匹の奴隷妻と化した春子を引き立てて引き回し始めた。同じ引き回しでも先達ての部屋の中とは違って、本当の女囚を扱っている様な錯覚に陥り乍ら、彼は楽しくて仕方がなかった。

春子は春子で、この引き回しを心から楽しんでるらしく、肩をすくめ、首を頂垂れて歩く歩巾も小さ目に、ヨチヨチした足取りで浩介の引く縄尻の指図の俛に、二回、三回と同じ空地の中を歩き続けた。素足の汚れなど全く意に介さない様子であった。

余った縄尻で奴隷の肩や腰の辺りを打ち叩く動作も、大分、板に付いて来た浩介であった。それは軽い打撃ではあるが、ピシリピシリと時折、行なわれる打擲の度に彼女はハッとした思い入れ宣しく身を反らしては、如何にも切なさうに身を振るその仕草が、弥が上にも浩介の心を弾ませた。

と同時に、春子自身も、自分の演技に酔っているかの様に傍目には思われた。或はその時、春子は新吉と馴れ初めた、あの当時の新宿の店での、お引き回しの事を思い出していたのかも知れなかった。

丁度、三回目が終わって二人が縁先に戻り

着いた時、新吉がズボンのバンドの間に数本の細引を無雑作に挟んで、庭履きを突掛けて降りて来た。

「引き回し止めい。来ませい！」

彼は例の命令口調でさういうと、二人に眼顔で、縁先に立てられた蒲団干用の丸太作りの横木を指示して

「これから奴隷を木馬責めの刑に処する！」

と更に無慈悲な仕置宣言を放った。一見、何の変哲もない三本の丸太を、低く鳥居状に組んで立てただけの蒲団干しが、木馬責めの道具に利用されているのに、浩介は又しても感心した。彼等夫婦に掛かっては、どんな物でも、全てが責め道具に転用されてしまいうらしい。

「掛かりましょう。奴隷の身体を持ち上げてこの横木に跨がせるんです。いいですか。野口さんは、そちらから……一、二、三！」

気合諸共、二人の男の手によって春子の身体は、いとも軽々と横木に乗せられてしまった。新吉は、すかさず腰に挟んだ細引を一本引き抜くと、横木を跨がせられた春子の両の高腿を、横木の直ぐ下の所でギリギリと三巻きして縛った。

続いて別の一本で、真直ぐに垂れ下がった

彼女の両足首を揃え、これ又、三巻きして固く縄止めし、丁度その足下に埋め込まれている鉄環に、その縄尻を通して、グイとばかりに引き絞って緊ぎ止めてしまった。この時、彼女の泥にまみれた爪先と、地面との間隔は三十センチはあって、地表に出ているその鉄環との間に、純白の細引がピンと一直線に張りつめている。

磔刑の時も、そうだったが、今度の木馬責めでも春子の全体重を支えるのは、何の緩衝も無い、全くの横木である。その痛々しさは浩介は彼女が果たしてどれ位、堪えられるだろうかと案じるのだったが、その心を知るや知らずや、新吉は

「野口さん、ご苦労様でした。お蔭で、良い木馬跨ぎをしてやれました。さぞ、奴隷も喜んでる事でしょう。奴隷の気が這入ってきますから、この俛放って置いて上体が倒れる事もないでしょう。たとえ上体が倒れても足が地面に強く引っ張ってありますから身体が横転する心配はありません。暫くこの奴隷折檻図を、廊下からも、ゆっくり鑑賞する事にしましょうよ。貴方も不馴れな事ばかりで大分お疲れでしょうから。……そうだ！ 飲物でも一つ如何です。冷たいものが何かあっ



た筈ですよ」

と呑気に、しゃべりまくって彼は、やおら台所からコーラを二本、持参すると、一本を浩介に差し出し、一本を自分がラッパ飲みに飲み干し、やれやれというように、くつろぐのであった。

それに引き換え、可哀想な春子はコーラどころではない。炎天に横木を跨がされて、今日二度目の激しい苦痛に呻き乍ら、只じっと堪え忍ばなければならぬ。彼女は顔を胸元に埋める様にして、両眼を固く閉じ、何時終わるとも知れない木馬責めの仕置を甘受し続けている。そのいじらしい迄に観念し切った姿を見ていると浩介は、彼女を力一杯、抱き締めて、心からの接吻の雨を、素肌の上に、存分に降らせてやりたい衝動に駆られるのであった。

初夏の午後の日差しが、春子の裸身に隈なく照り映えて、彼女が木馬に吊るされた姿が地面に黒く斜めに投影している。やがて彼女の肌の全てから、絶え間ない日光の直射と、折檻の苦しさとの為に、汗が一面に噴き出して来て、全身を光らせ始めた。この尽、何時迄も吊るし続けていると、体内の水分が発散し尽して、下手をすると危険な状態にもなり

兼ねはしまいかと案じた浩介は、新吉にその懸念を話すと、彼は即座に

「なあに、大丈夫です。毎々います様に、奴隷は十分に仕込んであるんです。元々子供の時から縛られて縛られて暮し続けたその上に、私と一緒にになったんです。それ以来も、お互いに性癖を良く理解し合っている事ですがよくまあ飽きもせず今日迄、春子を縛り続けて暮して来たものだと思うほどです。春子の奴と来たら、自分でもよく私にいう言葉なんです。本当に縛られる為に生まれて来た女なのかも知れないと時々この私ですら思う事がある位、縄目に強い女です。若い頃、アクロで鍛えぬかれた事が、肉体的基礎を強靱に作り上げたのは勿論です。その後ですら春子は、感心に自分で自分の身体の調節には気を配っていて、サーカス時代に覚え込んだ屈伸体操を毎日、怠りなく続けています。今朝も朝早くから、やっていましたよ。それから子供の頃、怖がっていた鞭打ちも私の教調で近頃では相当、堪えられる迄になりました。寧ろ自分から進んで積極的に練習に励むようにさえなっています。この家は、ご覧の通り野中の一軒家にも等しいんですから、どんなに大きな鞭音を立てたって何の気兼ねも

ありませんや。同じ折檻をするのなら、縄縛りと同様、鞭打ちにも強くしてやりたいと思つて、機会ある毎に打ち据えてやっています。でも鞭打ちの苦痛は縛りとは違って、それが悦虐に逆転化する程迄には未だ未だ育ってはいませんがね。そこへ行くと、縛りにかけては、全く天性の素質とでもいうんでしょうか。多分、親譲りなんでしょうねえ。私がこれでもかこれでもかと幾ら厳しく縛り上げても、こちらが恐ろしくなるぐらい我慢し通すので、何処迄が肉体的限界なのか正直のところ、私にも分からないんです。そんな訳ですからこの頃では、普通の緊縛だけではなく吊るし責めが段々多くなって来ました」

と一息に話すと、さも愛しげに木馬責めの春子を眺めて、再び語を継ぐのであった。

「実は私は、舞台の裏方の方は、今ではホンのお手伝いでして、本業は専ら漫画絵描きです。近頃、幾らか売れる様になりましたのも春子のお蔭と言っても、いい過ぎではありません。私は漫画の主人公として縛られた女を存分に活躍させた事が成功の因になったからです。私の描く絵に出て来る女は、何時も若く綺麗で、時代物、現代物を問わず、必ず縛られ、鞭打たれて折檻されています。同じ折



檻でも、鞭打ちは本では音が聞こえませんか、画面の上での効果は、それ程、上がりません。しかし縛りは違います。身体を締め上げた細引の一本一本に私なりに精魂を込めて描き上げています。その主人公のモデルが春子なのです。アパートの一間暮しの時でも、良く縛ってモデルにしました。鞭打ちと違って音に関係はなく、どんなに厳しく、どんな変わったポーズで色々な縛り方をしても他人に内証で思う存分、仕事が出来たのでした。春子にとっては、そういう具合に縛られる事が、自分の嗜好を満足させる事であると同時に、立派に仕事として、日常生活の中に重要な地位を占めているんです。ですから奴隷妻だの、嗜虐のお仕置だのという純粋なプレイ事とは別の分野として、つまり、私達の実生活を支える表向きの仕事としても、縛られ続けている訳です。私の慢画描きとしての生命が続く限り、春子の緊縛モデルの仕事も、いつ迄も続く筈です」

と話し続ける新吉の口調には、浩介の胸に迫る真情が感じられた。

「そういう意味で、私の作品は、只想像だけに頼って描かれた責め絵とは段違いの迫力があるというので、私の人気が与えられている

のです。ですから、私は春子に心から感謝していますし、これでも春子の健康を一番気づかってもらっているんですよ。野口さんが春子の身体を親身になってご心配下さるお気持は有難いと思います。が本当に、その点ご懸念には及びません。事実もう駄目な場合、私にだって一眼でそれと分かりますし、第一、春子自身はその事を一番良く知っております。春子の申し出があり次第、何時でも折檻は中止しています。プレイの演出用語でお許しという言葉を入れてあるのは実はこの限界を申告させる為の用意なんです。そういう時の必要上から私達は普段から猿ぐつわを使いません。勿論、絵のモデルの時は嵌めさせる事もあるにはありますよ。しかし猿ぐつわをして本責めにした時、万一、何かが起こった場合どうする事も出来ませんから、態と口を自由にさせてやっている訳です。それにも拘らず春子はたとえ奴隷時間でなくても、泣きごとを並べる事は先ずありません。それでも愈々堪まらなくなつて時偶、訴える悲し気な切な言葉付きが、また格別に私には魅力的に聞こえるんです。貴方も、さっき一度お聞きになりましたねえ。あの一言です。実際、春子の声の美しさと言葉遣いの淑かさは全く私を夢中

にしてくれます。本当に私は、この点だけでも幸せ者だと思っています」

新吉という男は、決して饒舌でもなく、喋り上手ともいえない方なのだが、それなりに一語一語に気を配って、訥々と述べる彼の言葉は、熱と至情が籠って、聞く浩介の胸を打った。

雲一つ無い晴天で、日影は依然として翳り無く庭一面に眩しい銀箭を射し込んでいる。春子の地面に映した黒い影法師が幾分、東に移動した様だ。びっしょりと汗を含んだ縛り縄が、春子の肉体をギリギリと締め続けている。初め高手小手に縛り上げた時には、それ程、強い縄目とも思われなかったのに、今ではその細引が彼女の肌の中に、すっかり陥没している様に縁側からは望まれた。殊に後ろ手に交叉された両手から肱に掛けての肌色の変化が、ありありと認められた。

「今日は一体どういう日だろう？ 時間吊るしばかりの責めになってしまいましたねえ。この前お見えの時も吊るしだったですねえ。でもねえ、縛り責めの中では、なんたって吊るしが一等、見応えがあつて面白いんじゃないですか。それだけに責められる方の苦痛も激しい訳です。そこに味わいが出て来るん



ですね。ところで、木馬に掛けてから、どのぐらい、たちましたかねえ？ そろそろ降ろしてやりますか。いや、その前に二、三、スケッチを取って置きましょう」

と新吉は、床の間に置いてあった写生道具を持ち出して来ると、縁側から楽しそうに描き始めた。木馬責めに苦しむ女の姿が、何枚か彼のスケッチブックを飾った頃、突然、春子の口から、悲鳴とも哀訴ともつかない調子で「ご主人様！」という呼び声が掛かった。これを聞くと新吉は、サッとブックを投げ出すようにして、『お許し』という言葉をも待たず、直ぐ様、庭に飛び降りて、木馬の横木に駆け寄ると、

「大分、疲れが酷い様だなあ。それにしても今日は酷く照ったもんだ」

と、まるで全て天気が悪い様な事を独りで口走り乍ら、手早く縄解きに掛かった。が、肌深く喰い込んでしまった縛り目が、思う様に解けないらしい。

「野口さん。済みませんが、その机の上にあるナイフを取って下さいませんか」

との依頼に応じて、浩介は眼に止まった切り出しを取ると、大急ぎで庭にとび降りたのだった。彼は、つくづくと眼前に見る春子の

その厳しい縛り目の凄まじさに今更乍ら、たじろぐ思いであった。この厳しい縄目を受けたまま、こんな暑い日中に長時間、太陽の直射を浴びて、よくも苛酷な仕置を堪えられるものだとは浩介は感心した。と同時に、この春子という女のM性向の激しさに、今更のように驚嘆と讃美を惜しまないのであった。日中の拷問台から降ろされた春子は又してもグツグツ運び込まれるや否や、神経麻痺で動きの鈍くなった両手を、懸命の努力で口から喉の辺りに当てがおうとする様子を見て取って新吉は「分かった分かった。喉が乾いたんだな。よしよし、直ぐ奴隷飲料を飲ませてやるから」

と台所から真水を大型のコップに一杯、入れて来ると、春子の口元に当てがう。彼女は待ち兼ねた身振りで、未だ自由の利かないらしい手をコップに当て、さも旨そうに一息に飲み乾した。その有様は最早、芝居ではなく本当は生理的に必要に迫られての事に違いなかった。その姿は、いじらしいという形容を通り越し全く哀れを催させた。しかし新吉の持参した「奴隷飲料」が単なる真水であったのが浩介には、せめてもの事の様に思われた。

「どうしましょう。一休みして次の仕置に掛

かりますが、貴方のご希望があれば、なんなりと、ご注文下さい。折角お呼びしたお客様ですから、出来るだけサービスするのは奴隷として当然の事です。今日の奴隷時間は、相談づくで四時間と決めてありますから、まだまだ時間は、たっぷりとあるんです」

と、尚も奴隷折檻を続けようとする新吉の言葉に、浩介は恐れをなして

「待って下さいよ。私はもう堪能しました。それよりも、奥さんがお気の毒で見えられないんです。本当に私へのお勤めとしてなさるのでしたら、私は今日はこれで充分です。

これ以上、奥さんを苛めないで、置いて下さい。折角のご好意に反するようで相済みませんけれど、所詮ぼくはサディストにはなりきれない事が思い知らされた様な気がします」

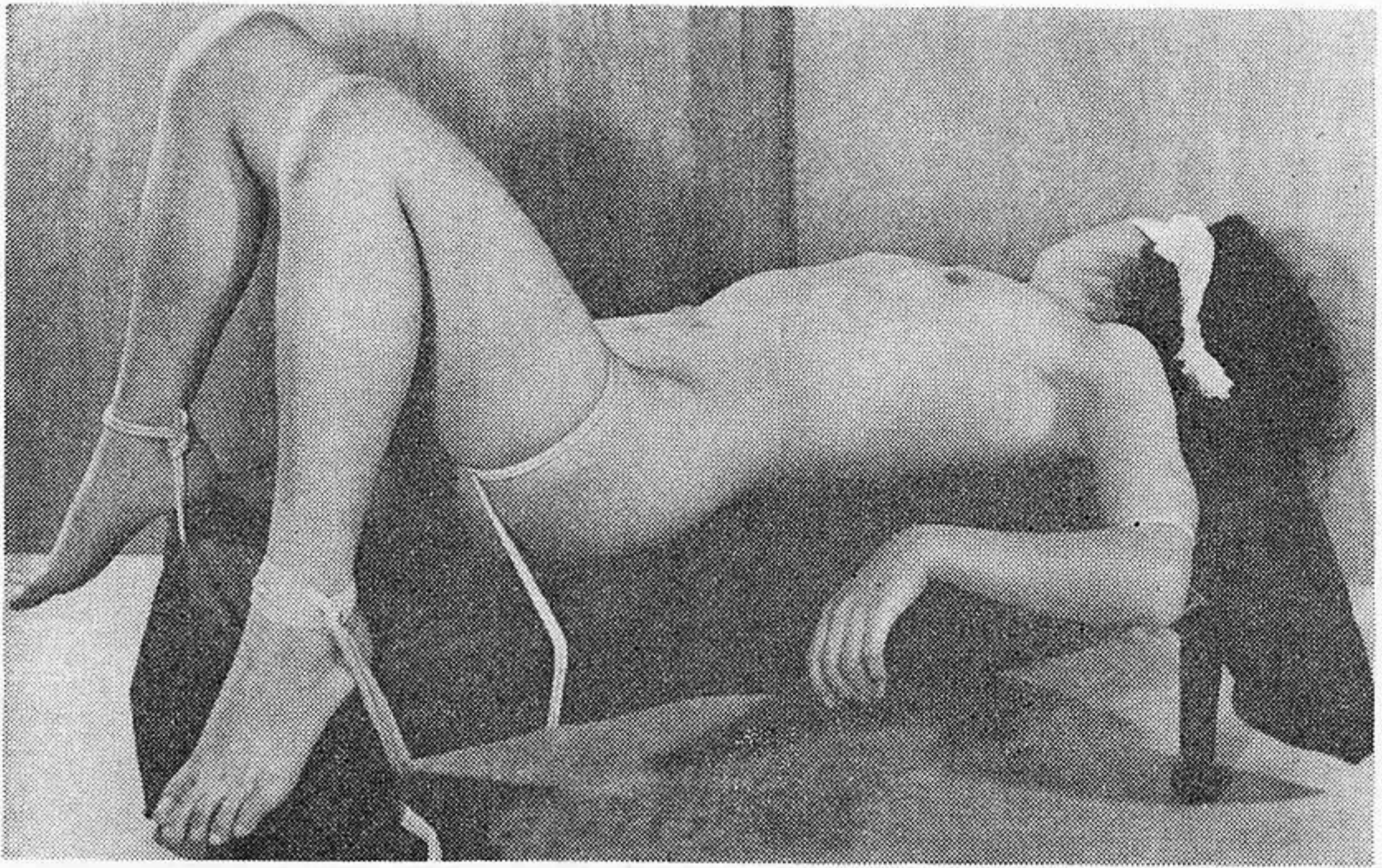
とすっかり弱音を吐くのを、新吉は受けて「いやいや、強いてとは申しません。プレイ

とはいえ、街中のショーとは大体、性質が違いますから、ご覧になる方にも刺戟が強過ぎるのかも知れません。それでは、これから私達二人きりの、いつものスレーブプレイに戻りますから、ご安心下さい」

と答えて、微笑するのだった。

——(つづく)——





# <告白>

~~~~~〔読者原稿〕~~~~~

S M プレイメイト

水川那美子

私は七月号の読者通信に出していただいた水川那美子です。あの通信を書きましたときは、そうでもなかったのですが、いざポストに投げ入れるというときには、胸がドキドキしました。

それが七月号の読者通信欄に活字としてのせていただいたときはこれが自分の書いた文章なのかと驚いたほど立派な文章になっていました。それから、名古屋に住むAさんと知り合いS Mプレイメイトとして、おつき合いすることに

なりました。

筋書き通りに文通しているうち、喫茶店で一緒にお茶を飲むようになり楽しい休日をごすようになりました。これも読者通信に私の便りをのせていただいたおかげだと、大変ありがたいと思っています。

十二月号の読者通信にも書きましたように先日、とうとうS MプレイのようなことをAさんと、やりました。私がAさんに縛られたのです。Aさんは、そんなことが好きだったし、私も好奇心があったので、思いきってやってみたのです。

Aさんは中学校のときから写真をやってい

たとかで、縛った私を写しました。私は素裸になって縛られてもいいけど、目かくしだけはしてネ、とお願いしてタオルで目かくしをしてもらいました。ライトをつけて写しましたので写真は大変きれいに、とれたと思っています。

何か文章を書いては、と、Aさんに言ってみたんですけど、僕は、とても駄目だということなので私が代りに書くことにしました。そうでないと、このままでは、折角、読者通信のおかげで、こうしてS Mプレイメイトとして、お友達になれたのに、何もお返しができなくなってしまうからです。

十二月号の読者通信に出したお便りのお返事をいただきましたが、編集部の方のお話では、貴女のように気にして下さる方は、ほとんどありません、ということでした。必ず書きますから——と言っておった人でも大体は書いてこないとのことでした。

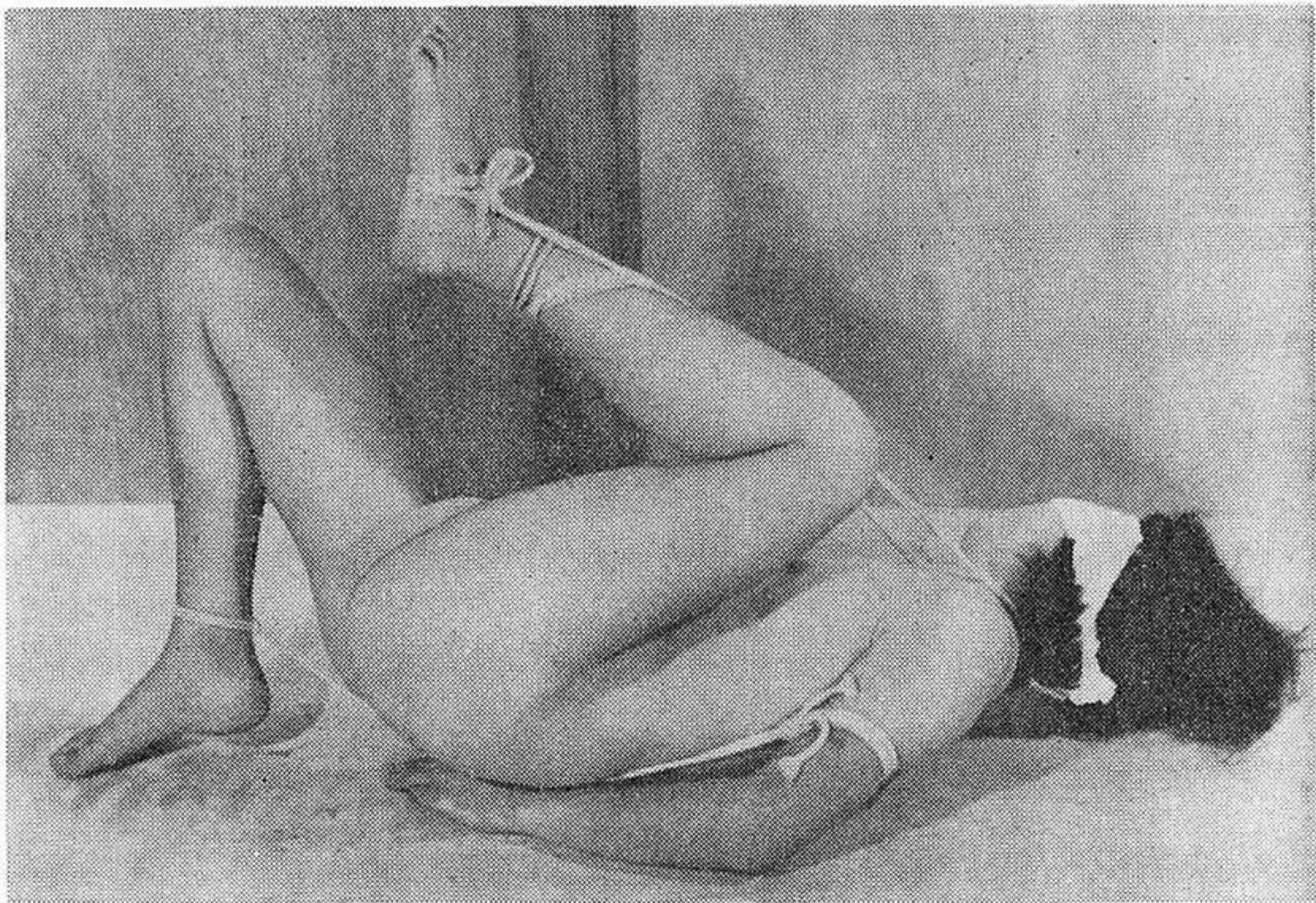
私は文章は決してうまくないのですが、こうして立派にプレイの写真もできたことですから、曲がりなりにでもレポートを書いて、読者の同好の方々に読んでいただくと共に、また親しくなれたら嬉しいと思います。

奇クの誌上には、沢山の女性の方が文章を

お書きになっておられますので、それらを読んで、お手本にさせていただこうと思いましたが、どれもこれも立派ですます自分の力のなさが痛感されてきました。

Aさんと私は文通をし、それから三回ばかりデートをして、先日、とうとう待望のS Mプレイをしました。そのときまでのことを書こうと思うのですが、何から書いていいのやら、とにかく、緊縛プレイをやったことは確かなのですが、どこから、どう書いていいのやら、文章というものは、本当にむづかしいものだと、つくづく気が、つきましました。

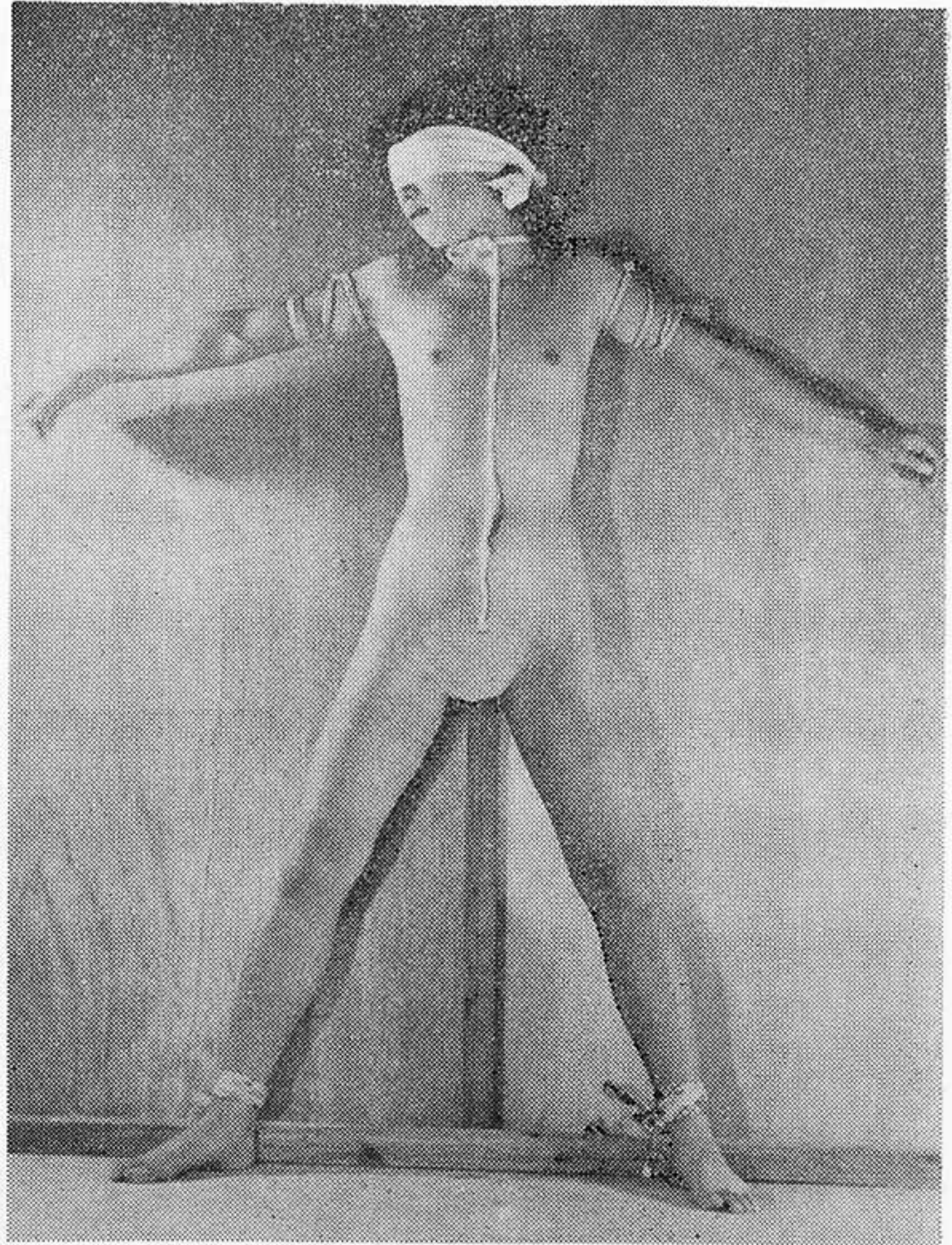
プレイをしたのは10月8日の日曜日で、私が裸になっても余り寒いとは感じませんでした。といっても、私がすぐにAさんの前で裸になったのではなくて、さんざん駄々を



こねて、Aさんをしてこずらせた上なのです。あとで考えてみますと私が裸になるのを恥かしながら、イヤイヤをしたことは楽しい思い出となって胸の中に残っています。

私が今思い出してもあの日のことは、甘く切なく心に温まっています。Aさんは、そのことについては何も言われませんが、私にはわかりませんが、私と一緒にではなかったでしょうか。Aさんは、余り口かずの多い方ではないので、いろんなことについて、私にも喋ろうとはなさいません。

こうして、Aさんとお知り合いになれたらこのまま二人の楽しいS Mプレイを、そっとしておいてほしいという気持ちも強いので、もし、そうだとしたら、奇クという雑誌を読んでもおられる沢山の読者の方には大変申し訳な



いような気がします。自分たちだけさえ良ければ、それでいいのさ、という考えもありますが、みんなが、そんな考えでばかりいたら奇クの誌上も賑やかにならないでしょう。

Aさんにしたら、私がAさん以外の読者の方と文通したり、ましてやデートしたりすることは、きっと好まないでしょう。私にしま

しても、身体は一つなのですから、そう毎日手紙のお返事ばかりも書いておれませんし、また第一、気の向かない方に対しては、一行の手紙だって書く気もしません。女性にとっては、あれもこれも、という気には、なかなか、なりきれないのです。何人もの方々とデートするなんて考えられませんし、デートするとしたら当然、S Mプレイにまで進展するでしょうから、身体がいくつあっても足りないという結果になってしまいます。

でも、私がAさんのような方とお知り合いになれたということとは幸せだったと思わなければならぬでしょう。お互いに、男性と女性がS Mに関心があるというだけでプレイメイトになれるなんて、考えられないからです。これは、読者通信でいただいたお手紙を読ませてもらったことで、心にしみてよくわかりました。これは、一方が男であり片方が女であるから、すぐ結婚できると思うのが誤りであるのと、同じだと思います。

なんだか、読者通信を書いているのと同じような文章になってしまって申しわけありません。私の勤めておりますところは自動車製造工場で、日常、文章を書くことになんか縁がございません。それで、なんだか、お便りを書いていいのか、報告書を書いているのかさっぱりわからないことになってしまいました。たが、私の知り合ったプレイメイトのAさんとのことを書いてみます。

Aさんと一緒に喫茶店でコーヒーをのんだ事など、平凡でうまく私には書けませんので初めてプレイした日のことを書いてみます。

前からAさんの建てていた平家が落成したので、そこでプレイをしないかと言っていましたのに、私も賛成したのです。ホテルへ二人で行くのは、どうしても気に入らなかったからです。

前の日にはお風呂へ入って全身をよく洗い手足の爪も切り揃え、下着も全部、新しいものに替えてゆきました。お化粧といっても別に平常から、何もしておりませんでしたから、素顔に化粧水とクリームを塗って拭っておくくらいのものでした。

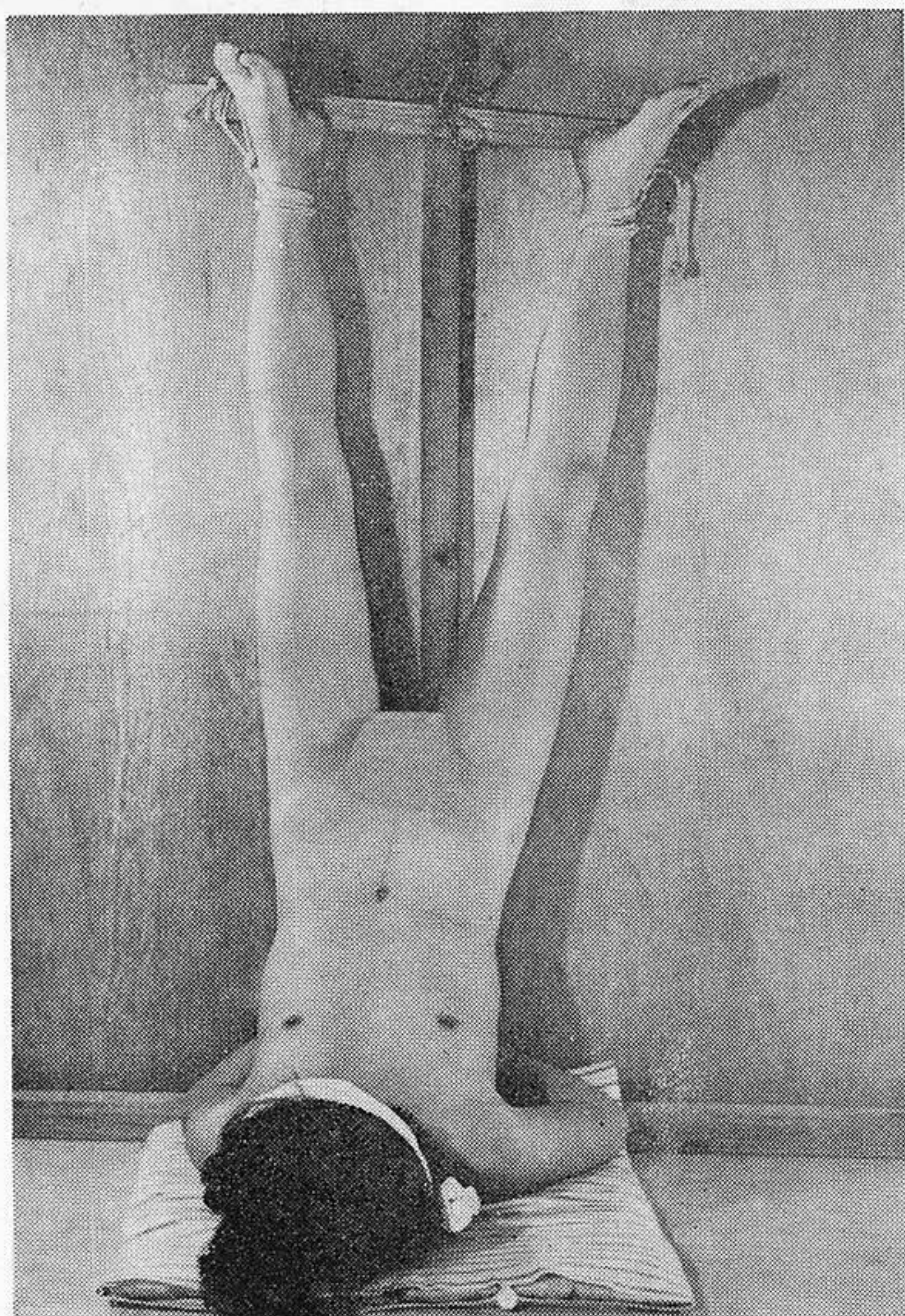
Aさんは素裸になるよう、しつこく要求しました。私は自分のお乳がぺしゃんこなので

ブラジャーとズロースだけは、つけさせてほしいと頼みました。そのかわり、縛りの方は貴方の好きなようにしてもいいわ、と言ったのですが、彼は、「僕は奇クの人のように、うまく縛れないので、せめて貴女の美しい裸をうつしてみたい」と言うのです。

私は何度も何度も、お断りしたのですが

熱心に希望されるAさんに、とうとう根負けして、彼の言う通り素裸になってブラジャーもズロースもとられてしまったのですが、目かくしだけは、してもらいました。生まれて初めて男性の目の前で素裸になるのは、ほんとうに恥かしかったのです。

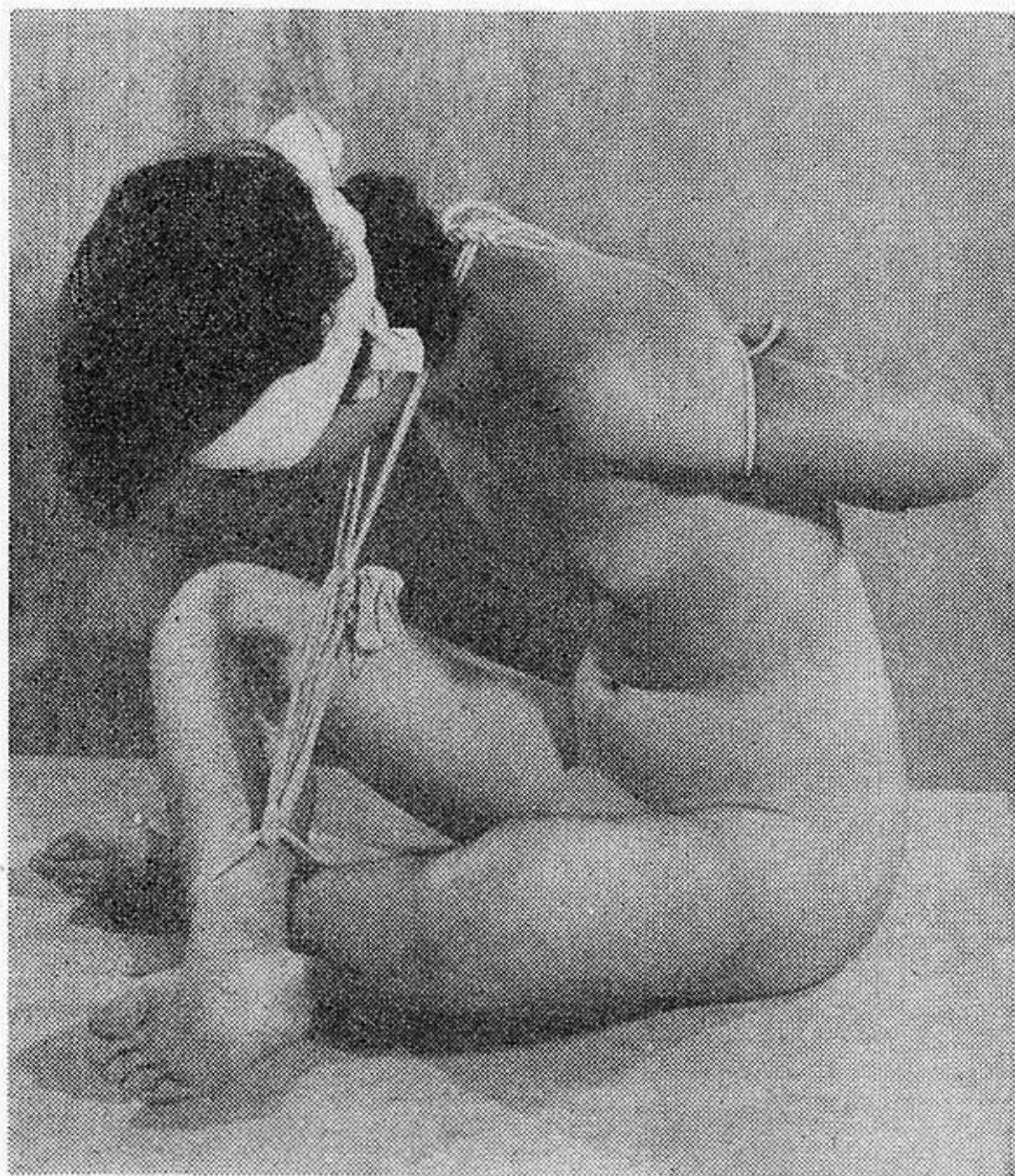
お風呂へ入るときに裸になるというのは、



なんともないのに、こんな、がらんとした何も身をかくすことの出来ない部屋で素裸になるということは、足踏みしたいような恥かしさなのです。それでいながら、その恥かしさというのが、不愉快な思いでもないのですから、これもS Mというもののなかでしようか。

Aさんは荒物屋の店頭にぶらさげてあったのを買ってきまして、白いロープを持ってきていました。その細くてよく締まる縄で私は後手に縛られました。私は自分の裸を、じろじろと眺められるのが恥かしくて、早く、いろいろな縛ってほしいと思いました。

でもAさんは、ああでもない、こうでもないと言われ、首をかしげたり、縛っていて途中で解いて、また縛り直したりしました。やっと縛り終わるとタオルで目かくしをしておいて写真をとったようです。目かくしをされて、廻りが見えなくなると、自分が素裸で縛られているだけに大変、不安な気持ちになります。



Aさんの縛り方そのものは、特別にきついというものではありませんでしたし、身体がそのために痛いというようなことはありませんでした。でも、私にしては、生まれて初めて素裸にされて縛られたのですから、不安と期待の入り混じった妙な気持ちでした。

縄で縛られるということが、女性の気持ちを

か。

特に痛いことをされたいとか、きつく縛ってほしいとか希望される方なら別ですが、普通の女性だったら、軽い縛りでも十分、刺激を受けると思います。S Mといっても、多分に心理的な面が多いと考えます。

私の場合、縛られた自分の素裸の身体がA

こんなにも変わらせるのでしょうか。好奇心から一度S Mというものを経験してみたいと思っていたのですが、実際に縛られてみて、予想していたよりも刺激が強いのは驚きました。といますのは、縛られることが肉体的に苦痛であるというようなことではございません。

それはもし、緩い簡単な縛り方であっても、きっと若い女性の方でしたら、変な気持ちになれることと思います。私の場合目かくしされていたので、一層そんな気持ちになったのかもしれませんが、S Mに関心をお持ちの女性の方は、勇気を出して縛りを経験されては如何でしょうか。



屋台裏の妖精

予世場 良三

客を待つ時間。それは彼にとって「楽しみ」の時間である。屋台の裏側に隠れるように腰掛けた膝の上に、懐中電灯を点ずれば何時でも照らし出せる裸女が居るからである。しかも、彼女は後手に縛られているのだ。いかにも柔らかそうなふくよかさに満ちた若々しい肌が、深く喰いこんだ縄によって幾つかの小山を増して、差し向ける光を艶々しく反射するのである。

彼は、そのヒンヤリと、ツルツルした肌を掌で撫ぜながら、次々と思い浮かんでくる「愛の責め」のアイデアに、この縛られた美女が表現するであろうところの反応を予想するだけで、いいようなないピンクの雲に包まれた想いになれるのだった。ふと気がつくとな彼女の代りに顎を反らし肩をよじって身悶えつつ、のどの奥で呻いている自分を発見する。エエイ、呻くのはおまえだ！ と、膝からズリ落ちそうになった緊縛裸女を引き上げ、その艶肌に、ちょっとキスをして、ひっくり返す。

と、電灯の丸い光の輪に浮かび上がった

のは、同じく後手に縛られてはいるが、顔立ちも体付きも異なる別人であった。見事なスリ替りである。だが、この交替裸女もまた素晴らしいセクシャル美女で、厳しく掛けられた縄目を楽しむかのように、誘いかけるが如き全身の表情は、何ともいえない妖艶さで彼の心を縛り上げるのだった。

スリ替る美女の数は豊富だ。彼が逆に責めつけられる想いがする程、若い生理の循環でフラフラッとするまで、次から次へと縛られた裸身が迫ってくるのである。

彼は、先月、客の一人が置き忘れていったらしいこの奇クなる裸女の妖美収容書によって、楽しい時間を見出すようになってから、生きる為だけの生活の中に潤いを感じとれた思いだった。何か将来に希望の灯が見えた気がしたのだ。それは一時のステバチ的な心のすさびと比べ、我ながら不思議だと思ふほどの変わりようだったのだ。「ちょうだいナ」と、ノレンをはねたのは上得意のホステスさんだ。もう、終電間近の時間らしい。彼は、勢いよく返事して立ち上がる時、美女たちを屋台のネタ棚のスキ間に押し込んだ。

ラーメンを盛りつける彼を見詰めるホステスの眸が、なぜか潤んでいるようだ。

さんに見つめられている。カメラで自分の縛られた身体が今、うつされていると思うだけで、全身がぞくぞくして変な気持ちにおそわれました。きたない話で失礼ですが、小水へ行きたいような、脇腹のところに虫が這っているような妙な気持ちでした。

Aさんは、盛んに自分は縛り方が下手なので、と言いわけをしておられました。目かくしをとられたとき見ましたら、額にべっとりと汗をかいていました。部屋の中は、そう暑くもないのにと思いました。きつとAさんも一生懸命になっていたのでしょうか。

目かくしをするときなど、私の頬のところへ、「はあ、はあ」と熱い息を吹きかけていましたので、興奮しているのが、よくわかりました。

写真を見せてもらったとき、きれいにうつっていると思いました。そして、その日のSMプレイのことが楽しく思い出されました。奇クを読みだして、まだ、やっと一年少しという私が、こうして、Aさんというプレイメイトと知り合いになれたということは、奇クのおかげと心から感謝しております。



△短篇創作▽

白い霧の戦慄

藤見郁

ゴルフ場を出てから十五分と、たたないうちに社長は、もう眠っていた。

車は快適なリズムで、ドライブコースの白い舗装道路を走っている。左手に秩父山脈の稜線がみえる。そのなだらかな尾根は、たそがれの気配に溶けこむように、秩父の空の淡い色彩と重なりはじめていた。

この調子で走りつづければ、二時間とすこしで東京へ帰れる。暗くならないうちに渋谷の本社へ到着するように、運転手は社長から命令されていた。

しかし運転手は、格調のある正確なハンドルさばきで、けっして急ごうとしなかった。

「空が曇ってきましたね」

バックミラーに視線をやり、運転手は背後のシートに、ふかぶかと尻を沈めている社長に声をかけた。しかし、かなり深く眠りこんでいるらしく、社長の返事はなかった。

「社長」

運転手は、前よりも高い調子で、もう一度声をかけた。

顎をふとい首のなかに埋めたまま、社長は

目をどじている。

この瞬間、運転手は決意した。ハンドルを左に切った。車はハイウエーをはずれて、山間地帯へむかう、やや細い道路へ沈みこむようにして、はいった。行きかう車の数が急にすくなくなる。のぼり坂になって、カーブが多くなり、道は次第に、せばまってきた。

運転手は、左耳の周辺から喉へかけて、かなり目立つ赤黒いアザをもっていた。そのアザをかくすように、左の頬に髪の毛を長く垂らしていた。アザのなかに白く濁った、ひきつれの部分があるのは、整形手術に失敗したあとの、なごりであった。

進むにつれて、山が眼前にせまり、高さを増してくる。

「社長」

車がゆれた拍子に眉毛の前へかぶさった髪の毛を、白い指で払いながら、運転手はまた声をかけた。

こぶとりのからだを、ややななめにしてシートへ埋め、社長は心地よさそうに、まだ眠っていた。

「社長」

運転手は、やや大声をだした。

はじめて社長は両眼をひらいた。視点の定

まらない赤い目で運転手の背中を眺め、それから、ゆっくりと口をひらいた。

「なにか言ったかね」

不機嫌な口調だった。居眠りの最中に運転手から気軽に声をかけられたことが、彼のプライドを傷つけたらしい。

「外をあらんなさい。いい景色ですよ」

運転手は、社長の機嫌にかまわずに、やや粗暴な感じでいった。

「眠いんだ。すこし、黙っていてくれ」

社長の声が、やや荒くなった。が、目を窓の外にむけると、すぐに不審を顔にあらわして運転手にいった。

「おい、ここはどこだ。道をまちがえたんじゃないのか」

鬱蒼として重なりあい、青黒いかたまりとなった樹林が、車の左右にあった。道は舗装されていない。

「これで、いいんです」

運転手は冷静に、こたえた。

道は、いよいよ、せばまり、車はおろか人の姿も見えなくなった。樹林が、ふいに切れると左右は崖になり、その崖際に、葉の固そうな灌木が密生した、いかにも山間らしい、さびしい道になった。

「どこへ行くんだ。おい、きみ」

はっきり目をさますと、社長はあわてて半身を前にのりだした。

「じつは、おりいってお願いがあるんです」
両手で軽くハンドルをにぎり、前方をみつめたまま、運転手がいった。

「お願い？　そんなものは、あとでゆっくりきいてやる。すぐ道を、ひき返すんだ。今夜八時から、カナダ国際貿易の社長と重要な商談がある。きみだって知っているだろう」

「知っています。私は、あなたのお抱え運転手ですから」

「おい、ふざけるな。もとの道へひき返せ」

社長は、怒気をふくんだ声で命令した。

「ですから、私のお願いをきいてください」

社長の怒気は、かなり真剣なものだったが運転手は表情を変えなかった。スピードを時速三十キロほどに落としていたが、車はなんのためらいもなく、山奥へと突き進み、社長の表情を、こわばらせた。

東京への帰路とは、かなりちがう方向へ走りつづけているのだ。

「おい、どうしたというんだ、きみ」

社長の瞳の色に不安があらわれ、運転手をなだめる声になった。

「きみはこの二年間、わたしの乗用車の誠実な運転手だった。事故をおこしたことは一度もない。慎重で正確な運転をする。わたしはきみを信頼している。だから報酬も、わが社で雇っている、ほかの運転手の二倍もだしている。給与に不足はないはずだ」

最後は、やはり社長らしく、ねじ伏せるような言い方になった。

さえぎるように、運転手はいった。

「給料に不足はありません。お願いというのは、お金のことではありません」

「それじゃ、なんだ」

社長の語気が、また荒くなった。

「私を抱いてください。私は前から社長が好きだったんです」

社長に背をむけたまま、運転手は冷静にいった。なにかを計算しているような、ためしているような口ぶりだった。

社長の瞳孔が、ひらきっぱなしになり、むしろ幼児のように澄んで、運転手の後頭部をみた。しかし、その幼児のような、おどろきの瞳は怒りのために、すぐに濁った。

「なにを言うんだ、バカな。こんな山の中に連れこんで」

「山の中へやってきたから、お願いするんで

す」

「わたしは、きみをそういう目で見てはいない。きみは、わたしの車の運転手だよ。二年間、無事故で、わたしに一度も不安や恐怖をあたえたことはない。りっぱな運転手だ。わたしは、きみに感謝している」

「運転手ですけど、私も女です。社長のような、りっぱな男性に抱かれたいと思うのは当然でしょう」

運転手の顔が、白く光った。左の耳の周辺から喉にかけてのアザは、逆に濃さを増して黒ずんだ色になった。

「バカな。冗談は、やめなさい」

困惑の色が、社長の表情に走った。

「社長さん、私を抱いてください。抱いてくれないければ、このまま車を走らせます。東京からは、ますます遠くなります。それとも、顔にこんな醜いアザのある女を抱くのは、いやですか。でも、私、からだのほうは自信がありますのよ。私を裸にしてごらんなさい。どんな女の人とくらべても負けませんわ。色は白いし、皮膚はなめらかで、ほどよく肥えていて、きっと社長さんを満足させますわ」

道が極端に悪くなった。

石塊の上に、のりあげたらしく、車が大き

くバウンドした。めったに車の通らない道にはいりこんだに、ちがいない。

左側を見おろすと、削りとったような深い断崖であった。右側も崖で、車窓すれすれに赤い岩肌がせまり、見あげると、その上に原生林のような濃い色の葉でおおわれた樹林がかぶさっている。

「おい、もどしてくれ。車をもどしてくれ」

社長は、悲鳴に近い声をあげた。身をのりだし、運転手の肩をつかんだが、汚いものに触れたように、あわてて放した。

「とめてくれ。おい、車をとめろ」

恐怖が社長を襲った。彼は車を運転する技術を、まったくもっていなかったが、運転手の腕の自由を拘束することが危険だということとは知っていた。

運転手は、車をとめた。

そして、ドアをあけ、おちついた動作で車の外へでた。雑草の生い茂った、すこしばかりの平地が、岩壁のくぼんだ右側にあった。

運転手は、おし黙ったまま、その草むらをめざして歩いた。

社長が、よろめくような足どりで、車からおりた。ポケットからハンカチを取りだすと不安を払いのけるように、顔じゅうの汗をぬ

ぐった。それから、怒りと困惑と不安のいり混じった青い顔で、運転手の白い顔を、にらみつけた。

運転手は、草を踏みしめて立ちどまると、社長に背をむけたまま、紺色のブレザーコートをぬいだ。つぎに肩をかがめると、立ったままクリーム色のスラックスをぬいだ。

ブラウスをぬぎ、最後に残ったブラジャーとパンティを手早く、とりのぞいた。

背景の赤い岩壁から浮きでたように皮膚の色が白く、胸も、腰も、胴のくびれも、脚の長さも、たしかに若く、美しく、官能的でさえ、あった。社長は当惑し、おびえたようにその場に立ちすくんだ。

風がでて、崖の上に密生している樹々の葉が、ざわめいた。風にひるがえった葉の裏が目にしみるほど白い。

靴と腕時計だけを残して、すべてをぬぎ終えた運転手は、挑戦するように社長の前へ裸身を、さらした。

「どうぞ、社長さん。一度だけでいいの、私を抱いてください。一度だけで、私は満足します。あとでうるさく、まといついたりしません。社長さん」

運転手は、舞台の上の俳優のように、ここ

ろもち首を左へかたむけ、コケティッシュな微笑を送った。唇が小さくひらき、白い歯がみえた。アザとひきつれは髪の毛にかくれて見えない。

「きみ」

ことばをつづけようとしたが、運転手の肌の色の光るような白さに圧倒されて、社長はそのまま息をのんだ。

「もし抱いてくれないのなら、私は車を運転しません。もうすぐ暗くなりますよ、社長さん。夜になってしまったら、この山の中からぬけだすことは、ちょっとむずかしくなります。もっと寒くなって、凍え死ぬかもしれません」

せんわ」

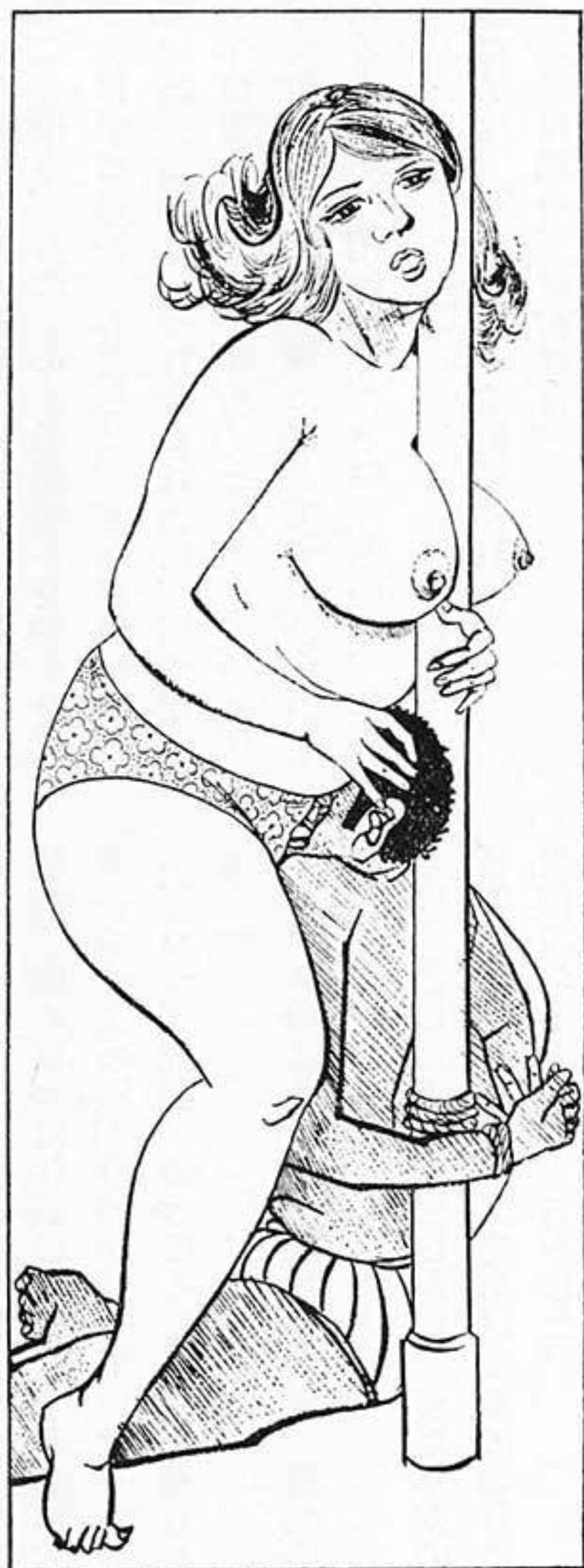
「しかし、きみ」

運転手との距離は、わずか三メートルほどだったが、社長の足はそれから前へ出なかった。毒虫にでも刺されたように、社長の顔は醜く、ふくらんだ。

「一度だけでいいんです、抱いてください。寒いわ、早く抱いて」

運転手は草の上に静かに腰を落とすと、あおむけになって寝そべった。それは骨のない人間のようにやわらかく、女っぽい動作だった。

「やめてくれないか、きみ」



イメージギャラリー

『生殺与奪の権』

仲乃 ハルミ

男盛りの社長の顔が、赤黒くふくらんだまま、内気な少年のように、おびえた。

「いくらなんでも、こんなところで、きみ、無理だよ」

なにかにすがるように両手を前へのばし、哀願に近い声になった。そして、うめくように彼は、いった。

「だめなんだ」

「どうしてですか、私が嫌いなんですか」

運転手は、あおむけになったまま、両膝を立て、脚を左右にひらいた。それは、むしろ優雅な動作だった。

透きとおるように白い内腿の筋肉が、やさしくふるえた。恥毛は少女のように淡く、清潔な感じすらした。

「靴は、ぬいだほうが、いいかしら」

運転手は、風にゆれている崖の上の樹林を眺めながら、つぶやくようにいった。

社長は、こたえなかった。首を強く、横にふった。

こんなバカなことが現実におこってたまるもんか。これは夢かもしれない。悪夢に、きまっている、というように、つづけて、また首を横にふった。

「私が、嫌いですか」

運転手は、かさねて、きいた。

「嫌いではない。嫌いだったら、高給をだして二年間も、わたしの車の運転手をやらせておくはずはない。わたしは、きみが気にいっている。しかし、それとこれとは、べつだ」
「べつでもかまいません。とにかく、ひとりの女が、こうやって裸になって足をひらいているんです。抱いてください。寒いわ、抱いて——」

「だめだ。不愉快だ。やめてくれ」

社長は顔を、そむけた。

運転手は、さらに足をひらき、腰を浮かせるような淫らな動作までした。恥毛が風にゆれた。

だが、社長は顔を、そむけたままだった。

運転手は、さぐるような目で社長の反応を凝視した。深い絶望的な悲しみが表情に刻まれ、運転手の顔が透きとおった。肉体も白い艶を失って、透きとおった。

運転手は、やがて、からだを起こし、立ちあがると、さっき皮膚から剥いだものを着はじめた。パンティ、ブラジャー、肌着、スラックス、ブラウス、ブレザーコート。

全部、身につけ終わるまでに三分と、かからなかった。

運転手は、肩と背中をまるめて車にのりこ

むと、ハンドルを握った。彼女の髪の毛に、枯れて固くなった化石のような木の葉が、しがみつくように、ひっかかっていた。

「どうぞ、社長、のってください。帰りましょう」

ガラスのように、透明な表情で、運転手はいった。

ほっとしたように、しかし、まだ不安の残る表情で、社長はドアをあけて車にのりこみ後部のシートに腰をおろした。

「いまのことは、なかったことにしよう。ねえ、きみ」

なだめるように、社長は運転手の背中にいった。髪の毛にひっかかっている赤い枯れ葉をとってやろうとして、彼は手をのばしたが、すぐにおびえたように、その手をひっこめた。

運転手は五メートルほど前方へ車を前進させ、それから、いま彼女が全裸で寝そべった場所へバックさせた。

巧みにハンドルを切って方向を変えると、さっきのぼってきた、せまい山道を、こんどは、おりはじめる。

右側になった崖の下谷底から、濃い霧が

渦を巻くようにして強く吹きあげてきた。

いつのまにか太陽が落ちて気温がさがり、急に冷えこんできた。運転手はヘッドライトをつけて、のろのろと車を走らせた。粒のあらそうな白い霧が道にあふれ、生きもののようにひしめき、うごめいている。

「社長」と、運転手がいった。

「秘書課の稲田乾二さんを社長が愛していらる、という噂は本当だったんですね」

社長は黙った。

その沈黙は、肯定を意味しているように、運転手には思えた。さっきとは異質の緊張した空気が、せまい車内に張りつめた。

「社長は、やっぱり女を愛せないひとだったんですね」

重い声で、運転手はいった。

社長の沈黙は、つづいた。

「社長が同性愛者であろうと、マゾヒストであろうと、私はかまいません。けれど、稲田さんを愛するのだけは、やめてください」
「なぜだ」

と、社長は暗い卑屈な瞳の色で、さぐるように低くいった。

「稲田さんは、わたしの恋人なんです。稲田さんと私との関係は、ちょうど一年間つづい

ています。あなたと彼との関係は、三カ月前からだそうですね」

ひとかたまりの濃い霧が、また谷底から舞いあがってきて、襲いかかるように車を包囲した。

その霧の群れをヘッドライトで突き刺しながら、押し分けるように、運転手は用心ぶかく車を進めた。

「おれのいうことをきけば課長に昇進させてやると、あなたは稲田さんにおっしゃったそうですね。古い手だわ。だけど、彼はその卑劣な誘惑に負けてしまった……」

「そうか、稲田の女というのは、きみだったのか」

社長は苦笑した。苦笑するだけの余裕が生まれていた。

どんなむずかしい問題も、鍵さえあれば解ける。

この女の不可解な行動も、理由さえわかれば不可解でなくなる。

「きみは、そんなことを根にもって、わたしを脅迫したのかね」

「そんなことですか？ 私にとっては、稲田さんは、たったひとりの男性なんです。こんな醜いアザをもった女を、あの人は心から

愛してくれましたわ」

「そうかな。稲田君は、もういまの女には飽きたと言っていたぞ」

社長は冷笑し、腹をゆすりながら、改めてシートに尻をおちつかせた。

彼女の瞳がキラリと光った。

こわばった表情が、更に凍りついたように白く冴えた。

残酷な言葉だった。

彼女自身、彼の心の変化に気づきはじめていたのだった。

三日前に、彼女は稲田を喫茶店に呼びだして詰問した。

あなた、もしかしたら、私に飽きたんじゃない？ 社長に、とくべつにかわいがられて

いるって本当？

そんなことはないよ、と彼はあわてたように否定したが、目をそらし、コーヒーには口もつけなかった。

男同士の肉欲だけの世界におちこんだ卑猥なかげりが、稲田の表情に色濃くよぎるのをたしかめて、彼女は、ほとんど絶望したのだった。

課長に昇進、という餌に釣られただけでなく、稲田には、やはり同性愛者としての素質

があったのだろう。

気が小さいくせに好奇心が強く、官能的な誘惑に溺れやすい男だった。一年前、江の島のモーターへ、はじめてふたりで泊まったのも彼女が誘ったからである。

「社長さん、稲田さんと別れてください。お願いします」

運転手は、ハンドルを握りしめ、祈るようにいった。

「私に返して！」

社長は沈黙したまま、窓ガラスにぶつかってくる濃い霧をながめていた。もとの傲慢な表情にもどり、やがてまた居眠りの姿勢をとって、軽く目をとじた。

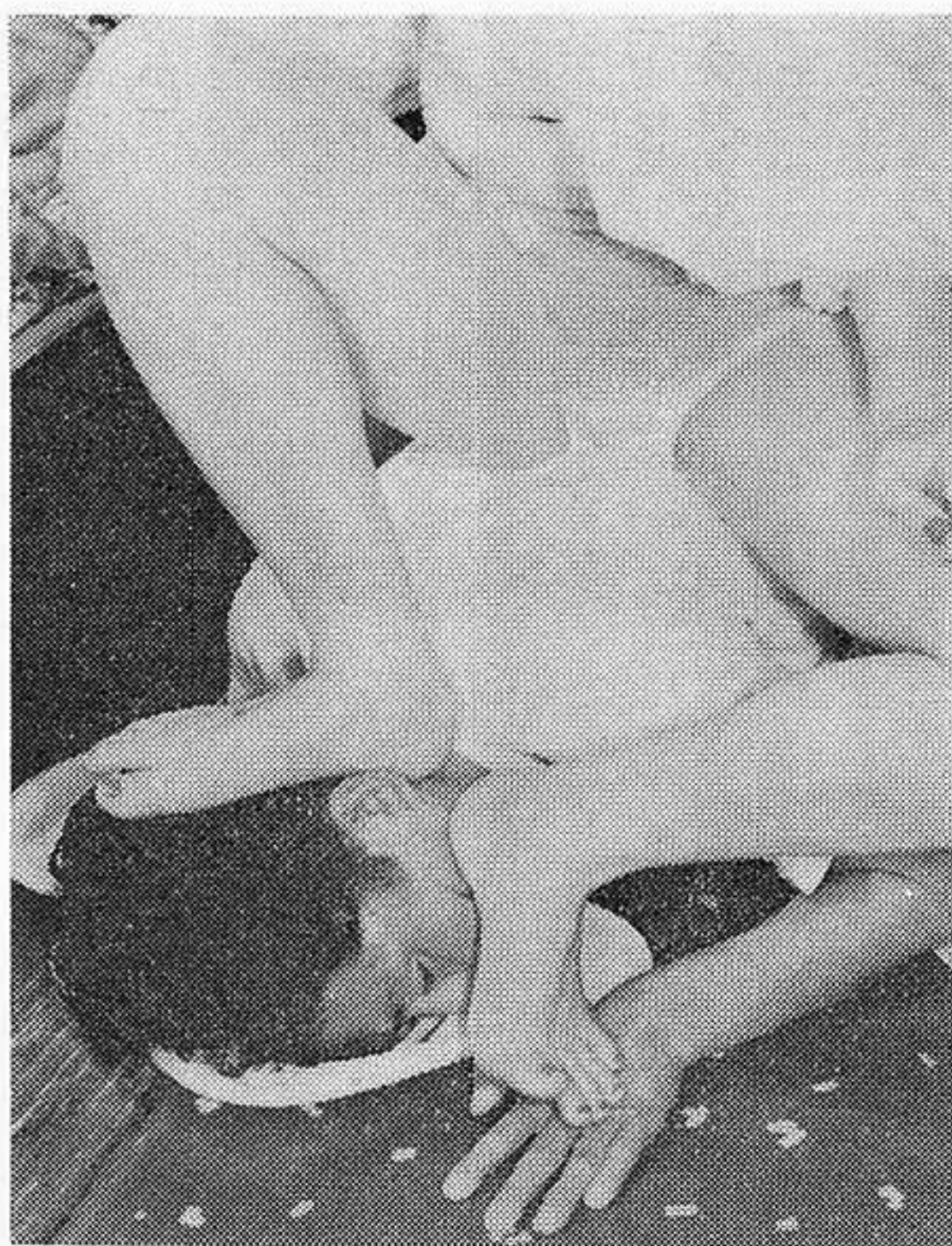
彼は、彼女の運転技術を、高く評価していた。

運転手は、拒絶をさとした。予期していたことでもあった。

彼女はアクセルを踏んだ。

腰を浮かし、上半身でハンドルにのしかかると、大きく左に切った。

崖の下から絶えまなく湧きあがってくる濃霧のなかへ、目をとじて車を突っこんだ。



ハプニング

世界一の大都市、東京。

この広い東京では、我々のうかがい知れぬことが諸所で起こり、ますますエスカレートするであろう。SMの世界でも、銀座のどまん中や、六本木、新宿あたりで、我々の想像以上の多彩なプレーが行なわれているかもしれない。いまや国際都市、東京には国籍不明の人種が、ウヨウヨうごめいている。実際に

連載・アブ紳士行状記

M 派 交 友 録

△プペの人々▽

鬼 山 絢 策

は、もちろん国籍は、ちゃんと決まっているのだが、その血から見ると不明である。例えば兄は日本とニグロの混血、妹はフランスと

交の方が主だとすると、私には興味が極度に薄らいでしまう。

日本の混血という兄妹に会ったが、妹の方は果たして日仏のハーフか、母親が日本人だから半分は日本人だが、あとの半分はフランスだか、プエルトリコだかイタリヤだか分からないと本人は言っている。彼等は六本木のあ

立川の米軍相手のバーで、米軍の兵士達が日本人のホステスに、日本人の客のっている前でフェラチオさせた。日本人の女性は二人の白人兵に代る代るフェラチオした。これを見た私の友人は国辱ものだと言ったが、私はその話を聞いて、Mの昂奮を覚えた。

るマンションで白、黒、黄、犬の集団SM乱交シヨウをやったと言うが、どこまで本当か分からないし、SMはつけたりで、やはり乱

男性が女性を辱かしめるSの行為に、M派の私が昂奮するのは矛盾しているように思われるが、この場合は国と国という立場で見た

のである。日本人の男性が傍で、それを見ていて、どうすることもできない。そのバーは米兵が常連であって、日本人は場違いの客だから、小さくなって飲んでいなければならずホステスも、ふりの日本人の客など、ろくろく相手もしてくれないのである。蔭で憤慨してみたってごまめの歯ざしりである。

東京に数多くあるバーの中にも、おさわりバーからゲイバー、座位セックスバー、SMバーと、いろいろあるが、渋谷の狭く汚い恋愛横丁は広い東京の片隅の、ほんのささやかなバー街だが、その中でも小さな「プペ」と言うバーは何の変てつもない安バーである。

一度や二度、飲みに行った程度では何も変わったことは見られない。ただママの、なおみという女が一人でやっていて、客の六、七人も入れば満員になるスタンドバーだが、このなおみが、渥美マリに似たセクシアルな顔立ちで、男のようなガラガラ声でワイ談をやると店のムードが盛り上がってくる。鉄火な姐御肌の気性で、若いお客は子供扱いに翻弄してしまうし、何となくSっ気のあるところに人気がある。こんな平凡なバーでも、ちょいちょい行っていれば、多少は変わったことが見られる。

このママを、ものにしようと集まってくる狼連中には若者あり、中年者あり、老人ありといった具合で、それ等の全部に気をもたせながら商売して行く。そういうところが、この店の特長だった。しかし、これも小さなスタンドバーは、みなそういったタイプで、とり分けて書き立てるほどのことではない。

だが、なおみの過去の経歴が、ちょっと変わっている。同じ渋谷の百軒店で、暴力バーはなやかなりし頃、暴力ホステスをやっていて「おおやぎのお勝」と言えば、ちょっと知られた、おあねえさんだったのである。

「おおやぎ」と言うのは、お客の身ぐるみ剥いで裸にして、おおやぎという貝のように剥き身にするという意味で、これはバーのホステスやマネージャー間の隠語である。

しかも、なおみの場合は同じ暴力ホステスでも、かなり変わったケースで、普通、暴力バーの女給というのは、ただもう、お色気タツプリに客にへばりついて、いろいろな飲み物や、お直しを勝手に飲み食いして、高い勘定書きを突きつけ客がゴネ出すと、暴力ホステスは引っ込んで、入墨のあんちゃんとチェンジするというのが暴力バーの定石だが、なおみの場合は、その凄いあんちゃんの代役ま

で引き受けてやっていたというところが変わっているのである。

それと、この店には毛色の変った客が集まってくる。それが私の興味をひいた。もともと彼等から見れば、私なども、かなり毛色の変った奴に思われていたかもしれない。それは、お互いさまである。

中でも変わっているのが羽島道雄と宮下秀世氏である。両氏のことは前号に触れたからここには書かぬが、この二人ほど深いつながりはないにしても、この店へ顔を出す男や女は、かなり変わっていて、突如として乱闘活劇シーンが展開されたり、ポルノシーンが出現したり、いろいろなハプニングが生ずるのである。

私は、ハプニングほど面白いものはないと思う。そして印象的である。

この店の話とは別であるが、ハプニングの印象的な一例をあげると、先日、小田急の終電に乗った。どこの私鉄の終電も同じことだが、例によってバーやクラブのホステス達が大勢、乗り込んでいる。明るい光のもとで見ると、よくもこんな人三化七のブスが、ホステスが勤まるもんだと呆れるようなものも居れば、ちょっとした美人も居る。ただ皆、同

じことは、大なり小なり酒が入っているということだけだ。中には玄人か素人か分からぬ女の酔っぱらいもいるが、こういうのには、必ず男が付き添っている。これはアマチュアだ。

後の車輛は混むので、できるだけ前の方に行つて腰を下ろした。ふと前を見ると、髪をボーイッシュにした二十才ぐらいの女が、隣の朋輩らしい女の肩に、もたれて眠りこけていた。かなり、ひどく酔っぱらっていて、ワンピースの上にカーデガンを羽織っていたが胸のくりが深く、おっぱいが半分、のぞけて見える。ミニスカートから太い足をニョッキリ出している。

と突然、女が片足を無意識に、片膝立てたのである。ミニのスカートが捲くれ上がったその下が丸見えになった。何と女はノーパンティだったのである。

上からミニスカートが僅かに被っているから、立っている人からは見えないが、真向かに坐っている私と、その両隣からは丸見えにのぞける。何しろ電車の中は往来も同然である。こうしたところで、突然あり得べからざるにおこった。これこそ、ほんとうのハプニングである。スカートの下で薄暗くは

あったが、奥の方まで、はっきり見える。それでもまだ、眠っていた。

私は左右の人の表情を見た。右は若い学生で、これは瞳をこらしてジーツと見すえている。左隣は中年のサラリーマン風の男だったが、眼鏡のふちに手をやって、時々上を見たり、キョロキョロしているが、それはスカートの中を中心として、視線が行ったり来たりしながら、チラリチラリと見ているのだ。そのまた隣は女性だったが、これは明らかに不快な表情で、ハチを寄せて、もたれかかられている女の顔を、にらみつけるように見ている。『早く何とかしてあげなさい』と、たしなめているように見えた。

露出時間は、およそ四十秒ぐらいだったろう。隣の女が、ようやく気づいて、立てた膝へ手をかけて無理やり下ろさせてしまった。と同時に向かい側の男三人を睨みつけた。だが、その顔色が面白かった。それは眠りこけている女に代つての表情であると思うが、羞恥のかけらは、ひとかけらもなく、また『あんな達、こんなと見てイヤらしい男達ね』と言う風でもなかった。それは『たからものをタダで拝ませて損しちやっ』と言う顔つきだったのである。

ストリップ小屋や、この女の勤めているキヤバレーなどで、見せてもらっても、それは期待していたことが予期通り行なわれたのだから価値はない。隣の女が『ただで見せて損した』と思ったのは正にその通り、我々にとっては『トクをした』のであり、それは金銭には関係のない『トク』である。

そのハプニングのショックの大きさが、いかに強烈だったか、それは隣の若い男などはスカートにかくされてしまったあとでも、眠りこける女の、いままで焦点を定めていた地点に瞳を凝らして、ジツと、いつまでも見つめていたことでも理解できると思う。

気のいいムーさん

余談は、さておき「プペ」の店に話をもどそう。

この店の常連で村尾良一と言う男が居る。この店では「ムーさん」で通っている。

髪を作家のように長く伸ばしている。いまだこそ若い者が皆、長髪になってしまったので長髪は珍しくなくなったが、三十代になると、いつの間にか普通の髪型に戻ってしまうから、やはり三十代の長髪は何か芸術家タイ

プに見える。細くしなやかな髪で、鼻の下とあごに柔らかい、ひげをはやしている。よくひげをはやすことを「ひげを立てる」と言うが、ひげを立てるといのは、剛毛のひげを言うのであろう。ムーさんのひげは、恰好よく撫でつけられているから、ひげを立てるという感じではない。ひげは、昔は威厳を見せるために、はやしたのだが、最近のひげは何かワイセツ感を感じさせる。殊にムーさんのようなやさしい顔に、細くしなやかな、ひげが寝ているのを見ると、男よりも女の方が、より好色的に感ずるのではなからうか。

最初、私は彼は三文文士か何かと思った。文学の話をすれば、結構ついてくる。

ところがママのなおみに聞いて見ると、魚屋の仲だそうである。もっとも魚屋と言っても、旅館などを得意先に、かなり手広くやっているらしい。そして彼は、店を手伝うことは滅多にない道楽息子なのである。

二十七か八の時に、キャバレーのホステスを、かみさんにして、親父さんから資本を出してもらって小さなバーをやったのだが、かみさんが、店に来る客の一人と、くっついて逃げてしまった。

ムーさんのかみさんだった女は、なおみが

暴力バーにつとめる前にいたキャバレーでの朋輩で、気心もよく知っていたらしく「あんな女を女房にしたらダメよ。店を開いたトタンに浮気ばかりしてたもん。それにムーさんは、何もしないんだもん。なまけ者だからね。あれじゃ逃げられるの当たり前よ」と言っていた。

見たところ三十五、六に見えたが実は、やっと三十になったかならぬかぐら이었다。このムーさんが、なおみに惚れて足繁くプペに通ってきたのである。

オナペットと言われる渥美マリに似た、なおみは、本人は、その気でなくとも、彼女にジツと見つめられただけで、男性はセックスアップールを感じた。まして、お色気売りものにして客をあやつって行こうというのだから、この店へ来る客は大なり小なり、みななおみに気のある連中である。

その群狼に混じって、女房に逃げられた魚屋の息子のムーさんでは、はたから見ても、とても太刀打ちはできないと思うが、ムーさんは根が、お坊ちゃんのなまけ者の、いくじなしのくせに、うぬぼれだけは人一倍という楽天家で、彼が他の男達より秘かに優越感をもっているのは、なおみの前身や、店以外の

生活をよく知っているということである。これは逃げた女房が、なおみの朋輩だったせいで、女房から聞いたのだろう。それと、 magari なりに自分もバーの経営者だったから、経営者同士として、バーの内幕を知ってる、ということだった。だが、これについても、なおみは「あの男は、バーの経営なんて何も知っちゃ、いないわよ。みんな、かみさんに委せきりで、てめえは遊んでたんだから」と言っている。

そんなに惚れてるくせに勘定は滅多に払ったことがなく、負けてばかり居る麻雀で、たまたに勝った時だけ勘定を払う。それでも、なおみがイヤな顔をしないのは、彼の妹さんがしっかり者で、ぐうたら兄貴の後始末をつけていたからで、彼も妹さんには頭が上がりない。

ムーさんが一番、嫌いなのは羽島道雄で、彼と、なおみを張り合うと、悪おしの強い道雄が、いつも、なおみを、かっさらってしまっている。道雄を目の仇のようにしている。多分、当時は道雄も金払いがよく、なおみが可愛がっていた頃だろう。それが最近になって、なおみが道雄を嫌い出したことがムーさんにとっては自分が勝利者になったみた

いに嬉しいのだった。

道雄が、なおみに目茶苦茶に殴られたことを知ると目を輝かせて狂喜した。ムーさんは熱心に日参したお蔭で、一度だけ、なおみのお情けに預かったことがある。

なおみのお許しが出て、首尾よくホテルへ行ったのはいいが、イザとなると、用をなさないのである。

「フフフ、おかしかったよ。必死になって焦れば焦るほどダメなのさ。そしたら、あたしに舐めてくれ、っていうんでしょ。冗談じゃない。舐めるんなら、あたしのを舐めろって言ってやったのよ。そしたら、あいつ舐めたわ。お役に立たなくて、申し訳ないからね。あいつに舐めさすちょっといいのよ。あのひげがコチヨコチヨくすぐるでしょ。あれがいいのよ。何さ、あんた、そんな風だから女房に逃げられるんだよって言ってやったのよ。そしたら、イヤ女房の時は一時間も続いたって言うのよね。バカヤロ、あたしを中途半パにして、どうしてくれるのさ。って、からかってやったのよ。そしたら申し訳ないぼくは好きなひとだと緊張しすぎて、かえってダメになるんだって」

「それじゃ私と同じだ」

その点は私も同感である。

「ダメなら、もっと舐めろ。って、からかってやったのよ。あいつ、一生懸命、舐めるのよ。三十分位、舐めさしてやったかな。途中で、もういいか、もういいか、って言うからまあだだよ、ってね。かくれんぼみたい。アハハハハ」

なおみは男のような太い声で笑った。

「それから、たまに、からかってやるのよ。あんたは、まともなのはダメだから舐めるだけだよ。それでよけりゃ行ってやるってね。舐めさせてやってるうちに、あ、大丈夫だ、できるって言うのよ。何言ってやがんだい。お前は絶対にダメだよ。舐めるだけって言う約束だろって勘弁してやらないのよ。あいつだんだん舐めるのが上手になってさ。あのひげ、ベツタリと、はりついたような、とってもし、おかしい顔になるのよ。そのツラ見るとまた余計いじめてやりたくなるのよ」

ムーさんは、いまでも通ってくる。オツに澄ましてインテリ振った態度を見てみると、あのひげがベタベタになったところを想像し私は、おかしさを、こらえるのに苦労した。

だが最近ではムーさんも、なおみから、お呼びでなくなった。ムーさんをホテルへ連れて

くと勘定は、いつも、なおみが持つ。最初、そうしたので、そういう習慣がついてしまった。それにムーさんは、いつもピーピーしていたからだ。

いまはムーさんのようなサービスをして、ホテル代どころか、おサイセンをくれる人が出てきたから、タダでやるのは、ばからしくなって、それで、お呼びでなくなったのだ。

それでも、ムーさんは、よくやってくる。今夜、ことによると、お座敷がかかるのではないかと期待して――。まことに善良な市民である。勘定は妹が払ってくれる。ホテル代は、なおみが払う。それが当たり前だと思っている気のいいムーさんなのである。

ナメナメおじさん

田部安行氏はガス会社の何とかいう、あまり聞いたことのない課の課長さんである。

四十五才。額が、かなり禿げ上がって、眉毛と眼尻が、同じ角度で下がっていて、実に愛嬌のある面白い顔をしている。

彼氏、非常にウィットに富んでいて、陽気で駄洒落が次から次へと出てくる。

よく会社には一人や二人「宴会屋」と称す

る男が居て、昼間は能がないが、夜の席になると俄然、張りきって、夜の外交のうまい男が居るものだが、田部氏もそう言ったタイプの男で、ワイ談が好きである。

そして、そのワイ談は多分にMがかっているのである。

彼の最も得意とするポーズは、両手を目の高さぐらいに上げて、親指と親指、人さし指と人さし指を合わせて、縦に細長い菱形をつくる。

「ああ、〇〇。ああ、〇〇」

と絶叫し、唇を持って行って舌を出し、舌をチョロチョロと上下左右に動かして見せるのである。

皆が笑うと、いよいよ彼は、のってくる。

「ああ敬愛する〇〇、我は、こよなく愛す〇〇さま。おお！」

と、さかんに舌を動かし、チューチュー音を立てて吸う真似をするのである。

「ねえ、ターさん。あんた、女のひとになら誰でも、そうするの」

なおみが、笑いながら聞く。

「いや、誰でもってわけには行かないね。やっぱり美人か、好きな女でないと、できないね。だが、女を落とすにはこれが一番だよ。

これをやると女は一コロだよ」

とニヤニヤしながら、まわりを見わたす。

「おじさん、その手で何人ぐらい女の子、ひっかけたの」

「そうさな、数を数えたことはないが、十人は越してるな」

「汚いと思わないの」

「汚くはないさ。そんな風に思うから、君達女に、もてないんだよ。あれは舐め馴れるとうまいもんだよ。それぞれ女によって味が違ってね。それに、あのおつゆが、おいしい。何とも言えない果物だね」

「へエ、女によって味が違うんですか。ぼくは皆、同じようなもんだと思うがなあ。臭いばかりで、ちょっと、しょっぱくて、そううまいもんじゃなと思うな」

「オッ、さては、お前、舐めてるな」

隣の若いのが、ひやかす。

「おぬし、やるな。だが、あんな、うまいもの、まずいと言うようじゃ、まだ修業が足りないな。うまいよ。ちょっと、こう歯で噛んでやると、ツーンと、おつゆが出てきてね」

「果物だと、何の味です？」

「そりゃ、きまつてる。マンゴの味だよ」

「マンゴは、もっと甘ったるいでしょう。全

然、違うでしょう」

「洒落の分からん奴は困るな。ほんと言うとあれはドリアンの味に似てるよ」

「おじさん、ドリアン食べたことあるの？」

「あるとも。戦争中、南方で、ずいぶん食ったよ。あの匂いがソックリだな」

「このママのは、どんな味がするかな」

「ママのは最高だよ。何とも言えない、人を酔っぱらわす味がするね」

「ママ、ほんとに舐めさしたの？」

「あたしのはね、ちょっと、すっぱ味があるって言うわね」

なおみはニコツともせずに、まじめな顔で言う。こういう時に、なおみは、ほんのこと言を言う癖がある。

「へエ、そりゃ舐めて見たいな」

「舐めるだけなら、いつでも舐めさしてやるよ。ただし、本番はダメだよ」

「そんなの、ねえよ。折角、サービスして、あとのお返しがねえんじゃ、つまらねえや」

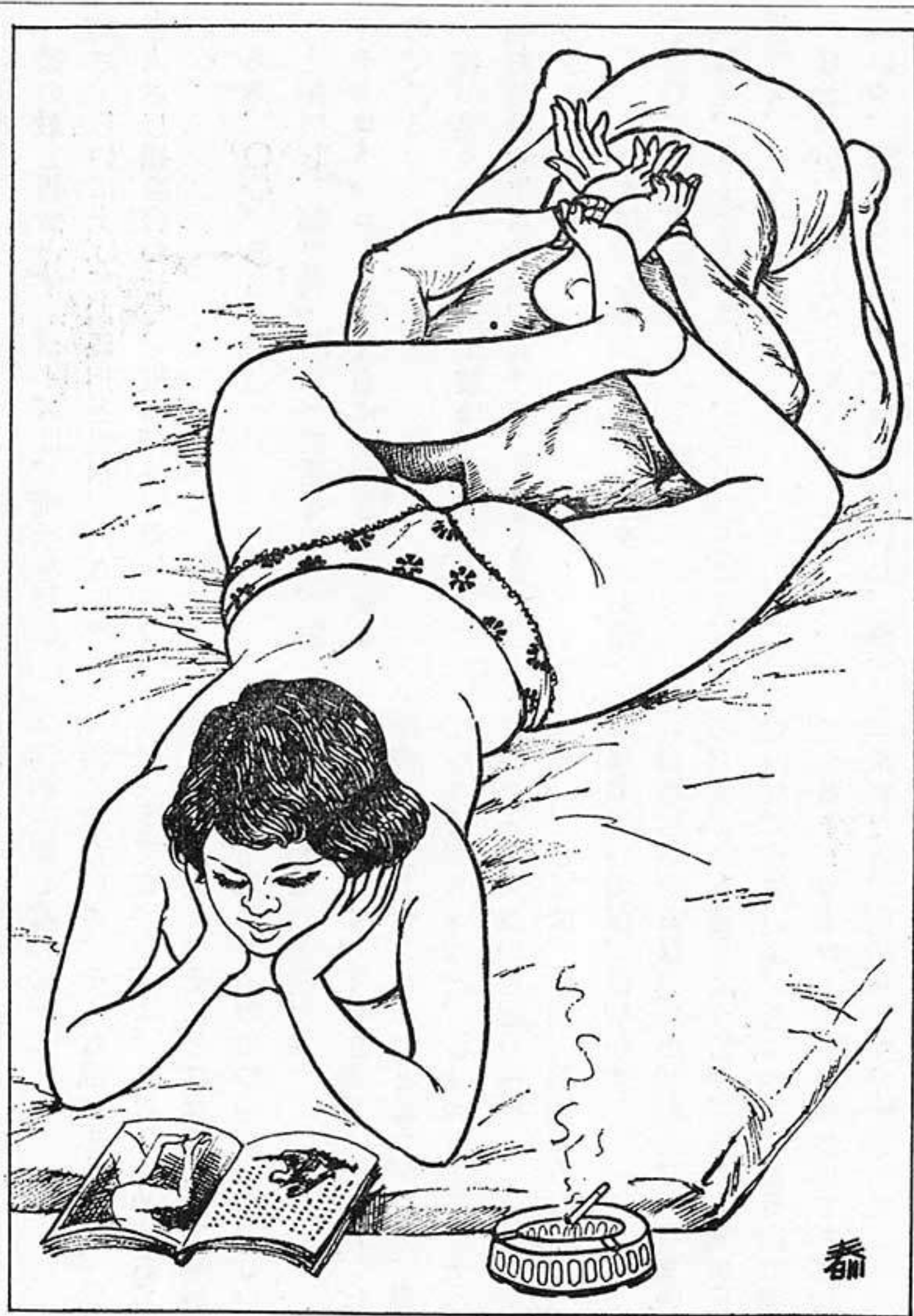
「そりゃ、そんな時の気分さ。どう変わるか分かんないよ」

「ママは気をもたせるのが、うめえからな。かなわねえよ。その手に釣られて俺達やって来るんだからな」

ナミオM画廊

『生埋め訓練?』

春 川 ナミオ



「フフフ、そりゃ、お店へ来て下さる人は
みんなお客さまだからね。大切にしなきゃ」
「あんまり、だいじにもされてねえな」
「何言ってるやがんだい。気に入らなきゃトッ
トと帰りやがれ」

「ホラ、あれだもん」

「ま、いいよ。もう少し、おじさんのナメナメ
談義を聞こうじゃないか」

そこで田部氏は、ますます得意になって、
微に入り細にわたってオーラルセックスのテ

クニックを解説するのである。

時には私の方に話のほこ先を向けてくる。

「全くいいよ、あの味は。ねえ先輩、そうで
しょ。先輩は、どう思います?」

「いや、ほんとですね。あれは、ちょっと、
ふぐの味に似てますね」

「あ、そうですか。こりゃ驚いた。やっぱり
先輩は、大したもんだ。舐める方でも先輩だ
な。ふぐの味がするというのは、はじめて、
うかがいましたね」

「何しろね、唇のはしが、しびれてくるんで
ね。ふぐでもそういうのが、あるでしょう」

「あ、なるほど!」

「それと、ふぐを食べると、やめられなくな
って中毒みたいになるでしょう。アレも舐め
つけると、やめられなくなって中毒になるか
らね。そんなところが似てるでしょう」

「うん、なあるほど。で、このママの味な
んか、やっぱり、ふぐの味ですか」

「ふぐもふぐ、虎ふぐの子宮の様な味だな」

「ウッ! すげえ。するってえと毒っ気が多
いってわけですね」

「バカ、みんな舐めても見ないくせに、勝手
なこと言うんじゃないのよ」

「ねえママ。あの、おじさん二人には舐めさ

せてるんだろ。ねえママ、少なくとも、このエッチなおじさんには舐めさせてるんだろ」「バカ。子供は、想像力だけで楽しんでればいいんだよ」

こういう風だから田部氏がくると店の中が陽気になる。若者達は田部氏の顔をみると、「おじさん。また、あのおいしい、くだもの食べる話しかしてよ。噛んで吸うと、おつゆの出る、あの話さ」

「おう、いいともさ」

「実際おじさんはマンガ食べるの好きだね」

「当たり前さ。俺は食べやす、行きやすだからね」

田部安行と言うのは本名である。何しろ駄じゃれが次から次へと、とび出してくる。

私は彼の噂が出た時、なおみに

「ほんとにデートしたことあるの」

と聞いてみた。

「ウン、昼間ね。ほら、ガス釜の新しいのが出たでしょ。あれ、くれるって言うのよ。で渋谷のフランセでデートしたわ。田部さん、可愛い坊ちゃん、連れて来たわ」

「コブつきデートか。なるほど」

「昼間は、すぐく、まじめな人よ。あのひと柄に似ずエレクトーンやるのよ。坊ちゃんと

二人で習ってるんだって」

「フーン、あの話は口先だけか」

「だって舐めるのは口先だけで十分じゃないの」

「オッ、そりゃ、うまい、しゃれた」

図々しい外人

もう十一時を過ぎていた。

客は二、三人。その中に羽島道雄も居た。

扉があいて、潜るようにして六尺豊かの外人が入ってきた。

「いらっしやいませ」

なおみは外人を観察するように見つめた。

体重も八十キロ以上、あるだろう。狭い店の中へ、ヌーッと入って来たので、余計、大きく見えた。

「何になさいますか」

外人は栗色の髪をした青い目で、顎のところにチョボリと栗色のひげをはやしていた。

そのひげの、せいで、ふけて見えたが、よく見ると、まだ若く、やっと三十前後ではないかと見えた。ことによると二十四、五ぐらいなのかもしれない。

“どこの国のやつだろう”

と私は観察したが、ちょっと分からない。

だが、アメリカ人でもイギリス人でも、なさそうだ。

ひっこんだ青い目で、なおみをジッと見つめている。

「何にします？」

なおみは、笑いを浮かべて、もう一度、聞いた。

「イスキ」

「OK。オンザロック？」

外人は黙って首を縦に何度も振った。どうも、これだけでは、まだ分からない。

「大きな、ひとね」

なおみは私に笑いかけ、サントリーのオンザロックと、ピーナツと他の豆の盛り合わせを皿に入れて出した。

外人は、ひと息に飲みほしてしまった。

「ワンスモア？」

また、首を縦に振る。三杯ぐらいは二分とかからぬうちに飲んでしまった。

「強いわね、外人は」

「図体が、でけえからな」

羽島が、ジロジロ見ながら言った。

初めての客は、普通、店の中の客を見わたすもんだが、この外人は、まるっきり目をく

れず、なおみをジーンと見つめながら、何杯も黙って、お代わりをした。

「お強いわね。ユーカントリー？」

あやし気な英語で話しかける。

「ピリッピン！」

「なに？ ピリピンて」

なおみは私に聞いた。

「フィリッピンだよ」

「あ、そうか」

何杯目かのグラスを出した時、外人は、なおみの手をとって、手の甲を親指で撫でた。

なおみは意味もなく笑った。すると、その手をグイとひっぱり、寄ってきた、なおみの首を片手で抱えて唇に、いきなりキスした。首を抱えて、なかなか、はなさず、口の中に舌を突っ込むような、しつこいキスだった。

やっと放された、なおみは、

「ああ、驚いた」

と私に向かって笑った。

「やっぱり外人のキスは、うまいかい」

「冗談じゃないわよ。バカにしてやがる。いきなり、こんなことするなんて、ずい分、失礼だよ」

「えらいッ！ 日本人には外人と見ると尻尾振って、尻尾はないからケツ振ってニチャニ

チャする女どもが多いんでガツカリするんだがね。無礼なことをする野郎は遠慮なくその非礼を、たしなめてやるべきだよ」

私は、ふだん心に思っていることを、そのまま、口に出した。

外国人が我々日本人の想像も及ばぬ位、程度の低いのには呆れるばかりである。身なりだけは紳士の服装していても、無教養だし、センスもなければ心も狭い。アメリカ人やドイツ人は一応、一人前だが、イタリー人となるとガタ落ち。ましてインドとかフィリピンなどは土人と大差ない野蛮人である。日本のノークォーより、まだ低い。

そんな奴等に、あこがれる日本のミーちゃんハーちゃんの気が、しれないのである。だから、なおみが怒ってくれたのは氣持がよかった。

「ちき生。いまにカタキ、とってやるから」

「どうやって、とるの？」

「フフン、勘定書で取ってやるわよ」

「あまり大きな声で言うなよ。日本語が分かるかもしれないから」

「大丈夫よ。分かりやしないわ」

「イヤ日本語がしゃべれるくせに英語でしかしゃべらない野郎は、かなり居るんだよ」

「あら、どうして？」

「日本語をしゃべるのは、彼等にとって一種の屈辱なんだよ。日本語でしゃべれば、どうしてもタドタドしくなる。だからバカに見える。英語でしゃべった方が偉そうに見える。日本人から見ると、そう受けとれる。それを奴等は知ってるわけさ」

「なるほどね。ずるいわね」

「私だって外国へ行けば、なるべく日本語を使うようにしている。分かってても分からなくても、そんなことは構わない。ほんとに必要なこと以外は、英語やフランス語は使わないことにしてるんだ」

「フーン、そんなもんかねえ」

我々が私語していても、彼は黙って壁のヌードを見つめ、そして、なおみの方を時々ジーンと見つめる。なおみだけを見る。男達には全然、目もくれないのだ。我々は眼中になしという意思を露骨に見せられては、これも我々にとっては屈辱だ。此処へ通ってくる、なおみファンのお客達が、何日、何十日、通っても、彼がやったような執拗なキスは、できない。フラリと入って来て、日本人の見ている前で、堂々と盗んで？ というより、かっさらってと言うべきか、我々のアイドルに

対してキスを強奪した彼は許せない。

というようなことを、私は羽島道雄や、その隣に居た坊主頭の若い青年に、冗談まじりに話していた。

「全くだ。デケえ図体しやがって。図体のデケえのは生まれつきだから、しょうがねえとしてもデケえツラしやがるのは太え野郎だ」と道雄は彼を睨みつけたが、てんで目もくれないのだから、のれんに腕おしだ。

「こんだ、あんなまねしやがったら、横っ面張りとはしてやれよ、ママ」

「アイよ。まかしときな」

私に、けしかけられて、なおみも屈辱感がわいて来たようだった。

「いまや東京は国際都市として世界一であることは、はっきりしている。パリやロンドンに古くさい、いなか町だ。そういう所から来るお上りさんは暖かく迎えてあげなければいけないが、卑屈になる必要は、全然ないわけだ。まして、それ以下の国から、食いつめ者が、あこがれの東京で、ボロ儲けしてやろうと、やってくる。そういう奴等にまで頭を下げてるバカな日本人が、六本木あたりにウロチョロしてるのを見ると、ほんとにガッカリするよ」

「全くですね」

向こう側に居た坊主頭の青年が、話の中に入ってきた。

「ちょっと失礼」

なおみがスタンドから出て、トイレに立って行った。

「ぼくも香港へ行ってみて日本の偉大さを感じましたね。国際自由港の香港では、各国の商品が、全く何の制約も受けずに競争してるわけでしょう。例えば時計ひとつを例にとってみても、ショーウィンドーで、これは、すばらしいデザインの時計だなんて思ってマークを見るとセイコーなんです。そう言えば広告だって時計の広告は「精工表」が圧倒的に、はばをきかせていますし、オメガやエニカと値段も変わらない。それが日本だとオメガやエニカを有難がる馬鹿が居る。高い税金のために高い値段がついてるのを、高いが故に高級だと思っている馬鹿が居るんですね。ジョニーウォーカーの黒だっけ向こうでは安いからガブガブ飲めます。日本へ帰ると、これがどういうわけかべら棒に高い。実際、馬鹿馬鹿しくなっ腹が立って来ますね。商品がそうなら、人間の価値だって同じことですよ」

なおみが帰ってきた。フィリップの男は

なおみを、いきなり抱えこみ、またキスをしようとした。この時、なおみの右手が、しなって、

ピターン

と外人の頬へ平手打ちをくれた。

呆気にとられて腕を放す。スルリと、くぐり抜けてスタンドに入ったあと、なおみは、「アハハハハ」

と笑った。このへんが、なおみのよいところである。その笑い顔は実にほがらかで、何の屈託もない。いま殴ったことはケロリと忘れて、皆に笑いかけ、フィリップの男にまで微笑を返したのである。

このへんがプロ女性のいいところだ。

アマの女性だと、必死の勇気を振り絞って殴りつけたとしたら、その怒りの残渣があとをひいて、凄惨な形相で外人を睨みつけるだろう。それでは座が、しらけてしまう。

ピシッと殴っておいてアハハハと笑う。

これは、おとなの女でないと、できない芸である。

パリの仇を東京で

フィリップ人は人差し指をピクピクさせ

……イメージギャラリー……『最高のもてなし』……岡 たかし



て、なおみを傍へ招いた。なおみは微笑をたたえて怖がりもせず顔の傍へ寄せた。

突如、外人が日本語を、しゃべり出した。

「ワタシ、アナタ、スキデス。トテモ、スキデス。ワタシ、オカネ、イチマン、ダシマスアナタ、イチマンダス。ひふてい、ひふてい

ワタシ、オカネダス。アナタ、ベツノイチマ

ン、ダス。ひふてい、ひふてい。ワタシ、アナタヲ、コンヤ、シヨウテイ? ノウ! シ

ヨウタイ、シタイ。ドウデスカ」

と臆面もなく、口説いたのである。

それを聞いたとたん、なおみは我々の方へ

向いて鼻にしわを寄せ、口をオットセイのよう

うに開けて、実に滑稽な顔をしてみせたので

ある。我々は声をあげて笑った。

はじめて外人が、我々の方へ目を向けて、

にらんだ。

「殴られた、すぐあとで口説くなんてなあ、

大した野郎だよ。まったく」

羽島雄道が、唇をゆがめて罵った。

なおみは笑いながら、

「あっちのお客さんも、今夜あたしをシヨウ

タイしたいと言ってるのよう。どしたら、い

いの?」

と外人に話しかけた。あっちのお客という

のは、どうやら私らしい。外人は、はじめて

私の方に青い目を向けた。

「俺だってシヨウタイしたいよ」

と今度は羽島が割り込んできた。

「ボク、イチバン、アナタガ、スキデス。ジ

ヤパニーズボーイ、ダメ」

「何言ってやがる、毛唐め」

羽島は、まだ何か言おうとしたが、青い目

に睨まれて黙った。

「ドウデスカ?」

あくまで押し強く、なおみに迫る。

「まず、お勘定、払ってよ」

「ハウマツチ？」

なおみは、紙片に数字を書いて出した。

「おう！ ハイプライス！」

外人は人が変わったように、いままでの、あまい顔から現実的なツラになって、早口の英語で、矢つぎ早に、どなった。

「何言ってるんだか知らないけど、勘定は払ってよ」

「ノウ！」

「フン、呆れたわね。これっぽっちの勘定が払えないなんて」

なおみは私へ相談するように話しかけた。

「いくらなの」

「六千八百円」

私の見たところでは三千円ぐらいのところだろう。あとはキス代だ。しかし私は、この横柄な外人に好感がもてなかった。

私だってパリやロンドンで三倍近い勘定を払わされたことがある。癪にさわったが、郷に入っては郷に従えで、しようがないと思って文句も言わずに払った。もっとも文句の言いが分からなかった、せいもあるが。

「さてと、私も行くよ。勘定して」

なおみが、げげんな表情をした。私はパチンとウインクした。それでも、なおみは、

「まだ、いいじゃないの」

「いいから早く書けよ！」

私のサインが分からないままに、なおみは紙片を私に出した。千二百円だった。

「一万二千円か。今日は安かったな」

私は、すぐその場で一万二千円を払った。

傍で見ていた羽島が、すぐ乗ってきた。

「ママ、俺のも頼むぜ」

「お前は八千五百円だよ」

「おいきた。安いな。すぐ払うぜ」

と言ったが、これはモゾモゾと、ふところをいじくったが、やがて五千円札を一枚、出してきて、その中にツケの紙をはさんで、

「ホイよ。八千五百円」

「ありがと」

これは私がパリでひっかかった手だ。ペンションで知り合ったパリジャンに案内されて飲みに行き、三百フランもふんどくられた。「高い高い」と言いながらも、その男が自分の分を払ったので、私も払わざるを得なかった。

あとで聞いたら、これは店と、その男がグルで、日本人は、あまっちゃうくらいから、よくだまされる手なのだ知った。

パリの仇を東京で――。

と言うわけではないが、ふと思いついて、

なおみに加勢してやった。

だが、この若い外人は、しぶとい。私達が払っても、まだ払わなかった。頬をふくらませて、「プフウ」とやり、いきなり立ち上がって出て行こうとした。

「お待ち！ 飲み倒す気かい！」

なおみが伸び上がるようにしてビシッと外人の横っ面を張った。前に殴った時より、はるかに力が入っていた。外人は怒り、傍に坐っていた坊主頭の男をおしのけるようにしてなおみに向かって行こうとした。

「乱暴は、よしたまえ」

坊主頭の青年が振り上げようとした外人の右手をつかんだ。

「オウ！」

外人は悲鳴をあげ、信じられないと言うような表情で、腰かけたままの、小さい日本人を見下ろした。

「セット、ダウン！」

青年は、おだやかに言い、外人が坐ると手をはなした。外人は、しだれた手を片手で、さすっていた。

外人に跨がるなおみ

「やいやい、この野郎。太え野郎だ。東京でそんな勝手な、まねはさせねえぞ」

羽島道雄が、やくざ口調で、どなった。心強い味方が居ることと安心したのか、こうなると勢いが、いい。

「サア、払うものをチャンと払え」

羽島が指で外人の額を小突いた。外人は憤怒の形相で羽島を睨みつけ、いきなりコップをスタンドに叩きつけて割った。

「な、なにをしゃがるんだ」

羽島は、たじろいだ。

「危いじゃないか」

「コップ代も弁償してもらうからね」

なおみは平然として、ちりとりを持ってきてコップの破片を片づけようとした。

「あ、そのままじゃ危いよ」

坊主頭の青年が、コップの破片を、右手の手刀でゴツンゴツンと叩いた。コップは粉々に細かく割れた。

「まあ凄い。あんたの手、金づちみたいなのね」

破片を片づけた、なおみは、

「凄いわねえ、ちょっと、さわらせて」

青年の右手をとって、小指から手のひらを撫でさすって、

「凄い。まるで金づちだわ。こんなので胸でも殴ったら、あばら骨、折れちゃうわね」

この無言の示威を目の前に見せられて、外人も、すっかりシユンとなってしまうた。

一番、勢いづいたのは、お調子者の羽島である。

「やい、助平毛唐。払うものはチャンと払えよ。俺達だって、払ってるんじゃないか。でないと、無銭飲食でサツへ、ぶちこむぞ」

どこまで日本語が分かるか知らないが凡そその意味は通じたらしい。外人はシユンとなつてポケットから五千円札を一枚、出した。

両手を広げて、これだけしかないというぜスチュアをした。

「とんでもねえ、野郎だ。どこまでケチなんだ、てめえは」

羽島は、また額を小突いた。

「サツへ突き出してやろうか。てめえの名前は何てんだ。ユア、ネーム？」

外人は空とぼけている。

「パスポートを見てみる」

私が助言した。パスポートを見せろと言っ

ても、ないと言う。だが、尻のポケットからパスポートが、はみ出していた。

「何てんだ、こりゃ」

羽島には読めない。坊主頭の青年が見て、

「アダム・キャルネリー、二十七才」

「何だ、この野郎。でけえ図体しやがって、俺より年が下じゃねえか」

「イタリヤ系だな」

腕を組んで、なおみは羽島のいたぶりを黙って見ていた。アダムは大きな図体を小さくして、いままでも気にもしていなかった、周囲の男達を、脅えた目でキョロキョロ見回している。それを見つめる、なおみの目が妖しくひかっていた。

「おい、お前さん。ほんとに、これだけか？ お金、持っていないのかい」

アダムの目の色も変わっていた。なおみを見つめる、獲物を狙う鷹のような目が、いまは哀願の目の色に変わっていた。

「お前、さっき何と言ったい。一万円、出すから、あたしにもイチマン出せと言ったじゃないか。だから一万円、持ってるんだろ」

「ゴメンナサイ」

「バカやろ。ゴメンナサイで済むと思うか」
なおみの顔がサジステイックに引き締まっ

てきた。この顔は、羽島道雄を相手にした時も宮下氏や馬場氏に対しての、あのプレーの時にも、よく見せる顔だ。

「サ、一万円、出しなよ」

アダムは両手を拡げて肩を、すぼめた。

「ふざけないじゃないよっ！」

なおみの身体がサッと沈んだ。スタンドの中でパンティを、す早く脱ぐと、それを羽島の顔にぶっつけておいて、スタンドに両手をつけたと思うと、身軽にスタンドの上にとび上がり、アダムの前のスタンドに腰かけた。

殴りにでも来たのかと、アダムは身を反らせた。こうなると、スタンドの中では小さかった、なおみが、凄く大きな女に見えた。

なおみはスカートを捲くり、白い豊かな肉づきの太腿を、アダムの肩へかけた。

「サ、あたしは約束通りイチマン出してやるよ。てめえも一万円、出して見な」

残る片方の太腿も肩へかけ、大きなアダムの顔を太腿の間に、はさんだ。

「ホラ、毛唐、日本の女のイチマンを拝ませてやら。拝め、この野郎」

男のようにガラガラした野太い、なおみの声が、アダムの頭の上から浴びせられる。

道玄坂の暴力バーで、お客を痛めつけてい

た頃に、もどった。もっとも、その当時を私は知らないが、きっと、こんな調子だったのだろう。

「サ、一万円、出して見な。それとも、てめえ、嘘ついたのかい。日本語が分かんたろう返事ぐらい、したらどうだよ。おい！」

羽島道雄はパンティを鼻に当てて匂いを嗅ぎなら、

「この野郎、運のいい野郎だ。なおみあねごの、いいとこ拝ましてもらって。礼を言わねえか」

靴でアダムの尻を蹴る。

なおみは太股のつけ根のところのアダムの大きな顔をピッタリと、はさんだ。

あの太股の感触！

それは私も羽島も、知っている。

やわらかく、フカフカしていて、弾力があるって、絹地のようにスベスベした肌である。

それが次第に強く締めつけられて行く。

強烈な香りが、いやでも鼻をついてくる。

あへんのような魔力をもった、その匂いに、むせびながら、陶醉して行く、あの境地――

勝ち誇る、なおみの顔は美しかった。

下賤な外国人ではあるが、ともかく外見は大きくて逞しい。それを征服し、奴隷化せし

めた、なおみが、立派に見えた。

「やい、この野郎。でけえ、つらしやがって口もきけねえのか。汚ねえ口でキスしてきやがって、金もねえくせに。こんどは、あたしの汚ねえ、くちを吸わせてやらあ。この野郎舐めろ。舐めやがれッ」

なおみの右手がアダムの後頭部にかかり、グイと手もとに引きつけられた。その上からスカートをパッと、かぶせてしまった。

なおみが、ちょっと眉を寄せた。

「この野郎の舌、ながいのよ」

テレたように私を見て笑った。

なおみとしても外人を征服したのは、はじめての経験であろう。素直に自分のたかまりをあらわしたが、それと同時に太腿の力が強まったと見えて、アダムは「ウウ……」と、けもののような唸り声をあげた。

「アハハハ、苦しいか、馬鹿野郎。文無し野郎のくせに、このなおみさんを口説こうなんて大それた気を出しやがって。どうだ、思い知ったか。もっと舐めろ、毛唐め」

アダムの両腕が、なおみの腰を抱えた。

なおみの尻が浮き上がり、クネクネと揺れた。

「ああ、ちき生。この野郎ッ。これでもか」

なおみの口から、次々に罵声が浴びせられた。

もはや、それはアダムに対して言っているのではなく、自分自身のたかまりを強めるためであった。

しかし、これは男と女の奇妙な、たたかいであった。

なおみは、この外国の青年を苦しめてやろうとやったことが、この青年には、最初は屈辱に堪える苦しさを味あわされたのだが、その屈辱に馴れると、この青年をある種のセックスにかりたてたのだ。それは進んで屈辱を受ける——というMの境地であろうか。それとも、もっと単純な、オーラルセックスへの昂奮と見てよいのか。とにかくアダムは進んで、なおみに奉仕をはじめたのだ。

なおみはなおみで、最初は、からかい半分にやったことが、いまは、たかまりをおさえきれず、それを更にS的に切り替えようと、そうした戦いの姿に移行したのだった。

なおみの腰は完全にスタンドから、はなれアダムの両肩に逆肩車のスタイルで踏み跨がった。

しかもアダムは、なおみ後へ反っくり返ろうとする。このまま行けば、あお向けに、ひ

っくり返るばかりだった。だが、狭い店の中で後はすぐ板張りなのでこれに支えられた。

「ちき生っ、この野郎。これでもかっ」

大きなアダムの顔を抱えこんだ、なおみの腰は、異常に大きく見えた。スカートにかくれてアダムの顔は見えないが、わずかにスカートの下から、はみ出している額の色が真っ赤になっていた。

「この野郎ッ、この野郎ッ」

なおみは右手を振りあげて、アダムの頭を何度も何度も殴った。

「てめえなんか日本のバーで酒、飲む資格はないんだよッ、日本の女の小便でも飲んでりゃ、分相応だよッ。こん畜生ッ」

なおみの激しい動きがピタリと止まった。

「ウ、ウ、ウ」

スカートの中で、アダムが、うめいた。そして抱えていた、なおみの尻を、またスタンドに、もどした。

「アハハハ。アハハハ。ざまあ見やがれッ」

なおみは大きく足をひらき、足をアダムの額に当てて、思いきり蹴とばした。

ドスンと羽目板に、アダムの大きな身体がぶつかった。上衣なしのワイシャツがビショビショに濡れていた。

「サ、この位で勘弁してやる。てめえみてえな、うす汚ねえ野郎はサッサと出て行けッ」

なおみは更に追い打ちをかけるように、アダムの肩を蹴った。

呆然として見ていた坊頭頭の青年は、あわてて立ち上がり、道をあけた。アダムは、あちへぶつかり、こちへぶつかりして、もうろうとして扉を開けて出て行った。

「ああ、凄え。俺、今夜は昂奮して寝られねえよ」

羽島も、顔を真っ赤にしていた。

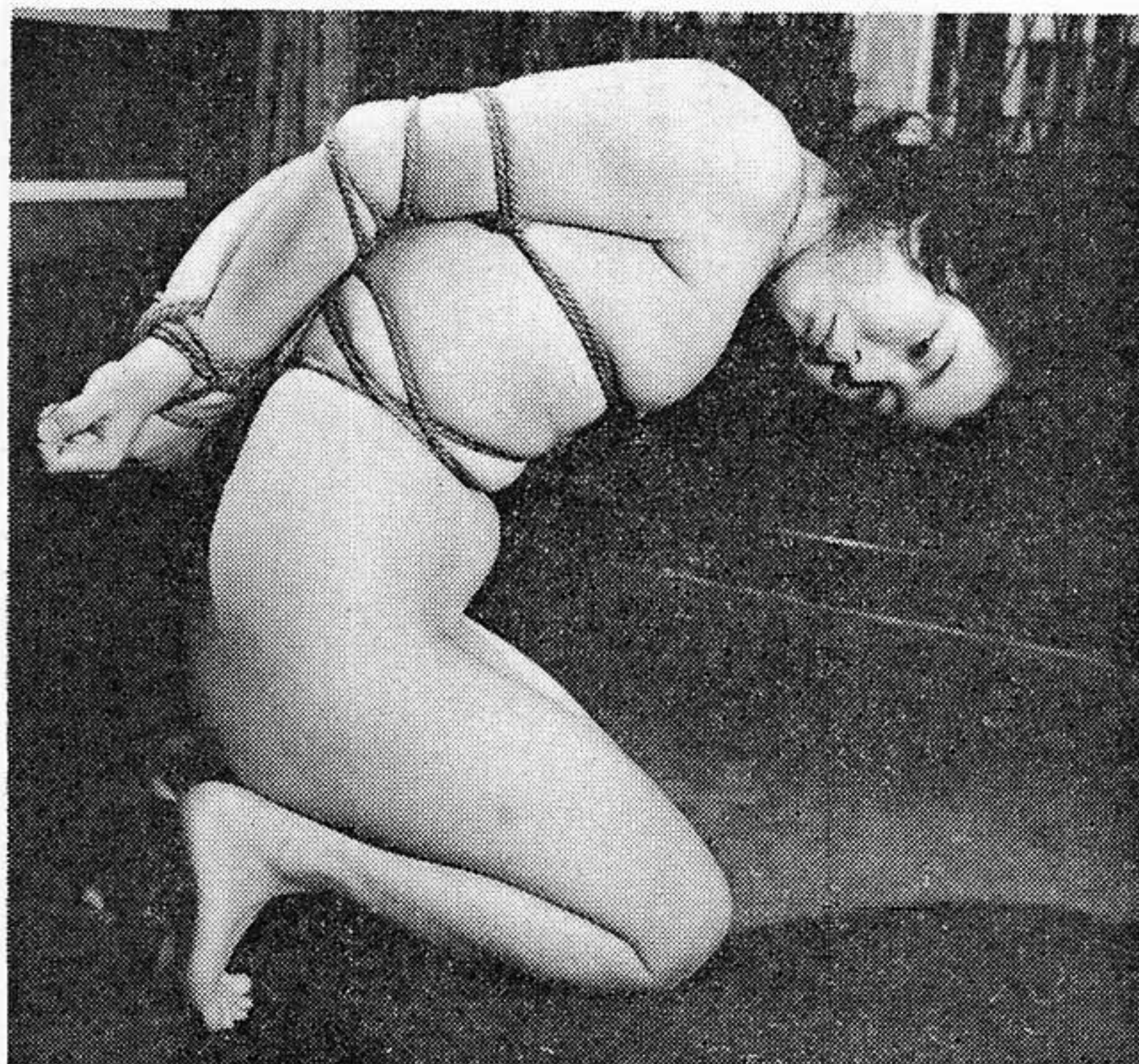
なおみは、はだしのまま土間へ下りて、坊主頭の青年の隣へ腰かけ、

「ごめんなさいね。あたし怒ると気持ちがいたいになっちゃうのよ。失礼しました。でもほんとに助かったわ。あなたがいらしてくれて」

坊主頭の青年は、テレて身をかたくしていた。

この青年も、また「プペ」の常連の一人になっってしまったのである。

「プペ」とは、こういう店であり、なおみという女は、こういう女なのである。



緊縛写真についての僕の好み

真知子責めへの注文と構想

鈴木 三三

奇ク誌のモデルさんのなかで、前田真知子嬢はぼくの最も好きなひとです。しかし、真知子嬢の緊縛写真は数多く載るわりには、ぼくの好みに合った緊縛写真が少なく残念に思っていました。

だが、好きなモデルさんであればあるほど、それだけ強く、彼女によるぼくの好みの緊縛写真の実現を望む思いは強まるばかりです。そこで思いきって、奇ク誌に注文をつけてみようと思案を執りました。

ぼくの好む責めの要点と、真知子責めの構図を一、二、書き、その部分的箇所においてでも奇ク誌の緊縛写真に採り入れ

て頂きたいものと願うものです。

ぼくに於ける責めの要点は、

(一) 後手高手小手首縄縛り

(二) 猿ぐつわ

(三) 鼻のいたぶり

この三つを併用して行ないます。股間縛り等も、これらの責めの過程で行ないますが、これは、あくまで附加的要素であり、前記の三項は不可欠の要素です。

その方法についても不可欠の要点があります。第一に後手高手小手縛りですが、これは縛り合わされた後手首は、肘より上で締め上げなければなりません。この後手首を、より高く締め上げるために首縄が必要条件になります。首縄は二重にかけると、哀れさが強調され一層、効果的です。縛られた後手も、指を開いて、もだえさせたり、固く握りしめさせたりして、縛られている切なさ表現させることが大切です。

次に猿ぐつわですが、口のみを強く締めつける猿ぐつわが絶対、欠かせません。のぞけあえぐ鼻孔、訴えるように見開かれた瞳の表

現が魅力のワンポイントです。鼻への、いたぶりは、鼻つまみ、鼻の頭の押し上げ、煙草の鼻孔への挿入等、軽い責めで充分です。

さて、以上の要素を基にして真知子責めの構図を組み合わせ、写真式に書いてみます。

真知子嬢は美少女なので、彼女への緊縛を考えると、所謂、責めよりも愛玩飼育の方向が望ましいと思うのですが、その方法については、まだ想いが熟していないので、ここでは一般的な責めの形態についてのみ書いてみます。

また、最近は緊縛写真イコール緊縛ヌードとなつていますが、真知子嬢の緊縛容姿は現代的な若々しいスタイルの衣装に於いて、より一層、活かされるものと考えます。その緊縛容姿があつて後にこそ、彼女の水々しい裸身緊縛が一段と魅力を増し生彩を放つのではないのでしょうか。

構図1

(1) ジーパン、半袖の開襟シャツ姿。麻ロープで後手高手小手、首縄に緊縛され、足首も縛り合わされた不安定な立ち姿で、縄尻を鴨居につながら、半ば吊られるように爪先立っている。

口にはガムテープの猿轡。顔をもたげて、緊縛に耐えている表情。後手が切なげに、もたえている。シャツのボタンは、はずれて胸

が、はだけ、臍ものぞいている。

(2) テーブルの上に、あぐらをかかされている。足首を縛った縄は首に掛けられ、上体が、やや前屈している。

口のガムテープは、はがされ、鼻を強くつまみ上げられ、ビール瓶を口に当てられ、ビールを注ぎ込まれる。

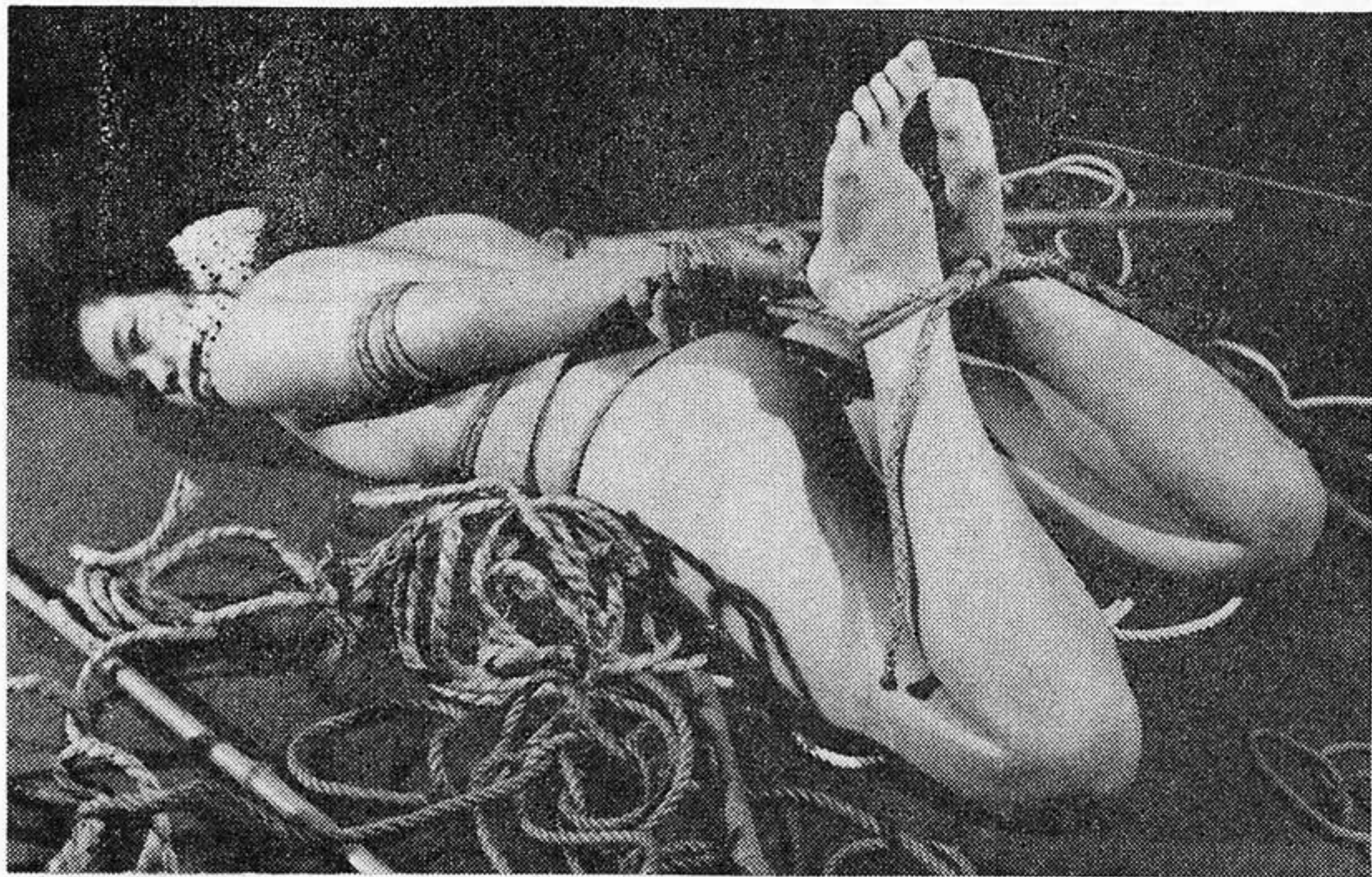
(3) ジーパンを脱がされ、シャツとパンティの姿で縛られたままトイレに、かがまされている。口には再びガムテープの猿轡。

縄尻は水洗の貯水槽の配管につながれている。迫りくる尿意と屈辱の仕置に、トイレに縛られたまま、泣く真知子。

(4) 全裸、後手高手小手、首縄縛りに、股間縛りを加えられ、ベッドの脚に、縄尻をつながれている。許しを乞うように、ガムテープの猿轡をされた美しい顔を上向け、緊縛された裸身を、さらしている。

構図2

(1) 袖なしのチョッキ風のブラウス、プリーツのショートスカートを。



後手高手小手、首縄縛り、足首、膝も縛り合わされ、大きな鏡の前の丸椅子に坐らされている。

口には扱帯で、頬に喰い入る猿轡。鏡にうつる、みじめな姿を自ら見つめる真知子。固く握りしめられている後手。

片手に縄尻を、片手に鞭を持った女の手。

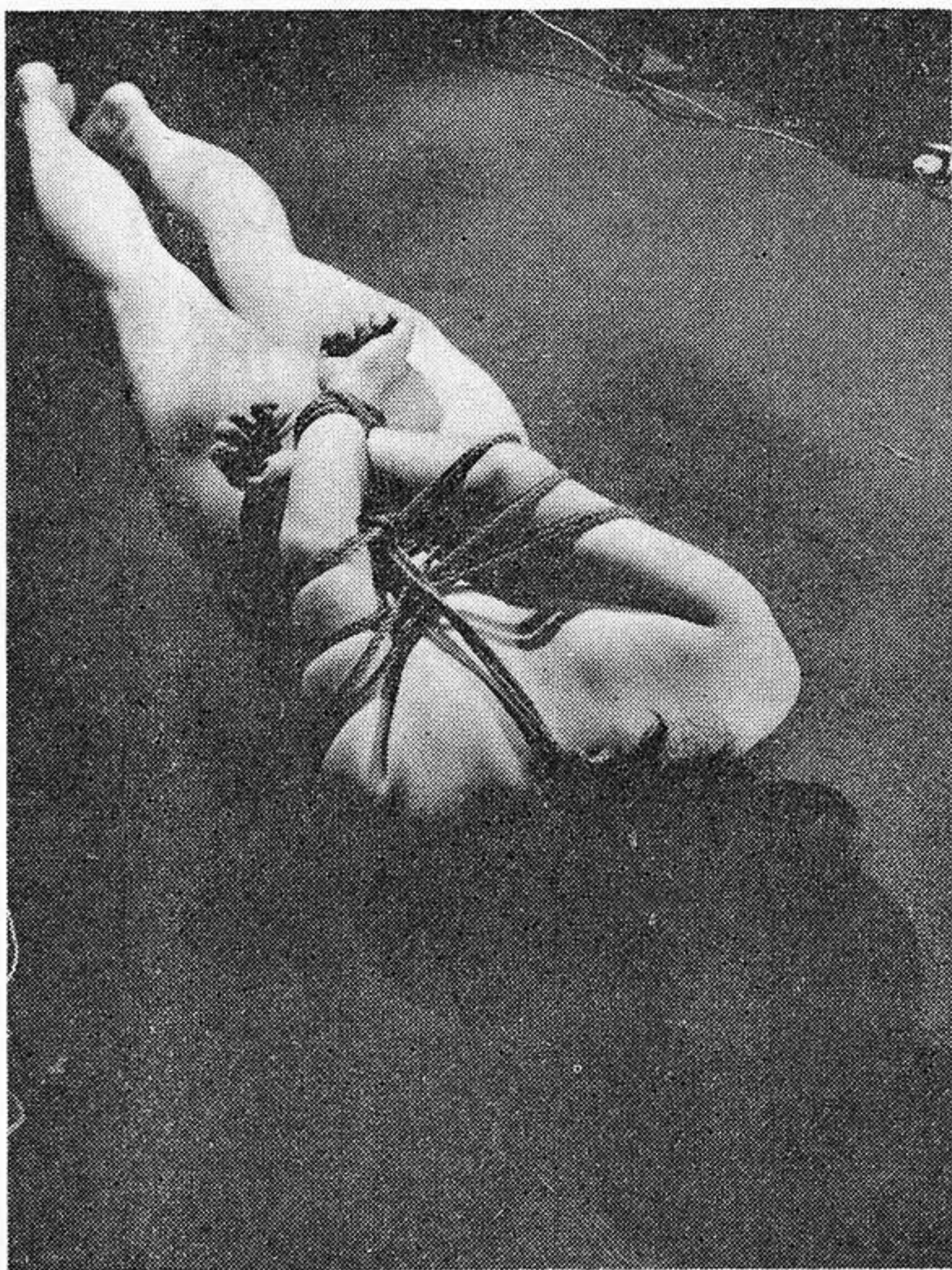
(2) 鏡に顔を寄せられ、鼻をつままれ、ね

じ上げられている。ま

たは、鼻の頭を押し上げられ、恥かしく広げられた鼻孔を鏡の中に見させられる。

鼻孔に、二本の煙草が挿入され、ライターに火をともした女の手が近づけられる。眼をみひらき哀れな顔で見つめる真知子。

(3) スカートとパンティを脱がされ、丸出しの尻に股間縛りが加えられる。立たされ、尻を鏡にうつるように突き出し、鞭打たれる哀れな真知子。
轡にゆがんだ頬に涙が流れている。



○
ここまで書いて、これ以上、書くのは何か空しいようで筆が空まわりするような気持ちにとらわれはじめました。結局、ここで、どのような注文を書こうと、構図を描こうが、現実には直接、真知子嬢とのプレイを、し得ないのだという思いの、なせるわざでしょう。それだけに、十二月号の口絵『猿轡をさ

るまで』の組写真の頁を開いて、しみじみと見返してみても、

「ああ俺なら、こんな猿轡は掛けない。せつかく、くつきり、のぞいている彼女の可愛い鼻孔の魅力が、無くなってしまったじゃないか。また、彼女の鼻をつまむのなら、もっと、きゅっとつまめば良いものを、きゅっとつまめばつまむ程、彼女の鼻の可憐さは増す

ものを。後手縛りだって、ただ太い縄を彼女の裸にぐるぐる巻きつけるより彼女にセパレーツの素晴らしい水着でも着せて、白い手ざわりの柔らかな麻縄で、きゅちりとした後手高手小手、首縄を掛ければ、この上ない美少女緊縛が出来るのに……」
と、まあ、こんな愚痴を腹の中で、つぶやく心情にもなった次第です。

どうもこの文章、奇クの緊縛師先生に対し、大変失礼な言い分を以て終わることになってしまいました。これも真知子嬢緊縛への、つくるを知らぬ、あこがれの、なせるわざと御理解願って、ぼくの注文の一部なりとも採り入れられんことを願って筆をおきます。

S M カメラ・ハント

放浪の旅が教えた快樂の味

――再起に賭ける秋山夫妻の巻――

辻村 隆

再会の約束を守った秋山夫妻から、電話があったのは十一月中旬の、時雨そぼ降る黄昏の頃であった。

「ええ、今、新大阪駅からなんです。是非アドバイスして戴きたいこともありますし、お邪魔してもよろしいでしょうか？」
「えらく突然なんですね。何か急用でも……？」

「公演の打ち合わせもあるのですが、貴方におめにかかりたくてネ。教えていただきたいのですよ」

「教えるなんて、とても私なんか――」
「いえいえ、ブランクが長過ぎました。正直

いって迷いに迷っているのです。こんな遅くからお訪ねしては、ご迷惑でしょうが……」
「迷惑だなんてとんでもない。私でよかったら、大歓迎ですよ」

「じゃあ、午後の八時頃」
「いいですとも、泊まって行って下さいよ」
「ええ、御好意に甘えたいと思います」
「勿論、奥様も御一緒なんですよ」

「連れてまいりました。子供は妻の妹の処へ預けてきました」
「じゃあ、待っていますよ」

電話を切って、不意の来客を家内に告げ、夜の饗応の糧を、買いに走らせる。

本職の方が、かなり多忙であったが、遙々九州からの、珍客到来とあれば、構ってもおられない。況して、外地を放浪していた彼等と再会するのは、三年振りのことである。

先月号の『樂我記』欄でも触れたように、三年前のイレブンPM番組『サド侯爵もびっくり』に一緒に出演し、その翌年の二月頃、ひょっこり私宅を訪れ、強烈なSMプレイに耽溺した二夜を過ごしたが、それが、彼等の蔭乍らの私に対する、はなむけのプレイのようであった。

四十五年五月号のカメラ・ハント「深夜の舞踏会」が、その夜のありさまを、赤裸々に

描いたことは御存知の通りである。

再会が、私の胸を、俄に期待に疼かせ始める。外地を放浪した彼等が、どの様に変貌して、私の前に姿を現わすのであろうか――

■実行派の秋山夫妻のことである。SMプレイの近況を私にきき、アドバイスを求めて、激しいSMプレイの世界に埋没してゆくことは、火をみるよりも燎らかであった。

あの冬の夜の激しさを心に秘めて、忽然と日本から姿を消し、西欧へのさすらいの旅に出た彼等は、何を、何を擲んで帰国してきたことであらうか――。

若し、旅路の果てで、出産という異常事態に遭遇しなければ、懼らく秋山夫妻は、今も尚、彼地で、SMの真髄を求めて、さすらいの旅を続けていたことであらう。

子連れという、大きなハンデキャップが、帰国に踏み切らせたものの、再起に賭ける彼の心構えは、並み並みならぬものがあつた。

先日、思いもかけず大阪空港からの電話を受けて、彼等の帰国を知つたのであつたが、その日は興業主等への挨拶や連絡もあつて、会う時間もなく再会を期したのであつたが、几帳面な彼は、半月後、便りをよこし、長らくの御無沙汰を詫びた冒頭のあとに、現在の

心境を左のように書いていた。

(……十二月卅一日からの大晃の舞台は、私共の関ヶ原です。この舞台で、SMショーでは、流石に欧州帰りの秋山といわれるか、秋山も前のショーと変わりばえないといわれるか、芸道運命を賭けた決死の一戦が、この大晃の初舞台です。先生はじめ、ファンの皆様からバックアップして戴いているのに、見苦しい舞台では、汗と脂で稼いだ、尊い金銭を払って見に来て戴くファンのお客様方に申し訳ございません。新人の心積りで、一生懸命に頑張る所存です。

だが、今までは、ただ夢中で縛ってきましたが、縛りの世界、SMの世界の、広さ深さ――。無限といってよいような、一条の縄から生まれる芸術。そんな世界を彷徨してきた今、唯、暗黒の海原で、舵をなくした小舟のように、右にいったては躓き、左にいったては転び、焦燥と困惑の中で、これといったアイディアも、うかばず、今日から何日、いや何十日かかるか、わかりませんが、初舞台のその日まで自己の心を空しうして、体を虐めてみるつもりです。

欧州各地で、危険に身を曝し、秘密のSMショーにも、もぐり込み、種々見聞しました

が、外人の模倣をするのは、いと易いですが革具やムチのみに重点をおく、ああしたSMショーは、日本人の私の体質には合い兼ねるように思うのです。

前のショーを造った時も、そうでした。私のような愚人には、これといった創作力がなく、只縫るは仏智のみと、み仏のお力にお頼りするため仏間に入り、断食をして、心に光を求め造ったものでした。果たして二度も、仏智をお授け下さるか、どうか、分かりませんが、仏の説く三千世界にも、理の一念三千と、事の一念三千があると、さとり、事――行なってみる覚悟です。

いずれ近日にお伺いいたしますが、先生にも、愚弟子と思召し、何卒よろしくご指導のほどお願い申し上げます。……(後略)

仏智など、トンと意に介せぬ私にしろ、彼のショーに賭ける熱烈な信念に、つい心打たれずには、いられなかつたのである。

その秋山夫妻が、間もなく私の前に現われようとしている。単なる遊びごとのSMプレイでは済まぬような気持で、重苦しい心の負担をおぼえつつも、私の期待は急速に膨れ上がってゆくのであつた。

× × ×

表に車の止まる気配がして、玄関の戸を開く音がする。そそくさと飛び出すと、予測通り、秋山美智夫、ローズ秋山の夫妻が、神妙な表情で並んでいた。

懐かしさの余り、私は思わず手をさしのべ彼等と固い握手を交したのであった。

月並な挨拶は、この際、必要でない。家内も、ついで快く迎え、息子と娘達のたむろする茶の間を避けて、同好者専用の離家に案内する。律気な夫妻は、数々の土産ものを携えてきて、家内に手渡す。恐縮する私達――。

(貝柱の粕漬) (鹿児島名物兵六餅) (肥後の高瀬飴) (柳川の海茸粕漬)

四種の珍味の箱詰めは、道中嘸かし荷重であつたことだろう。

小兵ながら精悍な感じの秋山美智夫は、色いよいよ浅黒く、焦茶色のベレー帽をかぶり秋山夫人は、見違えるようにグラマーになって、無難作に黒髪を束ねていた。パンタロンの臀部の肉が、はちきれんばかりに盛り上がっている。

心尽しの肉の焼き上がるのを待つ間、私はビールとウイスキーを奨めて、さて何から聞こうかと、しばしは心迷うのであった。こうして呎尺の間に、膝突き合わせてみれば、三

年間という空白が、まるで嘘のようである。

「大変だったでしょう」

漠然とした、そんな言い方しか出来ないのが、もどかしい。

「思い立つと矢も楯もたまらぬ性分でした。

驚く妻を叱りつけて、これといった目的もない俤、日本を脱出したのは、一昨年(昭和四十五年)の六月です。空路モスクワ経由でパリに飛びました」

「十八時間ぐらい、かかりましたわね」

と、秋山夫人が、過去の残影を追い求めるように傍から口を挟む。

「旅費が大変だったでしょう」

「確か、一人当たり三十三万八千七百円でしたかね。ショウで稼いだ金を、あらかた持ってゆきましたが、二カ月許りで、忽ち有金、殆どハタいてしまいましたよ」

「どうしてパリへ行ったのです？」

「マルキ・ド・サドの実態を求めてなんです。フランスの大哲学者であつたサドが、なぜ世間では、サド侯爵といって、まるで、悪魔の化身のような、変態男性の代表のように取り沙汰されているのか――。サド侯爵について調べてみたかったです。あの例のイレブンPM(「サド侯爵もびっくり」)で、福

田和彦先生が、マルキ・ド・サドについて、いろいろと解明しておられたのを、傍で聞いていて、まるで天啓のように、ひらめいたのです。SMを語るには、その源を知るべきだと悟ったのです」

「とすると、海外旅行の動機は、あのイレブンPMにあつたともいえますね」

「以前から、一度欧州へ行ってみたいとは思っていましたが、決断を与えたのは、あれがキッカケかも知れませんね」

「で、どうでした、パリで？」

「結局サドに対する、既成の観念以上を、現代のパリに探究しようとしたことが無理でした。十八世紀の哲学者であり、文学者であつたサドが、生涯をかけて、性倒錯の世界を観察した数々の事実も、単なる変態的な異端者めいて、人々の胸底に残っているに過ぎないようです。人間の自由の問題を追究した、大哲学者としてサドをみる人は、私が遊弋した世界では少なかったのです。サドの名によってつくられたサディズムなる言葉が、欧州でも普及し、一種のブームを呼んでいることは確かです。そんなショウや映画が、いたるところで見られるからです。しかし、SMのブームは、欧州以上に、日本の方が、今や花盛

りかも知れません。辻村さんは、そうしたブームへの先鞭をつけられたパイオニアだと、私は確信しているのですよ」

「いやいや、とんでもない、パイオニアだなんて——。人間の本心を、赤裸々に追究したまでですよ」

「私はこう考えているのです。偉大な哲学者サドは、人間のもつ、最も華麗なる美と、大海のような大きな愛と、炎のような、何ものをも焼きつくさずにはおかぬ灼熱の情交を追究して、苦悩したのではなからうか——謂わば、達磨大師が、石の上に坐し、我が魂何処に在りと、手足を切り落としたが如き苦悩の日々の中から、真の嗜虐の真髓が生まれたのではないかと思うのです。勿論、私の独りよがりの考えかも知れません。唯、独りよがりにして、私は私なりに、サドの真理を、懸命に追究したのですよ」

「私もサドは別の意味で尊敬しています。あの筆禍事件を惹き起こした『悪徳の栄え』にして『美德の不幸』にして『ソドムの百二十日』にして、単なる嗜虐の快樂やセックスのみではないのです。そんな個所ばかりを興味本位に読むから、彼の真意が分からない。私は、あの夜のイレブンPMでも一寸、述べま

したが、悪い奴ほど、よく眠るといった、有

はしいまま

閑貴族の、恣の権力をカサにきた極悪非道さや、公官吏、修道院などの乱脈、贈収賄の醜さ、政治不在の暗黒時代を、剔抉しようとした、彼のヒューマニズムな人間探究を、もつ

とよく見究めて欲しいと思うのです。謂わば

彼は、痛烈なる諷刺家でもあるのですよ。権力ある悪徳が栄えて、モラルを守ろうとする美德のすべては打ちひしがれてゆく。彼自体生粋の貴族高官の出なんです。だから、貴族の腐敗は、イヤという程、みせつけられ、その体制に反発して、自虐めいた逆説の世界に自ら躍り出たのでしょう。自身で貴族のスキ

ヤンダルを撤きちらすことによって、腐敗せる暗黒政治に、警鐘を打ち鳴らしたのでしょう。彼の生涯の、三分の一は幽閉の牢獄生活です。そして、反革命で又しても捕えられ、

精神病院に監禁されて果てています。執筆は殆ど牢獄中のものなのです。現在の日本の政治は、十八世紀のあの暗黒政治ほどではありませんが、腐敗せる高官、公吏は巷に満ち溢れています。果たして日本に、サドの様な、勇氣のある、活動をするものがあるでしょうか。私にして、彼の逆説的な行為から生まれた、サディズムに、単に阿諛追隨する、平和

的な日和見主義——。そうした行為を、プレイという名のもとに転化して、単調なる日々のなりわいに、若干の刺激を注入しているに過ぎないと、時には自己嫌悪めいて、反省しているのですよ」

これは私の偽らざる感懐である。『サド侯爵もびっくり』というイレブン番組に出演したのを機会に、マルキ・ド・サドを研究してみ、性の本能に対する彼の恐るべき観察、洞察力と、不撓不屈の精神と、性の倒錯の世界に、人間の自由を徹底的に謳歌した彼の不羈奔放さには、唯々、敬服するの外なかったからである。

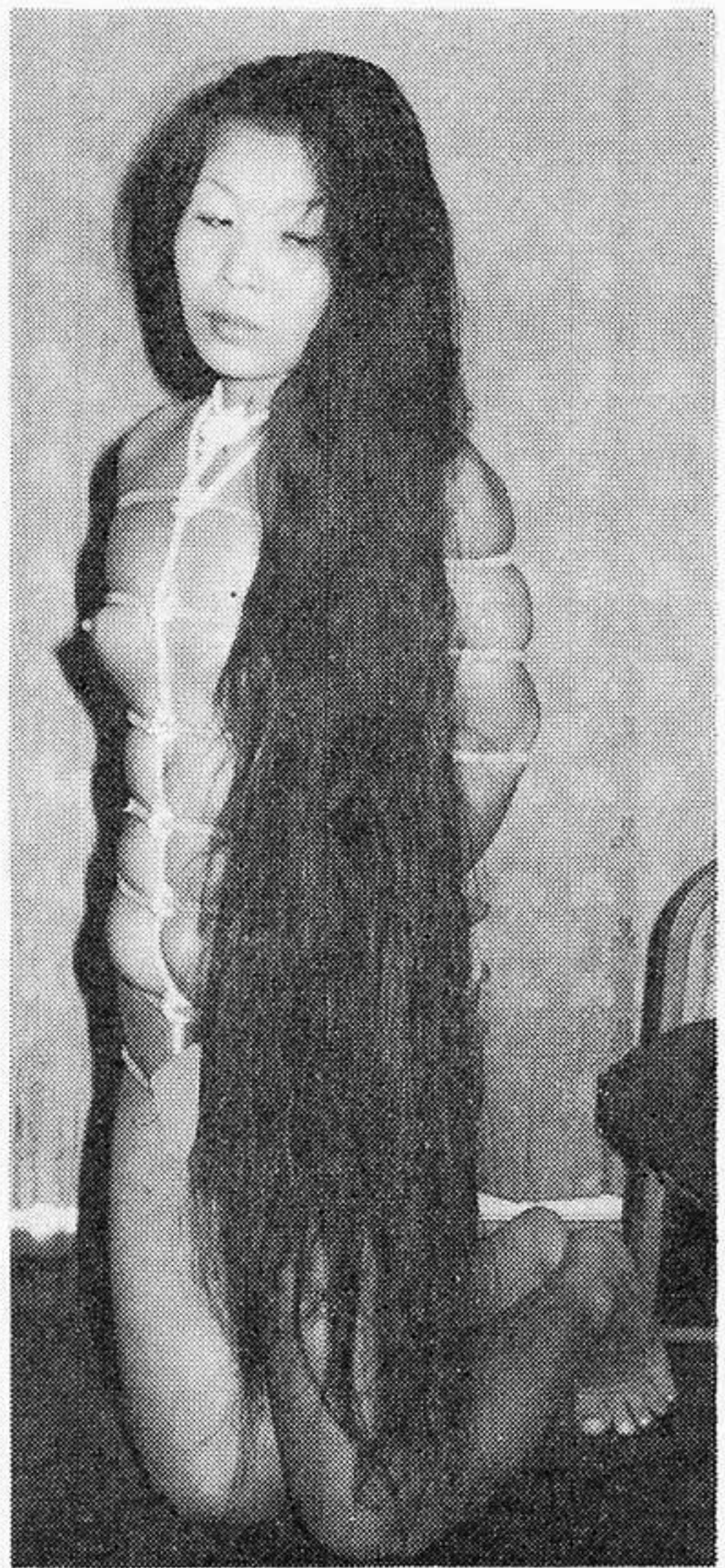
秋山美智夫が、フランスで、果たしてサドをどこまで追究したか私は知らない。しかし私が、はっきりいえることは、十八世紀の、あの暗黒政治の時代に生きてみた者でないと所詮は、真髓を剔抉し難いということだけであつた。

夫妻はパリと、その周辺を放浪して半歳後デンマーク、スエーデンと、気候な放浪の旅を続け、ナマのポルノ、SM、セックスに触れ、さすらってゆく。

有金をはいたあとの、秋山夫妻の生活の糧は、SM会員クラブの秘密情報で、白人、

黒人に混じって、東洋人的なショウを見せ、かなり受けたという。

「出演時間は、大体夜の十二時頃からで、二回ショウをやります。会員は日によって違います、多くて二十人、少ない時は七、八人ぐらいの時もあり、舞台というよりフロアシヨウのようなものです。意外に思ったのは、靴フェチや、マゾ紳士の多いことで、SMシヨウといっても、女性が、脂ぎった紳士や豚男を虐めるのが多いのです。鉄仮面の様な革マスク、搾衣、拘束具、嵌口具、手鎖などで縄のみを使つての緊縛は殆どありません。それだけに、縄だけでシヨウをした私達は物珍



しかったようです。被虐に歓喜する紳士の群れとつき合ううち、私はいつしか奇妙な性倒錯を覚え始めたのです。女性に虐められて、そんなに愉しいものなのだろうか――。それは、私の過去の経験にないことです。安い木賃宿のホテルで私は生まれて始めて妻に縛られてみました。九州男児として耐えがたい屈辱が、私をせめさいなみました。私は、客の求めに応じ、妻をSの女王の存在に仕立て、肥満した紳士を責めさせてみました。見様見真似で、妻は、紳士を虐めます。妻の東洋的雰囲気、場内に嘆声が洩れ、妻に虐められたいという客が、次々現われたのです。妻に

演出させて、神秘的な匂いを漂わせ、魔女めいて、妻は愉しげに、客を虐めてゆきます。日本人がフランス人を虐めるといふ優越感が妻を急激に、S的傾向にさせてゆきました。私は常宿のホテルで、十七才の少女、ミレーヌを相手にしてMの奴隷の感覚を味わってました。ミレーヌは、この会員クラブで一番若く、比較のおとなしい、Sの性癖の持主とみたので口説いたのです。同じショウの仲間同志で、ミレーヌは、気軽に応じてくれ、ワソコースを私に与えてくれたのです。ミレーヌによって、私は始めて被虐の甘美な味を知り、妻は被虐紳士を相手に、ムチをふるい、存分に紳士達を満足させ、私はミレーヌを相手に、被虐の愉しさに耽っていたのです。ミレーヌに散々に虐められ、弄ばれても、全然屈辱を感じないどころか、甘美な欲びに全身を震わせ、彼女の唾液やハルンを頂戴し、細ムチで叩かれ、馬にされ、這いずり廻って、快樂を覚えるようになったのです。夜毎には私がS、妻がMとなってショウをし乍らも、私達二人には、まるで符牒を合わせたように私にM、妻にSの心が芽生えてきたのです。この倒錯した感情は、分かってもらえるでしょうか」

「分かりますとも。私だって時偶には、そんな経験があります。のまされたり跨がられて息がつまる程、押しつけられたりして、その時、自分の自由が拘束され、美女の思いの尽にされていることに、陶醉を覚えますよ」

「それなんです。可憐なミレーヌによって、私のM性は開眼されたのです。ミレーヌに未練を残して、デンマークに渡りましたが、そうしたクラブのショウでは、私と妻は、SMを時々交替して、S紳士、M紳士のどちらへでも、喜んで貰える様、真剣にプレイしました。妻は、イレブンPMで、いみじくも申しました通り、舞台の上がセックスなんです。いいかえれば、ショウそのものが、単なるショウのつくりごとではなくて、セックスを感じて、真剣に取り組んでいるのです。私は、妻に屈辱を覚え、虐められることに欲びを見出したのです。私達夫婦は、こうしたプレイを“双虐”と呼びたいのです。SMプレイであり、MSプレイでもあるのです。お互いに、縛り、

縛られ、虐め、虐められる時、そこに、プレイの真の愉しさがある。それを辻村さんに告白したかったのですよ」

ビフテキのさめるのも構わず、秋山美智夫は、まるで憑かれたように“双虐”の愉しさを説くのであった。

私には彼の屈折した心理が、よく分かる。夫婦プレイの場合、SM両面を愉しむ夫婦を、私は過去、数多、見聞してきた。

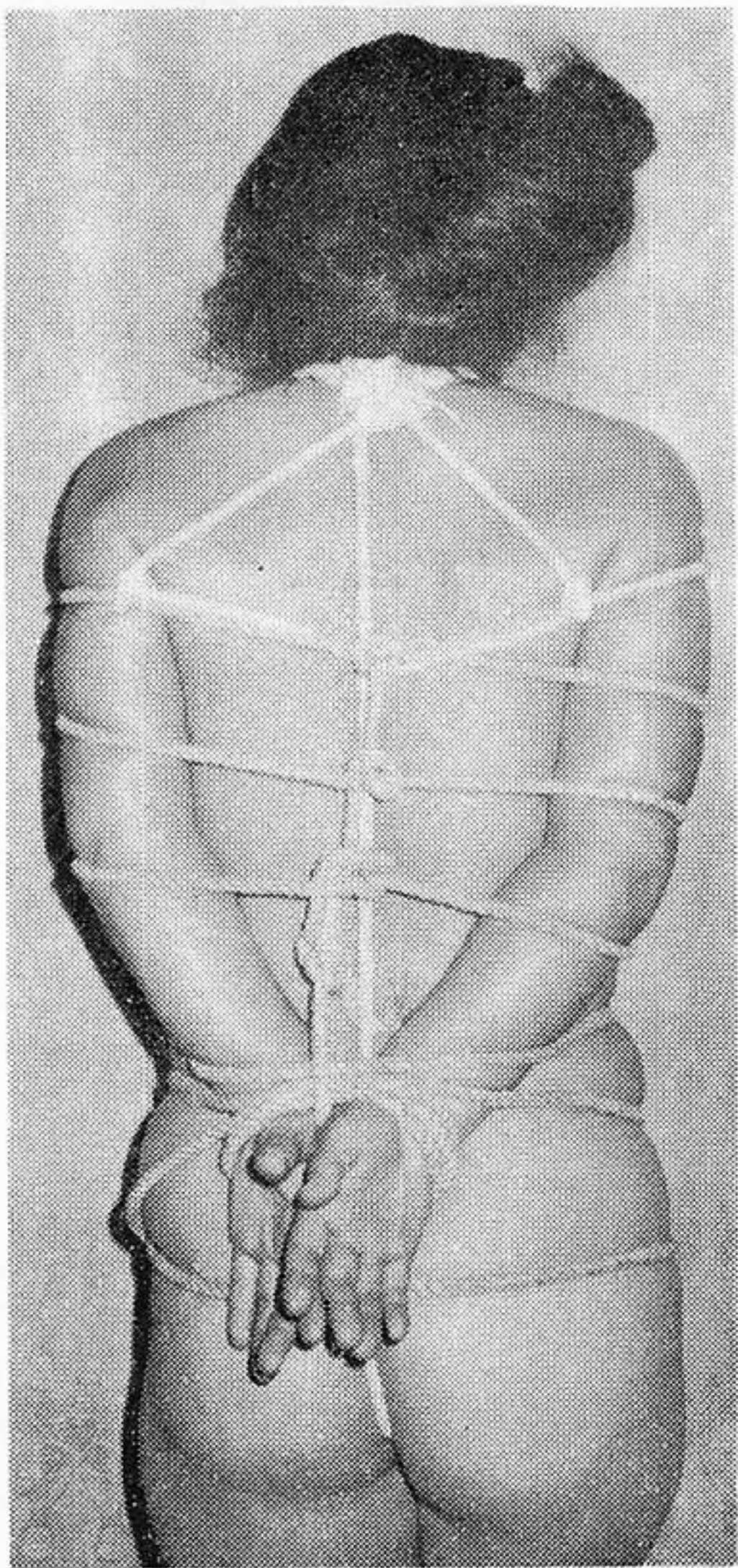
新宮明夫・洋子夫妻、水野弘・香代夫妻、増田喜代司・みゆき夫妻、越路智之・景子夫妻等、私のカメラ・ハントに登場した夫婦だけでも五指を数える。

SとMの性癖は紙一重である。虐めたいという気持の反面、虐められてみたいという気持が、その裏に存在している。SとMの比重の差はあっても、そうした心理は、愛する者同志、夫婦の場合など、数多く介在するのではなからうか。一方的に夫がS、妻がMであると自認していても、秋山美智夫の心理と同じく、妻に対してMになることに、抵抗と屈辱を感じて、いい出しかね、切り出しかねているのではなからうか――。

この私にして、妻に対しては、十中八九まではS的存在であるが、何かの一時期、被虐の感情は、どのようなであろうかと、妻に私を縛らせ、思いの尽に肉体を弄ばせたことがある。妻は案外いそいそと、愉しげに私を甘美に虐める。それも又よきものであった。

女性の独占欲を満喫させる手段であるかも知れない。

虐めても、虐められても、究極は、相互に甘美と愉悅を満足させ



快樂の境地に到達すればいいのであった。私
はこうした場合「虐める」という言葉は、い

つもふさわしくない様に思える。「虐める」
を「性感度を昂める」と置き変えた場合、主
客転倒も又、愉しいのではなか
ろうか。

秋山夫妻のSMプレイは、確
かに一步、前進したようであっ
た。彼の謂う「双虐」というプ
レイを、舞台の残酷ショウに、
どのように、とり入れるかが、
これからの課題でも、あるかの
ようであった。

熱して喋り乍ら、次々と口に
運ぶウィスキーで、幾許かの酔
いを発したのか、その時、彼は
始めてベレー帽を脱いだ。

異様な頭に、私は思わず眼を
瞠る。まるで古い唐人のように
頭の頂点で、丁髷さながらに、
クリップで無雑作に、頭髮をと
めてあったからである。

「おや、随分、変わった頭です
ね」

思わず、そういうと、彼は得
たりとばかりニヤツと笑い、ク
リップを抜きとると、頭を振っ

た。バリりと毛が肩に垂れて、指でしごく
と先端が胸下までも伸びている。

「コレは、もっと長いですよ。おい、辻村さ
んに、おみせしてごらん」

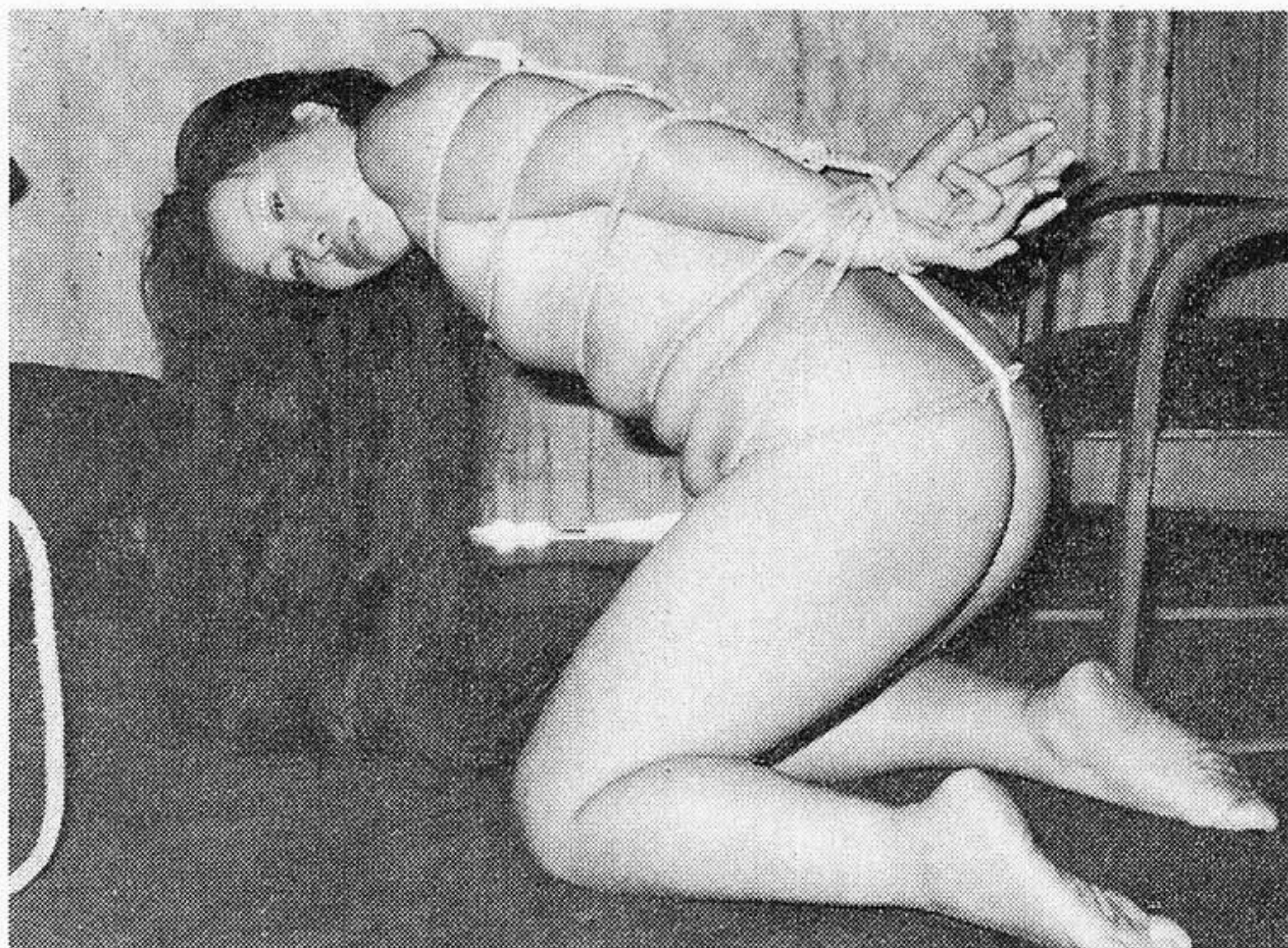
夫にいわれて、この貞淑なる夫人は、「ハ
イ」と微かにうなずくと、うなじにくるくる
と東ねてあった髪を、颯々と解き放つ。ここ
ろもち背をそらせると、タタミまでも届く、
正に丈なす緑の黒髪であった。

ホウと感嘆の息を洩らして、思わず私は、
しなやかな黒髪に手を伸ばしていた。

「見事としか、いいようないですネ」

私は衷心から讃辞の声を放った。

「外人も、この黒髪が好きなようです。アノ
黒髪が結構、責具に早変わりするんですよ。
馬乗りになって首に巻いてしめると、男共は
しなやかな、しめつけられる感触にウットリ
しています。私は時々、あの黒髪で、吊り下
げてみたり、髪で両手を縛ってプレイするの
ですが、倒錯した美を感じます。もう十年以
上、一度も切らせてはおりません。唯、手入
れが、大変らしいですよ。どうです。百聞は
一見に如かず。辻村さんも、黒髪がお好きの
ようですから、早速やってみましょうか」
嗜虐の情熱で双眸をきらめかせて、秋山美



智夫は、私の心を見透すような、誘いの言葉をかけてきた。

「ええ、是非……」

「奇クにフォトのせて頂いてもいいですよ」

それも先刻承知で、彼は、よしとばかり両腕を肩で、数回、ぐるぐる回転させると、

「オイ、脱ぐのだ」

と、いかにも九州男子らしい命令口調で、夫人に顎を、しゃくったのであった。

× × ×

「いつも私が縛るものですから、一つの型に嵌まってしまいます。辻村さん、是非ひとつアレを縛ってやって下さい。決して斟酌や、手加減は要りません。どのような強烈な緊縛にでも耐えられるよう、飼育してありますから、思いきり存分にやって下さい」

「じゃあ、お言葉に甘えて……」

私の嗜虐心は、いきいきと弾みだす。数度秋山夫妻とSMのプレイの場を持っているが私が主導性を持って、ローズ秋山を緊縛したことはなかった。私の繰り出す縄捌き、緊縛の手段に、何かを求めようとするのか、秋山美智夫は、いつものように、自らの手で妻を縛ろうとはせず、私に緊縛を譲ったのであった。

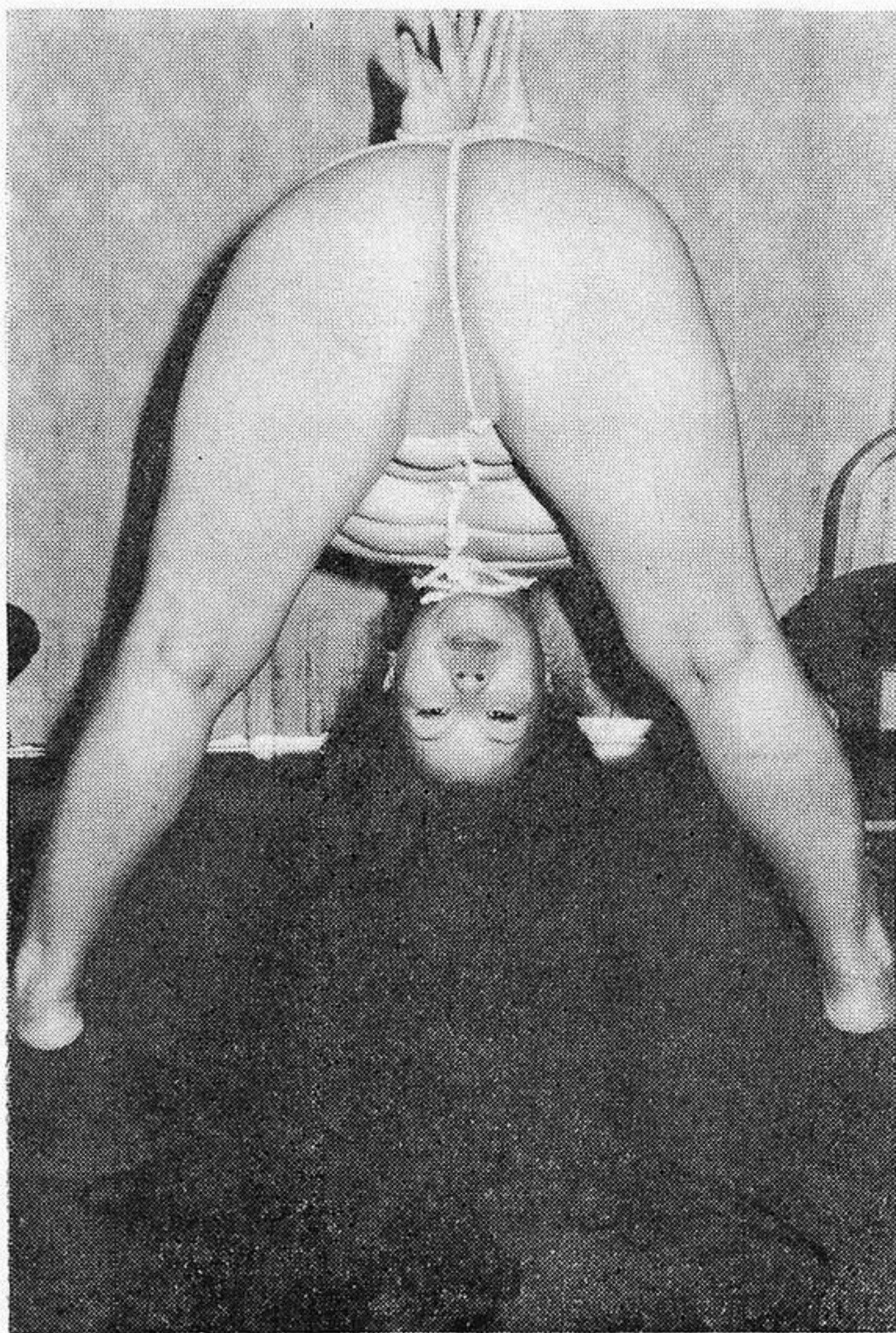
「さあ、早く来るんだ——」

「ハイ」と隣室で声がして、襖が開くと、秋山夫人の裸身が、私の眼前に佇立する。

数年振りに見る彼女の裸身に、艶々しい肉がのって、全身に仇っぽい脂が、のりきっていた。連日「残酷ショウ」に憂身をやつした頃の、傷まみれの瘦身が、まるでウソのよう

である。

ごく一部分を残して、剃毛したあとの青味がかった皮膚もなめらかで、ショウの夫婦にとっては、それがエチケツトでもあるらしかった。むさ苦しくない程度に、形よく整えて残してある——。その剃跡からみて、私とのプレイのために、わざわざ整毛したあとが歴



然としていた。

謂わばプロであり、西欧で、SMプレイの他流試合をしてきた夫人を縛ることに、そこはかなき感激と昂奮を覚えて、私は、持ち出して来た、縄束の塊りを捌き始めた。

夫の眼前とはいえ、この艶冶な夫人の肉体に自由に触れ、緊縛は思いの尽である。嗜虐を好むプレイヤーとしては、正に男冥利に尽きる思いで、私は夫人を引き寄せた。

「じゃあ、縛りますよ」

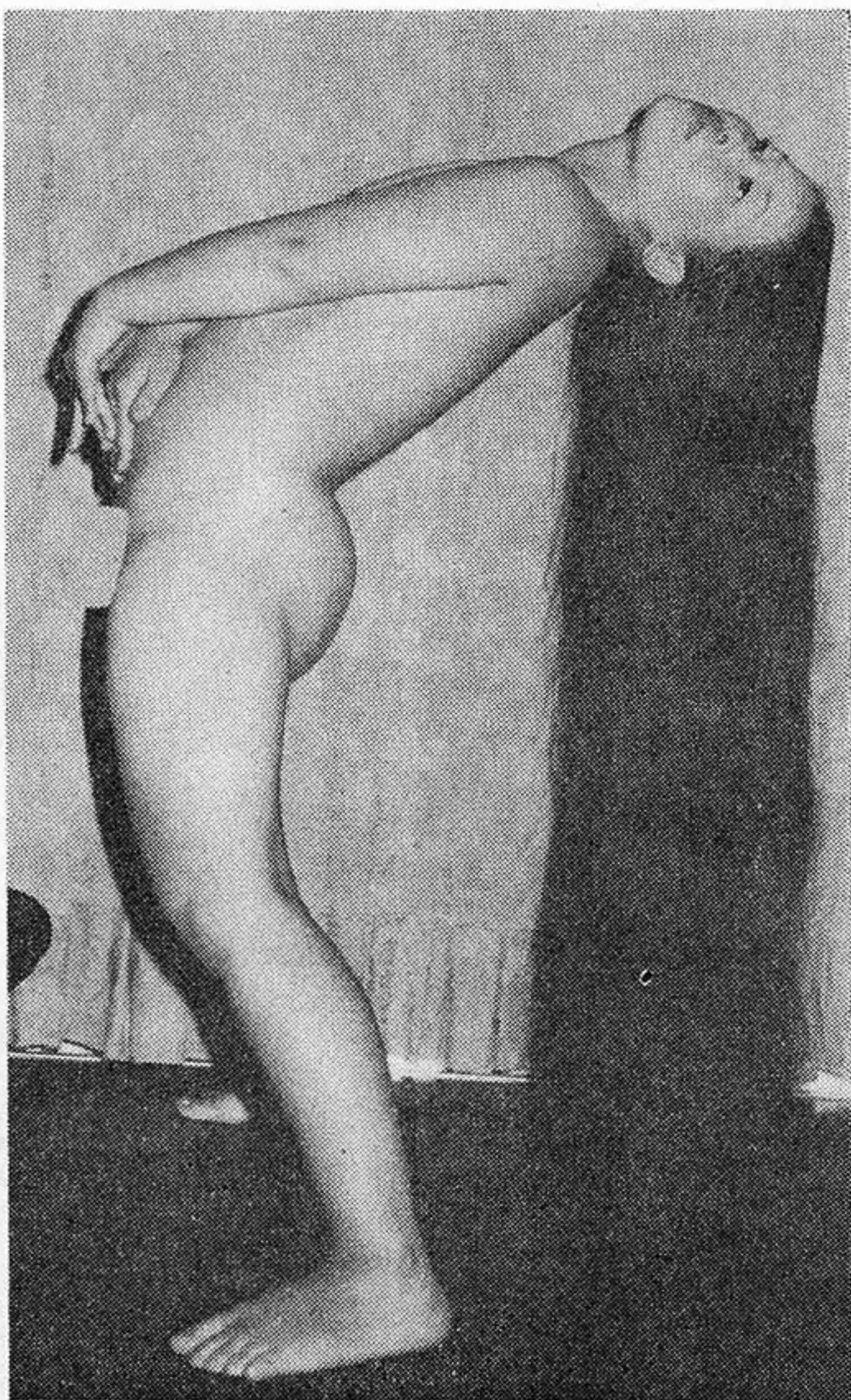
「どうぞ……手加減しないで下さい」

夫人は既に、プレイに心を走らせて、情の籠った眼差しでニコリとした。

いきなり、強烈な露出ポーズもとりかねて私はオーソドックスな緊縛を始める。

胸の上から臀部まで、縄を引き締めながら等距離に縛ってゆく。手の甲を背後で合わせて犇と縛り終わると、次に縦縄を首にかけ、一条、一条に結び目をつくって、丁寧にかけてゆく。縛ること自体を愉しむかのように、私はゆっくりと、かなりの時間をかけて、縛っていった。気のせく時なら、到底こんな、念の入った作業は出来ない。

いう迄もなく、下腹部で結び終わった縄は股に深々と喰い込み、背後に回って首につな



ぎ、背で三角形をつくってゆく。贅肉のついた裸身に縄は喰い込み、胸から腹にかけて、ポックリと数個のふくらみが出る。

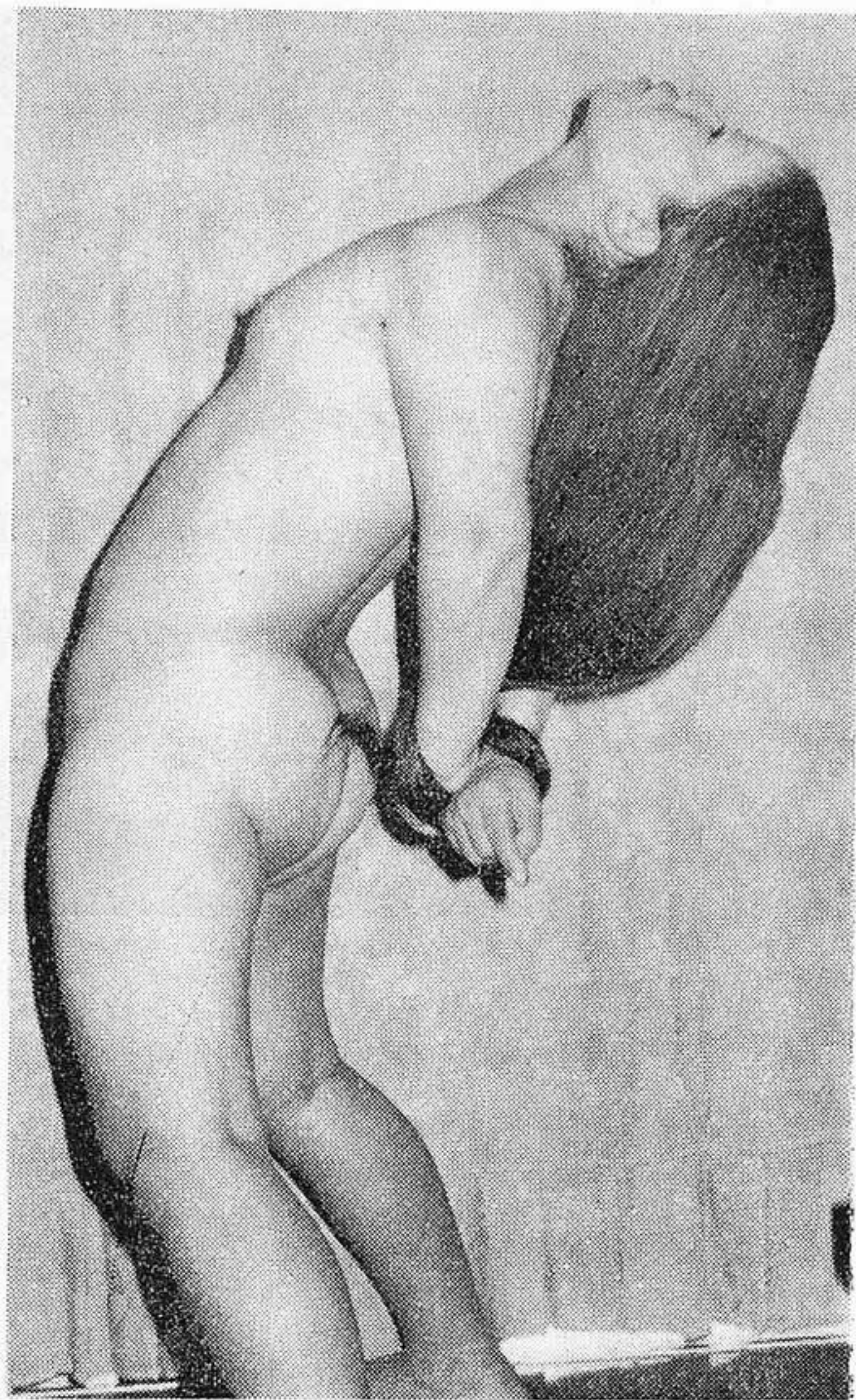
カメラに走って、緊縛のポーズの前後を撮る。長い黒髪が背に垂れて、緊縛した縄目をすっかり蔽ってしまうので、髪を束ね、私は更に跪かせ、開股させて、股のぞきのポーズをとってもらって、喰い入る股縄を撮るなどカメラに忙しかった。

「正直いって余り緊縛感はありませんねえ」冷静にみつめる秋山氏がポツリと呟く。

確かに被虐にうちひしがれた、強烈なポーズには程遠い、これは縄の遊びであった。

「ええ、手間のかかった割に、被虐感には乏しいでしょうね。いきなりは、やりかねて、美しく縄を掛けてみたまでです」

私は思わず頬をカッとさせて弁解する。私らしくもない生ぬるい緊縛を指摘されて、真



剣にSMプレイに取組んでいる彼の手前、思わず忸怩たらざるを、得なかったのである。「どうぞ遠慮なくやって下さい。辛抱出来ずヒイヒイいうようなら、私が張り飛ばしてやります」

強い口調で、秋山氏はそう言って、かなり厳しい表情で、妻の緊縛を凝視するのであった。かなりの時間をかけて、やっと解きほぐすと、私は丈なす黒髪の、この美しき裸像を

カメラに納めたい意欲にかられた。ぐいと背をそらしたポーズにカメラを向ける。「残酷ショウ」当時に比して、子供を産んで、贅肉をつけてから、確かに彼女の体は幾分、硬くなっていた。嘗てアダジオで、鍛えに鍛えた柔軟な裸身も、出産以来、ショウやプレイから遠ざかっている間に、みるみる肉を蓄え、その贅肉が、彼女の柔軟さを奪ったようである。

それでも、徐々に上体を背後に、のけぞらせてゆくと、この誇り高き見事な黒髪は易々としてカーペットのフロアを埋めてゆく。

惚れ惚れとした思いで、この緑の黒髪を讚美していた私は、思わず近寄ると、黒髪を束ねて、夫人の両手を背後に振り、その黒髪で両手を縛ったのであった。

黒髪の縄は、容易に解けるであろう。しかし、黒髪の捕縄は、誰にでも試みられる手段ではなかった。

黒髪に惚れたといえ、秋山夫人に対して誠に失礼に当たる言い方かも知れないが、事実、その時の私は、彼女の丈なす黒髪に、異常に魅せられたことは紛れもなかった。

魅せられた私の心は、嗜虐に騒ぐ――。

その俛、抱きかかえて、小卓に押し倒すとパバリと黒髪は解けて、慌てて夫人は小卓の端を押えた。

胸元を、きつく小卓に縛りつけると、ぐいぐい屈曲させる。闇雲の緊縛が、小卓の上で始まり、忽ち数条の太縄が、縦横無尽に彼女の裸身に絡みつき、締め上げてゆく。

夫人は、ウンウンと、切迫した呼吸を洩らし乍ら、この緊縛を、こらえていた。

双臀を掻き分ける股縄が、次々と喰い込ん



で、尾骨の辺りで締めた縄で両足首を縛って、小卓の下をくぐらせて引き絞ってあるの
で彼女は身動きもならない。

ぽっくり盛り上がった、しやぶりつきたい双臀が、咫尺の間に、高々と聳えている。
激しい衝動にかられて私はまるで憑かれたように、この豊かな脂の、のりきった臀部にパシリと平手打ちの一撃をくれ、その刹那ハッと我に返った。

私の背後に、夫の秋山氏の眼が、らんらんと光っていた事を意識したからであった。
ドキリとした思いで振り返る。

彼は、私の平手打ちなど、一向に意に介さぬ風で、深々と腕組みして、この屈曲のポーズに、熱い眸を走らせていた。

「いいですね、これは……」
振り返った私に、彼はポツ

りと呟く。

矢庭に、細い一条の縄をとり上げた彼は、発止と、剥き出しの臀部を叩きのめす。

「ヒーツ」

悲鳴と共に、みるみる桃色の線条が、くつきりと斜線を引いて、巾広い臀部を横切る。
身じろぎもならず、夫人は、痛烈に襲いかかる縄ムチを双臀にうけて、たまゆらの呻きと悲鳴を洩らした。呻きは甘くなまめいて、部屋の空気を震わせる。

「この小さいテーブルに、ハリツケにしてみたら、どうでしょう」

秋山氏の提案である。それもよからうと応諾すると、忽ち乱暴に縄を解き、息つく間もなく、私達は、今度は二人がかりで、次の作業に移っていった。

彼の太縄が、夫人の上半身を、縛うように絡めて、卓子ごと締め上げてゆく。

私は私で、白々とした太腿を大きくはだけ両膝を折って、踵をピタリと臀部に密着させて、両腿を縛り上げ、腿を閉じられぬよう卓子の下を通して引き絞ってゆく。

刈り込まれて、形態も鮮かな夫人は、これからの私達の行為に、甘く胸を疼かせているようで、既に泛かぶ欲びの表情の奥に、陶醉

の期待が、そこはかとなく秘められているかにみえる。

小卓に縛と縛りつけられた裸身は、身じろぎすらも許さなかった。

秋山美智夫は、卓上を両手を握って、頭部の方から、徐々に立ててゆく。

ジリッと前ずさりに全身が下がったが、その俛、小卓に密着して女体は屹立してゆく。

それは、先日、私が佐野みさ子に対して行なったプレイと同様であったが、人間の考えることは皆同じと、内心はフト可笑しく思い乍ら、そのくせ、私はしきりに屹立する女体にシャッターを切りつづけていた。

「バイブがあったら、貸していただけないでしょうか？」

「いいですとも……」

我が家だから在庫は豊富である。請いに応じて忽ち数本、耽奇房より取り出してくる。

彼の目的は、いわずと分かり切っていた。プレイの感度を、急速に昂める手段としてそれは最も手っとり早い方法であろう。

既に期待を表現している夫人は、あきらかに疼かせている。

ぐっと息を嚙む光景が、そこに展開してゆく――。緊縛を私に任ずるというおき乍ら、

いつしかプレイの主役は交替していた。

嗜虐の欲望の虜となつて、秋山美智夫の愛情は発露する。

私という傍観者を得て彼の意欲は、ますます、そそり立ってゆくかのようであった。

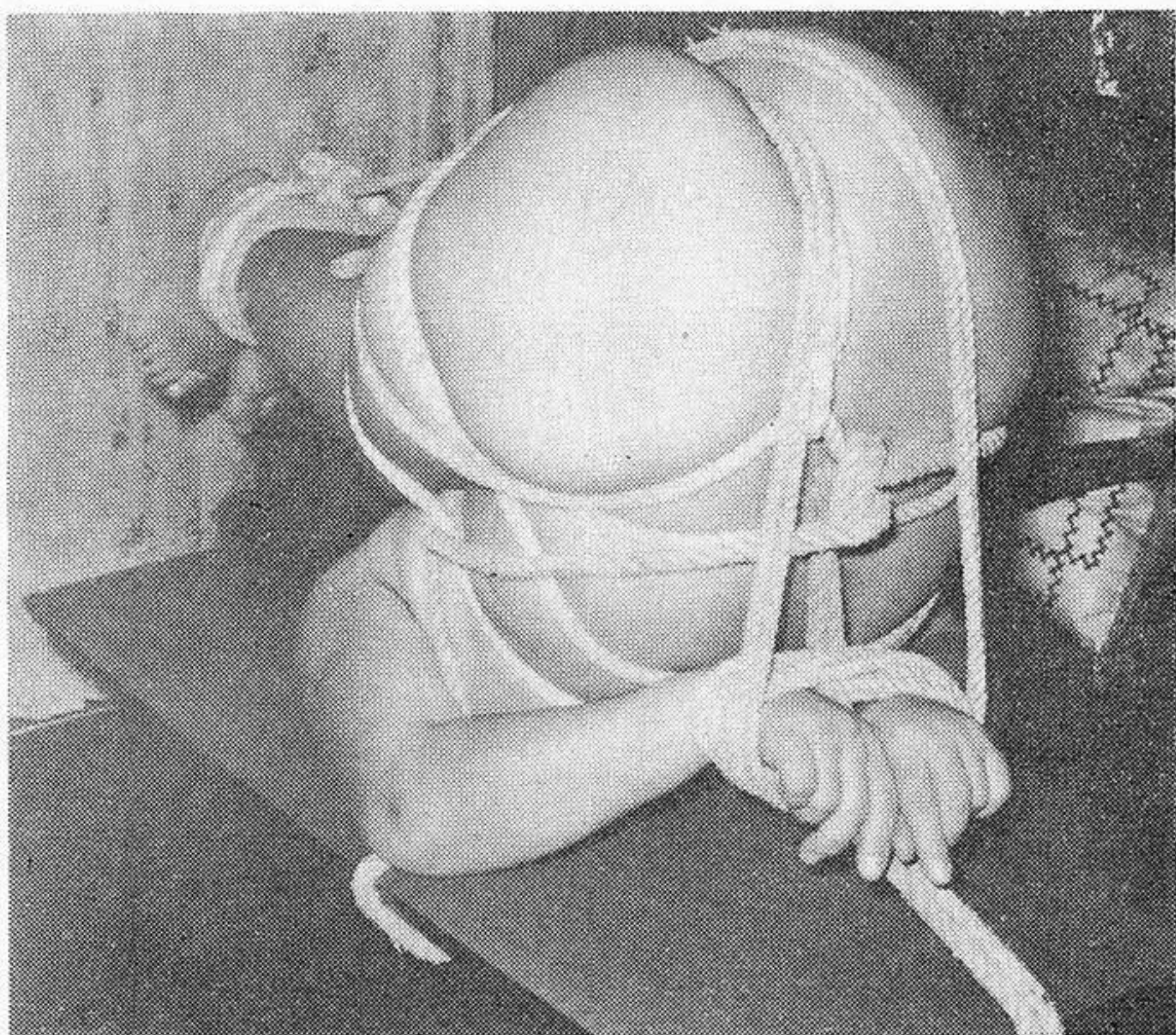
バイブに変わって、オーラル・インタコースに入る。

ぬめった舌端を赤らませ、彼の長い毛が、間歇的に揺れた。

官能の乱れに、前後不覚になって秋山夫人は肉感の叫びを夜のしじまにぶちまけ、身動きならぬ堅い束縛の裸身を、のたうたせるのであった。

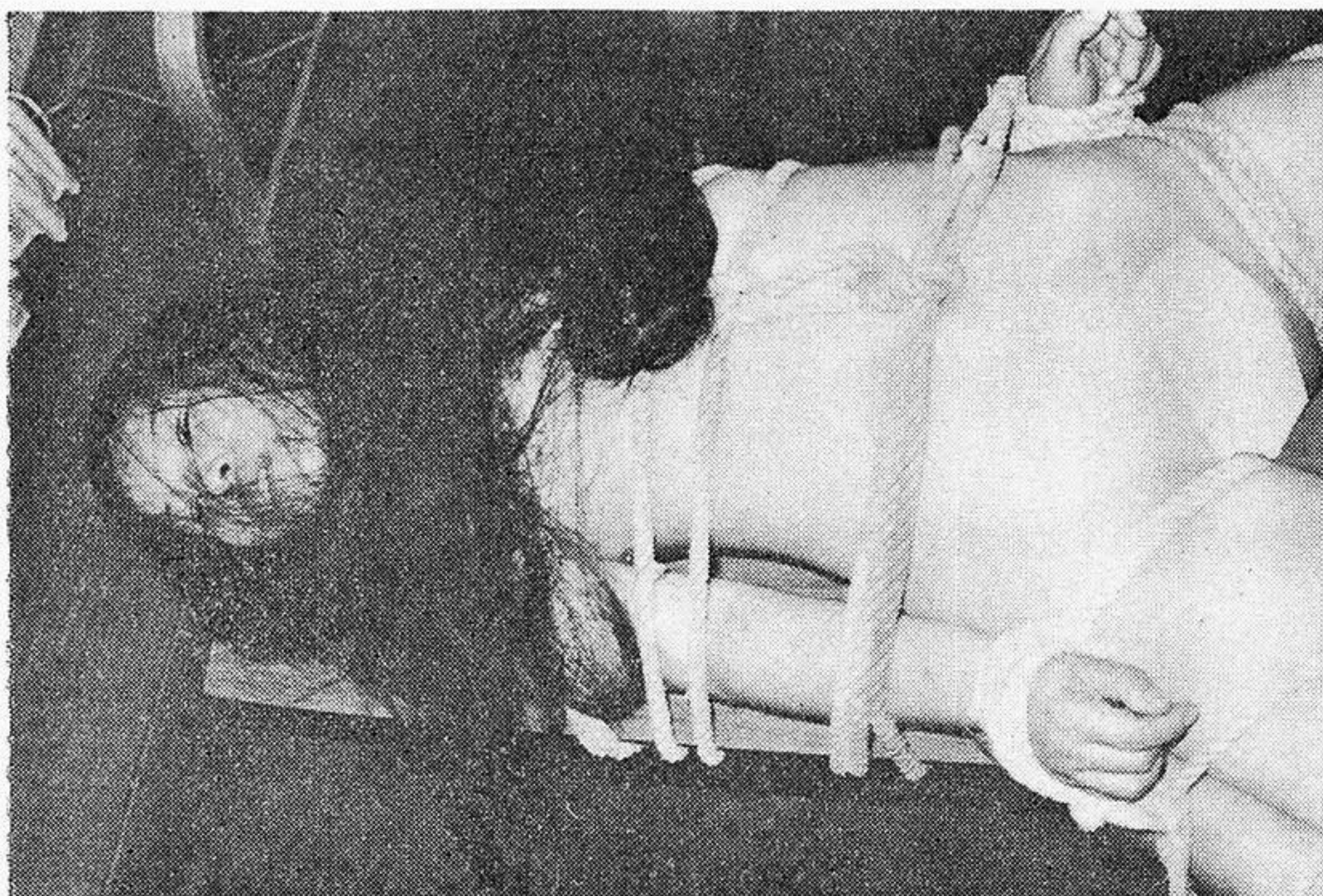
存分に味わって、彼の紅潮した顔が、私をみる。荒い息遣いが、彼の感度を如実に示していた。

「どうもノドが渴いて仕方ありません。久し



振りの昂奮のせいでしょう。恐れ入りますが、お水、いただけないでしょうか。よかったですら奥さんに持ってきて頂けたら……」

大きく息を弾ませて、彼は水を請い、私の



家内に、それをこの離れ家ま

で届けさせようとするところ

に、何かの魂胆があるように

思えた。ナマナマしい、嗜虐

の一端を覗かせ、動転して、

被虐を甘受する夫人の、あら

れもない肢態を、私の妻に見

せようというのであろうか。

シヨウマンの、公開的な根性

を感じて、私はうなずくと、

冷水とサイダーを持ってくる

よう、母屋で所在なげにテレ

ビをみている妻に告げる。

「私がゆけば、お邪魔でしょ

う。あなた、持って行って下

さいな」

「持ってきてもらいたいのだ

よ」

「変ネ、どうして」

「秋山さんが、見せたいらし

い」

「まあ——」

二の句がつけず、妻は表情

を動かしたが、素直にうなず

くと、冷蔵庫を開けた。

直ちに私は戻る。

仰向けの元の姿の俤、息苦しげに秋山夫人

は恍惚めいた呻きを、あげつづけていた。

「すぐに届けますよ」

「そうですか。やはり辻村さんの奥さんです

ね。流石ですなあ」

私は苦笑する。夫の意に添う妻だから、こ

の年になっても、やはり可愛くもあり、数多

の女性と接触し乍らも、特定の女性に走らぬ

のであろうか——。

ヒタヒタと足音が聞こえ、閉ざされた離れ

の障子の外で、微かな声がする。

「ここへ置いておきますよ」

「いいから、入っておいで——」

「……………」

声もなく躊躇していた。

「どうぞ、奥さん——」

秋山氏の声につられて静かに障子が開く。

強ばった困惑の笑みを泛かべて、妻が入っ

てくる。私達夫婦と、彼等夫妻とは、プレイ

を離れた、個人的な交際の仲であった。

泊まった朝など、息子や娘達と一緒に茶の

間で朝食を摂り、家内とも談笑して、SMP

レイの話は茶の間では、おくびにも出さぬ彼

等の才覚であった。謂わば、家族ぐるみの交

際に近い。そんな間柄になっては、このナマナマしいプレイの光景は、家内にとっても、見辛かったに違いない。

秋山夫妻には、私達夫婦の、SMプレイの有様を話しもし、折ふしに撮った、妻の強烈な被虐フォトも見せていた。

それだけに、彼は、自分達の、あからさまな、もう一つの顔をみせたかったのである。その反応を秘かに確かめ、嗜虐心を、より以上に昂めたかったのかも知れない。

私は洋間との境の板襖をガラリと開けて、「どうだい、強烈だろう」

と、妻をかえりみる。

バイブが屹立し、微かに唸り続けていた。

恍惚に酔い痴れる夫人に眼を落とし、流石に妻は顔を赤らめた。

「私にくらべ、少し太っていらっしゃるから膝を折り曲げて長くその儘では、苦しいでしょう」

眼をそらしていう、いたわりの声に、夫人の恍惚の呻きはピタリと止まる。

同性に、羞恥の究極のポーズをみられているという愧かしさが、夫人の熱した欲情に、一抹の水をかける結果になった様であった。

唯、どうしようもない、微かな喘ぎのみが



夜のしじまを乱していた。

贅肉のついていない家内なら、こうしたポーズも平気であり、私も過去、再三再四、試みて、経験済みであるが、かなりの長時間、よく耐えていた。その代り、秋山夫人のような、みずみずしい、新鮮な魅力は求められなかったし、年令的にいっても、それは無理で

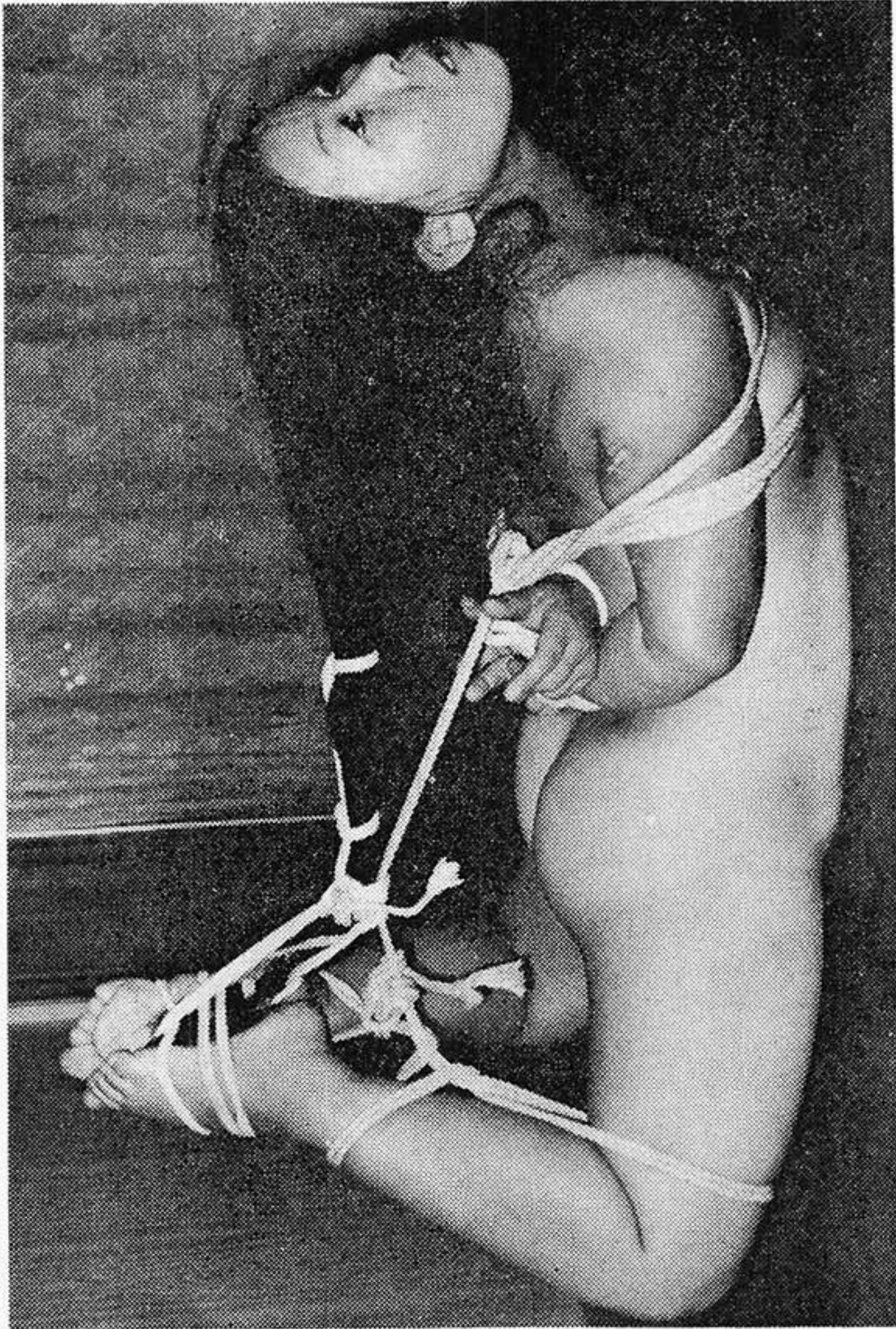
もあった。

これみよがしに、秋山美智夫は、とり出したバイブにかえて、顔を近づけてゆく。

ソワサン・ヌーフに、喘ぎが歓喜に変わってゆく。

「一緒にプレイしてみようか」

刺激されて、心を昂ぶらせ、つい誘ってみ



たが、

「でも、未だ子供達が、茶の間に、いますもの、ダメですわ」

と巧みに逃げ、

「どうぞ、ごゆっくり」

奇妙な挨拶を残して妻はそそくさと立ち去っていった。SMに燃え上がった場に、心の

準備もなく闖入してきても、到底、すぐには

同化出来なかったのであろう。強いて言えば拒む妻でないにしても、何か今夜の場合、それが、ふさわしくないようにも思えて、敢えて私は強要する気にはなれなかった。

ナマナマしいSMの現場に來合わせたというだけで、妻にとっては、精一杯の協力

であったかも知れない。

妻の退散を契機に、夫人の感情は一入、昂まったのか、紛れもなく極致の態であった。

放心の態の、夫人の体を解き放ち、彼は飽くことなく、次のプレイに挑んでいった。

両手足を縛って弓なりにさせ、長き黒髪を縄で縛って、両足の隙間に引き絞ってある。

髪を引き絞られて、夫人は上体を宙にうかせ、再び呻き始めていた。

髪責めの一種であろうか——長き黒髪は、種々の方法で責めをエンジョイさせてゆく。

「さあ、虐めてやって下さい。存分に……」

いわれて私は夫人に近づくと、両足の裏に絡めてあった黒髪を抜きとり、髪を握って、ぐいと上体を持ち上げる。

私のカメラをとり上げて、秋山氏は、私達のプレイにシャッターを、きっていた。

夫婦共、流石にタフである。一旦SMプレイを始めたとなると、止まり、休むことを知らない。次々と新手の虐め方で、飽くことなく続行してゆくのであった。

それは、彼等が外地で体得してきた、数々のプレイの、復習でもあるかのようにであった。

出産という変則事態で、心ならずも中断し

ていた、SMプレイのカンを取り戻すため、近づく公演の日を前にして、彼等夫妻にとっては、真剣そのもののプレイであったかも知れない。

私にプレイさせて、その中から、何かを掴みとろうとするかのように、立ちはだかる秋山氏の双眸は、私の行為を凝視していた。

私は奇妙な立場におかれている。

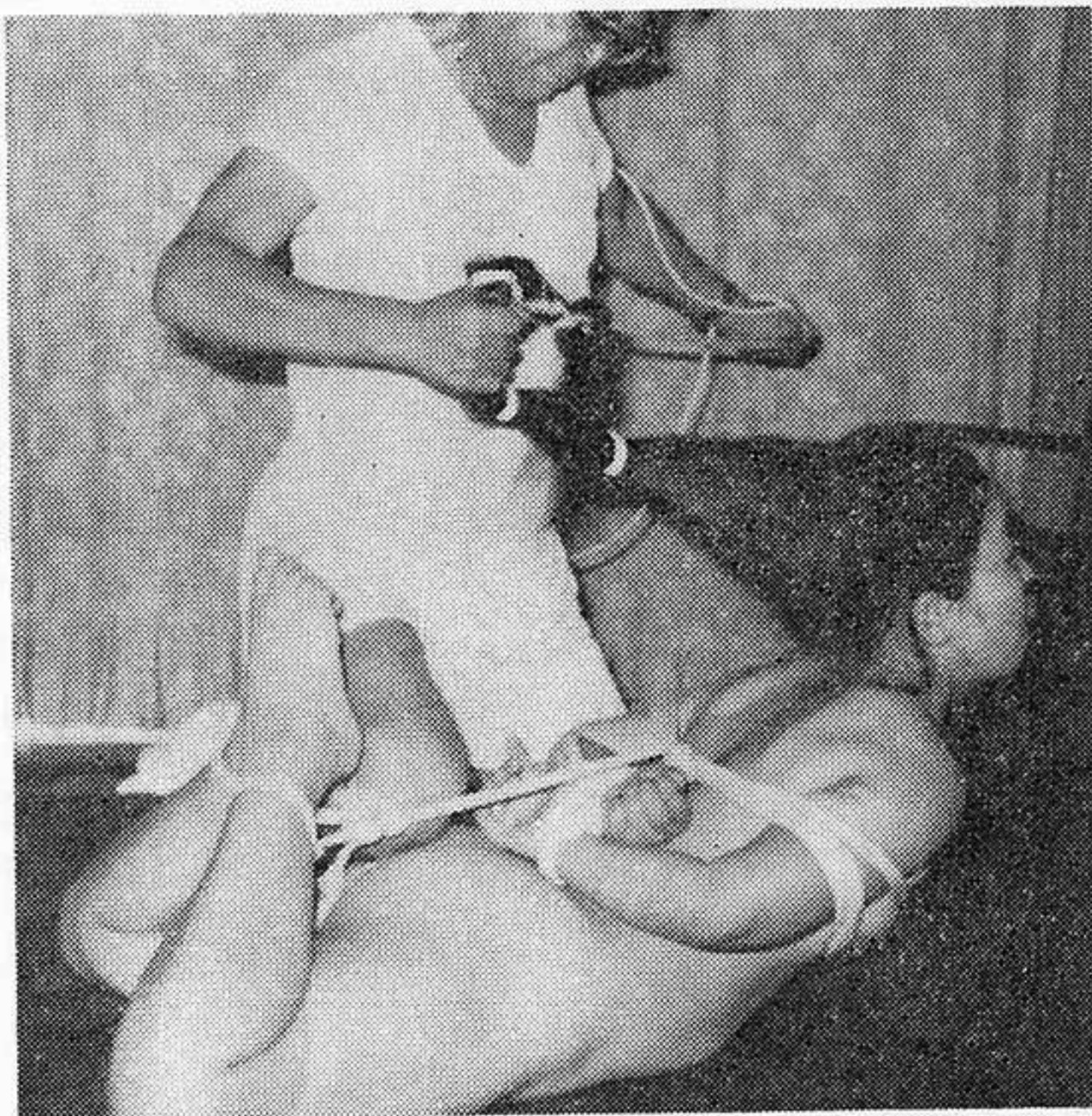
最愛の彼の妻を、むげにも虐めかねさりとて、存分に虐めてくれといわれども、やはり、彼の本心を忖度する気持が動くのを、どうしようもなかったのである。

何かしなくてはならない。そんな焦燥にかり立てられ、さてこの縛り方でどうすべきかと、咄嗟の思案の末、思い切って吊り下げてみようと思を決める。

右手で、しっかりと髪の毛の根元を握りしめ、左手を両足を縛った縄にかけると掛声一声、えんやと宙に吊り下げる。

ポリウレームのある秋山夫人の体重は予想外に重く、懸命の力をこめて、髪と縄で持ち上げてゆく。

腹部がフロアから辛うじて離脱した



時、彼女は、我が身の体重の重さにこらえ切れず、ノドをきしませて、苦悶の叫びをあげたのであった。僅かに掛けられたこの縄と、黒髪だけで持ち上げられては、いかに飼育完璧の彼女とて持ち耐えられるものではない。つきささる悲鳴と悶絶に、数秒でおろしてしまう。

腹部を抱えて持ち上げたら、何の苦もない

ものを、私はあえて魅力の根源の黒髪に、こだわっていたようである。

「代わりましょう」

秋山氏が、私を押しつけるようにして夫人に近づく、器用な手付きで、黒髪の尖端まで、縄で編んでいった。

彼は既に、虎の褌のようなショートパンツ一枚になって、浅黒い裸身を剥き出しにしている。

双臀に足をかけ、掛声大きく、えいやッと黒髪を引っ張り上げる。

声一杯の悲鳴を挙げて、彼女はのけぞる。髪の毛の尖端を掴んで、秋山氏は、それを曳縄のようにして、広くもないフロアを引きずり廻すのであった。

口一杯に開いた、彼女の絶叫が、母屋に聞こえはせぬかと気遣うばかりに大きく、けたたましかった。

黒髪の端っこを、足首を縛った縄の下に通すと、えいっと持ち上げる。

下半身が、ぐいと持ち上がり、甘美な苦悶は一入、高まってゆくようであった。

果ては、髪の毛の尖端の縄を、天井に結びつけて引っ張り上げ、横倒しになっ

た女人に、ローズのかぐわしい匂いを求めて彼の手は、スラリと伸びた夫人の片足にかかって、直角になる位まで、高々と持ち上げ、彼の太く短い趾指が、這いずり廻るのであった。

息もつかせぬ連続のプレイに、私はもう完全に傍観者となって、二人の愛の行為を、神経を集中させて見学していたのである。

× × ×

嗜虐の快樂のプレイのあとの、快い疲労に身をゆだねる秋山夫妻と、机を隔ててビールを汲み交しながら私はパリの秘密クラブでのSMショウを聞きたがっていた。

「まあ、これを御覧なさい。これはアメリカのSM雑誌ですが、向こうでも、かなり出廻っております。沢山のSM漫画が掲載されていますが殆ど同工異曲でしょう。ムチとか、とげを植えた蠅叩きのようなものとか、先が錐のように尖ったハイヒールなどです。それに革具の手錠、拘束帯など、よく飽きもしないなと思う程、似たりよったりです。サド・マゾは男女、相半ばしているよう

ですが、日本に比して、マゾ男性が、若い娘から責められているフォトや漫画の多いのは驚きました」

彼は数冊のSMポルノ雑誌を私に差出す。クリーブランドで発行のビオレント・アドベンチャーは五ドル。これはすべてフォトで三人の女性と二人の男性が、SM交互の交換プレイをしている。メイド・トゥ・オーダー

「という題で、二人のプレイガールがメイドをいじめ、男性が加わって、くんずほぐれつといった内容である。

同じ発行所の、サム・ワンという漫画誌は三・五ドル。全篇これSM漫画で、冗句的な解説がついているが、秘部は懇切に描かれてある。

ハリウッド発行のリージェント・ハウス社

のは、漫画絵入りの読物で、これは、かなり強烈な、SM交互のプレイを描いてある。

女性はバタフライをつけて描き、バタフライの上から、ハームシヤレーがチラチラ覗いている程度の、公開しても差支えなさそうな雑誌で三・五ドル。

彼から奨められる俤に、パラパラとめくって、フォトや絵だけを眺めていったが、確かに彼のいう通り、SM感覚は初歩である。



現在、日本のSM誌が、かなり外地へ流れてゆくそうであるが、SM誌については、日本の方が、遥かに高度であり、どぎつい感じを受けるのであった。

際だって奇抜なアイデアもなく、似たりよったりの、簡単な縛りのポーズで、臀部のみをつき出し、ムチ打ちのポーズである。

ボインだけは無闇矢鱈にデッカク描いてあるのも特徴で、これを秘かに持ち帰ったとて随喜の涙を流すという程のものでもない。

「デンマークにおった時は、数十冊ぐらい、SM雑誌を集めていたのですが、税関で没収されるのがオチなので、置いてきました。この雑誌は、帰国の途中親しくなった外人から、プレゼントしてもらったものなんですよ」

「あなた、パリでのお話、なさったら……」

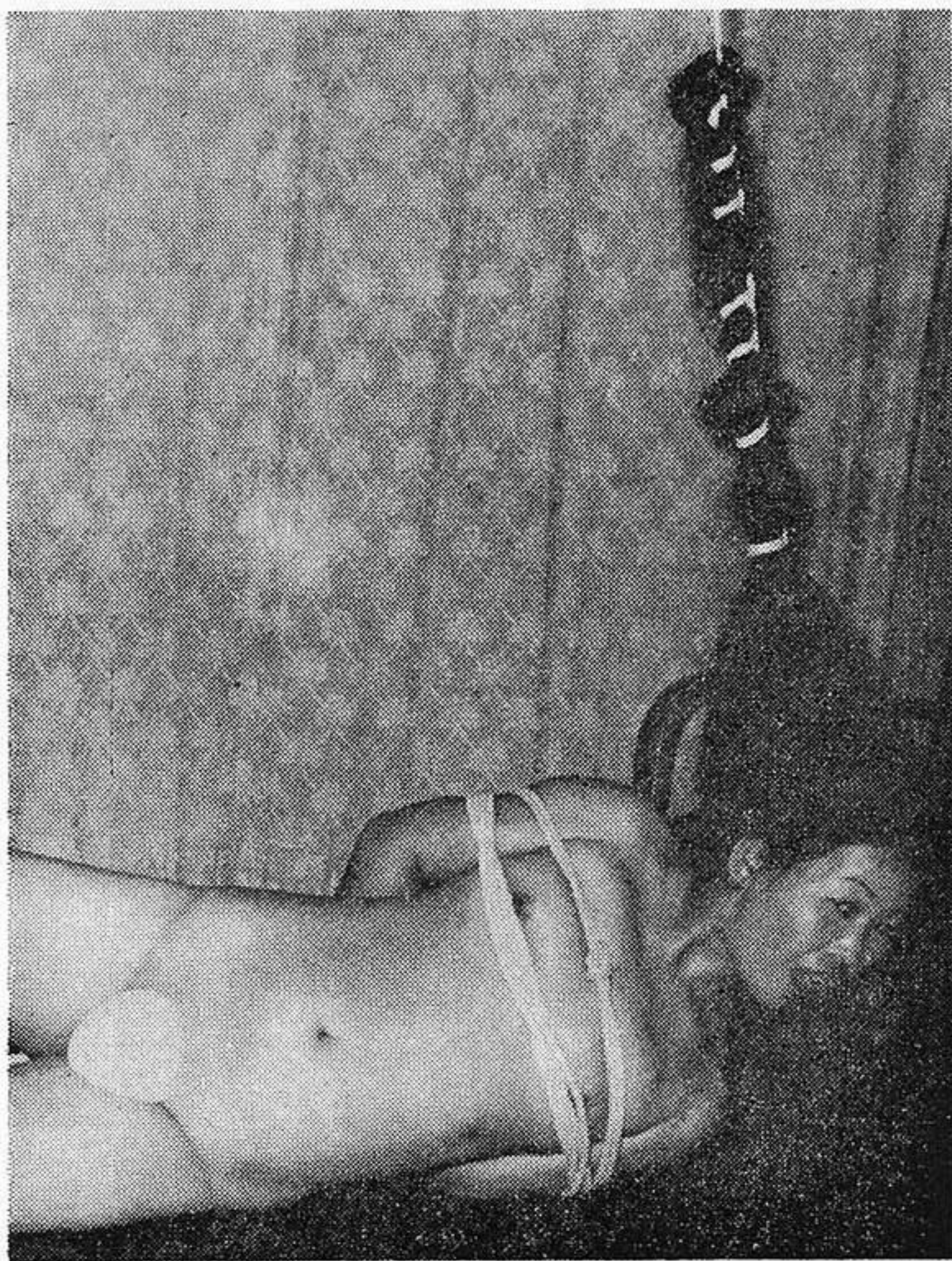
傍から、秋山夫人が口添えする。

「フフ、例のあれか」

彼は、憶い出を辿るように、眼を細めて、うなずくと、

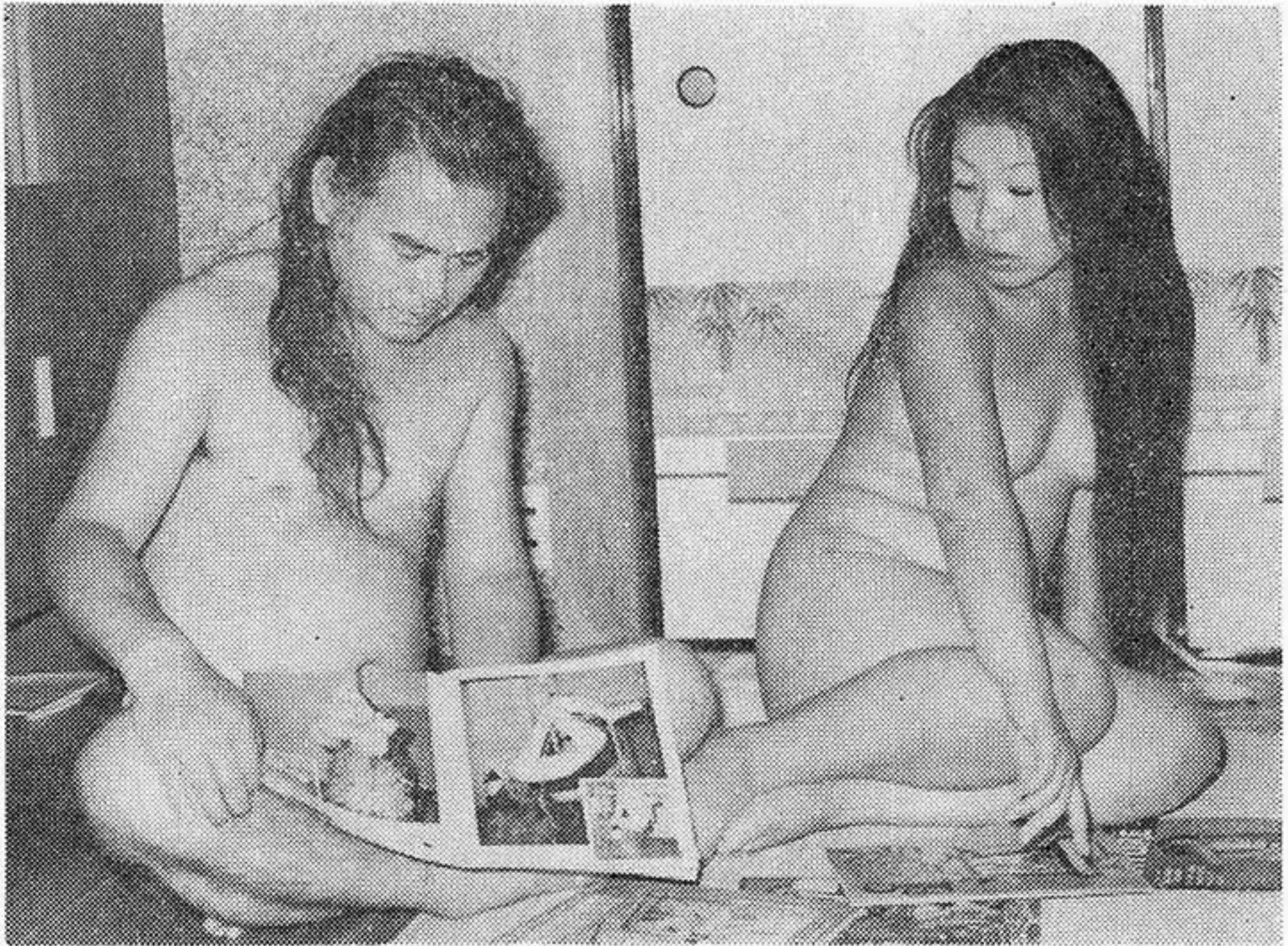
「ショウで知り合った、SMの連中に招待されまして、SM乱交パーティに私達、出席したことがあるのです。会員組織の機関誌がありましたネ。これには、ホモやレズ、サド、マゾの相手を求める便りが、ぎっしり満載し

てあります。中には、自分の顔写真や、全裸写真まで堂々と、のせています。私達、残念ながら読めませんが、大体はカンで、彼等の求めているものが分かります。SMの世界といても、実に多種多様だと思ったのです。この機関誌の主宰ですが、いつもの様にSMショウが終わって、そのクラブから、車にの



せてもらったのは、午前二時半です。古びた大邸宅でしたが、そこが何処か、見当もつきません。私達のような夫婦連れもありますが大抵は、相手を求めてやってきた男女でしたよ。四分六で、女性の方が多かったですが、圧倒されそうなボリュームたっぷりの女性群に混じって、濃化粧の六十近い婆さんまでが来ているのには驚きました。男三十人、女四十人ぐらいのパーティでした。私がチビに見

えて、胸を張ってはおりましたが、東洋人は私の外に、中国系らしい男性が二人ぐらいてどうしても奇異の眼で、みられ勝ちでした。



なやかなムチは、かなり強烈に飛び交うて、盛り上がった臀部には、無数にみみず腫れ

若い男女による、フロア中央でのSMショウの間に、私達は全裸になりました。勝手が分かりませんが、ショウの仲間のKという青年がすべて教えてくれるのです。

が走っており、女の絶叫は甘く、マゾの快樂に陶醉しているようでした。いつしか、ポツリ、ポツリと、赤や緑の灯が、部屋の片隅にとり始め、暗さに馴れた眼には裸身の人々の姿が、はっきりと見分けられます。



全裸に、真紅のタイツ、踵の細いハイシューズを履いた、数人のメイドが、山盛りのオードブルやワインを、あちこちの机へ運び始めます。呑み放題、喰べ放題なのです。大広間一杯に絨氈を敷きつめ、幅広いソファが適所に配置されており、お馴染み同志は既にソファに転んで戯れていました。顔馴染みのな



い場合は、主宰者側に告げておくと適当に、性向に合った人を当てがってくれるのです。会場が平静を保っていたのは小一時間ぐらいでした。酔いの廻るにつれて、これこそ酒地肉林というのでしょうか。男同志、女同志、男と女が入り乱れ、野獣の咆哮するような、猥らな痴声が、さしみに広い大広間を圧してお

りました。

いつしか、私と妻は離れ離れになっており、妻は相手を変えて、サジストになって二度、自分が虐められる方に回って一度——と、乱痴気騒ぎの中に埋没していったそうです。私は私で、八十キロ近くもある、凄い肥満タイプの女に求められ、まるで、大木に蟬が止まっている様な恰好で、それでも存分に、このマゾ女性を叩きのめしてやり、充分満足させてやりました。ムチが、のめり込むようで、ブヨブヨの白い脂肪の塊りには、相当強く叩いてもこたえないようで、もっと強く、もっと強く、と叫ばれる始末です。

電動チェンに、片足吊りにされている、黒人とのミックスの娘の、浅黒い肌に、猛烈な欲望を覚え、吊り下げた相手の男が、他の女性に誘われて、その場を離れた隙に、この小麦色の娘を降ろして、抱いてやりました。この娘の臀部はピョコンと、うしろに飛び出しており、この娘を雁字搦目に縛って責めましたが、日本人の正常体位が、こうした黒人娘には、どうしても不適合なことを、つくづく知りました。

左右の両手足を縛って、股を開かせて、顔が股から私を覗くようなポーズをとらせたら

実に最適なのです。ムチ打ちによし、鑑賞によし、セックスに又よしで、おしりの垂れ下がった、扁平的な、日本女性には、望めないものでした。私は、この黒人娘が気に入り、遂々、朝の散会まで、彼女を独占してしまいました。娘の名はバーバラ。私にマゾの愉しさを教えてくれたミレーヌと共に、忘れぬ



女達です。こうした耽溺の中では、案外ジェラシーは湧かぬものか、私と妻は、お互いに充ち足りた思いで、Kに送られて、アパートへ戻ったのでした。妻の告白をきき、私の行状記を妻に話すことによって、お互いの感度は昂まり、勝手気侭な日々の暮しは、SMのプレイで靡れていったのです。再度、パーテ

イの機会に恵まれて、あの大広間へ、いそいそと出掛けましたが、目指すバーバラの姿はありませんでした。あとで聞くと、麻薬密売の嫌疑で挙げられたそうです。バーバラのような、アヌスの素晴らしい娘は、あとにも先にも、みたことがありませんでした。男に虐められ、愛され、弄ばれるために生まれてきたような娘——。各地を放浪し、バーバラに似た黒人娘に食指を動かしても、二度と、あんな娘には出会えませんでしたよ」

追憶の、薔薇の花園の快樂を思い出してか秋山美智夫の回想は長く、その傍に夫人が、はべることも忘れ果てたかのように、バーバラという、黒人の混血娘を懐かしみ、恋慕しているようであった。

「アヌスと仰有いましたね」

近頃の私は、大いに関心があるから、それを聞き返す。

「ええ、正直いってそれ迄は……。私の求めた時、バーバラは、こういったのです。自分は、数多くの男達によって、玩具にされた体だから、保証出来ない。若し、私によって、つまらぬ病いを移されたら、あなたは私を憎むでしょうって……。だから、ここをと、私の指を握って、自分の体に近づけました。め

くるめくような快感。私はバーバラによって始めて、アヌスの重大さを知ったのです」

「妊娠を恐れたのじゃ……」

「それもあったかも知れませんが。しかし、あの夜のバーバラの愛は真剣でした。サドの快樂の哲学にもあるし、彼の書いた『悪徳の栄え』もアヌスが、重要なポイントになっていることを、私自身、その時、身をもって体験したと思いました。きゅっと引き締まった若い娘のアヌスに、私は憑かれたのかも知れませんが。その後、私は折々に、それを対象の女性に求めましたが、すべては拒否されてしまいました。そこが、排泄を伴う、羞恥と汚辱の根源という考えを、誰しもが抱いているからなのでしょう——」

「私自身、浣腸という名のもとに、今ではプレイの一環にしています。それも又、愉しからず哉からです。あなたの憧憬と願望は分かる気がしますよ」

若しこの私だって、秋山氏のいう、バーバラのような、お尻のぷりんと突き出た若い混血の小麦色の娘に遭遇し、彼女が進んでアヌスを提供するといえ、一も二もなく受け入れたことであろう。彼の切実な恋慕は、私にとって、羨望でもあった。



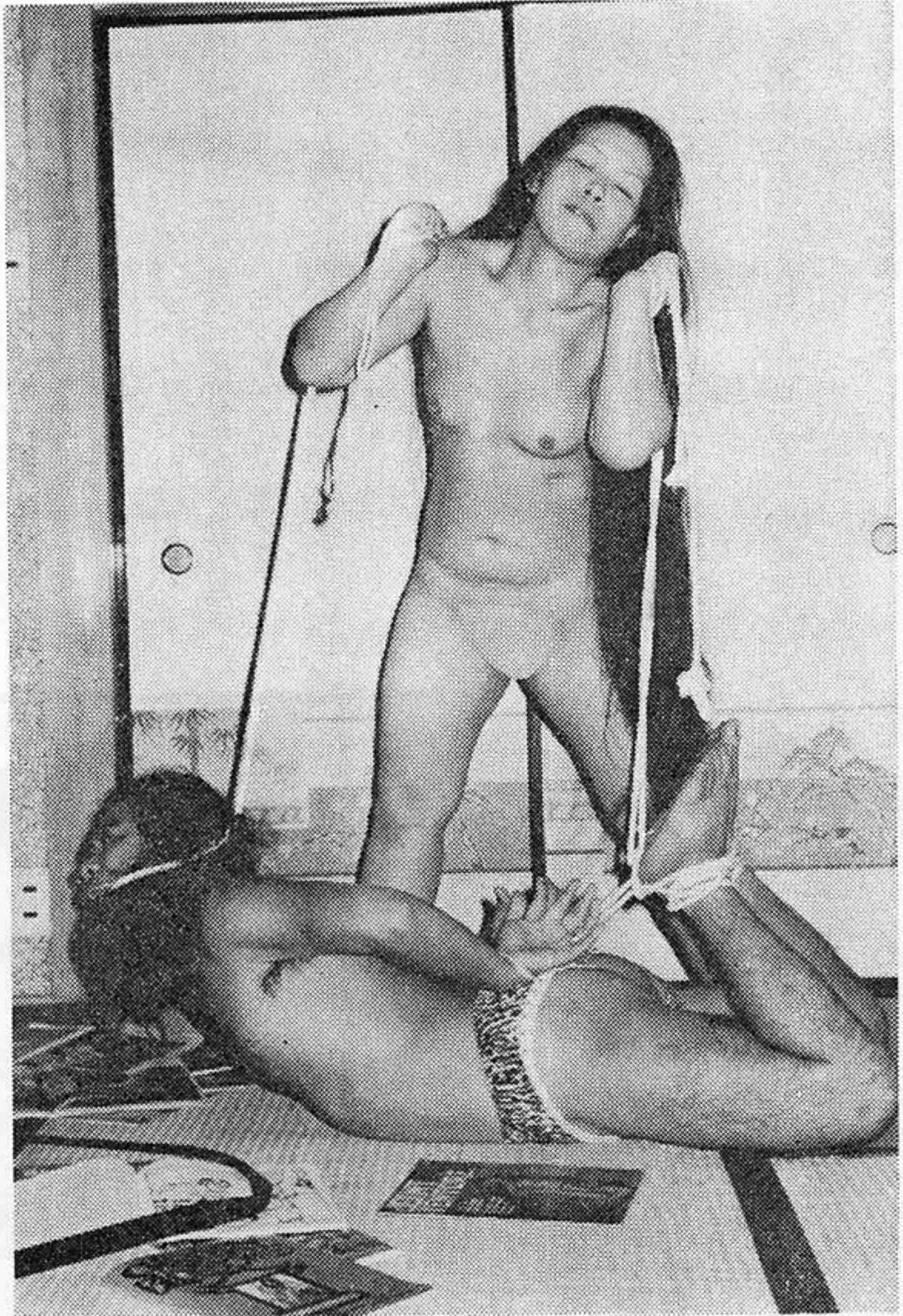
私達の会話を、夫人は、案外平然とした面持ちで聞いていたが、時折、彼女のこめかみはピクピクとうごめき、努めて、心の冷静さを保っているように、見受けられるのであった。

秋山氏のその話が、夫人のサジスチックな欲情を掻き立てる効果になっていたことを、

私はあとになって知ったのであった。

彼が、甘い追憶に、ひたればひたるほど、夫人のS性が昂揚するという仕組みを、後刻知った時、マゾ性に目覚めた彼は、むしろ、彼女のSの昂揚を計算に入れて、殊更に、愉しげに喋っていたのかも知れない。

「虐めてあげようか——」



唐突な口調で話の腰を折ると、夫人は秋山氏の垂れ下がった長髪を、いきなり掴んだ。

「ああ」

その言葉を期待していたかのように、彼は夫人にされるが俚になつていた。

突然に、SM逆転した夫婦のやりとりで、私は呆氣にとられ、咄嗟には、どうしてこう

なつたのかは、判断もつかなかった。

激情にくるまれたか、夫人はもう待てしほもなく、彼の手を引っ張って、座敷の片隅につれてゆくと、かなり手馴れた手付きで、秋山氏の両手と片足を一纏めにして縛ってしまった。

虎が猫に豹変したように、あの精悍な彼が

夫人にされるが俚に、易々として身を任している。

「バーバラがどうっていうの。黒ん坊娘にうつつをぬかして、このイカレポンチ奴——」
口汚く、ののしり、夫人は縛った手足の縄を肩に担うと、

「さあ、おしゃぶり。これでもか、これでもか——」

と、足指を、ぐいぐい彼の口中へ押し込んでゆくのであった。

「バーバラとあたしと、どちらがいいの？」

「そ、そりゃ、お前だ……」

「お前だなんて、生意気だよ。女王様と、おいしい」

長髪をなびかせて、夫を責める秋山夫人のSの女王振りは、正に板についていた。

「ハイ、女王様——」

「よし、よし。じゃあ、このムチでウンと可愛がってあげるからね。嬉しいでしょ」

「ハイ、お手柔らかに」

「容赦しないよ。この浅ましい姿を、辻村さんに、とっくり見てもらうのだよ」

SM、大逆転の巻は、こうして、いきなり幕をきって落とした。カメラを構える私は忙しい。

女王は拘束した縄を引っ張って、彼の体をぐるぐる回転させる。

「これじゃ、まだまだ物足りないんだろ。ミレーヌには、もっと可愛がって貰ったのでしょ。こうしてか……」

女王の動作は敏捷であった。さっと縄をとくと、彼の体をポンと足蹴にして、うつぶせにし、手首に早縄かけて、両足を縛ると、弓反りに、ぐいと持ち上げるのであった。

女性に比べて、男の体は柔軟性に乏しい。腰骨をきしませて彼は、ぐえっと呻いた。「おや、啼いたのね。じゃあ、こうしてあげる」

SMプレイの堂々たる演出振りである。あの貞淑な秋山夫人の豹変振りに、唯々、眼を瞪るばかりで、私は一言も言葉を挿む余地もなく、矢鱈にストロボを光らせていた。

深々と口中に縄を喰い込ませて、長髪のうなじで結ぶと、轡を嵌めたようになる。

両手で縄を握って、ぐいぐい力をこめて持ち上げてゆく。

「ホホ、いい気持そうね。いつものように馬になりたいっていうの。そう。じゃあ、お情けで、馬にしてあげましょう」

彼女は、持参したバッグから手錠をとり出



してくると、後手の縄を解いて、彼にカチリと手錠をはめ、手錠の鎖に縄をつないで首に連絡して結びつけてゆく。

過去に、こうしたプレイを幾度となく行なってきたのか、女王の縄捌きは、実に手際よい。

馬乗りになって、手綱を引き絞り、ムチで

軽く尻を打つと、このマゾ馬は、ヨチヨチとボリユームたっぷりな夫人を乗せて、歩き始めた。

「さあ、もっと、ハイシイドウドウ、するのよ。いつものように……。でないと、あとでおいしい御馳走をあげないわよ」

鞭を捨てると、女王は両手で、手綱をとり

両足を彼の首に巻いて、踵でマゾ馬の頸を蹴りつけるのであった。

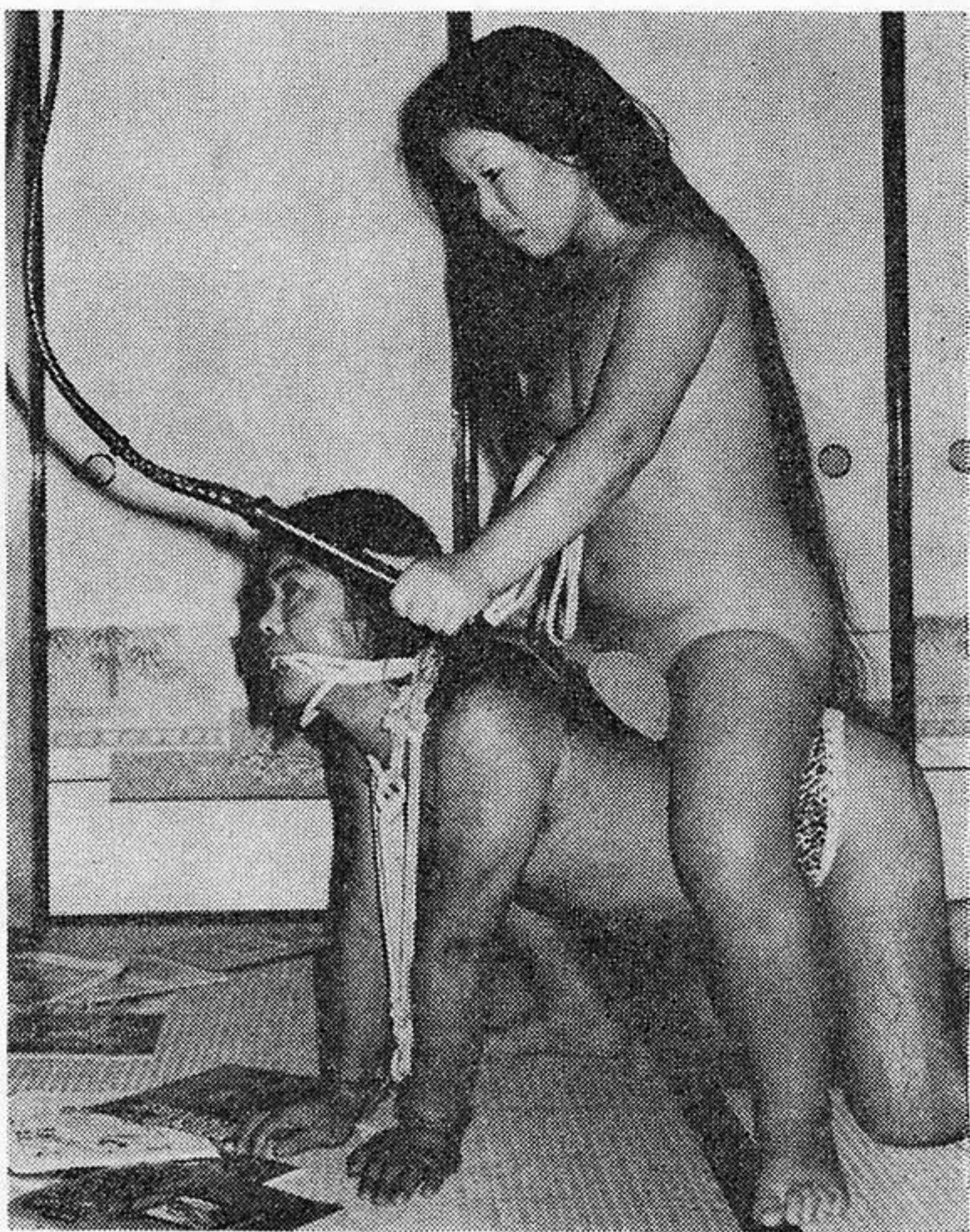
マゾ馬の精悍な顔は、恍惚にゆるみ、この愉しい屈辱を甘受して、易々として、ヨチヨチと這い廻るのであった。

「ぼつぼつノドが渴いてきたでしょう。いつもならここで私のおいしいジュースをのませてあげるところだけど、辻村さんのタタミが濡れて、迷惑かけてもいけないから、よしときましょ。それとも、どうしても欲しいというのなら裏の芝生まで、こうして乗せてゆくといいわ。どう、外出する？」

マゾ馬は、こっくりと、うなづく。「おお、可愛い。よく、いうことをきく馬ね。それじゃ連れ出してあげよう」

女王は下馬すると、板襖を開き、洋間のサッシドアを開くと、手綱を引っ張って、ベランダから芝生へと出てゆく。

十一月の夜は、肌にあつたが、燃える二



人には、寒さを感じないのか、それとも、春夏秋冬ショウをつづけて、裸身は、これしきの冷たさに鍛え抜かれているのか、夜空に星一つない静寂の芝生へと乗り出していった。

露を含んだ芝生の上で、一週り女王は調教して、のり廻し、ベランダのコンクリートの上まで到着すると、轡を外して、長髪を引き

握み、四つ這いの彼の顔を、ぐいと持ち上げて、私にみえる様に、全身を近づけていったのであった。

シューッと、さわやかな音が洩れて、このマゾ馬は大きく口を一杯に開いて、女王のジュースを頂戴していた。

× × ×

風呂場へ裸で行って、裸で戻ってくる二人である。SMのプレイが、二人を放恣に大胆に振舞わせていた。

この家に、年頃の息子と娘がいることも、彼等の念頭にはなかったようで、内心ヒヤヒヤしているのは、私だけかも知れない。

「勿論、ジュースをのむなんてことは出来ませんが、こうした被虐の悦楽のプレイを、舞台にのせてみたい意欲もあるのですよ。かつての私の考えは、世の男性は、すべてサド傾向と聞いていましたが、マゾ男性もサドに負けぬくらい、存在していることを知ったのです。私の残酷ショウを見にきて頂くお客様は



以前は、大半サド傾向の方だったでしょう。双虐という言葉で表現する、サド・マゾを交換プレイしてみたら、マゾ男性も共感して、満足して頂けるかも知れない——。そう考えているのです。妻の女王振りも大分、板についてきたようです。若干の演出を加えれば、或は面白いシヨウになるかも知れないと思い

ますが、如何でしょうか？」
「確かに仰有る通りです。東京新宿の『昆』大阪ミナミの『レイ』など、SMスナックも大分、出現してきましたが、煎じつめたら、マゾ男性が対象のようです。ああしたスナックへ足を運ぶ客が、貴方がたのシヨウをみたら、嘸かし随喜の涙を流すことでしょう。奥

さんを責めの対象として演じてこられた残酷シヨウが、SMのウラオモテを見せたら、動員する観客層は、確かに幅広くなると思います。唯、SMの本質は、SかMかの、どちらかに、かたよる筈です。秋山さんの場合、やはり本質はSでしょうし、奥さんはMだと思いますが、SMのプレイという名のもとに、逆転した、そうしたプレイを、愉しんでみたいという願望も、確かにある様です。私だって、今若し、天下の美女の、例えれば、山本富士子とか、若尾文子が、馬になれと命ずるのなら、なりもしましょうし、吞めといわれれば、喜んで、のむかも知れません。相手次第の、フィーリングの問題かも知れませんが……」

「そうです。そんなマゾ的願望を、ある程度充たしてあげることが出来たらシヨウの人間として本望なのです。こうしたミュージックの舞台で、パリの秘密シヨウのような、SMプレイは余り、かかっておりません。見渡せば近頃は、猫も杓子もレズレズと、レズばかりです。そんな中に、私達夫婦のような、SMプレイ、MSプレイといったものを、一つぐらい、とり入れてみても、いいのじゃないかと思うのですよ」



彼の言葉は、真剣そのものであった。私を訪問する前に夫婦は、秘かに打ち合わせしており、緊縛プレイから被虐プレイへの移行を計画していたのだろう。それを赤裸々にみせて、私のアドバイスを求めたに違いない。

謂わば、事情の許す限りの手段で、SMSナックで、日夜、演じられている、ナマのS

Mプレイを、舞台にのぼらせようという意欲であった。

「新残酷ショウ」の、これは、目玉商品であるかも知れない。

尚も彼は、ダイコームュジックでの、再起初舞台の抱負を、いろいろと語ったが、これは当日、開演までの秘密にしてくれという。

ここに、しるさなくても、彼等の「新残酷ショウ」を観た人達は、呀っと驚く趣向に、万雷の拍手を送ることであろう。

「さあーて、そろそろ結着をつけなくちゃ。

辻村さん、構いませんか？」

「えッ、結着というと？」

「私の結着ですよ。アレは、プレイの間に、かなり感じていましたがネ。私はモヤモヤし放しですよ。近頃、私のマゾのプレイが多くなって、妻が主導性を握って、交歓を果たしますが、やはり今夜は、それは遠慮したのでしょうか」

「ああ、私らしくもない。ええ、結構ですとも。さあ、どうぞ続けて下さい」

私は破顔一笑して、これからのプレイに、思いがけぬ期待をつないだ。

彼は、ベランダから、折タタミの脚立を運び込んでくると、

「おい、やろう」

と夫人に声をかける。

女王は一変して、貞淑なマゾ女性に変貌していた。素直にうなずくと、二つの裸身が、洋間で絡む。

手早く上半身を縛り終わった彼は、夫人の片脚を高々と上げて、脚立の頂点へのせた。

一杯に開いて、夫人は片脚でよろめく。

余った縄が、持ち上げた片足首をとめて落下しない様になると、その辺りに点在する女悦の器具の中から、彼は「アラビヤの女王」をとり上げる。リモートコントロールによって、アラビアの女王の女体は、前後左右に、くねくねと、スネーク踊りを始める仕掛けになっている。

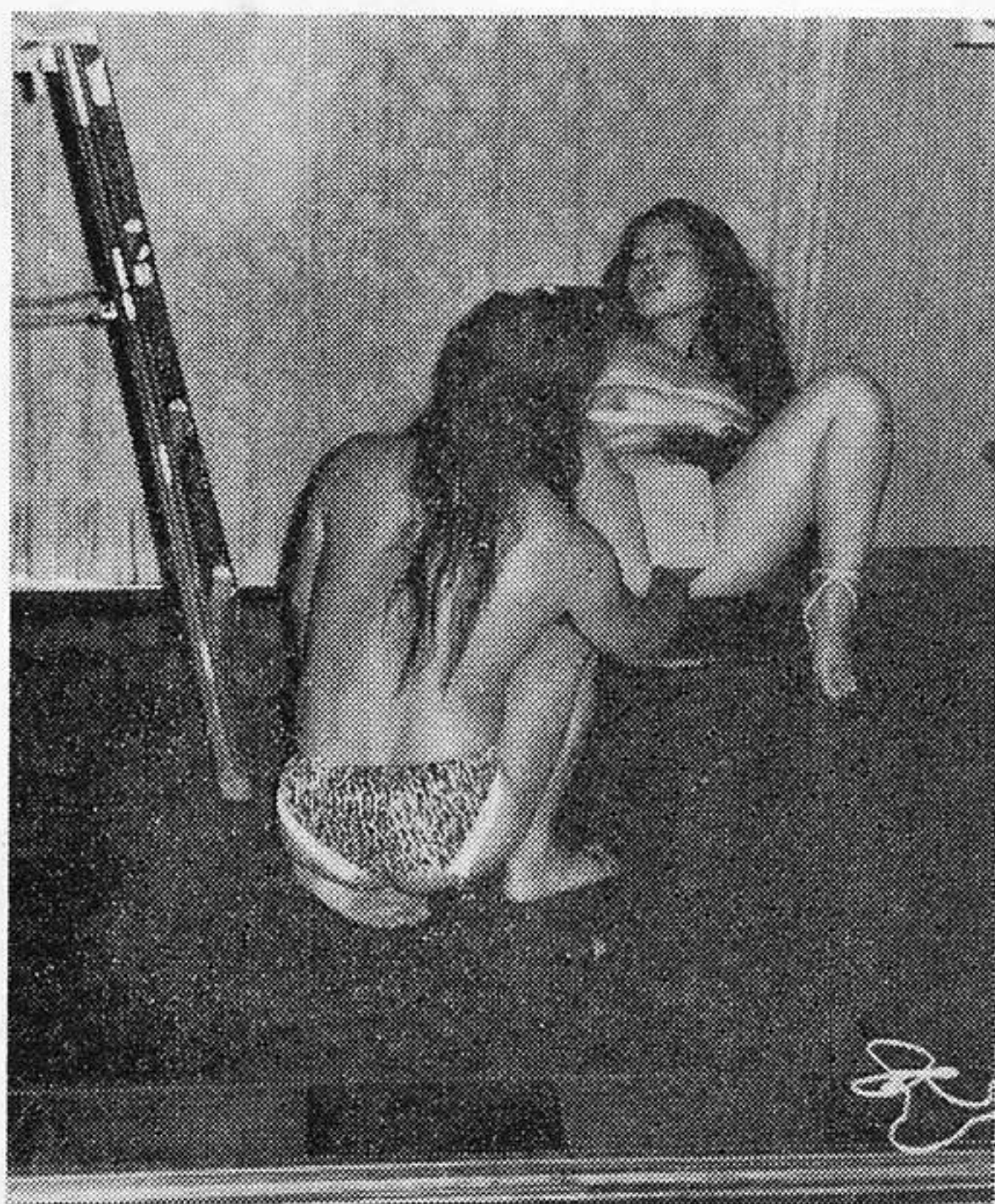
かたちよく整えられた陰影にくちづけして夫は、アラビヤの女王を踊らせる。

忽ちに感度を昂めて、夫人の身悶えが、快樂の吹奏と調和して、恍惚の境地へと没入してゆくのを確かめて、秋山氏はそそくさと、夫人の体を椅子へ移行させる。

一杯に開股して、両足を肘掛に縛りつけ、女体羞恥責めに、もっともふさわしいポーズを素早く作り上げる。

剃毛の跡も蒼々と、出産したとも見えぬ、肢体を慄わせて、夫人は微かに歓びの喘ぎを洩らしていた。

入れ替わり立ち替わり、種々の女悦の器具



が、その効果を確認するかのようになり、秋山氏の手に握られては、取り替えられてゆく。

喜悦は一入、昂まり、夫人は私という第三者の傍観を得て、更に快樂の度を増している風ですら、あった。

所詮、ゆきつくところは、ここへ落着く、SMプレイの、旅路の果てである。

歓喜を昂めることによって、男は氣力を充

実させてゆく。

女に対する奉仕でもあり、己れ自身の感度の昂揚でもある。

秋山氏は、実に長々と、飽くことなく、その奉仕を続けている。

それは、私に対する奉仕精神のあらわれなのか、将又、久しぶりに、SMの世界に没頭して忘我の境地にあるのか――。

いずれにしろ、執拗に彼の玩弄は、つづいて、山頂を幾度か超え、帰去来時を彷徨した夫人は、失神にも似た陶醉の表情を泛かべて、嬌声すらも涸れ果てていた。

決断の時期がいよいよ迫る。

彼は、夫人の上体を、ぐいと引いて、臀部を突き出させると、開ききった両脚を、高々と掲げさせて、椅子の背面へ縛りつける。

最も恰好のポーズが、そこに現出する。

めくらむような思いにかられ乍ら、私は咫尺の間に近寄り、この神聖を、寸秒を惜しんでカメラに納めていたのである。

× × ×

齒痒い描写しか出来ない。

ポルノ小説なら、ここから延々と始まることであろう。神聖な、夫妻の愛を眼のあたりにして、むしろ私自身は萎縮してゆく。

振り乱した髪を掻き上げ、私に眼をやった彼は、莞爾と笑った。

乳白をたたえて、夫人は失神したように、苦しいポーズの俛、眼をつむっていた。

やがて、ゆるゆると彼の手が、縄にのびてゆく。

「懸命に、日夜思いに耽るSMの構成が、こんな刹那、フト空しくなるのです。本来は個々に、秘かに愉しむべきSMプレイを、何を好んで、シ

ョウ化して、人に見せねばならないのか——そんな空虚な疑問にとりつかれるのですよ。そのくせ、ものの一刻も経つと、再び、私の頭脳は、めまぐるしく、SMの真髄を探究しているのです」

「分かりますよ、その気持。——私だって同じことです。うたかたのなりわいにも似た、



カメラ・ハントなんて、もう何度よそうと思ったか知れないのです。過去二十年間、相手変われど主変わらずで、同好の人々は、まるで嗜虐の炎に身を焦がすかのように時、頓着なく訪問し、歳月の経過と共に、熱をさまして遠ざかって行きます。その頃には、新手の身を焦がす、急々の同好者が訪れてくるので

テランの様に敬遠します」
「そうでしょうか。私は、あなたこそSMのパイオニアであり、このSMブームのリーダー的存在でもあると思っていますよ。イレブンPMに出させて頂いたのも、あなたの口添えであり、そのお蔭で、ポスターにまで出演云々など書かれる様になり、謂わば、か

す。書かずに折あらば、自分だけが秘かに、愉しんでいたいと何度、思ったか知れませんが。それでいて、まるで私に与えられた宿命のように、SMのプレイに耽溺した記録を十年一日の如く書く有様なんです。フト、やり切れなくなる時がありますよ」

「でもそれが、今日の辻村隆をつくったのじゃないでしょうか」
「その空しい虚名に押し潰されそうです。無名の頃の様に同好者は気軽には訪問してくれません。プロでもないのに緊縛師なんていうヘンな名称を与えられて、人々は、大ベ



S Mの世界での、共存共栄である。

「辻村さんは、私の今夜の行動をハントにするでしょう。人によつては、迷惑かも知れませんが、私の場合プロなのです。私は舞台では決して、説明や解説や、成り立ちを喋りません。謂わば、パントマイムに近いのです。あなたに書いて頂くことによって、私の考えていることを同好の方に、幾らかでも知っていただけたら本望なのです。事実を歪曲もしないし、正直なくらい在りの俚に書かれるでしょう。それで私は、すごく恩恵を蒙っているのですよ」

彼の弁には、熱がこもっていた。私は、うなづく。彼の立場として、それを望んでいるのなら、陋巷の秃筆が、彼の再起のはなむけになれば、これにこした贈りものはなかった。

「もう午前一時ですネ」

律気に考える事が、私には心苦しかった。

フト時計をみて、つぶやく。プレイの時間

の、経過の何と早きことよ。

「お疲れになったでしょう」

「ええ、厄介な病い持ちですから……。でも私より、奥さんが、もっと疲れていらっしゃるでしょう。もう縄を解いてあげたら、どうです」

「呀ッ、すっかり忘れていました」

熱弁を振っていた余り、彼は愛妻の存在すら、心になかったのか。

慌てて、窮極のポーズから解き放す彼に、思わず苦笑が私の頬に浮かび上がる。

「さも愉しそうに、御主人を虐めていらっしゃる奥さんをみて、羨ましく思いましたよ」

「あら、そうですか——」

秋山夫人はニコツと笑い、その時、始めて微かな羞恥が、彼女の頬を染めた。

「私も、いつか虐めてもらわなくちゃ」

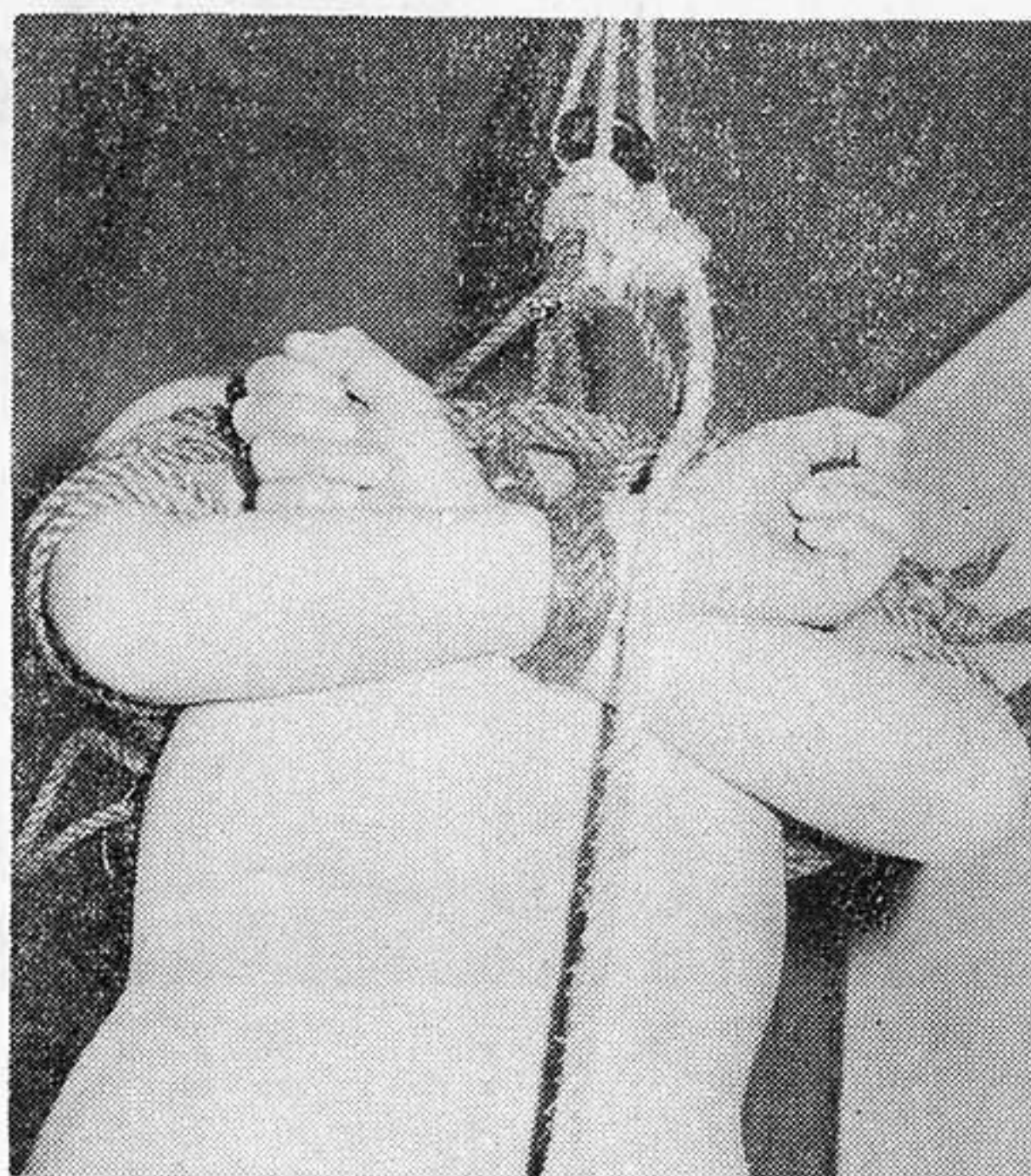
「ええ、うんと虐めて差し上げますわ。主人の、みている前で——」

「こりゃ、叶わない」

静寂を破って、夜鳥の啼き声が耳を、つんざく——。柿をついばみに来た、ひよどりの夜の叫びでもあろうか——。

——(終)——

稿 投
感 雑 め 責 吊
香 川 絃 一 郎



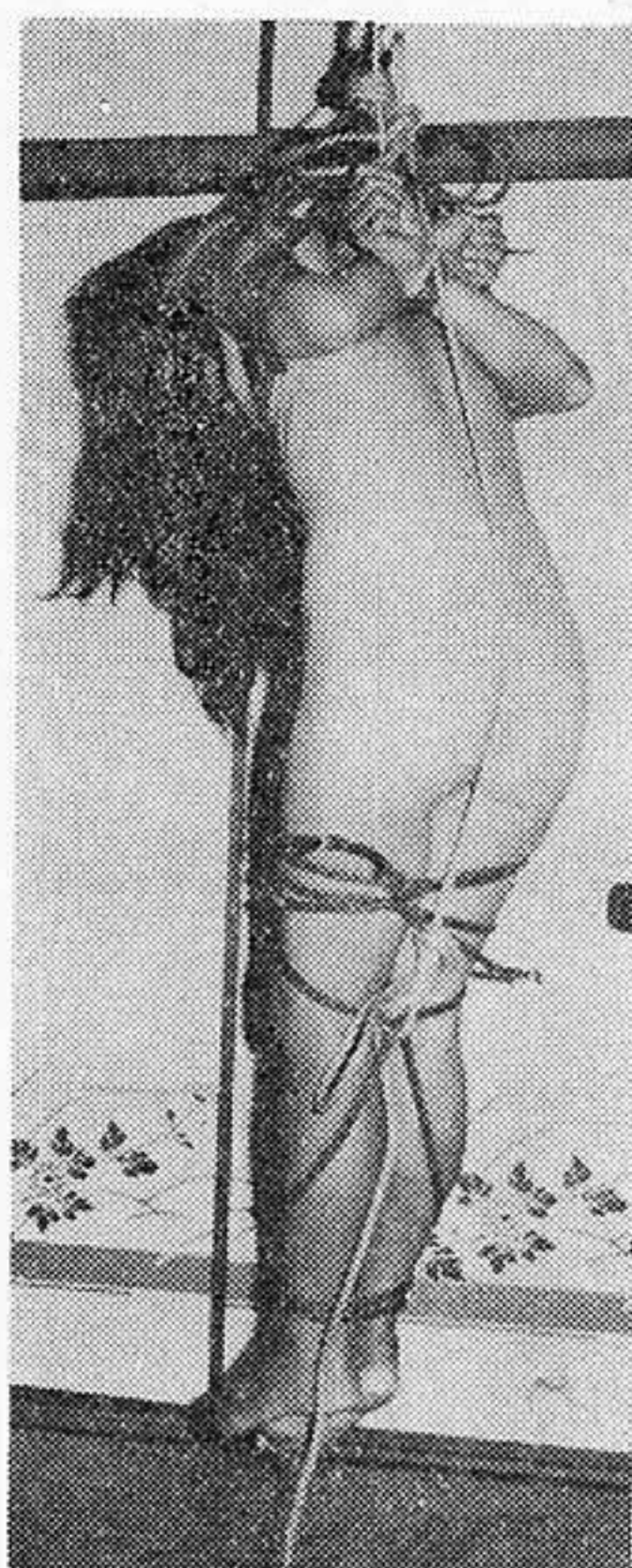
全裸で吊るされている女の姿態というものは、もっとも残酷で、そして女の哀れさに満ち溢れています。それは女性緊縛美の極致であり、極めて官能的で、しかも魅力的な一つの芸術品といっても過言ではないでしょう。

吊りの中でも古典的オーソドックスな後手吊りが、わたしは一番好きなのですが、これがまた、実

際にやるとしたら、もっとも、むつかしい責めになるのです。

縛り方によっては、まったく緊縛美の極致どころか、縄をまきつけた女体を、ただ、ぶら下げただけの、至って、つまらないものになってしまいます。

背後から見た時、手首が逆X字形に高々とあがっていないと、わたしは嫌いなのです。それから、



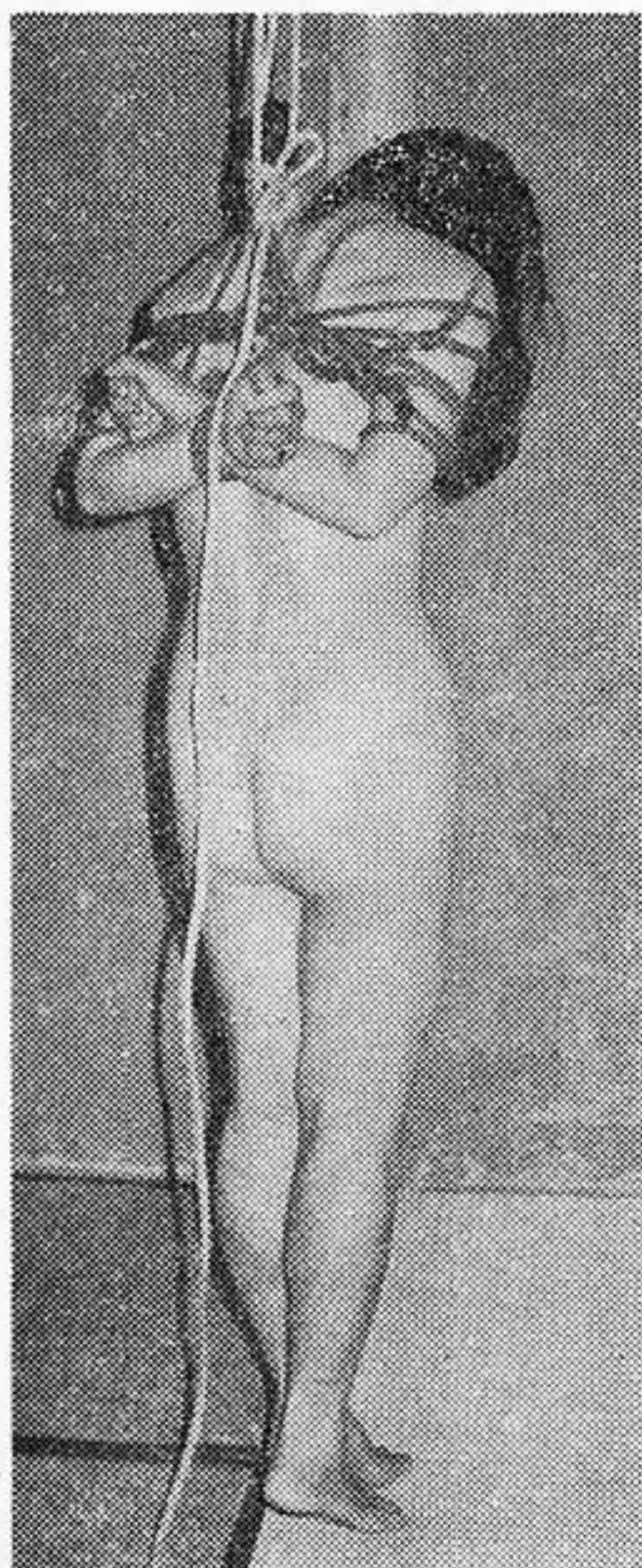
やたらに縄を女体に、ぐるぐる巻きつけて吊るのも美観をそこなうものです。また、苦痛をやわらげるための措置として、腹部を縛って吊る方法をよく見ますが、これは下手にやると、かえって苦痛を増すものですし、また吊り責めを觀賞する立場からすれば、魅力を半減してしまいます。

なんのかんのと、いろいろ文句ばかり並べ立てましたが、実際に

行なってみますと、なかなか思うように、いかないものです。

貴誌の美しいモデルを使って、是非、吊り責めの素晴らしい写真を掲載して下さい。ここに、わたしの拙い作品を三葉ばかり同封しておきますから、よろしければ掲載して下さい。

また、読者の方々の吊り責めの写真も是非、発表して下さい。よろしくお願いします。



告白 雑感

恋人のない男の話

浜 左 重 喜

右手両足障害と言う重症身障者である私にとっては、自宅の庭ぐらゐは、一本杖にすがって歩いても、単独外出など、思いもよらないのです。知っている食堂とか旅館には、家族に送って貰い、一日



—イメージ画—
『縄へびの襲来』
よみじどり—

を過ごしたり一泊の静養を楽しんだりしています。

『身障者の会——晴峰社』と言う会を、今年の夏、結成して、その代表をやったり、昨年は地元の出版社『甲陽書房』と言うところから、私の生立ちの記『わが旅路』を本名で出版し、文筆の道に第一歩を踏み出したのですが、これは自分なりにストレス解消の一つの手がかりに思っています。

会合などを名目にして、つとめて外出したいと思っていますが、未だに恋人は一人も出来ないのです。恋人のない男——。身障者とは云え、三十九になってもガールハントをした経験は一度もないのですが、自分なりに『生活設計』を樹てています。

周囲の人も「どうして早く結婚しないのか。親を安心させるためにも、早く良い人を見つけれ」と言いますが、普通の友達としての女性はいても『結婚』を前提とした付き合いをする相手はおりません。今までプロポーズした相手もなくはなかったのですが「少し考

えさせてくれ」と言って、私の前から、去って行く女性が、殆どでした。ハッキリと理由も言わずに……。

こうした私の心に残るものは他びしきだけです。殊に、この頃の様な冬の夜長には、気晴しに勝手気ままに外出の出来ない私を慰めてくれるのは、なんと言っても、『奇ク』なのです。最近では以前の様に巻頭にグラビアが載る様になり、SMマニアの一人として大変喜んでおります。

私も『奇ク』の読者となつてから十年余りになりますが、その十年の間に、自分の性癖も年と共に変わりました。読み初めの頃は47年12月号のグラビア「迫りくる悪魔の恐怖」の様な縛りとか「逆エビ縛り」とか言う物が好きでしたが、この頃では、もし理解してプレイをしてくれる女性が自分の前に現われたとしても、縛りは、片手で坐ったままでは、思う様に出来ないと思う為か、嗜好も変わってきました。

「やって見たい」と思ったり、好きになったのは、あまり縛らなくとも出来る『剃毛責め』や『浣腸責め』などです。それに、この頃、楽しく読み、

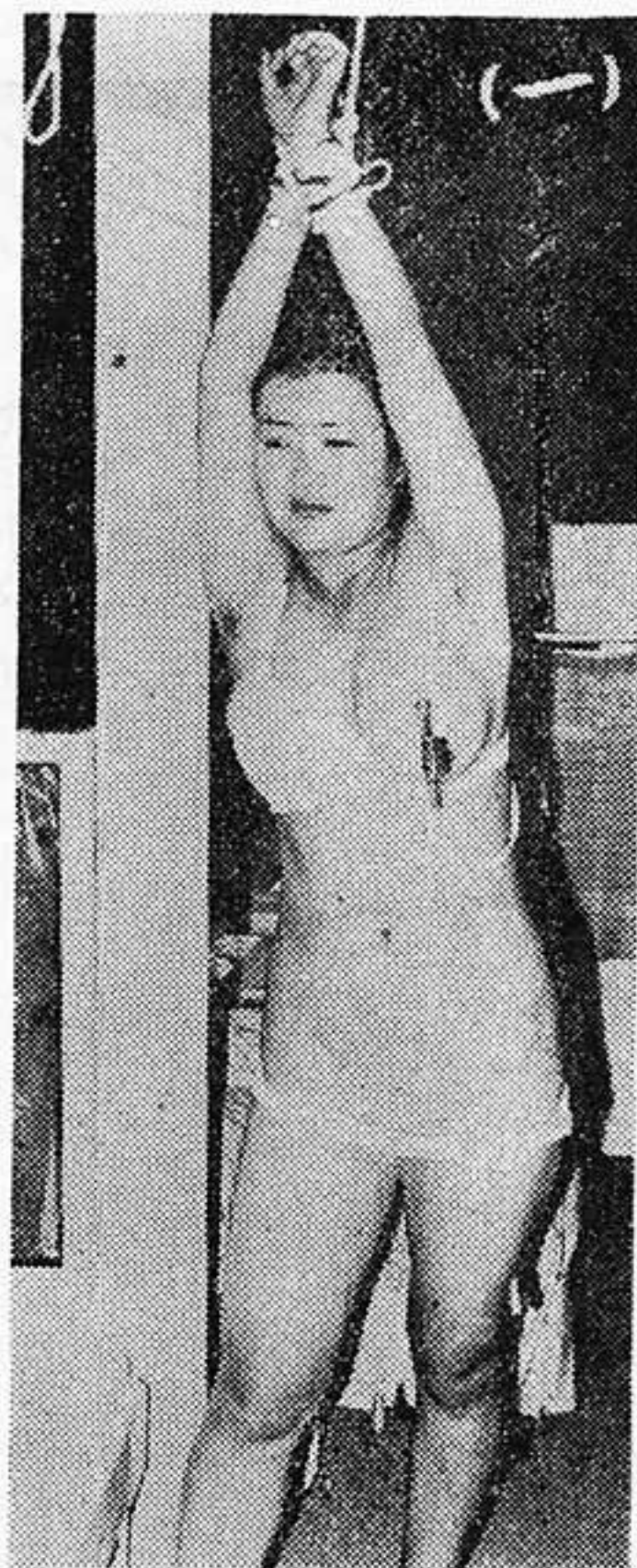
次回が待たれるのが、柴利好氏の「命預けます」です。

小説とは言っても、夫婦がお互いに信頼し合い、愛し合っていれば、現実には勿論、実行すべきでない事もあるでしょうが、主人公達の様に、第三者には理解出来なくても、当人達が幸せならば、それはまた、それで良いではないかと思ったりします。

重症身障者の私には、主人公——春子の様な恋人、いや妻、は生涯得られないかも知れませんが、SMに理解のある女性を現実の恋人として探し当てるまでは、どんな事であろうとも『奇ク』を心の支え（恋人）として自分を慰め、人間として強く生きたいと願っております。

そして、自分なりに出来るだけこの道（SM）を、よし誰に理解されなくても、自分が納得するまで、深く掘り下げてゆきたいと考えています。身障者で、その上、ありあまる程の財力がある訳でないから、モデル（SMプレイの相手）を頼みたいと思っても困難な事ですが、読者の女性の方で、身障者に理解を持って下さる方があれば、是非、お便りを願います。

（長野県茅野市・浜左重喜）



苦心のプレイ・フォト 失敗作発表

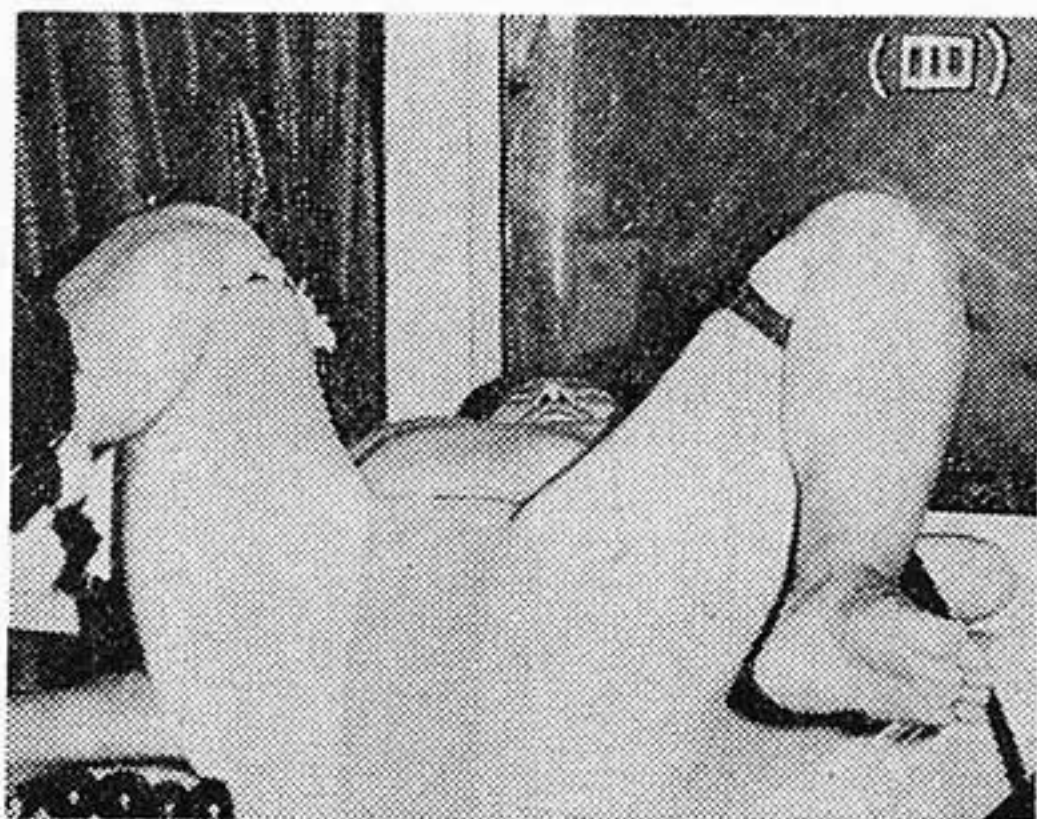
最上卓也

今回も、写真のまずさが折角の苦心作を無にしている様な気がして、最後の水洗いの時には、手や足から力が抜けて行く様な気がしました。

撮影に入る前は、ここでロープはこう使い、青竹はこの場面で、とか、あるいは絵ローソクにするかパイプにするかと思案をめぐらし、又、ゆう子も最近ではプレイに



非常に積極さをみせ、涙をこぼしても拒否はせず、撮影終了までは非常な盛り上がりを感じられるのですが……。以下は、その失敗作の一部ですが、名人の初期の作だと思って御覧下さい。
(一)は、羞恥責めの好きな私のポーズの一つで、パンティに錘りをつけて、それをだんだんに追加して行き、羞かしさを表現させると言うプレイですが、この場面は、もう一コ追加で、いっきに足首まで落下する前のものです。痛さで、もがき落とすのかなと思って、強力なバネのクリップを乳首に、はさんだシーンです。

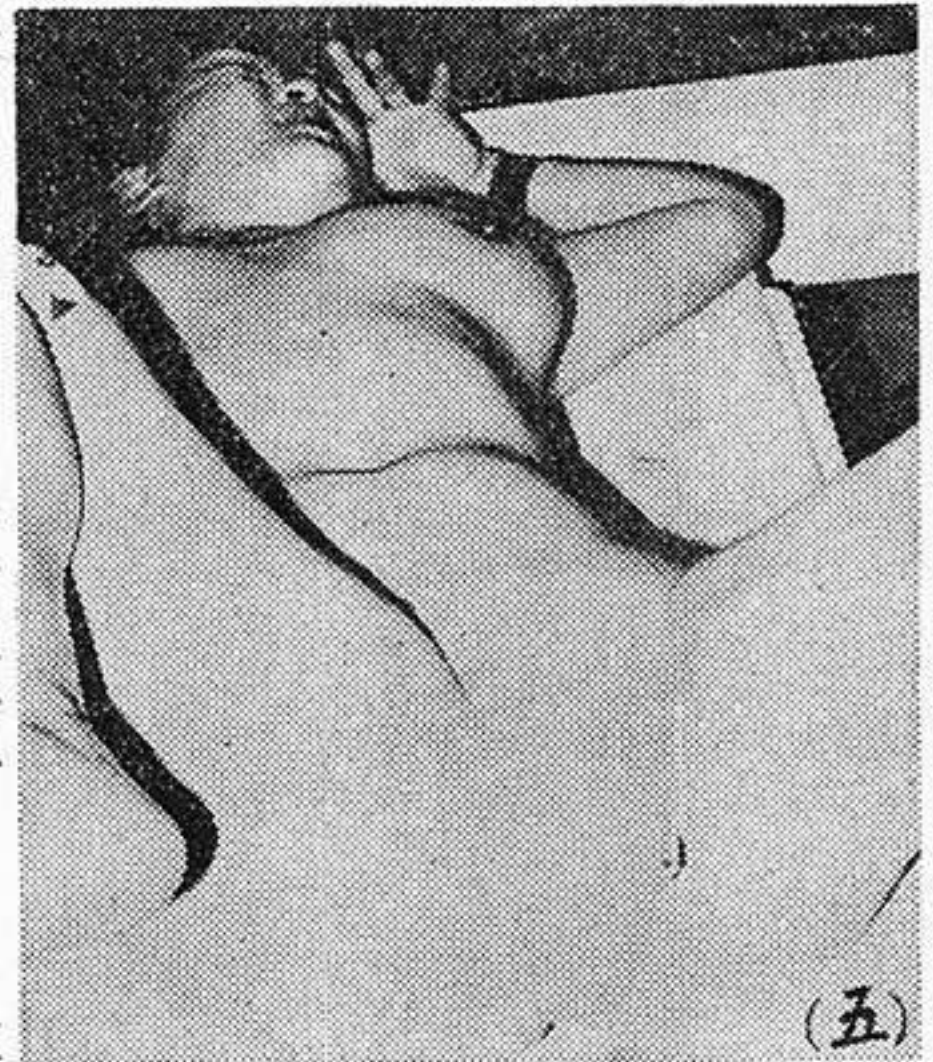


(二)は、ゆう子の巨大な乳房を責めるのも、私の楽しみのひとつですが、これもそのうちの一枚で、左足の親指一本が、やっと床についているという状態になるまで、乳房だけで吊り上げ、更に、絞り上げたために血のにじみ出そうにふくれ上がった乳首に、錘りのついたクリップを、はさみつけたものですが、の、ゆう子も悲鳴を上げたシーンです。

(三)は、青竹を使って大の字に、しぼり、更に両足首にロープをかけ手首に引きつけたもので、この後いろいろ責めを、行なうわけですが、これは五つ玉の玉ギラスで

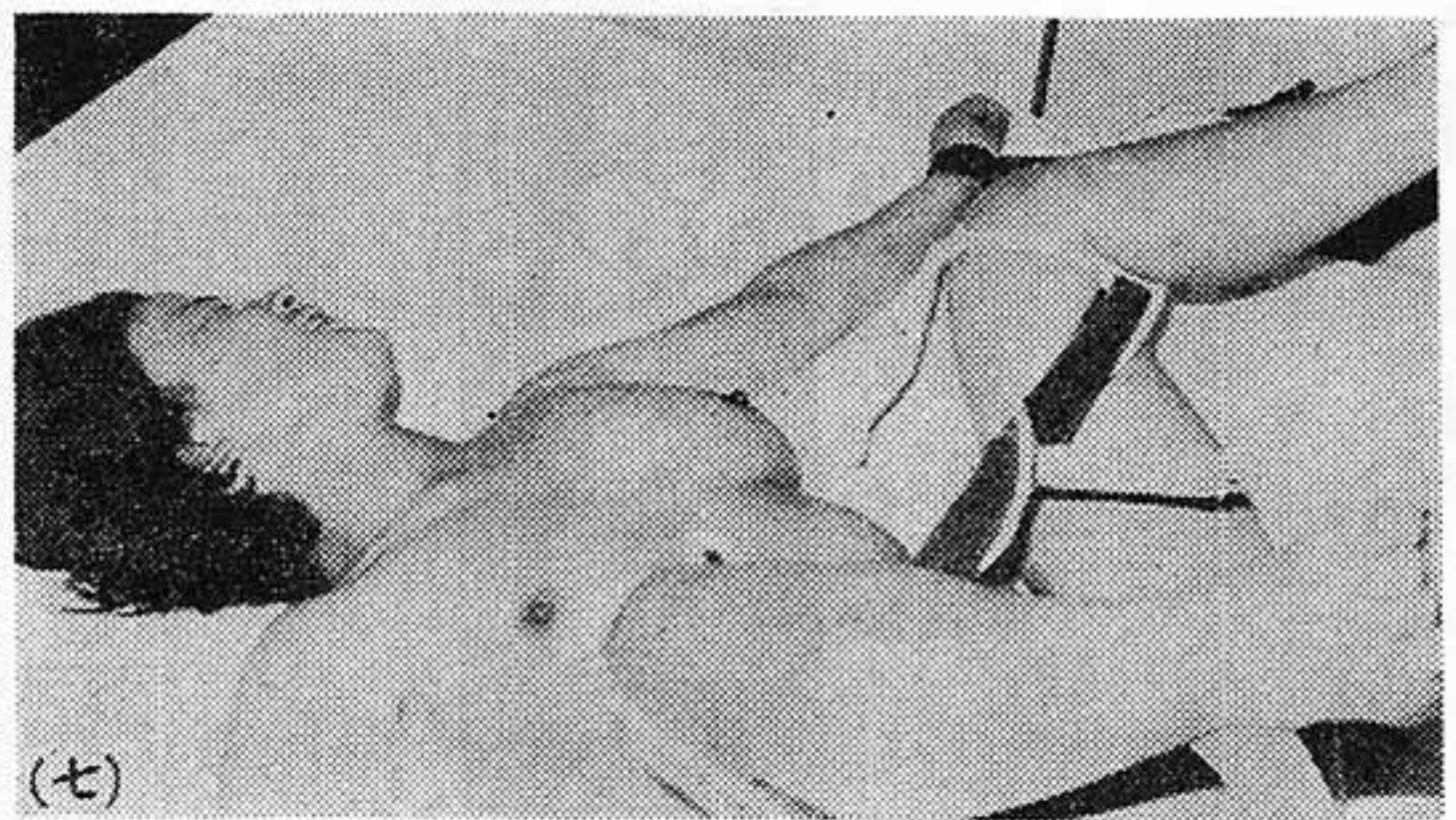
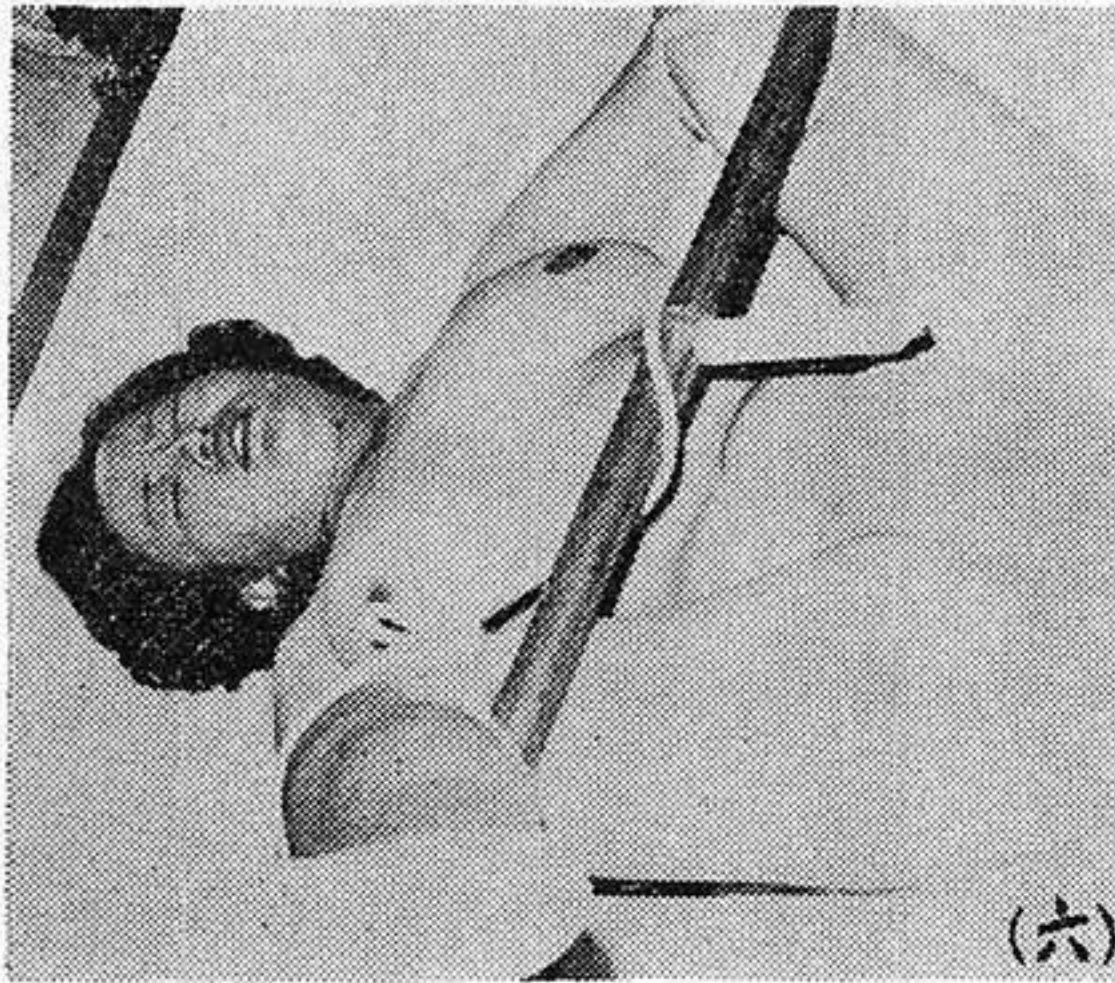
責めつけているもので、大小五コの玉が連なっておりますが、大方は、直径が約四センチ近くあり、結婚の経験のないゆう子には、五つ玉、全部では、かなり、きつい様です。これは写真の関係上、二コ目の時のものです。

四、(五)は、親子ローソクでの責めシーンですが、今迄は直径二、五センチの親子ローソクに、直径一センチの子ローソクを二本、追加したのが最高でしたが、これは五本を使用中のものと六本のものの二枚です。挿入する時は親子ローソクを点火させたまま、子ローソクの



ソク立てを取りつけた青竹を利用して、羞恥縛りをした時の数カッ

先が細くなるまで炙り、トロトロしたもの的一本一本ずつ使用して行くわけですが一本ごとに、強烈な悲鳴を上げる、ゆう子も大変だが、六本位となると相当な熱気で、私の手もヒリヒリしてきます。これ以上、自信のある方は申し出て下さい。ゆう子と一緒に我慢くらべを、させて上げます。

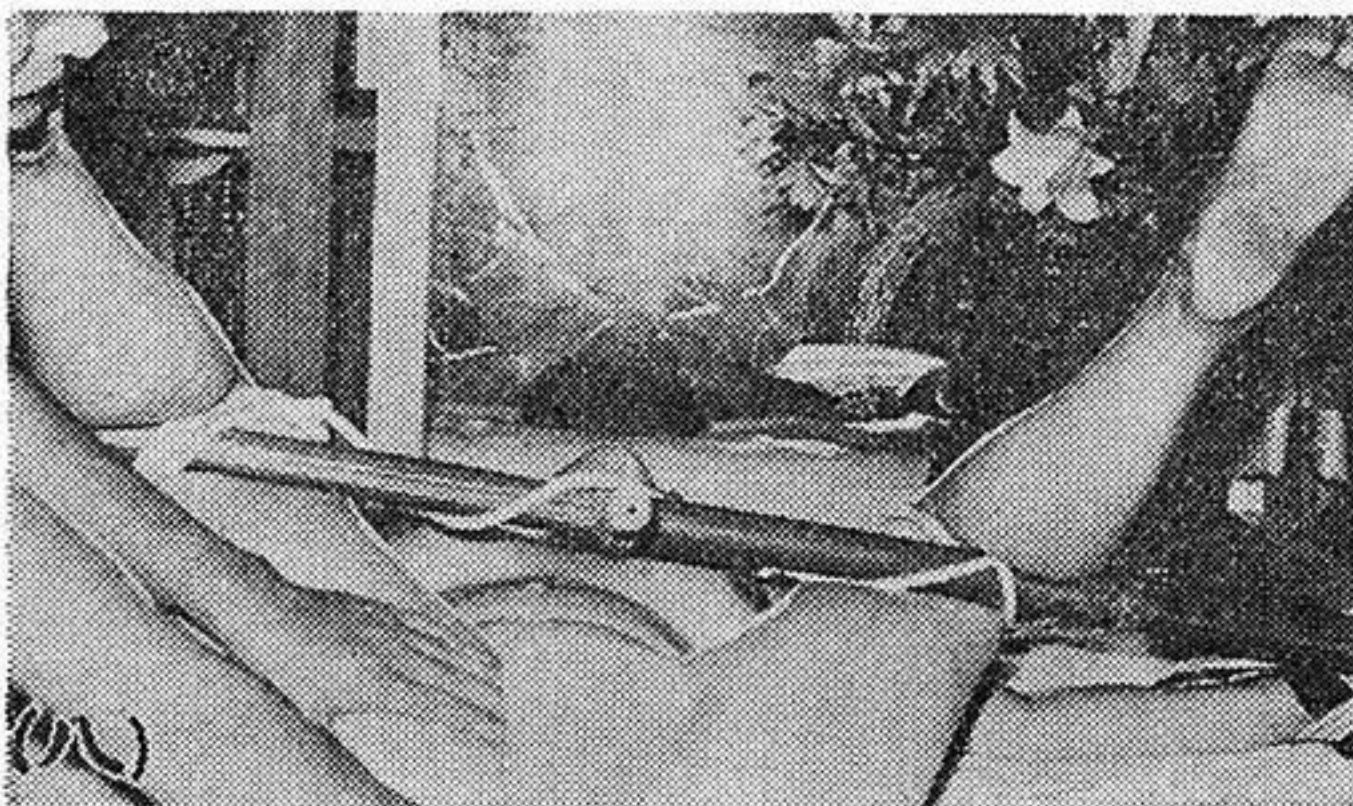


トです。これは私は一切、手を使わずにローを流せる事と、熱さでふるえるたびに更にローが流れ落ちるようになった仕掛けです。又、両手を使って(八)の様に思いきり広げ、深部まで熱さを、つたえる事も出来ます。

このスタイルのままでのバイブの使用も、ゆう子の好きな責めのひとつです。

以上が今回の作品の一部ですがこの次は、もう少し、ましな作品を発表出来る様、努力してみたいと思います。

又、前回の本誌にも発表させて頂きましたが、私の得意とする羞恥責めが、責められ慣れたのか最近のゆう子には通用しなくなりました。そこで、共にプレイの出来る愛好者の出現を得たく、御一報を期待致します。



『懸賞M女性募集』の文字に魅せられて
小杉千恵

略歴

一、昭和二十一年十月、神戸市葺合区にて生まれる。

一、昭和三十九年S高校卒業。
一、昭和四十五年十一月結婚。

本誌愛読歴五年。本誌告白記事採用二回（お風呂のできごと。シングル風呂にて）創作採用一回（静子夫人より皆様へ）奇クサロ採用三回が私の過去でございます。

SMに対する憧れの念が強く、妊娠のきざしを幸いに一度は妊婦腹をさらしたく思ったこともありましたが、でも主人の希望によってお腹が大きくならないうちに処分させられてしまい、泣くになけな



い気持でした。

かつて愛読者通信女性の「童女流腸譜」まで発表なさいました金原奈加子様のように、主人に甲斐性がないのなら、ないように私だって妊娠腹を売物のモデルになりどんな恥かしいことでも甘んじて受けることの方を選びたかったのですけれども、どうしても主人には言えなかったのです。

十月号の「短信往来」で、松本一彦様が、私の妊娠を祝って下さったのを読み、また読者通信で大阪の末二郎様が私の裸身を記憶していて下さったのを知って、もういたたまれず、お詫びの言葉をかねて投稿いたしました。例によって未現像のフィルムをお送りいた

しますが、セルフタイマーで撮影しましたので誌上に採用願える際は、顔がはっきり写っているものや、露骨に全部が写っているものは除外して下さい。

このような引込み思案の私のような女が懸賞M女性に選ばれることは到底ありえないことでしょ



馴致のひと駒

待ちぼうけ

— 広島 一 騎 —

あのコはとうとう来なかった。二時間近くも待ったのに……。つい先程の電話では、あんなに声を潤ませて、なるべく行くわと云ってたに……。用意のロープをしご

きく開いて縛られたら、どんなでしようか。思っただけでも体中がゾクゾクします。

羞恥の美しさが、なかなか雰囲気でないという事で叱られ写真には撮影しないから思いきった仕草をなさいと注意を受けオシッコをしたり、いろいろな本当の羞恥責めを施されて燃え上がったあと、さんざん写真を撮影されてしまいます。大阪の末様、私のお送りした写真は、私の家の裏庭でうつしたものですけれど、貴方がお便り下さったように深い山の中でSMプレイに没頭できたら、どんなに素敵なことでしょう。

きつつ、今か今かと待ちあぐむこの二時間は長かった。

未練たっぷり残しつつ、それでも半ば諦めて束ねたロープをしまおうと、ボストンバッグを引き寄せ、中身が更に未練呼ぶ。あのコの、やわ肌、締めあげたプレイ用具の数々が……。

わが気に入りのこのロープ妖しき艶持つナイロンの、ぬめりが如き黒紐は、白い素肌にくっきりと、際立つ縄目を埋めこんで、描いてくれる緊縛美。キラキラ輝く金色の、冷たい

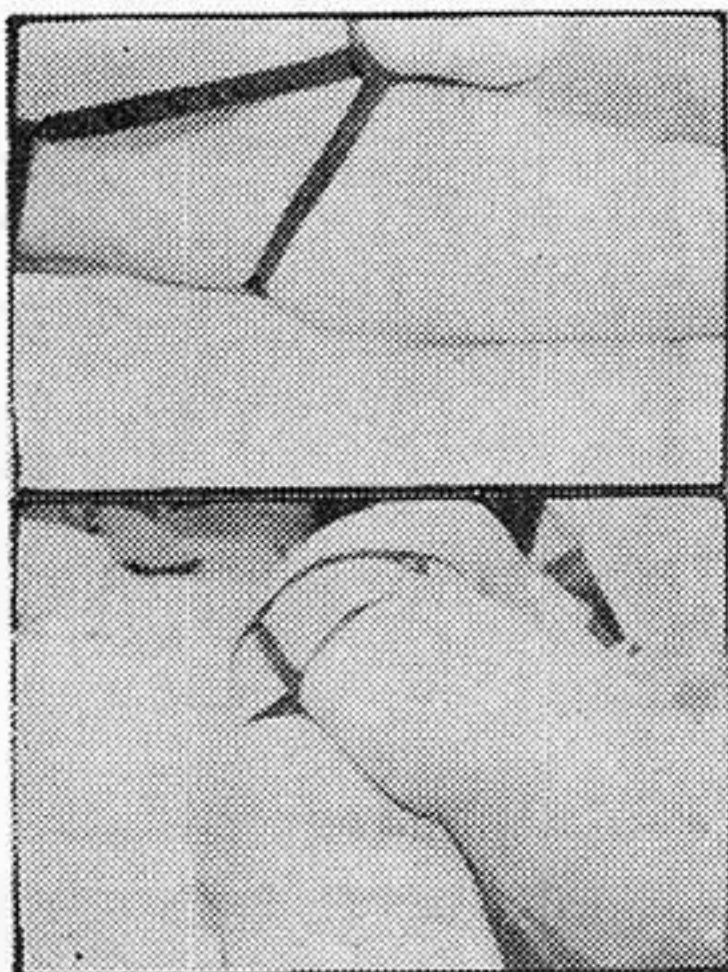
告白 SM夫婦プレイの片鱗

村山 勇

私共は三十代の夫婦です。

新婚当初は、熱に浮かされたようにSEXにばかり明け暮れていました。ところが、そうしたSEXの時代も過ぎ去って、今では次第に量よりも質のSEXになってまいりました。

四十八手のSEXだけでは、とても満足出来ず、SMに興味を持ち始めてから、ほぼ五年になります。誌上で皆様のいろいろなプレイ写真を拝見するにつれて、私共もついに自作自演のSMの真似ごとをしてしまいました。同封しました写真は、SMには、ほど遠いものかも知れませんが、ぜひ誌上



で皆様の晒しものにして戴きたいのです。

最近では実力行使は、だんだんと弱くなり、もっぱらSMとバイブレーター、こけしなどで妻を責めております。身体中央に深く喰い込んだ皮紐の上からバイブレーターなどを使いますと声をあげる始末です。あわてて隣近所（アパートに住んでおりますので）に聞こえはせぬかと手加減しなければならぬ今日此の頃の私共です。

最近、夫婦交換のことが盛んに誌上に出るようになってまいりましたが、実は私共には秘かな楽しみがあるのです。

安い木賃アパートの良さとでも申しましょうか。両隣の、やはり二十代、三十代の夫婦の秘かな夜のいなみの有様が、別段聞こえてくるともなく聞こえてくるのです。特に最近になり左隣へ引っ越してきた共稼ぎの若夫婦は、とても盛んで、新妻が部屋の入口の狭い台所で夕食の仕度をして

感じの細鎖。あのコの乳房を噛んだ時、硬軟の美ありありと、暖冷の妙おり混ぜて、わが心をば奪いさり、夢中にさせてくれたつけ。ささくれ立った荒縄は、滑らかな肌と対比して、ひっそらわれた百合の花。手折られ散らんとする

ような哀美の情を、いや増してうっとり見惚れたものだった。最初に縛ったあの時は、あのコは確かに泣いたつけ。だが近頃のデートでは、自ら縛りを求めたに……。肌噛む縄目に身悶えて恍惚の情見せたのに……。いようです。バイブや、こけしなどは盛んに使っているようです。壁を通して互いに意識しながらSEXをするのは、すごく楽しいものです。まだ、隣の若夫婦ほど露出的（失礼）になれませんが、お隣が始めると、そろそろ、はじまったぞ、と堪まらなくなってしまうのです。

それから夕食が終わってからがいよいよ本番で、この時は私共にはわざわざ聞かせるみたいに派手にしかも、はげしく行なうなど、私共を刺戟するのです。それに、わざと私共の方の壁の方にフンを寄せて敷いてあるらしく、時々、壁に手や足が、ぶつかる音がするなど、大変な、さわぎなのです。

終わるとブラジャーと小さなビキニだけで小走りにトイレ（共同です）へ行くなど、刺戟されっぱなしです。それで、つい私共も妻の写真を誌上に載せてもらいたくなったのです。

私共もそれに刺戟されたせいかな時々もうこうなったら隣に聞こえてもかまわないという気持ちになりつい声を出したり音を立てたりしてしまふのです。向こうの声や音がよく聞こえているのですから、きくと私共の方のも向こうに聞こえていと思ひます。でもSMのことだけは、知られたくないのです。隣の若夫婦はSMはしていな

こんな隣の若夫婦と、夫婦交換プレイが出来たらなあ、いつも考えています。私共の方が、大分年上ですが、お互いに薄い壁一重で刺戟し合っていたら、そのうちうまく話になるかもしれせん。そうしたら、また後程、お知らせします。

マゾ女の艶夢……
人身御供

北川 まりこ

あれほどに、心を決めし事なれど
イザその刻の近づけば

逆かまく想いの血がたぎり

人身御供の四文字身に染む

失敗を、とり返さんとの思惑が

裏目に出たとヤケ酒の

夫のためになるならと

泣く泣く承知はしたものの

いま一度、夫にチャンス賜われと

願う言葉も出ぬうちに

手早く剥かれしわが肌に

巻きつききたる縄の厳しさ

縛られることには慣れし肌なれど

見知らぬ男の縄さばき

夫と異質のハダざわり

思わず点りしMの火差かし

後ろ手の縛られオンナは美しと

ホホをくすぐる囁きに

アナタのお縄ステキよと

答うる言葉世辞のみならず

朝夕に、夫の縛りに喘ぎつつ

Mの境地に酔い痴れし



岩波大介画

読者通信に寄せて

小生の求婚広告

武雄市 S・H生

小生は年令四十八才のサラリーマン。二児(男子)の父親であります。昨年の秋、脳溢血で最愛の妻を一瞬の内に失い、早や一年を迎えんとして居るものです。

昭和三十年の秋、三十才で永過ぎた青春に終止符をうち、今はなき妻と結婚。希望に満ちた人生の門出に踏み出した小生ですが、青年期に入った頃、ふとした動機から小生の体内に、嗜虐の性癖のあることを感じました。

その後、雑誌や映画で、美女の被縛姿態を見ると、えも言われぬ興奮をおぼえるようになり、特異な自分の性癖に悶々として、ひとり悩んで居りましたところ、昭和

二十四年頃、書店で奇クを発見。自分だけの特異な性癖でないことがわかり、永年の悩みが一举に解消された気になりました。

而し、文や絵や写真で満足しているうちはよかったです。だんだん性癖が嵩じて、一度でいいから、自分の手で女性を縛ってみたいとの欲望をいだくようになりました。それから、必然的に結婚するなら、そのような被虐性のある女性と結婚したい……と思ひ、年令三十をかぞえる頃まで探し求めていたというわけです。

そうした切ない想いを抱きながらも、小生等の交際範囲内では、そのような被虐女性の出現は、おぼつかず、周囲の人たちのすすめもあり、通り一遍の見合により平凡な結婚に踏み切った次第です。

結婚当初は、何ものも新鮮で、考え方も極めてノーマルで、ただ新婚の幸福感に酔いしれておりました。が、二年、三年と経って、そろそろ倦怠期を迎えるようになって、はじめて現状の性生活に不満を、おぼえるようになりました。

なんとか、性生活に縛りを取り入れて変化のある充実した夫婦生活を取り戻そうと、その後は、つとめて雑誌や写真等を妻の眼にふれ

るように、しむけ、人間の男女の性質の中には、大なり小なりSMの性癖のあることを気長に教育してきました。

そんな矢先、妻の過失で小生が物質的に多大の損害をこうむった事件が起こりました。その好機を捉えて、初めて折檻の意図で縛りを実行にうつし、爾来、だんだんと被縛の回数も増え、最近では、性生活に縛りを取り入れない営みは、むしろほんとうの楽しみはないくらいにまで、妻が感じるようになってしまいました。

一年前のあの日の突然の不幸は小生の目の前から最愛の伴侶を失ってしまったのです。小生の人生は奈落のドン底に打ち沈み、ふた七日を過ぎた頃から、そのショックがこたえ、胃潰瘍を病らい、三カ月の入院生活を送ることになり精神的にも再起不能の状態にまで陥ってしまいました。

而し、二人の子供達が母親を失い、また父親の入院不在の留守宅を守って、互い助け合って健気にも元気に暮しているのを見て、子供達の為にも、第二の人生を築き上げねばならないと、最近、ようやく気をふるい立たせて、生活の軌道も正常に戻りました。今、子

わがサガなれどこれ程の
マゾなりしかと気付き驚く

○

うろたえる想いに閉じし両腿を
深くクビリし細ひもが

緊縛の度を増してきて

身動きならぬ縛りぞ嬉しき

○

幾つもの小山の出来しわが裸身

男のヒザに乗せられて

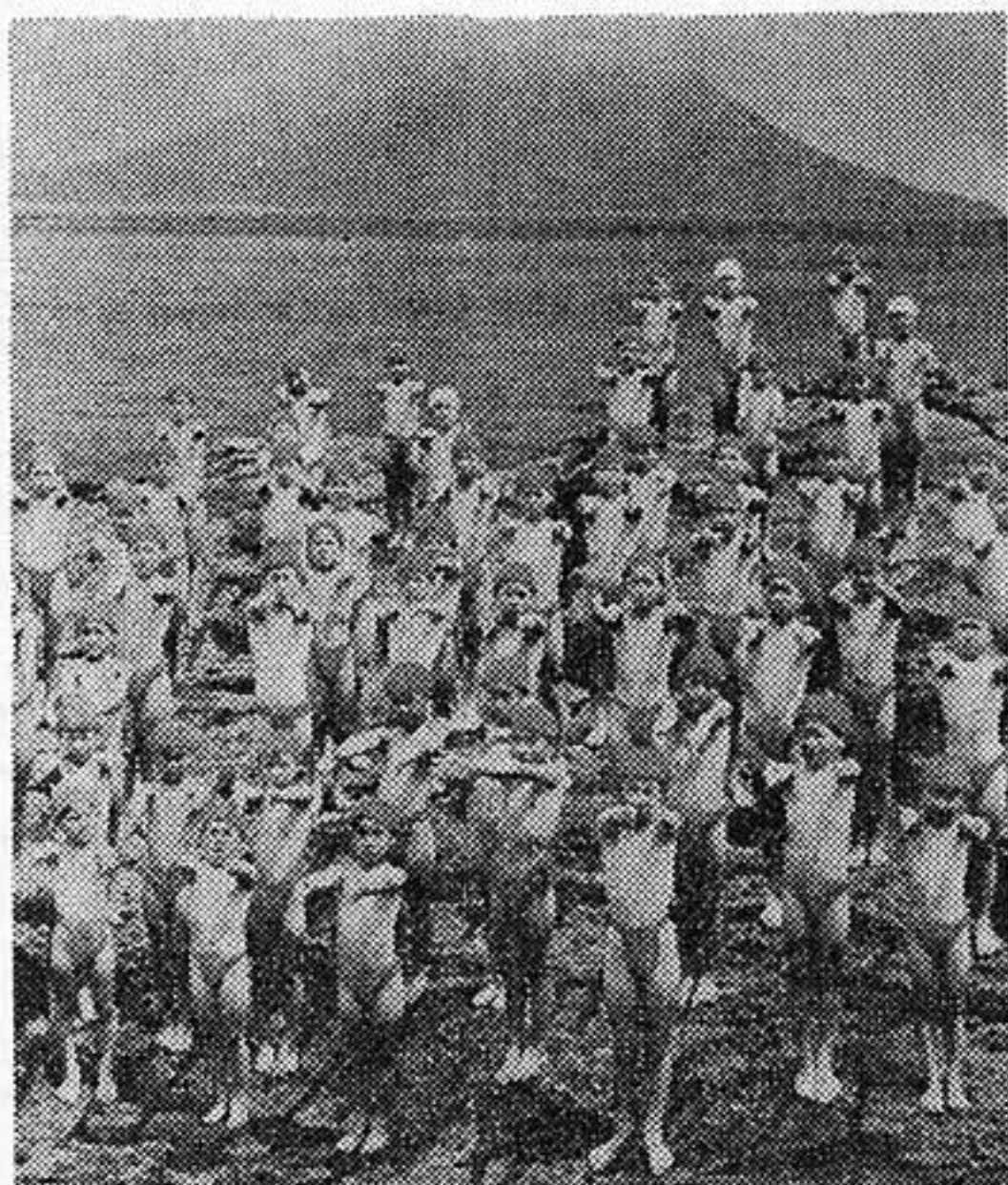
なぶるままなる生人形

鏡に映され尚更に燃ゆる

ふんどし美とポスター(3)

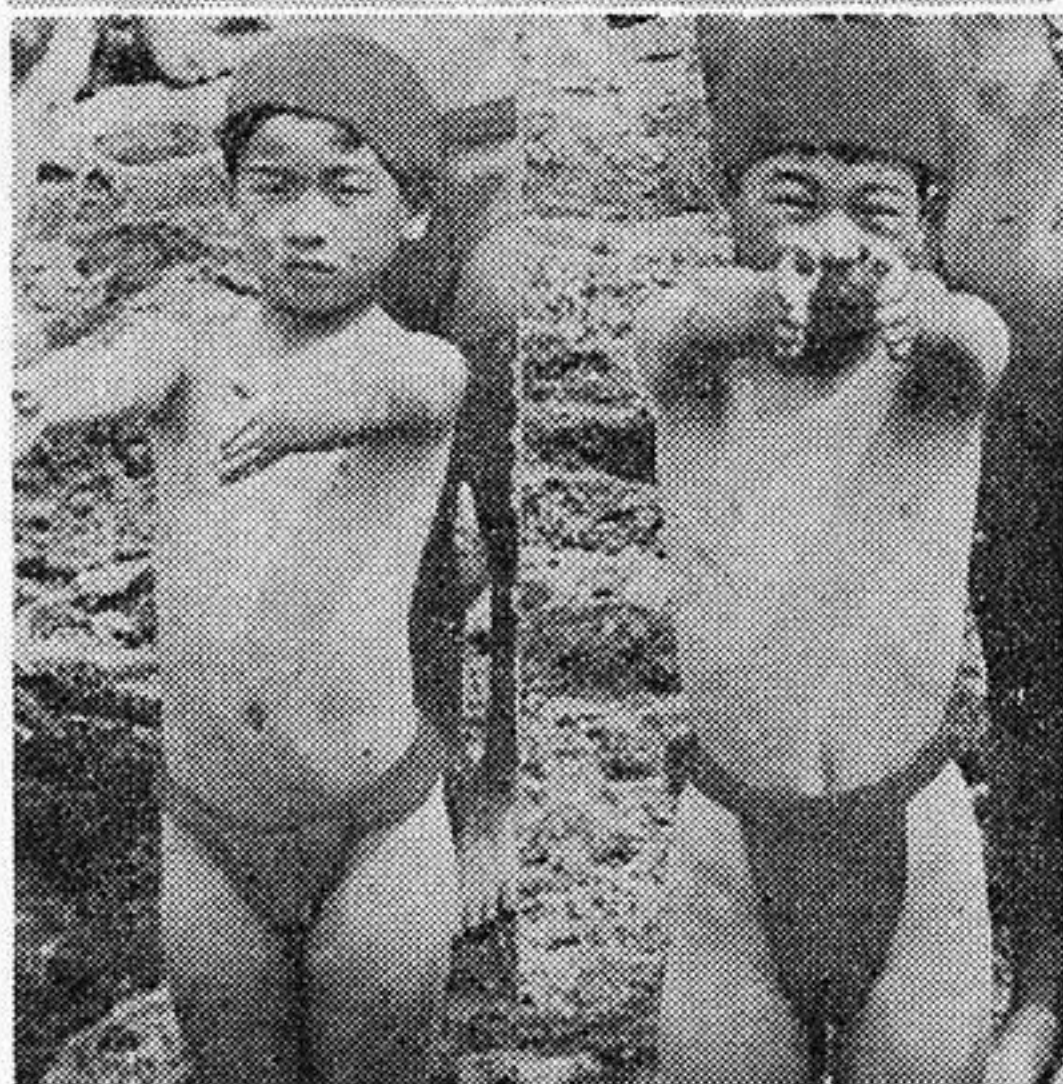
少年群像と赤ふんどし

岩手信夫



育つ! のびのびと

リリキー



供達も元気に勉学にいそしむよう
になった次第です。

このように愛妻の死去という不幸から、再び元気な自分を取り戻し得た一つには、病院を退院した頃、書店で何年かぶりで眼にとまりました奇クの健在を知ったからです。実に二十年以上にもわたる長い間、不死鳥のように続刊している奇クを手にして、小生の生きる楽しみの糧となり、小生の再起に多大に役立ったのです。

この点、心から感謝致したいと思う次第です。奇クが幾星霜の厳しい荒浪を乗りこえて、今日こうして見事に続刊を維持しておられる努力には敬意と称讃を惜しまないつもりです。

小生、第二の人生にすべてをかけて人の世の幸福を再度、この手につかみたいと念願して居るものであります。貴誌に寄せられた読者(M傾向の女性)で、小生と苦楽を共に出来る環境の方があ

ますれば、ぜひ御推挙賜り度く、小生過去の生活環境からしまして今更、普通の女性と再婚する気は起こりませんので何卒宜敷く御配慮の程、お願い致します。御推挙願えれば、奇クの名誉にかけても必ずや相手の女性を幸福にしてさしあげる自信は充分、持っております。

別紙に小生の現在の生活状態を詳細に記録致しておきますので御参考までに。

過ぎた夏、東京の国鉄電車内に
出た車内広告のなかで最も人目に
付いたのは日本興業銀行のポスタ
ーであったに違いない。「育つ!
のびのびと」と題するこのポスタ
ーに心惹かれて興銀広報センタ
ーに問い合わせたら大型の壁掛け用
もあるとの事だった。この大型の
ものは背景に海と山が見えていて
構図も良く、色も車内吊り用にく
らべて鮮かで眺めて飽きない感じ
である。見ていると渾身の締め方が
実に多様で一人として同じスタイ
ルが無いことに気付く。群像のな
かの少年を二人、抽出してみた。

Kクラブの一読者として

『とりとめのないこと』

中野靖二

(1) 絹川文代さんの熱心なファンです。

分譲フォトの中で彼女のものが少なく、現在は、もうイライラしてきました。誌上に発表される他の美女など見ても、かえって欲求不満になります。

沼正三氏は「ある夢想家の手帖

から」で、彼女を絶賛していますし、どうしてフォトを増やしてく

ださらないのか、不思議なくらいです。絹川文代という、ただそれだけで、私はコレクションするこ

とにしています。

おそらく、絹川文代さんほどのエロチックな魅力をもつ女性は、



もう二度と、私の前に現われないのではないだろうか、という気がしきりです。ぜひ、これは御一考下さい。お願いします。

(2) 『読者通信』を読みたくない理由。

あれを読みますと、私は自分の不器用さに、なさけなくなってくるくらいです。縄の縛り方やカメラの操作は、とてもこなせませんので、多分、プレイをされている方々は、日躍大工のように得意な顔で自慢しているような気がして嫌になります。

団鬼六氏も「鬼六談義」で、プレイは空想の中だけで楽しむほうが良いというような説を、はいていられるのを読み、ああ団氏も、きっと私と同じで不器用なのに違いないと、氏に友情の共感を覚えました。

(3) 私は、女性の下着が、とても好きです。

ずっと前に、干してあった洗濯ものの下着が、風のためにとばされたらしく、路上に落ちていました。早朝でしたので、私はドキドキしながら迷ったあげくポケットにしまいこんでしまっただけで、女性の下着に興味をもつようになり

Kクラブでも、モデルさんの下着が、たまったことが書いてありましたが、迷ってしまいました。

私には、やはり、それをはいた持主がわかるほうが、いいのです。そこで相談したいのですが、絹川文代さんの、はいていたパンティを、なんとか、お譲り下さらないものでしょうか。

お礼は十分に致したいと思いますが、本当に彼女のものであるかどうかの区別をつける決め手がないうと、私の気持は満足できないでしょう。Kクラブなら信頼していいと思うのですが、不安は去らず何か、よい方法を、ご存知ないでしょうか。

(4) 春川ナミオ氏のM画には、いつも鮮かなショックを受けます。以前からビズレー、佐伯俊男、林静一、横尾忠則が好きでした。さらに、春川ナミオ氏を、私はヒイキに加えました。

(5) 武智鉄二氏の作品は、最近知りませんが、「白日夢」「浮世絵残酷物語」は、当時は気づかなかったのですが、SM的濃度の高いものでした。SM的個所だけが忘れられない映画です。武智鉄二氏は、SM面で注意したい人だと思われまふ。では又。

〔告白〕 生ゴムと柔肌の幻想

阿部 寿一

僕がゴムに強い関心を示すようになったのは、いつの頃からだったか、余り小さい時のことは記憶にはないが、自分でそういうことに気づいたのは、やはり小学生の頃であつたと思う。

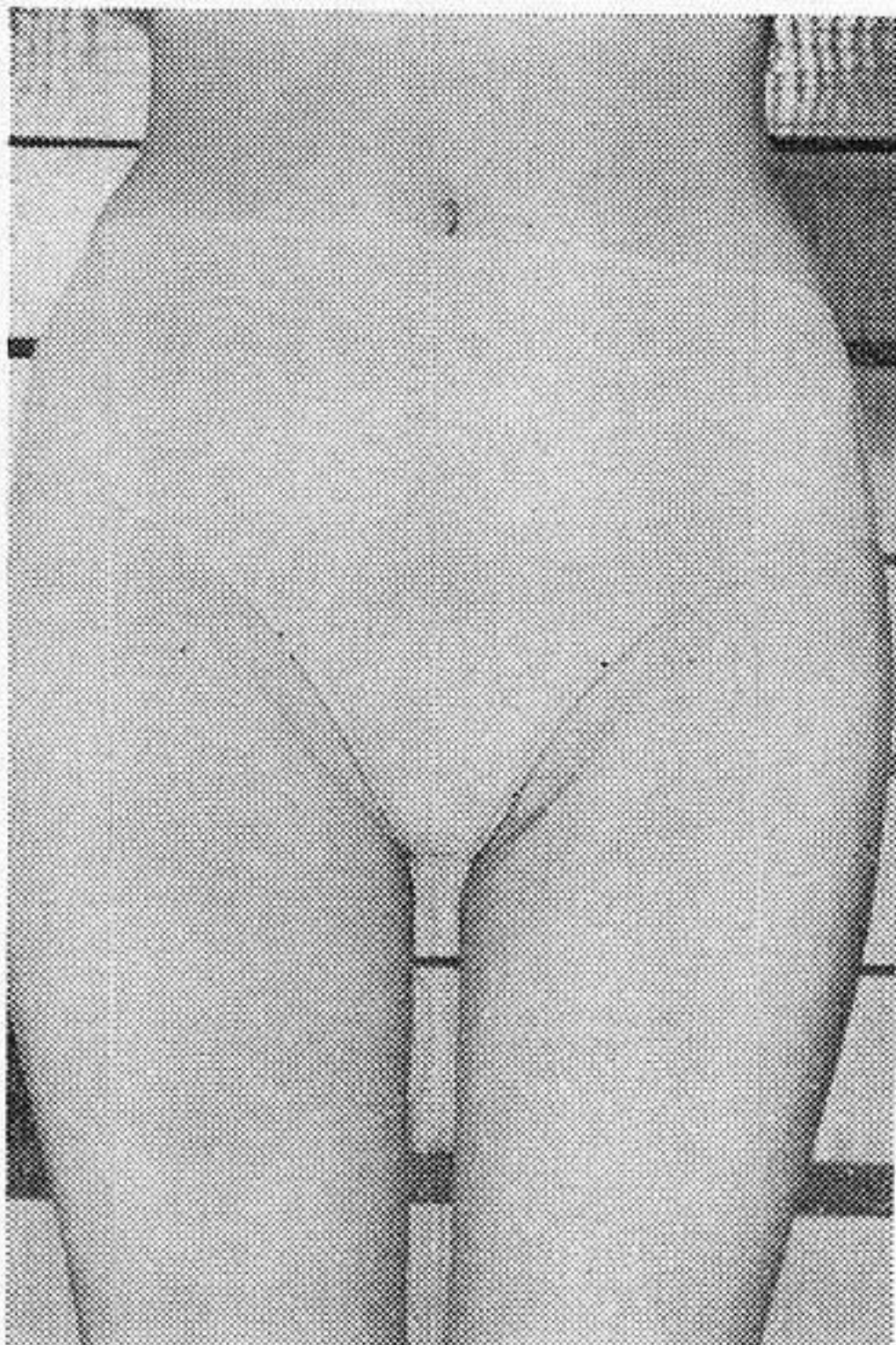
その頃、特に僕が気に入つたのは、輪ゴムであつた。アメゴムと呼んでいた、あのアメ色をして、ネチネチとした粘着力を持つ輪ゴムは、どこの文房具店でも売つていた。物を束ねたり、工作でつくる飛行機やモーターボートの動力源に使われたり、また、左手の指に挟んで紙つぶてを飛ばしたりするのによく用いたものである。

この輪ゴムを長く長く、つなぎ合わせて、その端を物にとめると引っぱって伸ばしておいて手を放すと激しい勢いで縮む反動が面白くて、よくそんなことをして遊んだものだ。女の子なんかは、縄跳び遊びのとき、このゴム紐を縄のかわりにして遊んでいるのを、よく見かけたものである。

僕はこのアメ色の輪ゴムが大好きだつた。箱入りのシードゴム株

ゴム下着について

— 小川 隆 —



式会社製のエスエスバンドなんかを買ってきて、何本もまとめて手首にはめて楽しんだり、チューイングガムのように口の中に含んで噛んだりした。

中学生の頃、ヌメヌメとした生ゴムのシートを薬局から買ってきて、これを直接、肌につけて楽しむことを覚えた。僕の思春期はアメ色をした生ゴムと共に生長してきたようなものである。僕は生ゴ

ムがジカに肌に触れないことにはどうしても満足できなかった。

生ゴムがあつてこそ、はじめて最高の絶頂感を味わうことが出来た。そのうち、いわゆるゴム製品すなわちコンドームのいろいろ変わった型のものを集めだすようになった。薄いのやら厚手のもの、イボイボのついたものやヒトデのようにヒラヒラのついたもの、変型のものを集めだすと、それはそれが、いろんなものが、珍しいものが集まつた。

自分の性癖を満足させるために使つたりコレクション用として保

存したりしているうち、いつの間にもやたら夥しい数になって、今では新製品を買い求めて増やしてゆくのが一つの楽しみとなっている。これも人間の蒐集欲のなせるわざであろう。

奇ク誌上でもゴムマニアの方々の告白や記事が、時々掲載されるので、そんな時はむさぼるように読んでいるが、やはりゴムマニアという人々が少ないのであろうか他の緊縛マニアの方に比べると数が少ないのが残念である。もっともっと沢山、同好の士からの投稿文を載せてほしいものである。

プレイ用としても、また自己装着用としてもゴム衣の魅力は知る人ぞ知る、まことに妙なるものであるが、このゴム下着の良さは、実際にプレイに使ってみて分かるものである。これはあながち、ゴムマニアに限らないと思う。若い女性に着用させた薄ゴム製パンティの一つであるが、T字帯その他の下着作成は兵庫県伊丹局私書箱23号、三大商事まで、返信料同封して照会すれば、詳細返事してくれることになっている。



＜第104回＞ 辻 村 隆

青木順子、向井一也の主催する「オリジナルの会」から連絡が来て、SM研究会を発足させたから、よろしくとのことである。彼からの便りを紹介する。

(SM研究会、発足しました。毎月、様々な会合を催します。会費は、SM研究のテーマ毎に通知します。連絡費は月一〇〇円です。)

申込先 東京都保谷市中町四一五―一八(☎188)オリジナルの会
電話〇四二四(22)八六八八
振替 東京 一一七三六七

何分共、同好の皆様に、よろしく願います。SMの公演は、その後も毎月やっております。上

京の節、是非お立ち寄り下さい。関心のある方なら、一度連絡なさってみても面白からう。唯、私の場合、先日も上京した際、一度彼と会って、現状なりその後のSMプレイなどについて聞きたく、一つはSMカメラ・ハントの第一回の思い出、多き彼等だけに、丸八年振りに、ハントしたき下心もあって、電話したのであった。

電話で久瀾を叙したが、話をハントの方へと持っていくと、彼はこういうわけか尻込みしてしまうのであった。話をするためだけに行くには、保谷市は、東京からでは遠過ぎる。

私としては、今も孜孜営々として、SMの探究を続ける彼等を、もう一度、同好の方々に紹介したいのであったが、カメラ・ハントと名付けた以上、やはりフォトは必要になってくる。日頃、前述のように、いろいろと連絡してくるのに、いざとなると躊躇し付度する彼のそんな態度に、上京中のスケジュールも多くて、つい私もそれじゃ又ということになって、電話別れしてしまうのであった。ここに書けない、二人のプライバシーも知っているが、それは所詮、私の良識を信じていただくより仕

方がない。

その点、秋山夫妻は誰憚からぬショウマンシップに徹していて、大いに積極的である。

かつて、忍妙子がショウ劇場で拾頭し始めた頃、恰好の取材と箕田氏と語らって、二人の出演していた劇場に連絡したのであるが、彼等もいざとなると、尻込みしてしまつて、とうとうこの企画はお流れになったことがある。書かれるとなると、何がなし危惧と不安が伴うものらしい。

とはいっても八年前の夏の一夜私の家に、青木順子と向井一也が一泊して、カメラ抜き、四帖半プレイに、短い真夏の夜を耽溺し尽した強烈な思い出は、今も私の脳底からは消え去らない。

会って、酒が入り、談たけなわになれば、そうなるのかも知れぬが、正気の彼は余りにもインテリすぎるようである。二人とも、とてもいい人間なのだが――。

SMショウと一口にいても、皆それぞれの個性があつて、趣が違っている。

青木順子、向井一也の場合は、SM心理探究劇であり、何かのテーマを求めている。

忍妙子は、ドサ廻りめいた田舎芝居の筋そのものよりも、嗜虐の見せ場をつくることに重点をおいている様な舞台である。

ローズ秋山・秋山美智夫の場合は、残酷ショウと銘打って、パイントマイムの、アダジオを基礎にした舞踊的なサド・マゾショウであり、踊りが根底に流れている。観客の好みによって、どれが最も興味を惹くかは、一概にいえないが、ミュージック劇場でこうしたショウを演じる場合、他のヌードダンサーのソロの踊りや、レズショウに一番、融け込んでいるのは、秋山夫妻であろう。

青木順子の難かしい倫理めいたSM探究の劇は、一寸、場違いの感があつて、水と油のように思える。その答が現在、彼等をアングラ劇場や、小劇場へ走らせた結果になつて現われている。

忍妙子も、今は二代目でやるそうであるが、かつてのストリップ女剣劇などの一座に加わると

精彩を放ちそうである。

そうした観点から考えると、秋山夫妻が、踊りとレズショウ一边倒になった、現在のヌードミニージャックに、最も融け込み易そうである。

彼は私宅でのプレイの場合、思ひもかけずマゾ男性になって、双虐という名で呼ぶ名実共のサド・マゾプレイをやったのけたのであった。興乗る俚に百数十枚も撮ったが、枚数に制限もあって、SMカメラ・ハントに掲載するのは二十六、七枚であるが、それでも、最近のハントのうちでは最高の枚

数である。

彼のフランスでの、又北欧での見聞、体験談には、汲めども尽きぬ興趣のあるSM談があるが、余り精しく書くと、どうしても彼のプライバシーの面に抵触せざるを得ないので、つい筆が鈍ってしまった。どこ迄、書いていいのかどうか、その限界が分からぬし、彼がこのハント記事を読むことは判然としているので、若しそのために彼が困ってもいけないので遠慮したまでである。

サド・マゾプレイのフォトは、掲載不可能なものの方が当然、興

味がある筈であるが、それは公開誌の限度を超えるものとして、筐底に秘めざるを得ない。

秋山夫妻は正月公演に期して、今はショウマンの生命を賭けて懸命である。

彼の謂う「双虐」のプレイが、果たして舞台にのるか否かは未知である。

サド性の観客のみでなく、マゾ性の観客にも喜んで貰おうという彼の奉仕精神のあらわれが、どんな形で登場するか。

それは、私にも分からない秋山夫妻の秘かな腹の中の計画である



(長井葉津子)

自分で剃毛して
きた洋裁生

T・T 生

洋裁学院へ通っている道すがら漢方薬の店頭を見てマゾ心を

子は、第一回目に撮影したとき、この毛が邪魔になるね、とふと口を滑らせたところ、次に来た

きは自分で、つるつるに剃ってきたという長井葉津子は純情で一本気な洋裁生であった。

が、大いに期待出来そうである。

× × ×

過去二十数年、只管に奇ク一边倒できた私が、団鬼六氏の三顧の礼に、遂に節を屈して、彼の出版する雑誌に執筆したことで、大分諸賢からの通信が編集部に寄せられていくそうである。

東映の映画出演や、テレビの出演に相当、鬼六氏の世話になった為、雑誌を創刊するからと、のっぴきならず懇請されれば、否ともいえず、箕田氏にも爾前にその旨を話し、彼の諒解を得て書き出したのであるが、タイトルは変わった内容がSMカメラ・ハントになっってしまう。ほんのおつき合い程度のつもりが毎月、次々と若いモデル女性を提供されては、そこは好きな道で、ついつい上京すること多くなり、ずるずると、引きずり込まれた恰好になってしまった。もっとも、月に一度ぐらい上京するせいで、佐野みさ子さんのハントも出来、もう一度、プレイする約束が出来ているし、奇クサロン欄の阪東太郎氏の幼な妻ともハント出来そうである。

何分にもSM雑誌ブームで、色とりどりのSM誌が巷にみち溢れていて、あちこちから執筆の要請

をうけるが断わりつづけている。

それというのも、そうでなくても寡筆の私が、過去、奇クのカメラ・ハントと、この楽我記で精一杯であるのに、鬼六氏の分まで己むなく引き受け、正直いって近頃益々多忙になってきた本職の方に大いに影響して、どうも体調までがよい状態だからである。

愉しがるべき筈のカメラ・ハントが、ノルマのようになっていると、これは苦痛である。

一応は鬼六氏にも義理は果たしたし、こちらで又、そろそろ、奇ク一本槍に戻ろうと考えているが本職の忙しさは、反面、ハント女性を捗捗する方にも手が廻りかねて、ともすれば涸渇状態である。いわれなきベテラン扱いが、最近では夫婦プレイヤーも敬遠して、おいそれとは近づいてはくれず、なまじっか、映画やテレビに顔を出したばかりに、誠に痛し痒しの状態である。

私も、元はといえば、奇クへの一投稿者に過ぎない。もっと気易く、同好者の方々と、おつき合い願えれば幸甚である。

× × ×
ハント女性涸渇の悩みを、箕田氏に電話したら、いずこも同じ秋

の夕暮れで、塚本の鉄ちゃんも、最近頓に名を挙げて、反ってそれがアダになって、書かれるからという危惧が先に立つのか、分譲フォトのモデルや、単なるSMプレイなら、希望する女性とは相当あっても、私や鉄ちゃんとなら、怖いとか、書かれるからとかいって、尻込みしてしまうというのであった。

鉄ちゃんにしてみても、このところ、過去のモデルの、筐底の秘めたフォトを発表して、かこち顔なる我が涙の有様では、私も焦らずに、M女性の出現を折々に待って、その間のつなぎに、今なら発表出来るというフォトを選んで開陳していったら、息はつけそうである。

相当、大胆なフォトが発表出来るようになったのは、茲、二、三年のことである。

過去、相当数のフォトを送っても、大半は削られ未掲載に終わって、残念がったことを思い起こせば、正に隔世の感がある。

過去のハント女性で、一度きりの女性もあるが、興乗る俚に、数度プレイし乍らも、再登場させるのを、自分勝手に厭がって、コレクトしてきたプレイフォトが、膨

大な数に、のぼっている。

十数年来の読者もあるうが、それは、ごく少数で、大半は推移している筈である。今再び過去のハント女性の、あの頃なら、到底不可能であったフォトを登場させるのも、古くからの読者は、かつてのハントを思い浮かべて懐かしがってくれるかも知れないし、最近の読者の方は、未知の新鮮な思いで、眺めてくれることであろう。

脂の乗りきっていた、かつての緊縛フォトの方が、プレイにのみ走りたがる近頃のフォトより、迫力のあることは、私自身が認めているのだから――。

こんな思いにかられるのも、私も、塚本の鉄ちゃんも、過去二十数年、飽くことなくマゾ女性や緊縛モデルを捗捗しつづけて、いかに好きな道とはいえ、やはり飽和状態となり、年令と共に、疲れてきた、しるしであろう。

私のよく謂う「緩々」の一時期に、確かに今、さしかかっているようでもある。

年で自分の娘の友達とプレイしているように見え、さっぱり意気上がらず、その気にもなりにくい。

勿論、眼を愉しませる緊縛のフォトは、若い女性にこしたことはないが、真の嗜虐の愉しさを求めて、ついつい、被虐願望に心を疼かせる人妻や、こっそり脂の乗り切った情事巧みな女性と、なまなましいプレイに走りたがるのも、眼の肥えてきた年のせいであろうか――。

SMプレイに対して、それだけ開眼してきたのか、或は、若い娘達では、所詮、もう相手にもしてくれぬと、達観しだしたのか、肉体の衰えを自覚して、若い娘の前で、ハジを搔きたくない気持からか――。

いずれにしても、私の最近のハント女性は、爛熟の盛りの女性が多い。

さして美しくもないし、肉体だっで見劣りするかも知れないが、フォトでは分からない嗜虐プレイの味。

その味わいが、単なる若い緊縛モデルの比でないことは、SMプレイの同好者の方なら、判って戴ける筈である。

――(了)――


~~~~~〔近況報告〕~~~~~  
~~~~~マゾの味と涙~~~~~ 木村洋子~~~~~

とても載せてもらえないと思いながらも、エンピツをなめなめ書いた私のつたない手記が十月号に載ったときは、ほんとうにドキリとしました。以前に『読者通信』に載せていただけですか、と電話でおききした折りは、書いてきたら載せてあげますよ、と言われたので、そのつもりで書いたのです



がああ十月号の「マゾの放浪記」は、自分で、書きたくて書いたもので、誌上に、載せてもらえるなんて、夢にも考えていませんでした。

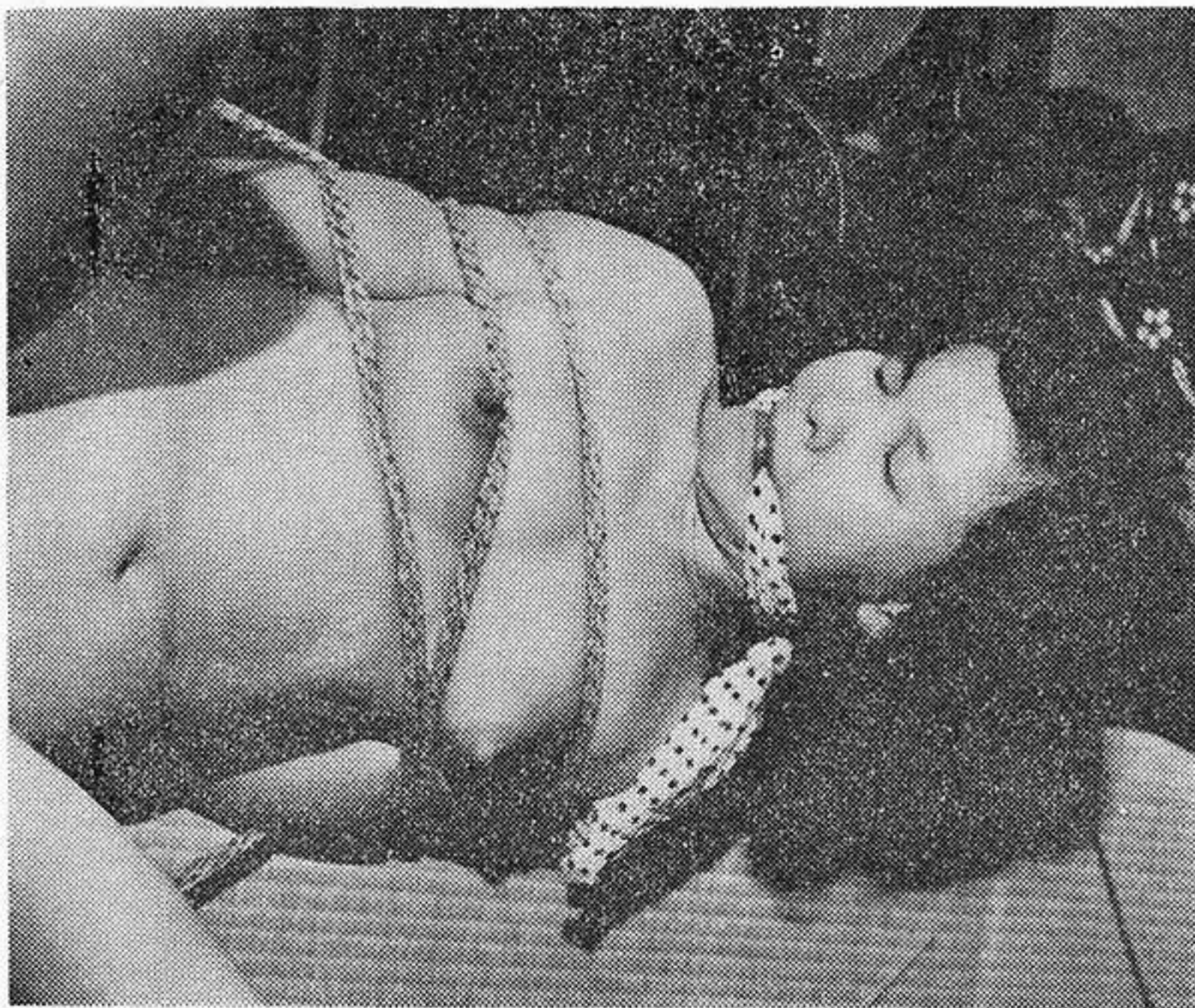
それで本を手にしたときは、びっくりしてしまいました。落っついて活字になった自分の文章を読みかえしてみますと、なにかし

ら、自分からはなれてしまって、他人のこのように思えてしまうのです。第一、自分の書いたのはこんなきれいな文章ではなかったのにと思えてきます。

その後、続きを書くようにと言われますが、なんだか自分のことをありったけ、あれで書き切ってしまったよ

うで、もう後は書けないのです。

以前、野外で吊り責め逆さ吊り責めめなんかをされた思い出がありませんが、今の私は、そんな吊り責めで、思いきり責められてみたいと考えていたりしています。そんなことを考える私って、やっぱり根っからのマゾな



んですね。

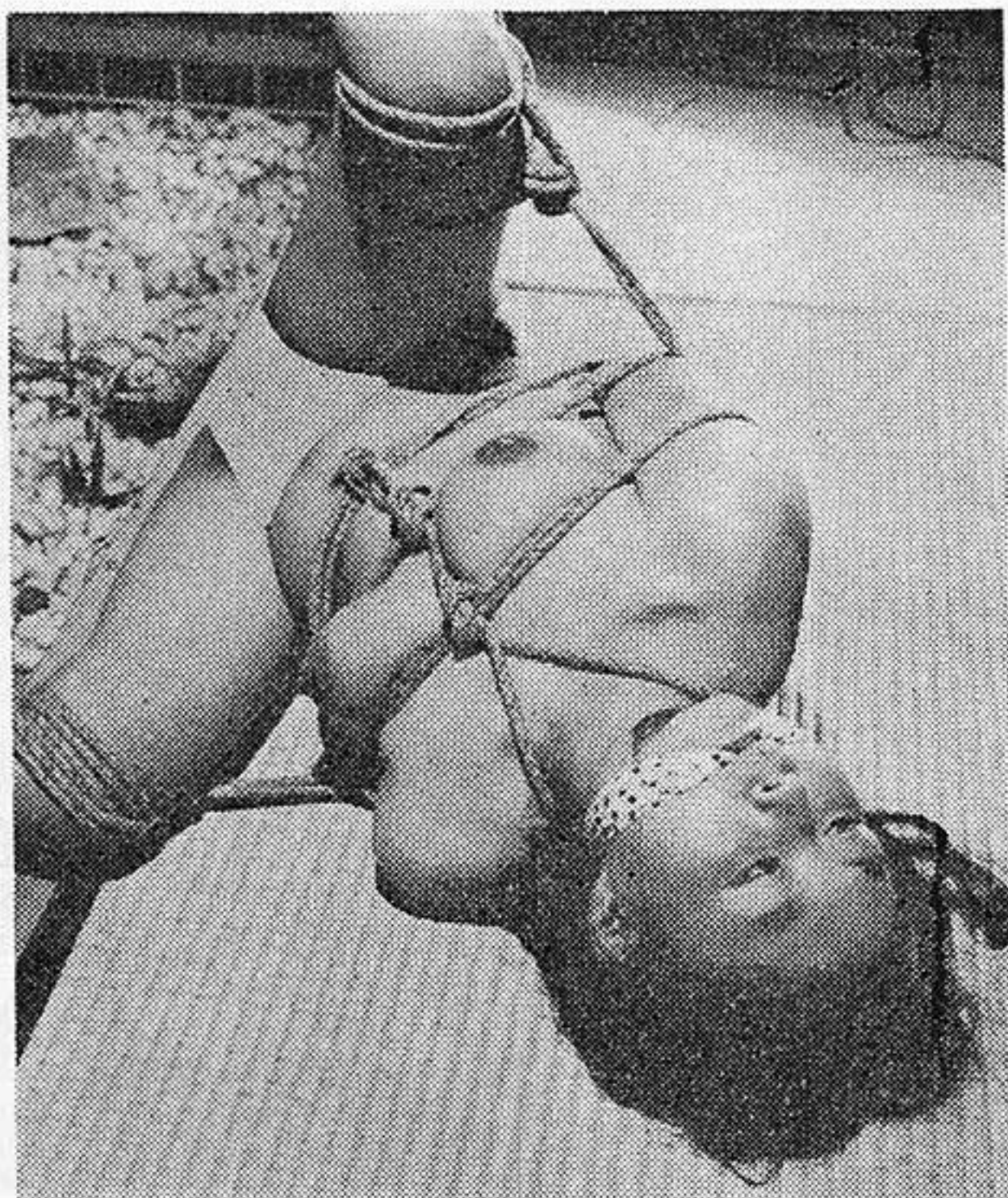
盛り場歩きは、やはり続けておられます。

でも、私のM好みの相手をして下さるような方は、まだ見つかりません。

そのうち、また拙い体験でも書かせていただきます。

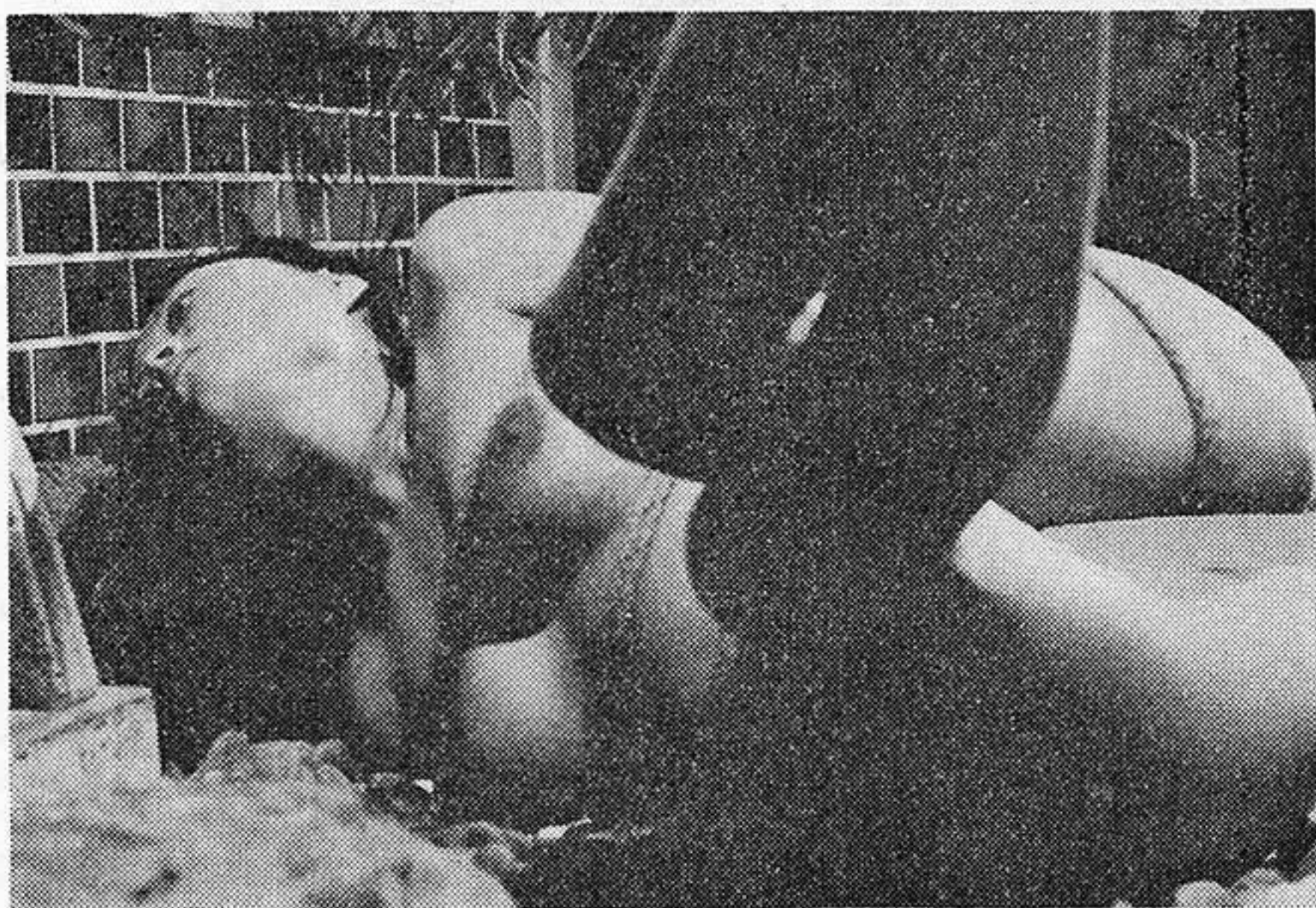

~~~~~ 高村浩子の<M女通信>雑感 ~~~~~  
~~~~~ 僕は責めるゾ！ ~~~~ 西東一輝 ~~~~~

四十七年十月号の△M女通信▽で、「雨の降るある日のこと」を読んだ時、何とも言えない位、引きつけられてしまった。何というニクサであろうか。山の岩肌からニジミ出る様なヌメヌメとした文章。燃えさしの焚火の、あの消え入る様なチヨロチヨロとした、はかない炎みたいな、あの文章。何度、読まされたかしれやしない。全く頭にきた。そして、この高村浩子という奴の事を知りたくなり、今度は古本屋で八月号を買わ



されてしまった。思い出しただけでも、カリカリとくる。ニヤロメと言って、このままでは腹の虫がおさまりそうにもなく、こんなラク書きを試してみた。
△私はどちらかと言いますと外出するのは、あまり好きではありません▽（と言うと、どちらかと言わない時は好きなのですね）
△特別の用がない限り……▽（という事は、特別の用がある時は、「大大好き」と言う訳ですね。ウッシッシッ）

△今日このごろの様に、毎日、雨が降りますと、よいオックウになります▽（誰だってそうだよバカメ）
△そんな私ですが台風六号が、日本をおそってくるかもしれないという日、一人で旅に出ました▽（と言う事は特別の用が出来たという事です）
△外出嫌いの私にしては、珍しい事です▽（ホントに珍しい事です）
△それもヨリにヨッテ台風がくるかもしれないという時に。ニヤロメッそんな事をするからだナ、今年の台風はヒガイが大きかったのは）
△今までの、こんな私にでも、お誘いの便りを下さった方が沢山ありました▽（ヘエー、君にも、それに、そんなに、沢山？ 世の中



△その中から数人の方々と文通して、その結果……▽（ニヤロメ、何と言う奴だ。一人ではあきたらず、それも一度に数人の方々と。ニヤロメッ、何と欲張りな奴なんだろう。オレはタマゲタ）

わが家のプレイ用具

『鏡』

貴田 はるえ

紐嚙みて歪みし乳房いとおしく
頬すり寄せし鏡面のつめたさ

深々と紐包みこむわがハダの
張り映し見て独りほほえむ

厭わしく涙落とせしあの頃の
わたしはどこにと鏡に問うなり

思うまじ選ぶくれたる実家^{さと}の母
裸身の縄目映し見るとは

惨めなる縛られ裸女の喘ぐとき
鏡に映りしわれとは思えじ

見事なる亀甲模様を眺めつつ
深く息吸い胸ふくらませみる

ふつくらと弾みに満ちし縛体に
夫の気持分かる想いも

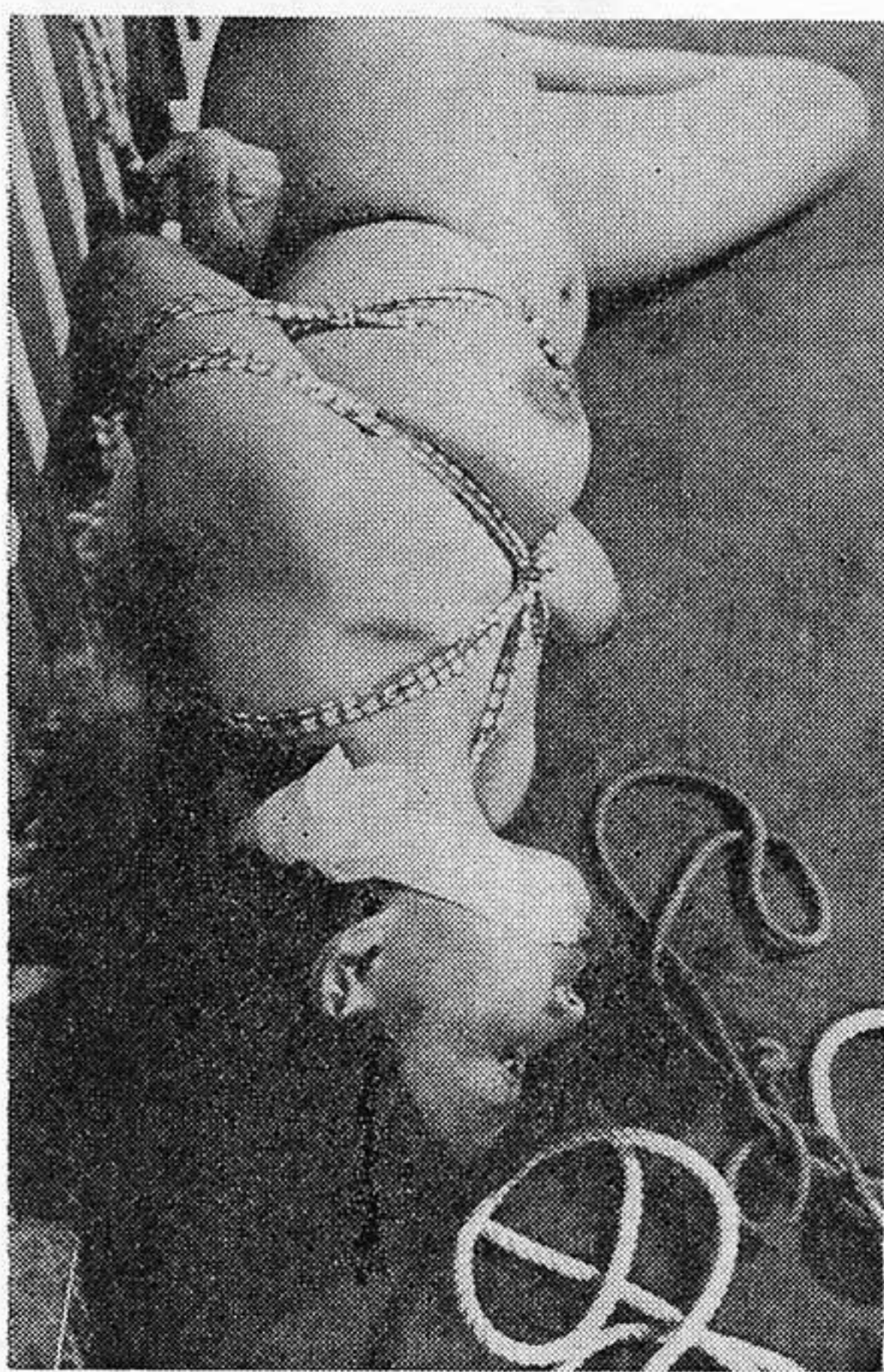
痛くとも昨夜に受けしあの縛り
われに似合うとふと思いきり

ただ単に化粧のために映すとき
空しく想うこの鏡かな

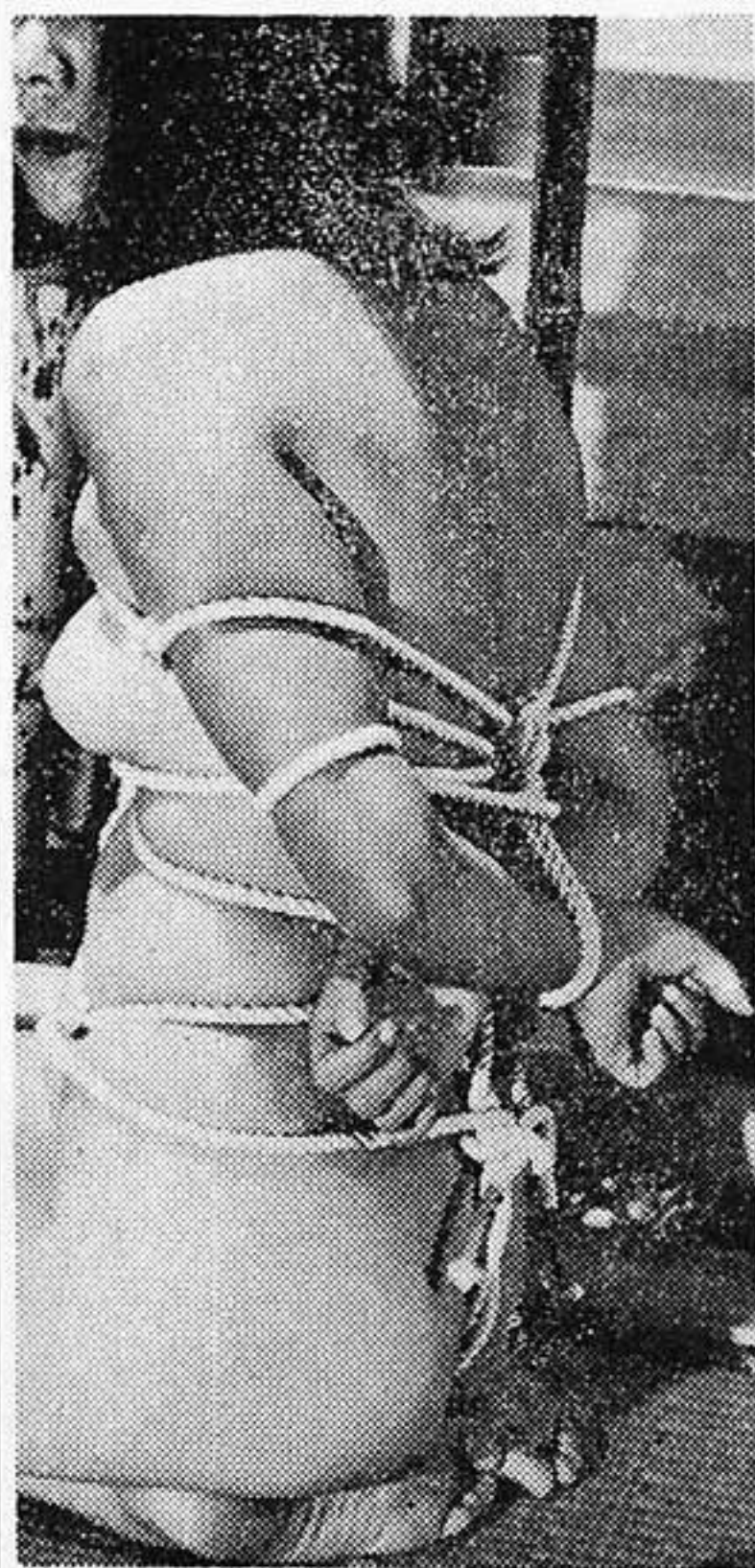
△特別な用がない限り、浩子は家の中であって、私を責めて下さる方に身も心も捧げきって、かしずきたいと思いますV（そして、特別な用ができたと言うやいなや、アッという間にどこかヘスツトンデ行くのだらう。この大ウソツキのコンコンチキメ。イーダ）

△決して数多くの方々にイジメラレタイ……などとは思いません。たった一人の方で、いいのですV（俺は沢山の方がいいと思うけどなア。ビコース、こんな欲張りな奴、とてもじゃないが、メンドオ

△次々と誌上には若くて美しく、そして新しい方が姿を見せられるのですもの、忘れられてゆくのはムリはありませんV（アレマ、アంత、今度はヤイテンノネ）
△一時は、とても、こんなには、お返事が書けないと、悲鳴をあげるほどV（ヘエー、どんなヒメイだ。コケコッコとでも、泣きやがったのかナ）
△沢山のお手紙を頂きましたが、このごろでは、お便りどころか誌上でも余り、浩子のことは話題にのぼらなくなりましたV（オオ、



カワイチヨ、カワイチヨ）
というようなわけで、大いに同情して書いてやることにしたのデス。又、十一月号を見ると、言葉を混じえてのプレイ、お芝居がかった責め方を下さる方って、いらっしやらないでしょうか、この呼びかけ、これを読んで、大いに、立候補する気になりました。
そんなプレイなら、まかせとけという程、私も好きな性分なのです。
それに、二日でも三日でも云々……。大いに気に入りました。



山下悠子への呼びかけ オダリスクの夢

城 章 夫

ぼくの奴隷、山下悠子よ。ぼくのところへ来るがいい。この俗世間で、おまえを取りまく、総べてのもの、おまえの所有にかかわる一切のものを捨て、その身一つをぼくの足もとに投げだすがいい。

ぼくの優しい奴隷、悠子よ。ぼくは、おまえの主人だ。ぼくは、おまえの所有者だ。おまえは、ぼくの所有物だ。おまえのエゴのことごとくを、ぼくに捧げなければならぬ。おまえの任務、おまえの義務は、ぼくに服従し、ぼくに仕え、ぼくを喜ばせ、ぼくを楽し

ませることだ。おまえは、おまえの紅く艶やかな唇を、みだりに動かすことを禁じられる。(ああ、おまえは、知るまい、それが女にとって、どんなに苦痛であることか!) ぼくのことばに対して、おまえは、「はい、ご主人さま」、「いいえ、ご主人さま」以外に、いかなるお喋りをも許されない。ぼくの美しい奴隷、悠子よ。おまえは喋るために口を動かすことは極度に制限されるが、しかし喰べるためには大いに口を動かさなければならぬ。おまえは奴隷であるからには、飢えないだけの食事を与えられれば充分だと書いてあるが、それは、とんでもない心得違いだよ。おまえは栄養のたっぷりある、おいしい物をモリモリ

喰べなければならぬ。おまえは何よりもまず、常に美しく健康でなければならぬのだから。おまえの頬は、いつも艶々として、ふくよかであり、おまえの乳房は、いつも豊かで丸やかであり、おまえの尻は、いつも逞しく張り切っている。いなければならぬのだから。そうでなくては、どうしておまえは、おまえのご主人であり所有者である、ぼくに奉仕し、ぼくを楽しませることが出来るだろう。

ぼくの可愛い奴隷、悠子よ。おまえは、いかなる些細な過ちをも許されない。おまえが、ぼくの命令に背き、あるいは、ぼくの意を満たさなかった時おまえは、きびしいお仕置を受けなければならぬ。お仕置のやり方は、いくらでもある。苦しいお仕置、恥ずかしいお仕置。それらについては、おまえが、ぼくの足元に馳せ参じた時ひとつひとつ、ゆっくり教えてやろう。たとえば――夜、おまえは素裸で後ろ手に緊く縛しめられ、ぼくのベッドに正座させられる。おまえのスベスベした白い肌に喰いこむのは、ぼく愛用の真黒な縄だ。その黒い縄が、おまえの柔らかな内股を締め上げて、おまえの無垢な乙女ごころを深い羞恥の海

編集部だより

○あれほど盛んだったSMブームも既に下り坂と言われている。それかあらぬか、書店の店頭からは一誌、又二誌と姿を消し、以前の静けさに戻ったようだ。漫画ブームが熱狂的にはやされて、それがやがて凋落したようにSMブームもまた短命に終わるのだろうか。○本誌はこの二月号で、やっとのこと三百号を迎えた。これからも派手さを避けて地道に一号一号の石段を築いてゆく考えであるが、内容だけは何年あともなっても、繰り返して読んで貰えるような充実したものにしたものだ。○その意味でも編集部では、新しい題材を持った新しい人を目を皿のようにして探しているし、その方が誌上で活躍されるための協力には惜しまないつもりである。投稿される原稿は勿論のこと葉書や通信に至るまで、これらと思うものは即刻迅速に手配している。だから、どうか自分の実力を試したい方は最も得意な部門で投稿をお願いしたい。優秀な作品は決して編集部が放っておく筈がないのだ。

女相撲の資料に就て 読者 にお 願 い

—— 雄 松 比 良 彦 ——



せまい国土の急激な発展で、民俗的伝承の消滅は、今や決定的です。たとえ存続していても、観光化した形が多い様です。わたくしも今の仕事からはなれて老後になれば、猪谷六合雄さんのようなワゴンを運転して、日本中を探しまわり、失われた女相撲の伝承の分布地図を、復元する事を楽しみにしていたのですが、この調子

相撲の御知見があれば、本誌読者通信等でお教えいただきたい事です。波多津、式見、御嶺などは伊万里進氏らの寄稿があり、明治の高田の興行は奮斗士氏の時事新報のお知らせもありますが、最近の様子は判りません。特に民俗の方で雨乞い神事、水神又は天童信仰との関係をたどるべきものでしょう。日本の北端と

では、そんな呑気な事では、駄目の様です。ここ数年の調べでも、既に殆ど、判らなくなっています。お願いしたいのは、本誌読者も全国各地の御出身がある事です。それぞれの郷土での伝承として、女

に涵^{ひた}すだろう。さてぼくは、おまえのふつくらと盛りあがる膝を枕として、安らかな眠りを樂しむとしよう。だが、おまえは眠ってはいけない。少しでも身じろぎしてぼくの眠りを妨げぬよう、おまえは、ひっそりとそこに坐って、おまえの犯した罪の重さを自分の膝

の上で、ゆっくりと味わうのだ。ぼくの、淑かな奴隷、悠子よ。一刻も早く、ぼくのところへ来るがいい。ぼくの足元に跪き、ぼくの足に口づけして、ぼくの奴隷となることを誓うがいい。そのときおまえは、おまえの夢みた奴隷の幸せを、つかむだろう。ぼくは、

おまえの所有者、おまえのカリフおまえのサルタンだ。おまえが、ぼくの足元に、ひれ伏す時、中東風の妖しいオダリスクの夢が、おまえを、ふんわりと包むだろう。優しい、美しい、可愛い、淑かな、ぼくの奴隷、悠子よ。歩いてくるがいい、真直に。

南端（秋田、山形、宮城—佐賀、長崎、愛媛）という民俗的分布は充分、注目に値します。高玉組というのも天童山麓の高前に発して何かの、伝承的背景がありましよう。読者の御関心のジャンルを問わず、この文がお目にふれましたらよろしく願います。所在、神事伝承の概略、存続した年代等が判れば、これにこした事はありません。

週刊誌のマンガに、トラックで巡業してまわる娘相撲が出ていますが、残念ながら実在しません。あんなのがあれば仕事も何もやめて、ぜひ木戸番にでもしてもらおうのですが。関連地名は秋田県扇田山形県高前他二三、岩手県荷竹、山形県温海、佐賀県波多津、同小川間、同中通村、同仁比山、長崎県式見、愛媛県御嶺です。これらの地以外のものも願います。

○夫婦SMプレイの告白や体験が相変わらず沢山、寄せられるのは心強い限りである。最近はずと下さるのて尚更、有難い。本誌の生んだ渡部好美夫人や三浦純子夫人のような淑かな日本の美人のM夫人が出現されることを読者の皆さまと共に、大いに期待している。

今後共、遠近に拘らず編集部宛、お便りを頂戴したいものである。○本誌の女性読者からの通信も、なかなか、多い。いろんな都合で誌上に顔を出して貰えない方も少なくはないが、可能な限り編集部では誌上を賑わして頂けるよう、お願いしている。カメラハント、又はルポ記事の主人公として、親しく読者に呼びかける若い女性が次々と出現することと思う。

○文章ばかりでなく、写真や絵画の投稿も決して少なくないのだが残念ながらこの方面では傑出したものが余り多くない実情である。『奇クサロン』などに於いては極力、読者の方々の投稿を採り上げようと心掛けていますので、出色のものを、お送り願いたいものだ。共通の広場に於いて共通の話題を文章や絵や写真で、大いに楽しく語り合おうではないか、皆さん。

S・M・Pのお呼びかけ

牝犬奴隷妻

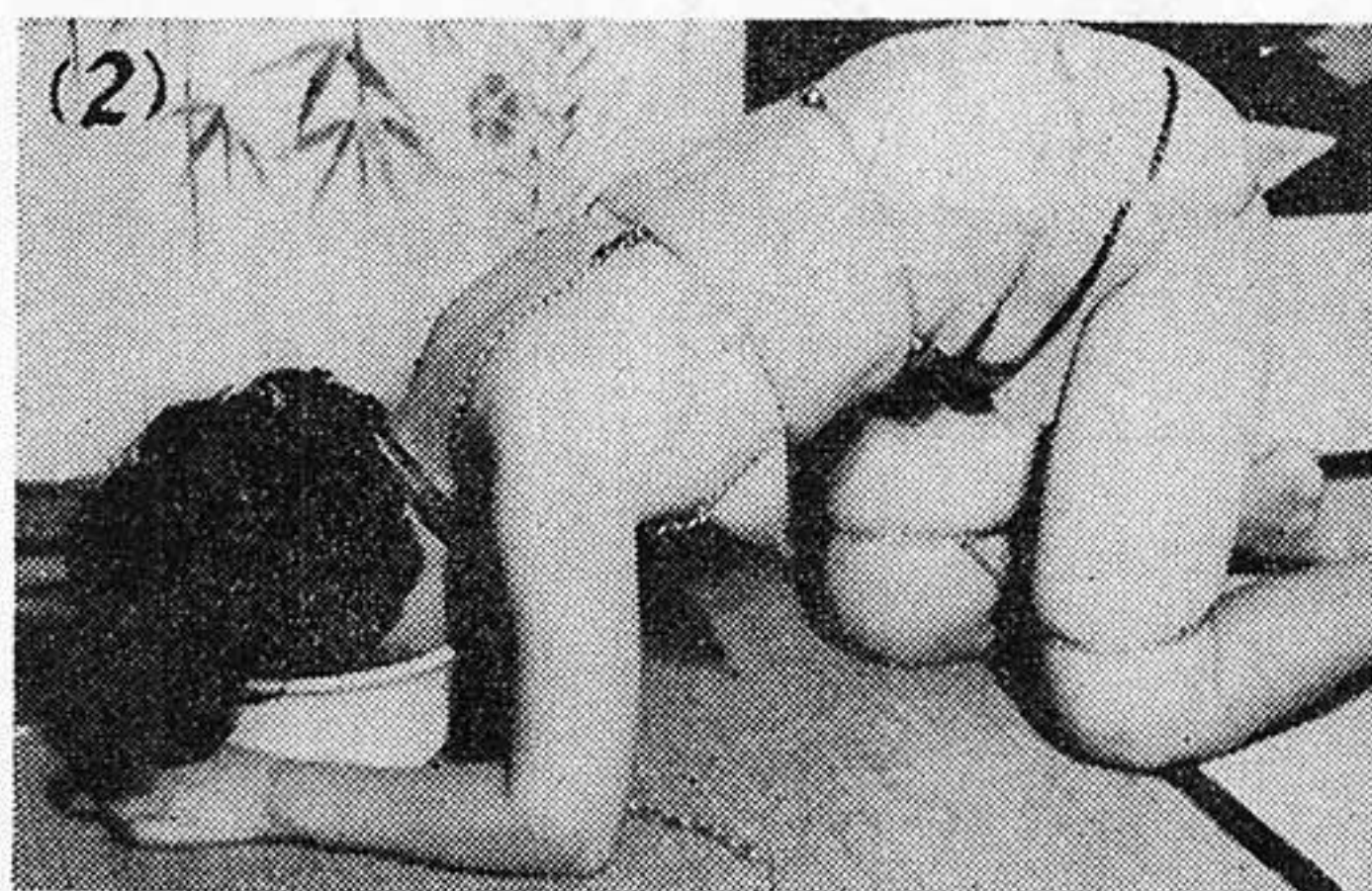
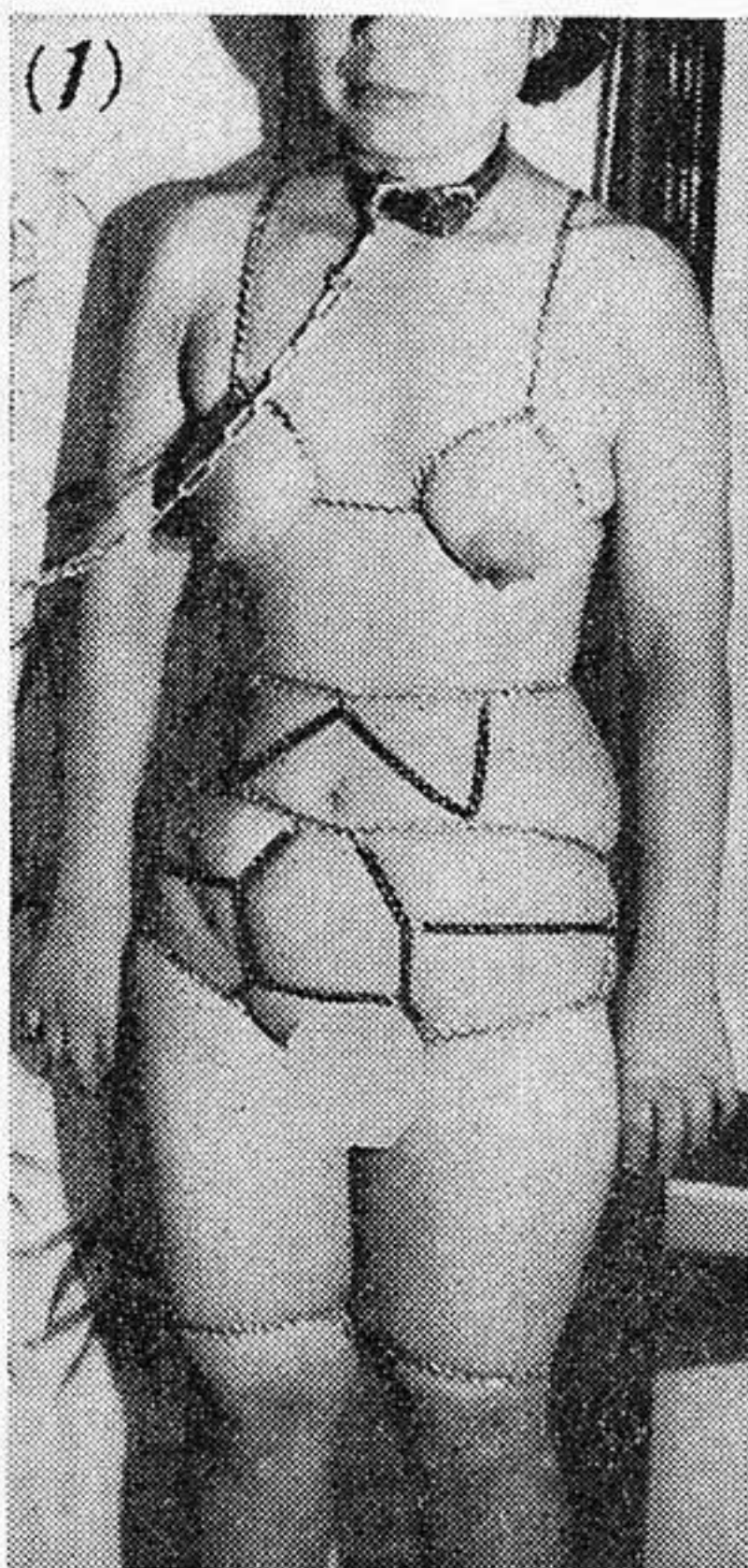
紀川正信

奇クファンの皆様、寒さに向かう折から、いかがお過ごしでしょうか。当方は、相も変わらず暇さえあればS・M・Pに励んでおります。最近のプレイ写真を同封しますので、御笑覧下されば幸いです。

(1) 剃毛プレイの後、クサリの奴隷着を締め上げ、犬の首輪をつけた立ち姿。

(2) 牝犬になったのだからと、犬なみの食事をさせているところ。

(3) 食後、骨に見立てたお



△告 白▽

しつけられた浣腸

関根好夫

私は、ある大会社の販売部に勤める四十五才の男で目下、甲府で営業所長をしている者ですが、長年に亘って「浣腸に対するノスタルジャー」に悩まされ続けてきました。それは、しつけられた浣腸を恋うる性癖といえるようで、コンプレックス化した為の悩みだったのですが、一年余り前に奇クを知るまでは、とても深刻なものだったのです。

その悩みの種になった浣腸は、私の旧制中学三年時代に患った肋膜炎の落とし子みたいなもので、約一年の療養中、半年ほどの絶対安静生活を命じられた時に「しつけられた」ものでした。

派出婦会から来てくれた、まだ若い戦争未亡人の献身(?)的な付き添いぶりに、私の浣腸されて便器に排泄するのを嫌がるダダコネが、見事に征服されたのです。

Tさんというその未亡人は、今思えばS要素が多分にあったように、私が嫌がれば嫌がるほど、強制的に何回も、浣腸を繰り返して、薬液量も多く注入して、ダダをコ

ネても無駄だと思い知らされたのですが、おとなしくすると六十ccほどで止めてくれるのを知ってからは、従順に浣腸に応じるようになったのでした。

しかしこの浣腸は、絶対安静が解除されてからも続き、Tさんから注入を受けない以上は、私の排便は出来ないような気持になっていましたし、いつの間にか、Tさんの浣腸を待ち遠しく感じるようになっていた私だったのです。

病院の寝床時間、夜の八時がTさんの浣腸器、活躍時間で、薬液は毎日、変わりました。グリセリン、薬用石けん液、ヒマシ油を薄めたもの、微温湯だけ、等々でしたが、Tさんは、ただ注入するだけではなく、排便までの時間、排便量などを刻明に記録していて、彼女の判定で「成績の良し悪し」が決められました。

「こらえる時間が長く、排便量が多い」のが成績の良い時で、蒸しタオルで優しく下半身、清拭の、ごほうび付きですが、成績の悪い時は「腸内に毒素が残る」とかで



もちゃを与えて、犬らしく遊ばせてやっているところ。

さて妻とのプレイは、こんな調子ですが、大阪市の山添清子様にお呼びかけしたいと思っています。今まで何回か奇クサロンに掲載していただいた妻のプレイ写真に依っておわかりと思いますが、貴方のお好みと一致するのではないのでしょうか。私の住む和歌山とは近くでもあるし、ぜひ私とS・M・Pの機会をお考え下さい。尚、最上卓也氏。同様の好みと思われるですが、ぜひ御文通願いたく存じます。よろしく御一考下さい。

南加津子嬢を想いて

坂上住人

目を閉じる。俺は直ちに暗黒の世界に立って、おまえだけと逢うことが出来る。後手の指を屈伸させながら、ひしひしと掛けられて行く縄が、肌に埋まるのを、羞恥と喜悅の情感で以て受けている、おまえとだ。

おまえの、虐げられ、羞かしめられることを望む訴えを、俺は、若い女のふくよかな柔肌の

内に秘められた情熱の叫びとして注目した。そして、その時から、暗黒の世界でおまえと二人きりの時間を持つ日々が始まったのだ。おまえは今、おまえの望み通りに、俺の縄目に悶えている。白々と輝くような、おまえの裸身は、縄の掛かるまでのスナリとした曲線は消え、まるで丸めた小餅をくっつけ合わせたように、至ると

再度の微温湯浣腸と、後始末も極めて簡単という懲罰(?)です。

殆ど二人きりで一年近い個室生活のうちには、このような「しつけ」以外にも、いろいろな強制的なしつけをされましたが、特に快方に向かった退院二カ月前からは、ここに書けないようなことをTさんは強要したものでした。

あの時の「しつけられた浣腸」が、後年、クリスチャンの家庭に育った私が同じクリスチャンの妻と結ばれ、平和な家庭と社会的地位が固まるに比例するかのよう私を精神的に苦しめるのでした。奇クを知ってから、極端なコンプレックス感は消えましたが、

ここに小山が出来て、それがプツクリと、とび出した大山、中山と共に、何とも言いようのない艶めかしい美を創り出しているのだ。

おまえは美女だ。いや、日頃のおまえを俺は知らない。だが、おまえが縛られた時、胸縄にセリ出された乳房や、股間縛りに明確となった双臀などが、日頃のおまえを数段も数十段も上廻る、真の美女に仕立て上げることは間違いないのだ。だから俺は、被虐を恋う

欲求不満は、そのままです。

交互の浣腸プレイに応じてくれる女性がいれば、幼稚ながらも身動き出来ぬように縛り上げ、充分に浣腸の妙味を味あわせた後で、あのTさんに強要され、しつけられた「舌技」を以て、共に陶酔境に遊ぶことも出来るだろうに考えると、矢も楯もたまらない思いになるのです。

入院当時のTさんとのことは、いずれ詳しく告白文にしたいと思っていますが、どなたか、浣腸を主としたプレイに応じて下さる女性の方がおられましたら、秘密と信用を条件として、ご交際願いたいものですと念願しています。

るおまえこそ、真の美女だと断言するのだ。

この世に、天与の柔肌に緊縛を受け、無防備の全裸身にマゾの喜びを溢れさせて、むせぶ若い女体以上に美しいものが、俺には、あるとは思えない。被虐の女こそ、美女なのだ。

南加津子なる、おまえよ。願わくば臉の裏から、とび出し、暗黒ならぬ燭光のある世界で、わが縄を受け給え。

〔秘蔵版SM資料一覧表〕

従前一時的に分譲中止しており
ましたSM資料の中で特に好評だ
った左記の写真は特に御希望の方
に限り焼増し致します故、前金に
て天星社宛お申込み願います。

レインコートの拘束

大手札四枚一組 六〇〇円
大塚 啓子 略号△いろ▽

猪吊りの美女

大手札三枚一組 五〇〇円
梨花悠紀子 略号△いの▽

色褌の開股縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
長野 良子 略号△いふ▽

椅子責めの果て

大手札三枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号△いす▽

マニヤの全裸緊縛フォト

大手札三枚一組 五〇〇円
栗本 ミチ 略号△いな▽

日本髪全裸強烈縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
山原 清子 略号△いら▽

洋髪全裸強烈縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
山原 清子 略号△いこ▽

日本髪全裸股間縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
山原 清子 略号△いさ▽

可憐島田髷全裸縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
山原 清子 略号△いみ▽

メンスバンド責め

大手札五枚一組 七〇〇円
東浦ひかる 略号△はん▽

ハリツケ

大手札三枚一組 五〇〇円
新宮 夫人 略号△はみ▽

鼻責めのアップ

大手札三枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号△はす▽

メンスバンド足挙げ

大手札三枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号△はそ▽

鼻責め万華鏡

大手札八枚一組 一四〇〇円
鈴木 晃子 略号△はた▽

鼻いじめ三態

大手札三枚一組 五〇〇円
山原 清子 略号△はね▽

浴後の剃玉子縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はゆ▽

投げだす緊縛裸身

大手札四枚一組 六〇〇円
中河 恵子 略号△はよ▽

待望の脚挙げ姿態

大手札四枚一組 六〇〇円
中河 恵子 略号△はて▽

二ツ折女体エビ責め

大手札三枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はお▽

開股縛りにて喜悅する女

大手札四枚一組 六〇〇円
中河 恵子 略号△はわ▽

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はふ▽

診察を受ける妊婦

大手札四枚一組 六〇〇円
田中美佐子 略号△にし▽

臨月腹開陳(座位)

大手札四枚一組 六〇〇円
田中美佐子 略号△にり▽

臨月腹開陳(立位)

大手札三枚一組 五〇〇円
田中美佐子 略号△にす▽

突き出した臨月腹

大手札三枚一組 五〇〇円
田中美佐子 略号△にい▽

臨月の裸身像(座位)

大手札三枚一組 五〇〇円
田中美佐子 略号△にぬ▽

柱縛りの妊産婦

大手札二枚一組 四〇〇円
田中美佐子 略号△にや▽

臨月の妊婦緊縛

大手札三枚一組 五〇〇円
田中美佐子 略号△にち▽

臨月の妊婦裸身像(立位)

大手札三枚一組 五〇〇円
田中美佐子 略号△にお▽

縛られた妊婦の裸身

大手札二枚一組 四〇〇円
田中美佐子 略号△にる▽

九カ月の妊娠腹

大手札三枚一組 五〇〇円
安原さゆり 略号△にん▽

八カ月の妊娠腹

大手札三枚一組 五〇〇円
安原さゆり 略号△にへ▽

乳房強調妊婦菱縄縛り

大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△にめ▽

双胎八カ月腹大寫し

大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△ほり▽

双胎妊娠線の出た蛙腹

大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△ほぬ▽

後手縛りの双胎妊孕婦

大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△ほか▽

八カ月の双胎の猿轡と緊縛

大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△ほよ▽

股間縛りに喘ぐ妊婦

大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△ほつ▽

初産双胎妊婦開股縛り

大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△ほえ▽

双胎妊孕腹の凄愴切腹

大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△ほら▽

八カ月の双胎革具責め

大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△へね▽

九カ月の双胎首枷責め

大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△への▽

逆さ吊りの正面と背面

大手札二枚一組 四〇〇円
増田みゆき 略号△つる▽

手と足の宙吊り

大手札三枚一組 五〇〇円
梨花悠紀子 略号△つた▽

弓吊り責め

大手札二枚一組 四〇〇円
梨花悠紀子 略号△つき▽

最近撮影の新人新趣向緊縛責め写真集

S M組百態 大手札印画紙 (9×13 ㎝) 極鮮明焼付写真

各組 一組一枚 (送料共)

五組五枚 八〇〇円

十組十枚 一五〇〇円

二十組二十枚 二八〇〇円

五十組五十枚 五〇〇〇円

百組全部百枚 八〇〇〇円

(郵便番号 545-91) 天星社
大阪市阿倍野局 私書箱14号

奇クの誌上を賑わしている新しいマゾ女性の方が、清纯に或は妖艶に、それぞれその個性にマッチした縛られ方責められ方をされて甘い吐息を洩しています。マニアの方の蒐集帖の一頁に更に新鮮な資料を加えて頂きたく、ここにS Mの香ぐわしい魅力に溢れるニューフォトを提供いたします。

☆

| | | | | | | | |
|---|---------------|----|----------------|----|----------------|-----|-----------------|
| 1 | 片足吊りに喘ぐ(玉木章子) | 28 | 排便姿態で縛る(江口淑子) | 60 | 高々と上る手首(福井桃子) | 92 | 後手吊りの全裸晒(長井葉津子) |
| 2 | 柱に晒す全裸女(玉木章子) | 29 | 欄間に晒す開股(江口淑子) | 61 | ポリウムを括る(笠井奈保子) | 93 | 迫るイルリ嘴管(長井葉津子) |
| 3 | 猿轡に呻く縛女(玉木章子) | 30 | 答で強要の汚辱(江口淑子) | 62 | 遅ましき臀部責(笠井奈保子) | 94 | 素人娘緊縛全裸(長井葉津子) |
| 4 | 開股縛りの片足(玉木章子) | 31 | 縄の痛さに泣く(鈴木千鶴子) | 63 | 太股に喰込む縄(笠井奈保子) | 95 | 浣腸責めの恐怖(長井葉津子) |
| 5 | 菱縄縛りに泣く(玉木章子) | 32 | 浣腸にのけぞる(鈴木千鶴子) | 64 | 飛出す乳房責め(笠井奈保子) | 96 | 半減した浣腸液(長井葉津子) |
| 6 | 右足挙げ柱縛り(玉木章子) | 33 | 凄絶海老なぶり(鈴木千鶴子) | 65 | 柔肌に喰込む縄(笠井奈保子) | 97 | 稚き臀部を開く(長井葉津子) |
| 7 | 日陰の女の羞恥(玉木章子) | 34 | 大の字開脚晒し(鈴木千鶴子) | 66 | 豊満臀部鞭打ち(笠井奈保子) | 98 | 麻縄縛りの正面(長井葉津子) |
| 8 | 開股責めの正面(玉木章子) | 35 | 棒責め裸女失神(鈴木千鶴子) | 67 | 首縄高手小手縛(笠井奈保子) | 99 | 注ぎ込まれる液(長井葉津子) |
| 9 | 八の字開脚責め(玉木章子) | 36 | 両足首開脚吊り(鈴木千鶴子) | 68 | 縄の束に埋れる(笠井奈保子) | 100 | 洋裁生のM姿態(長井葉津子) |

奇ク活躍若手人気五人娘緊縛写真集

K組 百態 大手札印画紙 (9×13 糎) 極鮮明焼付写真

各組 一組一枚 (送料共)

五組五枚 八〇〇円
十組十枚 一五〇〇円
二十組二十枚 二八〇〇円
五十組五十枚 五〇〇〇円
百組百枚 八〇〇〇円

(郵便番号545-91) 天星社
大阪市阿倍野局 私書箱14号

最近の奇ク誌上に於て口絵或は本文の写真や告白手記などで大活躍している若くて美しいM女たちの印画紙に焼付けたフォトを女体緊縛コレクトマニアの方々の為に譲りします。この素晴らしく迫力に満ちた奇ク独特の華麗な蒐集品を、どうかファンの皆様のお手元で愛して下さい願います。

☆

1 正面から狙う眼(鈴木千鶴子)
2 引回し股間縛り(深田 菊子)
3 ポリウムを縛る(笠井奈保子)
4 M女なればこそ(高村 浩子)
5 柔肌にむごき縄(深田 菊子)
6 後手足首後吊り(高村 浩子)
7 縄で開股を強要(深田 菊子)
8 臀部と後手縛り(前田真知子)
9 排泄を耐える女(笠井奈保子)

10 椅子開股両足吊(鈴木千鶴子)
11 屋上のいたぶり(前田真知子)
12 臀部を晒す緊縛(笠井奈保子)
13 高々と後手縛り(鈴木千鶴子)
14 首縄に泣く屋上(前田真知子)
15 美女両脚柱縛り(深田 菊子)
16 豊満な尻部責め(深田 菊子)
17 惨美貌の羞らい(深田 菊子)
18 猪宙吊りの浩子(高村 浩子)
19 棒責めにあえぐ(鈴木千鶴子)
20 美へ与える汚辱(前田真知子)
21 縦縄に呻く女体(深田 菊子)
22 白き裸身の縄目(笠井奈保子)
23 両足吊流腸姿態(鈴木千鶴子)
24 閨での羞恥責め(深田 菊子)
25 正座しての懇願(前田真知子)
26 仕置と折檻の果(高村 浩子)
27 奴隷の誓い宣言(笠井奈保子)
28 菱縄縛りに喘ぐ(笠井奈保子)
29 強烈な股間縛り(鈴木千鶴子)
30 総てをさらして(前田真知子)
31 片足挙げ柱縛り(深田 菊子)
32 全身に喰込む縄(高村 浩子)
33 宙に浮いた苦痛(鈴木千鶴子)
34 もっと股を開け(笠井奈保子)
35 転がされた女体(笠井奈保子)
36 形よきお脐悦情(深田 菊子)

37 そんなのはイヤ(前田真知子)
38 喰込む股間縛り(高村 浩子)
39 菱縄正面髪掴み(鈴木千鶴子)
40 両足吊り逆エビ(高村 浩子)
41 縄束の中の折檻(深田 菊子)
42 乳房強調の猿轡(笠井奈保子)
43 責め抜かれた果(鈴木千鶴子)
44 全裸の緊縛正坐(笠井奈保子)
45 階段に呻く女体(深田 菊子)
46 後手縛りの模範(深田 菊子)
47 両足首逆さ緊縛(深田 菊子)
48 階段で逆立縛り(深田 菊子)
49 責めに反る拇指(前田真知子)
50 豊満な全裸縛り(笠井奈保子)
51 プロポーション(鈴木千鶴子)
52 羞恥を晒す女体(深田 菊子)
53 海老責二つ折り(高村 浩子)
54 正面開股菱縄縛(深田 菊子)
55 白肌に喰入る縄(前田真知子)
56 尻立てアヌス責(深田 菊子)
57 竹と棒責め地獄(前田真知子)
58 豊隆乳房へ責め(高村 浩子)
59 海老棒責めの惨(鈴木千鶴子)
60 羞恥股裂き責め(前田真知子)
61 高々棒吊り両足(深田 菊子)
62 正面片足引上げ(前田真知子)
63 強烈麻縄の魔力(笠井奈保子)
64 ニツ折りの仕置(鈴木千鶴子)
65 猿ぐつわの表情(笠井奈保子)
66 逆片足エビ責め(前田真知子)
67 厳重な後手縛り(笠井奈保子)
68 反り返った女体(鈴木千鶴子)

69 縛りに放心状態(笠井奈保子)
70 美を汚辱する時(前田真知子)
71 片足吊りの正面(深田 菊子)
72 乳房強調の縛り(深田 菊子)
73 片足吊りの序曲(笠井奈保子)
74 縄で攻める開股(深田 菊子)
75 縄痕むごし柔肌(前田真知子)
76 淫らな羞恥責め(鈴木千鶴子)
77 開股を攻める縄(高村 浩子)
78 放置された縛体(笠井奈保子)
79 憂愁の美女緊縛(深田 菊子)
80 足挙げ開股責め(深田 菊子)
81 猿轡苦痛の表情(笠井奈保子)
82 悦虐に泣く乳房(高村 浩子)
83 責められた悦楽(鈴木千鶴子)
84 屋上の引き回し(前田真知子)
85 写真マニアの顔(笠井奈保子)
86 臀部突出足縛り(深田 菊子)
87 気懶るき責の宴(鈴木千鶴子)
88 さあ立たないか(前田真知子)
89 棒縛り開脚責め(深田 菊子)
90 人身御供の裸身(笠井奈保子)
91 悶えに悶えた末(鈴木千鶴子)
92 痛いから許して(前田真知子)
93 乳房責と股間縛(高村 浩子)
94 諦観の晒しもの(笠井奈保子)
95 階段で開く両脚(深田 菊子)
96 強制された開股(笠井奈保子)
97 顔を向けないか(前田真知子)
98 大の字開股責め(深田 菊子)
99 美しき縛り表情(深田 菊子)
100 豊かさを縛る縄(笠井奈保子)

▲最新撮影V異色美人モデル緊縛フォト選

Y組新百態 大手札型印画紙 (9×13種) 極鮮明焼付

各組 一枚一組 (送料共)

| | |
|--------|-------|
| 四組四枚 | 五〇〇円 |
| 十組十枚 | 一〇〇〇円 |
| 二十組二十枚 | 一八〇〇円 |
| 五十組五十枚 | 四〇〇〇円 |
| 百組百枚 | 七〇〇〇円 |

(郵便番号545-91)

いずれも直接印画紙に焼付けた極めて鮮明美麗なフォトで複写ものは一枚も含まれていません。貴重なコレクションとして永久に保存して頂くに足る優秀品であります。お申込みは大阪市阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社宛へ前金にて願います。

☆

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|---------------|---------------|---------------|--------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 | 37 | 36 | 35 | 34 | 33 | 32 | 31 | 30 | 29 | 28 | 27 | 26 | 25 | 24 | 23 | 22 | 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 | 14 | 13 | 12 | 11 | 68 | 67 | 66 | 65 | 64 | 63 | 62 | 61 | 60 | 59 | 58 | 57 | 56 | 55 | 54 | 53 | 52 | 51 | 50 | 49 | 48 | 47 | 46 | 45 | 44 | 43 | 42 | 41 | 40 | 39 | 38 | 100 | 99 | 98 | 97 | 96 | 95 | 94 | 93 | 92 | 91 | 90 | 89 | 88 | 87 | 86 | 85 | 84 | 83 | 82 | 81 | 80 | 79 | 78 | 77 | 76 | 75 | 74 | 73 | 72 | 71 | 70 | 69 |
| 台上に晒す全裸(三浦純子) | 開股パイプ責め(三浦純子) | 尻挙げ開股責め(三浦純子) | 二つ折り臀挙げ(三浦純子) | 麻縄強烈柱縛り(三浦純子) | エビ責め縄猿轡(三浦純子) | 海老縛り閨責め(三浦純子) | 正面エビ強烈責(三浦純子) | 喘ぐ縄猿轡痛め(三浦純子) | 痛苦に耐える女(三浦純子) | 全裸緊縛の愉悦(渡部好美) | 閨中の開股縛り(渡部好美) | 悦虐の開股縛り(渡部好美) | 蛾涙責めに哭く(渡部好美) | 開股責めの序曲(渡部好美) | 責に諦観の美貌(前田真知子) | 逆反り弓吊り責(前田真知子) | 光に映える白肌(前田真知子) | 裸女を押込める(前田真知子) | 柔肌に喰い込む(前田真知子) | 首縄菱亀甲縛り(前田真知子) | 純肌を柱に晒す(前田真知子) | さらけ出した女(前田真知子) | 全裸の美女に縄(前田真知子) | 鏡に映るエビ責(前田真知子) | 白肌をくびる縄(前田真知子) | 緊縛に悶える足(座間明子) | 開股縛りに諦観(座間明子) | 後手縛りを誇る(座間明子) | 美しき全裸縛(座間明子) | 股間縛りに喘ぐ(座間明子) | 高らかに笑う顔(座間明子) | 沖縄美人の表情(座間明子) | 豊満を縛る魔手(座間明子) | 開股正面逆立責(三浦純子) | 二折りの引直し(三浦純子) | 驚づかみの黒髪(三浦純子) | 爛熟した女体責(三浦純子) | ムチ打ちの洗礼(三浦純子) | 愛妻飼育の過程(三浦純子) | 股間縛りの正面(三浦純子) | 海老責に喘ぐ顔(谷山久美子) | 強烈二折り責め(谷山久美子) | 赤裸の尻を暴く(谷山久美子) | アニマルの表情(谷山久美子) | 苦痛に反る足指(谷山久美子) | 極限の苦痛襲う(谷山久美子) | 悦虐悶えの果て(谷山久美子) | 緊縛最高の悦楽(谷山久美子) | 歯で咬んだ猿轡(谷山久美子) | 責めるの許して(谷山久美子) | 苦悶の末の頂点(谷山久美子) | 椅子開股で晒す(谷山久美子) | 強縛愉悦の極み(谷山久美子) | 大の字開股縛り(谷山久美子) | 情容赦ない麻縄(谷山久美子) | 厳しき後手縛り(谷山久美子) | ムチ打ちに泣く(谷山久美子) | 条痕を尻に残す(谷山久美子) | 哀憫非情な麻縄(谷山久美子) | 女性自身を晒す(谷山久美子) | 柱に二女の連縛(好美・叢子) | 責め疲れた二女(好美・叢子) | 全裸の二女陳列(好美・叢子) | 高手小手を開陳(好美・叢子) | 椅子開股の二人(好美・叢子) | 連縛双丘の珍景(好美・叢子) | 羞恥に悶える女(叢子・好美) | 美しき床の飾り(叢子・好美) | 羞らう美女二人(叢子・好美) | 正面相對の連縛(叢子・好美) | 股間縛りの併立(叢子・好美) | 尻も何も丸出し(好美・叢子) | 捕われの全裸像(渡部・川路) | 一体にした緊縛(渡部・川路) | 点火した蛾燭責(渡部・川路) | 足挙げ正面棒責(川路むら子) | 棒縛り羞恥責め(川路むら子) | 三本の棒で拘束(川路むら子) | 麗しき首縄旅情(前田真知子) | 伸びやかな肢体(前田真知子) | 一糸まとわぬ女(前田真知子) | 灯籠の前で縛る(前田真知子) | Mを恋する表情(前田真知子) | 無垢の肌に麻縄(前田真知子) | 美は麻縄を超越(前田真知子) | 白肌と汚れた縄(前田真知子) | 金髪は縄に動く(前田真知子) | 後手縛りで開脚(前田真知子) | 両手挙げ美肌晒(前田真知子) | 日本式胡坐縛り(前田真知子) | 碧眼に驚きの目(前田真知子) | 白人の肌を縛る(前田真知子) | 金髪碧眼の女性(前田真知子) | 高手小手に縛る(前田真知子) | 諦観白人の表情(前田真知子) | 投げだした全裸(前田真知子) | 卓上の一輪の花(前田真知子) | 畳の上に転がる(前田真知子) | 縛った異国の女(前田真知子) |

| | |
|---------------|--------------------------------|
| 浣腸責め地獄の妊産婦 | 大手札四枚一組 六〇〇円
増田みゆき 略号△ほな▽ |
| 浣腸責めの甘い恐怖 | 大手札三枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△とか▽ |
| 浣腸液注入直後の状況 | 大手札三枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△とま▽ |
| 強制浣腸の各美姿態 | 大手札三枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△とみ▽ |
| 浣腸責めの美態開陳 | 大手札三枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△とめ▽ |
| 浣腸を待つポーズ | 大手札三枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△とも▽ |
| エネマと縛りの恐怖 | 大手札三枚一組 五〇〇円
長井葉津子 略号△よて▽ |
| エネマ責めの恐怖 | 大手札三枚一組 五〇〇円
長井葉津子 略号△よる▽ |
| 浣腸器を弄び愛撫する女 | 大手札三枚一組 五〇〇円
長井葉津子 略号△よろ▽ |
| イルリガートルの浣腸責め | 大手札三枚一組 五〇〇円
長井葉津子 略号△よた▽ |
| 浣腸にむせび泣く女 | 大手札四枚一組 六〇〇円
大島 照代 略号△つゆ▽ |
| 身動き出来ぬ浣腸地獄 | 大手札四枚一組 六〇〇円
大島 照代 略号△つえ▽ |
| 浣腸とオシメ装着 | 大手札四枚一組 六〇〇円
大塚 啓子 略号△ひそ▽ |
| 強制浣腸責めの序曲 | 大手札三枚一組 五〇〇円
長井葉津子 略号△よか▽ |
| 襲いくる浣腸器嘴管の先 | 大手札三枚一組 五〇〇円
長井葉津子 略号△より▽ |
| 鼻孔の奥を探る魔手 | 大手札三枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はむ▽ |
| 開孔器にてひらく鼻孔 | 大手札三枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はら▽ |
| なぶられる拘束裸身の鼻 | 大手札三枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はれ▽ |
| 仰臥した緊縛女体の鼻なぶり | 大手札三枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はに▽ |
| 美女の鼻をもてあそぶ | 大手札三枚一組 五〇〇円
左近麻里子 略号△ちる▽ |
| 美女の鼻孔を觀賞する | 大手札三枚一組 五〇〇円
左近麻里子 略号△ちれ▽ |
| 開孔器で検査する鼻孔 | 大手札三枚一組 五〇〇円
左近麻里子 略号△ちき▽ |
| 鼻孔に煙草挿し込み責め | 大手札三枚一組 五〇〇円
美木乃々子 略号△ぬと▽ |
| 可愛い鼻責めのアップ | 大手札五枚一組 七〇〇円
美木乃々子 略号△ぬは▽ |
| 強烈縛りで顔面翻弄 | 大手札八枚一組 一二〇〇円
美木乃々子 略号△ぬほ▽ |
| 可憐乙女の鼻をいたぶる | 大手札四枚一組 六〇〇円
一宮百合子 略号△るえ▽ |
| 鼻責めと鼻孔のアップ | 大手札三枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△ねけ▽ |
| 鼻責めの陶醉境 | 大手札三枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号△なは▽ |
| 淫虐鼻なぶりの形相 | 大手札三枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号△ない▽ |
| 鼻の穴を責める | 大手札三枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号△なく▽ |
| 夫婦連縛にて鼻責め | 大手札十枚一組 一五〇〇円
増田みゆき 略号△らか▽ |
| 鼻責めに悶える女 | 大手札七枚一組 九〇〇円
木村 洋子 略号△むる▽ |
| 顔を凌辱される女 | 大手札四枚一組 六〇〇円
木村 洋子 略号△むよ▽ |
| 鼻責めと緊縛 | 大手札五枚一組 七〇〇円
大塚 啓子 略号△うい▽ |
| 鼻責めによる悦楽 | 大手札二枚一組 四〇〇円
東浦・大塚 略号△きな▽ |
| 美しい鼻をいたぶる | 大手札三枚一組 五〇〇円
遠藤百合子 略号△ゆは▽ |
| 乳房いじめの責め | 大手札二枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号△とお▽ |
| 豊かな乳房を責める | 大手札三枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号△とき▽ |
| 逆エビ吊り責め | 大手札六枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号△りつ1▽ |
| 逆胴吊り責め | 大手札六枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号△りつ2▽ |
| 大の字逆さ吊り | 大手札二枚一組 四〇〇円
増田みゆき 略号△むの▽ |
| 豊満乳房しばり責め | 大手札三枚一組 五〇〇円
長野 良子 略号△うは▽ |
| 吊り打ち責め | 大手札三枚一組 五〇〇円
関谷富佐子 略号△やり▽ |
| 腰元の吊り責め | 大手札二枚一組 四〇〇円
村井知可子 略号△こり▽ |
| 乳房強調膨隆責め | 大手札三枚一組 五〇〇円
佐々木真弓 略号△こわ▽ |
| エネマシリンジ挿入責め | 大手札三枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号△えね▽ |
| ワシづかみ責めの乳房 | 大手札三枚一組 五〇〇円
大塚・東浦 略号△えう▽ |
| 強烈乳房責め五態 | 大手札五枚一組 七〇〇円
山原 清子 略号△てら▽ |

若妻初妊娠の哀歎
大手札三枚一組
略号△さい▽
五〇〇円

妊娠腹の緊縛又ード側面
大手札三枚一組
略号△さみ▽
五〇〇円

金原奈加子
略号△さま▽
五〇〇円

膨満腹妊婦の乳房責め
大手札三枚一組
略号△さむ▽
五〇〇円

金原奈加子
略号△さち▽
五〇〇円

臨月腹若妻全裸晒人形
大手札三枚一組
略号△さほ▽
五〇〇円

躍動する妊婦の裸像
金原奈加子
略号△さよ▽
五〇〇円

見えてほしい若妻の臨月腹
大手札三枚一組
略号△さへ▽
五〇〇円

金原奈加子
略号△さき▽
五〇〇円

妊娠という異常美
大手札三枚一組
略号△さく▽
五〇〇円

金原奈加子
略号△さく▽
五〇〇円

若妻妊婦の全裸全身肢体
大手札三枚一組
略号△さく▽
五〇〇円

八力月の妊孕腹鑑賞
大手札四枚一組
略号△さく▽
六〇〇円

増田みゆき
略号△さく▽
六〇〇円

双胎妊婦の乳房と腹部
大手札四枚一組
略号△さく▽
六〇〇円

増田みゆき
略号△さく▽
六〇〇円

八力月の双胎腹菱縄縛り
大手札四枚一組
略号△さく▽
六〇〇円

増田みゆき
略号△さく▽
六〇〇円

岩田帯をする双胎妊婦
大手札四枚一組
略号△ほと▽
六〇〇円

増田みゆき
略号△ほと▽
六〇〇円

双胎懐妊の生態を探る
大手札四枚一組
略号△ほれ▽
六〇〇円

増田みゆき
略号△ほれ▽
六〇〇円

全裸の双胎妊婦を見せる
大手札四枚一組
略号△ほそ▽
六〇〇円

増田みゆき
略号△ほそ▽
六〇〇円

便々たる双胎初産妊娠
大手札四枚一組
略号△ほま▽
六〇〇円

増田みゆき
略号△ほま▽
六〇〇円

臨月の妊婦又ード
大手札三枚一組
略号△にわ▽
五〇〇円

田中美佐子
略号△にわ▽
五〇〇円

臨月妊婦の裸身立腹
大手札二枚一組
略号△にた▽
四〇〇円

田中美佐子
略号△にた▽
四〇〇円

九力月の妊娠腹
大手札三枚一組
略号△にの▽
五〇〇円

安原さゆり
略号△にの▽
五〇〇円

首枷手枷で責められる妊婦
大手札三枚一組
略号△にゆ▽
五〇〇円

増田みゆき
略号△にゆ▽
五〇〇円

双胎妊婦腹強調縛り
大手札四枚一組
略号△にき▽
六〇〇円

増田みゆき
略号△にき▽
六〇〇円

緊縛と猿轡双胎妊婦虐待
大手札五枚一組
略号△にけ▽
七〇〇円

増田みゆき
略号△にけ▽
七〇〇円

後手縛りの双胎妊産婦
大手札四枚一組
略号△にさ▽
六〇〇円

増田みゆき
略号△にさ▽
六〇〇円

動物的な双胎妊婦の生態
大手札四枚一組
略号△にな▽
六〇〇円

増田みゆき
略号△にな▽
六〇〇円

白肌に喰い込む縄目
大手札三枚一組
略号△とわ▽
五〇〇円

松山真樹子
略号△とわ▽
五〇〇円

一糸まとわぬ白い柔肌
大手札三枚一組
略号△とら▽
五〇〇円

松山真樹子
略号△とら▽
五〇〇円

開陳した華麗な肢体
大手札三枚一組
略号△とゆ▽
五〇〇円

松山真樹子
略号△とゆ▽
五〇〇円

縄目に喘ぐ麗人諦観の相
大手札三枚一組
略号△とえ▽
五〇〇円

松山真樹子
略号△とえ▽
五〇〇円

縛られた美女二人
大手札三枚一組
略号△とそ▽
五〇〇円

小池・松山
略号△とそ▽
五〇〇円

全裸の美女二人の連縛
大手札三枚一組
略号△とれ▽
五〇〇円

小池・松山
略号△とれ▽
五〇〇円

SとMの美女の甘い一瞬
大手札三枚一組
略号△とさ▽
五〇〇円

小池・松山
略号△とさ▽
五〇〇円

縄に通うSM愛情の焰
大手札三枚一組
略号△とけ▽
五〇〇円

小池・松山
略号△とけ▽
五〇〇円

全裸の豊満な女体にムチ
大手札四枚一組
略号△もた▽
六〇〇円

関谷富佐子
略号△もた▽
六〇〇円

両手吊りで悶える裸身
大手札三枚一組
略号△もえ▽
五〇〇円

関谷富佐子
略号△もえ▽
五〇〇円

女奴隷を飼育するシーン
大手札五枚一組
略号△きて▽
八〇〇円

大塚・東浦
略号△きて▽
八〇〇円

凌辱されるマゾ女の恥態
大手札五枚一組
略号△きと▽
八〇〇円

大塚・東浦
略号△きと▽
八〇〇円

完全逆さ吊り責め
大手札三枚一組
略号△さつり▽
五〇〇円

木村洋子
略号△さつり▽
五〇〇円

少女全裸アグラ縛り
大手札三枚一組
略号△てへ▽
五〇〇円

長野良子
略号△てへ▽
五〇〇円

少女全裸屈伸縛り
大手札三枚一組
略号△てほ▽
五〇〇円

長野良子
略号△てほ▽
五〇〇円

鬼面と接吻する少女
大手札二枚一組
略号△てち▽
四〇〇円

長野良子
略号△てち▽
四〇〇円

緊縛女体撮影風景
大手札四枚一組
略号△むら▽
六〇〇円

大塚啓子
略号△むら▽
六〇〇円

柱縛り宙吊り晒し
大手札二枚一組
略号△つめ▽
四〇〇円

大塚啓子
略号△つめ▽
四〇〇円

柱縛り全裸臀部晒し
大手札五枚一組
略号△つま▽
七〇〇円

大塚啓子
略号△つま▽
七〇〇円

柱正面縛り折檻
大手札三枚一組
略号△つも▽
五〇〇円

大塚啓子
略号△つも▽
五〇〇円

豊満な双乳の強調縛り
大手札三枚一組
略号△そう▽
五〇〇円

長野良子
略号△そう▽
五〇〇円

八の字開股縛り羞恥責
大手札四枚一組
略号△そか▽
六〇〇円

中河恵子
略号△そか▽
六〇〇円

菱縄縛りの全裸を晒す
大手札四枚一組
略号△そえ▽
六〇〇円

中河恵子
略号△そえ▽
六〇〇円

全裸二つ折り縛りの苦悶
大手札四枚一組
略号△そむ▽
六〇〇円

中河恵子
略号△そむ▽
六〇〇円

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|--|--|--|---|--|---|--|--|--|--|---|---|--|---|---|--|--|--|---|---|---|---|--|---|--|---|--|--|---|---|---|---|---|--|---|---|---|--|---|---|---|--|--|--|
| パイプ責めに呻めく女
大手札三枚一組 略号ハきわ
松本 たえ 五〇〇円 | 両足挙げ柱宙縛り
大手札三枚一組 略号ハきろ
松本 たえ 五〇〇円 | 強烈黒縄縛り悦虐地獄
大手札三枚一組 略号ハきろ
松本 たえ 五〇〇円 | 羞恥責めに陶醉する女
大手札三枚一組 略号ハきろ
松本 たえ 五〇〇円 | 猿轡と縄に泣き泣く瞬間
大手札三枚一組 略号ハきは
松本 たえ 五〇〇円 | 柱宙縛りと逆さ縛り責め
大手札三枚一組 略号ハきた
松本 たえ 五〇〇円 | 足を吊られた悦虐に泣く
大手札三枚一組 略号ハきは
松本 たえ 五〇〇円 | 浣腸溶液を圧入される
大手札三枚一組 略号ハきは
松本 たえ 五〇〇円 | 全裸で受ける三種の浣腸
大手札三枚一組 略号ハみふ
深田 菊子 五〇〇円 | イルリの嘴管挿入浣腸
大手札三枚一組 略号ハみほ
深田 菊子 五〇〇円 | 突き刺さる浣腸器の恐怖
大手札三枚一組 略号ハみち
深田 菊子 五〇〇円 | 自ら施す浣腸の悦楽
大手札三枚一組 略号ハみそ
深田 菊子 五〇〇円 | 体内に奔流する浣腸溶液
大手札三枚一組 略号ハみや
深田 菊子 五〇〇円 | 浣腸プレイを楽しむ美女
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | オシメから生ゴムカバーへ
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | おムツに排便する乙女
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 生ゴム製のオムツカバー着用
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | メロン腹白縄縛り
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 正面柱縛りの蛙腹
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 開脚縛り妊娠腹
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 蛙腹を晒す開股責め
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 太鼓腹強調片足吊り
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 妊孕緊縛美の極致
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 美しい妊孕腹緊縛
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 八カ月の妊婦裸身開陳
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 柱縛りの九カ月腹妊婦
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 引き回された妊婦腹
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 膨隆妊婦腹の股間縛り
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 鏡に映る太鼓腹縛り
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 蛙腹誇張の緊縛美
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 足挙げ縛り蛙腹妊婦
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 卓の脚に縛った蛙腹妊婦
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 九カ月妊娠腹の緊縛美
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 豆絞りの猿ぐつわ哀情
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 逆エビ地獄の美女
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 麻縄亀甲菱縄縛り
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 後手高手小手縛り三態
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 卓上の緊縛悦虐姿態
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 全裸浴室での股間縛り
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 悶える踊子の欲情処理
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 美しき全裸の縛り
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 柱縛りと脚挙げ縛り
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 麻縄高手小手首縄縛り
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 荒縄強烈エビ縛り
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 荒縄悦虐羞恥責め
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 悶える強烈海老責め
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 柔肌をくびる厳しき縄目
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 | 緊縛の全裸女体をいびる
大手札三枚一組 略号ハみぬ
深田 菊子 五〇〇円 |
|---|---|---|---|--|--|--|---|--|---|--|--|--|--|---|---|--|---|---|--|--|--|---|---|---|---|--|---|--|---|--|--|---|---|---|---|---|--|---|---|---|--|---|---|---|--|--|--|

M資料分譲品一覽

○新人S女性出現○

遅しき股に挟まる

大手札四枚一組 略号(あとお) 一〇〇〇円

素足の脂がべっとり

大手札五枚一組 略号(あて) 一二〇〇円

縛った男をムチで料理

大手札十枚一組 略号(あさ) 二〇〇〇円

女王様の人間便器になる

大手札十枚一組 略号(あす) 二〇〇〇円

蠟涙の雨を全身に浴びる

大手札四枚一組 略号(あせ) 一〇〇〇円

尻の下につぶされた男

大手札二枚一組 略号(あた) 六〇〇円

エビ責めに弄ぶ女

大手札六枚一組 略号(あそ) 一四〇〇円

神酒を与える女神

大手札六枚一組 略号(あち) 一四〇〇円

咽喉輪を股責極楽

大手札四枚一組 略号(あつ) 一〇〇〇円

素足の足舐と嗅香

大手札五枚一組 略号(あこ) 一二〇〇円

M男性を尻に敷く

大手札六枚一組 略号(まく) 一〇〇〇円

人間犬の芸仕込み

大手札十枚一組 略号(あえ) 二〇〇〇円

女の尻に顔がつぶれる

大手札三枚一組 略号(あく) 八〇〇円

足指に挟んだ菓子

大手札二枚一組 略号(あの) 六〇〇円

男を縛って弄ぶ女

大手札十枚一組 略号(あに) 二〇〇〇円

尻責めと股責め

大手札十枚一組 略号(あぬ) 二〇〇〇円

大男の訓練風景

大手札十枚一組 略号(みら) 二〇〇〇円

男を刺し殺す美女

大手札十枚一組 略号(みむ) 二〇〇〇円

男を尻の下に敷く

大手札十枚一組 略号(みう) 二〇〇〇円

女の足下につくめく顔

大手札六枚一組 略号(みれ) 一四〇〇円

汚物を戴く男

大手札六枚一組 略号(みわ) 一四〇〇円

男を馬にする美女

大手札五枚一組 略号(みか) 一二〇〇円

人間椅子の御褒美

大手札五枚一組 略号(みお) 一二〇〇円

飼犬に餌を与える

大手札四枚一組 略号(みた) 一〇〇〇円

浣腸器で男を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号(みつ) 八〇〇円

股で絞められる首

大手札三枚一組 略号(みね) 八〇〇円

芳香を嗅がす尻

大手札二枚一組 略号(みな) 六〇〇円

人間馬の調教プレイ

大手札三枚一組 略号(まの) 八〇〇円

足舐めの奉仕と強制

大手札三枚一組 略号(まわ) 八〇〇円

股責めにあう男の顔

大手札三枚一組 略号(また) 八〇〇円

女に縛られて弄ばれる

大手札三枚一組 略号(まひ) 八〇〇円

踏みにじられる顔面

大手札三枚一組 略号(まな) 八〇〇円

肩車に奉仕する青年

大手札三枚一組 略号(まは) 八〇〇円

男を縛って玩具にする

大手札三枚一組 略号(まて) 八〇〇円

首を太股で絞めあげる

大手札三枚一組 略号(まや) 八〇〇円

灰皿にされた男

大手札四枚一組 略号(そほ) 一〇〇〇円

裸女の長靴に悶ゆ

大手札四枚一組 略号(そに) 一〇〇〇円

美女に飼われる犬の生態

大手札三枚一組 略号(そろ) 八〇〇円

美女の手で縛られる過程

大手札四枚一組 略号(そと) 一〇〇〇円

女御主人に使役される男

大手札四枚一組 略号(そち) 一〇〇〇円

美女のおいしい足を戴く

大手札四枚一組 略号(そぬ) 一〇〇〇円

むしゃぶりつく素足の味

大手札三枚一組 略号(そは) 八〇〇円

凌辱と美女のなぶり者

大手札五枚一組 略号(そり) 一〇〇〇円

素足を舐める構図

大手札四枚一組 略号(そへ) 一〇〇〇円

〔女相撲と禪関連資料〕

御要望により再分譲開始します

裸女レスリング熱戦譜

大手札40枚一組 五〇〇〇円
山原・大塚 略号△れす▽

好取組女相撲三番勝負

大手札10枚一組 一五〇〇円
大塚・東浦・木村 略号△うむ▽

迫力実戦好取組女相撲

大手札10枚一組 一五〇〇円
大塚・東浦・木村 略号△うめ▽

取組む女相撲三人娘

大手札七枚一組 一〇〇〇円
大塚・東浦・木村 略号△うゆ▽

マワシを締める三人娘

大手札五枚一組 八〇〇円
東浦・大塚・木村 略号△うや▽

二女真迫格闘場面

大手札三枚一組 五〇〇円
大塚・玉田 略号△のか▽

女子全裸斗争場面

大手札三枚一組 五〇〇円
玉田・大塚 略号△のわ▽

裸女相搏つ取り組み

大手札八枚一組 一二〇〇円
大塚 啓子 略号△えく▽

禪裸女の寝業乱斗

大手札五枚一組 一〇〇〇円
木村・大塚 略号△めき▽

禪裸女の真剣な争斗

大手札五枚一組 一〇〇〇円
大塚・木村 略号△めん▽

女相撲連続写真(四つ相撲)

大手札10枚一組 二〇〇〇円
山原・大塚 略号△めれ▽

女相撲連続写真(投げ業)

大手札10枚一組 二〇〇〇円
山原・大塚 略号△めよ▽

女相撲連続写真(投げ合い)

大手札12枚一組 二四〇〇円
山原・大塚 略号△めわ▽

女斗美立業大立回り

大手札10枚一組 二〇〇〇円
大塚・山原 略号△めた▽

女斗美寝わざ妖艶攻合い

大手札10枚一組 二〇〇〇円
大塚・山原 略号△めな▽

女斗美妖蛇の固め業

大手札12枚一組 二四〇〇円
大塚・山原 略号△めそ▽

女と女の争い髪の掴み合い

大手札10枚一組 二〇〇〇円
山原・大塚 略号△めか▽

女同士の争い押さえ込み

大手札10枚一組 二〇〇〇円
山原・大塚 略号△めね▽

女子レスリング首絞め業

大手札12枚一組 二四〇〇円
山原・大塚 略号△めつ▽

女子レスリング押え込み

大手札12枚一組 二四〇〇円
大塚・山原 略号△めお▽

白晒六尺禪姿(背面)

大手札四枚一組 六〇〇円
遠藤百合子 略号△しろ▽

白晒六尺禪姿(正面)

大手札四枚一組 六〇〇円
遠藤百合子 略号△しは▽

六尺禪を着用し終るまで

大手札20枚一組 三〇〇〇円
山原 清子 略号△ひは▽

砂浜での真剣裸女格闘

大手札12枚一組 二四〇〇円
東浦・大塚 略号△すえ▽

草原で止どめをさす格闘

大手札12枚一組 二四〇〇円
東浦・大塚 略号△すう▽

松林の中での裸女死斗

大手札12枚一組 二四〇〇円
大塚・東浦 略号△すき▽

琵琶湖畔での女相撲

大手札20枚一組 四〇〇〇円
大塚・東浦 略号△すよ▽

女相撲真迫連続スナップ

大手札10枚一組 二〇〇〇円
大塚・東浦 略号△すな▽

室内女相撲熱戦模様

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・東浦 略号△すも▽

相撲禪着用連続フォト

大手札11枚一組 二〇〇〇円
大塚 啓子 略号△すま▽

相撲禪を締め込む

大手札四枚一組 六〇〇円
遠藤百合子 略号△すい▽

女相撲激しい投げ業

大手札八枚一組 一五〇〇円
大塚・木村 略号△すね▽

女相撲組打ちの美体

大手札八枚一組 一五〇〇円
木村・大塚 略号△すか▽

女斗立術の応酬

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・木村 略号△すち▽

寝業の女レスリング

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・木村 略号△すほ▽

女斗の連続場面展開

大手札九枚一組 一八〇〇円
木村・大塚 略号△すく▽

女斗立術の攻撃場面展開

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・木村 略号△すた▽

室内女相撲好取組み

大手札六枚一組 一二〇〇円
東浦・大塚 略号△すみ▽

湖畔女相撲連続スナップ

大手札10枚一組 二〇〇〇円
大塚・東浦 略号△すふ▽

女相撲四十八手の内六手

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・木村 略号△すは▽

女相撲四十八手の内六手

大手札六枚一組 一二〇〇円
木村・大塚 略号△すむ▽

湖畔女相撲迫力場面開陳

大手札20枚一組 四〇〇〇円
大塚・東浦 略号△すや▽

湖畔女相撲熱戦場面点景

大手札20枚一組 四〇〇〇円
東浦・大塚 略号△すゆ▽

実戦女相撲業の応酬

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・東浦 略号△すに▽

実戦さながら女相撲図絵

大手札六枚一組 一二〇〇円
東浦・大塚 略号△すぬ▽

雪崎京人指導女相撲実戦

大手札六枚一組 一二〇〇円
大塚・東浦 略号△すの▽

迫力抜群実戦女相撲

大手札六枚一組 一二〇〇円
東浦・大塚 略号△すつ▽



役立ちました。これからはどうか、M小説や告白を、せめて毎月、一篇宛ぐらい迫力のあるのを、お願いします。私は奇クの、昭和三十年代からの愛読者です。
(東京都・寒川M生)

鬼山絢策氏の「M派交友録」毎月うれしく拝読しています。奇クではM的読物が最近、少なくなっています。写真の様な生々しいものより。私たちの、やはりM的読物や告白がMのイメージを培う上で、ためになります。写真の方は女性が主人公であっても、自分をそれに置き換えて結構、楽しめるものです。最近では十一月号の自称マゾヒストの告白「軟体動物」は、よかったです。久方ぶりに私のマゾ心を快く、くすぐって、くれました。谷崎潤一郎の初期の作品を思わせる、この告白は、現代の風俗を巧みに織りなして何度、読みかえしてみても読みあきなく、いつも私に新鮮な刺激を与えてくれました。十二月号では「白い脚の下」が、私の心を、ゆさぶるのに

K誌、毎月楽しく拝見しています。12月号では特にSMカメラハントの「特訓プレイ妻」は重量感のある作品で、よかったです。佐野みさ子さんは今までハ奇クサロNで度々、顔を出しておられて馴染みになっていたので、殊に興味深く読みました。こってり脂ののりきった人妻を責める味というもの、は、良さものです。次号も今回に劣らぬ作品を辻村様に期待しております。
(神奈川県・倉田照夫)

初めてお便り致します。私は三十九才の会社員です。奇クは五年来、愛読しております。現代の殺伐とした世相の中でSMの世界に入れる者は、幸せではないでしょうか。幼稚なプレイですが時折、妻を緊縛しております。最初は、

いやがっておりましたが、最近はいやがってきた様です。剃毛も数度、行ないました。プレイの写真も数枚、撮りましたが、未だ発表出来る様なものではありません。大阪府池田市の武田勝子様、その他、夫婦プレイの同好の近県の方、御連絡下さい。お待ち致します。
(岡山市・高岡二三雄)

私は横須賀に住む22才になる青年です。奇クとの出会いは二年前ふと本屋で手にとった本をめぐって見て、驚きました。女性が縛られた写真が目飛び込んできたのです。こんな本があるなんて！しばらくは本を、めくり読みしてためらいがあったのですが、ついに意を決して、この本を買ってしまいました。あれから2年。今はすっかり奇クのトリコになってしまった私。毎月毎月が、この本を読めるので、たのしみで仕方ありません。私にはプレイするような女性の友達が無く、奇クを読むだけでは、物足りなくなってきました。奇クの読者で若い女性の方、よろしかったら私とプレイしてみませんか。私は浣腸、ローソク責め等に興味があります。また縄による緊縛も、やってみたいと思います。

（神奈川県・悦美行夫）
浣腸愛好者にとって、あのバカでかい二百CC硝子浣腸器は正にヨダレが出るような欲しいもの。小指位ある嘴管、茶筒のように太い浣腸筒。これに比べたら、いかなる百CC浣腸器も小さくミエマース。しかも二百CC浣腸器を使い馴れ、アヌスに浣腸筒を、もろに没入できるようになれば、五十CC、百CC浣腸器を使うのが馬鹿らしくなる位。ところが、この二百CC浣腸器は、どこでも売られていない。小生が知る範囲ではあの広い東京都内でも、これを製造し販売しているのは特トツだけ。本社は足立区北千住、電八八二一三一〇一。同じ本郷営業所、八一一八二二四の二カ所だけである。ここは、たとえ一本でも売ってくれる。前記二カ所に、二百CC浣腸器ありますか、と電話で尋ねると、可愛い女の声で「ございます」と返ってくる。ここに買いにゆくのに不便という人は、新橋駅前のアラジンにて一本千二百円で売っている。恐らく東京広しといえど二百CC浣腸器が買えるのは前記三カ所だけである。浣腸器は一週間に二、三本、売れる

との由。「浣腸ブームですね」と店主は感心していた。別にトップやアラジンのPRではないが、二百CC浣腸器を渴望している多くの人の参考にでもなれば幸いである。

(東京都・竹迫誠也)

○ 奇クを知って十余年になる三十才の、目下独身の、Sを嗜好する男性です。かねて奇クの寸評でも書きたいと思っていましたが12月号に瞳耀太郎氏が「書の中に身を沈めて」という文章で巧みに我が意を伝えていらっしゃるので遠慮します。ただ、表紙をデザインなさっている方々に日頃の苦勞をねぎらいたい気持ちで一ぱいです。実は10月号の読後、直ちに投稿しようと思っていたのですが、何かと身辺多忙で、遅れてしまいました。さっそくですが、10月号の読者欄に登場の中村恵美子様。その

〓御送金についてお願い〓

現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されています。現金での御送金の場合には必ず「現金書留」でお願ひ致します。他に、振替、定額小為替、普通小為替等の方法もありますのでご利用下さい。便宜上「切手代用」にても結構ですが、その場合は必ず一割増にてお願い致します。

後、いかがお過ごしでしょうか。貴女の好み(ムチとかキズをつけするような責めはイヤ)は勿論、境遇(結婚生活の破局の経験)も現在の私のそれと全くよく符合します。私は最近、五年間の結婚生活を精算しました。前妻は色々と努力はしたのですが、SMには全然興味がなかったようです。しいて云えば、S性の方が強いようでした。私は銀座に勤務しておりますので、是非お会いできる機会をつくって下さい。SM談義の他にも色々話題があると思います。

(埼玉県・佐渡好男)

○ 奇ク愛読者の一人として毎月、楽しく読ませていただいております。久方振りに読者通信欄へ投稿させて頂きました。さて12月号に投稿されました愛知県の水川那美子様。良い方と御知り合いになれ、うらやましく思っております。その喜びを私にも少し分けていただけないでしょうか。貴女の良きお友達との良き思い出も数多くお有りのことと思いますが、貴女の視野を、もう少し、ひろげていただいて是非、私とお付き合ひ願えませんか。申し遅れましたが私も愛知県に住む二十二才の、まじめな青年です。尚、写真の方も8年程前から手掛けております。是非お便り下さい。心よりお待ちしております。

(名古屋市・藤川利雄)

○ 菅原妙子さん。十二月号の、記事、拝見しました。縛って欲しいとのことですが、私にやらせて下さい。私も、それほどSMの経験はありませんが、貴女の希望に、かなうだけのことは出来ると思います。以前よりSMに興味がありましたが何か後めたいものを感じそれが奇クを読み始めることにより、取り除かれたように、思います。読者通信欄を、ずっと見ておりますが、ついやり過ぎ、最近つくづく考えるのは、M女性を伴侶にしたら、どんなに幸福だろうかということ。私は現在、都内の大学の工学部在籍、二十四才です。出会いを期しております。

(東京都・森田シンイチ)

○ 便せんですみませんが、お便りします。私は今年18才の女の子です。おせじでもスマート美人とはいえない私ですが、この世界にとりつかれてしまったんです。自分ではMのつもりでも、Mになりきれない。そんな私でも、いいと言

れない。そんな私でも、いいと言う人がいたら、お手紙を下さい。20才前後の方、男女を、問いません。なるべく近くの方でSの人、お手紙お願いします。

(静岡県御殿場市・沼田敦子)

○ 初めてお便りします。私はM奴隷志望の二十一才の男性ですが、S女王様による酷な苦辱に満ちた責めによる調教で奴隷の立場と云うものを、たたき込んでいただき常に酷遇をもって忠実な奴隷として飼われたく思っています。鋼鉄製の首、手、足枷。奴隷としての印として、烙印も、どうぞ。近県(出来ましたら)の女王様の年令は問いません。おぼしめしを誌上にお願ひします。

(三重県・愛奴犬生)

○ 小杉千恵様。一月号にて最近、浣腸をひかえているとの由。そんな無理をしないで自然のままにしない。恐らく貴女のアヌスは今の浣腸の習慣で、浣腸しない時はウズクのではないのでしょうか。貴女の体質が、もはや浣腸なくては、どうにもならないようになってきていると思います。しかも最近、肥って来たとの事です。が、ホレ御

覧。矢張り今迄通り毎日、浣腸を
しなさい。そして毎日の浣腸にも
変化をもたせれば、浣腸がマンネ
リにならず新鮮な気持ちで浣腸がで
きます。またスケジュールをつく
るのです。月曜は、いちじく浣腸
火曜は五〇〇〇浣腸器に石ケン水
か食酢で、水曜は百〇〇浣腸器で
グリセリンかドナン。木曜は二百
〇〇浣腸器とイルリ併用でヒマシ
油といった下剤をベースにしたも
の。金曜はエネマ、イルリ併用で
水をベースにした大量浣腸。土曜
は水道浣腸に腔開口器、ネラトン
十五号等々、アヌス責めを中心に
といった具合に、毎日、方法や浣
腸液を変えてゆけば浣腸というも
のは非常に楽しいものです。貴女
は時折、浣腸の夢を見られるとの
事ですが、浣腸で満たされていな
い証拠です。もし、ご自分で浣腸
するのが面倒なら、小生が自ら開
発した独自の浣腸を、してあげて
もよいのです。貴女のウズクアヌ
スに、思いのままの浣腸をしたい
というのが、現在の小生の偽りの
ない心境です。

（東京都千代田区・浣腸キチ）

○
十二月号の「不貞妻の描く欲望
のデッサン」の野村麻子さん。貴

女の告白文を大変、面白く拝見
いたしました。あなたの心境描写は
誠に私の好みにピッタリです。私
は、もう決して若くはありません
が、この方の趣味は以前から、人
知れず持っていました。奇クも随
分と読みつづけて来ました。プレ
ーは妻以外は勿論、経験はありま
せん。貴女も同好の志に呼びかけ
て居られますが、よろしかったら
一つプレーを、お願い出来ません
か。編集部へ私の住所はお届けし
てあります。一度お便り下さい。

（金沢市・河西逸雄）

○
私は三十三才になる主婦で、家
業が料亭です。女将を兼ねてい
ます。忙しい仕事の合間に主人と
プレイを楽しんでいます。な
かなか時間がなくて残念です。夫婦
生活の刺激剤として奇クは、ずっ
と毎月、求めております。主人の
運転する車で郊外のモーターヘ行
ってプレイをするのですが、主人
はお前は一番、魅力的な女性だと
いって私を愛してくれます。一度
撮影した私の写真を、奇クに投稿
してみようかと、主人が言ったこ
とがあります。全部、カラーの
ポラロイドなので、未だ果たして
おりません。奇クサロンなんかで

○
沢山の同好の夫婦の方々が登場し
ておられるので私達も、お仲間入
りしたいと思っております。主人
の私に対する縛り方は平凡ですが
ほんとうに、きびしく肌に喰い込
むように股間縛りなんかは、息も
出来なくなるくらいです。私は三
十三才ですが、三つ四つは若く見
えると云われております。同好の
方々との交流を望んでおります。

（東京都・北川正子）

○
奇譚クラブ12月号、告白「みさ
子の浣腸、器具、避妊」の佐野み
さ子様。私は二十七才のS男性で
す。いつも、みさ子様の記事を読
ませていただいております。一度
私とSMプレイ及びセックスプレ
イを、していただけないでしょう
か。私のみさ子様に対する責めは
浣腸責め、アヌス責め、乳房責め
ローソク責め、局部責め（バナナ
ソーセージ、ローソク）など、み
さ子様が泣いて、よろこぶ責めば
かりです。又、セックスプレイで
も、きつと、みさ子様が満足する
と思います。私の男性自身は立派
なものです。ぜひ私と手合わせし
て下さい。お願いします。では今
日は、このへんで、さようなら。

（東京都・南村健二）

○
寝屋川市、菅原妙子様、お元気
ですか。12月号の貴女の記事、何
回も読み返しました。貴女のおう
な方が遠い所ではあります。出
現したと言うことは、私にとって
とても、うれしいことです。貴女
を浣腸、猿ぐつわ等で責めること
が出来たら、どんなにすばらしい
ことでしょう。私がSMにとりつ
かれたのは四年位前のことなので
す。書店で、なにげなくみた本が
K誌だったのです。それから毎
月26日が、待ちどおしくなりま
せん。特に浣腸、猿ぐつわには関
心が高いのです。この文章が貴女
の目にとまってくれば、大変うれ
しく思います。

（千葉県船橋市・戸村正夫）

○
毎月、貴誌を、たのしんでいま
す。私は特に女性に対する浣腸に
興味をひかれます。そこで私の提
案なのですが、サド、マゾとして
の浣腸と平行して、ごく普通の便
秘などの治療としての、それも載
せられたら、どうでしょうか。そ
れなら医学書を見た方が早いとい
われるかもしれませんが、その医
学書の「浣腸のやり方」などとい
うところを読んで、とても興味を

そそられる場合があるのです。それを貴誌で少々アレンジして写真つきで載せたら。たとえば15才から20才くらいまでの少女と、その母親役の中年の女性をモデルにつかい、連続写真として、「液をこしらえる」「浣腸器を用意する」「娘をふとんにねかせる」「腰の下にビニールを敷く」「娘の下着をとる」「浣腸器に液を吸い上げる」「娘の肛門にさし入れる」「注入する」「娘の表情」「娘にやさしく言葉をかけながら肛門をおさえてやる」「便器をかける」等々又、浣腸器のかわりにイチジク浣腸やイルリガートル、エネマシリンジなどを使っても、いいと思います。迫力の点で物足りないという人もいると思いますが、縛りなどを伴った浣腸より日常性があり面白い点もあると思います。前者をハードとすれば、こちらはソフトエネマとでもいましょうか。苦しんでいる娘の横で母も又、男から（又は老婆から）浣腸を受けるとなれば、サド・マゾ性が強くなりましようか。

（大阪市・久利須太郎）

この頃は同性の方が誌上によく顔を出されますので、私たち女性

の愛読者としても大へん心づよく思っております。特に結婚された女性の方は、御主人のよい指導もあってか、勇気をだして投稿をされていきますのは、うれしいことです。でも私たちのような未婚の女性も、どうしても引込み思案になつてしまつて、ペンをとられる方も少ないのは残念です。女性の読者の方も私の知る範囲では案外多いのですが、ただ読むだけという方が殆どです。雑誌などから、その方の知識を求めようとするのでしよう。私は短大卒業後、家事の手伝いをしながら花嫁修業をしております。本当はお勤めに出たかったのですが、両親が許してくれませんでした。お茶、お花、洋裁

ですが、まだ空想の域を出ません。誌上でお便りいただければ幸いです。（大阪府・葛城昌子）

初めてお便りさせていただきました。小生は中学生の頃より本能的にSMに興味を持ち、現在に至る大学生です。思春期の頃、自己のそうした性向について大いに悩んだものですが、奇クを発見してからは、自らの性が一人だけの特異でないことを知り救われました。それ以後は自らの気持を満たすべく、理想の女性を求める事に生きて来ました。しかし、小生と関係を持った女性は全て二十才前後。ムチ打ち、ロープをかけようとすると「気狂い」と、ののしり去つて行きました。どうか三十前後の体力に自信のあるM女性の方が、いらしたら、御連絡下さい。金も何もない小生ですが、体力と若さとテクニック（少し荒い）には自信があります。年下の男に責められたいと思う貴女。二人で生きる事を確かめあおうではありませんか。（大阪府・南河内Sヤング）

新年号、早々とお送り下さって有難うございました。表紙のデザインが明るく変わりましたね。封

を開いて手にとったとき、あつとその素晴らしい、驚きの声を挙げました。色彩的にも黒と金が、上品さの中に華やかさをふりまいて、如何にも正月号らしいフンイ気でした。そして本文も、ぎっしりと詰まった、おもちゃ箱のような賑やかさで楽しめました。特に私が繰り返し読んだのは、久留木栄の「花は傷つかない」この作者は、ずっと以前から私の好きな作品を書く人でしたが、最近になって再びカムバックされたのは嬉しい。読者の告白では「女子トイレ考現学」には驚いた。私は別にこうしたトイレとか排泄に興味があるわけではないが、このフォトを眺めて一種のサド的気分浸る事が出来ました。とにかく隅から隅まで何度も読んで楽しめるといふ雑誌は奇クでした。

（群馬県・高桐 誠）

○ 京都市の南川恭子様、是非一度この私めに浣腸をさせて下さい。忘れる事の出来ない十三年前の夏淀川で泳いでいて深みに、はまり亡くなった当時、中二生徒の娘のイメージを貴女に置き変えて、その成長の姿を確かめて見たく思います。青春の珠玉と輝く美肌の施

術者として選ばれ、御希望を叶える奉仕が出来たなら、どんなにか素晴らしく、初老に入った精神年齢に夢よ、もう一度の回春の情を甦らされるのではないかと期待されます。パートナーは、やはり若い人の方がよろしいでしょうね。年甲斐もなく狒々爺がと蔑まれはしまいかと、長い逡巡の末、思い切って書いて見ました。お笑い下さい。(高槻市・郷愁老生)

小杉千恵様。突然のお呼びかけ失礼します。十二月号の写真ならびに、相当以前にも確か草原の様な所での写真を載せて居られた様に記憶して居ります。また文章も時折、お寄せになっておられるのを拝見した事があります。一度お呼びかけしたい、と思いつつも十二月号のお写真と文を拝見し、投函せずには没にしたりして、色々迷い、また片思いの空虚な深夜の時間を費やして居ります。私、二年前に今流行の脱サラリーマンを決断し、現在は大変「カタイ仕事」と言われる様な事で忙殺されて居ります。その仕事に多忙な折は非常にノーマルなるも、奇ク愛読時間や空虚な深夜はアブノーマルな、奇クの特別の世界に引き込

| | | |
|--|---------|-------|
| ◎最新版優秀分譲品一覧表◎
(略号明記の上、前金にて大阪市阿倍野局私書箱第14号天星社へ) | | |
| 豊満な臀部の晒し責め | 大手札三枚一組 | 略号△るる |
| 猿轡に悶える全裸の肢体 | 笠井奈保子 | 略号△るる |
| エビ縛りのグラマー娘 | 大手札三枚一組 | 略号△るる |
| 羞恥に泣く魅力の女体を縛る | 笠井奈保子 | 略号△るる |
| 羞恥に泣く魅力の女体を縛る | 大手札三枚一組 | 略号△るる |
| 緊縛羞恥の表情各種 | 笠井奈保子 | 略号△るる |
| 柱縛りの悦虐肢体開陳 | 大手札三枚一組 | 略号△るる |
| 羞恥責めの極致悦表情 | 松本 たえ | 略号△るる |
| 強烈責めに泣くマゾ女 | 大手札三枚一組 | 略号△るる |
| エビ縛りの開股責め | 松本 たえ | 略号△るる |
| な感情が頭を抬げた折、奇ク愛読だけでは、ものたりなさを感ずる事もあれば、また、誌上に活躍して居られる方の様にプレイメイト | 大手札三枚一組 | 略号△るる |
| 片足吊りに悶える全裸女体 | 大手札二枚一組 | 略号△るる |
| 両足吊りの宙縛り責め | 松本 たえ | 略号△るる |
| 開股責めに痺れる女体 | 大手札三枚一組 | 略号△るる |
| 縄に依る悶悦姿態の表情 | 松本 たえ | 略号△るる |
| 縛りを耐える恍惚表情 | 大手札三枚一組 | 略号△るる |
| 若い女の肢体美を縛る | 笠井奈保子 | 略号△るる |
| 羞恥縛りの全裸種々相 | 大手札三枚一組 | 略号△るる |
| 女体神秘の悦虐を挟る | 笠井奈保子 | 略号△るる |
| 女体の若さを縄でくびる | 大手札三枚一組 | 略号△るる |
| 緊縛の姿態に煩染める女 | 笠井奈保子 | 略号△るる |
| 乙女の女体秘奥を曝く | 大手札三枚一組 | 略号△るる |
| 開股縛り羞恥の決定版 | 笠井奈保子 | 略号△るる |
| 出産直前の臨月緊縛美 | 大手札三枚一組 | 略号△るる |
| 臨月腹の苛酷な開股縛り | 福井 桃子 | 略号△るる |
| 堂々たる臨月蛙腹縛り | 福井 桃子 | 略号△るる |
| 両手吊り臨月腹の妊婦 | 福井 桃子 | 略号△るる |
| 遅ましき臨月腹と臀部 | 福井 桃子 | 略号△るる |
| 後手縛りの臨月太鼓腹 | 福井 桃子 | 略号△るる |
| 全裸出産直前の臨月腹展示 | 福井 桃子 | 略号△るる |
| 臨月腹の奴隷犬を調教する | 福井 桃子 | 略号△るる |
| 里塚であつた様です。今回、この様に貴女にお呼びかけをして、三十才を少し出た二児の父として、未だイエスノー、と言う言葉が交 | 福井 桃子 | 略号△るる |

錯して居りますが、この様な機会も数多く有る事ではありません。こんな機会に流暢の好きなあなたに、……空想するだけでも、ぞくぞくしてきます。こんな事を考える私です。(神戸市・扇由起夫)

○ 奇ク1月号、いち早く拝見しました。早いもので私が奇クを手にしてから、もうすでに一昔と云われる10年が、たちました。1月号では「女子トイレ考現学」が奇ク本来の資料性を發揮して往年の最盛期を思わす大ヒットでした。女性のトイレの姿態を一人一人、生々しく実際の探訪によって詳細に描写し、しかも実録の写真入りというのですから素晴らしいレポートでした。若い女性がトイレにまたがって小便をしたり大便秘したりする描写は、私も大いに興味があります。福島和男氏に、これから是非、探訪の成果を毎月、発表してほしいものです。

(滋賀県・江東西一)

○ 新年号、拝見。いつも乍ら見事な出来ばえで、面白く時のたつのを忘れしました。大塚啓子さま。可愛いフェースと、ぽちゃぽちゃとした、すばらしい身体をしてい

られますね。「永遠のマゾの灯」という貴女の写真は大変、気に入りました。おカッパの若々しい貴女に、私のS性を、ぶっつけてみたい気持です。長野良子さん、奇クサロンにのった貴女のボインは本当に見事です。ロープで縛られているせいもあるでしょうが、こんな立派な乳房を見たのは生まれて初めてです。いかにも責め甲斐のありそうな噛みつきたいような素晴らしい芸術品です。早坂夫人はM向きの美しい肢体で実に羨ましいです。我が妻女にマゾ気がないだけに尚更、羨ましくてたまりません。(大阪市・高田白文)

○ めっきり寒くなつてまいりました。ミニスカートをはいて外出していましたが、太股のところにていきました。陽やけた線が、くっきりとついていました。この頃ではやっとミニのあとも、うすくなつてきました。今日は一つ、お願いがあつて、お手紙を書きました。私は姉と二人で洋裁店を営んでおります。25才になる娘です。奇クは三年前から愛読しておりますが、この頃では本を読むだけでなく一度プレイをしてみたくになりました。一月号の口絵にのってありました左近

麻里子さんの「猪吊り」のような責め方をされてみたと思います。私は笠井奈保子さんのようなボリウムはありませんが、色はどちらかといえば白い方です。川路むら子さんぐらいの身体づくりですが、モデルに使っていただけでしようか。年末は一年中で一番いそがしい時なのですが、一月になりますと暇になりますので、是非私の身体で責めを試みてほしいのです。読者の方と、それまで文通でもしてお友達になれたら、私の日々も、たのしいものになるのじゃないかしらと、夢のようなことを考えたりしています。SMのことについては何一つ経験はございません。よろしく願います。(大阪市東淀川区・内田容子)

○ 本日、奇ク1月号求めました。辻村・塚本両ベテランの記事、益々迫力を増し胸をわくわくさせながら読みました。十二月号では告白や体験が盛沢山で、たんのうさせられました。今月号では読物で迫力のあるものがあり嬉しかったです。懸賞入選の「蒼肌の女」は一風、変わったSM読物、第一部の「花は傷つかない」は、嘗ての団氏の初期の作風を思わす佳作

です。この作者は本物のアブ味を掴んでいる腕達者な人です。今後の奇クを背負って立つ作者になる人だと思います。本物といえば、「命預けます」の紫利好氏もネチネチとした責めを得意とするアブ作家です。「SM歌手」は軽いSM読物、こうした作品も、たまにあってもよいのです。いつも脂っこいものばかりでは食傷しますからね。告白では「女子トイレ考現学」は抜群、奇クならではの読者の投稿でした。口絵の写真では、笠井奈保子さんの表情が益々よろしくなりました。第一頁の「白い縄」と目次の上のなんか、マゾの気分が、よく出ていました。塚本先生の飼育に磨きがかかってきたせいでしょうか。二月号が待たれてなりません。(東京都北区・墨田 守)

○ 愛読者の皆さんお元気ですか。長らく、ごぶさたしました。出産以来、八カ月。赤ん坊も、おかげさまで丈夫で、人工哺乳のせいでのこのごろでは大分、手をとらなくなりしました。お店の方が忙しかつたので、ついお便りも、おるすになってしまいました。でも、奇クのおかげで文通で知りあった人が

奇譚クラブ臨時増刊

〓女体緊縛写真集〓 定價一〇〇〇円(送50円)



天然色写真

柔肌に喰い込む麻縄 前田真知子
首縄横臥二態 前田真知子
典型的後手縛り 前田真知子
自由な肢のもたえ 前田真知子
麻縄と統肌の明暗 前田真知子
厳しい縄目を味う 前田真知子
準備態勢OK 前田真知子
股間縛りの表情 前田真知子

女体緊縛の華

本誌写真部構成

| | |
|-------------|-------|
| 金髪碧眼の美女 | シラ・ケイ |
| 答打ちの態勢 | 関谷富子 |
| 鞭撻の痛さ | 長井葉津子 |
| 洗脚の順序 | 左近麻里子 |
| 亀甲縛りの美態 | 中河恵子 |
| 麻縄と白肌の対照 | 左近麻里子 |
| 陽を浴びた柔肌 | 中河恵子 |
| 狼ぐつわに喘ぐ | 中河恵子 |
| 緊縛裸身の露り | 中河恵子 |
| 責め疲れの放心 | 中河恵子 |
| 没我の心境 | 中河恵子 |
| 痛打の末の悦 | 中河恵子 |
| 沖縄美人の緊縛 | 中河恵子 |
| 剣玉子の縛り | 中河恵子 |
| 狂変する裸女 | 中河恵子 |
| 責めくたびて | 中河恵子 |
| 紅毛碧眼の白人を責める | 中河恵子 |
| 海老責の狂態 | 中河恵子 |
| ボリウムに挑戦 | 中河恵子 |
| 鞭打の下に挑戦 | 中河恵子 |
| 祭壇の人身御供 | 中河恵子 |
| 稚妻は縄を知りぬ | 中河恵子 |
| 開股の正面と背面 | 中河恵子 |
| 華麗な開股責め | 中河恵子 |
| イルリガートルを前に | 中河恵子 |
| 非情な責めの終末 | 中河恵子 |
| 両手吊りの晒し | 中河恵子 |
| 柱縛りの完了 | 中河恵子 |
| 処女縛りとまどう | 中河恵子 |
| 盗視するSMの目 | 中河恵子 |

緊縛女体の光と影

編集部構成

| | |
|------------|-------|
| 両手挙げ棒責め | 川路叢子 |
| 柱縛りに浮く | 長井葉津子 |
| 後手吊りに苦しむ | 中河恵子 |
| どこでも責めて | 佐々木真弓 |
| 鞭の法悦境 | 関谷富子 |
| ムチが痛い、許して | 関谷富子 |
| 柱を挟んだ連縛 | 関谷富子 |
| 花と蛇の静子です | 中河恵子 |
| 針責めをして頂戴 | 中河恵子 |
| 二つ折りの女体 | 中河恵子 |
| 狼ぐつわの哀飲 | 中河恵子 |
| 日本式縛りの白人 | 中河恵子 |
| 柱縛りの女王に答 | 中河恵子 |
| 夫婦の悦びを語る | 中河恵子 |
| 長縄の艶姿 | 中河恵子 |
| 豊満ボディを誇る | 中河恵子 |
| 美女今縛られる | 中河恵子 |
| 折檻にも汚れず | 中河恵子 |
| 海老責への展開 | 中河恵子 |
| 責めてみたい碧眼の女 | 中河恵子 |
| 日本式高小手縛 | シラ・ケイ |
| 猫の目のような女 | 中河恵子 |
| 足吊りの風情 | 中河恵子 |
| 亀甲縛りの花 | 中河恵子 |
| M女二輪の黒髪 | 中河恵子 |
| 開股縛りの幻想 | 中河恵子 |
| 愉悦のひととき | 中河恵子 |
| ハリツケ晒し | 中河恵子 |

カメラ・ハント楽我記 辻村 隆
女体緊縛の醍醐味を語る 塚本 鉄三

数人ありますので、プレイの方は結構、やっております。また誌上に、つまらない、お喋りをさせて頂きたいものだと思っておりますので、その節はよろしくね。さようなら。
(岐阜県・福井桃子)

ただけのマネゴトみたいなSM雑誌というのが多いなかで、奇くだけにはホンモノだ! と言いたくなるような素晴らしい緊縛写真や記事が満載されていて、毎月、楽しく愛読しております。一体、この雑誌の編集者は、SMというものを真に理解しているのかと疑いたく

なるような雑誌は、私が長年のSMマニアであるだけに、店頭でペラペラと拾い読みしただけで反吐が出そうになります。SMを装ったヌード雑誌の如何に多いことか。本当のマニアは、こんなニセ物には、だまされないとどこか、手に取るのも嫌になってきます。なぜ

SMに理解のない人達が俄仕込みで、真似だけをするのでしょうか。それに引きかえ奇くでは、塚本鉄三氏、辻村隆氏の両ベテランをはじめ、真に骨の髄からのSMの理解者が、がちりと誌面を押さえておられるのと、長年に亘る歴史に支えられた厚い読者層のバックアップで、まさにSMの殿堂のような感さがあります。一月号の頁を、めくっても、奇クサロンの早坂信治氏、竹迫誠也氏、山本五郎氏、土田純一氏、早木夢二氏と皆、ちゃきちゃきのSMの理解者。うれしくなってきました。それにしても「女子トイレ考現学」のフォトは素晴らしい。SにもMにも胸にピンとくるものがあります。山光純氏と風流極道軒氏、がんばって下さい。

(京都市・坂田九郎)

佐野みさ子さん、最近のあなたは、どんどんM性を発揮し、かなりSMプレイを楽しんでいるようですね。小生、十二月号の辻村氏の責めを受ける貴女のボリュームのある体を拝見し、また「告白」を読んでS性、をかなり刺激されぜひ貴女を責めて見たくて、ここにSMプレイの挑戦をします。い

ままでの誌上で見る限り、プレイにおける考え方や実際の責め方について、小生とかなり共通する点があり、お互いに充分満足できるプレイを行うことができると思います。十二月号を読んで、貴女を責めるために空想をたくましくしました。小生は、貴女に対して徹底して「道具」でせめてみたいと思います。道具といっても大がかりなものではなく、そこらにある日用品などを使えばかなりのプレイはできます。こんなものを準備しましたが具体的な責めの方法については後の楽しみにとっておくことしましょう。けれど貴女は聡明だからすぐにわかってしまうでしょう。最初にトイレットペーパーの芯、水鉄砲、水道のホースを用意します。これは貴女が希望する浣腸責め股間責めを行うものであり「ヌレヌレ責め」とでもいっておきましょう。次に前記の芯とゴルフボールを五個用意して責めたいのですがこれは「玉突き入れで責めてみたいと思います。これはかなり大変ですが、恐らく貴女ならできるでしょう。さらにとっくりとおちょこによる責め、おもちゃの太鼓、ビールびん、わ

りばし、糸などによっても、あっというほどの責めをすることができそうです。また除毛をしたあととセロテープを使用しての責めは意外と効果を発揮するので、これもやってみてみたい。ボディペインティングや、かねてから計画済みのマジックによる責めは、いかがですか。以上は道具による責めですが、最後には小生自身のものによる責めを、ぜひやってみてみたいのですが、充分に自信あります。参考までにデーターですが、全長22、直経6です。大きいほうです。

○(東京都・東本一郎)

10月号に私の通信をのせていただいてからは毎日そわそわ、にやにや落ちつかない日を送っていました。時折は、変なことを思いだしています。私はもう27才、結婚生活も一度は経験した女ですから、男と女との仲もよくわかっていづもりですが、ことSMのことになりますと、こうして思い出しただけで胸が波だっています。奇クモデルのこと、お願いしておきましたけれど、やはり駄目のようですわね。辻村様が佐野みさ子の所へ出張されたように私にもハン

トして下さいませんか。小田原一郎様、お呼びかけ有難うございました。貴方は私でも寺田陽子さんでも、いいような書きぶりでしたわね。折角のお呼びかけでしたが興味半減しましたわ。浮気症の方なんですのね。

○(東京都荒川区・中村恵美子)

きつと君は素晴らしい女性でしょう。菅原妙子さん、若し君と近づきになれて、22才の水々しい肉体を余す所なく露出させた姿にして後手に身動き出来ぬようにカッチリと縛り上げ、君の女性としての印である若草で覆われた泉もくわしく研究出来る様に開股縛りにして、ネッチリと乳房と尻と腰を中心に責めあげたい気持です。でもムチ打ちとか浣腸については、まだあまり興味ありません。美しい妙子さんのヌードにきずをつけるような事をしたくないからです。

○(神奈川県・盛矢S夫)

僕はこういうわけか若い女の子には全くといっていい程、興味がなく、少し中年位の女の人にとても感じるのです。僕のお姉さんのように振るまって下さる方が好きです。10月号の寺田陽子さん、ど

うか僕の望みをかなえて下さい。僕はお姉さんのメッセージを見てとてもうれしく思いました。それはまだ何も知らない僕を夢の世界につれていってくれるのではないかと考えたからです。僕は姉さんより大分年下ですが、責めるのも責められるのも体験したくありません。僕は当年23才の若きSM愛好家です。(千葉県・絵寸絵夢)

○バラエティに富んだ奇ク、毎月楽しく読ませて頂いております。SMが三度の飯よりも好きな私は奇クを唯一無二の愛読書として書架を飾っております。小春日和の日だまりで愛蔵の旧号をひもとくのは私の日曜日の日課です。10月号で早坂信治氏が「夫婦交換プレイに魅せられた私達の場合」を発表され、私はその勇氣に感銘を受けたものです。十一月号では早坂夫人が「愛と倒錯の記録」を発表され、これこそ夫婦SMプレイの代表選手だと、その夫婦生活を羨ましく思ったものです。渡部好美夫妻や三浦純子夫妻の記事が、この頃載らなくなつて淋しく思っていた私ですが早坂夫妻の投稿で私の胸のつかえが下りたような気分です。十二月号の「奴隷妻になり

次号(三月号)は一月二十五日に発売いたします

たい」と訴えておられる笠井奈保子さんあたり、結婚されたら、さぞ良き奴隷妻になれることでしょう。でも、結婚されてからも奇ク誌上に姿を見せて下さればいいのですが。辻村様や塚本様にハントされた読者通信の女性をよく誌上に姿を見せてくれますが、読者の方と仲よくなられた女性読者の方はどうしたのでしょうか。その後の模様を是非誌上に紹介してほしいものです。私なんか、いつもそれを大いに期待しています。

(東京都・山之内敏三)

私達夫婦は二人共奇クの愛読者で夫婦生活のよき潤滑油として活用させていただいております。それで発売と同時に近所の書店で買求め、その日は妻と額を寄せて拝見します。巻頭の写真や文中の写真は、妻とのSMプレイに大変役に立ちます。私達は結婚後二年目頃からプレイを始め今では五年ほどになります。が倦怠期を経験することもなく毎日、楽しい日々を送っておりますが、これも奇クのおかげと喜んでおります。九、十

十一月号の三回にわたって連載されました三部作「不毛の愛」は近來にない力作でした。作者の久留木栄氏は確か十年程前に、やはり力作を書かれた様な気がします。常連では風流極道軒氏の「紫蘭の門」と山光純氏の「パロディ花と蛇」が胸をわくわくさせます。妻も奇クの新作を読んだ夜は必ずSMプレイをせがんできます。毎月こんな沢山の愛読者の方達が投稿していただけるのですから奇クって人気があるんですね。12月号では野村麻子さんの「不貞妻の描く欲望のデッサン」が特に私達夫婦の間で話題になりました。妻も私もなんとなく、こんな変則的な夫婦生活をしてみたいという妖しい魅力につかれています。日常は至って平凡で特色のない生活をしている私32才妻28才の夫婦です。

(横浜市・栗田 明)

奇ク編集部の皆様、今日は。この十年間、毎月貴誌を拝見しておりますが、いつも新鮮な企画で雑誌作りに専念していただける皆様の御努力に対して心から敬意を表し

ます。これほどまでに私の心を掴んで放さない魅力的な雑誌を作っておられる方って、一体どんな方だろうかと親密な感を禁じ得ません。自分の告白を書いて投稿してみたいと思いつつも、生来の悪筆にて、なかなか願いは果たせません。そのかわり一度お会いして私の悩みを聞いていただきたく考えております。まあ編集の参考にもなりますまいが、暇つぶしにでもお聞き下されば、これに過ぐる幸せはございません。

(兵庫県・津島喜美夫)

寺田陽子様、十月号誌上で貴女の文を読ませて戴いた時から毎日夜、折にふれて貴女とプレイを楽しくして居る場面をいろいろと想像して胸をドキドキさせて居ります。貴女の姿体をいろいろな衣裳でつつみ又一糸もまとわぬ姿でのプレイの最中に貴女の魅力を余す所なく撮影したいと心から願って居ります。そして奇譚クラブ誌上にのせて戴けたらどんなに素晴らしいでしょう。貴女の御返事を一日千秋の思いでお待ち致して居ります。

(宮城県・豊田 収)

私の印象にのこっている写真に

次のようなものがあります。一枚は支那事変当時、我軍に捕われた中国軍の看護婦たちで、いずれも十七、八才のあどけない顔のまま連行される姿。もう一枚は、二十四才のスジガネ入りの婦人将校で死が予想されているにもかかわらず、不敵な微笑を浮かべている姿です。この二枚は戦後、出版された写真集にもものっていました。が、当時は不許可となったそうです。何故かという、この続きが問題なのです。五人の看護婦は、次の写真を見ると、いずれも一糸まとわぬ姿とされ、しかも四人まで首がありません。穴の上に力なく、のめっている少女。手足を、せいっぱい、ひろげた恰好で横たわっているもの。身体に銃剣を突きさされた死体。乳房その他をえぐられたもの……最後の一人はまさに首を刎ねられる寸前で、これらの生首が三枚目に写っているのです。婦人将校のほうの二枚目は、同じく全裸にひきむかれ、なんと木の枝から絞首されていました。これほどの女闘士。刀による死を望み、せめて銃殺を願ったろうにまさに血の涙を流して口惜しがりつつ死んでいったことでしょう。今さら何故こんな話をするかとい

うと、私は女死刑囚に対し、特別の興味をもっています。数年前は奇クにも、こんなシリーズがあったと聞いていますが、最近、影をひそめているのは残念で、同好の方の奮起を願いたいところ。またグラビヤのほうも、トリックを用いて、生首や完全に吊りさがった絞首体、鮮血にいろどられたハリツケ女囚など、できないものでしょうか。前田真知子嬢など、是非処刑台に追いたい女性です。

(大阪市・小倉幸男)

○ 奇クの益々の御発展、心からお喜び申しあげます。小生は今まで約十年間、奇クを愛読するのみの全く傍観者の立場で過ごしてきたのですが、最近SMプレイと緊縛による女体美の追求に激しい熱意を燃やすようになり、積極的な実践者としての道を歩むため、ここに初めて投稿する次第です。十二月号で呼び掛けられた菅原さん。貴女は今、貴女の身体の中にMの玉子を抱いて、期待と不安の交錯

した毎日を過ごしておられる事と想像します。私が、その玉子を生ませて、大きく育ててあげましよう。私の望むプレイは羞恥責めを主にして、小道具を使用した責め浣腸責め等です。又プレイと平行して緊縛による女性美をフォトで表現する事も大きな望みです。緊縛によるロープと女体との微妙なコントラスト、唐様建築の肘木を思わせる組合わされた二の腕、張切った乳房の美、乳房から腰へかけての美しいスラローム、静かに

息づく神秘の谷間、可れんな菊花流れるような脚線等、女体美の表現には限りがありません。こうしてプレイを続けるうちに、貴女は情感の昂まりにより、やがて夢の世界に浮遊し、満たされたSMの快楽に酔いしれることになるでしょう。どうか、よい御返事を、お待ち申し上げております。小生はフェミニストを自負する三十一才になる男性です。

(加古川・耽美派生)

本誌既刊号在庫一覧表

○本誌既刊雑誌は左記一覽表の通り在庫しておりますが、40年以降の発行のものについては在庫が僅少な御注文願います。○七月一日の郵便送料に伴い、全面的に改訂の必要が生じ、たの御承願の必要が、尚、既刊号以外で、三ヵ月以上、御予約の場合は、送料を当社にて負担致します。注文の節は、小包にての発送を致し

既刊雑誌在庫案内

昭和41年4月号(送共三三二円)

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|----------|----------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|----------|----------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|----------|----------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|----------|----------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|----------|----------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|----------|----------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|----------|----------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|----------|----------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|----------|----------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 昭和41年4月号 | 昭和41年3月号 | 昭和41年2月号 | 昭和41年1月号 | 昭和40年12月号 | 昭和40年11月号 | 昭和40年10月号 | 昭和40年9月号 | 昭和40年8月号 | 昭和40年7月号 | 昭和40年6月号 | 昭和40年5月号 | 昭和40年4月号 | 昭和40年3月号 | 昭和40年2月号 | 昭和40年1月号 | 昭和39年12月号 | 昭和39年11月号 | 昭和39年10月号 | 昭和39年9月号 | 昭和39年8月号 | 昭和39年7月号 | 昭和39年6月号 | 昭和39年5月号 | 昭和39年4月号 | 昭和39年3月号 | 昭和39年2月号 | 昭和39年1月号 | 昭和38年12月号 | 昭和38年11月号 | 昭和38年10月号 | 昭和38年9月号 | 昭和38年8月号 | 昭和38年7月号 | 昭和38年6月号 | 昭和38年5月号 | 昭和38年4月号 | 昭和38年3月号 | 昭和38年2月号 | 昭和38年1月号 | 昭和37年12月号 | 昭和37年11月号 | 昭和37年10月号 | 昭和37年9月号 | 昭和37年8月号 | 昭和37年7月号 | 昭和37年6月号 | 昭和37年5月号 | 昭和37年4月号 | 昭和37年3月号 | 昭和37年2月号 | 昭和37年1月号 | 昭和36年12月号 | 昭和36年11月号 | 昭和36年10月号 | 昭和36年9月号 | 昭和36年8月号 | 昭和36年7月号 | 昭和36年6月号 | 昭和36年5月号 | 昭和36年4月号 | 昭和36年3月号 | 昭和36年2月号 | 昭和36年1月号 | 昭和35年12月号 | 昭和35年11月号 | 昭和35年10月号 | 昭和35年9月号 | 昭和35年8月号 | 昭和35年7月号 | 昭和35年6月号 | 昭和35年5月号 | 昭和35年4月号 | 昭和35年3月号 | 昭和35年2月号 | 昭和35年1月号 | 昭和34年12月号 | 昭和34年11月号 | 昭和34年10月号 | 昭和34年9月号 | 昭和34年8月号 | 昭和34年7月号 | 昭和34年6月号 | 昭和34年5月号 | 昭和34年4月号 | 昭和34年3月号 | 昭和34年2月号 | 昭和34年1月号 | 昭和33年12月号 | 昭和33年11月号 | 昭和33年10月号 | 昭和33年9月号 | 昭和33年8月号 | 昭和33年7月号 | 昭和33年6月号 | 昭和33年5月号 | 昭和33年4月号 | 昭和33年3月号 | 昭和33年2月号 | 昭和33年1月号 | 昭和32年12月号 | 昭和32年11月号 | 昭和32年10月号 | 昭和32年9月号 | 昭和32年8月号 | 昭和32年7月号 | 昭和32年6月号 | 昭和32年5月号 | 昭和32年4月号 | 昭和32年3月号 | 昭和32年2月号 | 昭和32年1月号 | 昭和31年12月号 | 昭和31年11月号 | 昭和31年10月号 | 昭和31年9月号 | 昭和31年8月号 | 昭和31年7月号 | 昭和31年6月号 | 昭和31年5月号 | 昭和31年4月号 | 昭和31年3月号 | 昭和31年2月号 | 昭和31年1月号 | 昭和30年12月号 | 昭和30年11月号 | 昭和30年10月号 | 昭和30年9月号 | 昭和30年8月号 | 昭和30年7月号 | 昭和30年6月号 | 昭和30年5月号 | 昭和30年4月号 | 昭和30年3月号 | 昭和30年2月号 | 昭和30年1月号 | 昭和29年12月号 | 昭和29年11月号 | 昭和29年10月号 | 昭和29年9月号 | 昭和29年8月号 | 昭和29年7月号 | 昭和29年6月号 | 昭和29年5月号 | 昭和29年4月号 | 昭和29年3月号 | 昭和29年2月号 | 昭和29年1月号 | 昭和28年12月号 | 昭和28年11月号 | 昭和28年10月号 | 昭和28年9月号 | 昭和28年8月号 | 昭和28年7月号 | 昭和28年6月号 | 昭和28年5月号 | 昭和28年4月号 | 昭和28年3月号 | 昭和28年2月号 | 昭和28年1月号 | 昭和27年12月号 | 昭和27年11月号 | 昭和27年10月号 | 昭和27年9月号 | 昭和27年8月号 | 昭和27年7月号 | 昭和27年6月号 | 昭和27年5月号 | 昭和27年4月号 | 昭和27年3月号 | 昭和27年2月号 | 昭和27年1月号 | 昭和26年12月号 | 昭和26年11月号 | 昭和26年10月号 | 昭和26年9月号 | 昭和26年8月号 | 昭和26年7月号 | 昭和26年6月号 | 昭和26年5月号 | 昭和26年4月号 | 昭和26年3月号 | 昭和26年2月号 | 昭和26年1月号 | 昭和25年12月号 | 昭和25年11月号 | 昭和25年10月号 | 昭和25年9月号 | 昭和25年8月号 | 昭和25年7月号 | 昭和25年6月号 | 昭和25年5月号 | 昭和25年4月号 | 昭和25年3月号 | 昭和25年2月号 | 昭和25年1月号 | 昭和24年12月号 | 昭和24年11月号 | 昭和24年10月号 | 昭和24年9月号 | 昭和24年8月号 | 昭和24年7月号 | 昭和24年6月号 | 昭和24年5月号 | 昭和24年4月号 | 昭和24年3月号 | 昭和24年2月号 | 昭和24年1月号 | 昭和23年12月号 | 昭和23年11月号 | 昭和23年10月号 | 昭和23年9月号 | 昭和23年8月号 | 昭和23年7月号 | 昭和23年6月号 | 昭和23年5月号 | 昭和23年4月号 | 昭和23年3月号 | 昭和23年2月号 | 昭和23年1月号 | 昭和22年12月号 | 昭和22年11月号 | 昭和22年10月号 | 昭和22年9月号 | 昭和22年8月号 | 昭和22年7月号 | 昭和22年6月号 | 昭和22年5月号 | 昭和22年4月号 | 昭和22年3月号 | 昭和22年2月号 | 昭和22年1月号 | 昭和21年12月号 | 昭和21年11月号 | 昭和21年10月号 | 昭和21年9月号 | 昭和21年8月号 | 昭和21年7月号 | 昭和21年6月号 | 昭和21年5月号 | 昭和21年4月号 | 昭和21年3月号 | 昭和21年2月号 | 昭和21年1月号 | 昭和20年12月号 | 昭和20年11月号 | 昭和20年10月号 | 昭和20年9月号 | 昭和20年8月号 | 昭和20年7月号 | 昭和20年6月号 | 昭和20年5月号 | 昭和20年4月号 | 昭和20年3月号 | 昭和20年2月号 | 昭和20年1月号 | 昭和19年12月号 | 昭和19年11月号 | 昭和19年10月号 | 昭和19年9月号 | 昭和19年8月号 | 昭和19年7月号 | 昭和19年6月号 | 昭和19年5月号 | 昭和19年4月号 | 昭和19年3月号 | 昭和19年2月号 | 昭和19年1月号 | 昭和18年12月号 | 昭和18年11月号 | 昭和18年10月号 | 昭和18年9月号 | 昭和18年8月号 | 昭和18年7月号 | 昭和18年6月号 | 昭和18年5月号 | 昭和18年4月号 | 昭和18年3月号 | 昭和18年2月号 | 昭和18年1月号 | 昭和17年12月号 | 昭和17年11月号 | 昭和17年10月号 | 昭和17年9月号 | 昭和17年8月号 | 昭和17年7月号 | 昭和17年6月号 | 昭和17年5月号 | 昭和17年4月号 | 昭和17年3月号 | 昭和17年2月号 | 昭和17年1月号 | 昭和16年12月号 | 昭和16年11月号 | 昭和16年10月号 | 昭和16年9月号 | 昭和16年8月号 | 昭和16年7月号 | 昭和16年6月号 | 昭和16年5月号 | 昭和16年4月号 | 昭和16年3月号 | 昭和16年2月号 | 昭和16年1月号 | 昭和15年12月号 | 昭和15年11月号 | 昭和15年10月号 | 昭和15年9月号 | 昭和15年8月号 | 昭和15年7月号 | 昭和15年6月号 | 昭和15年5月号 | 昭和15年4月号 | 昭和15年3月号 | 昭和15年2月号 | 昭和15年1月号 | 昭和14年12月号 | 昭和14年11月号 | 昭和14年10月号 | 昭和14年9月号 | 昭和14年8月号 | 昭和14年7月号 | 昭和14年6月号 | 昭和14年5月号 | 昭和14年4月号 | 昭和14年3月号 | 昭和14年2月号 | 昭和14年1月号 | 昭和13年12月号 | 昭和13年11月号 | 昭和13年10月号 | 昭和13年9月号 | 昭和13年8月号 | 昭和13年7月号 | 昭和13年6月号 | 昭和13年5月号 | 昭和13年4月号 | 昭和13年3月号 | 昭和13年2月号 | 昭和13年1月号 | 昭和12年12月号 | 昭和12年11月号 | 昭和12年10月号 | 昭和12年9月号 | 昭和12年8月号 | 昭和12年7月号 | 昭和12年6月号 | 昭和12年5月号 | 昭和12年4月号 | 昭和12年3月号 | 昭和12年2月号 | 昭和12年1月号 | 昭和11年12月号 | 昭和11年11月号 | 昭和11年10月号 | 昭和11年9月号 | 昭和11年8月号 | 昭和11年7月号 | 昭和11年6月号 | 昭和11年5月号 | 昭和11年4月号 | 昭和11年3月号 | 昭和11年2月号 | 昭和11年1月号 | 昭和10年12月号 | 昭和10年11月号 | 昭和10年10月号 | 昭和10年9月号 | 昭和10年8月号 | 昭和10年7月号 | 昭和10年6月号 | 昭和10年5月号 | 昭和10年4月号 | 昭和10年3月号 | 昭和10年2月号 | 昭和10年1月号 | 昭和9年12月号 | 昭和9年11月号 | 昭和9年10月号 | 昭和9年9月号 | 昭和9年8月号 | 昭和9年7月号 | 昭和9年6月号 | 昭和9年5月号 | 昭和9年4月号 | 昭和9年3月号 | 昭和9年2月号 | 昭和9年1月号 | 昭和8年12月号 | 昭和8年11月号 | 昭和8年10月号 | 昭和8年9月号 | 昭和8年8月号 | 昭和8年7月号 | 昭和8年6月号 | 昭和8年5月号 | 昭和8年4月号 | 昭和8年3月号 | 昭和8年2月号 | 昭和8年1月号 | 昭和7年12月号 | 昭和7年11月号 | 昭和7年10月号 | 昭和7年9月号 | 昭和7年8月号 | 昭和7年7月号 | 昭和7年6月号 | 昭和7年5月号 | 昭和7年4月号 | 昭和7年3月号 | 昭和7年2月号 | 昭和7年1月号 | 昭和6年12月号 | 昭和6年11月号 | 昭和6年10月号 | 昭和6年9月号 | 昭和6年8月号 | 昭和6年7月号 | 昭和6年6月号 | 昭和6年5月号 | 昭和6年4月号 | 昭和6年3月号 | 昭和6年2月号 | 昭和6年1月号 | 昭和5年12月号 | 昭和5年11月号 | 昭和5年10月号 | 昭和5年9月号 | 昭和5年8月号 | 昭和5年7月号 | 昭和5年6月号 | 昭和5年5月号 | 昭和5年4月号 | 昭和5年3月号 | 昭和5年2月号 | 昭和5年1月号 | 昭和4年12月号 | 昭和4年11月号 | 昭和4年10月号 | 昭和4年9月号 | 昭和4年8月号 | 昭和4年7月号 | 昭和4年6月号 | 昭和4年5月号 | 昭和4年4月号 | 昭和4年3月号 | 昭和4年2月号 | 昭和4年1月号 | 昭和3年12月号 | 昭和3年11月号 | 昭和3年10月号 | 昭和3年9月号 | 昭和3年8月号 | 昭和3年7月号 | 昭和3年6月号 | 昭和3年5月号 | 昭和3年4月号 | 昭和3年3月号 | 昭和3年2月号 | 昭和3年1月号 | 昭和2年12月号 | 昭和2年11月号 | 昭和2年10月号 | 昭和2年9月号 | 昭和2年8月号 | 昭和2年7月号 | 昭和2年6月号 | 昭和2年5月号 | 昭和2年4月号 | 昭和2年3月号 | 昭和2年2月号 | 昭和2年1月号 | 昭和1年12月号 | 昭和1年11月号 | 昭和1年10月号 | 昭和1年9月号 | 昭和1年8月号 | 昭和1年7月号 | 昭和1年6月号 | 昭和1年5月号 | 昭和1年4月号 | 昭和1年3月号 | 昭和1年2月号 | 昭和1年1月号 | 昭和0年12月号 | 昭和0年11月号 | 昭和0年10月号 | 昭和0年9月号 | 昭和0年8月号 | 昭和0年7月号 | 昭和0年6月号 | 昭和0年5月号 | 昭和0年4月号 | 昭和0年3月号 | 昭和0年2月号 | 昭和0年1月号 | 昭和-1年12月号 | 昭和-1年11月号 | 昭和-1年10月号 | 昭和-1年9月号 | 昭和-1年8月号 | 昭和-1年7月号 | 昭和-1年6月号 | 昭和-1年5月号 | 昭和-1年4月号 | 昭和-1年3月号 | 昭和-1年2月号 | 昭和-1年1月号 | 昭和-2年12月号 | 昭和-2年11月号 | 昭和-2年10月号 | 昭和-2年9月号 | 昭和-2年8月号 | 昭和-2年7月号 | 昭和-2年6月号 | 昭和-2年5月号 | 昭和-2年4月号 | 昭和-2年3月号 | 昭和-2年2月号 | 昭和-2年1月号 | 昭和-3年12月号 | 昭和-3年11月号 | 昭和-3年10月号 | 昭和-3年9月号 | 昭和-3年8月号 | 昭和-3年7月号 | 昭和-3年6月号 | 昭和-3年5月号 | 昭和-3年4月号 | 昭和-3年3月号 | 昭和-3年2月号 | 昭和-3年1月号 | 昭和-4年12月号 | 昭和-4年11月号 | 昭和-4年10月号 | 昭和-4年9月号 | 昭和-4年8月号 | 昭和-4年7月号 | 昭和-4年6月号 | 昭和-4年5月号 | 昭和-4年4月号 | 昭和-4年3月号 | 昭和-4年2月号 | 昭和-4年1月号 | 昭和-5年12月号 | 昭和-5年11月号 | 昭和-5年10月号 | 昭和-5年9月号 | 昭和-5年8月号 | 昭和-5年7月号 | 昭和-5年6月号 | 昭和-5年5月号 | 昭和-5年4月号 | 昭和-5年3月号 | 昭和-5年2月号 | 昭和-5年1月号 | 昭和-6年12月号 | 昭和-6年11月号 | 昭和-6年10月号 | 昭和-6年9月号 | 昭和-6年8月号 | 昭和-6年7月号 | 昭和-6年6月号 | 昭和-6年5月号 | 昭和-6年4月号 | 昭和-6年3月号 | 昭和-6年2月号 | 昭和-6年1月号 | 昭和-7年12月号 | 昭和-7年11月号 | 昭和-7年10月号 | 昭和-7年9月号 | 昭和-7年8月号 | 昭和-7年7月号 | 昭和-7年6月号 | 昭和-7年5月号 | 昭和-7年4月号 | 昭和-7年3月号 | 昭和-7年2月号 | 昭和-7年1月号 | 昭和-8年12月号 | 昭和-8年11月号 | 昭和-8年10月号 | 昭和-8年9月号 | 昭和-8年8月号 | 昭和-8年7月号 | 昭和-8年6月号 | 昭和-8年5月号 | 昭和-8年4月号 | 昭和-8年3月号 | 昭和-8年2月号 | 昭和-8年1月号 | 昭和-9年12月号 | 昭和-9年11月号 | 昭和-9年10月号 | 昭和-9年9月号 | 昭和-9年8月号 | 昭和-9年7月号 | 昭和-9年6月号 | 昭和-9年5月号 | 昭和-9年4月号 | 昭和-9年3月号 | 昭和-9年2月号 | 昭和-9年1月号 | 昭和-10年12月号 | 昭和-10年11月号 | 昭和-10年10月号 | 昭和-10年9月号 | 昭和-10年8月号 | 昭和-10年7月号 | 昭和-10年6月号 | 昭和-10年5月号 | 昭和-10年4月号 | 昭和-10年3月号 | 昭和-10年2月号 | 昭和-10年1月号 | 昭和-11年12月号 | 昭和-11年11月号 | 昭和-11年10月号 | 昭和-11年9月号 | 昭和-11年8月号 | 昭和-11年7月号 | 昭和-11年6月号 | 昭和-11年5月号 | 昭和-11年4月号 | 昭和-11年3月号 | 昭和-11年2月号 | 昭和-11年1月号 | 昭和-12年12月号 | 昭和-12年11月号 | 昭和-12年10月号 | 昭和-12年9月号 | 昭和-12年8月号 | 昭和-12年7月号 | 昭和-12年6月号 | 昭和-12年5月号 | 昭和-12年4月号 | 昭和-12年3月号 | 昭和-12年2月号 | 昭和-12年1月号 | 昭和-13年12月号 | 昭和-13年11月号 | 昭和-13年10月号 | 昭和-13年9月号 | 昭和-13年8月号 | 昭和-13年7月号 | 昭和-13年6月号 | 昭和-13年5月号 | 昭和-13年4月号 | 昭和-13年3月号 | 昭和-13年2月号 | 昭和-13年1月号 | 昭和-14年12月号 | 昭和-14年11月号 | 昭和-14年10月号 | 昭和-14年9月号 | 昭和-14年8月号 | 昭和-14年7月号 | 昭和-14年6月号 | 昭和-14年5月号 | 昭和-14年4月号 | 昭和-14年3月号 | 昭和-14年2月号 | 昭和-14年1月号 | 昭和-15年12月号 | 昭和-15年11月号 | 昭和-15年10月号 | 昭和-15年9月号 | 昭和-15年8月号 | 昭和-15年7月号 | 昭和-15年6月号 | 昭和-15年5月号 | 昭和-15年4月号 | 昭和-15年3月号 | 昭和-15年2月号 | 昭和-15年1月号 | 昭和-16年12月号 | 昭和-16年11月号 | 昭和-16年10月号 | 昭和-16年9月号 | 昭和-16年8月号 | 昭和-16年7月号 | 昭和-16年6月号 | 昭和-16年5月号 | 昭和-16年4月号 | 昭和-16年3月号 | 昭和-16年2月号 | 昭和-16年1月号 | 昭和-17年12月号 | 昭和-17年11月号 | 昭和-17年10月号 | 昭和-17年9月号 | 昭和-17年8月号 | 昭和-17年7月号 | 昭和-17年6月号 | 昭和-17年5月号 | 昭和-17年4月号 | 昭和-17年3月号 | 昭和-17年2月号 | 昭和-17年1月号 | 昭和-18年12月号 | 昭和-18年11月号 | 昭和-18年10月号 | 昭和-18年9月号 | 昭和-18年8月号 | 昭和-18年7月号 | 昭和-18年6月号 | 昭和-18年5月号 | 昭和-18年4月号 | 昭和-18年3月号 | 昭和-18年2月号 | 昭和-18年1月号 | 昭和-19年12月号 | 昭和-19年11月号 | 昭和-19年10月号 | 昭和-19年9月号 | 昭和-19年8月号 | 昭和-19年7月号 | 昭和-19年6月号 | 昭和-19年5月号 | 昭和-19年4月号 | 昭和-19年3月号 | 昭和-19年2月号 | 昭和-19年1月号 | 昭和-20年12月号 | 昭和-20年11月号 | 昭和-20年10月号 | 昭和-20年9月号 | 昭和-20年8月号 | 昭和-20年7月号 | 昭和-20年6月号 | 昭和-20年5月号 | 昭和-20年4月号 | 昭和-20年3月号 | 昭和-20年2月号 | 昭和-20年1月号 | 昭和-21年12月号 | 昭和-21年11月号 | 昭和-21年10月号 | 昭和-21年9月号 | 昭和-21年8月号 | 昭和-21年7月号 | 昭和-21年6月号 | 昭和-21年5月号 | 昭和-21年4月号 | 昭和-21年3月号 | 昭和-21年2月号 | 昭和-21年1月号 | 昭和-22年12月号 | 昭和-22年11月号 | 昭和-22年10月号 | 昭和-22年9月号 | 昭和-22年8月号 | 昭和-22年7月号 | 昭和-22年6月号 | 昭和-22年5月号 | 昭和-22年4月号 | 昭和-22年3月号 | 昭和-22年2月号 | 昭和-22年1月号 | 昭和-23年12月号 | 昭和-23年11月号 | 昭和-23年10月号 | 昭和-23年9月号 | 昭和-23年8月号 | 昭和-23年7月号 | 昭和-23年6月号 | 昭和-23年5月号 | 昭和-23年4月号 | 昭和-23年3月号 | 昭和-23年2月号 | 昭和-23年1月号 | 昭和-24年12月号 | 昭和-24年11月号 | 昭和-24年10月号 | 昭和-24年9月号 | 昭和-24年8月号 | 昭和-24年7月号 | 昭和-24年6月号 | 昭和-24年5月号 | 昭和-24年4月号 | 昭和-24年3月号 | 昭和-24年2月号 | 昭和-24年1月号 | 昭和-25年12月号 | 昭和-25年11月号 | 昭和-25年10月号 | 昭和-25年9月号 | 昭和-25年8月号 | 昭和-25年7月号 | 昭和-25年6月号 | 昭和-25年5月号 | 昭和-25年4月号 | 昭和-25年3月号 | 昭和-25年2月号 | 昭和-25年1月号 | 昭和-26年12月号 | 昭和-26年11月号 | 昭和-26年10月号 | 昭和-26年9月号 | 昭和-26年8月号 | 昭和-26年7月号 | 昭和-26年6月号 | 昭和-26年5月号 | 昭和-26年4月号 | 昭和-26年3月号 | 昭和-26年2月号 | 昭和-26年1月号 | 昭和-27年12月号 | 昭和-27年11月号 | 昭和-27年10月号 | 昭和-27年9月号 | 昭和-27年8月号 | 昭和-27年7月号 | 昭和-27年6月号 | 昭和-27年5月号 | 昭和-27年4月号 | 昭和-27年3月号 | 昭和-27年2月号 | 昭和-27年1月号 | 昭和-28年12月号 | 昭和-28年11月号 | 昭和-28年10月号 | 昭和-28年9月号 | 昭和-28年8月号 | 昭和-28年7月号 | 昭和-28年6月号 | 昭和-28年5月号 | 昭和-28年4月号 | 昭和-28年3月号 | 昭和-28年2月号 | 昭和-28年1月号 | 昭和-29年12月号 | 昭和-29年11月号 | 昭和-29年10月号 | 昭和-29年9月号 | 昭和-29年8月号 | 昭和-29年7月号 | 昭和-29年6月号 | 昭和-29年5月号 | 昭和-29年4月号 | 昭和-29年3月号 | 昭和-29年2月号 | 昭和-29年1月号 | 昭和-30年12月号 | 昭和-30年11月号 | 昭和-30年10月号 | 昭和-30年9月号 | 昭和-30年8月号 | 昭和-30年7月号 | 昭和-30年6月号 | 昭和-30年5月号 | 昭和-30年4月号 | 昭和-30年3月号 | 昭和-30年2月号 | 昭和-30年1月号 | 昭和-31年12月号 | 昭和-31年11月号 | 昭和-31年10月号 | 昭和-31年9月号 | 昭和-31年8月号 | 昭和-31年7月号 | 昭和-31年6月号 | 昭和-31年5月号 | 昭和-31年4月号 | 昭和-31年3月号 | 昭和-31年2月号 | 昭和-31年1月号 | 昭和-32年12月号 | 昭和-32年11月号 | 昭和-32年10月号 | 昭和-32年9月号 | 昭和-32年8月号 | 昭和-32年7月号 | 昭和-32年6月号 | 昭和-32年5月号 | 昭和-32年4月号 | 昭和-32年3月号 | 昭和-32年2月号 | 昭和-32年1月号 | 昭和-33年12月号 | 昭和-33年11月号 | 昭和-33年10月号 | 昭和-33年9月号 | 昭和-33年8月号 | 昭和-33年7月号 | 昭和-33年6月号 | 昭和-33年5月号 | 昭和-33年4月号 | 昭和-33年3月号 | 昭和-33年2月号 | 昭和-33年1月号 | 昭和-34年12月号 | 昭和-34年11月号 | 昭和-34年10月号 | 昭和-34年9月号 | 昭和-34年8月号 | 昭和-34年7月号 | 昭和-34年6月号 | 昭和-34年5月号 | 昭和-34年4月号 | 昭和-34年3月号 | 昭和-34年2月号 | 昭和-34年1月号 | 昭和-35年12月号 | 昭和-35年11月号 | 昭和-35年10月号 | 昭和-35年9月号 | 昭和-35年8月号 | 昭和-35年7月号 | 昭和-35年6月号 | 昭和-35年5月号 | 昭和-35年4月号 | 昭和-35年3月号 | 昭和-35年2月号 | 昭和-35年1月号 | 昭和-36年12月号 | 昭和-36年11月号 | 昭和-36年10月号 | 昭和-36年9月号 | 昭和-36年8月号 | 昭和-36年7月号 | 昭和-36年6月号 | 昭和-36年5月号 | 昭和-36年4月号 | 昭和-36年3月号 | 昭和-36年2月号 | 昭和-36年1月号 | 昭和-37年12月号 | 昭和-37年11月号 | 昭和-37年10月号 | 昭和-37年9月号 | 昭和-37年8月号 | 昭和-37年7月号 | 昭和-37年6月号 | 昭和-37年5月号 | 昭和-37年4月号 | 昭和-37年3月号 | 昭和-37年2月号 | 昭和-37年1月号 | 昭和-38年12月号 | 昭和-38年11月号 | 昭和-38年10月号 | 昭和-38年9月号 | 昭和-38年8月号 | 昭和-38年7月号 | 昭和-38年6月号 | 昭和-38年5月号 | 昭和-38年4月号 | 昭和-38年3月号 | 昭和-38年2月号 | 昭和-38年1月号 | 昭和-39年12月号 | 昭和-39年11月号 | 昭和-39年10月号 | 昭和-39年9月号 | 昭和-39年8月号 | 昭和-39年7月号 | 昭和-39年6月号 | 昭和-39年5月号 | 昭和-39年4月号 | 昭和-39年3月号 | 昭和-39年2月号 | 昭和-39年1月号 | 昭和-40年12月号 | 昭和-40年11月号 | 昭和-40年10月号 | 昭和-40年9月号 | 昭和-40年8月号 | 昭和-40年7月号 | 昭和-40年6月号 | 昭和-40年5月号 | 昭和-40年4月号 | 昭和-40年3月号 | 昭和-40年2月号 | 昭和-40年1月号 | 昭和-41年12月号 | 昭和-41年11月号 | 昭和-41年10月号 | 昭和-41年9月号 | 昭和-41年8月号 | 昭和-41年7月号 | 昭和-41年6月号 | 昭和-41年5月号 | 昭和-41年4月号 | 昭和-41年3月号 | 昭和-41年2月号 |
|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|----------|----------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|----------|----------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|----------|----------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|----------|----------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|----------|----------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|----------|----------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|----------|----------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|----------|----------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|----------|----------|----------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|-----------|

編集後記

☆なんとなく忙しがらねばワルイような気持ちにさせられる歳末の雰囲気の中で、ひとときなりとも別世界に憩いを得ていただくために……というようなコジツケをする積りは、さうさら無いです。本誌創刊以来第三〇〇冊目にあたり、ちよっぴり誇らしく思っています。☆特異な煙に根差したこの極めて小さな花が三百輪にも殖え得たのは、陽に陰に、滋水を掛け、盛り土をし、支え棒を副えるが如きご支援を下さった読者、並びに執筆、投稿者諸賢のお蔭だという弊社社長になり代り、衷心よりお礼を申し上げますと共に、今後尚更のご後援を賜らんことをお願い致します。

☆稀少なるが故の異端視。頭ごなしの偏見。誤解、無理解に依るいわれなき蔑視等、この三百冊を積み上げるまでの道程は、決して安易なものではなく……テナことは、大人気ないから書くなよと社長に云われていたのです。が、そこはそれ小人のナントカで、ついその器の違ひを自覚しながらも、平次の手柄を得々と触れ廻る思いの今の編集子です。☆当然、三百一十号からの本誌も創刊以来一筋に人間が秘める性感の複雑な真因の解明などという、だいそれた事は神様かイエス様に任すとしても、せめて、ハダカの人間同士が卒直に、気楽に話し合える雑誌として進めたいと思ひます。どうぞよろしく。(K)

懸賞原稿募集

△体験、告白、手記▽

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけ、どうしても書き残しておきたいと考えられた事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千円以上の賞金を贈呈します。

△創作、小説、物語▽

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未

発表作品に限ります。これはと思ふ作品は必ず誌上に取り上げます。腕試しの意味で奮って御投稿願います。採用篇には賞金十万円迄贈呈。

△感想、論評、批判▽

本誌に関連したものでしたら話題の内容は問いません。忌弾なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二千円以上の賞金を贈呈します。

△(映画、雑誌)通信▽

映画、雑誌、演劇、新聞、単行本或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出

処は詳しく明記願います。採用篇には本誌三月分以上又は二千円以上の賞金贈呈。

◎御送付下さいました原稿は原則として返却の求めに依らないことになっております。故悪しからず御諒承願います。

◎本文記事中に各種の「懸賞原稿募集」を致しております。故、御応募の方は項目を御明記の上御送稿下さい。

△読者通信原稿▽

巻末の通信欄は読者の皆さま方のための公共の広場として開放してあります。御遠慮なくお寄せ下さい。

☆本誌御購読の葉☆

予約に限り
一月分(1冊)四〇〇円(送料32円)
三月分(3冊)一一〇〇円(送料共)
半年分(6冊)二四〇〇円(送料共)

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたします。が、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 四〇〇円

二月号 (第二十七巻第二号)
昭和四十八年二月二十日 印刷
昭和四十八年二月一日 発行

編集人 杉原 虹児
発行人 吉田 稔
印刷人 北村 俊夫

郵便番号558 大阪市住吉郵便局私書函第四十一号
発行所 暁出版株式会社
△振替口座大阪四二七八三番
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二二日)
国鉄大局特別扱承認雑誌第二二〇号

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビア写真の検討、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に注意して編集いたしております。いような充分に注意して発行を企図しております。が、本来成人向として発行の方には絶対販売下されたいよう、特にくれぐれもお願ひ申し上げます。